ダンジョン、閉鎖致します

小名掘　天牙

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この世界の至る所に存在する。不思議なダンジョン。様々なモンスターと宝箱に溢れたその中に、今日も数多くの冒険者が勇んで飛び込んでいく。

だけど、この世には永遠なんてものは存在しないわけで、いずれダンジョンという名の資源にも尽きる時が来る。こうして、ダンジョンが使い物にならなくなると、僕達ダンジョン閉鎖士の仕事がやってくる。

※なろうとのマルチ投稿をしております。

目次

トウトウ村編

一 1
二 34
三 70
四 109
五 150
六 181
七 228
八 258
九 295
十 333
十一 371

ラビュリントス編

十二 407
十三 448
十四 485
十五 520
一 565
二 598
三 638
四 670
五 714
六 751
七 785
八 816

十一 919
十 886
九 849

トウトウ村編

一

暗い洞窟の中を一人で歩いていると、時々自分の影が一つの生命だと錯覚する事がある。それは、別段人恋しさを伴ったものではないけれど、不思議と胸に去来する事の多い感覚だった。仕事柄、こうして一人でダンジョンを歩くことの多い僕は、一度ダンジョンに足を踏み入れると長期間人と話をするということがなくなる。曲なりにも人間として生活をしている身としては周囲に雑踏が存在しないというのは、それだけで違和感を覚えるものなのかもしれない。そして、自分の影を人間だと勘違いするのも、そんな違和感によるものなのかもと、暇潰しがてらに、馬鹿な事を考えていた僕は漸く目当ての部屋に辿り着いたのだった。

「……ここか」

がらんとした、少し広目の小部屋の壁面を松明で照らすと、炎に撫でられた岩壁がちろちろと小さな鱗を震わせた。所々削り取られたそれは、かつてこのダンジョンに踏み入った勇敢なる冒険者の一つの爪痕だろう。宝はおろか、木片や苔の一つすら無い辺り、人間の欲望と執念の凄まじさを感じずにはいられなかった。

「……」

そして、同時に視覚的には何も存在しないその小部屋の中に充満した強い獣の臭い。まるで、この一角だけ、かつてこのダンジョンが栄えた頃と同じ様にモンスターに溢れているのかと思うほどのそれに、僕は思わず顔をしかめたが、一先ず仕事に取り掛かることにした。

背中に背負ったリュックサックの中から、ハンマーとピッケルを出すと、獣臭の充満した部屋の中で、もう一度臭いを確かめる。

（あった）

辺りに満ちた獣の臭いの中に、一点、ふよふよと漂うのではなく、強く自らその臭気を放つ場所があった。仕事柄よく嗅ぎ慣れたその臭いを辿っていき、何の変哲もない岩壁の一点を探り当てるともう一度確認がてら臭いを嗅ぐ。

（ん。間違いないね）

つんと鼻の奥に響く悪臭に、壁面の石の一つが〝ダンジョン・コア〟であることを確信する。ピッケルを突きつけてハンマーで叩けば、今回の仕事は粗方完了したのだった。

◆

〝ダンジョン・コア〟の回収を終えると、僕はその足でこのダンジョンの入り口があった村の村長の家へと向かった。

「こんばんは」

家のベルを鳴らしてドアを開けると、村の顔役と思われる数人が車座になって何かを話し合っていた。僕を見ると恐怖とも悪意とも言い難いが、取り合えず友好的とは言えない視線を向けてきた。……まあ、慣れたものだけどさ。

「何か？」

取り合えず、車座の一団を見回すと、直ぐに全員が顔を背けてきた。そんな反応するなら、態々僕になんて構わなきゃ良いと思うんだけどね。

「あ、これはこれは……」

そんな事を考えていると、部屋の奥から白いひげを伸ばした村長さんがやって来た。流石に村のまとめ役だけあって表情には出さないか。

〝ダンジョン・コア〟の摘出は完了しました。後二三日もしないうちにダンジョンは完全に朽ちて入り口は閉じるでしょう。その間に村の子供達が中に入らないように注

意してください」

　業務的な案内を告げると、村長が深々と頭を下げてきた。いや、僕に下げられても困るんだけどさ。

「おう、それは良いけどよ」

　と、そこまで村長に話していたところ、車座の中に居た一際体の大きなおじさんがぬっと顔を出してきた。

「何か？」

　話しかけられるような事あったかな？

「一寸、隣の村の奴に聞いたんだけどよ、ダンジョンの閉鎖に同意してあんたらダンジョン閉鎖士？っつーのを呼ぶと、礼金が出るって聞いたんだが、それは本当かい？」

「……一応出ますけど」

　うわ、なんか嫌な予感しかしないな。

「そいつはいくらなんでい？」

　はい、予感的中。

　こういう人達って、「態々ダンジョンなんていう資源を自分で潰すんだから、それなりの対価を貰えるのは当然」って考えちゃうんだよね……。まあ、さっさと終わらせるならこっちの方が早いか。

「今、お渡ししますよ」
一言伝えて、背中のリュックサックから一枚の封筒を渡した。
「！」
その、髭面のおじさんは僕からそれをひったくると、封筒の中身をごそごそと漁りだした。そして、
「おい……何だよこれは」
おじさんの言葉と共に、カランッという乾いた音を響かせて金貨が一枚、二枚、三枚。計三枚の金貨が床に零れ落ちたのだった。
「見ての通りの見舞金ですよ。どうぞお受け取りください」
ぎょろりとした目でこっちを見てくるおじさんに、僕は努めて端的に回答した。
「見舞金は別に良いんだよ……なあ」
「……」
「この金額はどういう事だって聞いてるんだよ!!」
そう言って、おじさんが熊のように吠えた。……またこのパターンか。
「何か不備でも？」
「不備でも？じゃねえよ!!」
おじさんは手に持っていた封筒を床に叩きつけた。

「お前はこの村の、俺達のダンジョンを閉鎖しに来たんだろ!?」
「ええ、仕事ですので」
じゃなきゃ、こんな二三年で急速に寂れた村になんか来ないしね。
「なら、何だよこの金……」
「……」
「何だって聞いてるんだよ!?」
指差した先の三枚の硬貨。金貨で三枚は決して少額ではない。都市部でも一月は余裕で暮らせる額だろう。けど、この村の一年の稼ぎにも満たない額だ。
「金貨三枚。まあ、あの規模のダンジョン閉鎖の見舞金としては相場通りの金額ですね」
だからと言って不当な金額という訳でもない。
「ふ、ふざけるな!!」
だけど、そういった話は聞きたくないらしい。おじさんは転がった金貨を今度は踏み潰してきた。別にふざけてなんていないんだけどな。
「お前、俺達のダンジョンがどんだけ稼いでいたのか知ってるのか？　ああ!?　年に金貨百枚だぞ！　金貨百枚!!　お前みたいな領主の犬如きに想像できるか!?　俺達はお前がそれを閉じろって言うから閉じてやったんだ!!　その見舞金が金貨三枚!?　人様舐め腐るのも大概にしろよ!!!」

「……」

おじさんの怒号の中で、村の人達の眼も次第にきつくなっていく。さっきの、この家のドアを開けた時と同じ……。まあ、それも、

「で？」

慣れたものだけどさ。

「それが、今の資産価値とどう関係しているんですか？」

「ああ!?」

煙草臭い息をはたきながら僕は何時も通りのやり取りに取り掛かった。

「今のあのダンジョンは昔ダンジョンだったというただそれだけの洞窟です。無駄に人が入り込みやすく、獣や熊などが冬眠に使いかねない。そんな一種の公害です。年間金貨百枚？　その価値が一体今の、宝物を掘りつくして、モンスターを狩りつくしたダンジョンの何処にあるというんですか？　あんなダンジョン、本来なら銅貨一枚の価値すらありません」

「て、てめぇ!?」

「そもそも、ダンジョンの閉鎖は本来であればダンジョンが手に入った村が自主的に行う義務となっている領地が殆どです。その中で、この村の属する貴族様は公共サービスの一環として、僕達ダンジョン閉鎖士を雇っておいでです。貴方達はその公共サービス

のおかげで、ダンジョン閉鎖のための各種雑務を免除されているにすぎません。いわば本来ならお金を払う立場であって、貰う立場じゃないそれを勘違いしてはいけません」

　真っ赤になった髭面のおじさんが咄嗟に殴りかかろうとしてきた。

「そも、この村の保有するダンジョンはD級。最下層のE級、資産価値のない無級よりはマシですが、純粋な規模は下から二番目です。当然、経済効果もその規模に比例しています。端的に言ってその年間百枚という金貨は大型のA級B級ダンジョンと比較して経済圏と呼べる規模には発展していません。当然、領主家へのリターンも少ない。はっきり言って、態々この土地の貴族が気を払う価値のないものです。それでも領主様は例外を認めずに見舞金を出すことに決めた……それは感謝をすべきことであって、間違っても怨むようなものでもなければ、こんな風に怒鳴り散らす様な事でもありませんよ……ねえ？」

　咄嗟におじさんを止めた村の人達と揉み合うのが見えたけど……まあ良いか。

「じゃ、じゃあ」

　って、次が来たし。

「そんな領主様が慈悲のある方なら、こんな、困窮した村の最後の希望まで取り上げて、そんな情けのない事をするわけがない！　そうだろ!?　なあ!!　お、お前が！　お前がちょろまかしたんだろ!?　なあ!!　そうに決まってるよな!!　ダンジョン閉鎖士なん

て何処に行っても鼻摘まみ者だって聞いたぞ!!　金も持ってないって!!　だから俺達の金を横取りしたんだろ！　ああそうだろ！　そうに決まってる!!!」

「……」

はい、これもよく見る奴。……本当に飽きないね。

「そんなの領主様に問い合わせれば分かるでしょうよ」

真実なんて簡単に突き止められる。相場も、実際の支払いも。

「大体困窮したのは貴方達の自業自得です。ダンジョンが開通し、様々なランクの冒険者が村を訪れれば、当然それによって人が集まるようになる。人が集まればその分お金が巡る様になる。何もしなくても、貴方達にもお金が入ったんじゃないですか？　ねえ？　今の領主様はその分を税に乗せるにしても節度を持ってやってますから。D級とはいえ自由に使えるお金は相当あったでしょう。そのお金を何に使うかは村の自由に任されています。工事をするもよし、子供の学業に費やすもよし、新たな商業化のために使うもよし。そして……散財するのも貴方達の勝手です」

「「「……」」」

黙りこくっちゃうか。実際、この村の人間に同情する余地はあまりない。ダンジョンが開通してから、農地をほっぽり出して、通行料だけで稼いでいたという報告がされていたしね。流石に指導が入ったみたいだったけど、結局労働よりも関所管理の方が楽

しくなって荒稼ぎをしていたというし……。確か、この髭面のおじさんも特に問題のあった人間のリストに入っていたはずだ。

「じゃあ、僕はこれで」

取り合えず、伝えることも伝えたし、此処に留まる理由もないし、さっさと城下町に戻らないと……。ん?

「どうかされましたか?」

村長の家の出口の前に、一人の女の人が蹲っていた。

「お願いです」

「……」

うん、もうね、

「この見舞金、どうか増額をしていただきたいのです」

またこのパターンだね……はぁ。

「それは僕の権限にはありません。領主様に直接訴え出てくださ「娘を売らなければいけなくなるかもしれないのです!!」……」

「確かに、ダンジョン閉鎖士様のおっしゃる通り、私達が愚かだったのかもしれません。或いは、もっと領主様の言葉に耳を傾ける機会があればとも……ですが、こうして生まれた娘達に一体何の罪があるというのですか? 一年、一年あれば、また今まで通りの、

農業を始めることも税を納めることも出来ます。だから、だからどうか……」

そう言って深々と頭を下げられるけどさ……娘さん盾にしてお金引き出そうとしているだけだしなあ。

「まあ、僕に言うのは本当に無駄なので、領主様への陳情で頑張ってください。娘さんはご自分で説明をどうぞ。僕が売るのではなく、貴方達が自分の意志で娘さんを女郎屋に売るんですから」

触らぬ神に祟りなし。こういうときはさっさと退散するに限るしね。

「て、てめえええええええええ!!!!!!!!」

「あっ!?」

「ん?」

振り返った先には、他の村人を振り解いた髭のおじさん。その後ろで、さっきの土下座のおばさんが「あ、あなた!?」とか叫んでる。あ、そう、夫婦ね。

おじさんは村長の家のキッチンに行くと、包丁を掴んで戻ってきた。

「ダンジョン閉鎖士への暴行はペナルティで「うるせえ! ダンジョン閉鎖士風情が俺達を馬鹿にしやがって!!」……」

「俺達のダンジョンだよ。あのダンジョンは、お前がたった半日もかけずに閉じちまったダンジョンは俺達の村のダンジョンなんだよ! これから、何年、いや、何十年と受

け継いでガキやそのガキにまで受け継がれるダンジョンだったんだよ！　それを、塞いだのはてめえだろうが！　だからよ、責任取ってダンジョンの金よこせよ!!!!」
「D級のダンジョンにそんな寿命はありませんよ」
　完全に錯乱しているし。
「ダンジョンの寿命がどれくらいか、ご存知ですか？　E級は数年、D級は十年弱、C級が十年から十五年、B級になると規模の兼ね合いで五十年近くになりますけど……、少なくともD級ダンジョンごときでそんな皮算用が出来る訳が無いんですよ。そして、今現在のあのダンジョンの資産価値はほぼゼロ。いや、さっきも言った様に公害としての側面にも目を剥ければマイナスだ。適性値を支払えというなら……貴方達が領主様にお金を納めるべきですよ」
「!!」
　あ、おばさんの方も包丁持ってきた。
「どういうつもりですか？」
「私達にはお金が要るんです！　村を守って、子供達を立派に育てていくにはお金が要るんです！」
「で？　その為に盗賊になると？」
「そんなことしません！　ただ！　ただ、私達の気持ちだってもっと汲んでくれていい

じゃないですか!!!」

「自分達に与えられた一時の余裕に依存して、勝負をするでもなく、身を固めるでもなく、単に散財した人に見舞金を持ってきて、この上何を!!!沒めと?」

「そ、それ「う、うあああああああああああああ!!!!」

突っ込んできた……か。

どすどすっという音と共に泳いだおじさんの上体を救い上げて身を躱す。一瞬、宙に浮いたおじさんの身体をそのまま地面に叩き付けると、夜露に濡れた地面で大の字になって、そのまま一んと動かなくなった。脇に落ちた包丁を投げ返すと、壁に刺さった包丁に何故か顔を青くされた。いや、驚くことはないんじゃないかな。殺そうとしたくせに、この程度で委縮されてもね。

「今の行動はありのまま報告させていただきます。ダンジョン閉鎖士への暴行は来年の税にペナルティとして乗ります。後日通知は来るでしょうから、そちらをご確認ください」

「そ、それは……幾らですか?」

あ、まだ村長は冷静だった。

「二割です。村全体で二割。国の規定に書かれています」

「そ、そんな!?」

途端に絶望に染まる村長の顔。他の村の上役達も皆似たような顔をしていた。そして、縋る様な色も。うん。

「僕に縋るのはお門違いですよ。この二割。要するに僕の様なダンジョン閉鎖士の身を守るための身代金みたいなものなんですよ」

言い換えれば命の値段。

「女郎屋に娘さん売るよりは高くても、そのお金が僕の命の値段。その額を僕が値切ると思いますか？」

「それは……」

「怨むなら、その人達でしょう。彼らが包丁を持ち出してこなければ、少なくとも最後の二割は付かなかった」

そして、僕もさっさと帰れた。

「通知することも言い終えましたし、僕はこれで……」

頭を下げて、今度こそ家から出る。

最後の最後に見えたのは、家の包丁で、二人を滅多刺しにする村の重役達の姿だった。

◆

ダンジョンからは獣の臭いがする。そう思ったのは生まれ故郷の村に偶然にもダンジョンが開通した直ぐその日の事だった。村の、名前も忘れた誰かが村長の家にやってきて何かを叫んでいて、それを聞いた村の子供達でダンジョンを見に行くことにした。ぽっかりと開いた洞の奥から、口臭とも糞便臭ともつかなかったそれに、僕は思わず顔を顰めて家に逃げ帰った記憶があった。村では子供は冒険者に憧れる様になる中で、僕はあの臭いのせいで欠片もそうなりたいとは思わなかった。ていうか、臭くないの？って思っていたしね。だけど、結局紆余曲折の末に、今ダンジョンに潜る仕事をしているのが、僕ともう一人だけだっていうんだから……なんとも妙な話だとも思う……ん？

（人の気配？）

村から城下町に戻る途中の小道で、ほんの僅か、ごくごく僅かにだけど、不意に人の臭いがした気がした。

（追ってきた？　いや、そんな余裕はなかったと思うんだけど……）

でも、このあたりの土地勘があって、僕に追いつく方法があった可能性もあるか。

「あーっ！　ちょ、待った！　待った!!」

一先ず荷物を置いて、腰の片刃の剣を抜いたところで、その人の気配の方から少しハ

スキーな、しかし、一度聞いただけで若い女性のものだと分かる声が聞こえてきた。次いで、ばつが悪そうに頭を掻きながら木陰から出てきた、予想通り若い―多分、僕より三つ四つ年下の―目元まですっぽりと隠れる長い前髪が特徴的な女性の顔に、僕は一先ず剣を向けたまま先を促す事にした。

「なあ」

「何です?」

「……抜いたままなんだな、お前」

「抜いたままですね」

見てのとおりです。

「そこは剣を納めてくれるところじゃないのか?」

「幾ら相手が無害そうでも、こんな夜道で声を掛けてくるのは普通は後ろ暗いところのある人間ですから」

ハニートラップを仕掛けてくる盗賊なんて、其れこそ掃いて捨てる程いるだろうし。

「いやいや、俺はこう見えても割と誠実で実直な人間だぜ? 勿論、夜盗なんかしないって」

「口では何とでも言えるので、信用しません」

僕が割と口先だけの人間だから尚の事ね。

「シビアだな、お前」

そう言って、彼女は僕に「現実的な奴」と苦笑した。旋毛のあたりでまとめられた闇夜よりも黒い髪がさらりと一筋地に流れた。うん。

「言葉だけで信用してもらいたいなら、せめて名前と領主の名前、それと家族くらいは言うべきですよ？」

「自分の名前と領主の名前は分かるけど……家族もか？」

「人質に取りやすいですし」

「ひでー奴」

そう言って、不審者さんは「くっくっくっくっく」と楽しそうに笑った。何か楽しい要素なんてあったかな？

「何で笑うんですか？」

「いや、悪い悪い。お前が思いの外面白い奴だと分かって、ついな」

「はあ……」

面白かった？　それ。

「ダンジョン閉鎖士なんて、つまんない奴ばかりだって思っていたんだが、案外そうじゃねーのかもな」

「……」

何か一人で満足げに納得してるんだけど……、これ、怒るべき所かなあ？　うーん……。

「取り敢えず、後三秒で答えなかったら」

「ん？」

「一、二「待った待った、何をしようとしているんだ？」ご想像にお任せしますよ」

取り敢えず、三秒経ったし一当て仕掛けることにします。

「お？」

両脇を締めて、切っ先を喉に向けると、

「どうおおおおおおおおおお!?」

「へぇ……」

予想以上に素早い身のこなしで、地面に転がられた。肩に羽織っていたジャケットが脱げても、そのまま転がっていき、大きく距離を開けようとしてくる。させるか。

「ふっ！」

右の足を束の間の支えにし、素早く左足を送る。再び繋がった体重を、もう一度地を蹴って敵に向ける。

（とった）

詰まる距離に、弐ノ太刀の直撃を予感する。だが、

「!?」

不意に背筋に走った悪寒に、僕は咄嗟に踏み込んだ右足を蹴って、無理矢理に仰け反った。腰に大分来たものの何とか上体を反らすことに成功すると、次の瞬間、パンッ!という軽い音共に、鼻先を焦げ臭い硝煙の臭いが通り過ぎていった。

「おおっ!?」

そして続く、感嘆した様な声。身体を起こして見ると、目の前の彼女の白い手に、細指に似合わない大口径のリボルバーが握られていた。

「へぇ……」

銃口から漂う火薬の臭いに、僕は思わずそう漏らしていた。あの一瞬、地べたを転がりながら、動きを一切殺さずに銃を抜き、撃鉄を起こして、引き金を引いたわけだ。しかも、その狙いは正確で即座に急所を狙ってきた。

手練の技……いや、神業と言っても過言じゃなかった。さて、どうやって逃げようかな。

「お前、ある意味すげーな……」

「はい?」

何か、寝転がったまま、そんな事を言われた。はて?

「殺しの趣向も持ってねーくせに、ここまで短時間で殺人を決定して、その上あっさりと

逃げを打つ……山賊やったら相当に稼げるぜ。どうだ、俺と一緒に一稼ぎしねーか？」
「でも、其れだと稼いだお金を使えないですよね」
「ま、そりゃな」
「お金は集める事だけ出来ても意味ないじゃないですか。使わないと役に立たないし」
「そりゃ、そーだ」
そう言って、その女の人が又「くっくっく」と笑った。なんて言うか、よく笑う人だな……。
「……」
「ちょ!?」
「ちっ」
隙あったと思ったんだけどな。
「一応和やかに笑ってたタイミングで躊躇なく短刀投げてくるかよ」
「俺よりやべーよ」とか言ってるけど、別に誰彼構わずやってる訳じゃないんだよなあ……うーん。
「おい、いたぞ!!」
「ん？」
不意に聞こえてきた人の声。次いで、いつの間にか近付いていた松明の灯。どうや

ら、目の前の美人局？　に気を取られていたせいで、気付けなかったらしい。
「へ、へへ。追い付いたぜ。なあ」
「……」
　果たして、目の前の女の人から刀を外す訳にもいかず、さてどうしようかと考えていた僕の前に現れたのは、
「また会ったな、ダンジョン閉鎖士！」
　さっきの村で、髭面のおじさんを滅多刺しにしていた五人の上役の内の三人だった。
僕を追ってきたか……ふむ。
「そこの人」
「あん？」
「僕と共闘してくれませんか？」
　取り合えず、仲間を増やさないと。
「……」
「？　何か？」
「いや、お前、今の今まで俺と殺し合っていたよな？」
「そうですね」
　だから何です？

「いや、よくもまあ、そんな言葉を吐けるなと思ってな」
「明らかに僕に危害を加えることが目的の集団と、何かしら別の目的がある貴女を天秤にかけただけですよ？」
　誰の眼から見ても明らかだよね。
「いや、うん、それで即座にその決断が出来るのは逆に凄いとは思うけどよ」
「別に決断なんてしていませんよ。単により良い方に流れただけなので」
　好きな言葉は付和雷同。安きに流れろ我田引水……最後のは一寸意味が違うか。まあ、無理なら無理で腹を括るだけだし。
「……ふぅ」
　なんか、溜息を吐かれた。んん？
「まあ、良いぜ。俺も確かにこんな夜道で声掛けちまったしな「対価は何を支払えば？」そっちも躊躇ねーんだな」
「契約ですからね。対価を払わないなんてありえませんし」
　タダより高い物なんて無いし。
「律儀なのか何なのか……」
「律儀かは知りませんけど、事務的だとはよく言われますね」
「あー……」

何か「ああ、確かに」みたいな顔をされた。失礼な。
「俺の事をダンジョン閉鎖士の助手として雇ってくれねーか？」
「……？」
んん？
「理由は？　態々推薦を頼むってことは、〝ダンジョン・コア〟の感知は出来ないんでしょ？〝ダンジョン・コア〟感知出来たら、ギルドが直接雇ってくれますし。なのに態々ダンジョン閉鎖士になりたいなんて変態ですか？」
「歯に衣着せない奴だな」
何か、また愉快そうに笑われた。
いや、だって、ダンジョン閉鎖士なんて、生活が安定しているくらいしかメリットのない職業堂々の一位だし。その特性上、〝ダンジョン・コア〟を感知出来る人間でなければ務まらないし、入るダンジョンも既に渇れていてモンスターは出てこない。でも、別の危険がない訳でもない上に、冒険者と違って現在進行形でアガリがある仕事でもないから、特大のリターンとは無縁の生活だ。加えて、人に逆恨みされることも多いからなあ……。
「という訳で、単に仕事が欲しいなら、他があるってことで」
「まあ、それはその通りだな」

そう言って、彼女は肩を竦めた。
「誤魔化す必要も無いから端的に言わせてもらうが、俺はお前達が採掘する〝ダンジョン・コア〟を使いたいんだ」
「〝ダンジョン・コア〟を？」
いや、使うだって？
「ああ」
頷いた彼女の顔からは、さっきまでのおちゃらけた雰囲気は欠片もなくなっていた。
「〝ダンジョン・コア〟は政府が売買を禁じている禁制品だろう？」
「まあそうですね」
ダンジョン閉鎖の証拠でもある〝ダンジョン・コア〟。その本性は所謂ダンジョンの心臓だ。だからこそ、ダンジョンから〝ダンジョン・コア〟を採掘してしまうと数日のうちにダンジョンは潰れて閉じてしまう。だけど、それ以外にもう一つ〝ダンジョン・コア〟には厄介な性質があった。
「〝ダンジョン・コア〟を使うっていうことが、どういうことだか分かってますか？」
確かめると、彼女は「ああ」と頷いた。
「自分の魔力を反応させると、どんな魔法耐性を持っていようが、それこそドラゴンですら貫通して何かしらの効果を与える……だろ？」

「しかも、効果は完全にランダムです」

そう、そこが、〝ダンジョン・コア〟の厄介なところ。そのダンジョンが開いてから、殺し殺された数多くのモンスターと人間の血肉に魔力。その全てを吸い上げて、変質した〝ダンジョン・コア〟は死んだモンスターや人間の種類や人数によって様々に力の質を変えることで知られている。当然、一部には大したこともない効果のものもあるが、一部には国一つ混乱に叩き落とすものもある。それ故に、〝ダンジョン・コア〟はほぼ全ての国で御禁制の品とされている。但し、ダンジョン閉鎖士とその助手が、緊急で必要と考えた場合は除いてだけど。つまり、

「そこまで切羽詰まっていると？」

「ああ、まあな」

ふうん……。

「さっき、お前が言ってた金の話じゃねーけど、俺は〝ダンジョン・コア〟を使いたいんだ。それも恒久的な幸福のためにな」

「はあ……」

恒久的幸福のためにねえ……。それなら、確かに違法な手段で使う訳にはいかないか。

「そーゆーことだ。だから、お前に「てめぇら、何ごちゃごちゃ言ってやがる!!」
「ああ、もう少し待っててくださいね」
　どうせ、建設的な話なんて何も聞けないんだし。
「まあ、最終的には貴女自身が使えるか使えないか次第で」
「言うな」
　そう言って、彼女はくっくっくっと喉を鳴らしたのだった。さてと……。
「じゃあ、そっちの人達。一応聞きますけど、何か用ですか?」
　農機具なんて持って、今から畑仕事ですかね?
「な、なあ、頼むよ、さっきのこと、領主様には黙っていてくれないか。この通りだ!!」
「……」
　そう言って、三人組の中心にいた細身のおじさんがその場に膝まずいて頭を下げた。
それに倣って、左右の二人も顔を地面に擦り付ける。
「あんたを襲った馬鹿も、もう居ないんだ。なあ!　頼む!!」
　そう叫んでくるけど、うん。
「無理ですね」
　出来るわけないじゃん。そんなの。
「勘違いしてるようですけど、別に僕は怒ってもなければ、貴方達に害意を持っている訳

でもありません」
「じゃ、じゃあ！」
　うん、そこが勘違い。
「でも、だからといって、積極的に助ける気もありません。というか、何か働き掛ける気がない」
「「……」」
「僕が働き掛ける事で、何かしら貴方達に有利に働くかもしれない。働かないかもしれない。けど、そもそも働き掛けて何になるんです？　領主様の法を歪めることになる。別に僕は法治主義者じゃないですけど、自分の不利益にならない限りは積極的に歪める気もない」
　面倒だしかったるいし。一々そんな事やってられないし。
「それに、僕はそんなに偉い立場じゃないんですよ。単なる宮仕え。確かにダンジョン閉鎖士はそれなりに貴重な能力ですけど、領地運営とは無関係。ノータッチですからね」
　つまり、この人達を裁くのはあくまでも領主様の仕事。
「だから、その辺の陳情はそっちに直接どうぞ」
「「……」」

聞いてもらえるかは、また別問題だけど……ね。

「じゃ、行きましょうか」

一先ず、隣の彼女に声を掛けて、さっさと町に向かうことにする。まあ、

「こ、この」

「！」

「何で……何で首を縦に振らねぇんだよおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！」

「おい!!」

すんなりはいかないか。

「っ！」

背中に浴びた怒号に圧されるように、一足踏み込んで距離を取る。振り返った先には

さっきの農具を向けて卑屈な愛想笑いをしていたおじさん二人と、銃を持った彼女に熊手を向けるおじさんが一人。ふむ。

「ま、こうなりますよね」

正面に立つおじさんが「へ、へへ、へへへっ！」と肩で笑う。何て言うか、薬物でもやっちゃった様な、正気から程遠い笑いに見えた。

「お、お前が悪いんだ。お前が、お前達ダンジョン閉鎖士が!!」

「……」

「金目のもの、置いてけ。身ぐるみも、〝ダンジョン・コア〟もだ！」

うーんこの。

「逆ギレの次は追い剥ぎですか？「それもこれもお前のせいだろうが!!」自業自得でしょうが。あほくさい」

「！　う、動くんじゃねえ!!」

「……」

どっちだよ。金目の物置けないじゃん。

「そうだ、この女も、俺達が貰ってやる。ダンジョン閉鎖士の助手とか言ってるが、要はお前の手先だろ？　なら、屑ってことに変わりねえ！」

何か、奥のおじさんまで逆ギレが伝染し始めたし。面倒だなあ……。ん？

「誰が……」

何か、おじさんの前のリボルバーさんから、物凄い怒気を感じるんだけど？

「誰が女だこらぁっ!!!」

「ええ……」

いや、どっからどう見ても女だよね？　普通に美人だし。何より、

「そんな、おっきなおっぱいしてて、女じゃないとか何の冗談ですか?」
そう。ジャケットが脱げて気付いたんだけど、このリボルバーさん、凄いおっぱいが大きかった。それも、シャツがはち切れるんじゃないかってくらいに。うーん?
と、そうこうしているうちに、三発の発砲音。同時に、元農民、現山賊の三人の農具が首から吹っ飛んだ。
「「なっ!?」」
絶句する三人の前でリボルバーさんが肩を震わせる。
「俺はな、〝ダンジョン・コア〟のせいでこんな身体になっちまってるが、正真正銘の〝男〟なんだよ!!」
「あ、そういうことか」
成る程成る程。……うん。
「不憫ですね」
「ストレートに同情するんじゃねぇ!!」
いや、それは無理でしょ。アイデンティティとか以前にちんちん取られるとかさ。
「だから、〝ダンジョン・コア〟を使いたかったと」
確かに、男を女にするとか訳の分からない、体系図からかけ離れた魔法は〝ダンジョン・コア〟の部類だし、解除を〝ダンジョン・コア〟に頼るというのも分かる。という

か、それしか手がないしね。
「だーもう、そうだよくそったれ!!」
そう言って、リボルバーさんはやけくそ気味にバンバンと銃をぶっぱなす。
「ひっひいっ!?」
あ、流れ弾。
「撃つなら、耳か鼻だけにしてくださいね？　でないと、労働力になりませんから」
「ん？　ああ、わりーな」
そう言って、農家の三人の耳を吹っ飛ばして落ち着いたのか、リボルバーさんは銃をホルスターに収めて、失禁してる三人を尻目に肩を竦める。
「まあ、そういう訳なんだが……どうだ？」
そうだね。
「紹介はします。そっちで許可が下りたら、僕は構いません」
銃の腕はしっかり見せてもらったし。
「そうか、じゃあ、頼んだぜ」
「ええ……あ、そうだ」
頷いたところで、一つ確認しなきゃいけないことを思い出す。
「あん？」

「名前、聞かせてください」
「あー、そういやあ、言ってなかったな」
そう言ってリボルバーさんはふっと表情を緩める。
「俺の名はサルバ。〝トゥーハンド〟サルバ。B級の冒険者だ。お前は？」
「アルタです」
「アルタか。よろしく頼むぜ、此れからな」
「ええ」
差し出された手を握ると、その掌は当然のようにごつごつとしていた。
「短い事を祈ってますよ」
「……」
「何か？」
「いや」
何か、変な顔をされた。
「こうもストレートに、応援されると思わなくてな」
はあ。
「やっぱお前、一寸変な奴だな」
さいで。

へたりこんだおじさん三人と失禁の中で、僕は鞘に剣を納めたのだった。

ニ

結局、僕とサルバが城下町に戻ってきたのは日が暮れてから大分経っての事だった。辺りの食堂は既に看板を下ろしていて、代わりに二階の娼館に灯りが点り始めている。少し強めの夜化粧をさした娼婦達が客引きをする端を邪魔にならないように歩いていくと、後ろのサルバが「なあ」と声を掛けてきた。

「何？」

「何で、態々こんな道の影歩くんだ？」

「表通りの娼婦見れねーじゃん」と口尖らせられるけど……ねえ。

「サルバ」

「あん？」

「ダンジョン閉鎖士になるとね」

「おう」

「娼婦から塩撒かれるからね？」

「え？　マジでか？」

何かショック受けてるみたいだけど、むしろ想定の範囲内でしょ。

「考えてもみなよ。娼婦の上客って言ったら？」
「冒険者と金を持ったダンジョン街の市民だな……あ」
　ん。気付いたみたいだね。
「今の時代、気前よく娼婦に大金を注ぎ込むのはダンジョンからのアガリで食べてる人間って相場が決まってるからね」
「そういうことか……」
「うん」
　娼館に通っていた太客が、ある日突然店に来なくなったり、冒険者が河岸を変えた場合、高確率で縄張り、或いは得意にしているダンジョンの閉鎖が関わっている。
「勿論、全部が全部、僕達ダンジョン閉鎖士のせいって訳じゃないし、そもそも因果に関して言えばダンジョン閉鎖士のせいでダンジョンが閉鎖しているわけじゃなくて、閉鎖しなきゃいけない程ダンジョンが枯れるからダンジョン閉鎖士が居るんだけど、やっぱりその辺、直感的にはダンジョン閉鎖士のせいにしたくなるんだろうね」
「……」
「？　どうかした？」
　そんな神妙な顔して。
「いや、そうなるとだな」

「うん」
「俺も娼館には通えないってことだよな？」
「ちんちん付いてないのに行くの？」
「ぐふっ……」
　何か、盛大にダメージを受けたサルバだけど、いや、何で自爆するかな。
「どうして、現実ってのは俺に厳しいんだろーな」
「気持ちは分かるけどさ」
　ちんちん取られるダメージが大きいのは、まあ分かる。仕事が仕事だから、娼館には行ったことないけどね。
「どうする？　今ならまだ引き返せるけど？」
　まだ、僕と裏通り歩いてるだけだから、色々と誤魔化せる範囲だし。
「突っ込みたくても、突っ込むためのちんこがねーんだよ」
　それもそうだ。
「まあ、そう肩を落とさないで。お金の都合次第だけど女性の相手してくれる娼婦も居るし。最悪、双頭ディルドって手もあるし」
「そもそも、いくら突っ込むためでも、股間に突っ込みたくはねーよ」
「それやっちまったら、色々と終わりそうな気がするからな」とぼやいてるけど……ま

あ、そうだよね。
「因みに、娼婦の何割かはダンジョンの閉鎖で金に行き詰まった親に売られた子供達だから、ちんちん取り戻しても娼館出禁かもよ。今から前途多難だね」
「今それを言うのかよ!?」
「あはは」
「救いはねーのか、おい」と頭を抱えてるけど、現実は変わらないよ?
「くそ、目移りするほどエロい女達が目の前通り過ぎてるっつーのに、今も未来もお預けかよ……」
「目移りって、見えてるんだ、その前髪で」
ストレートに切り揃えられた、鼻先まで伸びた前髪からは、その視線はどうしても捉えることが出来ない。本人の仕草や口元のせいもあって、感情そのものは割りと豊かなんだけどな。
「と、そろそろ着くよ」
そうこうしている間に、裏通りの端、日の出と共に冒険者が走り出し、日暮れと共に冒険者が集まるギルドの裏口が見えてきた。
「裏口から入るんだな」
「一応、職員だからね……あまり気分がよくなかったりする?」

花形の冒険者やってたわけだし。
「いやそうじゃないが」
「そう？」
「ああ。ただ、冒険者ギルドに入るって言ったら、表通りの一等地からだからな。正直裏口ってのは新鮮だ」
さよで。
表通りの大門と違い、手入れが行き届いていないせいか立て付けの悪い、まあ、僕からしたら慣れ親しんだ扉を開くと、中ではギルドの職員達が今日のアガリと明日貼り出す依頼を確かめていた。
「戻りましたー」
何時も通りに儀礼的に挨拶をすると、近くの職員が同じく儀礼的に「お疲れ様です」と帳簿から顔を上げずに気のない返事を返してくる。
「此方だよ」
「あ、ああ」
何か、変な顔してるけど、何かあった？
「いや、そうじゃないんだが」
「ん？」

「何か……気味が悪いなってな」

少し考えたけど、結局選ぶ言葉が見付からなくて、言い慣れたものを口にしたって雰囲気でサルバは頭を掻いた。あー、まあね。

「その感想は良く分かるよ。十人以上の男女が人部屋に集まって、互いに言葉を交わすことすらしないで紙に向かっているんだからね」

不気味……いや、人らしくない光景は確かに違和感と不協和音しか醸し出さないよね。

並べられた机の端を通って、サルバを奥の間に促す。

「此方は？」

「ギルド長室。今日の報告とサルバを助手にしたことを伝えなきゃいけないから」

「ギルド長に直接なのか？」

そう言って、サルバは少しだけ驚いた様に首を傾げた。長い前髪がさらりと流れて、ほんの一瞬だけ青い瞳が見えた。意識してもいないんだろうけど、まあ粗野で訝る仕草も含めて不思議と色気を感じない。なんて言うか「ああ、本当に男なんだな」と妙に得心がいく所作だった。

「まあね」

「はー……」

何か、変に感心された。うーん。
「一応言っておくけど、ギルド長って其処まで現実離れして偉い訳じゃないからね？」
「そうなのか？」
あ、やっぱり知らなかったんだ。
「ギルド長の上に複数のギルドを統括するギルド統括長がいて、ギルド地区統括長の上にギルド県統括長がいて、その上に地方統括長。この地方統括長は大体王都にいて、冒険者そのものの運営をしているんだってさ」
僕も見たことないんだけどさ。
「なんつーか、雲を掴むような話だな……」
「まあね」
僕もそう思う。
「そういうわけで、ギルド長に直接っていうのも、其処まで珍しくはないんだよね。職員なんて毎日顔合わせてるし」
仮に偉くても、日常的に顔合わせてると、有り難みも失せるしね。
「そういうもんか」
そうそう。と、
「ん。ここだ」

サルバに見慣れたギルド長実のドアを指差して見せる。木戸の前に「ギルド長室」と書かれたそれを押すと、草臥れた雰囲気の老婆……まあ、要するに我がギルドのギルド長がのっそりと机から顔を上げたのだった。

「おや、お帰りアル坊」

「ええ。ただいま戻りました。ギルド長」

（何？　お前、ギルドではアル坊なんて呼ばれてんのか？）

（ギルド長からはね）

（その年でアル坊か）

（子供って年じゃないけど、ババアと比較したら子供だからね）

子供扱いは仕方ないよ。

「聞こえてるよ……」

「だってさ」

「さらっと俺に擦り付けてくるよな」

別に持ってても何のメリットも無いしね。

「で、仕事の方は片付いたかい？」

「特にトラブルはなく」

「さっきの襲撃は何なんだよ」

「あれは通常通り」
　というか、あんなの数が多すぎて一々カウントしてらんないし。
「荒んでんなぁ」
　何か、やたらと楽しそうに笑われた。笑うところあったかな？
「襲撃があったのかい？」
「ええ。村長宅で一回、村外れで一回の二回です」
「あ、そこは報告すんのか」
「回数に応じて来年の税率が上がるからね」
　二回襲ったんだしね。
「コアは？」
「此です」
　頷いたギルド長に竹の水筒に入れた石を渡す。
「……確かに」
　中を見て水を一舐めしたギルド長が頷く。
「で、だ」
「はい」
「そっちは？」

「助手希望だそうです。サルバ。自己紹介して」
「おー」
頷いたサルバがややぎこちなく前に出ると、膝に手を置いて中腰になり「B級冒険者のサルバです。宜しくたのんます」と頭を下げた。……何て言うか、
「慣れてない感じバリバリだよね」
「仕方ねーだろ。実際慣れてねーんだから」
「……」
「？　どうかしましたか？　ギルド長」
何か、しげしげとサルバ見てるけど。
「B級のサルバ……。〝トゥーハンド〟サルバかい？」
「知ってるんですか？」
B級でも、目立つ方の冒険者だったのかな？
「知ってるっていうか、あれだ。……隣町のギルドの中で盛大に愁嘆場を演じて解散したチームのリーダーだよ。あたしも又聞きだけどね」
「がふぉっ!?」
あ、死んだ。
「ていうか、愁嘆場？」

何やったのさ。
「その前髪の坊やはね、B級でもそこそ成長株のパーティのリーダーだったんだよ」
「へぇ……」
優秀だったんだ。
「チームワークも中々のもんでね。ファイターとプリースト、メイジとガンナーの四人と少数だけどA級のダンジョンにも潜っていたんだ」
「ふむ……」
で、愁嘆場？
「プリーストとメイジが女の子で、ファイターとこの子が男の子。まあ、それぞれ男女の交際もしてたみたいなんだけど、この子が女になっちまっただろ？　そのせいで付き合っていたプリーストの娘からふられてね。しかもそのままチームは解散。二人の娘はファイターの男の子に着いていっちゃったんだよ」
「うわぁ……」
「因みにプリーストの娘からは『身体が女の男とか気持ち悪いので、絶対にこのパーティに近付かないでください。貴方と交際していたことも絶対に口外しないでください。本当に私の人生で最大の汚点です』て」
「普通に酷いですね」

何て言うが、泣きっ面に蜂。女性はその辺シビアとは言うけどさ。其処まで言う？

何か、隣でズーンと項垂れていたサルバが「畜生……」と呻いた。うん、そりゃ落ち込むよね。

「ていうか、今更なんだけど」

「うぅ？」

「何で女になっちゃったの？」

「……」

結晶化した〝ダンジョン・コア〟が採掘出来る程枯れたダンジョンに、態々冒険者が、しかもＢ級の人間が入るとは普通思えないし。

「……勾玉だ」

「勾玉？」

耳慣れない単語が出てきたけど。ん？

「普通の石を削って磨いて作る装飾品だろう？　……まさか、それが〟ダンジョン・コア〟だったのかい？」

「……」

ギルド長が確認すると、サルバはこっくりと頷いた。どんな確率だよそれ。

「小物市で売られてた勾玉の装飾品の一つにそれがあって、パーティのメイジの魔力に

反応しちゃって」
「もしかして、恋人庇ったとか？」
「……」
あ、何か更に落ち込んでる。そっか、庇ったんだ。
「庇って女になって、そーゆーこと言われてさー。俺だってお前のこと思って庇ったのにって言ったらさー。『別に頼んでないですし、女になるだけなら庇われる必要もありませんでした』ってさー。そこまでさー……」
「……」
何かもう、色々といたたまれないなあ。ていうか……。
「恋人選び、普通に失敗したんだね」
「言うなよ！　マジでそれ言うなよ!?」
いや、そうは言うけどさ。
「女になるだけなら、庇われなくても良かったって本当に結果論だし、何でそういうこと言う人と付き合ったのさ」
同じパーティなら、人となりなんて、何となく分かるでしょうに。
「恋人作る時間がなくて、手近で済ませたんだろうさ。冒険者だと割りと多いパターンだね」

「焦りで、評価が甘くなったと」
「後は、女からの愛情が無限で無条件だって信じる男特有の変な自信だねぇ。あたしやそれなりに色んな冒険者見てきたけど、無条件で愛し愛されるって信じてるのは基本的に男の方だけだったね」
「……」
何か、サルバが真っ白に燃え尽きていた。
「ファイターに着いていったってのも理由は簡単さ。あんた、そのファイターと比較されて、点数低く見られてたんだよ」
「ぐふぅ!?」
あ、復活してまた死んだ。ギルド長も容赦ないなあ。
「プリーストの娘だっけか？　あんたと付き合っていたのは。それが、ファイターの子に着いていったってことは、ずっとそう思われてたんだよ。『あっちのほうが良い男だったのにって』」
「うごご……」
「プリーストの娘と付き合い始めたの、ファイターの子とメイジの娘が付き合い始めたすぐ後じゃないかい？」
「……」

無言で俯いてるけど、それ、ほぼ答え言ってるのと同じだよ？

「要するに、メイジとプリーストのマウントの取り合いで、ファイターとメイジが付き合ったのに対抗してサルバと付き合ったけど、プリースト視点で負けを感じざるを得ない程度には差があったと」

「アルタも十分容赦ねーからな!?　そこのババアのこと言えねーからな!?」

はっはっは。

「まあ、でもそういう意味じゃ安心しな、サル坊」

「あ〝あ〝ん〝!?」

あ、やさぐれてる。

「ダンジョン閉鎖士はほんっとにモテないからね。金はそこそこあるのに商売女からの受けも最悪だから、女のことで心を病むことは絶対にないよ」

「何の救いにもなってねえじゃねえかあああああああああ!?」

サルバの絶望が、夜の町の空に響き、そして歓楽街の歓声にひっそりと掻き消えたのだった。

さて、あの後、散々ギルド長に虐められた末に、無事?に僕の補佐になった失意体前

屈のサルバの細やかな歓迎会を開いた結果。

「おらっ！　飲んでんのかアルタァ!!　全然酒が減ってねーぞ!!」

ギルドの経営する酒場の個室の中に見事な酔っ払いが出来上がっていた。

「一応飲んでるよ。自分のペースで」

「ああっ!?　自分のペースだぁ!?」

あ、やべ。

「な　ん　で　！　俺のペースに合わせねぇ!?　足りねーんだよっ!!　てめーら、何時も何時も酒場のど真ん中の癖にチビチビチビチビやりやがって!!!　お陰で俺まで気を使ってペース落とす羽目になるじゃねーかっ!!!　しかも、何だぁ!!　別れるときになってから『お酒の飲み方もせこくてカッコ悪かった』だぁ!?　お前らに合わせてたんだよ!!　気を使ってたんだよ!!!　なのに、俺のせいで酒が好きに飲めなかった!?　そもそもテメーらが酒飲めねぇだけろうがよぉ!!!!」

「……」

何か変なスイッチ押しちゃったな。というか、飲みでもトラウマあるの「おら、お前も飲めっ!!」……。何か、ジョッキ通り越してピッチャー突き付けられたんだけど。

「いや、流石にそれ「飲め」えーと「いいから飲め」うーん……」

参ったな。こうまで酒癖が悪いとは。「おいおい、俺の酒が飲めねぇのか？　あんま、

たらたらしてっとビンごと喉にぶちこんじまうぜっ!?」しかも酒乱かぁ……。

「……」

「お？　漸く調子出てきたみてーじゃねーか!!　おらっ！　もっと飲め飲めっ!!!」

こういうのに正論を言っても無駄なのは万国共通と諦め半分にジョッキに口を付けると、こっちも満足したのか、笑いながらパッカパッカと杯を空にしていくのだった……本当にそのペースで大丈夫かなぁ？

「おぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ……」

ダメでした。

結局、あの後明らかなオーバーペースに入ったサルバは高笑いと暴走の果てにプツッと動きが止まり、青い顔になって口を押さえたのだった。そのまま、何の予兆か察した店員の人達に追い立てられるように店を出ると、直後に最後の防波堤が決壊したのだった。

辺りに漂う、アルコール臭い酸いえた臭いに思わず顔をしかめる。何で、こんな夜中に野郎の介抱しなきゃいけないのさ。いや、女の人でも嫌だけどさ。

「がふっ!」

ゲロゲロっという音が終わり、最後の一押しと共にびちゃっとつまみが落ちたところで、漸く地獄の時間が終わったのだった。うーん、どんだけ吐いたんだ……。
「ほら、行くよ」
「お、おう……うおっ!?」
と、よたよたと着いてくるサルバが、何もないところで蹴つまづいてきた。
「おっと」
「ぐえっ……」
咄嗟に避けると、地面に落ちたサルバは蛙のように呻いた。うん。もう。
「う、うぅ……うぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ!!」
あ、泣き出した。「ダリア……ダリアァァ……」と譫言のように元恋人のプリーストの名前を繰り返しているけど、どうしたものかな。
「……仕方ない」
「うぁ……?」
「風邪ひいてもつまらないから。宿までは連れてくよ。落ち込むなら。後はそこでね」
大きな、本人に言えばまた落ち込みそうだけど柔らかい身体を小脇に抱えると腕の中から小さく「すまん……」とだけ聞こえた。
「ま、パーティ入り記念てことで、特別サービスね」

肩を竦めると、サルバはこくりと頷いてきたのだった。
（しかし……）
うつらうつらと顔を上げたサルバの前髪が少しずれて、その顔が露になるんだけど、
「普通に美人だよね……これ」
さっきの乱痴気状態でも思ったんだけど、顔の造形に関して言えば間違いなく美人だ。いや、はっきり言って、其処らの女冒険者が足元にも及ばないくらいには。
サルバの自己申告を信じるならばという前提条件は付くが、体つき以外は変化がないということになるんだけど、そうなると、男だった頃のサルバは相当な美形だったことになるわけで。そんなサルバを恋人にしたことに劣等感を持っていたってことは、比較対象だったそのファイターって最早人間じゃなかった可能性すらあるよね。
「うーん……」
今更僕が考える話でもないんだけど、この外見で我慢できなくて、不満溜め込むって、一寸どんな女の人なのか、怖くもあるけど、好奇心もそそられるかな……。
「ダリアァァ……」
「……ふんっ」
「おごぉ!?」
「ぺっ、バカが」

情けない声と共に、人様の股間に手を伸ばそうとしてきたサルバ（バカ）。うん。

「捨てられたの、これが原因かもね……」

何となくそんな事を思いながら、土手っ腹への直突きで気絶した助手を引き摺り、僕はこれ（サルバ）を放り込むための宿に急いだのだった。

◆

翌日、ギルドの前で待っていると、あからさまに調子の悪そうなサルバがやって来た。

「おはよ。調子はどう？」

「……何か、くっそ腹痛ぇ」

「そ」

「つか、俺の腹、拳の形に真っ赤になってたんだけどよ」

「……」

「……」

さて……。

「酔っぱらって、フラれた元カノと勘違いして、人様の股間に手を伸ばそうとしたガンナーが居たらしいんだけど、心当たり「マジすんませんでしたぁ!!!」よろしい」

まあ、そういう反応になるよね。

「素直な謝罪に免じて、ホモ疑惑だけは掛けないでおいてあげようか」

「お前、本当に容赦ねーな!?」

「野郎にいきなりちんこまさぐられそうになったら、普通の男は大抵こうなると思うよ？　サルバをだったらどうする？」

「耳と鼻と目を引きちぎってから、股間切り落としてはちのすにしてやるぜ」

「……」

「……」

……僕なんかより、ずっと具体的でえぐくない？　……あ。

「もしかして、けいけ「よしっ！　そろそろ仕事だな！　俺のダンジョン閉鎖士補佐としての初仕事だ！　気合い入れていくぜ!!」

そう言って、強引に打ち切ろうとしてくるけど。そっかー、経験ありかー。まあ、僕と違って、顔の作りも良いも……。

「もしかして、前髪伸ばしてる理ゆ「言うなよ!?　ほんっとうに言うなよ!?!?」

うん。そっか、前髪は痴漢避けかー。何て言うか、

「ドンマイ」
「同情するならそのネタ深掘りするんじゃねーよ!?」
ごもっとも。
「さ、それじゃ、ギルド長の所に行こっか」
「深掘りしたのはお前だって言いたいけど、そもそもの発端が俺だからなぁ……」
そう言って、深々とため息を吐いたサルバがガックリと項垂れながら後を着いてくる。そうそう。人生諦めが肝心だよ?
「うっせ、諦めたら一生息子と御別れしたまんまじゃねーかよ」
そういえばそうだね。
(……そういえば、仮に男に戻れたとして、サルバは元恋人とよりを戻すのかな?)
「俺はぜってー諦めねーからな」と呟いてギルドの中に向かうサルバの後を追いかけながら、昨日の酔っ払ったサルバを思い出し、僕はふとそんな事を思ったのだった。

◆

「ダンジョンの復活？」
　ギルド長の部屋に着くと、突き付けられたのはよりにもよって、聞くからにめんどくさそうな言葉だった。
「らしいね」
　頷いたギルド長も、半信半疑といった表情でギルド長室の机の隣に立つ壮年のいかにも出来る感じのおじさんを見上げた。えっと、此方は？
「そこのサルバとは別の町のギルド長さ。極々内密の話ってことで直接来られたんだ」
「初めまして」
「これは失礼いたしました。ロハグの町のダンジョン閉鎖士をしております、アルタと申します」
「っと、助手のサルバです」
　うーん、これは本当にヤバそうだな。明らかに隣町のギルド長の目が笑ってない。
（なあ）
（ん？）
（これ、もしかしなくてもなんだが）
（うん）
（俺、かなーりまずい時にお前の助手になった？）

（……）

はっはっは。

（推定、僕がダンジョン閉鎖士になってから一番か二番に面倒臭そう）

（最悪だなおい!?）

……。

（僕から見ると、サルバが来た瞬間から面倒ごとが増えたようにも見えるけどね）

（知ってるよ畜生！）

はっはっは。

（何て言うか）

（お互い）

（（面倒くさいことになってる））

よね。で、

「僕にその話をされたということは、そのダンジョンの調査の依頼ということで宜しい

ですか？」
「ええ」
　隣町のギルド長はにっこりと笑って頷いた。何て言うか、お婆と違って物凄く品が良い笑い方だ。
「聞こえてるよアル坊」
　目が笑ってないせいで、とても堅気には見えないけどさ。
「聞こえておりますぞ？」
　はっはっは。
「俺から言わせりゃ、あんたら全員目が笑ってなくてこえーよ」
「「やかましい」」
　何とも失礼な。ま、いいや。話進まないし。
「で、ギルド長の判断は？」
「そうだね。何とも妙な話だが、一先ず手を突っ込んでみないと判断がつかないからね……。アル坊」
「はい」
「調査、頼むよ」
「分かりました」

資料を受け取って、軽く一枚目を眺めると、中々に愉快なことが書かれている。ふむ、これは、サルバを助手にしたのは僕からするとタイミングが良かったかもね。

「あん？」

「冒険者のフリをする必要がある」

訝るサルバが首を捻ると、さらりと流れた前髪の間から、ちらりと鋭い黒目が見えた。

「ギルド長、僕とサルバの冒険者パーティ登録をお願いします」

「分かった、準備するよ」

「サルバは僕と資料の読み込み」

「マジでか？」

「マジだよ」

頷くと、凄く嫌そうな顔をされた。うん。

「文字苦手？」

「……あんま、得意じゃねーな」

「読まなくても良いけど、それが原因で発生した不備は遠慮なく全部おっかぶせるからね？」

「ぐ……仕方ねーし、読むよ」

うん、確り観念したね。

「ま、そこまで悲嘆するものでもないよ。こういう詳細な資料が手に入るのはギルドナイトの特権だし、資料そのものの質は専業の冒険者に比べれば劣ってても、斑がないから使いやすいし、それに」
「それに？」
「仮に騙したり、間違っていたりしてたとしても、一から十まで嘘や誤りを書き立てる訳にはいかないからね。嘘なら、何故その嘘を書いて何を隠そうとしているのか。誤りなら何故その誤認が起きたのか、突き詰めるだけで大分やり易くなる」
　心得ておけば、プラスになってもマイナスに成ることはまずない。
「おー……」
「此処まで言って共有ミスとか許せないから、読んだ後に署名してもらうね？」
「辛辣だなやっぱ」
「そう？」
「ああ」
　頷いたサルバは何とも言えない感じで苦笑した。
「是々非々で区切りを常につけようとしているだけ、その時々で態度変えるサルバの前のパーティよりましじゃない？」
「反論しづれーよ、それ」

「反論しにくい様に言ってるからね」
じゃ、さっさと取り掛かろうか。
「あいよ」
頷いたサルバを連れて一先ずギルドの奥の机を借りにいくことにした。

◆

ダンジョンの開設に必要となる書類は非常に多岐にわたる。基本的なダンジョン開設許可書に加え、等級証明書、危険通知書、更には風俗街を開く場合には風俗営業許可書なんかも欠かせない。そして、件のダンジョンの地図及びモンスター分布を確認すると、サルバが準備を完了させるのはほんのすぐの事だった。
「よし、これでオッケーだな」
「流石に手慣れてるね」
「まあ……な」
リュックサック状に梱包された荷物には軽い応急手当用の薬や包帯と、適量の食料、

予備の弾丸等が丁寧に纏められている。
「此でもB級冒険者だからな。数の多いC級ダンジョンはそれこそ腐るほど潜り込んでるし、これだけ情報があるなら見立ては普段より簡単だ」
「それもそうか」
適量の荷物。此れは意外と難しい。想定されるモンスターと予定する潜航日数。そこから、どの程度安全マージンを取るかといった基本要素に加えて、そのダンジョンで必要になるロープやピッケル等の特別な道具に、注意の必要なモンスターの対策、そういったものを取り回しに不安のない範囲のリュックサックに詰め込まなければいけない。正直、枯れたダンジョンへのアタックしか経験のない僕としてはサルバのスキルは素直に有り難かった。
「じゃ、行ってきます」
「ああ、頼んだよ」
ギルド長に頷き、サルバを連れて裏口から外に出る。目指す先は隣町ギルド管轄C級ダンジョン、トウトウ村の祠だ。

◆

トウトウ村に向かう道は概ね両端を水田に囲まれた長い長い畦道だった。この手の田舎道にしては太く整備されたその道は、此れから向かうC級ダンジョンとそれを保有する村の力を暗にではあるが静かに物語っていた。

「……」

隣をのっしのっしと歩くサルバの姿は何処までも堂々としていて、年季の入った冒険者とダンジョン閉鎖士の違いを如実に表している。幸か不幸か、今の僕としてはダンジョン閉鎖士としてのサルバにはあてにするところは何もない分、今の冒険者然としたサルバの存在は素直に有用だった。

「そういえば」

「あん？」

「サルバは枯れかけのダンジョンに潜った事ある？」

「いや、ねーな」

「あ、そうなんだ？」

「ああ。俺達のパーティは基本的には成熟期途中で次のダンジョンに移ってたからな」

「ああ、〝渡り〟だったんだ」

「まあな」
　冒険者の中には特定のダンジョンを集中的にアタックする〝留鳥〟と、様々なダンジョンを渡り歩く〝渡り鳥〟の二つがある。どちらが良いという訳ではないが、〝留鳥〟はそのダンジョンとつながりが密接になる分上がりは多く、ついでにダンジョンを所有している村とも関係が密接になる。〝渡り鳥〟は複数のダンジョンを渡り歩く分稼ぎにばらつきがある代わりに、地図の開拓などで多額の褒賞を得ることがある。
「一か所に留まってても、B級程度じゃ得られる利権もたかが知れてるしな。それよりもいろんなところを渡った方が最終的には細く長く稼げるってのがうちのサブリーダーの意見だった」
「それって、ファイターの？」
「まあ……な」
　あー、それは失礼。
「んにゃ、流石に話に出したくらいじゃどうこう思わないくらいには時間も経った」
　そっか。
「おう」
　頷きながら、サルバは水田をさーっと撫で上げた風に、少しだけジャケットの裾を握った。

「まあ、流石にパーティ追い出された直後は泣いたんだぜ？　恋人にも振られたし、つか寝取られたし」
「うん」
　それは聞いたね。
「でも、何時までもへこんでも居られねーし。それに」
「それに？」
「ちんこ生えねーと、セックスすら満足に出来ねー」
「おい」
　何、いきなりしみじみとした空気ぶち壊してるのさ。
「いや、これ割と洒落じゃねーんだよ」
　えー？
「考えてもみろ。宿の自室で一人籠って丸まってても、性欲は溜まるんだよ。具体的には白濁液が」
「きんたま付いてないじゃん」
「心のって意味だよ」
「さよで」
「で、ここからがやべーんだけど、冷静に考えてみろ。女になってオナニーするってなる

と穴に指突っ込むことになるだろ？」
「そうなの？」
「そーなんだよ」
女性の自慰とか、男にここまで実感込めて説明されるとは思わなかったな。
「だけどこう、それしちまったら、マジでもう引き返せないって思うじゃん？」
「あー、まあ分かるかな」
実際に女になった事ないけど。
「数日は我慢できるわけだ。玉もちんこも付いてねーから、漏れるもんもねーし」
生々しいなあ。
「けど、あるタイミングでこう思い始めんだよ」
「……」
何だろう、あんまり聞きたくない。
そんな僕の正直な願いが当然サルバに届く訳もなく、声を潜めたガンマンはまるでこの世の終わりの様な表情でそれを口にする。
「もう男でもいいやってな」

「うわぁ……」

どう考えても末期症状じゃん、それ。

「まあな。はっきり言って、俺自身恐怖したぜ？　だって、これまでんなこと欠片も考えたことのなかった俺が、マジで男目で追ってんだもん。別にカッコよくもねーし、女っぽい見た目でもねーんだ。とにかくやりてーってだけで快感求めて男を買う事考えてたんだよ」

「そりゃ、ビビって〝ダンジョン・コア〟求めるね」

「だろ？」

流石にうん、それは心底同情する。僕だったら普通に死にたくなるな。

「で、僕のところに来たと」

「正直、割と限界だったからな」

そうかそうか……

「何だ、殺そうとした僕の判断間違ってなかったじゃん」

「ちくしょーめ!!」

ダンジョン閉鎖の件で命狙われてたんだと思ってたら、ガチでケツを狙われていたらしい。

「どうしよう、このあたり遮蔽物無いから見られるよね……」

「具体的な検討始めんじゃねーよ!?」
「それに埋める方法考えないと……」
「怖いなおい!?」
　人の尻狙っておいてそれ言う？　っていうか、
「昨日股間狙われた時点で半分くらい殺処分予定だったからね？」
「マジすんませんしたぁ!!」
　うーん……。
「今はどうなの？」
「正直、お前と斬り合ったせいで、若干吹っ飛んだ感はある」
「じゃあ、ついでに二度と性欲必要ないようにする？」
「それはマジで勘弁してくれ」
「俺はまたチンコ使いてーんだ」と言って、本気の土下座をしてくる。うーん、
「まあ、いっか」
「良いのか」
「良くはないけど、今だと死体の処分に困るしね」
「本当によくねーな!?」
　はっはっは。

「何を今更」
　僕は血も涙もないダンジョン閉鎖士だよ？
「あ、そろそろ村が近付いてきたね」
　人通り多くなってるし。
「お、おう」
「ここからはサルバがリーダーって設定だから宜しくね」
「分かった……」
「？　どうかした？」
「お前、やっぱり話をコロコロ変えるよな」
「変わってると周りが勝手に思ってるだけだよ」
　僕にとっては変えた話は既に終わった話だからね。

三

トウトウ村に着くと、まずはダンジョンに潜るための手続きを役場で取る。これはいわゆる関所の様なもので、ダンジョンを手に入れた村にとっては一番直接的な収入源となる。

「次の方、どうぞ」

この村の手続きは一か所で一度に金貨一枚。この手の村にしては比較的良心的な価格と回数だ。

「これをお願いします」

僕とサルバのギルドの身分証を差し出すと、受付が少し驚いた顔をする。まあ、当然か。枯れたかは現時点では保留だけど、開いてから時間の経ったC級のダンジョンに、態々B級の冒険者が潜り込みにくるなんてのは、確かに珍しいだろう。まあ、次いで渡して僕の身分証、C級に成り立てのものを見れば、直ぐに腑に落ちるだろうけど。

「……ふむ。確認させていただきました」

案の定、僕の身分証を見て、新人のパーティーメンバーに経験を積ませるためかと一人合点してくれた。

「なあ」
「ん？」
「お前って結構すぐ人騙すんだな」
「真実の方が有効なときはそっちをちらつかせるよ？」
その方が簡単だし。
「ダンジョン閉鎖士って、皆お前みたいな感じなのか？」
「個別個別は分からないけど、基本的に人が悪いのは多いって聞くね」
「アルタみたいな？」
「そ。僕みたいな」
肯定すると、何とも難しそうな顔をされる。
「そんなに違和感？」
「むしろ、違和感が無さすぎて、反応に困る感じだ」
さよで。
「やっぱ、それぐらいじゃないと、あの質の悪い村の奴等とは渡り合えないのか？」
「どうかな？　特に意識したことはないし、鶏が先なのか、卵が先なのかは僕には分からないよ」
「そーゆーもんか……」

僕の返答に、納得したような、していないような、自分でも判断に困っている様子で、サルバは首を傾げたのだった。
「ん。ここだね」
そうこうしているうちに、この村のダンジョンに到着する。村の主な産業という事もあってか、分かりやすく目印もあり、ちらほらとだが他の冒険者の姿もあった。
「で？」
「ん？」
「調査すんだろ？　ここから先は何をするのか、俺じゃ分からねーぞ？」
そう言って、首を傾けるサルバ。そうだね、
「取り敢えず、普通に中に入るけど、倒したモンスターは種類と数を覚えておいて、定期的に教えて。先ずは基本的な記録を取るところから始めるから」
「ん。りょーかい。他に注意する所はあるか？」
「最低でも今日中に三ヶ所は回るから、ペース配分には気を付けて」
「よし。じゃー行くか」
頷いたサルバが「そーいや」と振り返ってくる。うん？
「お前、モンスター討伐の経験は？」
「あまり多くないね。それ以外はそれなりに」

「そーか」
　頷いて、トウトウ村のダンジョンに向かったサルバが一歩前に出る。
「サルバ？」
「あんま、無理はしないでいこーぜ。やばそうなら即逃げるくらいで」
「……」
　何か、意外な言葉を聞いた気がした。「？　どうした？　アルタ」と首を傾げてるけど……ねえ？
「いや、サルバが思いの外慎重派で驚いてね」
「そーか？」
「うん。てっきり『いくぞー！』で突っ込んで行くものだと思った」
「お前の中で、俺はどーゆー評価になってるんだよ」
　顔をしかめられたけど、うーん。
「夜中の田舎道でいきなり声掛けてくる奴。あと、酒癖が悪い」
　其れぐらいしか、判断する為の情報持ってないし。取り敢えず、どっちも短気な人間に有りがちな特徴だ。
「……」
「……」

あ、何か胸押さえてる。
「うん、まー、確かに、お前から見たらそーだよな。うん」
そ。じゃあ、行こっか。
「おー……」
頷いたサルバが持つ松明の隣で、僕は滅多に踏み入ることのない枯渇前のダンジョンに、一歩踏み出したのだった。

パァン！　という発砲音がダンジョンの奥で反響する。
「此で、ゴブリンが十二だな」
硝煙が僅かにくゆる銃口を叩きながら、サルバが肩越しにそう言った。ゴブリンが十二ね……。
「ふむ……」
今、僕とサルバがやっているのは定点観測。特定の時間あたりにその場所にやって来るモンスターの種類と数を記録し、ダンジョンの危険度を測定する簡易的な調査方法だ。
「何か分かったか？」

都合十二匹のゴブリンと二匹のホブゴブリンを丁度十四発の弾丸で仕留めたサルバが額の汗を拭……おうとして、前髪を退けるのに四苦八苦していた。理由が理由だけに切ればいいとは気軽にも言えないけど、邪魔だよね、あれ。

「いや、流石に今の数字だけだと一寸判断がつかないね」

「そーか」

「でも、観測自体は時間も十分だし、一旦引き上げようか」

「おし。じゃー、戻るか」

頷いて歩き出したサルバに続いて洞窟の入り口に向かう。さて、どんな結果が出てくるかな……。

◆

ダンジョンから戻り、村で宿を取ると一先ず酒場の方が閉まる前にと食事を済ませることにする。

「んぐっんぐっんぐっ……ぷはぁぁぁぁぁ!!!」

「……」

給仕さんが持ってきた大ジョッキを受け取ると、一息に飲み干すサルバ。前回の悪酔いを思い出すと、正直心配になるんだけど……あんまり赤くなった様子もないし、もしかしなくてもこれが普段のペースみたいだ。

「んお？　アルタ飲まないのか？」

「まだ、仕事が残ってるからね」

これから、サルバが取ってくれたデータの付き合わせと分析をする必要がある。

「そうか……」

「サルバが飲む分には止める気はないから、好きにしてもらって構わないけれど？」

サルバの仕事はもう終わってる訳だし。

「んー、ああ、いや、やっぱ止めとくわ」

「そう？」

「誰かと居るのに、そいつが飲めない前でパカパカやってもな」

意外。正直、サルバはその辺あんまり、気にしないと思ったんだけどな。

「ま、機会なら、まだ幾らでもあるだろうしな」

そう言って、空になったジョッキを置くと、サルバはちょいちょいとテーブルの上の腸詰めをつついた。

「……」

何となく、静かな空気の中で料理を進める。お互いに視線も言葉も交わさなかったけど、不思議と嫌な気分にはならなかった。

が、流石にこれは場所が悪かった。五月蝿いのがデフォルトの場所で静かに飲んでいるのは却って目立つ。しかも、その片方が目元こそ伺えなくても何となく美人だと分かる佇まいをしている。と、なれば、当然他の酔っぱらいに目を付けられるに決まっている訳で。

「あ……」

切欠は些細なことだった。丁度、二人揃って食事が終わるかといったタイミングで、僕の側にあった魚の干物に手を伸ばした瞬間、サルバが目測を誤ってシャツの中でもそれと分かる胸をテーブルの上のグラスに引っ掻けちゃったのだった。

「おっと」

「やべ」

カシャンと音を立てて倒れる杯の音が、男の野太い声ばかりの酒場でやけに通りがよく響いた。

「……」

「……」

気まずい。何て言うか、凄く気まずい。男の体の時だったら、そもそもしてない失敗な訳で……。

「追加……頼む？」

「……ああ。頼む」

一先ず、お互いに見なかったことにして追加の水と料理を頼む事にした。が、

「よう、災難だったな？」

何故か杯を持った、僕らよりも少しだけ年上の冒険者が突然間に割って入ってきた。

「サルバ、知り合い？」

「いや、知らねえな。誰だてめー？」

妙に馴れ馴れしいその冒険者に、一瞬サルバの知り合いかとも思って聞いてみたけど、答え否だった。

「ああ、知らないか？　俺はパブ。今、この村のダンジョンを専門にしているB級冒険者さ」

「「……」」

そう言って、パチッとウィンクをしてきたがやっぱり聞き覚えが無かった。どうやら、不思議そうな顔をしているサルバも同じらしい。……ギルドの名簿探せば分かるかな？

「……んで？　そのB級冒険者様が何の用だ？」

訝るようにサルバが首を傾げる。ホント、何の用だろ。

「んー。用って程の事でもないんだけどさ。もし良かったら、これから僕達と飲まない？　って思ってね」

そう言いながら、アゴヒゲの冒険者はにっと黄色い歯を見せた。

「はぁ？」

対するサルバは「何言ってんだこいつ？」と言わんばかりに首を傾げる。うん、それには同意見。

「何言ってんだお前？　酔っ払って……ああ、酔っ払いだったか」

一瞬、言い掛けた言葉がむしろ真だと気付いて納得するサルバだったが、その酔っ払いは堪えた様子もなく「ひどいなー♪」と笑って、節くれだった手でサルバの肩を抱き寄せた。

「てめっ!?」

「……」

不味いかな、これ。

声を荒げるサルバと、酔っ払いに気付かれないように、テーブルの上の食器の一部を拝借する。さて。

「サルバ。帰るよ」
　いい加減、長くなりそうだし、さっさとこの場から出ていくべきだろう。まだ、明るい酒場に入った経験は無かったけれど、こうも面倒臭かったとはね。……って、酷く緩慢な動作で、剣を突き付けられたんだけど。
「……どういうつもりですか？」
　一応、聞くだけ聞くけど、無駄だろうなあ……。
「見てわかんねーかなー」
　酔っ払いって事と、酔っ払いの戯言や異常行動を理解する意味はまず無いという事は分かります。
「君のパーティーのお姉さんは僕達といいことすんのー♪　分かったらガキは宿で寝とけ」
　にへらっとした笑いから、一転獰猛な笑みを浮かべるアゴヒゲの冒険者。というか、達？　……ああ。
「よー、良い娘居たかよパブ？」
「困るぜ、今日は何処の娼館も良い嬢が予約済みってんだからよー」
「わりぃわりぃ、今行くわ」
　男が振り返った先に居たのは、見るからに屈強な鎧の男と、長い金髪を無造作に流し

た優男風の魔術師の二人。多分、同じパーティーメンバーなんだろうけど、身形の良さの割に何処と無くひげ男と同じく退廃的な雰囲気を纏っていた。さて、止めるべきか、どうすべきか。変に目立ってもなあ……。

「さ、行こうか♥」

「あ」

終わった。

酔っ払いと、青筋を浮かべながらギリギリで我慢していたサルバを見比べて、割って入るべきか思案していたけど、もうだめだ。

既にべろんべろんだったところに、仲間がやって来て、完全に怖いものなしになった男が、よりにもよってサルバの胸を力任せに揉み潰したのだ。

「何さらしてんだこらあああああ！」

振り抜かれるサルバの膝

鋭角にぶちこまれたニーキックが容易く男の睾丸を蹴り潰す

「がびょっ!?」

股間を撃ち抜かれたB級冒険者は間抜けな悲鳴と共に白目を剥いて崩れ落ちる。取り落としたジョッキが音を立てて砕け散った。うわ、痛そう。

「その痛み分かってて、やる？」

「分かってるからこそ、やるんだよ」
　そりゃそうだ。
「「このあまっ!!」」
「っと」
　仲間をやられて激昂したのか、魔術師と戦士がそれぞれの得物を取り出した。その姿に、周囲から悲鳴が上がり、まだ駆け出しらしい子供達がドタドタと酒場から姿を消した。
「残念ながら、あまじゃなくて、やろうの方なんだけどねっと」
　降って沸いた鉄火場だけど、激昂してくれたお陰で、ぎっておいたナイフとフォークが無駄にならずに済むね。
「ぎゃっ!?!?」
「ソカロ!?!」
　うん、良好良好。放り投げたナイフは狙い違わず魔術師の方の右耳を切り飛ばす事に成功する。此で激痛で詠唱は直ぐには出来ないだろう。今のうちに……
「動かないでくださいね?」
　サルバが入念に睾丸を踏み潰した結果、玉なしになった冒険者の髪を掴んで身体を無理矢理引き上げる。うわ、粘っこい髪してるなあ。まあ、良いけどさ。

短く息を繰り返して、何とか痛みを逃がそうとしているインポの眼球に、残ったフォークを突き付ける。

「……！」

「ああ、剣からも手を離してください。三つ数えるまでに離さなかったら……一、二」

「待て待て!?　何をする「三」

はい、時間切れ。耳切断追加。

「ぎっ!?」

股間を抑えながら必死に痛みを逃がしていたアゴヒゲが汚い悲鳴を上げる。

「躊躇なくやったな」

「此処で躊躇してると、脅しが単なるこけおどしになっちゃうからね」

「そりゃそうだけどさ。逆に交渉の余地が無いと思われるんじゃねえか?」

「それは、お互いに妥協しなければならない場合だけの話だよ。今回は交渉じゃなくて、降伏勧告だから。それも、単なる時間と資源の節約目的のね。最悪実力行使でも構わないんだしさ」

今回は面倒でも、最悪目的は達成出来るしね。なら、パパパッと脅すのは全然アリでしょ。

「ま、それもそーか」

サルバが同意した様に頷いたのを確かめて、一人だけ無傷な戦士の前にしゃがみこむと、その眼球に浮かんだ恐怖ごと、瞳の奥を覗き込む。
「で、確認なんだけど、続きやる？」
最後通告として確認をとると、何故かブンブンと首を振って、酒場から逃げ出してしまった。途中でテーブルに躓いて、ガチャンガチャンとジョッキを割っているけど……ま、いっか。
「で、こいつらどーする？」
「んー」
右、耳玉無しひげ。左、耳無し魔術師……。
「別に、僕らが何かする義理もないし、放置でいいでしょ。それよりお会計しないと」
「まあ、そうだな……あ」
「あ」
不意に漂ってきた嗅ぎ慣れた悪臭見ると、案の定二人とも失禁している。……ふむ。
「酒場のお姉さんに謝っておきなよ」
「他人事だなー。相変わらず」
「実際他人だしね。彼らの股が緩いのは僕のせいじゃないから」
「違いない」

サルバは肩を竦めてくつくつと笑った。
僕は念のためテーブルに残ったフォークを取った。
「「ぐひっ!?」」
何故か怯えられた。
「ま、いいか。お会計お願いします」
「あ、は、はいいっ!!」
お店のお姉さんに伝票分のお金を支払うと、酒場を後にする。
「み、耳削ぎ……」
背中の方で、そんな声が聞こえた気がした。

◆

酒場を出て宿に戻ると、早速今日集めた情報の整理を始めることにした。窓から入り込んでくる村の酒場や娼館の仄明かりを頼りに広げた今日の調査結果を並べ、ざっと見渡して不振な点を軽く洗い出す。と、

「……サンキューな」
　不意に二つ並んだベッドの上で軽く身体を休めていたサルバが不意にポツリと漏らした。
「？　何が？」
「さっきのこと。加勢してくれただろ？」
「ああ」
　それね。
「別に、僕が手を出さなくても、サルバなら対処できたでしょ？」
　完全に僕の行動は時間の節約以上の意味はなかったし。
「まあ、そうなんだけどな」
　そう言って、ふと口許を緩めながら、サルバが頭を掻いた。
「前のパーティーだと、あんまりそういうのは無かったからな……」
「ふーん」
　何だろう？　急に。
「パーティーのバランス考えたら、変でもねーんだろうけど、他のパーティーとのいざこざって、俺だけ一人で殴りかかってたから」
「……」

メイジは手加減利かないだろうし、プリーストはそもそも、戦闘向きじゃないしね。でも、ファイターも？

「あいつは、他二人の守り」

そう言って、サルバは肩を竦めた。そっか、他二人の護衛か。……。

「それ、普通にハブられてない？」

「言うなよ。ただでさえ、今振り返るとそうとしか思えねえんだから」

薄々そう思っていたのか、サルバはぐったりと肩を落として呻いた。あはは……。

「まあ、俺のパーティーでの立場は置いておいてくれ。一応そういうわけで、アルタには感謝してるんだ」

「はいはい」

まあ、そういうことなら、素直に受け取っておこうか……。

「……」

「……」

「……」

「……」

ふと、静かになった室内で、備え付けられた机の上に、筆記用具と数枚の紙を置く。中に記されたのは僕の前にこの村のダンジョンを調査したダンジョン閉鎖士が書き残し

た記録と、二三の注意書だ。その隣に、今日記録したダンジョンに出てきたモンスターのデータとキルカウント、そして、ドロップアイテムにその他気付いたことを書き足していく。調査箇所に合わせてそれぞれ転記を終えると、一息はいて地図全体の内容を確かめる。

「……」

「？　何か、見付かったのか？」

「見付かったって程じゃないけど……」

後ろで首をかしげたサルバに、記録した地図をひっくり返して見せる。

「……？」

その中身を（多分）しげしげと確認したサルバは「んん？」と首をかしげた。

「数字が細かくて、分かりづらいでしょ？」

「ああ」

「ま、そうだよね」

こくこくと頷いたサルバの反応は正常だろう。

「この、ダンジョンの地図に書かれた三ヶ所の点が去年の確定モンスター密度。そして、左の数字がそれぞれ、僕の前のダンジョン閉鎖士が二回に分けて測定した数字に今回僕達が測定した数字だ。そして、これ等の数字なんだけど」

「ああ」
「全部去年の確定密度よりも、高い数字を出しているんだ」
「ふむ……」
僕の回答に、顎に手を当てて考えるサルバ。言わんとすることは分かるが、今一腑に落ちないってところかな？
「言われれば、そうかって気もするけど、そこまで驚く事なのか？」
「割りとね」
まあ、そういう反応になるよね。
「参考資料として、一寸これを見てほしいんだけど」
「ん？」
僕が渡した二枚目の地図にサルバが首をかしげる。そこには、この村のダンジョンとさっきの数字という、最初の地図と瓜二つな内容が書き記されている。
「これは？」
「去年の測定地図の写しだね。右の数字は一昨年の確定密度」
書き込まれた地図の内容に、サルバが訝るようにもう一度首をかしげた。長い前髪で分からないけれど、多分その奥では不思議そうに目を細めているだろう。
「この地図も分かりずらいんだけど、まずモンスターの密度を見ると、結構これってばら

つきが出るのが普通なんだ」
「ふむ……」
「具体的にはモンスターの数は前年の密度を越えたり越えなかったりだね。実際、去年の地図の方は一昨年の確定密度を越えたり越えなかったりでしょ？」
「言われてみれば、確かにそうだな」
　言われて気づいたと、軽く頷くサルバにその辺の事情を説明する。
「まあ、これはモンスター自体が一定の法則で生きている訳じゃないから、仕方ないんだけど、そういった事情や不正を防ぐ目的もあって、ダンジョンの調査には複数人のギルドの人間が潜ることになる。そうして出した平均値が密度になるわけ。此れを毎年二回定期的に抜き打ちかつ覆面で行う」
「結構、手間かかってるんだな」
「まあね」
　感心したように頷いたサルバに、僕は軽く肩を竦めて返した。
「モンスターの数はダンジョンの盛衰の重要な指標だからね。いつ閉鎖するかはギルドや商人、それと、その土地を治める貴族様なんかには常に懸案事項だし、単純にダンジョンの資産価値を計る指標にもなる。で、この地図の問題は」
「確実に、モンスターの密度が高くなってるってこと……か」

「そーゆーこと」

しげしげと数字を眺めるサルバの確認に肯定を返す。

そう、この数字の測定値はある程度ぶれる。そのぶれを平滑にして実態を割り出すために複数回の測定と平均値の割出をしているわけだけど、その過程で出てくる一回の測定値が前年の平均密度を上回ることは珍しくない。けれど、全ての地点と全ての測定値で前年を上回ることもまずないと言っていい。たとえ、同程度の規模が前年から維持されていたとしてもだ。それがないということはだ、

「この、数字は確かに微差だけど、見た目の差以上にモンスターの密度は濃くなっている。はっきり言って、異常だ」

「……」

僕の断定に、サルバが神妙な雰囲気を出す。長い前髪の下で唯一露になった唇が、小さく〝へ〟の字を作っている。だけどね、

「もう一つ、異常な事があるんだ」

「まだあるのか？」

「うん。と、言っても趣旨は完全に同じ事だけどね」

今度は地図とは違う、曲線の入った紙を取り出す。

「これは？」

「この村のダンジョンの平均モンスター密度推移」
　回答を予想していたのか、サルバは小さく頷く。
「通常、ダンジョンの平均モンスター密度はこういう曲線を描くんだ」
　グラフの余白に急な上り曲線、頂点での平行線、そして、最後に緩やかに始まり、急激に落ちる下降曲線を薄く描く。見慣れない、けれど、直感的に分かりやすい、ダンジョンの基本曲線をサルバは興味深げに覗き込んだ。
「ダンジョンの入り口が見付かると、一～二週間くらいで、ダンジョンは完全なものになって、入り口からちらほらとモンスターが見えるようになる。それが、ここ」
　最初の上昇線と横軸への平行線の折れ目を叩く。
「通常、冒険者へのアタック許可が降りるのはこのタイミングからだね。でないと、ダンジョンが十分に育たなくなるから」
「そうなのか？」
「そうだよ」
　これは知らなかったらしく、サルバが驚いたように顔を上げた。
「あんまり知られてないせいか、時々あるんだけどね。他の冒険者を出し抜こうとした下級の冒険者が村人に賄賂を払って、解放前のダンジョンに潜って、ダンジョンの寿命を縮めちゃうんだよ」

これは、都市部だと結構知られている話。と、いっても理由は割りと異なったりする。

「通常、他にお金になる産業がない村ではダンジョンは天恵だから、なるべく寿命を長く持たせようとするし、当然不正をはたらいた村人は村八分、或いは賠償になるんだけど、既に経済的な地位が確立している都市部だと、かえって邪魔になることもあるからね。そういう場合は村とは逆に積極的に人を入れて、さっさとダンジョンを潰しちゃうんだよね」

こういった話は主に政治都市などで聞かれる話だ。

「で、成熟して人が入れるようになったダンジョンなんだけど、此方は此方で注意しなきゃいけない事があってね。解放してからのダンジョンというのは、基本的にはそこを頂点に資産価値がどんどん目減りしていくんだ」

「そうなのか？」

何となくぴんとこなかったのか、不思議そうに小首をかしげたサルバに「そうだよ」返す。

「この、一見平坦に推移している測定結果も、実際には数字に現れないだけでじわじわとモンスターは減っていてね。この下降線段階はそれが、顕在化したに過ぎないんだ。理由は分かる？」

「何だ？　んー。分かんねえな。ダンジョンから産まれるモンスターが減るとか？」

「半分正解。ダンジョンはサルバの認識通り、成熟を最後にどんどんモンスターを産み出す力が衰えていく」
「もう半分は何なんだ？」
「もう半分は簡単。モンスターって基本的に繁殖能力を持ってないんだよね」
「そうなのか？」
僕の回答に、サルバは驚いたように身を乗り出してきた。
「サルバみたいな普通の冒険者は、普段モンスターはさっさと狩っちゃってるだろうから、あんまり知らないよね。でも、事実だよ」
そう、ダンジョンのモンスターが仮に繁殖能力有していたら、ダンジョンの繁殖能力が失われても、討伐に制限を設けることで、ダンジョンを永遠に維持することも可能だ。ま、そうだとすると、ダンジョン閉鎖士なんて仕事もなくなっちゃうんだけどさ。
「ん？　なあ、アルタ」
「なに？」
「お前はそういうけど、オークとかサキュバスはどうなんだ？　あいつらって、確か人間を犯して自分達の子供産ませてただろ？」
うん、その指摘もごもっとも。
「確かにサルバが言ったオーク、サキュバス、それとゴブリンの三種は繁殖能力を持たな

いモンスターのなかで例外的に人間を犯すことで子孫を作ることができる。けど、それって一代か二代が精々なんだよね」
「そうなのか？」
「そうだよ。まあ、人間から産まれたゴブリンなんかは大抵さっさと殺されちゃうから、殆どその辺知られてないけど、唯一、サキュバスだけは都市部で好事家に取引されてるから、結構この話も知られていたりするよ」
「サキュバスを好む好事家？」
「愛人が欲しいけど、下手に子供を増やせない富豪なんかの事」
「あー、そういうことか」
話が見えたのか、サルバは納得半分、羨望半分で頷いた。
「都市部の金持ちや成金なんて、基本的には子供に残す遺産と貪る女体の事には神経を使う毎日だからね。特に年取ってから子供なんて生まれたら相続で大騒ぎ確定だし、場合によっては既にいる子供に自分も命も狙われかねない」
「その点、繁殖能力の無いサキュバスなら問題なしってことだな。富豪の親類も子供を産めないサキュバスならむしろ歓迎するって寸法か」
「正解」
そう。だから、ダンジョンのモンスターが大抵は殺害された後にギルドに引き渡され

るのに対して、サキュバスは討伐前が一番高値だったりする。
「話を戻すと、繁殖能力を持たないモンスターと、あっても先細りが確定しているモンスター。そして、衰えるダンジョンと、全部ダンジョンは衰退に向かうことを指し示しているよね。この辺は家とかと同じかな」
「なるほどなあ……」
そう呟いて、サルバは得心がいったようにこくこくと頷いた。
「つまり、下降曲線に入った時点で、ダンジョンはもう手遅れなんだよね」
そう、目に見えて、それこそ、ダンジョンに潜っていない村人が気付くほどに衰退した頃には、大抵のダンジョンは維持が不可能となっている。まあ、そもそもが維持しようって考えること自体が間違いなんだけどさ。
「で、それを踏まえて、これ」
僕は広げた紙に書かれた中途半端な下降曲線を指差す。
「……見事に下降曲線に入ってるな」
「でしょ？」
いくら、測定にばらつきがあるとはいえ、隠しきれないダンジョンの衰退。端的に言って手遅れな状況だ。けれど、
「このグラフに今回の結果をいれると……こうなる」

そのグラフに書き記された中途半端な下降曲線。その右側に今日測定した測定値の平均をとって点を打つ。その点とグラフの端を結べば、最早それは明白だった。
「増えてるね」
「増えてるな……」
三度の測定値。つまり、一年半で下降を繰り返したこの村のモンスター密度は既に回復の見込みがない段階だった。というより、回復自体がまやかしなんだけどね。解放後にモンスターの密度が上昇するのは下降前が限度だし。総合的に見て、このダンジョンの現象は……。
「妙……。いや、確実に何かが起きているね」
「だな」
ベッドの上で胡座をかいたサルバがこくりと頷いた。
「それが、人為的なものなのか、それとも自然的なものなのかは分からないけどね」
「……」
僕が肩をすくめると、サルバも考え込むように唇を尖らせた。
「まあ、今日分かったのは此処までかな。後は突っ込んだ実地調査と、場合によって違法な捜査も必要になるかもしれないね」
今後のことを思案しながら、窓の外を見る。既に陽が暮れて尚、尽きることのない灯

りの数々。ダンジョンの恵みを受けた小さな村が、それを糧に得た輝きそのものに見えた。けれど、

「此れが実かまやかしか……暴きたてるのが今の僕の仕事だ。嫌気が差したら辞めても良いよ？」

僕がそう水を向けると、サルバは苦笑混じりに肩を竦めた。

「そうしたら、直ぐに命狙いに来るだろ、お前」

「ま、その通り」

今、村の人間に、ギルドがダンジョンに不信感を持っている事を知られたら、それこそ話が終わっちゃうからね。

「それに、俺は自分の身体を元に戻すのが目標だからな。そんな事にかかずらっても居られないってのが、正直なところだ」

「そ」

それならそれで、まあいいか。

「それより、そろそろ寝ようぜ。明日もダンジョンに潜るんだろ？」

「冒険者の夜はアホみたいに早いか、くそみたいに遅いかの二択だからな」と呟いて、さっさと布団に潜り込むサルバ。僕も部屋の灯りを消して、隣のベッドに潜り込む。既に、隣からはスースーという静かな寝息が聞こえてくる。何て言うか、清々しい程の寝

付きの良さだ。
「ん。おやすみ……」
僕も、真っ暗になった天井を見上げながら、何となく呟く。ギルドつきのダンジョン閉鎖士になってから、初めてこの言葉を口にした。

◆

翌日、サルバと連れ立ってダンジョンへの入り口に着くと、
「なっ!?」
「あ、あいつらは!」
「「……」」
何か、村人と冒険者含めて妙にざわつかれた。
「……行くよ」
「おう」
別に興味もないから、頷いたサルバを促してさっさとダンジョンに潜ることにする。

―あいつが……―
―ああ、間違いない―
―〝耳削ぎ〟アルタ……―
「……」
「アルタ？」
「何か、変なあだ名をつけられた気がする」
隣で首をかしげるサルバに肩をすくめると、「ああ、ぴったりだな」と笑われた。そうかな？
「だってお前、直ぐに他人の耳削ごうとするだろ？」
「あれは単に可能な限り人的資源を破壊せずに脅すための方策でしかないんだけどね」
村の人間は僕のものじゃない。基本的に全てその土地を治める貴族の所有物ということになる。そうなると、脅しをするにしても狙える場所は限られる。かといって実際に手を出さなかったら、それは本末転倒。脅しが脅しの意味を成さなくなる。
「他の候補は鼻だけど、向き的に鼻より耳の方が刈り取りやすいだけだしね」
結局、耳を削ぐのは妥協の結果にすぎないし、そんな労力掛けずに済むならその方が遥かに良い。
「ま、だろうな」

僕の回答を予め予想していたのか、サルバはくつくつと喉を鳴らしながら肩を竦めた。

「けど、表看板として付く渾名は案外悪くもねーさ。少なくとも、〝耳削ぎ〟なんて呼ばれてる奴に積極的に近付く奴はいねーだろーし、恫喝するときにも役に立つだろ？」

「それもそうだね」

言われてみれば、確かにその通り。

「それより、そろそろダンジョンもモンスターが出てくる頃合いだ。気を引き閉めろよ」

「ん」

不意に獰猛に笑ったサルバが銃を抜くと、間髪入れずにぱぁんっ！という発砲音が暗いダンジョン内に響き渡る。どさりと崩れ落ちた小さなゴブリンを前に、僕も短刀を引き抜き突っ込む。手早く耳を刈り、怯んだところをさっさと首をはねる。モンスター、特にゴブリンは死んだふりが巧いから気を付けないとね。

「やっぱり、〝耳削ぎ〟じゃねーか」

小刀に血振りをくれると、ホルスターに拳銃をしまったサルバがそう言って笑った。

「慣れてるってのはあるかもね」

僕は笑わずに肩を竦めた。

まあ、効率がよければ〝耳削ぎ〟でも良いし、悪いなら否定するだけか。

「？　どうかしたか？」
　内心、ひとりごちてると、先に歩き出したサルバが少し振り返って小首をかしげた。
「別に何も」
　僕は適当に首を振って、サルバの左側に立つ。何時でも片刃剣を抜けるようにしながら、ふと沸いた疑問を口にする。
「そういえばさ」
「あん？」
「サルバってそれ前見えてるの？」
「……」
　長い前髪。サルバの容姿を言い表すなら真っ先に上げることになりそうな特徴はどう見ても暗い洞窟では邪魔に見えた。というか、それでよく的に当てられるね。何か秘密でもあるのかな？
「いや、くっそ見辛い」
「ダメじゃん」
　どうやら、そんなものは無かったらしい。
「ていうか、それじゃあどうやって当ててるの？」
「んなもん、勘に決まってるだろ」

「……」

さも当然そうに言われた。そっかー、勘かー。

正直、知りたくなかった。というか、昨日もそうだけど、僕結構至近距離でパンパンされちゃってたんだけど。

「お前なら、当たっても問題ないと思ってな」

「はっはっはー」

このやろう。

「あんまり調子に乗ってると……切り落とすよ?」

「耳をか?」

「いや、取り戻した直後のちんちんを」

「止めろよ。おい」

サルバは股間を抑えて後ずさった。

「っと」

不意にちりついた殺気に、短剣を抜くとサルバに向けて投擲する。

「っ!」

サルバがしゃがみこむのと同時に「ぎゃんっ!?」という悲鳴が響いた。

「……」

「……」

どさりと崩れ落ちた、眉間から短刀を生やしたホブゴブリン。どうやら、このダンジョンはゴブリンが多目らしい。

「！」

不意に、顔を上げたサルバが僕に向かって愛用の拳銃を発砲する。振り返ると、此方ではぎちぎちと爪を鳴らす大きな蜘蛛のモンスターがいた。

「呼吸は合ってきたな」

何の事も無さそうにホルスターに銃を戻してるけど、普通にかすってるんだよな。というか、頬痛い。ま、良いけどさ。

「……行こっか」

「おー」

とりあえず先を促すと、サルバが気のない返事をしてきた。

「で、今日の狙いは？」

「奥」

そう、奥だ。

「ダンジョンの寿命が下り坂なら、〝ダンジョン・コア〟が顕在化を始めてる可能性があるからね。それを確かめたい」

もしかしたら、そこにヒントがあるかもしれないしね。

「りょーかい」

頷いたサルバを連れて、少し狭くなった奥への道に向かう。と、

「ぬ!?」

「サルバ？」

不意に上がった悲鳴に振り返ると、身体を横向きにしたサルバが青い顔をしている。

「どうしたの？　何かあった？」

「……」

確かめても、答えることもなく、ただただ冷や汗を流している。んん？

「……」

「……」

「……」

「……」

長い、本当に長い沈黙。けれど、傍目から見ていても、サルバが物凄い葛藤と焦燥を抱えているのが分かった。いや、何で？

「……た」

そのまま、沈黙が延々と続くかと思われたころ、不意にサルバがポツリと何かを漏ら

した。んん？
「……かっ……た」
「……」
聞こえない。けど、何か鬼気迫る顔で言われると、こっちも聞きずらいんだけど……。
ねえ、
「どうしたの？」
「……」
改めて尋ねると、苦り切った表情の末に、サルバが諦めたように溜め息をつく。
「……胸が引っ掛かった。助けてくれ」
「どう反応すれば良いのさ」
うん、それは言いたくないよね。というか、〝男〟としては胸が引っ掛かって、身動きがとれないとか、肉体的にも精神的にも罰ゲームだし。うん、
「切り落としてみる？」
「止血が出来るなら、悪くない案だな」
ま、そうだよね。……どうしよう？
このままサルバには引き返してもらうって手もあるけど、その場合普通のダンジョンに潜った経験の薄い僕のリスクが無駄に大きくなっちゃうしね。

「……なあ」
思案していると、渋い顔のサルバがポツリと口を開いた。
「ん？」
「これ、押し潰してくれないか？」
心底、本当に心底嫌そうにそれを指差す。うん、まあ、
「それしかないよね」
サルバの指差す先。丸くて大きな、本来付いてない筈のそれ。要するにおっぱい。
「仕方ないか……」
体勢の関係上、サルバ本人がそれをすると、今度は背中が支えちゃうしね。
「潰すよ」
「おう」
サルバが頷いたのを確かめて、岩と胸の間に手を入れる。
「せーの」
「!!」
掛け声と共に胸を潰すと、それに合わせてサルバが両足を踏ん張る。瞬間、実にあっけなく、スポーンと飛び出てくるサルバ。巻き込まれてもろともに倒れ込むと、背中の衝撃に次いで、サルバの無駄に大きな胸が顔面に覆い被さってきた。うん、邪魔。

「ああ。むっむむむむ（邪魔。さっさと退いて）」

顔の上の重りを叩いて抗議すると、「いでで」と悲鳴を上げながらサルバが上から居なくなる。ふぅ……。

「全く、一応おっぱいだぜ？　大切に扱えよ」

僕が叩いたおっぱいをさすりながら、そう口を尖らせるサルバ。けどねえ？

「男のおっぱいの何を尊重しろって言うのさ」

「そりゃそーだ」

男としては単なる重りでしかないしね。

「やっぱり、いつか切り落としてーな」

「それより先に男に戻るでしょ？」

「だな」

頷いたサルバと共に立ち上がり、更にダンジョンの奥へと目を向ける。先の狭い通路の反対側と比べ、一段と暗くなったその奥から、いっそう強くなった獣の臭いが鼻を突いた。

四

さて、ダンジョンの調査も獣臭さと共に一歩深部に踏み込んだ感覚になり、いよいよ気を引き締めないといけなくなった訳だけど、それよりも先に一つ済ませないといけないことが出来た。

「じゃ、行くよ？」

「おう。頼む」

こくりと頷いた上半身裸のサルバの背中に足を掛ける。と、言ってもいやらしい理由ではない。どちらかといえば、極めて切実な物理的理由によるものだった。要するに、

「「いっせーの、せっ!!」」

さっき洞窟に引っ掛かったサルバの胸を潰す作業が必要だった。

掛け声と同時に全力で踏ん張るサルバの白い背中を足で押しながら、その胸にぐるぐる巻きにした治療用の包帯を力一杯に引っ張る。

「んんんんん！」

「ぐぬぬぬぬ！」

二人揃ってぷるぷると震えるけれど、中々上手く潰せない。元々サルバ本人にとって

は不本意だろうけど、並の、それこそ普通の酒場の看板娘や村付きの娼館の女の人では端から太刀打ち出来ない体つきな事に加えて、残念ながら僕はそっち方面の知識がなく、サルバは完全に脱がす専門だった。

　結局、正しいさらしの巻き方も知らない男二人が顔を突き合わせて出せた結論は、とにかく治療用の包帯でぎちぎちにおっぱいを固めるしかないという、何とも力任せな手段だけだったのだった。で、

「どう？」

「滅茶苦茶苦しいな。これ」

　完成した簀巻きに、サルバはうっぷと吐きそうな顔をする。まあ、そうだよね。顔より少し小さいだけの肉の塊を無理矢理胸に押し付けているわけだし。

「動きづれーし、肉がへばり付き合って気持ち悪いし、皮つっぱって痛いし、ホント安直に巨乳好きやってたのが申し訳なくなるな」

「他人事だからこそってのはあるよね」

　苦しそうに顔を歪めながら、酒場で調子に乗って食べ過ぎた冒険者の様によたよたと歩くサルバの声は当然ながら実感が籠っていた。というか、昨日の玉潰れ男に絡まれたことといい、今日といい、サルバの運気って胸に吸われてるんじゃないかな？

「言うなよ。薄々そんな気がしてたんだから……」

「……」

項垂れるサルバに肩をすくめて返事をすると、さっさと奥を目指すことにする。別にサルバを慮るわけではないけれど、こうも臭いのきつい所に長くいるのはあんまり気分が良いわけでもないしね……。

「大丈夫か？　アルタ」

「ん。へーき」

いけないいけない、先ずはダンジョンに集中しないとね。

「そういやアルタ」

「ん？」

「〝ダンジョン・コア〟って、お前達はどうやって見つけてるんだ？」

ふと、思い出したように首をかしげたサルバに、僕は「ああ」と頷く。そういえば、それを話していなかったっけ。そうだな……。

「画一化された〝これ〟っていう方法はないかな。多分」

「そうなのか？」

「推測だけどね」

世界中のダンジョン閉鎖士やギルドの人間を知っている訳じゃないから。

「実際のところ、ダンジョン閉鎖士が〝ダンジョン・コア〟を関知する方法は千差万別み

たいなんだよね。理屈も理論もなく、単に〝何となく分かる〟上に、〝感じ方は千差万別〟。ギルド長のおばば居たでしょ？」
「ああ」
「僕が渡した〝ダンジョン・コア〟を舐めてたのは覚えてる？」
「そういえば、そんなことしてたな」
僕が前のギルド長の事を挙げると、サルバは思い出したように顎を撫でた。
「あれ、〝ダンジョン・コア〟が本物かを〝味〟で確かめてたんだよね」
「〝味〟か……」
「うん。本人の言葉を借りるなら『意外と濃厚なチーズの味がする』だってさ」
「チーズって……」
サルバが「マジか……」って雰囲気で頭を掻いた。まあ、普通はそういう反応になるよね。僕も正直信じられない部分があるし。何なんだろうね、〝ダンジョン・コア〟ゴルゴンゾーラ味って……。
「なんつーか、調味料には一生困らなそうな味覚だな」
「代わりに口内炎に悩まされる人生になりそうだけどね」
「それな」
首をかしげたサルバに僕は肩をすくめ返した。

「それじゃあ、アルタはどうなんだ？」
「僕？」
そういえば言ってなかったっけ。
「僕は嗅覚。臭いだね」
「匂いか」
「いや、匂いじゃなくて臭い」
「分かりづらいな」
「読みは同じだからね」
ポイントは良い匂いか、悪い臭いか。
「ぶっちゃけダンジョンて臭いんだよね獣の臭い」
「随分ぶっちゃけたな」
「特に〝ダンジョン・コア〟は最悪。なめし皮のなめし損ないで、ちょっと残った肉が腐敗している感じの臭い。正直、好き好んで〝ダンジョン・コア〟に触れる人間の気が知れないよね」
「それ、お前も含まれるじゃねーか」
「そうだよ？」
それ以外の意味があると思う？

「……」

何か物凄く呆れた目で見られているけど、そんな目で見られる理由あったっけ？

……ま、いっか。

「じゃ、奥に進もうか」

「おう」

身繕いを終えたサルバを促して、ダンジョンの更に奥へと向かう。さてさて、鬼が出るか蛇が出るか……。

◆

ダンジョンの調査は大別すると、特定の地点でダンジョンの状態を観測する定点観測と、不規則にダンジョンを回って確認をする巡回観測の二つがある。概ね、〝ダンジョン・コア〟を察知する能力のないギルドナイトが担当するのは前者で、僕のようなダンジョン閉鎖士が担当するのは後者になる事が多い。まあ、大抵の場合は定点観測で事が足りるみたいだし、実際僕も枯渇前のダンジョンの観測に駆り出されたのは此れが初め

ての事になるわけだけど。
「っ!!」
何が言いたいのかというと、
「アルタッ!!」
慣れてないっていうのがここに来て結構大きな負荷になっちゃっているのだった。
サルバの叫び声が反響し、次いで聞こえる破裂音。弾け飛ぶ大きめのダンジョンウルフの頭蓋骨に、即座に踏み込んでリーダーが居なくなり惑う雑魚二頭の首をはねる。
「ふぅ……」
血溜まりの中にぼちゃんと落ちた二つのトロフィーを確めて、漸く一息つくことが出来た。
「よ。お疲れ」
「ん」
血振りをくれて剣を納めていると、ホルスターに拳銃を仕舞いながらサルバがそう言って「しかし、意外だな」と首をかしげてきた。
「？　何が？」
「お前が苦戦してるのが」
不思議そうにしげしげと見られ……見られてるんだよね？　……ま、いいか。

長い前髪で判断つかないけど、サルバは何となく不思議そうにしている。
「そんなに不思議？」
「不思議っつーか、妙に思うな。あんだけ人斬るの滑らかなのに、モンスター斬るの慣れてない感じがするっつーか……」
「まあ、こうも斬り方が不規則だとね。僕は元々器用な方じゃないし」
人間は多少体型が変わっても狙うところは一緒だけど、モンスターは種族が変われば斬る場所も変わっちゃうからね。
「そういうもんか」
「そういうものだよ」
首をかしげたサルバに、僕は首肯を返した。
「まだまだ、冒険者のふりには慣れが？」
軽く辺りを警戒しながらダンジョンの臭いを探っていると、不意に鼻孔をダンジョンを満たす獣臭さとは違う、鉄の臭いが擽ってきた。
「？　どうかしたのか？」
「し」
「……」
首をかしげるサルバに、口を閉じるように人差し指を立てると、意図は伝わったらし

くサルバはこくりと頷いて口をつぐんだ。

もう一度、ダンジョンの臭いを確かめる。やっぱり、充満した獣臭の中に、幽かにだけど鉄錆びの臭いが混ざっている。

（近くに冒険者が居るみたい）

視線で問い掛けてくるサルバに事情を伝えると、驚いた様子で薄く唇を開いたサルバが、再び口をつぐんで顔を耳元に寄せてきた。

（こんな奥にか）

（そうだね……）

どんなダンジョンでもそうだけど、基本的に深部に行けば行くほど生存は難しくなっていく。これは、単純に深部の方が大型のモンスターが居るというのもあるし、それ以上に深部に潜れば潜るほど体力も食料も消費するという至極単純な理由もある。

この村のダンジョンはC級。B級のサルバから見れば深部に辿り着くのもそう難しくはないだろうけれど、一度下り坂に入ったダンジョンにわざわざ上位ランクの冒険者が長く留まるということもない。つまり、この村のダンジョンにアタックを掛けているのは基本的にC級以下の冒険者に限られる訳で。そして、下り坂とはいえ、現状出現したモンスターの数と種類を考えると、この場所にまでC級で来られるというのは、天才とは言わずとも同級の中では比較的実力者という事になる。

そんな人間が、ダンジョンで成り立っている村で名が知られていないわけもなく、そして、そういった名士扱いの冒険者に顔を覚えられるということは少なからず村で名が知られてしまうということになる。

僕達、ダンジョン閉鎖士というどぶ仕事は人目に触れるのは好ましくない仕事だ。もし、何かの拍子にダンジョン閉鎖士だとばれてしまうと、それだけでも仕事がしづらくなるからだ。

それ故に、癖ではないけれど、半ば隠れるように別の冒険者の目を避けたのだった。

そして、その判断が功を奏した。

先に気付いたのは、今度はサルバの方だった。

「なあ、アルタ。あれ、昨日の奴等じゃないか？」

「ん……確かに」

松明を消してサルバが指差した先に居たのは昨日の夜、酒場でサルバに睾丸を潰されたアゴヒゲと魔術師と逃げた戦士だった。確か、自称だったB級が自称ではなく本当

だったら、確かに此処に居ても実力面では驚くことではないのかもしれない。ただ、

「……もう一人居る？」

ゆらゆらと松明の灯りに揺られる影を一つ二つと数えると、都合四つ目の人の形が見えた。

「「……」」

昨晩絡んできた面々に仲間が居たのだとしたら、それを相手に気付かれずに察知できたのは行幸だった。一度絡まれた相手に、二度絡まれない保証は無いわけだしね。肝は潰しておいた、というか、サルバが物理的に玉を潰したはずではあるんだけど、見たことのない仲間と合流して性懲りもなくっていうのはなくもない話だし。

「……」

果たして慎重に通路の先を伺うと、昨日のパーティーの四人目の姿が出てきた。

「よし、準備は良いか」

聞こえてきた渋味のある声と共に姿を現したのは、ひょろりとやせ形の、だけど、視線だけはギラギラとした気迫を湛えた騎士然とした壮年の男性だった。

「「は、はいっ!!」」

その殺気すら迸っている壮年騎士の号令に、昨日の三人組が肩を震わせてガクガクと頷くと、大きな分厚い背負い袋をひっくり返す。

「っ?!?!?」

その瞬間、肥溜めと吐瀉物と、腐敗した尿、そして豚舎の獣臭を混ぜて濃縮したような強烈な悪臭がガツンと鼻の奥を突いてきた。

「お、おい、大丈夫か?」

僕の反応に驚いたのか、サルバが声を潜めながら肩を揺すって来るけれど、正直返事をしている余裕がなかった。一瞬でバカになった鼻からは痺れが取れないし、咄嗟に鼻を抑えても未だに悪臭が鼻の中に侵入してこようとしているようにすら思えた。

それでも、悪臭に思考を奪われながらも何とか鼻から手を離して、昨日の冒険者達がひっくり返した土の臭いを嗅ぐ。はっきり言って、こんなくさい臭い嗅ぐどころか近寄りたくもないんだけど、そうも言っていられない訳で。

「……」

再び脳髄に殴りかかってくるかのような悪臭。けれど、痺れた鼻孔を二度三度と潜らせると、何とか呼吸を繰り返せるようになる。その慣れに任せて本格的に向こうの様子を探りにかかると、運良く昨日の冒険者のリーダー格らしい細身の男が「それでは始めるぞ」と言ったのがほぼ同時の事だった。

「「……」」

再び、岩影から中を覗き込む僕とサルバ。見られていると未だに気付いていない様子

の四人は、各々手に大きなスコップを握り、そして、ぶちまけた汚物臭漂う土を掬い上げると、

「あ……」

それをダンジョンの床、壁、そして、天井へと三々五々撒き散らし始めたのだった。

「「「……」」」

黙々と作業をする男達。その目はげんなりしている三人と真剣な表情の一人と対照的だけど、四人とも欠片も手を休める様子なく作業を続けていく。見る間に消えていく盛り土。やがて、持ち込まれた土塊を散布し終えると、男達はスコップを下ろして一息吐いた。

「よし、これで良いだろう」

腐敗した獣臭漂う部屋の中でよく一息つけると思うところだけど、この”臭い”察知できないんだよね。羨ましいような、憐れなような……。

「人が来る前に撤収だ」

（サルバ）

（おう）

厳かに言った痩身の騎士？の言葉に、一先ずサルバを促して通路の影に隠れることにする。あの人達が何をしようとしてるにせよ、この場で見付かるのは余り得策とは言え

ないだろうし。

　幸い、入り口辺りと違って広く歪みだらけのダンジョン深部は隠れる場所には事欠かない。サルバと互いに頷き合うと一旦通路の反対側の岩影に身を隠す。

（後は……）

　ダンジョンの反対側のサルバに見えるように片刃剣を抜くと、意図を察してくれたらしいサルバもこくりと頷いて、音が出ないように慎重に拳銃の撃鉄を引き上げる。松明の光が反射しないように、互いに得物にマントを掛けたところで、撤収作業を終えたらしい、昨日の三人と追加一人がコツコツと奥の部屋から出てきた。

「……」

「……」

　ダンジョンに響く音に呼吸を合わせて息を潜める。足音、息遣い、小さな仕草の波長に身を委ねる。と、

「くそっ……」

　丁度、僕とサルバの前に差し掛かった瞬間、まるで見計らったかのように、昨日睾丸を潰された髭男が苛立たしげに吐き捨てた。

「まだ、痛むのか？」

　仲間のその反応に、唯一無傷だったいかいつ男が顔に似合わず、おずおずとした様子

で尋ねた。
「ったりめえだろうがよ!!!」
が、それが逆効果だったのか、玉無し髭の怒号がぐわんぐわんと音を立ててダンジョン内に反響した。うるさいなあ……。
「一人だけ逃げたお前と違って、俺達はあの耳削ぎ野郎に耳削がれてんだぞ?」
そんな仲間の言葉に追随するように、ローブの男がねばつくような声音で筋肉を批難する。そんな、彼らの会話が心底愉快だったのか、対岸のサルバが口パクで「ざまぁ」と笑いながら首を掻き斬る仕草をした。返事代わりに耳をハサミでチョン切る動作を見せると、堪えきれなくなったのか、お腹を抱えて肩を振るわせ始めた。大丈夫かな?
「む……」
と、僕とサルバとは対照的に、道の真ん中の筋肉は問い詰められて気まずげに口ごもる。正直、掃いて捨てるほどいる、腕が並み以上だけど破落戸(ごろつき)とさして変わらない性根の冒険者が仲間を見捨てたことを非難しているのも片腹痛い話だけど、かといって舐められたら御仕舞いなのは仲間に対してもおんなじだからなあ……。
「……すまん」
案の定、二人の仲間に恫喝された形となった、無傷の冒険者がそうもらす。その姿に片耳を失った仲間?は互いに目配せをして舌打ちをした。

「その辺にしておけ」
　そして、いよいよ値段交渉に入ろうかとしたところで、三人の間を厳かで朗々とした声が遮った。
「あん？」
　振り返った二人の不機嫌そうな顔とは対照的に、筋肉男の方は何処かほっとした様子で胸を撫で下ろした。
「貴様らの話は聞き及んでいるが、今回の件でモンネンを責めるのは間違いだ。元々、他の冒険者にちょっかいを掛けたのがそもそもの間違いだからな」
「「……」」
　冷徹にそう言い放った痩身の騎士の言葉に、二人の冒険者は不満げに、しかし、実力差があるのか、それ以上何も言わずに口をつぐんだ。
「……まあ、安心しろ」
　そんな二人の鬱憤に気付いていないわけでもないらしい、その痩身の騎士は口調を変えずにだが、宥めるようなことを口にする。
「あん？」
「我々冒険者は信用を売る仕事だ。お前達が一方的にやられたままでは我らパーティーの沽券に関わる。少なくとも、団長がそのまま放置するという事だけはないだろう」

痩身の冒険者の言葉は酷く淡々としていて、一切の感情を感じさせなかった。だけど、その淀みのなさが却ってその言葉の真を如実に物語ってもいた。

それは、相対している三人組にとっても同じことらしい。

「ちっ……」

大きく舌打ちこそしたものの、最終的には納得したのか、何も言わずにこの場を去っていったのだった。

コツコツという音が小さくなり、掻き消え、一瞬、二瞬……。やがて、完全にその気配が消えたのを確かめると、僕とサルバはどちらともなしに通路の影から這い出した。

「……ふぅ」

どちらともなしに漏らした溜め息は、反響することもなくダンジョンの中空で霧散する。

「行ったな」

呟いたサルバに、

「行ったね」

と頷き返すと、何故か不思議そうな顔をされた。んん？

「何？　どうかした？」

「いや、大丈夫かなってな」

「何が？」
　いや、本当に。
「あいつら、落とし前自体は必ずつけに来るぜ？　冒険者なんて、面子と信用で食ってるようなもんだし」
「ああ」
　それか。
「まあ、好きにさせれば良いと思うよ。それで、面子潰されるなら、労せず有力冒険者の枠から弾き出される事が出来る訳だし」
　最悪の事態になりそうなら逃げれば良いだけだしね。
「……」
「？　どうしたの？」
「いや、その発想は無かったなってな」
　そう言って、サルバは驚いたような、キョトンとしたような、何とも言えない表情で頬を掻いた。ま、だろうね。
「僕はそもそも冒険者じゃないからね。逃げるのも負けるのも好きなだけ出来るし、それで食いっぱぐれも起こさない。なら、考えるべきは調査の効率ただ一つだよ」
　そして、そういう意味では、落とし前、まあ、リンチ？を上手く捌く事が出来れば、手

に入る結果は案外悪くないものだ。
「なんつーか」
「ん？」
「お前、本当に頓着しない性格してるよな」
「ああ……
　よく言われるよ」
　本当に、これはよく言われるな。言ってるの大体オババなんだけどさ。
「ま、怪我だけは気を付けて、闇討ちには警戒して、適度に無様に、適切に惨めに、効率よくリンチされましょってね」
「その辺の匙加減は任せるわ」
　はいな。
「さ、それよりも此方の部屋の方だね」
「おう」
　サルバは何の事はないように頷いたけど、やっぱり悪臭酷いよね。
「相当臭うのか？」

「かなり」
「具体的には？」
「肥溜めに漬かった腐乱死体くらい」
「最悪だな」
「まあね」
　顔をしかめるサルバに、僕も肩をすくめる。
「そういうの聞くと、ダンジョン閉鎖士の力を持って生まれるのって本当に良し悪しなんだって思うな」
「ま、だろうね」
　いや、本当に。
「やってることは、街のごみ処理係とさして変わらないし、ダンジョン閉鎖士ってだけで風当たり強いし。生きるレベル無駄に上げてくるの止めてくれないかな？　本当に」
　いや、割りと本気でさ。そこ、笑わない。いや、嗤わない。
「いや、すまん」
「小指で良いよ？」
「いや、何がだ!?」
「決まってるじゃないか」

落とし前つけるのは。或いは詰めるのは。
「つか、そこまで愚痴が溢れてくるんなら、ダンジョン閉鎖士辞めれば良いんじゃないのか？」
「……」
あ、それに気付いたか。うん、まあ、そうなんだけどね。
「それすると、ほぼほぼ次の日の朝日を拝めなくなっちゃうんだよね」
「……」
「え？　マジで？」みたいな顔をされてるけど、掛け値なしのマジなんだよなあ。……あ、そうか。
「因みに、補佐官は就業中に知り得た機密事項次第では抜けられるよ」
だから、安心してね？
「……」
「……」
「……なあ」
「何？」
「仮に足抜けした場合の、補佐官の生存確率ってどんなもんなんだ？」
あ、それか。

「触れた機密事項の軽重問わず、もれなく一月も経たずに失踪だね」
　だから、安心してね？
「ダメじゃねーか!!」
「あはは」
　サルバが悲鳴と共に頭を抱えた。
「ま、想像つくでしょ？　こんな機密事項バンバン触るような仕事、足を洗うのは死ぬと同義だってことくらい」
「言われてみるとその通りっちゃ、その通りなんだけどな」
「入る前に言ってほしかったな」と溜め息と共にぼやかれた。うーん。
「その場合、話し終わった瞬間、僕がサルバを殺してただろうけど、そっちの方が良かった？」
「何でそうなる!?」
　はっはっは。
「だって、包み隠さず話して放置したら、実態がばれる危険があるでしょ？　ダンジョン閉鎖士なんてただでさえどの貴族やギルドも集めるのに四苦八苦しているのに、足抜け出来ないって話になったら、意地でもダンジョンの事を察知できないって言い張る人間が出てくるだろうし、ダンジョン閉鎖士じゃない人間からすれば、ダンジョン閉鎖士の

”ダンジョン・コア”を察知するスキルなんかは感覚的なものだから、言い張られたら一々相手の論理の矛盾探さなきゃいけなくて手間も手間だし」

「普通に考えたら外道云々言うところなんだが、よりにもよってその事実を当のダンジョン閉鎖士自身が口にしているという矛盾。すげー違和感だな」

「そう？」

何か、渋い顔で頷かれた。

「ま、そっちはギルドの論。僕達ダンジョン閉鎖士としては今の話が漏れちゃうと”ギルドが握ってるダンジョンの情報を抜くならダンジョン閉鎖士を逮捕して拷問に掛ければ良い”って思われかねないのが一番の懸念材料かな」

「あー……」

そ、個人的にはこっちの方が遥かに大事なんだよね。元々、唯でさえ恨まれてる訳で、仮に誘拐なんてされたら確実に地獄が待っているっていうのは想像に難くない。

「ギルドとしても、この話が広まって”ダンジョン・コア”を感知できる人間がダンジョン閉鎖士に成りたがらなくなるって事は理解しているだけに、この件は不文律にしちゃってるけど……まあ、容易に想像がつく範囲の話だよね」

あはははは。

「……」

「？　どうしたの、サルバ？」
「いや……」
　頭を抱えていたサルバが首を振り、
「自分の軽率さを改めて実感していただけだ」
　物凄く疲れた表情で深く深く溜息を吐いたのだった。
「ま、幾ら切羽詰まっていたからって、一応選択肢がそれなりにある中からよりにもよって僕に声を掛けた辺り、確かに軽率だよね」
　うん、分かる分かる。
「あー、そこはそんなに後悔してはいないぜ」
「……」
　何故か反論された。うん？
「マジで？」
「おう」
　成程……。
「サルバはド変態だね」
「何でそうなる」
「じゃあ、性癖が歪んでる？」

「はっはっは、言うに事を欠いてこの野郎」

サルバは発砲した。

僕はしゃがんで回避した。

「さ、それより仕事、仕事」

「命狙われたのを〝それより〟で済ませるところは素直に尊敬するぜ？」とか聞こえた気もするけど、急がないと現場証拠が消えちゃう危険があるんだよね。

「うん、臭い。最悪だね」

さっきの面々が出てきたダンジョンの部屋に入り臭いを嗅いだ瞬間、こみ上げてきた吐瀉物の感覚に、思わず顔を顰める。だけど、

「お前が臭いって感じるって事は……」

「うん、間違いない……この土、〝ダンジョン・コア〟、或いはダンジョンに関連した何かだね」

サルバの推測に肯定を返す。実際、それ以外にあり得ないだろうしね。

「取り合えず、さっき撒かれた土をある程度回収してから帰るよ。これを今日は分析してみよう」

「おう」
　持ってきた、懐紙に撒かれた土を手で取って入れる。ある程度の量が溜まった所で紙を折って仕舞い込む。後は現地調査だけど……。
「どうかしたのか、アルタ？」
「んー、この土なんだけどさ」
「ああ」
「ちょっと、湿ってるんだよね……」
　首を傾げるサルバに、手に取った撒き土を少し渡す。
「まるで、今掘ってきたばかりみたいだよね」
「確かにそうだが……あ」
「そ」
　気付いたらしいサルバに頷き返し、念のためダンジョンの外の壁を確かめる。うん、さっきの部屋の撒かれた土とは対照的に乾いているね。
「塊で持ってきたからか？」
「それにしたって限度があるよ。粒が小さいって事はそれだけ湿り気が逃げやすいって事だし」
　同じ様にダンジョンの壁に触れたサルバが疑問を口にするけれど、其れだけとは言い

辛いよね。
「ま、この辺は感覚的な部分も多分にあるけれど、どちらにせよ確かめる必要があるのは間違いないよね」
後ろのサルバが「だな」と頷いた。
「また現地に行くのか？」
「んーん」
首を傾げたサルバの言葉は否定する。
「ギルドの方に集積した情報があるはずだから、そっちを頼る」
「ふむ」
「機密情報が多くて足抜け出来ないってことは、逆に言えば有用で貴重で外部に公開されない情報に触れるのが簡単って事でもあるからね」
此れはフルに生かさない手はない。
「と、いう訳で、そろそろ出よっか」
「おう」
頷いたサルバが二丁拳銃を引き抜くと、かちりと音を立てて、その両方の撃鉄を起こす。俄かに真剣になる息遣いに、
「宿に帰るまでが探索です」

思い出した言葉を何となく口ずさむ。
「初級冒険者の手引きにあったな、そんなの」
何か、サルバにくすりと笑われたけど、
「まあ、冒険者としては正真正銘初心者だしね」
むしろ、こういう基本は大切にしないと。
「それもそうだな」
頷いたサルバが通路の影から鎌首をもたげた小さめのワームに向けて一発発砲する。
ぎっ!?と鳴った悲鳴がやけにダンジョン内に反響した気がした。

◆

ダンジョンから戻ると、まだ日が暮れるまで時間がある事もあり、さっさと次の用意に取り掛かる事にする。まず、ダンジョンの状態と今日の調査結果、そして、ダンジョンで見た奇妙な行動を取る四人の冒険者と、その身元洗い出し依頼。最後にダンジョンから採取したサンプルの半分を手紙に包み、小包を用意する。

「慣れてるな」
「ま、習慣だからね」
包みを用意したところで装備を脱いでベッドでくつろいでいたサルバが物珍しそうに調査結果を覗き込んできた。
「昨日今日と調べた内容は正直全体的にきな臭いとしか言いようがないし、場合によってはかなり大掛かりな事をすることもあるかもしれないからね。やるなら手早く済ませないと」
後は、此れをギルドに持って行かないとね。
「？　郵送じゃないのか？」
「機密が少ない奴ならそうするんだけどね。機密多いとそうもいかないんだ」
「あー、そういう」
そして、今回のは思いっきりアウトな方なわけで。
「まあ、普通なら補佐役に持って行かせることが多いんだけど、こういう小さな村だとパーティーの一部だけが不自然にこの場所を離れると却って目立ちかねないしね」
逆に言えば、もし大きな街だったら躊躇なくサルバに持って行かせてたけどね。
「……」
「？　どうかした？」

「何か嫌な予感がした」
「気のせいだね」
　間違いない。
「……」
「……」
「……〝気のせい〟なのに〝間違いない〟って変じゃないか？」
「ああ、たし「「「「きゃあああああああああああああああああああ!!!!!!!!!」」」」」
「「ん？」」
　サルバの言葉に同意しようとしたその瞬間、宿の薄いガラス窓を甲高い絶叫の多重層がびりびりと震わせた。
「「……」」
　顔を見合わせた僕とサルバは何が起きたのか確かめるために窓の外へと顔を出してみる。……。
「……何だ、ありゃ？」
　サルバが口にした第一声に、僕の方も正直同感だった。
「「「「ミロ様あああああああああああああああ!!!!」」」」
　叫ぶ多数の村娘と少数の村男。遠巻きに憧憬を向ける低級の冒険者達。その中心に

居たのは、
「いや、ありがとう。ありがとうレディ達。私の帰りにこうやって集まってくれて。君達が素敵な笑顔と声援で迎えてくれたこと、とても嬉しく思うよ」
癖のある短髪と凛とした風貌に微笑を浮かべて声援に応える、一人の騎士だった。
「あれ、男装か？」
「だろうね」
佇まいの鋭さといい、細やかな仕草といい、男性だと言われても違和感のない所作だったけど、唯一聞こえてきた声だけが太く装ってはいるものの、女性のそれだと告げていた。んー？
「サルバ、あの冒険者に見覚えある？」
あそこまで派手だと、冒険者の中ではそれなりに名前が売れてそうではあるんだけど、僕の方はそっちの知識はあんまりないからなあ。
「いや……」
が、意外な事にサルバは首を横に振った。長い前髪が揺れる奥で訝る様に顰められた眉がちらりと見えた。
「記憶にないな……〝流れ〟じゃないか？」
「ふーん……」

サルバの言葉に頷きながら、もう一度相手を観察する。
（……隙が無い？）
そして、その淀みない体裁きや足裁きにふと違和感を覚える。
ダンジョンに携わる冒険者というのは多くが対人戦をあまり想定していない。あまりと付くのはダンジョン内に冒険者を狙う盗賊や、他の冒険者との争いがないわけではないからだけど、基本的に彼らの標的はダンジョン内のモンスターとなる。それ故に人間狙い以上に威力を求めたり、逆にスピードを求めたりと極端な動作になる事が多く、必然的に普段の所作に冒険者らしい隙が産まれる訳だけど、視線の先の彼女にはそういった冒険者に見られる隙が殆ど表に出てきていなかった。
（……ま、だからどうしたって話だけどさ）
何の気なしに、というか普段の癖で品定めしちゃったけど、特に意味が……あ。
「おい、あれ」
「……」
サルバが指さした先、風采の良い男装騎士から少し離れたところから、騎士に向かって歩いて行ったのはさっきのダンジョンで見た痩身の騎士の姿だった。
「「「キリコ様よおおおおおおおお!!!」」」
その姿に、更に上がる村娘の絶叫。最早英雄譚の伝承中の人物そのものと言わんばか

りの扱いに村人達が湧く中、痩身の騎士に促された人だかりがぱかりと開き、伝承の中の二人が再会を果たす。どうやら、二人とも親しい間柄らしく、男装騎士はにこりと微笑みを浮かべ痩身の厳しい表情の騎士に近付いて行った。そんな、騎士の美貌にほんの僅かにだけど表情を綻ばせた痩身の方は、しかし、直ぐに視線を引き締めると、何事かをその騎士に耳打ちしていた。……っていうか、

「何か、こっち見られてない？」

「だな」

痩身の騎士の言葉に何度か頷いた男装の騎士は何故か宿の二階から顔を出す僕とサルバに鋭い視線を向けてきた気がした。

「……気のせい？」

「と、思いたいところだけど、何かこっちに来てるぞ」

「だよねえ……」

サルバの言葉通り、男装の騎士はゆったりとした歩みで何故か僕とサルバの居る宿へと近寄ってきた。一目で分る闘気にゆらりと彼女の周りの空気が陽炎をたゆたわせているようにすら錯覚した。

「さっきさ」

「ああ」

「ダンジョンで〝落とし前を付ける〟って言ってたよね」
「言ってたな」
「……」
「……」
　どう考えても、そういう事だよね。
「面倒臭いな」
「けど、落とし前の内容によってはチャンスかもしれないよ？」
　ぼやくサルバに、ふと思いついたこと言ってみる。
「ん？　……ああ、そういう事か」
　どうやら、言いたいことが伝わったらしく、納得した様子で頷かれた。
「おえ」
「どうしたのさ」
　そして、直後に吐きそうになられた。うん？
「いやな」
「うん」
「お前の思考が理解できるのって、冷静に考えて人として何か嫌だと思ってな」
「はっはっは……失礼な」

「躊躇なく短刀抜くなよ、おい」
「眼球を狙ったつもりだったんだけど、まさかその前髪で正確に避けられるとは思わなかったな。よくその前髪で避けられるね」
「これでも、ガンナーだからな。というか、何で目を狙うんだよ。ガンナーにとっちゃ致命傷だぞ、目は」
「だから狙ったに決まってるじゃん」
「この野郎」
「正真正銘この〝野郎〟だよ。ちんちんなくなったサルバと違って」
「……この野郎」
「うん、僕が悪かったから胸倉掴んで銃口突き付けるのは止めてくれないかな？　それだと避けられないし」
「避けられる要素があったら良いのか」
「それなら一々ごちゃごちゃ……言うかもしれないけれど、命乞いはしないよ」
「……」
何か、溜息と共に呆れられた気がする。あれ？
「やあ、御両人!!」
と、そうこうしているうちに、さっきの男装の騎士と痩身の騎士の二人が窓の下まで

やって来ていた。ついでに纏わり付いて来る村人も多くて、ある意味で絶好のシチュエーションとも言える。

「何か用ですか？」

取り合えず、こっちの予想通りじゃない可能性を考慮して念のため確認を取っておく。まあ、相手の闘気を見る限り、無駄な心配だとは思うけどね。

「昨晩、私のパーティーのメンバーが貴君らの手で少々痛い目を見せられたと聞いてね」

「はあ」

ん。好都合好都合。

「だからどうしたんです？」

一先ず、煽り半分、本心半分で問い返す。

「貴君らに私のパーティーメンバーへの謝罪を要求する」

「んー……」

謝罪、謝罪かあ……。いや、事を荒立てないのが目的ならさっさと謝罪しちゃうのも良いんだけど、この村から尻尾巻いて逃げ出すにはちょっと理由付けとして弱いんだよなあ。さっさと激発して、その闘気通りに剣を抜いてほしかったんだけど。そも、それをしちゃうと、

「……」

（うん、やっぱり怒ってるよね）

隣の不機嫌になったサルバを宥める方法が無くなっちゃうんだよね。というか、直接の被害は僕じゃなくてサルバの方だしね。

「ま、仕方ないか……」

そうなると、出方も必然的に絞られる。まあ、此れからやる事を考えたら、却って好都合だしね。

「お断りしますよ。僕達は貴女達のパーティーに謝罪する理由はありません」

「ほう……」

窓の上から投げた回答に、キッと彼女の目が鋭くなる。

「元々、先に絡んできたのは貴女達のパーティーですし、こっちは完全に絡まれた側ですから」

「だが、貴君らが彼らの耳を削いだことはどうだ？　明らかにやりすぎだと思うが？」

「剣を先に抜いたのはそっちですし……僕も無我夢中でしたので」

「ほら、B級の冒険者の方に凄まれてしまっては低級の僕としては恐怖としか言いようがありませんでしたし」とC級の冒険者証を見せると、苦虫を噛み潰したような顔をされた。

（ま、そういう反応になるよね）

冒険者の争いやいざこざに仁義や正統性なんてある訳もないから、当然強い立場のB級冒険者がC級冒険者に剣を突きつけるという事がないわけでもない。けれど、その場合C級冒険者は何をやっても「必死だった」「無我夢中だった」と言ってしまえば割と大抵の無茶が通ってしまう。それだけ実力差があるという事でもあるし、此れを認めないと、今度はB級冒険者自身が「自分はC級冒険者と実力差が殆どありません」と喧伝することになっちゃうからね。案の定男装騎士さんが歯噛みしているんだけど、

「お？」

と、そうこうしていると、下の男装騎士さんの隣に居た痩身の騎士さんが何かを耳打ちした。んー。

（何やろうとしていると思う？）

（不明。けど、相手がああも分かりやすく武断派だと出る行動は多分……）

「話は分かった。貴君らが必死であったというのも事実だろう。だがっ！」

「……」

くわっ!!　と見開かれた双眸は先の柔らかさが消え失せ、獰猛な肉食獣のそれにも思わせる危険な光を帯びていた。

「私にも、部下を率いるパーティーの団長としての面子がある!!」

すらりと抜き放たれた塵一つない白刃が日光を強く反射してギラリと輝いた。うん、

こうなったね。

「故に、貴君らに決闘を申し込むっ!!　……いかがか?」

朗々と響き渡った男装騎士さんの宣言に、とりまきの村人達が「「「うおおおおおおおおおおおお!?」」」と歓声を上げる。あの美貌、そして、あの風采なら確かに人気も出るだろう。同じパーティーだった前の三人が調子に乗るのも、まあ、無理からぬことだったかもね。

「断ったら?」

「まあ、そういうこともあるだろう。何、命を無駄にしないというのは決して悪い事ではない。私も心が挫け、逃げるものに態々剣を振るう程無体ではない。但し、代償は払っていただくことになるがな?」

「……」

「貴君らの……誇りだ」

にやりと浮かんだ不敵な笑み。そのあくどく見える仕草すら洗練されていて、周りの声援は一層大きくなる。……さて、

「分かりました。受けましょう」

逃げても良い、代償は僕達の誇りだけだ。この言葉まで引き出した以上、逃げるのも一手ではあるし、僕もサルバもそのつもりだった。実際、隣のサルバが「アルタ?」と

少し驚いたような雰囲気で首を傾げていた。ただ、
（ちょっと、確かめたいことがあってね）
さっきのあの騎士の所作、体捌き、そして足運び。洗練されたその一つ一つの動作に、しかし、ほんの少しだけ気にかかる事があった。
「……」
理由を告げると、訝る様に首を傾げたサルバも、納得してくれたのかこくりと頷いた。
「良い勇気だ。私の前に立つ、それだけでも貴君らの勇気は賞賛に値する！」
僕の回答に獰猛に叫んだ男装の騎士は、バッ！　と音を立ててマントを翻すと、肩越しに不敵な微笑を浮かべる。
「では、貴君らの勇気に免じて、こちらも尋常な立会いを用意しよう。村の広場で待つ」
そう言って、今度こそ立ち去る男装騎士と、側近らしい痩身の騎士。その後に続く、玉無し二人と筋肉一人。そして、ぞろぞろと立ち去る村人を見送っていると、サルバが「大丈夫か？」と首を傾げてきた。
「ま、あれくらいなら何とかなると思うよ」
肩を竦めると、「そうか」とあっさりサルバは引き下がった。そうだね……、
「それよりも、逃げ出す準備をお願い。なるべく、素早く、無様に、転げる様に出て行ったように見せるために……ね？」

「じゃあ、言い訳は？」
「うん」
　ほぼほぼ確信しながらの確認をしてくるサルバに肯定を返す。
「彼女を利用しよ。〝決闘に負けて無様に惨めに逃げ出す負け犬〟……村を抜けるには丁度良いしね」
　口にしたカバーストーリーは当然予想済みのサルバがニヤッと笑う。
「おお、あるたよ　まけてしまうとは　なさけない」
　大仰に、そして不自然に棒読みで告げるサルバに肩を竦める。
「その　なさけない　なかまに　けっとうを　おしつけるなんて　ひどいやつだなあきみは」
　くすくすというサルバの笑い声に見送られながら、僕は必負の決闘に足を向けるのだった。

五

さて、さっきの男装騎士さんに先導されて村の役場前の広場に来たわけだけど、

「うーん、まるでお祭りだね」

素直にそんな感想が出てくるくらい、村の人達は決闘の開始を心待ちにしているように見えた。

（ま、当然か）

元々、都市部と違って娯楽を発展させるにも限度があるし、娯楽の供給にばかり傾倒しすぎると、ダンジョンを失ったときに生活基盤がすかすかになるという危険がある。そういう意味では、多少村人が娯楽に餓えているくらいが丁度いいのかもしれないとも思った。

「それはそれとして……」

改めて正面に立つ彼女を観察する。

スッと延びた背筋に、綺麗な佇まい

凛とした美貌に、色気に満ちた流し目

流れるような、それでいてきびきびとした一挙手一投足に、豪快ながら傍目からも実戦を想起させる体捌き

寓話から飛び出してきたと言われても、驚かないくらい様になった騎士様は、それこそ宮廷画家に絵画のモデルとして選ばれていても不自然じゃないだろう。もっとも、

「では、始めようか。我が名はミロ。ミロ・フロンティア！　貴君に貶められた仲間の仇を討つため、いざ立ち上がらん!!」

その、並々ならない戦意が直接向けられてるとなると、流石に苦笑いしか出てこない。

「ま、いっか」

状況的には好都合。精々上手く使わせてもらうのが、今の僕の役目だろう。

「……」

歓声の中、見下ろしてくる騎士様。まあ、此だけ多くの人間に囲まれていて、しかも、その殆どが彼女のファンとなると、

「出やがった！〝耳削ぎ〟だ！」

「なんだよあいつ、辛気くせー！」

「パブ様やソカロ様にまであんなことして、最低よっ!!」

「そうだっ！　二度とそいつが冒険者出来ないようにしちまえっ!!」

こう、何をやっても、大概の事はどうにかなる上虚が出来上がる。本来、先に仲間が絡んできた彼女の逆恨みなんだけど、そういった理屈は何処へやら。反対に僕の方は下手なことをすればそれこそ袋叩きだろう。

「……」

ふと気配を感じて後ろを振り返ると、遠巻きにしていたサルバが口をへの字にして不機嫌そうに腕を組んでいるのが見えた。はいはい、無理しない程度で終わらせるから。もう行った行った。

佇むサルバに手を振ると、大きく肩をすくめたサルバが今度こそ踵を返す。んー、心配して……いや、どっちかっていうと、周りの反応にムカついているだけかな？　ま、いいや。

「何処を向いているのだね？」

と、そうこうしているうちに、今度はまたしても騎士の方に呼ばれる。振り返ると、まだ微笑を浮かべながら、だけど、視線にはほんの少し苛立たしさを乗せながら男装の騎士さんが流麗な眉毛を持ち上げた。

「別に何も」

そもそも、何かあっても、わざわざ言うわけがないじゃん。強いて言うなら、ご想像にお任せします、かな。

「……なるほど」

うん？

「彼女に良いところを見せたいと考えて、我が団員に暴力を振るった訳か」

「は？」

何処をどう解釈したらそうなるのか、そもそもサルバは男って、それは向こうからは解らないか。それにしても、不思議な思考回路をして……いや、そうじゃないか。

「なんだって？　つまり、パブ様達はその糞野郎の見栄のために耳を削がれたってのか!?」

「そんな、酷い……」

「男って何時もそう。見え見えの背伸びしないと生きていられないなんて、しかも、それが、かっこいいと思っているなんて、本当に理解できないわよね」

「そういえば私見たわよ、あいつがパブ様を油断させて耳を切ったの」

「あんなひょろっちい奴がパブ様をどうこうできるなんておかしいと思ったんだ！　やっぱり騙し討ちか！」

「本当に、男の風上にも置けねーな!!」

「……」

うーん、好き勝手。何か、昨日の酒場に居なかった人達まであることないこと言って

るんだけど。まあでも、人間、気持ちよくリンチするのは大好きだしね。仕方ない仕方ない。それに、こうやって観衆が敵意を持つだけでも案外馬鹿にならない意味を持つ。単純に雰囲気に相手が飲まれるってのもあるけど、それ以上に重要なのは観衆、つまり、実質的な見届け人が煽った側に対して偏った判断を下すというところにある。具体的には、多少のズルをしても観衆はむしろ喜ぶようになるということ。

彼（自分達のヒーロー）女に煽られて、ある意味実に人間らしい村人たちの反応に納得しながら、取り敢えずさっさとこの茶番を終わらせるために剣を抜く。

「!?」

「さっさと始めましょ」

「……」

神妙な顔したり、大仰に観衆を煽って仕込みをしてるところ無駄骨なんだけど……僕はあんまりそういうの興味ないんだよね。

敵に切っ先を向けながら、一度息を吐ききって肺の中を新鮮な空気で満たし直す。整った呼吸は何時も通り。鼓動も異常なし。観客が居るのは珍しいけれど、居たら居たで敵役が僕なのは日常茶飯事。よって、何も戸惑う必要はない。

「……良いだろう」

相手の騎士が長剣を立て、臨戦態勢に入ったのを確かめて距離を詰める。始めは手早

く……ここかな。

（うん、見事な殺気）

ある境界線に近付いた瞬間、一気に昂る殺気に、目の前の男装騎士の射程距離を悟る。

（これ以上、半歩でも進んだら斬られるね……）

確信を覚えながら、再度息を吸うと、

「はあああああああああ!!!」

程よく釣れた、相手が一気に勝負をつけに剣を振り下ろしたのを確かめて、予め決めていた通りに呼吸を吐く方に切り替える。

「ふっ！」

「!?」

上手く想定の裏をかけたのか、ピクリと半……いや、十分の一呼吸程固まった相手（男装騎士）の喉に切っ先を向ける。女性らしく喉仏もないつるんとした綺麗なそこに切っ先が噛み付きかけた瞬間、

「ぬうううううううう!!!!」

一瞬すら永遠に思える、刹那の拘束から抜け出した彼女がぎりっと歯を食い縛って首を捻る。空を切る白刃、直後、

「しいいいいいいいいいい!!!!」

捩れた体勢からすり上げる様に向けられた長剣。技巧云々以上に、本人の膂力を感じさせるそれは確かに意外ではあった。けれど、一度見切ってしまえば、立ち位置や体勢といった不利を覆すほどの速度は持っていない。

「しっ！」

伸ばした諸手を引き寄せ、片刃剣をそのまま下に振り下ろせば、すぐに逃がしたばかりの獲物（首筋）が無防備な姿を晒している。

体勢と位置取り。二つの利を得て放った一撃は、当然ながら男装騎士さんの一撃に比べて遥かに〝有利〟だった。というか、流石に此処までハンデがあって剣速で負けるほど、僕も弱くはないしね。

「くっ!?」

案の定、明確に出た遅速。だけど、そこからの男装騎士さんのリカバリーは逆に僕よりも速かった。

「っ」

無茶な体勢からの剣撃が間に合わないとみるや、そのまま一歩、力任せに大きく踏み込んできた。

死中に活を求める一歩。その一歩が、僕と彼女の一刀の交錯を紙一重で上回った。

「うぐっ……」

直後、どんっと強く響いた激突音と、水月を振るわせてくる重量。

（あ、体当たりされた……）

何処か他人事のように感じながら、鎧分の体重差に僕は大きく宙を舞って吹っ飛ばされていた。

「かはっ……」

腹の次は背中から響く衝撃を逃がすために息を吐ききりながら、勢いに任せて地面を転がって距離を取る。立ち上がってみれば、同じく起き上がったばかりの彼女が乱れた髪を丁寧に整えているところだった。うん、そういった乱れを直す仕草も色気があるな……。本当に所作の細部までが作りこまれている。実際周りの村娘は黄色い声を上げていて、自分達よりも凛々しい彼女の所作に男衆迄溜息を吐いている。否応なしに高まる周囲の興奮。それはとても、

（都合が良いね……）

既に五月蠅かった歓声は最早絶叫の域に迄達している。これなら、僕とサルバが村からいなくなっても、観衆の記憶からは彼女に村から叩き出された奴が居たくらいにしか思わないだろう。

（と、なると）

後はどの塩梅で彼女に叩きのめされるかを考えるだけだ。

（流石にこの状態から一方的にやられるのは不自然だしね……）

　中々の強敵。だけど、彼女に比べれば大したことはない。そう、周囲が思ってくれるのが理想かな。欲を言えば、出来るだけ無様に、村人の話で「あ、そんな事あったな」とはなっても僕が何者なのかが一切分からないくらいが望ましいけど、はてさて……

「くそっ！」

　取り敢えず、吹き飛ばされた事に苛立ちながら、力を込めて剣を握り直す。努めて力任せに、努めてぎくしゃくと。なるべく気負いと焦りで、力んだように見せかけながら、もう一度、但し、心持ち急いで距離を詰める。

「……」

（うん、丁度良いね）

　果たして相手の男装騎士は目に見えて大きくなった僕の隙に、勝機が一気に近付いたのを悟ったのかほんの少しだけ、口元に余裕の笑みを浮かべる。勿論、そんなものを敵、つまり僕と周りの観客に見せる訳にもいかず直ぐに引っ込めるが、逆に僕がそれに気付かない振りをして距離を詰めると、僕の焦りを上方修正したらしく、今度こそ勝利を確信した笑みを浮かべた。

「！　はあああああああああああああああ」

　それを確かめると、今度こそ遮二無二に突っ込む。

!!!!!!!!!!

相手の勝利を確信した笑みに神経を逆撫でされて、力任せな攻め口をえらんだように見せながら。

但し、あくまで”僕ならば”という注釈をつける。

流石に、切先を効かせた構えから大上段に振りかぶるのは流石に不自然すぎる。

狙うなら喉元への”突き”。下半身の瞬発力は速く。だけど、力みによって、意外に伸びがないそれは、確実に大きな隙に見えた筈だ。

さて、何処を狙ってくる?

「!?」

次の瞬間、腰を沈め、滑らかに地を滑ってきた男装騎士さんが横薙ぎに一刀を振るうと、その軌道に合わせて全身に纏わり付いていた殺気が急激に凝集していく。僕はその殺気の先を追いながら相手(男装騎士さん)の狙いを探る。

脚……違う

腹……違う

胸……違う

首……通り過ぎた

腕……近い

（……指……か）

ちりっと産毛が逆立つような感覚。鋭い相手の殺気に刺され、急激に泡立った肌の感覚を信じ、次の仕込みを行う。しかし……

（かなりいい性格してるね、この人）

爽やかな所作と、風采の良さに気を取られて気付かなかったけど、昨日の半破落戸連中のリーダーらしく、思いの外この男装騎士はエグイ人間らしかった。

指というのは、意外に致命的になりやすい器官だ。普段日常生活で真っ先に使用する部位でもあり、人によっては戦いにも使用する、そんな部位でありながらその動きは繊細かつ緻密でそれ故に僅かな食い違いで一生使い物にならなくなる危険を孕んでいる。時にダンジョンに潜っていた武道家やモンクが拳を壊し、低ランクのモンスターにすら負けるようになるなんて話は枚挙に暇がない。そういう視点から見ると、ある意味臓器と同等以上の急所とも言えるだろう。

が、そういった切実な事情を知っているのは冒険者やそれ関連の人間に圧倒的に多く、極々普通の村人には余り急所という印象を持たれていないのが実情だ。

今回の決闘は一応相手のパーティーが原因になっている。今こうして熱狂に包まれているが、仮に臓器や顔などを損傷させてしまうと、この場は収まっても、後日自分達

の評価に影を落としかねないというのが彼女の考えだろう。そういう意味で、神経が多いせいで怪我に激痛を伴う〝指〟は、相手を降伏させながら、一見致命傷に見えず適度に手加減をしてやったように見せることの出来る部位という意味で彼女にとっては都合がいい急所だ。

普段であれば可動範囲が大きく、狙いにくい位置だけど、今は僕の〝力み〟によって両腕がノビを持っておらず絶好の的になっている。仲間に対しては〝致命傷を負わせた〟と説明しながら、観衆には〝軽い怪我だけで手を打った〟と思い込ませられる状況は、成程、乗ってこない理由も無いだろうね。

（そして、それが有難い……）

何せ、男装騎士さんの意図に乗るだけで、村から尻尾を巻いて逃げ出すところまでを演出できるんだからね。

（うん、意図せずだけど、最高の結果だね）

絶好の機会。その事実に相手に悟られないように注意をしながら続きの準備を始める。

既に、振りぬかれた彼女の一刀は僕の両拳を狙って軌道に乗っている。このまま振りぬかれれば、確実に両手の指が駄目になる。僕に必要なのは目の前の彼女のシナリオに乗りながら、彼女には「全てが上手くいった」と思わせつつ、致命傷を回避することだ。

まあ、
「見ている人達全員を騙すのに比べれば全然楽だけどね」
うん、とてもありがたい。今後彼女には足を向けては寝られないなぁ。
(じゃ、終わりにしようか)
直撃の瞬間、手早く演技を終わらせて、両手の筋肉を弛緩させる。流体の如く、柔らかく、滑らかに。そして流れるがままに両手をグローブの奥から引き抜く。そして、
「ぎゃんっ!?」
直後に響いたギンッ！という音に合わせて無理矢理に喉を鳴らす。そのまま、直撃を受けた両腕ごと剣を抱きしめる様にして、腹の内に致命傷を受けた事になっている部位を納めて蹲る。うつ伏せになりながら砂利塗れの広場を転げまわり、最後にうつ伏せで体を丸めて肩を震わせれば、はい、調子に乗った雑魚の末路の出来上がり。後は、周りが上手く騙せたかだけど……
「「「「うおおおおおおおおお!!!!!!!!!!」」」」
うん、心配するまでもなかったね。本当に単純に悪党(僕)が無様に負けたことを喜んでいる。まあ、都合がいいから良いんだけどさ。
(最後に勝ち名乗りかな?)
この後に起こる事といったら、せいぜいそれくらい。まあ、多分彼女の振舞から見る

に勝ち名乗りはかなり格好よく決めるはずだろうけど、そのくらいの所作ならまあ時間使っても良いだろうし……。ん？

「あ、やば……」

蹲って肩を震わせながら待っていると、不意に聞こえてきた足音に自分の失敗を悟った。というか、そっちのパターンは想定していなかったな。本当なら想定していてしかるべきだったんだけど、向こうの方がある程度穏便に済ませるだろうって思っていたせいで、此処までやるって事を考えていなかったな。

「ふむ、頃合いは良し……かな？」

耳元でカツッと鳴った足音に次いで、降ってきた厳とした声。顔を見ずとも表情を引き締めているのは手に取るように分かった。うーん、これパーティーメンバーへのアピールにするつもりなのかな？　いや、そもそも、村人に見せる為？　此処までする意味もあまり感じないんだけど……

「ぐっ!?」

彼女（男装騎士さん）の意図を思案していると、今度は前髪の方に本当の激痛が走る。というか、痛い痛い。地味に痛い。

「さて、何の意図があって僕の仲間に手を出したのかは解らない。もしかして、自分達のパーティーの名を売ろうとしたのかな？　だが、それは些か以上に浅薄だったと言わざ

るを得ないな。確かにこの僕、ミロ・フロンティアは同級の冒険者達からは非常に穏やかな……まあ、性格が穏便に過ぎると言われている。だがっ！　不当な理由で仲間を貶められ、傷付けられて平然としていられるような、卑怯な人間ではないのでなっ！」

「……」

あー、そういう事か。つまり、観客の反応を見て、昨日の夜の事がまだ村全体に迄情報が行き渡っていないのを察知して、この際だから、自分達のパーティーが絡んだのがそもそもの原因という事実も全部こっちにおっ被せちゃおうって訳か。……何て言うか、

（剣筋通り、エグイ性格している騎士様だなあ……）

これなら、自分の怒りを演出するために多少過剰に振舞う方が理に適っている。決闘相手の事を考えなければって注釈が付くけど、

（まあ、そこは黙らせる自信があるって事なんだろうね）

「さて、一先ず誰が見ても分かる通り僕の勝利となった訳だし、まずは我がパーティーに手を出そうとしたツケは払ってもらわなければいけない」

うーん、この。

呼吸は浅く早く。痛みで何も考えられない風を装うけれど、正直色々と突っ込みどころが多いのに何も言えないってのは辛いなあ。個人的には舌先から産まれてきた類の

人間なだけにこういうのは本当に面倒くさい。とはいえ、今更演技も止められないしなあ……。

「身ぐるみを剥いだ後、髪を剃って村の外に放り出しておいてくれ」

え……。

（それはちょっとまずいかもな……）

というか、普通に良くない。髪を剃り落されるのは別に良いけれど、身ぐるみを剥がされると指を砕かれたフリがばれてちゃうし。

どうする？この際、騙し討ち、いや、それをしちゃうと今度は完全に名前を覚えられちゃうし村から逃げられなくなる。かと言って指を砕くのは後に響くから論外だし。うーん、どうしたものか……。

「!?!?」

「お？」

自分の口元まで僕の首を持ち上げて脅してくる男装騎士さんにぶらぶらと頭を引っ張られながら思案していると、不意にパァン！というここ数日やたらと聞き慣れた発砲音が辺りに響き渡った。同時に離される髪の毛にほっとしていると、同時に頬がかぁっと熱くなり、直後に漂ってきた鉄錆の臭いに、左の頬が切裂かれた事を悟る。

「……」

頬の傷の切り始めの方、即ち弾丸の発射された方を振り返ると、果たして、予想通りのサルバが硝煙漂う銃口をこっちに向けて無言のままじっと佇んでいた。
「君はっ！」
「……」
決闘、と言うよりは詰めか。それを邪魔された男装騎士さんが声を上げるけど、それに対してピクリとも反応せず右手に持った拳銃の照準をこっちに合わせたまま、サルバがつかつかと軽い足取りでこちらへと向かってくる。漂う殺気に、村人達が絶句する。
まあ、そうだよね、普通に物騒だし、
「な、何だよお前!!　あ、あのクズの仲間か!?」
あ、自殺志願者。
殆どの村人がサルバの異様な雰囲気に息を呑んで道を開ける中、多少勇気がある村人が、その目の前に立って声を上げた。果たして、その男の人の行動が勇敢な正義の行動だったかは、
「……」
「ぎゃんっ!?」
「な!?」
「ひ、ひいっ!?」

一切の躊躇なく発砲したサルバと、その凶弾によって片耳を吹き飛ばされた村人を見て、悲鳴を上げた観衆が勝手に決める事だろう。

「あ……あが」

「……」

溢れ出す鮮血の中を出来たばかりの銃創を押さえながら身悶える村人を踏み潰し、決闘場に入ってきたサルバは再び躊躇なく銃口を男装騎士さんに向けると、これ見よがしに撃鉄をカチリと引き下ろした。

(あ、怒ってる)

ハンマーを落とした瞬間、硬質な音と共に揺られたサルバの前髪の隙間から鋭く刃の様な瞳が覗いた。一目で怒っていると分かるそれと撒き散らされる殺気、そして、傷口を押さえたまま唯々怯える村男が、不用意な事をすればサルバが激発しかねないという事を何よりも雄弁に物語る、一種の脅しになっていた。

「これはお嬢さん……一体何の用かな？　この場は神聖な決闘の場、私と彼以外の人間が入り込むのは余り宜しくないのだが……」

が、流石にそこは腹に一物を抱えた騎士らしく、男装騎士さんは余裕をもって首を傾げた。正直、既にあっさりとフェイドアウトって選択肢が無くなりつつあるけど、

(まあ、仕方ないよね)

どうせ、身ぐるみを剥がれてたら、程度の差こそあれど、似たような結果になっていた可能性が高いんだから。

仕方ないと割り切り、一先ず流れを全部サルバに任せることにする。

「何が〝神聖な決闘〟だあほくさい」

第一声、サルバは男装騎士さんの言葉を鼻で笑うと、そう吐き捨てた。

「何を「言っておくが、決闘って単語の是非を問う気はないぜ？」

「それは学者様の仕事だ」とサルバは口元を歪める。

「俺があほくさいって言ったのは、あんたがおっぱじめた茶番の事だ」

「むっ……」

サルバの言葉に、何を追及されることになったのか悟ったらしく、男装騎士さんは「失敗した」といった風に顔を歪めた。ま、確かに失敗だよね。自分達の評判の為に、ちょっと成果を欲張りすぎた。パーティーの面子だけを護るはずが、思いの外あっさりと決闘に勝てたから、評判の方も有耶無耶にしようとしたわけだ。……あれ？

（という事は、彼女が僕の身ぐるみを剥ごうとしたのは元をただせば僕の八百長が上手く行き過ぎたのが原因か）

苦戦、或いは、もう少し拮抗していたら此処迄欲張りはしなかった可能性があるしなあ……

（うん、失敗だったね）

もう少し、抵抗をするべきだったか、いや、そもそも、他人の心情の操作なんてのは土台不確実なものか……。

（サクッと斬れれば楽なんだけどね）

まあ、そうもいかないのが事実か……。

「あんたは仲間の敵討ちだとか言ってたが、そもそもその仲間はクソだぜ？　酒場で人様に絡んできた上に、その場で身体に手を伸ばしやがった」

「……」

滔々と語られるそもそもの切っ掛けに、周囲の村人達が俄かに騒めき始めた。

村で人気のパーティーが手を出そうとした。しかも同意も得ずにってのは、それなりの醜聞だ。まあ、それでも村人全体に伝播するには時間が掛かるだろうけど、昨日の晩に近くにいた人間達も居ないでもない。勿論、喧騒に酔っ払い、真面に話にならない可能性の方が高くもある。けれど、あの場で騒ぎがあった事は幸か不幸か目の前の彼女が村全体に此処まで大きく喧伝してしまっている。少なくとも、いざこざがあったのは事実。そして、いざこざがあったとしたら、何故？　何でそこで？という疑問符が付いて回る。こっちは事実を繰りかえせば良いが、向こうは周りを信用させられる嘘を吐く必要がある。そういう意味で、サルバの方が達成目標が楽な位置にあるというのもあるだ

ろう。
「そして、それを、お前は俺達の方がちょっかいかけたって事に仕立てようとしやがった」
「……」
「お前も、あのクズ共のリーダーにうってつけなカスだな」
そう吐き捨てたサルバが引き金に人差し指を食い込ませた。いや、それは流石に不味いからね？
「……」
「……」
「……」
「……」
一瞬、サルバと視線が合った。……多分。
「……まあ、これ以上どうこう言っても仕方ない」
「……」
ああ、どうやら、ちゃんと伝わっていたらしい。
「俺達は村から出て行く。……それで良いだろ？」
「……」

お互いこれ以上掘り起こしても面倒なだけだ。落とし前は付けた。なら、後は不要だ。そう告げるサルバの言葉に、一瞬男装騎士さんが顔を顰める。最初の目的が達成された段階で告げていれば、まだ飲みやすかったかもしれないけど、今は情況的にそこから一歩足を踏み出してしまっている。まあ、要するに欲をかいたって事なんだけど。その分の無様さを飲み込めるか……。

「良いだろう……」

（へぇ……）

色々と欲をかいた割には何だかんだで引くのか。

（うん、優秀なリーダーなんだろうね）

勝てると思った時にがめつく、負けを知ったら手早く損きりをして、可能な限り値切る。

阿漕なやり口だけど、そういう汚れ仕事を平然とこなして、尚カリスマを失わないのが良いリーダーの資質の一つではある。

現状、形勢は不利とは言わずとも好き勝手出来る潮目を逃している。これ以上は自分達への不信感につながりかねない。その辺は理解しているという事でもあるだろう。うん、本当に、

「冒険者らしくない……ね」

「ん？　何か言ったか？」

ちょっとだけ、サルバの耳に届いちゃったらしく、サルバが不思議そうに首を傾げた。小声で取られた確認に首を少しだけ横に振ると、「そうか」と再度囁いて、サルバは両手を抱える僕を無理矢理引き上げる。抱きかかえられるままに、立ち上がりながら、一先ずこの場から去るまではと全体重をサルバの腕に預ける。

「……」

下手に、自力で動いて、変に勘繰られても困るという事情もあり、サルバもそれが分かっていてくれてるらいく、特に文句を言う事も無かった。

「じゃあな」

言葉少なに、サルバが背中を向けると、後の村人達のざわめきが一度大きくなり、そしてすぐに花火の様に掻き消え、後は引いたさざ波の様な雑音だけが残ったのだった。

さて、無事に面倒な盤面から抜け出せた訳だけど。
「もう、誰も居ない？」
「おう、大丈夫だぞ」
「荷物は？」
「ん」
振り返って見せたサルバの背中に二人分の背嚢が確かにあった。うん、
「よし、じゃあさっさと行こうか」
「ああ」
一先ず、この村で出来ることはひと段落したしね。
頷いたサルバから背嚢を一つ受け取ると、村の外へ続く道を歩き出す。可能な限り素早く。そして、出来る限り無様に。理想を言えば、誰の記憶にも残らないのが一番なんだけど……まあ、そのプラン自体はサルバがあの三人組に絡まれた時点で破綻していたとしか言いようがない。上手く話を合わせる、或いは行き摺りで身体を許す馬鹿な冒険者のふりをするというのもあったかもしれないけれど、少なくとも僕は男相手にそれは御免だし、サルバに頼むのも酷だろう。
「……なあ」
「ん？」

「大丈夫だったか？」
　村が遠くなり、そして、視界から消えた頃、其れ迄黙々と後を付いてきていたサルバがおずおずと言った様子で口を開いた。
「？　何が？」
　というか、どうしたんだろう、急に。
「何か悪いものでも食べたの？　口に指突っ込んであげようか？」
「言うに事欠いてこいつは……」
　何か、凄い呆れられた。あれ？
「さっきの決闘もどきだ。怪我してないのかって」
「問題ないよ？」
　というか、あるわけ無いし。
「サルバがぶち切れながら割って入ってくれたからね」
「そうか」
「美人が怒ると本当に怖いよね。村人も尻尾丸めちゃったし。まあ、中身は男なんだけどさ」
「そんだけ軽口叩けりゃ問題ないな」
「まあね」

くすくすと笑ったサルバに肩を竦めて返す。
「でも、間に入ってくれて助かったってのは本当だよ。ありがとう」
助けられたのは事実だった。
「あ？　何か悪いもんでも食ったのか？」
「はっはっは。言うに事欠いてだね。この野郎」
こういう反応になるのも予想していたけどね。さて、
「ま、それは置いておいてなんだけど、一つ、新しい発見があったよ」
それは置いておいて、最後の最後に拾った、思わぬ……でもないか。但し、不信感を補強するに足る情報を共有しておくことにする。
「？　何があったんだ？」
「さっきの男装騎士さんなんだけどさ」
「ああ」
「多分、冒険者になる前に人殺しを生業にしていた人だ」
さっきの決闘。その中での彼女の動きを思い出しながら、僕は想定をサルバに告げる。
「……騎士か？」
少し考えたサルバが、一先ず穏当な答えを出す。

「んーん。それはないね」
　が、残念ながらその可能性は限りなく低い。
　確かに、騎士は対人戦を想定した訓練を受けるものだし、あの男装騎士さん、実際は騎士かは分からないけれど、彼女の風貌とかを考えると、的外れな意見ではない。ただ、
「あれ、かなり日常的に人を手にかけてた人間の動きだった」
「てことは治安維持の可能性は低い……あっても、荒事か汚れ仕事専門の部隊ってところか」
　意図するところが直ぐに伝わったのか、そう言ってサルバは首を傾げた。
　そう、現在の国の事情を考えれば、殺人を日常にしている職業は非常に限られてくる。
「候補となる前職は山賊とか暗殺とかそういうのを抜きにすると、一番穏当な所で軍人、一番妥当なところで傭兵ってとこか。後はギルドナイトと……」
「ダンジョン閉鎖士……だね」
　一つ一つ上げては指を折るサルバの丁度薬指に合わせて、言葉を重ねる。
「……」
　意図するところが伝わったのか、前髪を揺らしながら振り返ったサルバの目が何となく鋭くなった気がした。
「お前が想定しているのはダンジョン閉鎖士か？」

「断定はできないけれど……ね」

彼らしく、率直に尋ねてくるサルバに、肩を竦める。実際、ボクとしても断定できる要素はないのだ。

「理由を聞いても？」

神妙な顔をしてくるけど、直接の理由は単純に一つだけだよ？

「ダンジョンで妙な事しようとしていたパーティーのリーダーだった」

「そりゃそうだ」

物凄く当たり前の事だけど、ねえ？

「ダンジョンで妙な事をするって事は、最低限ダンジョンの状態を確かめられる人間、つまりダンジョン閉鎖士があの中に居るって考える方が自然だからね。勿論、他のパーティーメンバーがダンジョン閉鎖士だった可能性も無きにしも非ずだけど」

「単純に考えりゃ、ダンジョン弄ってたパーティーのリーダーが対人戦に秀でてるってなると」

「そ。彼女がダンジョン閉鎖士だったって考える方が色々とすっきりするよ」

特に対人戦に秀でているというのは大きな、或いはダンジョンを弄っていたという事情よりも大きな意味を持つかもしれない。

僕が冒険者のふりをしてのダンジョンへの潜行で戦闘に今一手間取っているのは、そ

れだけ狙うべき獲物と扱う武芸というのが密接に繋がっているというのが一番の理由だった。そして、彼女の剣、といういうよりは戦い方の癖、あれはどう考えても冒険者のそれじゃない。対人、というか殺人を前提にした戦い方だ。
「これをちょっと見て欲しいんだけど」
「ん？」
首を傾げたサルバに、丁度さっきまで手に嵌めていたグローブを差し出す。
「これは？」
「愛用のグローブ。指の保護のために、拳の部分に金属の筒が仕込まれてるんだけど……」
「お……」
その指の部分をひっくり返して見せれば、
「やっぱり」
見事にひしゃげて潰れた金属片が姿を現した。
「これ、さっきの決闘か？」
「うん」
「お前の方は大丈夫なのか？」
「来るって分かって、指引っ込めてたから大丈夫」

「蜥蜴か」
「どっちかって言うと蛇じゃない？」
　何となくだけど。
「やっぱり、ただ単にやられるたまじゃねーな、お前」
「解らないよ？　僕だって正義の味方に一方的に斬り殺される日が来るかもしれないし」
「それこそ、そんなたまじゃねーだろ」
　そう言って、サルバは肩をすくめた。
「まあ、その辺は置いておいてなんだけど、指ってある程度そういうのに慣れた人間じゃないと、あんまりやらないんだよね」
「ああ、モンスター達だと、指狙ってってのはあんま意味ないもんな」
「対して人間には効果絶大と……」と、僕の意図したところを全て察してくれたらしいサルバが小さく頷いた。
「指を狙うなんて技、対人でしか役に立たない。しかも、手間も大きいから、集団戦では今一使いづらい。殺し慣れているけれど、集団戦を想定していない。1対1を想定しているけれど、暗殺者みたいに見えないところからってのは考えていない。なら消去法でギルドナイトかダンジョン閉鎖士……まあ、後付けの理由だけどね」

「だが、無視も出来ねえ……か」
「まね」
　むしろ、その通り。
「ギルドに戻ったら、調査依頼を出すよ。それと資料請求。あのミロって男装騎士含めた五人の素性と周辺ダンジョンの状態。もしかしたら、中々に不味い事実が隠れている可能性もあるしね」
「あいよ」
　頷いたサルバを連れて、心持ちギルドへの足取りを早くする。
　さてさて、鬼が出るか蛇が出るか。ただ一つ分かっていることがあるとするなら、
「ろくなことにならないのは間違いないよなあ……」
　半ば以上確信をもって、僕は思わずそんな言葉を溢していた。
「？　何か言ったか？」
　後ろで首をかしげたサルバに「んーん。何も」と告げて送った足を更に一つ急がせることにした。

六

さて、あの決闘の後、そそくさと逃げるようにトウトウ村から出た僕達は、その日の晩には恙無くロハグのギルドへと戻っていた。
「ただいま戻りました、ギルド長」
「ああ、お帰りアル坊サル坊」
「……坊は止めてもらえねえか？」
「じゃあ、〝嬢〟の方が良かったかい？」
「……いや、やっぱ、サル坊で良い」
惚けるギルド長に、サルバは顔をしかめて「やっぱ、アルタの上司だわ」と呟いた。失礼な。僕はここまで根性ねじまがってないよ？
「その言葉を口にする時点で根性腐ってるじゃねーか」
「まあ、その通り」
よく分かったね？
「わからいでか」
「そう？」

「そうだろ」
「そっかー」
　そっかー。
「楽しそうだねぇ、あんたら……」
「ん？」
　呆れたように呟いたギルド長が、カンッとくわえていた煙管を灰盆に打ち付け、ぬっと首をかしげながら「それで……」と身を乗り出してくる。
「こんなに直ぐに戻ってきたってことは、何かしら確信に近いものを見付けたって事かい？」
「いいえ」
　残念ながら、其処までは。
「但し、不自然に好都合な事象は複数」
「ほう……」
　囁くように頷いたお婆さん（ギルド長）はニィィッと皺だらけの頬を歪める。
「それは結構結構」
「世間的には不結構なんですけどね」
「ま、そりゃそうだな」

僕が茶化すと、サルバがぼやくように肩をすくめた。
「それじゃあ、そのお前さんの見付けた不自然って奴を言ってみな……残らずあたしが食ってやる」
「……何か、言い方がいやらしいな」
「年考えるべきだよね」
「てめぇらから食うぞ、このがきどもっ!!」
「やめてください。インポになっちゃいます」
「やべ、想像したら吐き気が……」
「こいつらは……」
いや、割りと本気でね。
「ま、良いや。取り敢えず、始めますね」
ぴくぴくと青筋を浮かべるギルド長を無視して、トウトウ村で書き取った、幾つかの調査結果を机の上にに広げる。
「まず、ダンジョンその物の追試験に関しては、僕の調査も前の調査と同様、モンスターの密度が若干ではありますが全ての地点で増えているという結果になりました」
「ふむ」
「数字自体は微少ですが、ダンジョンの性状としては……」

「〝異常〟……だねぇ」
　相槌を打つギルド長に、僕も肯定を返した。まあ、ここまでは予想通り。実際、僕がやったのも単なる追試験だしね。
「で、此処からが本番なのですが、調査の最中に偶然なのですが奇妙な一団を見付けたんです」
「奇妙な一団？」
「ええ。ダンジョンの、しかも最奥のいずれ〝ダンジョン・コア〟が出現すると思われる部屋に〝土〟を撒くパーティーが」
「……」
　考え込むギルド長の前に、持ち帰った〝土〟を差し出す。
「中身の臭いを嗅いだところ、どうやらこの〝土〟、〝ダンジョン・コア〟と近い代物みたいでして」
「ふむう？」
　首をかしげながら受け取ったギルド長は、その包み紙を開くと、ぺろりとそれを少し舐めた。
「まさか……」
　恐らく、半信半疑、いや、心底という意味では殆ど予想だにしていなかったのだろう。

〝ダンジョン・コア〟の味を察知したギルド長はカッと目を見開いて呟いた。
「最後に、これを撒いていたパーティーの人間に、対人戦に長けた人間が居ました」
「騎士崩れ……ではないんだろうねえ？」
「はい。間違いなく、ギルド系の。……そして、〝ダンジョン・コア〟に近しい土の事を考えた場合、何者かって言ったら」
「ダンジョン閉鎖士だった可能性が最も高い……か」
「と、思いますね」
呟くギルド長に肯定を返すと、此処までの話を吟味するように「ふむ……ふむ」と頷かれた。
「……状況は良く分かったよ」
「サクッと尋問したりするのか？」
その所長を見ながら首を傾げるサルバに僕は今度は否定を返す。
「いや、まだ手は出さないと思うよ。背景が洗えていないから」
「背景？」
「うん」
首を傾げるサルバに、状況を返す。
「現状、あの冒険者達を捕まえるのは既に既定路線なんだけど、そもそもの問題として彼

らが何故、それを実行したのかっていうのが分からないからね」
　勿論、捕まえて吐かせるってのはあるけど、それをしている間に、もっとヤバイ後ろの人間を取り逃がす危険があるから。
「後ろの人間？」
「うん」
　首を傾げるサルバに僕は頷いた。
「彼らがああいうことをやった動機って何だと思う？」
「動機……」
　問い返すと、はて？　と首を傾げたサルバが「うーん」と唸った。
「金……以外にあるのか？」
「そうだね、郷土愛とかの可能性がないでもないけど、基本的には報酬がありきだと思う。けど」
「ああ」
「その報酬って一体誰が、何のために支払うんだろうね？」
「あー、そっちがあったか」
　僕の問い返しに、納得したように頷いた。
「ここからは僕の推測だけど、確かにあの村はダンジョンは保有している。それこそ、村

の規模を考えたら、慎ましく暮らせば大分長く使える程のね。けど、B級の冒険者にあからさまに危ない橋を渡らせられるだけの金額っていったら相当だし、それを果たしてあの村が支払えるかって言ったら」

「仮に支払えても、村そのものが傾く……か」

「そーゆーこと」

そう、ダンジョンの維持。この目的そのものは確かにリターンが大きいものだ。けれど、それ以上の問題点として、投資に対するリターンが見合うのかという疑問が湧いて来る。そもそも、危ない橋を渡らせて、報酬をけちる事なんて出来ない。やってしまったら、今度はその人間の口から事が漏れる危険もある。

「確かに、直接リターンがあるのはあの村だけど、それ以外の条件が悪すぎる。まあ、面と向かうのはあの村だし、一枚たりとも噛んでいないって事はまず無いだろうけど」

「実際の支払いをするのは、もっと上流の……何かしら、このコストパフォーマンスの悪い行動から十分なリターンを吸い上げられる仕組みを考えられる人間って事か」

訝りながら顎を撫でるサルバの意見に僕は頷く。まあ、蓋を開けたら大外れなんて事もあるだろうけど、僕やギルド長が懸念していたのはその辺だ。

「取り越し苦労の可能性もあるし、その方が全然良いんだけど、とんでもない結果になる可能性もある以上、慎重に事に当たって困る事はないからね」

敵の存在を知らずに、闇雲に手を出したらこっちの方が被害を受ける危険があるからね。

「だから、接触前にまずは洗い出し」

最低限、それをやるだけでも降りかかってくる危険は大分解消されるはずだ。

「この仕事、妙な絡みとかバックが居ることがあるからね。慎重になりすぎるって事はまずないし」

「成る程な……」

と、納得し掛けたサルバが「ん？」と首をかしげた。

「でも、調べるってどうやるんだ？　流石に足で一々聞き込みしてたら効率悪くねーか？」

「ああ、それはね」

もっともな疑問と共に首をかしげるサルバに、ギルド長の机の上の小さな鈴を指差すと、目の前で書面の点検をしていたギルド長がそれを取り上げて、ちりんと一つ鳴らしたのだった。

「ん？」

飴色の酒に落とされた氷よりも澄んだその音色は、次第に反響するように大きくなり、やがて掻き消えると、いつの間にか十人を越えるギルドの職員が音もなくギルド長

室へと身体を滑らせてくる。
「うおっ……」
突如、背後に充満した気配に、サルバが女性の体にしては分厚い肩を跳ねさせる。初めてだと驚くよね。分かる分かる。
「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」
無言。そして、無表情に佇む彫像のようなギルド職員。一糸乱れぬその姿は、端的に言って気持ち悪い。何となく、人間らしさを感じないのだ。
「こ、こいつら……人間か？」
どうやら、サルバも同じ感想を抱いたらしく、こくりと唾を呑みながら、そう尋ねてきた。うーん、
「実を言うと、僕も知らないんだよね」
「ええ……」
あ、何か呆れられた。
「一応、同僚だろ？」
「それはそうなんだけどさ」
でもなぁ、
「何だよ？」

「僕の仕事で用があるのは彼らじゃなくて、彼等が提出する資料だから、正直どうでもいい「口ごもったくせにバッサリいくな!?」
　そう？　……、
「まあ、いいや」
「いいのか……いや、お前がいいなら、別にいいけどさ」
　そう言って、肩を落とされた。
「……何となく、お前と似てる気がするな」
「そう？」
「爬虫類じみてる所とか、特に」
「酷いね」
　けど、まあ、正解。
「僕も彼等も、ギルドに道具として育てられたって意味ではある種の兄弟とも言えるかもしれないね」
「嫌な兄弟だな」
「けど、優秀だよ？」
　言ったことだけを確実にこなしてくれるし。
「それを躊躇なく優秀の一言で片付けるお前が素直に怖いっつの」

「そう？」
　むしろ、大抵の人間は僕と同じ感情を抱くんじゃない？
「仮にそうだとしても、それを口にする奴はまずいねーだろ」
「そういえばそうだ」
　言われてみれば。……、
「ま、やっぱりどうでもいいや」
「いいのかよ」
「うん。別に」
　そんな事より、
「取り敢えず覚えている限りの情報はさっきの書類に記載して申請書も取り付けたので、宜しくお願いしますね」
「あいよ」
「「「「「「「「「「……」」」」」」」」」」
　ギルド長が差し出した、僕の報告書を受け取り、再び無言で部屋を出ていく職員達。
その姿に異様なものを感じたのか、サルバはなんというか、終始怪訝な表情だった。
「ま、そう、心配するんじゃないよ」
　そう言って、ギルド長が嗤った。

「アル坊が言った通り、あの子等は能力そのものは優秀極まりないからねえ」
「はあ……」
　信じて、いや、実感がわかない？　……そうだなぁ、
「具体的には、その冒険者がダンジョンで何回タチションしたかまで把握してくれるくらいだね」
「普通に気持ち悪いな!?」
　はっはっは。
「でも、その気持ち悪さがギルドの大きな武器だからね」
「物凄く、言い方に悪意がないか？」
「悪意があったらこんなものじゃないよ？」
　普通にボロクソだよ？
「……そういやあ、お前はそういう奴だったな」
「そうだよ」
　段々、僕の事分かってきたじゃん。
「まあ、それでも、事細かに揃えるにはある程度時間が必要になるから、それまでは暫く各自待機だね」
「待機か」

「実質、これが僕達の休日……ってまあ、冒険者だと、そもそも休日って何？って感じかな？」
「あー、まあ、あんま、縁はねえな。面倒な時は勝手に休むし。ただ、ギルドの職員が交代で休んでんのは知ってるぜ」
「そう？」
「おう」
じゃ、いいか……あ、
「サルバは休日に予定はある？」
「？　いや、特にはねーけど」
「それじゃあ、明日ちょっと付き合って。今のうちに行っておきたいところがあるから」
「別に構わねーけど……」
「ありがと。明日の朝、ギルドの開く時間にここの裏口で待ってるから」
首をかしげるサルバに手を振り、僕は急いで退散する。唐突に思い出した事だけど、行っておかないと駄目だよなあ。問題があるとしたら、
「サルバが逃げ出さないかって事だけな訳だけど……」
ま、そこは僕の捕獲能力次第かな？　でも、サルバの逃走能力がどの程度のものかってのも分からないしなあ……うーん、

「準備、しておくに越したことはないよね」
付き合わせた結果、サルバが取るであろう行動を思案しながら、僕はサルバ（獲物）を確実に絶望に叩き落とす方法を思案するのだった。

◆

翌日、何時も通りギルドの裏口に向かうと、先に着いていたらしいサルバが、その所々ペンキの剥げた木壁に身体を預けながらひょいと片手を上げた。
「よ」
「ん。おはよ」
僕がそれに手を振って返すと、サルバはのそりと寄りかかったギルドの壁から離れ、ややゆっくりとした足取りで此方にやって来た。
「待たせた？」
「いや、俺も丁度今来たところだ」
首を横に振ったサルバの唇から盛れた吐息は、少しだけ甘い果実酒の匂いがした。よ

く聞くと、声も少しがらがらしている。
「飲み？」
「いんや、帰り道で酒瓶片手に絡んできた冒険者殴り飛ばして耳撃ち抜いた時にあいつらが投げ捨てた、まだ開いてなかった一本持って帰っちまったんだよ」
「また？」
「また」
そっかー、またかぁ……。
「んで、持って帰っちまったもんは仕方ねえし、何より人様の尻に手を伸ばしてきた馬鹿に一々返す気にもならなかったから、全部宿で飲んだんだよ」
「そういうことね」
何だろう、その光景が容易に想像できちゃうなあ……。
「美人も大変だね」
「おぞましいこと言うんじゃねえ」
はっはっは。
男性らしさの欠片もない豊満な胸を掻き抱きながら、「マジで気持ち悪い、寒気がする」と文句を言っていたサルバはリアクションに飽きたのか、不意に肩をすくめて「で？」と首をかしげてきた。

「ん？」
「行っておきたいとこって何だよ？」
「ああ」
　そういえば、言ってなかったよね。いや、わざとだけど。
「ダンジョンに入る準備なら、今から用意しておく必要はねーだろ？」
「ま、そうだね」
「まして、ダンジョン閉鎖士なら、潜るのはもう枯れたダンジョンだろ？　それとも、ダンジョン関連以外に、ダンジョン閉鎖士の仕事ってあるのか？」
「……」
　うーん、鋭い……いや、別に鋭くもないけど、普通に普通の疑問を抱いてくるね。
存在自体（中身男外見女）がふざけてる割に、案外常識的だよね、ホント。
「何か、言ったか？」
「言ってはないよ？」
「……」
「……」
「……」
「……」

「このやろう」
「残念」
サルバは発砲した。僕は回避した。
「まあ、行き先は着いてのお楽しみ……かな」
「勿体ぶるな」
「損はさせないよ？」
だから、騙されたと思って付いてきてみてよ。
「ま、良いけどよ……」
そう言って肩をすくめながら付いてくるサルバを連れて、僕は例の店へと向かうのだった。

「……は？」
目的地に着くと、サルバは長い長い沈黙の末、一言だけ漏らした。……別にいいか。
「さ、入るよ」
「いやいやいや、ちょっと待て、手を引っ張んな。せめて、何で此処に入る必要が有るのかくらい言ってくれ」

「？　説明必要？」
「むしろ、何で要らないと思ったんだよ」
「そういうことにしておけば、生けに、サルバを無理矢理入店させやすいかなって」
「今なんて言おうとした、このやろう」
　深い深いため息と共にサルバは大きく肩を落とした。
「というか、物凄く聞き捨てならねー言葉が聞こえた気がすんだが」
「気のせいだね。さ、入るよ」
「うん、だからしれっと腕を引っ張んじゃねーよ」
「ダメか」
「ダメに決まってんだろ」
　不機嫌そうに顔をしかめたサルバは「んで？」と鼻を鳴らす。
「何でこんな店に、しかも野郎二人で入ろうとしてんだよ？」
　サルバが指さしながらこんなと評した店、それは店全体が少し濃いピンクに染められ、窓枠や細部にフリル風の意匠がふんだんに盛り込まれたお店……有体に言ってしまいえば、下着屋。それも、この町唯一のオーダーメイドが利く、そういうお店だった。で、まあ、何でこんなところに来たのかと言えば、
「必要だからね」

ぶっちゃけ、それ以外の理由なんてないし。
「質問を変えるぞ。何で必要だと思ったんだ？」
「サルバの胸を抑えるため」
「……」
むしろ、それ以外に何があると？　ほら、そこ、理解した瞬間に絶望したような顔しないで。
「身の程を知った？」
「言い方ぁ！　つーか、それ、そういう意味じゃねーだろ!?」
「まあ、どうでもいいじゃん」
「この野郎……」
「どうせ、サルバは地獄に落ちるんだし」
「本当にこの野郎」
はっはっは。
「まあ、実際、必要だって思っているのは嘘じゃないよ？　この前のダンジョンみたいに、途中でサルバの胸が引っ掛かったら……いや、最悪、逃走中とか戦闘中に引っ掛かったら、洒落にならないじゃん？」
「ぐ……」

僕の指摘に、サルバは歯軋りしながらも言葉を詰まらせた。ま、そういう反応になるよね。

サルバは元々B級の冒険者で、その辺の動かしがたい現実は誰よりもよく理解しているだろうしね。

「因みに、拒否したら最悪サルバの命はないよ？」

「何で下着一つでそうなるんだよ!?」

「だって、今のままだと単純にダンジョンに潜るのにリスクじゃない？」

「それは……そうだと思うけどよ」

「そのリスクをケアしないのは、おかしいよね？」

「まあ……な」

「そこまで分かっていてケアしないなら、流石に僕も面倒見切れないんだけど……そうなると、サルバはダンジョン閉鎖士補佐じゃなくなるよね？」

「おう……」

「さらにそうなると、ギルドってアホみたいに秘密主義なところがあるからさ、確実にサルバの息の根を止めるために最悪ギルドナイトを放つ可能性が」

「本当に手段選ばないのな!?」

「え？　マジで？」みたいな顔をされたけど、残念ながらマジなんだよなあ。ギルドは強

大で、そしてそれ以上に秘密主義だし、そういう閉鎖的な所が一種の力にもなってるからね。情報の独占がとっても儲かるのは古来より変わらない事でしょ？　しかも、サルバは僕にくっついて、色々と見ちゃった後だし。

「いや、確かにそうなんだが……」

　失敗したって感じで頭を抱えているところ悪いんだけど、残念ながらその失敗だけは挽回する機会が無いんだよね。あるのは清算する手段くらいじゃないかな？

「悪魔と契約するって実際こういう感じだよね、多分」

「自分でそれを言うか」

「いやいや」

　口を尖らせるサルバに、僕は肩を竦めて返す。

「僕なんてせいぜい悪魔の手先が良いところだよ。本当の悪魔は僕じゃなくてギルドの方でしょ」

　一応いたいけな、……自分で自分にこんな形容詞付けるのは吐き気がするレベルで気持ち悪いんだけど、実際幼少期の子供お金で買って、こんなの育成するだけでも十分悪魔でしょ。

「お前、本当に身も蓋もない奴だよな」

「だって、事実だし」

幾ら、表面上を糊塗しても、所詮そんなのは薄っぺらなお化粧にしかならないしね。
「さ、それより、そろそろ入ろ？　嫌な事とか、グダグダやってても、何時までも不愉快なだけだよ？」
「誰が俺を不快にさせてるんだよ」
「サルバの元恋人」
他に誰が居ると？
「何でそこに飛び火するんだよ？」
「だって、サルバがこのお店に入らなきゃいけないのは、サルバが今のままダンジョンに潜ると体形のせいで妙な事故が起きる危険があるからで、そのサルバの身体がそんな状態（女性のもの）になったのはサルバの元恋人の事故みたいだから」
「うん、言われたら納得するけど、それ、こっちにもダメージ飛び火してるからな？」
そう？　……
「まあ、いっか」
「よくねえからな、この野郎」
ぶつぶつと文句を言うサルバを連れて、お店の扉を開く。外壁よりも濃いピンクで染められた扉を開くと、そこには一面の下着世界が広がっていた。

下着、下着、下着

下着下着……下着下着

下着下着下着

「……うわ」

ある意味、男には縁がないその光景に、サルバが思わずといった風に感嘆を漏らした。

うん、これは僕も同意見。確かに、この光景は壮観だ。

「つーか、やたらとエロい下着多くないか？」

「まあ、娼婦御用達だしね」

繊細なフリルや透け透けのレースは、やはりオーダーメイドのお店でしか品質の良いものは扱えない。だから、オーダーメイドと言えば、大体はそっち系の客を興奮させるためのエグい下着を求めている人がメインの顧客となってくる。

「そういうもんか……」

「そういうものだよ」

だからね、
「むっ……」
「僕達がこういうお店に入れば、殺気を向けられるのも当然ちゃ当然なんだよね」
商品棚越しに向けられたそれに気付いたらしく、不意に辺りをキョロキョロと見舞わすサルバに種明かしをする。
「因みに、今言った通り、このお店は娼婦がメインターゲットだから、僕（ダンジョン閉鎖士）達を逆恨みしている人は多いよ」
「……マジでか？」
「マジだよ」
絶句して、思わずといった風に聞き返してくるけど、残念ながらマジなんだよなあ。
「この前も言ったけど、娼婦が大量雇用されるのって、村や両親にお金が無くなった時だからね。それは大概、大規模な不作か無秩序に稼ぎに使っていたせいでダンジョンの閉鎖に合わせて村の経済が破綻したことに依るものだから」
だから、探せば僕が直接閉鎖手続きした村の出身も居るんじゃない？
「ケロッとしてんなあ」
「別に、僕が気に病む義理も義務も無いしね」
単に仕事しただけだし。

「……ごっつい神経してんなあ」
「それくらいの方が、この仕事（ダンジョン閉鎖士）には良いらしいよ？」
ギルド長曰くだけど。
「さ、それより、注文だね」
雑談も良いけれど、取り敢えず注文は終わらせなきゃいけない。
一端話を打ち切ると、僕達はサルバの下着を仕立てて貰うためにお店の奥に向かう。
途中、下着を物色していた、明らかにそっち系の人達から殺気だった、或いは、不快感に満ちた、そんな視線が向けられたけど、ま、日常だよね。
「すみません」
「はいは……」
カウンターに着くと、銀色の鎖の付いた老眼鏡を掛けた、品の良さそうなおばさんがはっきりと顔をひきつらせた。
「さっきの気さくな笑顔は何処に行ったんだろうね？」
「少なくとも、お前には絶対に見えない何処かだよ……」
深く深く溜め息を吐くサルバ。失礼な。けど、その通り。
「まあ、ここも娼婦の人が主要顧客になるお店だからね。営業スマイルの一つや二つ、ダンジョン閉鎖士限定で有料になるよね」

「知ってはいたけど、本当にひどいな。というか、お前は何ともないのか？」
「え？　何で？」
「いや、だってこうも四六時中生活の中に地雷が埋まってるのって気疲れするし、単純にこういう店を好きに使えないって不便じゃないか？」
「別にどうてでも。他人が僕をどう思っているかとか、僕の仕事には関係ないし」
　大抵、ソロだからね。
「タフだな……」
「それに、仕事の直接的な妨害はこれがあるから」
　元々、この反応は予想の範疇。いや、むしろ当然といえば当然なので、逆に備えをしていないという事はあり得なかったりする。
「？　何だ、それ？」
「ギルドの強制執行証」
「おい」
　あ〝ギルド命令〟の方が通りが良かった？
「そこじゃねーよ」
　溜息を吐いたサルバが前頭部を抱えたせいでちらりと漏れた半眼で呻いた。
「何で、んな聞くからに物騒な代物を持ってるんだよ？」

「これが無いと、僕（ダンジョン閉鎖士）達なんて、真面に買い物出来ない可能性があるから」
決まってるじゃん？
「いや、んな異常事態をさも当然そうに語られても困るんだが!?」
そう？
「でも、サルバが最初にこの町に来た時に娼館に関して説明したでしょ？」
「ああ……」
「その理屈を他にも当てはめてみれば、大体同じ事情が予想できるんじゃない？」
「……」
あ、頭抱えた。
「もしかして、予想していなかった？」
「……」
無言で頷いたサルバが「マジかー」と天を仰いだ。まあ、気持ちは分かるかな。
〝ダンジョン・コア〟を使うためにダンジョン閉鎖士に成ったら、まさかの日常的にお金を使えなくなる可能性があるなんて誰も思わないよね」
はっはっは。
「笑うんじゃねえよ!?」
「ごめんごめん」

うん、此れはちょっと伝え忘れてたかな。はっはっは
「ま、もうなっちゃったものは仕方ないし、サクッと諦めて？」
「諦められるか!?」
「ほら、こうやって、恫喝すればちゃんと買い物出来るんだから」
「営業スマイルが無くても良いから、せめて普通に処理されてぇよ!?」
「確かに、多少蟠りは出来るし時間の無駄も発生するけど、その事をギルドに報告すれば、なんらかのペナルティは与えられるから、それで復讐って事で満足しよう？　上手くいけば、その店潰して店員全員路頭に迷わせられるんだよ？」
「こえぇよ!?」
「あ、それじゃあ、宜しくお願いしますね？　男のくせに女性の服を着るのは隣の彼です。……ぷっ」
「笑ってんじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!!!!!!!!!」
はっはっは。
「仲が宜しいですわねぇ……」
サルバの憤激に目を丸くしていた店長がそう言ってしみじみと呟いた。そうかな？
……、
「どっちでも良いか」

「よくねえよ、くそったれ」
　流石に、他所での発砲は我慢したみたいだけど、代わりにハイキックが飛んできた。
おっとっと。
「……と、いう仲です」
「はぁ……」
　何故か、店員さんに呆れられた気がする。……あれ？
「まあ、私としましては、ギルドからのご紹介である以上、お断りする気は毛頭ございませんが」
「だってさ？　地獄に落ちておいで」
「この野郎、あとで覚えてろよ」
「いたっ」
　そう言いながら、今反撃してくるのね。
「一応、当店はお客様に満足のいく、製品を御出しすることをモットーとしておりますので、その様な地獄等という事はないないと思われますが……」
「ああ、失礼。そうじゃなくて、サルバが単純にブラジャーを着けたがらないというだけなので」
「まぁ……」

端的に事実を告げると、店員のお婆さんは「有り得ないことを聞いた」といった風に口を押さえた。
「世の女性なら、当たり前の事ですよ？　そんな、成長し始めの女の子じゃあるまいし」
世の女性じゃないからね。むしろ、その逆。
が、当然そんな事を知っている筈もなければ、想像できる筈もないわけで。
「きっと、これまで素敵な下着に出会えなかったのね」
（おい、激しく謎の方向に納得されてるんだが？）
（僕は悪くないから）
変に訂正入れても混乱するだけだよ？　ほら、そこ、手をホルスターに伸ばそうとしてわきわきさせないで。
「させてんのはお前だ」
「しなきゃいけないシチュエーションになったのは僕のせいじゃないよ」
それは、サルバの生まれた星が悪かったとしか言いようがないよね。
「チクショウ……」
「そういうことなら」
呻きながらサルバが頭を抱える前で、店員さん……店長さん？　がパンッと手を打ち、

「早速寸法を取りましょう！」

と、朗らかに言った。

「「……あ」」

そして、それは僕とサルバは予想していなかった。いや、気付けなかった。

「そりゃ、オーダーメイドなら必要に決まってるか」

はっきりと硬直するサルバの隣で僕は納得と共に頷いた。いや、そうだよね。そうに決まってる。けど、

（あ、やっぱり固まってる）

当然ながら、ひきつった顔をしたサルバがギギギッと例によって錆びたブリキ人形のように振り返る。揺れた前髪の間から覗いた目が必死に助けを求めているけど……。

「ごめん。無理」

物理的にも精神的にも。

「さ、行きますよ」

この世の終わりのような顔をして引き摺られていくサルバを見送りながら、僕は一先ず、手近に置いてあった布切れをヒラヒラと振ったのだった。

◆

「……」

（うん、気まずい）

結局、あの後試着室に連れていかれたサルバはどうやら、散々寸法を取られた上に、店内にあったありとあらゆる下着を試着させられたらしい。一種の調整の意味もあったらしいけど、それ以上に、此処まで美人でスタイルがよく、その上おっぱいが大きくて、そのくせブラジャー下着を着けていない客というのが、店員さんの琴線に触れたらしい。おばさんが満足する頃には既に日は西日となり、店内に差し込む光はすっかり赤くなっていた。

当然、そんな長時間着せ替え人形にされたサルバの消耗は肉体的にも精神的にも激しく、ものの見事に何処からどう見ても、丁度今しがた暴行されたばかりの目をしたガン

マンの出来上がりとなってしまったのだった。
「ん？」
流石に可哀想だし、今晩くらい僕が奢ろうかなんてらしくないことを考えていたら、不意に人の気配を感じる。
「「「……」」」
視線の方を向いてみると、そこに居たのは数人の顔面に青アザやたん瘤、そして、耳に銃創を負った冒険者達だった。
「……誰？」
いや、ほんと。
「誰だとぉ？」
あ、何か、勘に障ったみたい。と、言われてもなあ……。んー？
「僕にダンジョン閉鎖されたせいで、離散した村の誰か？」
正直、憎まれる回数は数あれど、憎まれる理由はそれくらいしか思い付けなかったりする。僕、他人との交流自体がそれくらいしかないしね。
「それはそれでどうなんだ」
そう？
「なわけあるかあっ!!!!」

あ、違った。

「じゃあ、何？　邪魔だから退いてほしいんだけど」

いい加減、お腹すいたし。

「……その女、置いてったら通してやるぜ？」

ぷんと表通りの食堂から届いて来る、肉の焼けた良い匂いにそんな事を考えていると、五人の男の人達が顔を見合わせ、そして、その中のリーダーらしき長髪の男性がそんな事を言ってきたけど、うん？

「別に貴方達に許可貰う必要はないんだけど。この程度の道理も理解できないって痛々しいんだけど、何で自分達が関税取れる立場だと勘違いしちゃったの？　薬のやりすぎ？　だったら大人しくそういうパブに引きこもって二度と出てこないで欲しいな。他人の迷惑だからさ。そういうお店の店員呼ぼうか？　有料で請け負っても良いよ？」

ていうか、

「……」

（あー、やっぱり怒ってる）

案の定、女性扱いされたサルバが青筋を浮かべていた。いや、その部分に関してはむしろ相手の方が正常だよ？　気持ちは分からないでもないけど。

「あ？　てめぇ、そんな舐めた口きいてられんのか？」

「？」

何が？

「俺達はな、B級冒険者の」

「だから？　それと権利も無い関税に何の関係があるの？　というか、権限のない人間の徴税は普通に犯罪だからね？　大丈夫？　脳味噌死んでる？」

「ぐっ!!」

あ、顔が真っ赤になってる。

（……おい）

（ん？）

そうこうしているうちに、何かに気が付いたのか、サルバが耳元に口を寄せて来た。

（何？）

（こいつら、あれだ。俺が二日酔いになった原因の）

（ああ、朝言っていた？）

（おう）

頷いたサルバの前髪が軽く耳を擦ってきて少し擽ったい。けどそっかー、そういう奴らかー。

「サルバ一人に殴り倒された集団か……逆恨みじゃん」

「だな」
「粋がってんじゃねえぞコラァ!!!」
サルバが肩を竦める間もなく、五人のうち後ろの方に居たいかつい体格の騎士崩れ風の男が吠えてきた。うるさいなあ……。
「落ち着けコウコ」
「ぬ……」
あ、リーダーっぽいのに窘められた。だけど、周りの仲間に目配せすると、直ぐに全員が腰に差した剣を抜いた。
「結局力尽くね」
「はんっ、好きに言え」
僕の感想を鼻で笑うと、近寄ってきたリーダーっぽいのが当然の様に剣を突き付けてきた。うーん、
「おい、ダンジョン閉鎖士。命が惜しけりゃ、そいつ置いていけ。これは命令だ」
「……」
命令ねえ?
「知ってるんだぜ? 〝耳削ぎ〟アルタ。てめーの〝耳削ぎ〟って綽名はてめーが人を殺せねーから仕方なしに耳を切ってたから付けられたものだってな!」

（へぇ……）

どうやら、こんなバカな事を言っている割には僕の事を調べていたらしい。うん、まだ若干は小さな脳味噌の中に薬物に犯されていない部分があったらしい。けど、

「おら、来い！」

結局、こっちの話を聞く事も無く、端っこの頬のこけた男がサルバに手を伸ばした。ふむ、

「勘違いも良いところなんだけどなあ……」

「「「……なっ!?」」」

一先ず、手近な所に居た、リーダーっぽい長髪の首を抜き打ちで斬り落とすと、残りの四人は目を丸くした。うん、ナイス。

「ふっ！」

邪魔だった、首なし死体の直立した身体を蹴り退けて、次の一人の脳天に一刀を落とすと、ちらりとサルバの驚いた顔が見えた。何と言うか、「え？　良いのか!?」って顔を

しているけど、
（別に良いよ？）
　いや、本当に。
　若干躊躇いながらも、昨晩の絡み酒と今しがたの女呼ばわりで腹が立っていたのか、躊躇なく抜かれたサルバの愛銃の発砲音がパァン！　と裏路地に響く。同時に眉間に風穴を開けた冒険者が物も言わずに吹っ飛んだ。ああ、もう死んじゃったね。
「なっ!?　なっ!?」
「ひ、ひいいいいい!?」
　そして、残った二人に、僕とサルバはそれぞれ切先と銃口を向けて、動きを止めた。
「うーん、取り合えず続ける？　それとも、降参して、奴隷船送りになる？」
「酷い二択だな」
「彼らの自業自得だよ？」
「な」
「ん？　決まった？」
「な……んで」
　どうやら、違ったらしい。最後に残った二人の内の一人、頬がこけた方の男が青い顔をして呟いた。

「いや、他人に剣向けたら、そりゃ反撃されるでしょ」
やっぱり、薬漬けか。
「ダ、ダンジョン閉鎖士は命は取らねえって、そう聞いたのに……」
「あ、そういう事か」
成程ね。サルバを捕まえるために、情報収集した結果、そんな話を聞いたのか。だから、あれだけ余裕たっぷりに突っ込んできたと。
「残念だけど、それは的外れだね」
勘違い……いや、まあ、確かに大抵は耳を削ぐだけで終わらせているけどさ。
「俺もちょっと気になったんだが」
「サルバも？」
「ああ。今までは殺すなってばっか言ってたからな」
「まさか、ゴーサイン出されるとは思わなかった」とサルバが首を傾げた。そういえばそうだったね。
「じゃあ、良い機会だし、説明しちゃおうか」
「おう」
頷いたサルバに振り返る前に、僕は一先ず冒険者二人の剣を手首ごと斬り落とす。
「「ぎゃっ!?」」という猿の様な悲鳴が、人気（ひとけ）が薄い夜の裏路地に反響した。

「まず、僕は別に博愛主義者じゃない」
「それは見てりゃ分かる」
　だよね。
「当然、ダンジョンを保有していた村の人達を斬らなかったのも、博愛精神なんてものの発露じゃない」
「だろうな」
　頷くサルバ。けど、生き残りの二人は何か絶望した様な顔でこっちを見上げてきている。ああ、僕の人となりは知らなかったのね。そして、自分の命が何時の間にか風前の灯だと知ったと。うん、残念だったね。
「別に怨んでも良いけど、僕は知らないからね？」
「そこは、『怨むなら自分のバカさ加減を怨め』って言うところじゃねーのか？」
「だって、誰が誰を怨むとかどうでも良いし」
「お前らしい理由だよ」
　そうかな？
「ま、良いや」
　それはそれとして、
「僕が彼らを斬らなかったのは、単に彼らがその土地の貴族の所有物であって、斬っちゃ

うとギルドと貴族様の間で賠償問題に発展するからってだけだからね」

つまり、器物破損。

「？　冒険者は違うのか？」

「基本的にはね」

まあ、一分の、本当に一部の貴族お抱えで、かつ、土着の冒険者なんかは貴族の所有物だったりするけどさ。

「冒険者は基本的にダンジョンからダンジョンへ、渡り鳥みたいに拠点を移すでしょ？」

「ああ」

「だから、単純に縛っておけないっていうのと、仮に縛ってしまうと今度はダンジョンが枯渇した後に暴動の核になる危険がある事、そして、ダンジョンの開設時に起きる、人の流入を鈍らせる事、こういった事情もあって冒険者はギルドに登録した段階で、他の貴族から所有権が消える仕組みになっているんだ」

代わりに、冒険者が派手に使うお金が、実質冒険者の税金とも言える。

「マジか……冒険者やってたけど、初めて知ったぞ、それ」

「変に知れ渡ると、今度は貴族からお金を借りたりした人間が、借金の踏み倒しのために一度奴隷になってギルドの門をたたくって事になりかねないから」

「成程」

「まあ、貴族様が異議申し立てをすれば一応ギルドから冒険者を引き渡すことも出来ないではないんだけど、借りている金額が貴族様の身代に対して中途半端に小さいと、異議申し立てした時点で足が出ちゃったりするから、見逃さざるを得ないってパターンになったりする」

　証拠集めとか結構面倒だしね。

「結構、色々あるんだな」

「まあ、単なる食い詰めとかなら、そこまで問題にもならないけどね」

　で、それはさておき。

「ギルドの冒険者は基本的に誰の所有物でもないって扱いになるって言ったけど、逆に言えば、誰のものでも無い以上、僕達ダンジョン閉鎖士が斬っても全く問題ない人間だったりする訳」

「そういう理屈か」

　サルバが納得したように頷いた。

「この辺の理屈は、ギルドナイトにも当て嵌まってね。ギルドナイトが時々問題のある冒険者を粛正するときの法的根拠にもなってたりするんだ」

「成程な……」

　サルバが感心したように頷いた。

「まあ、事後報告は必要だけどね」
「ふむ」
「……けて」
サルバが頷く横で、か細い声が耳に引っかかってきた。
「ん？」
振り返った先では、青い顔をした冒険者が涙を零しながら荒い息と共にカチカチと歯を鳴らしている。
「何？」
ちょっと、よく聞こえなかったんだけど。
「たす……けて」
ああ、助かりたいの？
「無理だよ？」
当然じゃん。
「殺るのか？」
「うん」
だって、ねえ？
「彼らは勘違いしているけれど、ギルドの所有物である僕達ダンジョン閉鎖士やギルド

ナイトへ武器を向けるというのは重大な規律違反であり、明確な敵対行為だから」
　そういう意味じゃ、サルバに剣を向けるだけで普通に粛清対象だったりするしね。
「特に、受付の職員なんかは戦闘能力を持ってないから、その辺はより厳格で、武器を向けただけで普通に殺処分対象になっちゃうんだ」
「マジか」
「マジだよ」
　だから、サルバも気を付けてね？
「肝に銘じるわ」
　うん、それくらいが丁度良いよ。
　サルバが納得したところで、話は終わり。さっさと、処理を済ませて、晩御飯にしたいな。
「や、やめっ！」
　悲鳴が最後に聞こえたけど、無視してさっさと残り二人の首を斬り落とす。
「本当にさぱっと行ったな」
　どさりと倒れた二つの躯を前に、サルバが呆れた様子で呟いた。
「別に普通じゃない？」
　躊躇する理由も何もないなら、殺ろうとする決心も不要でしょ。

「でも、晩御飯の前に、一度ギルドに届け出だけはしないといけないね」
流石に裏路地でも騒ぎになるだろうし。
「分かった」
頷いたサルバを連れて、元来た道を引き換えすと、何方ともなしにくーとおなかが鳴る音がした。
「晩飯、何にする？」
「ステーキ」
あっちの村では食べられなかったし。
「……」
「？　どうかした？」
「いや、さっきの今で、よく肉食いたいって思えるなって」
「そうかな？」
肉、美味しいじゃん。
「いや、死体見た直後だろ？」
ふむ……。そうだね……。
「それはそれ、これはこれ」
「うん、それであっさり話が終わるのはお前の脳内だけだと思うぞ。いや、お前だから、

逆にそれで良いのか」
　何か、変な納得の仕方をされた。……ま、いっか。
「因みに、サルバは何か食べたいものある？」
「食い物より、酒だな」
「了解。それなら良いお店に心当たりがあるよ」
「はん？」
「美味しいし、安いし」
「ほう」
「何より、僕が通いすぎたせいで、ギルドの強制執行証を見せなくても、さっさと諦めてくれる」
「それはそれでどうなんだ」
「？　何か駄目だったかな？」
「ダメじゃねーけど、心が折れるまで執行証見せられ続けた、その店の店長が哀れだ」
「はっはっは」
　酷いなあ……。
「まあ、俺もそこで良いぜ」
「はいな」

「アルタのおすすめってのもそれなりに興味湧くしな」
「そう？」
「ああ。人格破綻者のお前の味覚は果たして破綻しているのか否か……怖いもの見たさでな」
「この野郎」
僕はサルバの脛を蹴った。サルバはジャンプして回避した。
くっくっくと喉を鳴らすサルバの横で、僕は鉄錆の臭いの中で、どの肉にしようかなんて考えていた。

七

不意に耳元で音が鳴った。

深夜の街並み。既に僅かなその日の稼ぎを吐き出した酔っ払い達を、ほぼほぼ散らし終えた酒場が窯の火を落とした闇の中で、それはカサリと微かに、しかしはっきりと僕の耳に届いた。

「……」

ギルドから指定されたロハグの宿で潜っていた寝床の中から、枕元に置いた片刃剣を引き付けて身体を起こすと、構えた先には一枚の紙切れが置かれている。閉じたドア、鍵のかかった窓。どう見ても人が入る余地のないそこに、しかし、当然の様に置かれたそれの周囲にはやはり人の気配は欠片も見当たらない。実にいつも通りの光景だった。

「……」

紙切れを拾って中を開いてみると、そこには無機質な文字で、

―ギルドへ―

とだけ書かれている。

「うん」

中身の方も何時も通り。

（……サルバを連れていかないと）

手早く身繕いを済ませて、何時も通り部屋を出かけたところで、別室で寝ているはずのサルバのことを思い出す。本人の寝相は分からないけれど、こういうのは慣れないと中々起きられなかったりする。

「……」

一応の確認の意味もあって、僕は隣の部屋のドアを軽くノックしてみるけれど、案の定返事はなかった。

それを確かめたら、今度は少し強く、そして、繰り返しドアをノックする。

一分、二分……

他の宿泊客を起こさない程度に注意して叩いたそれに、都合五分もした頃、不意に木製のドアが開いた。

「んだよ……」

当然出てきたのは、不機嫌そうな顔をしたサルバ……

の、全裸＆丸腰だった。

降ろした髪はボサボサで、眠気目を擦ると長い前髪が巻き込まれて、却って痒みが取れないらしい。
「……何で？」
次第に動きが強くなるサルバの手と、ぶるんぶるんと震えるおっぱいを見ながら、僕は思わず呟いていた。
「あ〟？」
僕の疑問に一瞬首をかしげたサルバは自分のおっぱいを見下ろして面倒臭そうに舌打ちをする。
「俺は裸じゃねーと寝られねーんだよ」
そう言って口を尖らせてきたけど、そうじゃなくてさ。
「何で、ナイフも銃も持たずに出てきたの？」
「……は？」
何故かポカンとされた。ん？　何か変なこと言ったかな？
「いや、普通品行方正にとか、服着ろとか言う場面じゃねーの？」
「そんなの、何の役にも立たないよ？」

品行方正にしようがしまいが、関係なしに僕（ダンジョン閉鎖士）達の評価なんて最底辺から変わらないんだし。

「むしろ、おっぱい丸出しなのは相手の虚を突けるし、良い習慣だと思うよ？」

特にサルバはおっぱいが大きいから全裸は目立つし、ダンジョンと違って引っ掛からないなら、全然ありじゃない？

「まあ……それも、きちんと武装してればの話だけどね」

致命傷与えられないなら、不意討ちの効果は半減だからね。

「……」

「どうしたの？　頭抱えて。風邪でもひいた？」

「お前の思考回路に頭が痛くなったんだよ……」

あれ？　……、

「まあ、いいや」

「良くねえよ」

「ギルドから召集。出掛けるから準備して」

「？　こんな時間からか？」

「仕事があれば時間は関係なしに呼ばれるからね」

それがギルドクオリティ。労基署も不要。素晴らしいよね。

まあ、ギルドの職員が働いているのがそもそも日中だから、基本的には夜呼ばれることはないけど。
「と、いうわけで、準備してね」
「分かった分かった」
ヒラヒラと手を振ったサルバが部屋に引っ込んだのを確かめて、僕は宿の一階でサルバの身仕度を待つことにした。

◆

既に釜の火が落ちたお陰で珍しく堂々と通る事になったロハグの町の大通りを抜けてギルドに着くと、普段と変わらない陰気な空気の中でギルド長が何時も通りの姿で待っていた。
「うわ……」
但し、聳え立つほどの書類に囲まれてだけど。
「初見だと驚くよね？」

隣で感嘆の声を上げたサルバに聞くと、無言でこくこくと頷いてきた。うん、まあ、だよね。実際、聳え立つほどっていう比喩が全くの比喩になっていない位、ギルド長の机の上には大量の書類が積み上げられていた。

「あれ、全部このダンジョンの調査結果なのか？」

「全部じゃないだろうけど、七、八割くらいは間違いなく」

「マジか……」

もう一度感嘆の声を上げて紙束の塔を見上げたサルバ。

「腐っても巨大組織だからね。集めようと思えば本当にいろんな情報が入るんだ。調査対象の冒険者一つとっても、単純な登録情報から、ギルドがどの程度の上がりを引き取ったかに続いて、何割くらいギルドを通さずに売っているのか、どの程度の頻度でダンジョンを変えて関所を通っているのかっていう、公的機関を通して集めた情報だけじゃなく、どの程度のちょろまかしをしているのかとか、ダンジョンのある村でのトラブル、はたまたパーティー内での異性関係の修羅場までアングラな情報も書き込まれていたりするんだ」

「ほーん……ってまさか」

あ、気付いた？

「サルバの修羅場とかも遠慮会釈なく抉られてる筈だよ」

「知りたくなかったわ、くそったれが!!!!!!!!」
　はっはっは。
「まあ、サルバが知っていようがいまいが、ギルドには筒抜けなのは変わりないから、諦めが肝心だよ」
「なら言うなよ！　何で態々言ったんだよ！」
「因みに、僕は見ていないし見る気も無いから安心してね？」
「うん、お前変な所でまともな反応するよな」
「どうせ、酔っぱらったサルバ介抱するときに嫌でも聞くことになるからさ」
「上げて落とすな!!　汚名挽回しようとすんな!!　せめてもう少し位自分の株を高値で取引させようと思えよ!!!」
「ダンジョン閉鎖士な時点で、未来永劫株価は最低値だよ？」
「そういや」
「そういやそうだったな、畜生め!!!!」
「ついでに助手になったサルバも既に人間としては最底辺だから安心してね」
「安心できる要素ねえええええええええ!?!?!?」
「はっはっは」
　そう叫んで、サルバは頭を抱えて蹲ってしまう。……いつも通りの事か。

「いつもやってるんだねえ……」
「やりたくてやっている訳じゃないですけどね」
「それは俺のセリフだよこの野郎！」
はっはっは。
「で、調査結果はどうだったんです？」
「ああ、中々面白い結果になったよ。正直、かなりのきな臭さを覚える程度にはねえ」
そう言って、ギルド長は書類の山から分けた―それでも十分な重量の―紙束を差し出してきた。
「……へぇ」
受け取ったその中身を見て、真っ先に僕の口から出てきたのはその一言だった。
「その名前は予想していなかっただろう？」
「ですね」
「？　誰が書かれてたんだ？」
「ん」
横から覗き込んでくるサルバに見える様に紙束を広げると、その中身を見たサルバも又、前髪の奥で顔を顰める。
「うわ、此処まで細かいのかよ……」

「まあね、で、予想外なのはここ」
「ん……」
小さな文字でこれでもかと言わんばかりに件の冒険者の情報が詰め込まれていた紙切れの一部を指差すと、そちらに視線を走らせた瞬間に小さく揺れた前髪の奥でくりっとした目を更に丸くさせた。
「……リーセン子爵だと？」
「うん」
そう、あの冒険者、ミロと名乗った男装騎士とその部下らしい痩身の騎士が、直近コンタクトを取ったと思われる貴族の名前の一番上に、この地方では有数の実力者と言われている子爵様の名前が書き込まれていたのだった。
「B級冒険者が子爵と……というか、等級の高い冒険者が貴族と会うって事自体は珍しくはないけど、ちょっとタイミングが良すぎる気がするよね」
「確かにな」
「しかも、直接会うんじゃなくて、態々リーセン子爵が所有している別荘で、使用人を介してのコンタクトっていうね」
「バレなきゃ、良い隠蔽なんだろうけど、バレると却って怪しいな」
「それね」

ギルド長の机の上に書類を置いて。サルバが大きく頷いた。
「それに、俺達冒険者が貴族様に個人的に喚ばれるってのは、ダンジョンから〝取ってこさせる〟ためで、あいつらみたいにダンジョンに〝置いてこさせられる〟ってのは聞いたこともねーわ」
「だろうね」
サルバの呟きに、僕も同意する。
冒険者を統括するギルドは一種の公的機関である以上、この帝国の元老院議員の議席を持つ貴族に個別に従うのは犯罪ではない。けれど、それらはサルバの言う通り、ダンジョンでしか調達できない物資を集めるためであり、間違ってもダンジョンに何かを置いてくるためではない。そもそも、ダンジョンという資源は既に産まれた時点で収穫期であって、肥料も薬剤も不要な存在だ。そんなところに物を〝置いてくる〟なんて仕事が普通ならあるはずもなく、それ故に、あるとしたら、
（絶対に真っ当な事じゃないよね……）
非合法、或いは後ろ暗い何かである事は確定しているようなものだった。それに加えて……
「そもそも、今回の土地、リーセン子爵が全く関係ないしねえ」
そんな、僕とサルバの予想を補強するように、ギルド長がぽつりと呟いた。

「ですよね」
　ギルド長の言葉に僕もサルバも首肯を返す。
　そう、今回僕とサルバが足を運んだトウトウ村はこのあたりでひしめく零細男爵領主の一人、レミュール男爵夫人の管轄に属している。間違っても、リーセン子爵とは無関係な土地だ。
「じゃあ、あの土の出所の方か？」
「そっちも違うみたい。ほら」
　首を傾げたサルバに、ギルドが各地の関所の動きから割り出した情報を見せる。各地の関所は貴族、そしてギルドと結びついていて、その時通過した冒険者は勿論、密輸などの防止のために、その際に持っていた所持品なんかについても詳細に記録を取っている。

―B級冒険者　ミロ・フロンティア―
―所持品　肥沃土―

　まあ、これは仕方ない。ダンジョン閉鎖士でもない人からすれば、〝ダンジョン・コア〟の土も普通の土も見分けようがない。中から金品が見つかればその限りじゃない

んだろうけど、〝ダンジョン・コア〟の感覚が無ければ、唯の土だし素通ししちゃうだろう。まあ、それでもB級の冒険者が運んでいるのが土だけっていうのは妙だけどさ。で、その関所の位置が、

「ハップルカ伯爵領……」

この辺り一帯のもう一人の有力者とも言われているハップルカ伯爵領とレミュール男爵夫人の領地を繋ぐ関所だったのだ。

「ハップルカ伯爵って、確か……」

「リーセン子爵とこの辺りの権力を二分する貴族様だね。子爵位と伯爵位の猟官活動で二度も直接ぶつかり合ってる」

「……」

僕の回答に、サルバが神妙な顔になる。そう、きな臭さの最大の原因はこれだ。

ハップルカ伯爵。この辺りの土地は、所謂辺境の一つに分類されていて、実質帝国の最前線の一つという事になっているのだが、海を背にしているせいで、敵と隣接しておらず、結果的に強力に統率された軍隊が不要という土地になっている。そういった事情もあり中央政府はこの辺り一帯をむしろ貴族の結束を阻むための零細の男爵家への捨て地としているところがあり、先のレミュール男爵夫人もその一人と言って良い。そんな中で曲がりなりにもある程度頭抜けているのが、あの冒険者が接触していたリーセン

子爵と、今名前が挙がったハップルカ伯爵の二人だった。
　必然的に、二人の貴族様は互いを最大のライバルと見ることになっていて、まだ両者が男爵位だった頃に一度、子爵位に昇ってから一度、それぞれ猟官で激突していた。一度目はリーセン子爵が勝利したものの、二度目の伯爵位の猟官ではハップルカ伯爵が巻き返していて、現在はハップルカ伯爵の方が有力な貴族と見られることが多くなっている。で、
「そんな、最大のライバルの所に、リーセン子爵の息の掛かった可能性のある冒険者が足を運んでいる……って事だよね」
「仮に何もしてなかったとしても、胡散臭いな」
　腰に手を当ててぼやいたサルバの言葉に、僕も全面的に同意だった。はっきり言って、怪しいとしか言いようがない。
「ただ、そうなると分からないのがレミュール男爵夫人の役割なんだよね」
　単なる囮なのか、それともトカゲの尻尾なのか、はたまた、子爵と繋がっているのか……
「無関係って事はねーのか？」
「その可能性は十分にあると思うんだけど、ハップルカ伯爵とリーセン子爵がぶつかる様な話で、間に入った貴族様が無関係っていうのは、あまり想像できないかな」

「直接的な利益だけが狙いの可能性は？」
「そっちも可能性は皆無ではないと思うけど……」
「けど？」
「あんな、小規模ダンジョン活性化させても、懐に入って来る金額はたかが知れてるんだよね」
　一応、領地のダンジョンが活性化すれば、当然その土地から税を取り立てている貴族の懐も潤う訳で、そういう意味では現状の収支はレミュール男爵夫人はプラスで、ハップルカ伯爵はマイナス、リーセン子爵が差額無しとなる。ただ、その金額はダンジョンの規模を考えた場合は本当に微々たるもので、幾ら零細貴族とはいえ、そんなはした金が最終目的だとはどうしても考えにくい。まあ、サルバが言う様に、単なる杞憂の可能性も全然あると思うんだけど……
「流石にまだ情報不足ってところだねぇ……」
　僕とサルバの会話を聞いていたギルド長が面倒くさそうに煙草の煙を吐き出した。
「どうするんだ？　ギルド権限で拷問したりとかすんのか？」
「さらっと拷問を提案できるようになったことに個人的には頼もしさも感じるんだけど、流石にそれはまだ厳しいとかな？　現状の動きを見る限り、彼女達は従犯であって、首魁は別にいる印象だし、下手をすると、トカゲの尻尾になっちゃって、本命に辿り着

けなくなる危険があるだろうし。ただでさえ、ギルドは元老院の傘下だから、貴族相手には強く出辛い訳だしね」
「それもそうか……」
「うん」
「因みに、アルタの中での本命は誰なんだ？」
「正直、今の段階じゃ誰とも言えないけど、今この瞬間だけで話をするなら、状況的にはリーセン子爵じゃない？　対抗でハップルカ伯爵。大穴はレミュール男爵夫人だけど、本命と対抗に比べて、ちょっと小物過ぎるって印象かなあ」
　それに、今の段階じゃ当たってるとは到底思えないし。
「サルバはどうなの？」
「俺も大体同じ印象だな。強いて言うなら、レミュール男爵夫人？　が単に利用されただけの立場だとはあまり思えねーって事くらいか？」
　そう言って、サルバは首を傾げた。へぇ……
「因みに、その心は？」
「勘」
「勘ね」
「後は……」

うん？

「女が男に単に利用されるって事だけは絶対にありえねーと思うから……だな」

「……」

「女ってのは男なんかよりも遥かに賢い生き物だからな」

「実感籠ってるね」

まあ、見事に女の人に切って捨てられたもんね。

「……」

この場で唯一の女性であるギルド長の方を振り返ると、肩を竦められた。

「まあ、その見立ては正しいね。その辺の感覚はサル坊の方が正常な分信用できるよ」

何だろう、さりげなく馬鹿にされた気がする。

「酷いですね、まるで僕が異常みたいじゃないですか」

「みたいじゃなくて、普通の感覚殆ど持ってないだろ、お前さん」

ギルド長は「まあ、真人間が続けられる仕事でもなし、ダンジョン閉鎖士ならそれくらいの方が丁度良いんだろうけどね」と付け足した。

「じゃあ、別に何も問題ないですね」

「それで良いのかお前は……」

逆に何か問題ある？

「話を戻すけど、一先ず相手の狙いを読み解かないうちは闇雲にリーセン子爵に手を出すわけにもいかないからね、そっちの方の調査はあたしらがやるよ」
　呟いて、ギルド長が煙管でカンッと灰盆を打った。
「具体的にはどうするんだ？」
「まずは情報の伝達に紙が介在していたら、それの盗み見。それが無理なら賄賂とハニートラップって所だろうね」
「おい」
「隠すって事は、探られたくない理由があるって事だからね。真っ当な理由や取引じゃ中身を見るどころか面会すら難しいし、仕方ないよ」
「まあ、まずは期間雇いの中にギルドナイトを潜り込ませる辺りからさね」
「調査って一口に言っても、結構色々とやってんだな」
　冒険者として接する一側面からは見えないギルドの行動に、サルバは何ともなしに、そうぼやいたのだった。ま、そうだよね。
「情報ってのは何処にどんな情報が転がっているのか分からないからね。その人の立場や役割からある程度予想は出来なくもないんだけど、生きた情報とか生々しい情報は多角的に色々な人間から裏付けを取らないと見えてこないって場合が多いんだよ」
「だから、調べる方法も多くなると」

「そーゆーこと」
　呟くサルバに、僕も首肯を返す。
「ま、そういう訳だから、僕達もギルドの手の一つとしてのお仕事だね」
「調査の方か」
　うん
「でも、それって、ダンジョン閉鎖士の仕事なのか？」
「人手が足りないっていうのもあるけど、ダンジョン閉鎖士にはダンジョン閉鎖士にしか集められない情報っていうのがあるからね」
「ダンジョンの状態以外でか？」
「うん、ダンジョンの状態以外で」
　今一ピンとこないのか、首を傾げたサルバの前髪の隙間から訝る様な視線が向けられた。そうだね、
「もう配置は決まっているんですよね？」
「ああ」
　頷いたギルド長が差し出してきたのは数枚の依頼書。
「？　これは？」
「ハップルカ伯爵領とリーセン子爵領、それとレミュール男爵夫人領の閉鎖予定ダン

ジョンのリスト。一部は完全に閉め切る前だけど、五、六個はこのまま閉じて良さそうだね。丁度良く彼らも居るみたいだし……このまま出発しますね？」

「ああ、頼むよ」

ギルド長に確かめると、まだ少し首を傾げているサルバを促して、ギルド長室を出る事にする。さて……

「面倒な事になって来たけど、サルバは大丈夫？」

疲れてない？

「安心しろ」

そう？

「元から大概面倒くさいからな」

「それもそっか」

はっはっは。……。

「それよりも、だ」

「ん？」

「お前、何か引っ掛かってるんだろ」

「……」

あー……。

「何で？」
「勘だ」
そっかー、勘かー。
「まさか、サルバに気付かれるとは思わなかった」
「そうか？」
「うん」
はっはっは。けどまあ、
「当たりといえば当たり。さっきの資料、幾つかしっくり来ていないところがあったから」
「それは？」
「あの男装冒険者達……正確には団長と副団長？　二人の経歴覚えてる？」
「さっきの資料に書かれていた奴か？　それなら覚えているぜ？」
「うん。それ、今言える？」
「あん？　……南の方の寒村で産まれて、金稼ぐために中央で騎士になったのが十三だったか？　そんで、騎士を辞めてさらに北に来て冒険者になったのが十八。その後は順調に等級を上げて、今はB級って感じだったよな？」
「ん。あらましはそんな感じだったよね」

「……ダンジョン閉鎖士になってねーな」
「そうだね」
言いたいことが伝わったらしく、サルバは唇をむっと尖らせた。
そう、彼女達二人の経歴を見ると、僕の見立てと違い、その前歴にはダンジョン閉鎖士のダの字も見当たらなかったのだった。
「経歴自体が嘘だって事か」
「ん？　僕の見立てが間違っていた可能性もあるよ？」
「バカ言うな」
サルバが鼻を鳴らした。
「付き合いは短いけどな、お前がこういう見立て外すたまじゃねえことくらいは分かるっつの」
「随分高く買ってくれるね」
「買わいでか」
けっと吐き捨てたサルバは「んで？」と首を傾げてくる。
「ん？」
「その前歴を踏まえた上でのお前の見立てはどうなんだよ？」
「そうだね……」

改めて言葉にしてみると、うーん……

「証拠を純粋に重視するなら、あの二人はダンジョン閉鎖士じゃないって事にはなると思う」

「つーと？」

「あの二人が元ダンジョン閉鎖士だと仮定した場合、二つ越えなきゃいけない障害があると思うんだけどさ、その障害を乗り越える方法が思いつかないんだよね」

「障害？」

「うん障害。一つはどうやって足を洗ったか」

「足抜けか……」

「うん、僕も二、三回、サルバの事斬り殺そうとしたじゃない？」

「記憶にはあるけど、人を斬り殺そうとしたのを『したじゃない？』で聞いて来るのはどうなんだ」

はっはっは。

「サルバみたいに、補佐のなり立てでも、既に足抜け即ち死っていう中で、頭から足の先までギルドにどっぷり漬かっちゃったダンジョン閉鎖士が生きたまま足抜けを許されるとは到底思えないんだよね」

「だが、あの女は死んでないと」

「そ」
　それが一つ目。
「もう一つは？」
「仮に辞められたとして、今度は冒険者になれるのかって話。冒険者自体は基本的に前歴なんて関係なしに全ての人間を受け入れるものだけど、元ダンジョン閉鎖士っていうのは見過ごすには大きすぎる経歴だからね」
「あの、阿呆みたいな量の資料の事を考えたら、誤魔化せる気もしねーもんな」
「そーゆーこと」
　そう、僕の勘は置いておいて、現実問題としてダンジョン閉鎖士が冒険者になるのは実質不可能だ。
「反論するなら、どうやって『〝ダンジョン・コア〟を別のダンジョンに移植する』なんて延命方法を知ったのかって疑問もあるけど、それこそ、ルートはやろうと思えばきりがないしね」
「この前の俺らみたいに、ギルドの命令で動いていたってパターンは？」
「そうなると、今度は隣町のギルドがこっちに話を持ってきた理由が分からなくなるかな。ダンジョン閉鎖士、というかギルドナイトが動いた場合、その土地を管理するギルドに事前連絡がないなんてありえないから」

「あのじーさんが、別のダンジョン閉鎖士が来ている事を知ってたら、態々アルタに話を持ってくる理由が無いか」
「まして、ダンジョンに〝ダンジョン・コア〟の臭いのする土を撒くなんてことギルドが指示するはずが無いしね」
　間違いなく、事情は無駄にややこしい事になっていると思う。
「だから、証拠を純粋に重視するなら……か。だけど、そういう言い方をするって事は、お前はそうは思っていないんだろ？」
「まあね」
　というか、その通り。
「僕の感情と理性が完全に矛盾しちゃってるから、ごり押しは出来なんだけど、理屈がいくら否定していても、僕としてはあの二人がダンジョン閉鎖士じゃないってのは納得できないんだ……うん、我ながら感情論もいい所だね」
「じゃあ、証拠に任せて感情を引っ込めるのか？」
「それこそ、まさか。納得がいくまでずっと疑い続けるつもり」
「だろうな。お前、そういうところはしつこそうだし」
「おい」
　言うじゃないかこの野郎。

「まあ、腑に落ちていないっつーなら、俺の方も腑に落ちてねーんだけどな」
「？　そうなの？」
「おう」
　頷いたサルバが軽くコキリと首を鳴らす。
「どの部分が？」
「あれ、リーセン子爵と繋がっていたあいつらだけど、そもそも何であいつらが選ばれたのかってところ」
「うん？」
「単に使いっ走りにすんだったら、態々あいつらを使う理由はないだろ？　それこそ、トカゲの尻尾にすることまで考えたら、可能な限り無作為に冒険者を選ぶ方が安全だ」
「やってたことは土運んでダンジョンに撒くだけなわけだし」とサルバは前髪を弄びながら首を捻る。
「まあ、そうだね」
「だけど、リーセン子爵はギルドのばーさんが情報を集められる程度には密にあの男装騎士と連絡を取り合ってたって訳だ。つまり、どう見ても作為的に、あの冒険者を選んでた、選ぶ必要があったって訳だ」
「ふむ」

「その理由が……」
言葉を切ったサルバは、ふと前髪から手を放して僕の前で立ち止まる。
「お前が言うように、〝元ダンジョン閉鎖士だから〟ってんなら、俺は納得がいく」
「……」
「だから、お前の見立ては外れていねーと思う。そんな感じだ」
「……そ」
案外、サルバなりに考えての事だったらしい。感覚的に納得がいってない僕なんかよりずっと理性的だね。
「ま、どちらにせよ全ては暴いた後の話だろ？」
「そうだね」
今の段階じゃ、どれもこれも結局は推測でしかないし、
「一先ず、出来ることを出来るところまでやろうか」
案外、途中であっさり解決する可能性もあるし。
「だな」
頷いたサルバを伴ってギルドを出る。
「ふぁ……」
まだ暗い夜道で、二人揃って欠伸を漏らしてから、渡された指示書に従って、ハップ

ルカ伯爵領を目指すのだった。

◆

「そーいやあアルタ」
　朝。じわじわと白み始めた空を欠伸混じりに見上げながら、不意に無言だったサルバが口を開く。ハップルカ伯爵領の指定されたダンジョンとダンジョン街はもう目と鼻の先だ。
「ん？　何？」
「夜に、ダンジョン閉鎖士じゃないと集められない情報があるって言ってたよな」
「うん、言ったけど？」
　それがどうかした？
「いや、それがどういう物なのかってのが今一ピンと来なくてな」
「あー……」
　それね。

「まあ、大抵の情報収集はギルドナイトがギルドの名前を出せば十分だからね」
「だよな」
僕の肯定に、サルバはうんうんと頷く。揺れた前髪の間から覗いた瞳がきらきらと朝日を反射する。
「ただ、裏を返すと、〝大抵〟に当て嵌まらないごく少数からは情報を引き出せないって事でもあるんだ」
「その〝例外〟はダンジョン閉鎖士なら情報が引き出せて、しかも、態々足を運んで情報を引き出す価値があるって事か？」
「まあね」
首を捻るサルバに、もう一度肯定を返す。
「蛇の道は蛇なんて言うけれど、実際役に立つ話を聞けることが多いからね」
「つまり、これから会うのは〝蛇〟って事か」
「そ。その通り」
丁度、あの辺りに縄張りにしているのは、あらゆる意味で〝蛇〟みたいだし。
「今から行くダンジョン村は、そういう人達が居るところを選んでくれたし、丁度良いからサルバの顔合わせも済ませちゃおうね。今後の事を考えると、確実にその方が良いだろうし」

「おう」
　頷いたサルバだけど、やっぱり疑問符が尽きない様だった。まあ、口で伝えてもちょっと伝わり辛いし、実物を見た方が分かりやすいから少し待ってね。
「あ、見えてきたね」
　そうこうしているうちに、道が峠を越え、なだらか下り坂になる。すると一気に広くなった見晴らしの先に、一目でそれと分かる住居の塊、此れから閉じる予定のダンジョン村の姿があった。
「さて、一か所目で核心に触れられるかな？」
「さっきの〝役に立つ話を聞ける〟は何処に行ったんだよ」
「〝ことが多い〟とも付け足したでしょ」
　逆に言えば、聞けない時もあります。
「おい」
　はっはっは。
「まあ、どうせ五件回るつもりだし、その何処かで捕まえられればいいかな」
　数撃てば当たるでしょの理屈。
「タフだなあ、お前」
　そう？

「これくらい普通でしょ？」
「それはない」
そうかなあ？　……、
「ま、いっか」
「良いのか」
うん、割とどうでも。と、
「そろそろ村の入り口だね。何時でも銃を抜ける様にしておいて」
「？　何かあるのか？」
「特別な何かは無いよ？」
ただ単に、下手すると、腕ごと持って行かれるだけから。サルバも、そのつもりでいてね？
「『そのつもりいてね？』で済む話か!?　おい!?」
はっはっは。
「じゃ、行くよ」
「いや、ちょ、待てよ!?　なあ!?」
叫ぶサルバを引っ張りながら、僕達は潰れたダンジョンと村……いや、それよりももっと致命的な村に足を踏み入れたのだった。

八

その村の中央に位置する大きな広場に足を踏み入れた瞬間、ツンと鼻の奥を突いてくる獣臭さと糞便臭と鉄錆の臭いが綯交ぜになった臭いが僕とサルバを出迎えた。

平穏に日常を送っている人であれば、一生嗅ぐことのない悪臭。傍から見ても、一目で大量の金貨が注ぎ込まれたと分かる豪勢な石造りの広場にありながら生理的嫌悪感を催させるそれは、一種異様な存在感をもってこの場へと満ち満ちていた。正直、僕にとっては馴染み深い臭いなんだけど……

「っ!?」

流石にダンジョン閉鎖士補佐に成り立てのサルバには少し厳しかったかな。

「大丈夫?」

「あ、ああ……」

思わずといった風に口元を押さえたサルバを見やると、僕の方を見上げてきたサルバがおずおずと頷いた。長い前髪からちらりと覗いた黄色い左目には、少なくない困惑と嫌悪感が、相半ばしながら浮かんでいた。

（ま、初めてじゃ無理もないか……）

その視線は村の中央に置かれた、水の噴き出さない噴水に向けられ、辺りを見回す前髪の奥の視線には若干の驚愕の色も見て取れる。

「これは……」

案の定、その口から一番最初に出てきたのは困惑によって突き動かされた感嘆符ならぬ混乱符だった。

サルバの動揺を表すかのようにゆらりと揺れた前髪から覗く視線の先には、見るからに悪辣な風貌の男達に鞭を打たれながら、光の無い目と痩せ細った身体で黙々と巨大な荷を運ぶ、頬のこけた男達。泣きわめく赤ん坊を抱いたまま、村人に鞭を振るう男達に媚びた笑いを向ける女達。一際貧弱な少年を殴りつけ、手に持った金屑を奪い取る男の子。自分から目を逸らす両親に助けを求めながら、脂ぎった中年男に路地裏へと引き摺り込まれていく女の子。

「かつては隆盛を誇ったダンジョン村の成れの果てだね」

絶句するサルバの疑念への答えは極めてシンプルだ。

「ダンジョン村の成れの果て？」

「そ」

極々普通のね。

「サルバと僕が会った村を覚えてる？」

「あ、ああ……」
「あの時の村はサルバも行ってみた？」
「ああ。一度だけだけどな」
こくんとサルバが頷くと、後ろで括った髪がゆらりと揺れた。じゃあ、話は早いか。
「あの村って、実は閉鎖時の村の状態としては、まだマシな方だったりするんだよね」
「……は？」
「え？　マジ？」という表情でぽかんとするサルバだけど、残念ながらマジだよ。
「あの村はダンジョンから手に入れたアガリを、手に入れた端から目先の事だけに使い続けてたから」
あの村のダンジョンを閉じる前にギルドで目を通した資料を見る限り、余りにも刹那的な快楽だけを求めることしかしていなかったせいで、収支としては却ってマイナスにならずに済んでいたんだよね。まあ、本当にマイナスじゃないってだけだったけど、それでも実際目の前の光景よりはマシだったでしょ？
「確かに……そうだった気がするな」
「でしょ」
一目瞭然だよね。
「この村に限らず、普通のダンジョン村が唯々資源を浪費していた村よりも取り返しの

つかない状態に成り果てる理由は何時も一つだけ。この村の人達って、中途半端に頭が回って、中途半端に上手く立ち回ろうとしちゃったんだよね」

「……具体的には何を、やったんだ？」

サルバがこくりと唾を飲む。

「投資の失敗」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……え？　それだけか？」

再びぽかんとしてくるけど、残念ながらこれもマジなんだよね。

「いや、だって」

「まあ、こんな光景見たら、どんな悪事、或いはしくじりをしたのかって思うよね？　けど、そんなものは普通ないんだよ」

A級B級のダンジョンなら兎も角、所詮は下位ランクだからね。

「ここの村の人達は普通に投資をして、普通に失敗して、普通に負債を抱えて……そして、普通に破綻しただけなんだよね」

お金という、ダンジョンに住まう、ある意味最も恐ろしい魔物によって……ね。
「だけど、こんなになるって、一体何に投資したんだ？」
「普通に村の整備だよ」
「村の整備でどうしてこんな破綻するんだよ……」
やっぱり腑に落ちないと首を傾げるサルバだけど、実際こういうのって間近で何度か見ないとピンとこないよね。
「意外とね、これが破滅できるんだよ」
本当に。
「まず、最初に、この村の建物だけ見た時、サルバはどう思った？」
「ん？　んー……」
あ、考え込んじゃった。うーん、
「じゃあ、ちょっと質問を変えるけど、この村、ロハグの町と比べてどう見える？　規模とか奇麗さとか」
「どうって、大体同じ……あ」
「分かった？」
「もしかして……ここって、そういう意味での〝村〟なのか？」
「あたり」

大正解。

「この〝村〟、要するに、規模は所詮〝村〟でしかない筈の場所が何故か、ロハグの〝町〟程に整備されているんだよね」

敷き詰められた石畳に、巨大な噴水の取り付けられた大きな広場。そこを囲うように建てられた二階建ての設えの良い商店の数々。生気が無くなっていながら、そういった不動産の類は非常に高価なのがはた目からも見て取れる。端的に言って過剰な程に。

「だけど、どうしてそんな失敗を……」

「ダンジョンが開通すると、その村って溢れるくらい人が訪れるようになるんだよね。特に寒村だと、それまでの閑散具合からは考えられない程に。サルバも覚えがあるんじゃない？　開通直後のダンジョンの話を聞いて、まだ手付かずの獲物を手に入れるために、その村に急いだことなんか」

「確かに……」

「一因はそれなんだよね。開いたばかりのダンジョンってやっぱり貴重だから、近隣で別のダンジョンにアタック中の冒険者すら一度下見に訪れるんだ」

「その溢れた人を見て、イカレちまうって事か？」

「簡単に言えばね」

実際、普通の村が転落する第一歩は、ダンジョン解放直後のラッシュから始まってる

と言っても過言じゃないし。
「冒険者の宿はまだ良いんだよ。そこは無いと話にならないし、規模に見合った範囲の宿なら十分に元が取れるから。ダンジョン閉鎖後も、何らかの理由で村に腰を落ち着けることにした冒険者とかに安く売れば、無駄にはならないから。けど、ダンジョン閉鎖後の事を考えれば、酒場とか歓楽施設は節度が必要だね。Dなら一、ニ軒増やすくらいが限度かな？　Cなら四、五軒……B以上はそれ自体が都市を作る根拠になるレベルだから、ちょっと話が変わってくるけど」
「それは、お前の経験則か？」
「うん」
　その辺の損切りが出来る村は普通にダンジョン閉鎖後もやっていけてるからね。まあ、そうじゃない村が大半なんだけど。
「成程」
　頷いたサルバは、じゃあ、と米神を抑えながら呟く。
「この村は明らかに？」
「うん。過剰」
　本当にやりすぎ。
「きっと、溢れ返った冒険者に対処しきれなかったんだろうね。お酒の入った冒険者が

行くところなんて大抵限られているから、ダンジョンからの収入で女衒に本職の娼婦を回してもらってたこともあるみたいだし」
「本当に色々使ったんだな」
「でもね、これらも実はまだマシな方なんだよ」
「これでか？」
「うん、これでも。一応、曲がりなりにもお金を動かせるからね」
初期投資はそれなりに掛かるけれどね。
「最悪なのが道。特にこの石畳」
「道か？」
「うん」
「何でだ？　道、というか交通ってのは一番手堅い印象があるんだが」
サルバが首を傾げるけれど、まあそう思うよね。
「確かに交通の便を良くするっていうのは、その土地の発展には凄い重要なんだけどさ」
「ああ」
「そもそも、道ってその道を通る事が目的なんじゃなくて、道を通って着いた場所に目的がある訳じゃない？」
「……そういう事か」

うん。

「この村が元々〝村〟規模でしかなかったのは、他でもない、この村それそのもの自体には何の魅力も価値も無かったって事。それがダンジョンの存在で一気に価値を上げたけど、それはダンジョンの価値であって村の価値じゃない。だから、ダンジョンが枯れちゃえば、必然的に村の存在価値もなくなって、この村の外れから始まった大きな石畳の道が全部無用の長物になっちゃうんだ」

元々、ハップルカ伯爵領の主要な交通の要衝は既に決まっていて、そこから大きく外れている訳だしね。

「けど、そんな事実を理解できなかった……いや、溢れ返った冒険者を見て、自分達の村の価値を勘違いしちゃった、この村の人達は大金をはたいてハップルカ伯爵領の主要道から続く道を整備した。材料費、工事費、人件費。それ以外にも道路なんて戦略的な設備、村はずれの小道一つなら兎も角、主要道から、しかも不要な道を態々引くってなったら当然伯爵やその家来にも賄賂を相当額渡す必要があるわけで」

「それに……全部突っ込んじまったのか？」

「そ」

恐る恐る、そんな表情だけど、今、サルバの頭に思い浮かんでいるそれ以外に答えは無いよ？

「当然、そんなのは続く訳が無い。いくらダンジョンでも一度にあげられる利益には限度があるからね。じゃあ、この目に見える宿、酒場、風俗街はどうやって建てたと思う？」

「それは……」

「借金しか……無いよね？」

明日は良くなる。明後日はもっと良くなる。そんな考えで道路を引きながら、この村の人達は借金で村の設備を拡充していった。

「借金で……」

「うん。借金で」

「馬鹿じゃねーの？」

ま、傍からは信じられないかもしれないけど、実際は結構多いんだよ。

「この泡沫の様な〝富〟が永遠に続くっていう勘違いがさ」

「……」

モンスターは狩れば死ぬし、狩りつくせば当然居なくなる。一度や二度ならまだ良いけれど、繰り返していれば、ダンジョンそのものが力を失っていく。

まるでチューリップが枯れる様に次第に萎れたダンジョンは、最後に〝ダンジョン・コア〟という球根だけを残してこの世から消え去る。問題は球根と違ってダンジョン

はまた来年咲くことは絶対にないし、後に残った植木鉢が他の花を植えられれば良いんだけど、そう便利にダンジョンは出来ていないからね。
「そういった村が手に入れるのは球根ではなくて、多額の負債だけになる」
「難儀……だな」
「そうだね」
　本当にそう思うよ。でも、
「これがまだ終わりじゃないんだよね」
「つーと？」
「彼らは諦め切れなかったって事」
　本当に難儀だよね。
「ダンジョンが下り坂になって、徐々に目敏い冒険者が、次いで行商が離れていく中で、村人には常に二つの選択肢が与えられるんだよね。一つは撤退。早期に見切りをつけて、これ以上の拡大を諦める選択」
「もう一つは積極策か」
「そ」
　施設の更なる拡充。より魅力的な村にして、ダンジョンに来る冒険者を沢山呼び寄せようとする。……借金によって、ね。

「積極策が常に悪いって事は絶対にないんだけど、ダンジョンに限っては傷口を広げることになりやすいんだ。そもそもダンジョンは開通後から常に資産価値が下がり続ける代物なわけで、しかも家屋と違って改築なんて出来ない事になっているしね」
「ん？　おい、それって」
「周知されたら不味いのがこの村を見れば良く分かるでしょ？」
　こんな状態の村が、あのダンジョン知ったら、絶対に同じことするしね。
「お前、会話の中にさらっとやばいネタ盛り込んでくるの止めろよ。それ、俺が外で口にしたらこっちの命狙ってくる奴じゃねーか」
「あ、気付いた？」
「気付くわこの野郎」
　はっはっは。
「ま、話を戻すと、更に借金を重ねた村は無事破綻。最後は債権者による取り立てが始まりましたってところかな」
「ところかなで済ませられる軽い状態じゃねーだろ」
「そう？　どうせ、数熟すうちに、一々反応するのが面倒になるよ？」
「それも経験則か？」
「んーん。他のダンジョン閉鎖士の人がそう言ってた」

「だろうな！　お前、こういうの初めっから全然堪えなそうからな！」
　失礼な。
「じゃあ、お前が言っていた情報源ってのは、その債権者の事なのか？」
「んーん。それもちょっと違う」
　債権者は債権者だけどね。
「さっき、傷口を広げるって言ったけど、借金も無限に重ねられるわけじゃないでしょ？　貸す側の懐にも限度はあるし、貸し倒れになったら、元も子もない訳だから」
「まあ、そうだな」
「で、そうなると村は大抵次の金主を探す訳だ」
「なんかもう、末期症状って感じだな」
「まあね」
　実際、この辺が末期一歩手前だしね。
「最終的に、何処も貸してくれなくなった頃に、取り立てに出てくるのは……金主そのものである事も多いけれど、金主から債権を買った人達の場合も多いんだよ」
「債権を？」
「うん」
　債権を。

「金主の中にはいろんな事情で最後まで泥船に付き合っていられないって人が居るからね。単純に時間を掛けていられないって人もいれば、他の金主より先に自分のところにお金を持ってこさせられるか分からない人もいるし、最後の最後で結局物を言う暴力に自信が無い金主も居れば、最後のドブ仕事が出来ないって金主も居るんだ」

そういった金主から、元金全部と利子のうち半分くらいの値段で債権を買い取って、正規の金額を村から取り立てることで残りの利子分を儲けにする仕事があるんだよね。

「はー、色々あるんだな」

「人間、やろうと思えば、結構何処までもお金は生み出せるからね」

手段を択ばなければっていう注釈は付くけれど。

「既に死に体になった村からでも、というより、死に体になった村からが一番手に入りやすい商品が二つあるんだ。一つはごみ。美術品の類が残ってたらそっちもさっさと売っちゃうけど、それ以外にも建物のガラス、石畳の石、ドアの蝶番や窓に使われる留め金に釘といったごみ類は大量に数を確保しやすいから一定のお金になるんだ」

「労働力は村人が居るって訳か」

「そ。そういう意味じゃ、元手はタダで済むからね」

どうせ、食事も碌に与える気はないから。

「もう一つは人。さっき言った様に、男は直ぐに労働力として使われて、女は老若の差な

く、一人残らず娼婦にされるんだ。まだ処女の美少女はお尻だけ、非処女だったり既婚の女性は一通り楽しんだ後に大きな町の娼館に適当に売られていく。間違いなく、此れが一番お金になるからね。例外で男でもよっぽどの美貌の持ち主はそっちに行くらしいけど、僕はあまり見たことはないね」

「見境なしだな」

「人間は数が多いからね。その分多種多様な性癖が産まれるものだよ」

そう言う意味じゃ、人間って種族そのものが見境がないのかもね。

「そんなでも無いのは？」

「大都市には違法風俗を扱う業者が居るらしくてね、一分を残してそっちの方に売られるね」

「おい、一応お前体制側の人間だろ」

まあ、ギルドは元老院の傘下だしね。けど、

「どうせ、鼬ごっこになるのが分かっているから、元老院も強く出る気が無いんだよね」

幸か不幸か。変に大規模な犯罪を犯されるよりも、違法風俗ぐらいでせこく稼いでいてくれって本音もあるだろうしね。

「残る一分っつーのは？」

「身重だったり、体が悪かったりで、村からの移動に耐えられない人間が中心らしいんだ

けど、そういった人間は村の少年相手に売春をさせるんだってさ」
「この上、村人から更に搾り取るのかよ」
「そうだよ?」
元の金主も、村人を奴隷として売った場合の金額は想定してお金を貸しているからね。利子の差額で損をしない様に可能な限り儲けを大きくしようとしたら、追加で商売をする必要があるんだよね。主な売り物は、食料、賭場、売春。人間という生き物が存在する限り、そういった取引は絶対になくならないからね。
「何で、少年相手ってなるんだ?」
「単純に、力がまだ弱くて、労働に使うにも限度があるっていうのと、もう一つが」
と、その時、不意に腰元に小さな気配と強烈な臭いが襲い掛かってきた。
「っ」
腰元の小刀を抜いて、振り下ろす直前、先に懐から拳銃を抜いていたサルバが、無言で引き金を引き上げていた。
「ぎゃっ!?」
ぱんっ! と軽く響いた発砲音と共に、どさりと崩れ落ちる小さな影。幸い他に人影も見当たらないようなので、さっさと右耳を撃ち抜かれたこれを踏ん付ける事にする。
「ぐぇぇぇ……」という甲高い、カエルの潰れる様な声が悪臭漂う広場に響くけど、道行

く人は誰一人として振り返ってこなかった。
「ナイスタイミング、サルバ」
「おう……で、何だこいつ？　スリか？」
「そう。スリだよ。但し、〝まだ卵の〟って付くけどね」
「卵の……」
「うん、卵の」
　スリ卵。
「それだと卵のすりおろしみてーじゃねーか」
「あはは、確かにそうだね」
　怯えの混じった目で見上げてくる子供の細い首を掴んで一度持ち上げる。ぱくぱくと口を開いてもがく姿は水から釣り上げられた川魚に似ていた。
「これが、少年相手に商売をする理由だね」
「スリがか？」
「スリというか、所謂犯罪全般」
　今のはスリだけどね。
「さっき言った債権を買い取った人達だって、年も取れば、引退もするからね。そういった時の為に後継者っていうのは育てるものなんだよね」

「それが、潰した村のガキってことか……」
「うん」
ご名答。
「喧嘩、盗み、スリ、恐喝。子供同士で出来る小さな犯罪で適性を見て、実力がある子供には自分達の商売の手伝いをさせるんだ。ほら、あっち見てみなよ」
「ん？」
少し年嵩の男の子が、村の大人を鞭で打って怒鳴りつけて居るでしょ？
「あの中には、自分のそれこそ親や兄弟、親戚に友達も混ざってるけど、あの子はああやって平気で鞭を振るえる。そういう子供を選んで丁寧に仕込んでいくんだ。その過程でお酒と賭博と女の味を覚えさせれば完成。立派な彼らの仲間っていうわけ」
「……」
「ま、それが本人にとって幸せなのかは、彼のみぞ知るって処だけどね」
閑話休題っと。
「この子の方は、ああいう適性のある子に比べたら完全に木っ端だね。年齢とか見ても年がいっている割には下っ端仕事しかしていないし」
「うぐっ」
首根っこを引っ張って持ち上げると、苦し気な呻き声と共に睨みつけてきた。うん、

意識は失ってないね。
「君達の元締め、今は何処に居るかな?」
「だ、だれg「あ、右耳も要らない?　それなら、言ってくれれば直ぐに削ぐのに」い、言う!　言うから!!」
「初めからそう言えば良いのにね?」
「理屈としては正しいのに釈然としないんだよな、お前って」
何か、サルバに頭を抱えられた。あれ?　……ま、いっか。
「こっちだよ……」
怯え半分に先を歩く子供の後を追いかけながら、もう一度この小さな小さな村を見渡す。子供に鞭を打たれた老人が、敷石を詰めた袋を落とし、どさりと倒れ伏した音がした。

スリの少年が僕達を案内したのは、村の広場から少し歩いた先にあった、一際大きな建物。恐らく、ダンジョンが盛況だった当時、村の役場として使われていた様子の建物だった。
「こ、これで良いだろ!」

「はいはい、ありがとうね」
それだけ言って逃げ出す少年を「気を付けてねー」と見送ると、サルバが「良かったのか？」と聞いて来る。
「特に何もスられてないからね」
「……」
「サルバ？」
どうかした？
「ん？　ああ……」
不意にサルバが押し黙り何となく口籠るように自分の顎を撫でている。
「あのガキも、親と離れ離れになったのかと思う、ちょっとな……」
そう言って前髪を弄んだサルバの目はどことなく諦念とも無念とも言えない苦いものが見て取れた。……ふむ。
「言っておくけど、あれくらいはまだ大分マシな方だよ？」
今時、珍しくもなんともないし。
「だろうな」
ま、予想は付くよね。
「じゃ、早速入ろうか」

「おう」
　サルバが頷いたのを確かめて、役場のドアを開けると
「あ〟？　何だてめぇら!?」
　真っ先に飛び込んできたのは無精ひげを生やした大男の怒号だった。
「おい」
　殺気立った視線と、粗野な風貌に、サルバが小声ながら警戒混じりに肘を突いてきた。
初見だと驚くよね。
「突然お邪魔して失礼しました。私はレミュール男爵夫人領ロハグ町のダンジョン閉鎖士アルタと申します。今日は近隣のダンジョンの閉鎖の事でお邪魔させていただきました。お手数ですがこちらの統括者の方にお取次ぎ願えますか?」
「っ！　こりゃ失礼。ダンジョン閉鎖士の方でしたか。少々お待ちくだせぇ……」
　自己紹介をすると、これもある意味何時も通り、慇懃になった無精ひげの人は一礼して足早に奥の方に引っ込んで行った。じゃあ、少し待ちますか。……ん?
「サルバ?」
　ふと視線を感じて振り返ると、隣に居たサルバの、前髪に隠れて見えない筈の目が大きく見開かれているのが、何故かはっきりと分かった。
「どうかした?」

「……」

そして、これまた何故か、右の頬を意味もなく引っ張られた。

「……痛いんだけど。耳、削ぐ？」

割と本気で。

「この反応は本物か……」

「むしろ、それ以外の可能性がどうして発生すると思ったのか聞きたいんだけど」

「いや、だって、丁寧な応対するお前とかすっげー気持ち悪かったし」

「おい」

「絶対偽物だって思うだろ？」

言うじゃないか、この野郎。

やたらと神妙な顔をしてるのが却って腹立たしいね？

「ぬおおお!?　だからって、ムカついただけ当然の様に脳天両断しようとしてくんなよ!?」

「いやいや、そんなにムカついてはないよ？」

具体的にはカム着火インフェルノ。

「それ、そうとうキレて、って言いながら短刀突き付けてくんな。いや、俺が悪かったから！」

「分かれば宜しい」
「言いながら追撃してくんなっ!?」
　はっはっは。
「お待たせいたしやした。ささ、どうぞ奥へ親分が待っております」
「っと、これはどうも」
　タイミングよく出てきたさっきの無精ひげさんにお礼を言って、促された廊下から役場の奥と思われる部屋に向かう。
「何してるのサルバ？　さっさと行こ?」
「やっぱ、お前何時も通りのアルタだったわ」
　そう?
「まあ、どうでも良いけれど」
　追い付いてきたサルバと歩幅を合わせて奥に進むと、背中の方から再び「何だてめぇら!?」という怒号が聞こえてきたのだった。

「おお、これはこれは。ようこそおいで下さいましたダンジョン閉鎖士様」
　奥の部屋で待っていたのは小太りで、愛想の良い白髪のお爺さんだった。

（このじーさんがさっきの奴らの元締めなのか？）

（そうだよ？）

その風貌を見て、隣のサルバが少し驚いたように囁いた。まあ、外の人達とはイメージが重ならないもんね。けどまあ、大抵のこういったヤクザな立場の人に有り勝ちだけど、この顔は所詮は外向き用の演技でしかないからね。実際、ニコニコ笑っているけど、品の良い細められた目からは明らかに真っ当とは思えない鋭い光が見え隠れするし。

（確かに、どう見てもカタギじゃねーか……）

何となく言いたいことをサルバも感じたのか同意するように、ほんの僅かにだけど首を縦に振ってきた。

「突然の事で失礼いたしました。改めて名乗らせていただきますが、ロハグのダンジョン閉鎖士のアルタと申します」

「ご丁寧にどうも。この村の〝今の〟代表を務めさせていただいております、サヴォンと申します」

〝今の〟ですか」

「ええ、〝今の〟です」

恭しく頭を下げて来たものの、そのねっとりした言い方は実にヤクザ者らしかった。

「それで、今日は一体どういった御用で？」

そう言って、ちょっと首を傾げる親分さん。まあ、態々別の貴族の領地からダンジョン閉鎖士が派遣されてくるなんて、珍しいといえば珍しいもんね。ギルド自体は元老院傘下であって、その土地の貴族の傘下とはちょっと違うから、無い訳じゃないんだろうけど、一応組織の長としては気になるところだろう。一先ず、こっちの話をしちゃうことにしようか。

「一つはご挨拶です。これから数日掛けて、この村のダンジョン含めた何か所かを回って、ダンジョンの閉鎖を行うつもりでしたので」

「ほう……」

僕がまず先に彼らが一番知りたい話を出すと、俄かに頭目の目が鋭くなる。

「順番のすり合わせをお願いしたいので、閉鎖予定ダンジョンの確認をお願いします」

その視線の前に、ギルド長から受け取った、件の冒険者が土を持ち帰ったと思われるダンジョン近隣の閉鎖予定ダンジョンのリストを差し出す。

「有難く」と呟いて受け取った頭目は部屋の奥に向かって「おいっ！」と怒声を上げた。先の挨拶の甲高い声とは違う、ガラガラと酒とたばこで枯れたドスの利いた声だった。

「へいっ！」

奥から出てきた頬のこけた鋭い目の男にリストを渡すと「こいつ、写しとけ」と手短に指示を出す。

「いや、ありがとうございます。こういった手札を初手に全て出していただけるとはごくごく純粋に助かりますもので」

そう言って、愛想笑いを向けてくる親分さん。実際、さっきよりいくらか眼光が落ち着いてきているのを見ると、この言葉は本心なのだろう。

「僕達の方は回る順番は決めていないので、そこもそちらでお願いしますね」

「ええ、ええそりゃ勿論」

後は心得たもので、二度三度と頷くと。隣で待機していた男の人に顎をしゃくって軽く指示を出す。頷き奥に引っ込んだ男の人がキンキン声で「おらっ！　客人に茶を持ってこい!!」と叫んだのが聞こえた。

「さて、中々サービスしていただきましたので、私としても少しお礼をしないといけませんな」

やがて、どすどすという足音が過ぎ去ると、向き直った頭目さんがそう言って愛想笑いを浮かべた。うん、話が早いのは有難いね。

「じゃあ、早速なのですが」

「ええ、どうぞ」

「直近、ここのハップルカ伯爵とリーセン子爵の間で何か表に出ないトラブルなんかはありませんでしたか？」

「……」

僕が質問をすると、親分さんの顔がはっきりと硬直した。

（おい、あからさまに硬直してるぞ）

隣に居たサルバがそう耳打ちしてくる。うん、前髪で視界不良のサルバにすらはっきりと見えるあたり、どうにもとんでもない話を聞いちゃったみたいだね。

「まあ、どうでも良いけど」

それより、答えを知りたいな。

「あー、ダンジョン閉鎖士様？」

「？　何です？」

「ダンジョン閉鎖士様は、あたし達とリーセン子爵様の事を聞きに来た……そういう事でしょうか？」

「いえ」

恐る恐る、或いは探るように尋ねてきた頭目さんの質問に、正確に否を返す。

「貴方達とリーセン子爵の関係は興味の範囲外です。興味があるのはリーセン子爵とハップルカ伯爵の話”だけ”なので」

―貴方達が何をしていても、タッチする気はない―

その意図は伝わったのか「ふむ」と頷いた頭目さんは、今度は実に楽し気なにたーっ

とした笑みを浮かべた。まるでぷりと肥え太った古狸が不意に人がましい笑みを浮かべたような、そんな薄気味悪い笑顔に、隣のサルバが前髪に隠れているのを良い事に眉間にしわを寄せたのがちらりと見えた。
「そういう事でしたら、お話ししましょう」
「ありがとうございます」
　礼を言うと、頭目さんは「いえいえ」と大らかに手を振った。
「あまり普段話すことも無いものですからねえ、このハップルカ伯爵領でリーセン子爵の名前なんてねえ」
　そう言って、うっすらと開いた頭目さんの目には明らかな嘲笑の色があった。
「仲が悪いって事ですか？」
　隣のサルバが尋ねると「そりゃあなた」と頭目さんは手を振る。
「悪いなんてもんじゃありませんよ。何せ、あのお二人は元老院どころか帝国のアカデミーに居た頃からのライバルでしたからね。小競り合いでも何十年も繰り返していれば、当然中に入る感情は淀んでどす黒く凝り固まるってもんですよ。実際、このハップルカ伯爵領と向こうのリーセン子爵領。両方の堺じゃ小競り合いが無い日の方が珍しいってなもんですよ」
「さもありなんですね」

　この辺は前知識通りかな。
「で、貴方達個人としてはどう見てるんです？」
　実態としてを知りたいところだけど。
「それなんですがね……」
　笑みを深めた頭領さんがすっと身を乗り出してきた。
「確かに、リーセン子爵様とハップルカ伯爵様は常日頃から争いを続けておりまして。そして、その大半はリーセン子爵様から仕掛けた物なのですが……あれ、単なるポーズなんですよ」
「へぇ……」
　それはちょっと聞いたことがない話だったな。
「それは初耳ですね」
「でしょうな。まあ、勘の良い人間は気付いている者も居るのかもしれませんがね？これを断言できるのはあたしらだけだと自負しておりますよ」
　どうやら、握っている情報の中でも特大の物を出してくれたらしい。
「あの子爵様。実はもう尻尾を丸めた負け犬なんですよ」
「もう、本気でハップルカ伯爵に勝とうとしていないという事ですか？」
「ええ、ええ」

確かめれば、愛想の良い笑みと共に辛辣な言葉を口にする。

「十年前の子爵位の猟官の際にはハップルカ伯爵様に一歩先んじたリーセン子爵様でしたがね？　よりにもよって、辺境や地方の最高位だった伯爵の猟官の時にハップルカ伯爵様に負けてしまいましてね。あそこでもう、片が付いてしまったんですよ」

「完全に目が無いという事ですか？」

「まあ、世にも不思議な事が起こって子爵様が公爵様になる事が無いとまでは言いませんが、それでも妥当な見方をすれば確率は皆無ですな。ハップルカ伯爵様とリーセン子爵様の仲の悪さを知っているので、中央はリーセン子爵様の敵愾心をハップルカ伯爵様への楔に使うのをやめる気が無いみたいですし」

「ああ、もしかして、リーセン子爵様は転封を？」

「ええ。伯爵位の猟官に失敗すると、直ぐに願い出たみたいですが却下されて、去年、二度目の届け出を出したみたいでしたが、こっちも却下でした」

成程。

「だから、もう目が無いか……」

隣のサルバが納得したように呟く。推測は納得しかないよね。後は、

「裏付けがあるんですね？」

「……」

笑顔。つまり肯定か。

「実は今、リーセン子爵様の所に斡旋する女が、あたし達の一番の売れ筋商品でしてね」

成程。

「自分の出世の目が無くなって、女性に逃げたんですか」

「ええ。権力欲を満たせない鬱屈を女で晴らす。まあ、古今東西何処でも聞く珍しくもなんともない話ですなあ」

「ですね」

本当に、何の捻りも無い。

「特に重要なのが、その女の産まれでしてな？　容姿は十人並みでも、ハップルカ伯爵領の生まれと伝えると、高値で買い取ってくれるのですよ」

「ああ、宿敵の土地から財産を奪って汚しているっていう満足感で復讐心を満たしているんですね」

うん、よくあるよくある。

「私達が今ハップルカ伯爵様の領地で商いを行っているのもそれが理由でしてな。何せ、普通の娼館に売るよりも遥かに割が良いと来ておりますから。しかも、女に飽きれば此方に戻してくれるときた。ええ、ええ。私ども、本当にリーセン子爵様には足を向けては寝られない日々でございますよ」

（成程）

つまり、売った女性の回収の際に、閨の話を洗い出していたと。それなら、確かに確信をもって話せるね。

（しかし……）

どうも、話を聞いている限りリーセン子爵は本当に終わりみたいだ。買った女性を飽きたら投げ出すというのは貴族でもあまり聞かない。いや、商売女や高級娼婦を渡り歩くというのはよく聞くけれど、態々身柄を買ったうえで放り出すというのはあまり例がない話だ。恐らく、リーセン子爵の中ではハップルカ伯爵領の女性を抱くのは復讐心を満たす方が主で、性欲は二の次という事なのだろう。まあ、むしろ、この場合はそっちの方が始末が悪そうだけど。ハップルカ伯爵には絶対にもう勝てない以上、子爵様の方も際限が無いだろうし、歯止めが利かなくなっているだろうから……。

「なんつーか、せこい話だな」

「そうだね。本当にみみっちいと思う。人間が小さい……いや、小さくなったのかな？」

多分、伯爵位を狙っていた時のリーセン子爵なら、こんなことはしなかっただろうからね。うん。

「大変興味深い話をどうもありがとうございました」

「いえいえ、こちらの方としてもダンジョン閉鎖士様にはいつもお世話になっておりま

すので。持ちつ持たれつとう奴ですな」
　鷹揚に言った頭目さんは、はっはっはと笑うと。
「ま、もし宜しければ、ダンジョンの閉鎖に関して少しだけお願いを聞いていただけるとありがたいのですが」
「分かりました。先のリストの返却の際に詳細を教えていただくという事で良いですか？」
「ええ、結構でございます」
　これくらいのお礼はしてもいいかな。
「リストの確認が済むのは明日でしょうから、今日はここに泊まらせていただいても？」
「分かりました。宿屋に案内させましょう。おいっ!!」
「へいっ！」
　頭目さんが声を張ると、さっきのおじさんが直ぐに顔を出してきた。
「ダンジョン閉鎖士様に部屋を宛がえ。一等宿がまだ使えるからな」
「へいっ」
「おっと、これはどうもありがとうございます」
　僕は寝るのは何処でも気にならない方だけど、心遣いには感謝しておくべきだろう。
「いえいえ。ゆっくり旅の疲れを癒しておくんなさいな」

そう言って、愛想よく笑った頭目さんは立ち上がり、入り口まで僕とサルバを見送りに来る。と、そこではたと足を止めた。
「？　どうかしました？」
「いえ……」
一瞬言い淀んだ頭目さんは何かを思い出したように口元に手を当てて声を潜めてきた。
「ダンジョン閉鎖士様だから注意させていただきますが、リーセン子爵様といえば、昔、領地でダンジョン閉鎖士様が行方不明になった事があったのですがね？　実はそのダンジョン閉鎖士様、リーセン子爵様に殺されたと専らの噂だったんですよ」
「！」
へぇ、それは……
「本当なぐふっ!?」
声を上げそうになったサルバの腹を突いて一旦黙らせる。
「結構確信持ってます？」
「いえ。ですが」
首を横に振った元締めさんは、しかし、一層声を小さく窄めた。
「ダンジョン閉鎖士様とその補佐様が一人、ある日突然消えたというのが一つ」

「ふむ」
「ギルドの方が泡を食っていたというのが一つ」
「……」
「最後に、そのダンジョン閉鎖士様なのですがね……
　リーセン子爵様の私生児だったと専らの噂だったんですよ」

「……」
「おいおい……」
　復活したサルバが声を上げたけど、正直僕も少し驚いていた。貴族が自分の子供を手に掛けたねえ……？
「消えたダンジョン閉鎖士様は他のダンジョン閉鎖士様同様、氏素性も定かではありませんでしたが、リーセン子爵様と風貌が良く似ておりましてな。私も一度件のダンジョン閉鎖士様とはお会いしましたが、確かにリーセン子爵様とよく似ておりました」
　ふむ。
「ですが、それが悪かったのかもしれませんな。折も折、リーセン子爵様が猟官活動をしていた時期。子爵位の際には先んじたリーセン子爵様でしたが、蹴落とした筈のハップ

ルカ伯爵様は後を追うように子爵に進まれておりましたので、天秤がどちらに傾くのかは非常に危うい状態でした」
「だから、失点を少しでも減らすために……ですか」
「と、私は思っております」
確かに、怪しい点だらけだね。うーん……。
「そういえば、僕はリーセン子爵の容姿を知らないのですが、そのダンジョン閉鎖士の人って、くすんだ金色の癖のある髪をした美人だったりします？」
「いえ」
あれ、違った。
「美人ではありましたが、黒い炭の様な長い髪の閉鎖士様でしたな」
「別人だな……」
囁いたサルバにだけ分かるように頷きながら、改めて今聞いた話を反芻する。どうも、大分核心に迫る様な話を聞けたものの、決定的な話を聞けた気もしないという悩ましい状況な気がした。
（まあ、その辺を考えるのは僕じゃなくてギルド長の仕事か）
有益な情報だけど、生かすには生かせる人に渡す必要があるしね。
「良いお土産をありがとうございます。私達のギルド長も喜ぶでしょう」

「いえいえ」
深々と頭を下げた老人に見送られながら僕とサルバも一度頭を下げて、村役場を後にしたのだった。

九

「この作り見ると、お前が言ってた無駄ってのも納得しかねーな」

先のヤクザ者達から勧められた宿に着き、その中の一室に通されたサルバは感嘆とも呆れともつかない面持ちで、そんな感想を漏らした。視線の先には一枚の姿見。その縁にはこれでもかという位繊細で美麗な彫刻が施されている。それ以外の調度品もどれもこれも設えが良く、はっきり言って村の規模からは明らかに分不相応な代物ばかりだった。

「ね」

ま、僕も同意見なので、肯定しか回答は無いんだけど。というか、見えるところにあった建物とかだけじゃなくて見えないところも大分無茶な贅沢してたんだね。これ、僕が今まで見てきた廃村の中でも、相当浪費が激しい方かも。

「一先ず今日はここで休むって言ってたけど、この後はどうするんだ？」

「取り合えず、今日渡したリストに従って、役場の人達がダンジョンの閉鎖の順番、それと場合によってはまだ閉鎖をしないで欲しいって話をしてくるから、それに従ってダンジョンの閉鎖をしながら、時間を見て、あの土の出所に寄って、ギルドに帰還って流れ

かな」
「出発は？」
「明日のお昼頃になると思うから、そのつもりでね」
「りょーかい」
サルバが頷いたのを確かめて、僕は備え付けられた棚からタオルを一枚取る。
「？　何処か行くのか？」
「お風呂」
ベッドの上でぐだぐだしていたサルバに答えると、むくりと起き上がって「風呂？」と小首を傾げてきた。
「うん。部屋に来る途中に館内の案内図があってさ、その中に『大浴場』があるって書いてあったから」
「温泉か!?」
「いや、沸かしているみたい」
サルバが興味をそそられた様に声を上げるけど、残念。温泉じゃないよ。というか、こんな平地に温泉があったら、この村はダンジョンが無くてもやっていけた筈だし。
「……それ、水と燃料何処から引っ張って来てんだ？」
「買って来てるんじゃない？　この辺り、魔法の類か燃料の類かは分からないけど」

「つまり?」
「推定・借金」
「それもかよ」
「今使ってるのは、多分村が破綻する前に残っていた在庫だろうけどね」
あの人達も、自分達が使うとはいえ、今更新しくお金かけて、こんな設備を完全に維持しようとはしないだろうしね。
「なんつーか」
「うん」
「「本当にやりすぎ」」
「だよね」
「ああ」
頷いたサルバがため息交じりに立ち上がり、同じく棚に置いてあったタオルを取る。
「俺も行くわ」
「そ」
じゃあ、行こうか。
「無駄の贅沢を楽しむのも、たまには良いだろうしね」
僕がそう言うと、サルバはやんわりと苦笑を浮かべたのだった。

で

「うぐ……」

そうやって部屋を出たのが少し前の事。目的の大浴場を前に一つの唸り声をあげる置物が出来上がっていた。まあ、サルバの事なんだけど。

「うぐぐ……」

歯軋りすら交えてサルバが睨みつけている（と、思われる）のは大浴場の二つに分かれた入口。より正確に言えば、二つに分かれた入口に掛けられた布に描かれた、男湯と女湯という大きな文字だった。

「まさか、男女を分けられるほどお金を突っ込んでるなんて。人間の感覚の麻痺って怖いよね？」

「そこじゃねーよ畜生!!」

サルバの絶叫が廊下に響き渡る。はっはっは。ま、そっちだよね。

「でも、いい加減腹を括らないと何時までもお風呂に入れないよ？」

サルバが風呂場の前で葛藤と懊悩を始めて早数か月。
「そこまで経ってねえよ!?」
「じゃあ、そこまで経つ前に結論は出るの？」
「うぐぐぐ……」
当たり前のことを言えば、再び歯を食いしばって懊悩を開始するサルバ。まあ、気持ちは分からないでもないか。
男湯に入れば他の男の人が入って来た時にトラブルの元になりそうだけど、女湯に入れば男の尊厳的な意味で死が待っている訳だし。僕もサルバみたいに体が女性になったら、流石に迷うだろうし。
「男のまま女湯に入るのと、女になって女湯に入るのとじゃ、気の持ちようも大分変っちゃうもんね」
「うぐぐぐぐ……」
分かってるなら突っ込むなと言わんばかりの恨めし気な視線がサルバの長い前髪から覗く。一応、第三の選択肢として、入浴を諦めるっていう案もあるにはあるけれど、一日歩き通しだったところに、タダで入れる大浴場の魅力は神ならぬサルバにも抗いがたいらしかった。……仕方ない。
「もう腹括って男湯に入れば？」

面倒臭いし。
「いや、でも「どうせ、他の男の人達は絶対に男湯には入ってこないし」……は？」
ぽかんと間抜けなお顔になるサルバ。うん、予想通りの反応。
「ど、どういう事だよ？」
「さっき、中に居た人に聞いたでしょ。今からお風呂入れるか？　って」
「おう」
「その時に、少し驚きながらにやって笑って大丈夫って言ってたから、この宿の人達も僕達が一緒にお風呂に入る事は織り込み済みだよ」
「……俺とお前が風呂場でセックスするつもりだろうと思ってるって事か。おい」
不機嫌そうに唸ったサルバがさっきの懊悩とは違う意味で牙を剥く。
「半分はね」
けど、それもあるだろうけど、それだけじゃないと思うよ。
「今、この村に居る人間で、態々男湯を選んで入る人って居ないだろうからね」
女湯が埋まってたら違うんだろうけど。
「んん？」
「ほら、村の男の人達は実質単なる奴隷に近い状態で、債権屋の人達が態々お風呂に入れる義理は無いでしょ？」

「だろうな」
「入るのはセックスが仕事で、ある程度体の清潔さを維持させたいって女の人と、その女の人を抱きに来る債権屋の男の人達が大半だけど、彼らは全員女湯に入るだろうから」
「そういう事か……」
そ。単にセックスしたいなら、娼婦の人達が居そう、或いは入って来そうな女湯に入るだろうからね。逆に、男湯は特定の相手と楽しみたい時の為の場所にしてあるだろうから、さっきの債権屋の人に声を掛けた段階で僕達が出るまでは誰も入れない様にしてくれているだろうね。
「……ん？」
あ、サルバが首を傾げた。
「なあ、アルタ」
「何？」
「お前、そこまで詳細に説明できるって事はだ」
「うん」
「……分かってて黙ってたって事だな？」
あ、前髪の奥から殺気が漏れ出した。……、
「うん」

まあ、答えは変わらないんだけどさ。

「……何でだよ?」

「男(サルバ)をエッチな事目的でお風呂に連れ込んだって思われたくなかったから」

勝手に自爆して女湯に行ってくれないかなーって。

「おい」

「僕の慈悲深さに感謝して咽び泣いても良いよ?」

許可してあげる。

「……」

「……」

「お前……やっぱりイイ性格しているわ」

そう?

「まあ、どうでも良いや、僕は行くね」

「お前に少しでも気兼ねした俺が馬鹿だったわ」

男湯の入り口に掛けられた布を潜ると、げしげしとサルバにお尻を蹴られた。仕返しにサルバの頭を握ると「ギャース!?」とサルバの悲鳴が木霊した。汚い悲鳴だね。

布を潜った先にあった脱衣所は予想通り閑散としていて、手入れの痕こそ見えるものの、あまり使われていないのが雰囲気で伝わってくる。
「お前の予想通りっぽいな」
「でしょ」
脱いだ羽織りを適当に丸めて籠に放り込んでいると、隣のサルバがガバっとやけに豪快な仕草で革のジャケットの表を開いた。
「あ、その下着着てたんだ」
「一応、ダンジョンに潜るかもしれないと思ったからな」
前は素肌の上に直で着ていたサルバのジャケットの下から現れたのは、この前ロハグで買った補正下着だった。
大分タイトな生地らしく、肩から股下迄ぴっちりと伸びた生地に包まれたサルバの身体は初めて見た時とは見違えるくらいにすっきりとした流線型になっていた。その分、お値段は想定以上だったけど、一番の目的（おっぱいを潰す事）は出来ているみたいだし成功と言えば成功っぽかった。
但し、その分、脱ぐのにそれなりに力がいるらしく、股の部分の留め金を外して生地を持ち上げたサルバは「よっ」と軽く気合を入れて、胸の下から上へと生地を持ち上げる。そのタメから解放されたサルバの胸が大きく弾んで、拘留前よりも一回り大きな本

来の姿を取り戻した。
「しかし、あっさり脱ぐね」
「あん？」
全裸になって、男らしく腰にタオルを巻きつけたサルバの佇まいに、僕は思わずそんな声を上げた。いや、まあ、一応男同士だけど、普通もう少し警戒しない？　曲がりなりにも全裸な訳だし。
「ああそれか」
僕の疑問に納得したのか、大きく頷いたサルバはにやっとした笑みを口元に浮かべる。
「お前なら大丈夫だろうからな」
そう？　随分信用して「男として枯れてそうだしな。ダンジョンみてーに」る訳じゃないね。うん。
「大丈夫、僕はサルバと違ってちゃんと男の象徴付いているから……ぷっ」
「お？　という事は、男の乳（俺）に興味があんのか？」
あ、何か凄いにやにやされた。……やるじゃないか。うん、その挑戦買ってあげようか。
「ひんっ!?」

脱衣所の中に、腰にタオルを巻いたサルバの甲高い悲鳴が響いた。
「な、ななな!?」
次いで、顔を真っ赤にしながらおっぱいを両腕で庇って後退るサルバ。うん、予想通り。
「何しやがる!?」
はっはっは。
「おっぱい揉んだだけだけど?」
見ての通り。
「て、てめ、まさかそっちの気が!?」
「は? ある訳ないでしょ野郎相手に」
あったら勃ってるからね?
「で、どうだった?」
「……何がだよ」
「おっぱい揉まれて感じちゃった感想は?」
「がはっ!?」
精神的ダメージを受けたサルバはお腹を抱えて突っ伏した。ざまぁ。
「俺が悪かった。すっげー精神的にきついから勘弁してくれ」

「良いよ」
　仕返ししたらすっきりしたし。
「それよりさっさと入ろうよ」
「後で覚えとけよ」
「残念、もう忘れちゃった」
「さよか」
「うん」
「……」
「……」
　サルバがハイキックをした。
　僕はしゃがんで回避した。

　脱衣所の木戸を引いた先にあったのはもうもうと湯気の立つ広く大きな、いや、こんな村には分不相応な巨大な浴槽だった。
「もう驚かねーけど、ここまでくるといっそ見事だな」
「だね」

ぼやく隣のサルバに僕も同意する。本当に見事な大散財。馬鹿かな？

「取り合えず、入るか」

「うん」

一先ず身体をさっさと洗って、お風呂に浸かる事にする。昨晩から夜通し歩きっぱなしだったこともあり、結構体中が汗でべとべとだったしね。

「あ〜……」

身体を洗い終えてお風呂に入ると、二人揃ってなんとも親父臭い声が漏れた。

「昼間っからこういうのはやっぱ贅沢だな……」

まだ日が高い青空を見上げながら呟いたサルバが、顔を洗うためにお湯を手ですくおうとしたところで、胸元でぷかぷかと浮かぶおっぱいが邪魔になっている事に気付いて渋い顔をする。

「こいつさえ無けりゃ、満点なんだがな」

「でも、サルバが女の身体になっていなかったら、そもそもここには来ていないけどね」

「そりゃそうだ」

肩を竦めたサルバが、おっぱい越しに掬ったお湯でバシャバシャと顔を洗い、ざばっと乱雑に濡れた前髪を掻き上げた。

「……」

「ん？　どうした？」
「いや、やっぱり顔は美人だなって。男の冒険者にやたらと声を掛けられるのも仕方ないよね」
「気持ちわりぃ事言うなよ、おい」
　はっはっは。
　体を抱いて、ぶるりと身震いしたサルバは中々お湯に浸かりきらないおっぱいを力任せに沈めて、もう一度「あ〜……」と漏らす。……。
　そうやって、暫く二人揃ってぼんやりとお風呂に浸かって空を見上げていると、ふと隣のサルバが何かを思い出したように「そういや」と口を開いた。
「？」
「気になってたんだが、随分とこの村のヤクザ者達からは真っ当というか丁重に扱われるよな」
「ああ、それ？」
「おう。他の場所でのダンジョン閉鎖士の扱いとは正反対でちょっと不思議なんだが」
「正直不気味だ」と首を傾げるサルバ。まあ、事情を知らないと、そう思っちゃうよね。
　そうだな……。
「種を明かしちゃうと、あの人達、まあ債権屋は『ダンジョンの閉鎖のタイミング』が凄

い重要なんだよ」
「？　どういう事だ？」
　興味がそそられたらしく、サルバがぬっと身を乗り出してきた。
「ダンジョンの閉鎖で僕達の仕事は終わるけれど、ダンジョンがあった土地にはまだ人が残るし、土地に残った人達はダンジョン閉鎖後も生活が続いていくでしょ？」
「まあ、そうだな」
「そうなると、当然ながら税金を払う義務も残り続ける訳」
「ふむ」
「でも、ダンジョンが開かれていた時期とダンジョン閉鎖後の時期で税金を同じにするわけにもいかないから、ダンジョン閉鎖直後、次の年の税を決めるためにその土地を治める貴族様から必ず徴税官が派遣されてくるんだよね」
「それが重要なのか？」
「うん」
　まだピンと来ていない様子のサルバが「はて？」と首を傾げる。切れの長い鋭い目と流麗な眉毛が訝る様に歪んだ。
「徴税官が取り仕切る仕事は究極的には来年の税金の決定なんだけど、その税金を決めるためには結構色々な工程が必要になるんだよね。まず、その土地の持っている家屋な

どの財産、人口、収穫される食糧などの資源の確認。これをしないと税の設定もくそもないでしょ?」
「まあ、だろうな」
「で、さっきの債権屋さん達はこの資源の確認をされちゃうと困るんだよね」
「……あ」
　分かったみたいだね。
「債権屋は村に残った最後の資源の類の転売と、村の人身売買で利益を上げる仕事だからね。人も資源も移動や売買全てで時間が掛かる以上、債権購入後から徴税官の派遣までの時間を何とか引き伸ばしたいんだよね。けど、貴族様にそんな事をお願いしても首を縦に振ってくれる訳がないでしょ?　そこに住む人間は全て貴族様の資産って事になるんだから、彼ら債権屋の仕事は借金を盾に貴族様の財産を掠め取る仕事にあたる訳だしね」
「お前も、人的資源に気を使って、自分では人を斬り殺さねーもんな」
　そうそう。
「そうなると、彼らとしては徴税官派遣の取り決めである、ダンジョン閉鎖士によるダンジョンの閉鎖。こっちを何とかして遅らせたいって話になるわけ」
「ダンジョンの閉鎖が完了しねーと、税収の計算が出来ねーからって訳か」

「無理にやろうと思えば出来なくも無いんだろうけど、それをやっちゃうと、今度は想定よりも税収が下がった場合に真っ先に担当の徴税官本人が横領を疑われちゃうからね。身の潔白を証明するためには、ダンジョン閉鎖士の連絡前に計算の開始はしたくないってのが本音だろうね。どうせ、多少債権屋に持って行かれても自分の給料が悪くなるわけでもなければ、数日徴税金額を早く報告しても徴税の開始は翌年で、自分の給料が良くなるわけじゃないからね」

だから、債権屋（彼ら）は僕達と仲良くしたいわけ。

「成程な」

サルバは興味深そうに目を丸くしながらこくこくと頷いた。

「僕達ダンジョン閉鎖士というよりも、ギルドの方も結構彼ら（債権屋）とは仲良くしたい事情があってさ、彼ら債権屋はその仕事のやり口や内容から、その土地の貴族からは嫌われるけど、代わりにその貴族と敵対している貴族や他所の土地の人間とは仲が良いんだ。さっきもリーセン子爵が大のお得意様って話が出たでしょ？」

「ああ」

「そういう、複数の土地を跨って、しかも貴族に手を突っ込める情報源っていうのは本当に貴重なんだよね。今回に限らず、貴族がバックに居そうな案件だとギルドって手を出しにくいところがあるから」

曲がりなりにも、元老院、つまり、貴族の傘下にあたる組織だからね。
「だから、貴族の意に逆らっても仲良くしたいわけか」
「いや、逆らう訳じゃないよ」
「つーと？」
「彼ら（債権屋）の居ない土地の貴族様の意を汲んでいるって事」
「物は言いようだな」
けっと吐き出したサルバだけど、目が笑っているよ？
「ま、そういう訳で僕（ダンジョン閉鎖士）達と彼ら（債権屋）は持ちつ持たれつな関係って訳」
だから、閉鎖の順番くらいは、自由に決めさせてる訳だしね。
「実際、彼らからは面白い話を聞けたでしょ？」
リーセン子爵の今の状態とか、ダンジョン閉鎖士の失踪とか。
「納得は出来るんだが」
うん。
「ダンジョン閉鎖士が嫌われてんのって、そーゆー奴らと連んでるのも原因じゃねーの？」
かもね。
「それで良いのかよ、おい」

「社会全体が既にそういう仕組みになっちゃってるからね。仕方ないと思うよ」
「割り切るなあ」
「じゃないと、仕事にならないしね」
僕が答えると、サルバは呆れた様に両肩を竦める。腕が離れたせいかぷかりと浮かび上がってきた大きなおっぱいが揺れて、湯船に広い波紋を作ったのだった。

「……しっかし」
「んー？」
再び無言で空を見上げていると、またサルバが思い出したように口を開いた。
「どう育ったら、お前みたいなどんな柵もドジョウみてーにぬるぬるすり抜けてそうな全身割り切り人間になるんだ？」
「どうしたのさ、急に？」
「いや、ここ数日お前とつるんでみて、改めて俺が会った中でも指折りの変人だなって思ってな」
失礼な。
「……」

僕が肩を竦めると、少し体が火照ったのか、ざばりとサルバが立ち上がり、湯船の縁にどっかりと足を開いて腰かけた。ぎゅっと握った拳を膝に置き、外から流れてくる風に気持ちよさそうに「あ〜」と目を瞑る姿は、何て言うか実におじさん臭かった。見た目だけなら可憐な女の子なのにね。

「良いんだよ。どうせ十年もすれば俺もお前もおっさんだろ」

「今のままだと僕と違って、サルバはおっさんじゃなくておばさんだけどね。ぷっ」

「ぶっ殺すぞこの野郎」

はっはっは。

「んで？」

僕も釣られて湯船から上がって縁に座ると、改めてサルバが小首を傾げた。

「ん？」

「実際どうなんだ？」

どうって言われてもなぁ……。

「正直、起伏も何もなくて、特に聞いても面白い話じゃないよ？」

「良いんだよ。俺の個人的な興味だし。それに、一応相棒であるお前の事、知らねーってのも座りが悪いだろ」

「本音は？」

「俺の人生最大の黒歴史を一方的に握られてるのが純粋にムカつく」
「だろうと思ったよ」
むしろ、それ以外の理由だったら一体どうしようかと。でもまあ、
「特に弱みになる様な事は……いや、特に弱みに成れるような事は無いけどね」
それくらいは別に良いか。

「僕はロハグの町から西の方にあった、小さなダンジョン村で生まれで、家は普通の農民だった……と思う」
「疑問形なのか？」
「小さいとはいえダンジョンがあったっていうのと、正直、記憶が朧気であまり良く覚えていないんだよね。ダンジョンの無い農村なら、当時の記憶のある頃の僕の年齢はもう両親の仕事を手伝っていた時期だっただろうけど、そういうのが無かったし」
「裕福だったんだな」
そうだね。当時の半分くらいはそうだったんじゃないかな。
「けどまあ、小さな農村っていうのは変わらなくて、日々の生活には不自由はしないけれど、大きな贅沢も無い、小さなダンジョンだったんだろうね」

この稼業を始めてからの経験則だけどさ。
「まあ、所詮は子供の頃の古い記憶だから、この時点では人生の起伏とかは特に無かったと思うんだけど、ある日、突然村の端から悪臭を感じる様になってさ。獣臭くて、生臭くて、そのくせ鉄錆みたいな、そんな臭い」
「それって」
「うん、ダンジョンの臭いだった」
その事を知ったのは少し後だったから、その時は気付かなかったけど。
「その事を両親に言ったら、酷く狼狽されて、取り消せとか、そんな筈はないとか……うろ覚えだけど、そんな事を言われていた気がする」
けど、結局それ以降の記憶は飛んでいて、何となく臭い村で顔を顰めながら生活していたんじゃなかったかな。
「で、更に時間は飛んで、村にダンジョン閉鎖士の人が急に現れてさ、村の大人とダンジョンの閉鎖について話をしていた」
「ダンジョンが限界に来たって事か」
「だったんだろうね」
あの悪臭の話から何があったかを理解して、気まずげに顔を逸らされるけど、余り気にする必要は無いよ？

「で、当然ながら村の大人達は抵抗していたかな。中には農具を持ち出す人も居たけど、多分余り意味なかったと思うよ。相手ダンジョン閉鎖士だったし」
「お前見てると納得しかねーな」
「そう？」
「おう」
「……」
何か、酷い納得の仕方をされた気がする。……まあ良いや。
「で、何とかあれこれ誤魔化そうとしてたところに丁度通りかかっちゃってさ」
「お前が？」
「うん」
間が悪い……かは分からないけど、多分、あの偶然は割と人生を変えた瞬間だったと思う。
「『そっち、臭いよ』ってその時のダンジョン閉鎖士の人に言ったら、物凄い目で見られてね」
「ダンジョン閉鎖士って数が少ない訳だからな」
「うん。でも、タイミング悪く、大人達がダンジョンの事を誤魔化そうとしていた時だったからさ、周りの大人から袋叩きにされそうになったわけ」

「そりゃそーだ」
　ね。僕もそう思う。
「けど、ダンジョン閉鎖士の人に止められて、僕はダンジョンの奥に案内させられたんだ。で、〝ダンジョン・コア〟の回収もやった。だから、僕の初めてのダンジョン閉鎖業務は自分の村って事になるかな？」
「ほーん」
「戻ってきたら当然村の人からは盛大に怨まれていて、その中には村八分を恐れた両親も居たんだ」
「……」
「で、そんな両親にダンジョン閉鎖士の人が僕の身柄とダンジョン閉鎖士としての能力について話をしていて……」
「……」
「金貨三枚で売られた」
「反応うっすいな、おい!?」
「もう十年以上前の事だからね」
「それにしたってうっすいわ。つーか、やっすいな、お前の値段」
「娼館に売られる女の子より安いあたり、今思い返すと大分足元見てたよね、あのダン

ジョン閉鎖士の人」

「だろうな！」

サルバが吠えるけど、実際、それ以外反応のしようもないよね。ほんと、よくあんな値段で買えたなあ。僕っていう個人としてはむしろ高すぎる値段だけど、ダンジョン閉鎖士一人って考えると逆に安すぎるよね、実際。

「で、それ以降はロハグの町に送られて、ダンジョン閉鎖士補佐を二年くらいやって、多分十歳になる少し前から一人でダンジョンの閉鎖を繰り返していたかな。多分、もう閉鎖したダンジョンの数は三桁行くんじゃないかな」

「なんつーか、お前がどうしてそういう性格になったのか分かった気がしたわ。お前、何て言うかあれだ、表裏もなくというか裏も表もダンジョン閉鎖士って感じなんだな」

「そう？」

なら良かったね。相互理解が深まって。

「今のは間違っても〝相互〟理解とは言わねーよ」

そうかな？

「まあ、どうでも良いけれど」

ね。

難しい顔をしてサルバが腕組みをしたのを横目に、もう一度お風呂に浸かった所で、

僕とサルバの声ぐらいしかなかった風呂場に、不意にきぃっと木が軋む音が響いた。
「ん？」
つい、互いに顔を見合わせるけれど、当然どっちもあんな音は立ててない。と、
―でさ……だから―
―あはは、うそ……―
続いて、響いてきた高い女性の話し声が、女湯と男湯を仕切る柵の方から来ている事に気付き、ああ、そういう事かと直ぐに疑問は氷解した。
「娼婦の人達、お風呂みたいだね」
「だな」
「そろそろ、寝る頃なのかな？」
「かもな」
娼婦という仕事の都合上、彼女達は昼に寝て夜に起きて男の相手をする場合が多い。それを考えると、今からがこの村の女の人達の入浴の時間なのかもしれない。
柵越しに聞こえてくる声の数が次第に多くなり、それに合わせて時折笑い声が聞こえてくる中で、不意にガンッと乱雑に何かがぶつかる音がした。恐らく、脱衣所から続く木戸の音だと思われるそれが鳴ると、今度は「おお、集まってやがる集まってやがる」とガラガラした数人の男の声が響いてきた。ていうかこれって、

「まさか、本当に予想通りとは」

いや、自分でサルバに言ったは言ったんだけど、まさか本当に女湯をセックスの為に使っていたとはね。まあ、驚く程の事でもないか。

「きゃっ!?」

「もう、嫌ですよ旦那様。んっ♥　こんなところで始められちゃったら、あっ♥　せっかく身体を洗ったのんっ!!」

響いてきた声も遠慮が無いし、多分、此れがこの村の日常なんだろうね。……ん？

「サルバ？」

「んっ!?　あ、お、おう」

女湯から村の女の人の喘ぎ声が聞こえ始めてから、じっと硬直していたサルバに声を掛けると、サルバはびくっと肩を跳ねさせて、何故かしどろもどろに返事をしてきた。

んー？　ああ、成程。

「サルバ」

「お、おう、何だよ？」

「覗く？　女湯」

「……」

「……」

「……は？」

何故か、びしりと硬直した末に、間抜けな顔をされた。

「な、ななな、何を言ってるんだ!?」

「声大きいよ」

「大きくもなるわっ!!」

ざぶんと飛び込んで来たサルバがヘッドロックと共にべしべしと人の頭を叩いて来る。痛くはないけどおっぱいのせいで苦しい苦しい。

「頭おかしいんじゃねーの!?」

「産まれてこの方、正常だよ？」

「正常な奴は隣の湯でおっぱじめたのを『覗く？』なんて言わねーんだよっ！」

「でも、さっきから興味津々でしょ？　大分ムラムラ来てるみたいだし」

「な、ば、馬鹿言ってんな！」

「それ、器用だよね。小声なのに叫んでるって」

動揺して、変に力んだサルバの腕から抜けると、案の定ちらちらと興味ありげに女湯の方に視線を走らせていた。それ、誤魔化しているつもりだろうけど、目の方向でバレバレだよ？　まあ、別に良いけど。

「それより、実際どうする？」

「ど、どうするって」
「女になっちゃってから、色々と溜まってるんでしょ？　流石に性風俗とかはダンジョン閉鎖士に足突っ込んじゃったせいで入れないと思うけど、覗きくらいなら笑って許してくれると思うよ？　この村では債権屋の人達が完全に上位者だし」
　これでムラムラが解消できるなら儲けものだしね。
「お前は俺をどうしたいんだよ!?」
「別にどうもしたくないけど、一応福利厚生を考えているつもりだよ？」
　性欲は人間の正常な欲望だからね。
「一人で覗くのが嫌なら付き合うよ？　それくらいなら、僕もそこまで苦じゃないし」
「付き合おうとすんな！　止めろよ！　むしろよぉ！」
「そう言ってるけど、また目が泳いでたよ？」
　というか、最早ガン見なんだけどね。
　騒いでいる間にも壁の反対側はどんどん盛り上がっているのか、始めは押し殺していた嬌声は完全に開放されて、今や風呂場どころか村の広場に迄響いているだろうしね。
で、
「どうする？」
「さ、流石に不味いし」

「どうする？」
「お、お前だって世間体とかあるだろ？」
「ダンジョン閉鎖士にそんなものある訳ないでしょ」
「ぐ……」
「で、本当にどうする？　正直、僕としては別にみても見なくてもどっちでも良いし、サルバがもう一度首を横に振ったらお風呂上がろうかなって思ってるんだけど」
「っ～～～～～～～～～～～～!!!!」
　頭を抱えて沈んじゃった。
……
……
……
「ぷはぁっ!!」
「あ、出てきた」
「ふんっ!!」
「ちょ、頭押し潰さないでよ。痛い痛い」
　それに目が据わってて怖いんだけど。びしょ濡れの長い髪が頭全体にへばり付いていて水死体みたいだし。

「お前の頭が痛ぇのも、俺の目が据わってんのも、全部お前のせいだっ!!」
　そう？　別に良いけど、どうするか決まった？
「……」
「……サル「……いいじゃねえか」うん？」
「やってやるよ、やってやろうじゃねーかっ!!!」
「気合入ってるね。そんなにムラムラしてた？」
「お前のせいだよ!!!
!!」
　あれ？
「まあ、良いや。取り合えず、足場作るから桶持って来よ」
「おう」
　頷いたサルバが鼻息荒く付いて来る。お風呂の端に置いてあった風呂桶を集めると、今度は引き返し、それを三角状に積み重ねて階段にしていく……サルバの手がやたらとテキパキしているね。まあ、乗り気なら良いのかな？
「よしっ」
　詰み上がった風呂桶の階段を点検し終えたサルバが腕を組んで女湯へと続く仕切りを睥睨する。……、
「どうした？　アルタ」

「ん？　んー」
　何て言うかさ、
「全裸なのに欠片も色気がないってある意味凄いなって思ってさ」
「中身が男なのに色気もくそもある訳ねーだろ」
　そりゃそーだ。
「アホな事言ってねーで、早速覗こうぜ」
「お、やる気だね？」
　今の今までと違って。
「けっ、もう腹括ったっつの」
「そ」
「それに、確かに興味あるからな」
「抱けねーし、触れねーしで、せめて見れる時くらい見るわ」とサルバは鼻息を荒く噴き出した。
「じゃ、行くぜ？」
「はいはい。何時でもどうぞ」
　サルバに頷き返すと、そっと音を立てない様にサルバが一歩目を踏み出す。それに合わせて、バランスを取りながら、一段、また一段と風呂桶の階段を登っていくと、少し

ずつ柵の天辺が近付き、それに合わせているのか、どんどんとなりの女湯から聞こえる嬌声が大きくなっていく。風呂桶の階段の一番上の段まで上り詰めて、柵のへりに手を掛けると、僕とサルバはどちらともなしにもう一度顔を見合わせた。

（いくぞ、準備は良いな？）

（オッケーだけど、やっぱり随分ノリノリだね）

（当たり前だろ。あんだけ焚き付けられたら、誰だってこうもなるっつの。それにな）

（？）

（前のパーティーじゃ、絶対に出来なかったから、女湯の光景は素直に興味がある！）

（あ、はい）

どうやら、心底ノリノリだったみたいだ。

（じゃあ、今から三つで行くぜ？）

（うん。分かった）

（よし、……一）

（二の）

（三）

三の合図と同時に柵の上に顔を出すと、

「おう、どうだ、今日一日でお前の旦那の腹と背の皮を鞭で剥いだ男の〝へのこ〟は？」

「あん♥　ああ、ごめんなさい貴方!!　ごめんなさいいっ!!♥」
　真正面に湯船で交わる男女。一人はさっきの広場でちらりとみた債権屋の男性。抱かれているのは確か、
「さっき、ガキ抱いて男に買われてた女だよな、あれ」
「そうだね」
　期待に満ちた顔で覗き込んだのに、顔引き攣ってるよ？
「え？　つか、旦那？」
「赤ちゃん居るんだし、既婚者なのは変じゃないんじゃない？」
　むしろ、そっちの方が可能性があると思うけど。
「……旦那居るのに、ああいう事してんのか」
「あの人達も稼がないといけないしね」
　自分の分なり、子供の分なり。
「債権屋の男の人に気に入られれば、それだけ扱いも良くなるからね。特に偉い人の情婦になれれば、売られる時にも多少なりとも割の良いところに割り振ってもらえるし」
　経済力はそれだけで男の魅力そのものと言っても良いしね。
「だからほら、債権屋の男の人に選ばれた女の人達は良い笑顔しているし、美人が多いよね。周りも頑張って債権屋の人達に媚び売ってるけど、やっぱり見て楽しむなら実際に

抱かれている人達がおすすめだよね」
　実際、お風呂に入っている女の人の中でも、今抱かれている人達は特に美人だし。
「いや、確かに美人だが、その背景を聞くとすっげー気が重くなるんだけどな」
「そう？」
「つか、お前はそういうの無いのかよ？」
「別に見て楽しむだけだし、その人の背景とかどうでもよくない？　それよりも、どうせなら美人の方が良いと思うんだけど」
「半分は否定しねーけどよー」
　何故かサルバは眉間を抑えながら天を仰いだ。うーん？
「……まあ、性欲は解消出来たみたいだし、別に良いか」
「これは解消出来たんじゃなくて萎えたんだよ、くそったれ」
「おや、ダンジョン閉鎖士様じゃねーですか！」
「あんっ♥」
　と、話し声が大きすぎたのか、話題の人妻からずるりと性器を引き抜いた債権屋の人がこっちの方に歩いてきた。
「どうも、お邪魔しています」
　壁の上から手を振ると、にっと愛想笑いを浮かべた債権屋の人はくいっと親指で後ろ

の女の人達を指す。
「どうです、もし宜しければ混ざって行きませんか？」
セックスのお誘いか。うーん……
隣を見ると、既にサルバの目からは情欲の色は消えていて、最近感じていたムラムラもなくなっている。……うん、じゃあ、別に良いね。
「いえ、そろそろ、部屋に戻るつもりだったのでお気遣いなくー」
「そうでしたか。じゃあ、あっしらもこれで！」
仕切りの上から答えると、手を振ってきた債権屋の人はまたばちゃばちゃと湯船の方に戻って行った。
「サルバ」
「んおっ!?　あ、おう」
「帰るよ」
「ああ」
頷いたサルバと風呂桶の階段を下りる。女湯の光景が見えなくなるのとほぼ同時に、再び嬌声が辺りに響き始めた。
「……なあ、アルタ」
「？　何？」

「さっきの女の人達、すっげー幸せそうだったな」
「そうだね」
「でも、旦那もガキも居るんだよな」
「全員かは分からないけどね」
「それなのに……口では旦那の事を呼んでたよな？」
うーん、そうだね……。
「別に良いんじゃない？　実際、本心は幸せだろうし」
確実に、今のこの村で一番裕福な暮らしをしているだろうからね。人間、周りの人間より少しだけ贅沢出来ると幸せを感じるって言うしね。全員、既に味見はされてるだろうけど、美人ならそれだけで売られた後も食べるのにはそこまで困らないだろうしね。
「そういうもんか」
「そういうものだと思うよ？」
知らないけど、債権屋に売られた女の人達は割とそんな感じだったかな。
「……なあ、アルタ」
「？　何？」
「やっぱ、女ってわかんねーな」
「そう？」

「おう」
　頷いたサルバが深々と嘆息した。……ふむ。
「次は男の人が居ないときにする？」
「もう当分いいっつの」
　苦笑交じりのサルバに、ぺしっと脹脛（ふくらはぎ）を蹴られたのだった。

十

その日の夜、昼間に風呂で汗を流し終えていた僕達は明日の出発の事も考えて、夕食もそこそこに、まだ外で債権屋の人達が酒を飲み女の人を買う声を聴きながら早々に寝床に潜り込んでいた。

元々、僕の方は寝付きも良く、大抵の場合寝れば直ぐに寝入る性質(たち)だったけれど、どうも相方(サルバ)の方も全裸になりさえすれば直ぐに寝付ける性質(たち)らしく、床に入ると何方ともなしにいつの間にやら寝息を立てていた。

(……はずだったんだけどなあ)

それは、本当に不意の事だった。気持ちよく落ちていたはずの意識が唐突に現実に引き戻されるのを感じた僕は目を瞑ったまま枕元の剣に手を伸ばしていた。今までにも何度かあった感覚。或いはダンジョン閉鎖士としては慣れた物とも言うべき状況。要は、

(また……か)

何者かによる、闇討ちの開始だった。

「ふっ」

引き寄せた剣を雑に振りぬくと、いつの間にかやって来ていた黒い影の一つが今まさに振り下ろさんとしていた黒く艶止めの塗られた短剣を都合よく弾き飛ばすことに成功する。

「……」

そのまま闇に溶けた襲撃者の腹に体当たりを決めると、頭上で「ぐふっ」という絶息の音が聞こえる。

（サルバの方は）

一瞬空いた間に念のため、サルバの方を振り返ると、僕の方と同じ様に近付いてき誰かが同じく窓から入り込む月光を弾かない刃をその裸体に振り下ろそうとしていた。

「……」

見れば、違和感を覚えてはいるのか、ベッドの上でもぞもぞと寝返りを打っているけれど、今一起きる気配が見当たらない。

「ん」

（多分、慣れなんだろうけど、この辺は今後直してもらわないとね）

そんな事を思案しながら、夢の中で我知らずの内に絶体絶命の危機に陥っているサルバを救出するため、僕は目の前の黒ずくめの何かの手から、握った短刀を毟り取ると、その勢いのままに後方へとそれを振りぬいた。

「ぎゃっ!?」

背後で響く猿の様な叫び声。同時に室内に充満する生暖かい鉄錆の臭いに、上手く剣が当たっただろうと見当をつける。同時に「誰だてめぇ!?」なんて聞き慣れた声が聞こえてくるけど、そんなのはどうでも良いからさっさと反撃してよ。こっちも余裕がある訳じゃないんだから。

僕の方はもう一度両足に力を込めて、更に目の前の敵を押し込みにかかる。幸い、相手は寝込みを狙ったのに反撃が先に飛んでくるとは思っていなかったらしいく未だに混乱から完全には脱せないでいる。力が有利なうちに勝てるだけ勝つという基本に従い、僕は目の前の彼を勢いのままに押し込むことにする。

そのまま、侵入してきたドアを破り、二階の廊下に飛び出すと、廊下の手すりに黒ずくめの身体を叩き付けた。

「お〝っ!?」

腰を打った彼の野太い声が上がる。それでも、後がない事は理解できたのか、必死に僕と手摺の拘束から逃れようとしてきたけど……甘いね。

「ひっ!?」

短刀を毟り取った時点で、既に抜いていた片刃剣は逆手に持ち替えてある。力任せに左右に逃げても、反対側に僕が振り向けば、首筋を斬られて一巻の終わりだよ。

「っ！」
「うん、理解できるあたり、場数は踏んでるみたいだね」
じゃあ、
「ばいばい」
「あっ……」
黒い何かの小さな悲鳴が上がるのと同時に、僕は剣を握った腕に力を込め、手すりを支点にして目の前の敵を再度押し込む。既に僕の剣から逃げるために仰け反りつつあった彼は、当然の様に身体を支える手摺を軸に大きく体を傾け。
「っ!!」
そして、当然の様に身体を反転させて、頭から真っ逆さまに宿の受付口の床に墜落したのだった。
「……」
ガツンという鈍い音が響き、丁度落下地点に備え付けられていたテーブルと椅子がガラガラと音を立てて崩れる。その上の影はぴくぴくと痙攣したものの、やがてピクリとも動かなくなった。ふむ……、
（まあ、死んでても不可抗力で済むか）
生きていたら、また会いましょう。それが彼の幸福につながるかは分からないけど。

「それよりも、サルバは……」
「ぬおおおおおおおお!?!?!」
「あー……」
色気の欠片も無い絶叫を上げながら、僕が投げた短剣の刺さった肩を庇いつつも追い縋る黒い影の剣を床を転がりながらなんとか必死に躱しているところだった。全裸にあの体型もあって、おっぱいが凄い事になっているけれど、正直必死極まりない顔と、色気の欠片も無い悲鳴、そして、返り血でドロドロになった見た目のせいで、多分喜ぶ人は居なさそうだった。
「はぁ……」
まあ、何にせよ、生きているし、怪我もなさそうなのは良かったかな。
「兎に角、助けないとね……」
一息で飛んで、男の剣を跳ね上げる。「ぬっ!?」と言いながら目を見開いた何かはそのまますると後退りをして距離を取ってきた。うん、勝ったね。
「サルバ、撃って」
「お、おう」
「あ、死んでも良いから兎に角反撃できなくさせて」
「!?」

取り乱していたのと、短剣使いに距離を詰められていたせいで中々撃つタイミングが無かった拳銃を影に向けるサルバ。丁度良いからと注文を付けると「良いのか？」と訝りながらも、サルバは男の両手と両肩を綺麗に撃ち抜いた。

「うん、あれなら九割方無力化できたね」

既に戦意は抜けているみたいだけど、念のため銃は向けておいてね。

「あ、ああ。それは良いんだが……」

「？　どうかした？」

「こいつら……何だ？」

そう言って、サルバが首を傾げる。寝るために下ろされた墨色の長髪が普段よりも大きく揺れて月光を反射する。

「そうだね」

うーん、

「刺客」

「刺客……」

「多分ね」

「おい」

サルバが突っ込んでくるけど、仕方ないでしょ。今の時点じゃそれ以外に思いつかな

いし。まあ、
「寝込みを襲ってきたんだから、真っ当な立場の人間じゃないってのは分かるけどね」
「ま、確かにな」
　頷いたサルバが、鬱陶しそうにおっぱいの谷間に溜まった固まりかけの返り血を手で拭い落とす。しかし、べちゃりと血が落ちて尚、その純白の肌は血の色で斑に汚されていた。うーん、
「肌が白いのも考え物だね」
「かもな」
　僕が揶揄うと、サルバがふんと鼻を鳴らす。世の女性が羨むような色艶と純白さを持っているものの、逆に闇夜に紛れて暗殺を仕様としていた彼ら襲撃者からすれば、サルバの身体は夜の中でも闇に溶け込まずに光を放つあたり、良い的だっただろうからね。
「あ」
「お」
　と、そんな事を話していると、物音に気付いたらしく、下の階の方で「なにもんだてめぇ!!」という聞き慣れた債権屋らしいガラガラ声が聞こえてきた。
「丁度良いや、このまま娼館の仕置き部屋か何かを借りて拷問を済ませちゃおう」
「おい!?」

「？」
　何？　何かあった？
「何かあった？　じゃねえよ」
「んー？」
「んー？　でもなくてよ」
「んん？」
「んん？　でもなく」
「……」
　何だろう、本気で分からないんだけど。
　彼の言いたいことが分からず首を傾げていると、サルバは「あー……」と呻きながらがしがしと頭を掻いた。
「拷問ておい。つか、そいつの手を撃っちまって良かったのか？」
「ああ、その事？」
　……そういえば、明確に説明していなかったっけ。
「んー、そうだね……」
　僕の反応に苦悩するように「その事って、軽すぎねえか？」と、男の人に銃口を突き付けたまま、サルバが眉間を抑えた。一応、動きながらも拳銃はぴたりと目の前の敵を

指しているけど、拳銃の射程距離で敵から視線を外すのはあまり褒められないよ？
「お前が前衛に居るんだから大丈夫だろ」
そう？
「そこまで信用するのは光栄だけど」
大丈夫？　無駄な信用は裏切られた時のギャップが凄いよ？
「例え天地がひっくり返っても、お前が足元掬われる光景は思い付かねえよ」
「そ……」
まあ、好きにイメージを持つのは別に良いけどさ。
「ただ、こっちに関しては明確に訂正しておくけど、僕、別に不殺の誓を立てている訳でもなければ、他人の命を使い捨てにしない訳でもないからね？」
そもそも善人って訳じゃないんだし。
「……」
「どういうことだ？」とサルバが前髪で見えない視線で、無言のまま問い掛けてきているのが、何となく肌で感じられた。そうだね、
「まず、僕が彼ら（農民）に手を出さないのは彼ら（農民）が明確に貴族の所有物であって、一人一人が貴族の財産だから」
仮にも元老院傘下の組織であるギルドの職員が、元老院議員である貴族の資産を奪う

様な真似をするわけにはいかないからね。窃盗罪になっちゃうからさ。
「農民殺しは窃盗か」
「少なくとも、元老院とギルドにとってはね」
　組織と組織ってそういうものだし。
「一方、彼ら（目の前の刺客）は明確に貴族の所有物かは分からない」
「まあ……そうだろうな」
　全身黒ずくめで顔も見えない。武器は艶止めを塗った刃物で農機具の類じゃない。足回りも音消しの布を巻いていて、明らかに人殺しを生業としている人間の見た目だ。
「もし、これで資産を主張したら、その時点で元老院の資産であるギルド職員への明確な攻撃行動だし、資産を主張しないのであれば殺傷自体は特に問題ないから」
　誰にも責められる訳じゃないからね。
「……」
「と、いうことで、明確に貴族の所有物への過度な攻撃や資産価値の下がる攻撃は厳禁。けど、正体不明なら一人二人殺しちゃっても、文句は言われないって訳。そもそも、こっちの命を狙ってきたわけだからね」
　殺そうとしたくせに、殺された程度でガタガタ言われる筋合いも無いかなってね。
「まあ、……それなら理解できるかな」

「ん。よしよし」
　疑問が解けたなら、結構かな。
「じゃあ、拷問しようか」
「おい」
「何？」
「何ってなあ」
「だって、吐かせないと彼らが何者なのか分からないよ？」
「そりゃそうなんだけどよ……」
　サルバがうーと唸っていると、壊れたドアの方からどたどたと債権屋の人達が転がり込んできた。
「大丈夫ですか!?」
「ええ、この通り」
　丁度、債権屋の人達も入って来たし、部屋を借りれると良いな。
「サルバは寝てて良いよ。拷問は僕がやっちゃうから」
　冒険者だったサルバはあまりこういう尋問や拷問の慣れていないでしょ？
「……」
「ん？」

何故か、物凄く不機嫌そうな顔をされた。何で？

「サルバ？」

僕が首を傾げると、サルバはむすっと口を尖らせて「こういうのは……」と不満をありありと乗せた声音で口を開いた。

「よく……あるのか？」

「こういうのって、拷問の事？」

「おう」

サルバがこくりと頷く。うーん、そうだね……。

「まあ、たまには？」

月一回は言い過ぎだけど、年に二回くらいはあるんじゃないかなあ。

「……」

僕がそう答えると、また口を尖らせたサルバはそのままむすっと押し黙った。んー？

サルバの裸に一瞬目を取られながら、返り血に塗れた姿に呆気に取られている債権屋の人達の前でしばし黙考していたサルバは、やがて何かを思い至ったのか、ふぅと小さく溜息を吐いた。

「サルバ？」

僕が問い掛けると、腕組みを解いておっぱいをたゆんと弾ませながら、サルバは「そ

の拷問、俺も連れて行け」と言葉少なにそう言った。
「え？　来るの？」
若干、驚き。
「おう……」
僕の反応に、小さく頷くサルバ。首を縦に振ったって事は、そういう事だよねえ……
うーん、
「何だよ、行っちゃだめなのか？」
「いや、だめってことは無いけど……」
でもなあ。
「正直、気が滅入るだけだよ？」
それこそ、さっき言ったみたいに、生死を問う気も無いから、それなりに凄惨になるだろうし。
「それでもだよ」
そう言って、サルバはバリバリと頭を掻いた。んー？
「俺は……お前のおかげでダンジョン閉鎖士補佐やれてる身だろ」
「まあ、そうだね」
というか、サルバに限らず、〝ダンジョン・コア〟を感知できない人間がダンジョン

閉鎖士補佐をやれるのは、ほぼほぼダンジョン閉鎖士が推薦したからだし。
「その俺が、たまにしかないとはいえ、定常的に起こりうる〝ダンジョン・コア〟と関係ない仕事から逃げる訳にはいかねーだろ」
「別に気にしなくても良いと思うけど……」
どうせ、無い時は本当に無いし。というか、基本人を相手にするギルドナイトと違って、僕（ダンジョン閉鎖士）達の仕事は基本的に対（枯れたダンジョン）物だし。
「お前が気にしなくても……いや、俺の自己満足だけどな、臭いもんから一々逃げてたら、肝心要の時にお前を見捨てることになりそうで、俺が嫌なんだよ」
「そう？」
サルバがそ（危険な時にこっちを見捨てる）んなタイプじゃないっていうのは、何となく短い付き合いでも分かってるつもりだけどな。僕を救出するために躊躇なく冒険者に発砲したりしたし。
「おう」
けれど、本人は梃子でも動かない気なのか、そう言って頷くとじっと僕の方を見上げてきた。うーん、
「まあ、僕の方も別に強いこだわりがあってサルバを来させないつもりだった訳じゃないから、どうしてもって言うなら別に良いけど……」
特に、手間が増える訳でもないし。人手が増えるなら単純に有難いし。でも、そうだ

ね、
「気分が悪くなったら、ちゃんと適宜休憩を取ってね？」
「ああ、分かってる」
サルバが頷いたのを確かめて、僕も頷き返すと、待たせてしまっていた債権屋の人達の方を振り返る。
「すみません、五月蠅くしちゃって」
「いえ、そりゃ、構わねえんですが……」
「こいつぁいってぇ……」
抜身の長剣を握りながら、室内のサルバが撃ち抜いた誰かと僕がバルコニーから突き落とした誰かを見下ろす債権屋の人達。
「暗殺者……か何か。良く分からないんですけど、心当たりあります？」
「こういう商売ですんで、クソほどありやすが、いきなりダンジョン閉鎖士様だけを狙う手合いにゃちょいと覚えがありませんで」
「まあ、ですよね」
僕も分からないし。
「頭巾、毟ってみますか」
「そうですな。おいっ！」

「へいっ！」
　まとめ役らしい痩身の債権屋さんが顎をしゃくると、隣の子分らしい大きな黒子の人が両肩をサルバに食われた黒い影の頭巾を乱暴に毟り取った。
「！　こいつぁ……」
「知合いですか？」
「知合いとはちょいと違いますが、三日前からこの村の賭場に出入りしていた流れの博徒でさぁ……」
「へぇ……」
　流れの博徒ねえ。
「それにしてはやり口が手馴れてましたけど」
「だとしたら、本当の身分は博徒ではねえんでしょうなあ」
　債権屋さんの見立てに、僕も同意の趣向をする。
「やい、てめぇ！」
「ぐっ!?」
「てめぇ、何もんだ！　何でこの宿に入りやがった!!」
「っ……」
　怒鳴りつけても、ふてぶてしくそっぽを向く博徒？　に、債権屋の人は「このぉっ……

！」と青筋を浮かべる。うーん、相手は本業っぽいから、それじゃあダメそうかな。
「すみません」
「っ、何でしょう、ダンジョン閉鎖士様？」
「その人、見た限り殺しの方を生業としている類の人みたいですし、そういうのはあまり効果が無いと思いますよ」
「む……」
「少し、僕に代わってもらっても良いですか？」
「何か、良い案でも？」
「いえ、単なる使い古された方法です。少し前からうちの相方と話していたんですけど、こういうのは一思いに拷問に掛けちゃうのが一番確実で手っ取り早いですから」
「！」
「仕置き部屋……借りられますか？」
僕が確認を取ると、恫喝をしていた債権屋さんは後ろの兄役らしい男の人に視線で問い掛ける。その人が頷くと、振り返って「娼館の地下でしたら」と首肯を返してきた。
「結構です。器具の類は？」
「全て、揃ってまさぁ」
「良かった。じゃあ、運ぶのを手伝ってもらえますか？　直ぐに始めちゃいたいんで」

「ええ。こっちでさぁ」
　僕が男の人と反対側の肩に手を突っ込むと、債権屋さんは頷いていっせーのーで立ち上がる。
「おい、アル「サルバは下の人を持ってきて。多分気絶していると思うけど、念のため注意して」
「！　ああ」
　頷いたサルバがパタパタと部屋を走り出る。真っ裸な上に、あの体型なせいか背中越しにでも物凄く暴れているおっぱいが見えるんだけど……気付いてないみたいだね。債権屋の人達もぎょっとしているし……。
「ま、いっか」
　別に、特別な被害はない訳だし。
「こっちでさぁ」
「分かりました」
　そんな全裸のサルバを見送った僕は、先導してくれた債権屋さんに頷き返すと、いつの間にかぐったりとしていた人殺しを引き摺って、娼館の仕置き部屋に急ぐことにする。
　宿を出てすぐ隣にあった娼館に入れば、既に準備をしていたらしい別の債権屋さんが

地下室へのドアを開けてくれた。
「うん、丁度良いね」
石造りのいかにもな拷問部屋には様々な拘束具と拷問器具の数々。壁にはペンチや鋸、錘といった一般的な道具からナイフや短剣の類まで一通りが揃っていた。
「うおっ！」
後ろのサルバの声に振り返ると、案の定もう一人の気絶した男の人を引き摺ったサルバが居た。どうやら、一旦軽く服を羽織って来たらしく、乱雑にシーツを身体に巻き付けている。
「……ここは」
「逃げた娼婦と、手引きした男を拷問するための仕置き部屋。ここに限らず大抵の娼館には備え付けられている設備だけど……初めて見る？」
「……」
絶句するサルバに確かめると、サルバは無言でこくりと頷いた。まあ、普通に暮らしていれば見る事も無いか。
「これ以上確認を取るのは却って失礼だろうから、最後に一言だけ。きつくなったらちゃんと退室するんだよ？」
「ああ……」

サルバが頷いたのを確かめると、債権屋の男の人に目配せをする。その人が両手と両肩に穴の開いた刺客を縄で縛り上げたのを確かめると。僕も軽く腕をまくる。

「じゃあ、塩水に漬け込もうか」

情報は鮮度が命。早めに口を割ってくれると有難いかな。

「う、あ……や、……ぎゃあああああああああああああああ!?!?!?!?!?」

数秒後、けたたましい絶叫が夜の廃村一帯に響き渡ったのだった。

で、

「やっぱりこうなった」

数時間後、中々口を割らない二人の刺客に手古摺りながら、何とか差し向けた依頼主を聞き出して娼館を出る頃には、既に朝日が登り始め、空の端が僅かに青白く染まり始めていた。

「うぷっ……」

爽やかな空、爽やかな朝風。その中で隣の人間だけは胸に込み上げる酸っぱいものに耐えきれず、不快そうに口を抑えていた。というか、サルバだった。

「だから無理しちゃだめって言ったのに」

「……」

僕が肩を竦めても、言い返す元気もないのか、恨めしそうな空気だけが漂ってきた。

うーん……。

「取り敢えず、水でも飲んでくる？　このまま朝ごはんは辛いでしょ？」

「……」

確認すると、暫しの俊巡の末に、サルバは小さく頷いたのだった。

◆

サルバが一休みしてある程度回復したのを確かめると、僕達は債権村の食堂で朝食を取る事にした。宿で服を着終えた頃にはサルバも吐き気は治まったのか、値札と違い適正価格で出された果物を中心に食事を進めている。……うん、美味しいね。

「……」
「？　どうかした？」
「お前、よくあんな拷問した後に肉なんて食えるな……」
「そう？」
「拷問の時の事ぶり返したりしねーの？」
「特には」
　既に終わっちゃったことだし。まあ、でもサルバみたいに初めてだときついよね。
「こういうのは基本慣れだしね」
「慣れても、ここまで美味そうに肉をぱくつける奴は早々いねーと思うわ」
　しかもレアとサルバがぼやく。そうかな？
「それはそれ、これはこれって言うでしょ？　さっき壊したのは人の肉で、今食べてるのは豚の肉だから」
「明らかにそれが本音じゃねえか」
「あ、バレた？」
「バレいでか」
　はっはっは。
「それより、先に少し予定を決めておこうか」

「ん、よし」
こくりと酸味の強い果実を飲み下したサルバが小さく頷く。
「さっきの拷問で分かったけど、あの二人はハップルカ伯爵の刺客だった」
「ああ」
頷いたサルバが少し難しい顔になる。
「お前の人間の心が無いんじゃねーかって拷問で吐き出した話だから嘘だとは思わねーけど……」
「けど？」
「何でハップルカ伯爵がってのは結局分からなかったな」
「そうだね」
流石に末端も末端。残念ながら期待していた程の情報は引き出せなかったもんね。うーん……
「リーセン子爵の事を調べていたからっていうのはもしかしたらあるかもしれないけれど、それ以上は分からないもんね」
「だな」
頷いたサルバがしゃくりと付け合わせのレタスを噛む。うーん、
「まあ、直接聞けばいっか」

これ以上ごちゃごちゃ考えていても何も出てこないしね。
「乗り込むのか？」
「うん」
これ食べ終わったら、親分さんにルート貰って直ぐにね。
「多分小競り合いになると思うから、そのつもりで」
「やるってのか？」
「強制執行くらいはしても良いかなって。一緒に来てくれた債権屋の人達が証言者になってくれるからね。いくら尻尾を丸めちゃったとはいえ、ギルドに直接分かりやすく手を出したのがばれたら確実に失点になるから、最悪リーセン子爵も息を吹き返しかねないし、最悪でも会ってくれるでしょ」
「そうか」
頷いたサルバが、出されたスープをこくこくと飲み干す。かたんと置かれたスープの皿の音を聞きながら僕とサルバはどちらともなしに立ち上がる。
「じゃあ、行くか？」
「そうだね」
鬼が出るか蛇が出るか……
「ま、どっちでもいっか」

やる事は変わらないし……ね。

◆

あの後、債権屋の人に閉鎖のルートを決めてもらった地図を受け取った僕とサルバは拷問にかけた捕虜の生き残った方を連れて目的地に着いた頃には、既に辺りは日も沈み、再び夜になっていた。

「随分、時間が掛かっちまったな」

「流石に伯爵領の中心部だからね。端の端から来たらやっぱりこうなるよね」

そこから延びるロープに繋がれた生き残りは既に虫の息を吐き出している。

「それにしても……でかいな」

「そうだねえ……」

サルバの視線の先にあるのは一軒の大きな屋敷。白い煉瓦で作られたその豪邸は一目でこの辺り一帯の主であるハップルカ伯爵の権勢の巨大さを表していた。

「まあ、ゆっくりしていても仕方ないし、早速入ろうか」

「おう」
　頷いたサルバを連れて正面の門に着くと、門の脇の小屋の戸を叩く。
「こんばんはー」
「はいはい」
　ドアに着いた小窓からひょこっと顔を出したのは見るからに穏やかそうな表情の小さなお爺さんだった。
「何か御用でしょうか？」
「初めまして。僕達は先日よりこの領内を回っておりますダンジョン閉鎖士です。ハップルカ伯爵と面談をしたいので、開門をお願いいたします」
「伯爵様と……ダンジョン閉鎖士様が？」
　あまり馴染みのない身分だったからだろう。お爺さんは不思議そうに首を傾げた。
「少々お待ちください、中に確認を取ってみますので」
　そう言って、引っ込もうとする。まあ、真面な反応なんだけど、ちょっと時間が無いんだよね。
「今回は強制執行ですので、確認は不要ですよ。拒否されてもどうせ力ずくで開けることになるので」
「へぇ？」

きょとんとするお爺さんに、持ってきた刺客を突き出して見せると、「ひぃ!?」と小さく悲鳴を上げられた。

「驚かないでください、彼はそちらの伯爵様から僕達に差し向けられて返り討ちにあっただけの暗殺者です。そう珍しいものでもないし、一応雇い主の家来にあたる貴方から見れば同僚、或いは仲間じゃないですか」

「んな顔面ズタズタに引き裂かれた人間見せられりゃ、誰だってそういう反応になるわ」

「あたっ」

呆れ混じりのサルバにぺしっと頭をはたかれた。でも、これ見せた方が時間の短縮になるでしょ？　こうしている間にせっかく捕まえたこの人が息絶えちゃう可能性もあるし。

「……どうぞ」

大分迷った様子のお爺さんは、しかし、自分の手には余ると判断したらしく、門の鍵を開けてくれたみたいだった。

「ありがとうございます」

「礼は言うのな」

「礼儀ってものがあるしね」

相手がこっちを殺そうとして来ようと、こっちが無礼を無暗に働いていい訳じゃない

からね。
「……」
「？　どうかした？」
「それ……むしろ逆効果だと思うぞ」
「そう？」
　何か変な所あったかな？
「おう、どう見ても恫喝にしか見えねー」
「そうかな？」
　うーん……
「まあ、別にいっか。どうせ動いてくれることには変わりないんだし」
「お前のその即物的な思考は一体何処から出て来てるんだろうな」
「さあ？」
　自分の性格の変遷とか、自分じゃ自覚も無いしね。多分、ギルドの教育のせいじゃない？
「だったら、ギルドの職員全員お前みたいな性格って事だろ」
「はっはっは」
　そうなっちゃうね。じゃあ、違うか。

と、そんな事を話しているうちに、僕達はハップルカ伯爵邸の正面の玄関に辿り着いていた。
「わ、私は此処までしか進めないもので」
「あ、じゃあ中の人を呼んでくれます？」
「う……分かりました」
見るからに門の隣の小屋に戻りたいといった顔をしているお爺さんにお願いすると、物凄く嫌そうな顔をされたが、やっぱり反駁は無かった。うん、順調順調。
「どこがだ」
「お爺さんが疑問もなく言う事を聞いている所」
「あれは言う事を聞いているんじゃなくて、聞かされてるんだろ」
「結果が同じなら何でも良いかなって」
別に、このお爺さんが喜んで従ってくれるならそれでもいいけど。
「正直、此処までくるとお前に感心すれば良いのか呆れれば良いのか悩ましくなってくるな」
「別にどっちでも良いけど、そろそろ人が出てくるみたいだよ」
「だから、話の流れをな「どうしました、ミト」ああ、もう」
はっはっは。

玄関の大ドアから顔を出した銀縁メガネのお爺さんの姿に、サルバがガシガシと頭を掻いて話を中断する。

「そちらのお二人は……？」

ドアの覗き窓から顔を出した、家令か執事といった風体のお爺さんは、ミトと呼ばれた門のお爺さんと僕達を品定めするように見比べる。

「すみません、執事長様。この人達は……」

「夜分に失礼致します。僕達は先日より領内を回らさせていただいておりますダンジョン閉鎖士です。ハップルカ伯爵様にお取り次ぎをお願い致します」

「!?」

僕がそう告げると、執事さんはやや驚いたように、レンズの奥で鋭い目を僅かに見開き、そして一瞬でその動揺を引っ込めて見せた。ふーん……。

（これ、知ってるやつか？）

（多分ね）

訝るサルバに僕は気付かれないように首肯を返す。うん、どうやら最初から当たりだったみたいだね。

「……旦那様は既にお休みになられております。申し訳ございませんが日を改めていただきたい」

だけど、相手も慣れたものかな。咳払いをひとつする頃には動揺はすっかり消えていて、代わりに冷厳な視線でこちらを静かに威嚇してきた。うん、そっか……。

「呼ばれないようでしたら、このまま強制執行に入りますね」

「なっ!?」

取り合えず、事実だけを告げると絶句したけど、この後どう出るかな？

「ダンジョン閉鎖士風情が、この屋敷が誰の屋敷か理解しての言葉かっ!!」

「……」

どうやら、激昂のパターンだったらしい。まあ、見るからにプライド高そうだしね。

「ええい、そこに直れダンジョン閉鎖士！　今より旦那様に貴様らの物言いを告げ直ぐにでも罷免にしてっ!!」

（おい、アルタ）

（何？）

（これ、大丈夫なのか？　おっさんキレ散らかしてんぞ）

激怒する執事さんの様子に、後ろで待っていたサルバがひそひそと耳打ちをしてくる。でも、答えなんて、僕が言うよりも先に目の前の光景で決まってるよね。

（大丈夫じゃないよ？）

（大丈夫じゃねえのかよ!?）

（うん）
　当然。
（前にも言ったけど、ダンジョン閉鎖士、そしてギルドは元老院傘下の組織だからね。当然、元老院議員である貴族様。それも、一地方の顔役なら閉鎖士一人潰すくらいは出来ると思うよ。いくら〝ダンジョン・コア〟を感知するのが貴重な才能とはいえ、末端の構成員でしかない訳だし）
（なら、何で平然としているんだ!?）
（だって、別にどうでも良いし）
　割りと本気で。
「なっ!?」
「あ、今度はこっち?」
　今日は絶句が多い日だなあ……。
「いや、絶句もするわ」
「そう?」
「当たり前だろ」
　そう言って、サルバは頭を抱えた。
「何?　お前、割りと権力とか筋とかそういうのに従順な奴だと思ってたんたけどこれ

違うのか？　無政府主義者か何かなのか？」
「別に、どっちでもないけど？」
　というか、そういう主義主張を持ったことは無いなあ。
「じゃあ、何か、自殺志願者か何かなのか？」
「それこそまさかだよ」
　特に死にたいと想ったことは無いし。うーん、まあ、終わったら処分されるかも知れないけどさ、昔から言うでしょ？
「それはそれ、これはこれって」
「」
　今度こそ、本当に絶句された気がする。というか、門のお爺さんも、執事さんも同じ顔してるんだけど。
「ま、いっか」
　それより、中に入らせてもらいますね。
「アルタ」
「？　何？」
　僕が剣を抜くと、後ろで見ていたサルバが徐に口を開いた。
「お前、本当に心の葛藤も柵も無く、後先考えずに平然と前進だけ続けられるのな」

「そう？」
　特に考えたことは無かったけど、そうなのかな？
「そこまで行くと、ある意味尊敬できるわ……」
　そう言いながら、サルバも腰に下げたホルスターから一丁だけ愛銃を引き抜いて撃鉄をガチリと引き起こす。
「サルバ？」
「俺も、マジでこいつらに殺されかかったからな。……一発かましてやりたいって気持ちはあるんだよ」
　そう？
「おう」
　頷いたサルバが銃口を、大きなドアの蝶番に向ける。
「な、なっ!?」
「あ、戻ってきた」
　その姿に、漸く我に返ったらしい執事さんが「や、やめっ」と制止しようとしてくる。
「じゃあ、お取り次ぎを」
「そんな事「撃って」
　交渉とか、する余地も無いしね。

「っ！」

合図をすると、サルバが引き金に指をかける。そして、パパンッという軽い発砲音と共に硝煙が上がり、後には蝶番が破壊された、大きな設えの良いドアが一つ。ゆっくりと倒れてきたそれを避けると、後には両耳を抑えて目を瞑っている執事さんの姿があった。

「おじゃましまーす」

取り敢えず、一言声を掛けて中に入ると、呆然とした様子の騎士さんが数人出迎えてくれた。……うん、

「奥、失礼しますね」

「おいっ！」

取り敢えず、断って二回に続く螺旋階段を登ると、後ろにいたサルバが声を上げた。

「ん？」

振り替えると、どうやら麻痺から復活した執事さんが邸宅内の衛兵を呼び集めているようだった。……うん、

「少し、急ごうか」

サルバに伝えて、持ってきた刺客を肩に担ぎ上げると、僕はハップルカ伯爵の部屋に急ぐことにした。

「つか、伯爵様が何処にいるのか分かってるのか!?」
「多分、執務室か寝室だろうから、二階の奥」
　それっぽい設えのドアは開けていけば分かるでしょ。
「一つ一つか!?」
「うん」
「時間かかるな!?」
「だね」
　本当に面倒臭いよね。
「まあ、その間は僕が後ろの人達の相手をするから、中の確認はサルバ宜しくね」
　僕、死にかけの刺客人を担いでいるから。これ以上は無理だし。
「ちっ、抑えられるんだな!?」
「多分大丈夫じゃない？」
　何事にも絶対はないけどさ。
「くそ、信じるぞ！」
「うん、泥舟に乗ったつもりで頼りにしてくれて良いよ」
「ダメじゃねーか！」
　はっはっは。あ、

「サルバ、そこのドア」
「っ!!」
走りながら目にした、見事な獅子の彫刻が彫られたドアの奥から人の気配を感じて指差すと、サルバが飛び付くようにして、そのドアを開けた。
「む?」
果たして、そのドアの中に居たのは、見事な顎髭にでっぷりとした体型をした、少しとぼけた表情のおじさんだった。
「あ、一つ目であたりだ」
幸先良いね。
一目で、貴族、それもかなり偉い人物と分かる服装に、そう断定しながら僕は片刃剣を腰に納める。
「突然の来訪失礼致します。僕はアルタ。レミュール男爵婦人領でダンジョン閉鎖士をしております。伯爵様が僕達に差し向けてきたこの刺客の事でお尋ねしたいことがあってお邪魔いたしました。少し、お時間をいただきますね」
そう告げると、少しびっくりしたように目を見開いていたハップルカ伯爵は「そうか、うん」と頷くと、後ろからやって来た衛兵らしき人達を押し留める。
「聞こう。話せ」

丸い眼鏡を掛けてぬっと実を乗り出した伯爵様は、風貌通り、とぼけた口調でそう言ってきた。隣のサルバが小さく「たぬき……」と呟いたけど、確かに見た目はそっくりだった。

十一

さて、運よく押し入った屋敷の最初の部屋でハップルカ伯爵との対面に成功した僕とサルバは一先ず伯爵に人払いを要求することにした。

「うん。そうしよう」

ここまで口うるさい家士を配置していたから、もう少しごねるかと思っていた。ハップルカ伯爵は、思いの外あっさりと頷くと、しっしと猫を追うように、後ろで睨みつけていた執事さんに退室するように指示する。

「旦那様っ!?」

流石に、抗議の声を上げる執事さんだったけど当のハップルカ伯爵は「良いから出ていろ」と、割とにべもない言い方で執事さんを追い払ってしまう。

「何かお前と似てるな。このにべもない言い方」

「失礼な。事実を再確認するだけでも、人は傷つくんだよ?」

「え、傷ついてんのか?」

「何で、僕が傷つかなきゃいけないの?」

「この野郎」

「おっと」
　サルバが発砲し、僕は回避する。流れ弾が備え付けられていた甲冑で跳弾して、伯爵の後ろの窓ガラスを破砕した。
「それで、何の用だ?」
　真後ろのガラスが粉砕されたにも拘らず、特に気にした様子もなく伯爵様はぎょろりとした目で首を傾げてきた。うーん、そうだね……
「これを差し向けてきた理由を伺いたくてお邪魔致しました」
「……」
　差し出した、拷問済みの刺客の一人を見せると「ふむ」と呟く。
「何のことだか分からんと言ったらどうする?」
「調書をまとめて元老院と近隣の貴族様にばら撒きます」
　決まってるよね。
「うん……?」
　瓶底の様な丸眼鏡の奥で目を瞬いたハップルカ伯爵は不思議そうに首を傾げた。
「リーセンとは言わないのか?」
「子爵様がお好みでしたか?」
「であれば、幾らでも叩き潰しようがあったからな」

「手間が省けた」と当然の様にぼやくハップルカ伯爵。
「まあ、あれが相手なら準備も出来ているが、それ以外に無差別にばら撒かれるというのはちと具合が悪いか……」
「良い事ですね」
主に僕達にとって、〝都合が〟良い。
「言うな、アルタ……」
「そうだな」
「あんたも同意するのかよ……」
平然と同意をするハップルカ伯爵に、間に入っているサルバが顔を顰めた。
「しかし、成程。態々会いに来たということは、こっちの早とちりか……」
「……」
頻りに頷いたハップルカ伯爵。何と言うか、とぼけている上に自己完結が激しい人な様だった。
ただ、僕達の本来の的（まと）がハップルカ伯爵ではなくリーセン子爵である事は察せられてしまっただろう。それが良いのか悪いのかは置いておいて、話の進みはどうも早いみたいだった。
「それで、何を聞きたいのだ？」

「あんたが送り込んできた刺きゃ「そっちではない」
　サルバが深いそうに口を尖らせるのを見た伯爵様は、ひらひらと手を振ってその言葉を遮る。
「単に私を括りたいだけならば、態々こっちに知らせずに直接調書をばら撒いただろう。リーセンに渡せばあれが息を吹き返すのは必定。例えリーセンが選択肢に入らずとも、この領地と私の地位を狙う奴はごまんと居るからな」
「まあ、そうでしょうね」
　何となく、この慣れた対応を見ると、敵は多そうだよね。
「お前に似てるからな」
「はっはっは」
　僕は敵しかいないしね。
「本命は、その証拠を出しにして、私から何かを聞き出すことだろう？」
「ええ、その通りです」
　むしろ、それだけが目的です。
（なあ）
（ん？）
（聞いてねーんだが？）

（言ってないからね）
（おい）
　いや、始めは言葉通りのつもりだったんだけどさ。暗殺の件追及して首根っこ抑えてから情報を引き出そうかなって。けど、この伯爵様、言質を取らせる気はないみたいだし、全部すっとぼけられちゃうだろうからね。だから、予定変更です。
（幸い、詫び料代わり込みで自分の失点にならない範囲ならいくらでも話してくれるつもりみたいだし）
（ちょっと釈然としねーけど、本命はあくまでダンジョンの方って事か……）
　そーゆーこと。さらに幸運な事に、今回の調査対象は伯爵様の政敵のリーセン子爵だからね。伯爵様としても一番大きな政敵の首根っこ抑えられるなら、一石二鳥だし、それなりの誠意は期待できるでしょ。
「じゃあ、早速なのですが」
「うむ」
「最近、リーセン子爵からちょっかいを出される様な事をした覚えはありますか？」
「心当たりは無「サルバ、調書を議会にばら撒くよ。あと、最悪王都にも。準備して」「よし任せろ」待て待て」
　何です？　役に立たない貴族様には用は無いですよ？

「そうではない」
「？」
　ここに来て、初めてハップルカ伯爵が顔を顰めた。
「お前の性格の悪さが貴族様を上回ったみたいだな」
「いやー」
「褒めてねえからな？」
「知ってるけど？」
　サルバの足払い。僕はジャンプして回避した。
「私の領地はリーセンの奴と接しているのは知っての通りだな？」
「ええ」
　まあ、そうやって、中央は両者の権力を削るわけだし。
「当然、小競り合いなんて日常茶飯事だ。〝本命〟と〝囮〟を合わせればそれこそ日に何度もある程度にはな」
「でしょうね」
「その全てを流石に把握することは出来んし……」
　言葉を切ったハップルカ伯爵は「何より」と呟いて首を傾げ、
「私が伯爵位を得た時に、あれの野心と肝は完全に潰したと思っていた」

「実際、それ以降〝本命〟の仕掛けは一つも無かったからな」と結ぶ。
「で、そこに俺達が来たと」
「ああ」
「……」
サルバの問いに、伯爵は大きく頷く。
「明らかに管轄外の領地からの人間だった……。しかもダンジョン閉鎖士ともなれば、リーセンが完全に死んでいない可能性を考えるには十分だ」
「息の掛かったダンジョン閉鎖士を通じて、債権屋から情報を引き出そうとしたとも取れるのでな」とハップルカ伯爵は鼻を鳴らした。
（なあ、アルタ）
（ん？　何？）
（債権屋と貴族って仲が悪かったりするのか？）
（うん）
むしろ、最悪。
（何でなんだ？）
（んー、そうだね……）
何て言おうかな。一言で表すなら……。

（貴族の財産（領民）を勝手に売っぱらっちゃうからかな）

（あー……）

　債権村の事を思い出して、サルバが納得の声を上げる。まあ、昨日の光景を見れば一目瞭然だしね。

　僕が貴族様の財産だからという理由で、農民の耳を削ぐだけに収めているのも、多分にこの財産の侵害を意識している部分がある中で、彼ら（債権屋）はその資産を盗み取るのが仕事と言っても良い。いや、既に村人達が自分達の意志で自分や自分の息子、娘の身体を売り飛ばしている以上、彼ら（債権屋）だけが非難されるのも違うんだろうけどさ。

　それに、彼ら債権屋が居ないと、今度は資金の回収不能によって貸し倒れを起こす商人が出る危険もある。それこそ、村一つ潰れるよりも大きな経済的被害が出かねない訳で。

（だから、貴族は歯噛みしながらも手持ちの現金を傷めずに、経済に廃村を還元できる債権屋を必要悪として見逃しているって訳）

　けど、それは債権屋と仲が良いという事は当然意味していなくて、むしろ、短絡的に債権屋を貴族の敵と認識している貴族の方が多い訳。

　まあ、領地の商業と農業の比率次第で、この辺の対応は変わるんだろうけど。商業中心の場合は、まあ大抵債権屋を必要悪として見逃していて、農業中心の場合は債権屋は

取り締まるところが多いかな。
（じゃあ、この伯爵様は？）
（典型的な重商主義の貴族様）
今の時代、ダンジョンの運営の事を考えれば、羽振りが良い貴族はほぼほぼダンジョン経営と商業主義だからね。というか、農業主義ってのが領内に目ぼしいダンジョンを持っていないだけってパターンが多いだけなんだけど。
（けど、それはそれとして単純に、債権屋とは貴族の敵であるみたいな教育を帝都で受けている事も多いからね）
だから、債権屋に良い感情を抱く貴族はほぼ皆無なんだろうね。
（でも、これで分かった事があるね）
（あん？）
一つの確信に僕が呟くと、サルバが小さく首を傾げた。
（リーセン子爵の狙いは……ほぼ権力争いの線は無いって事）
債権屋と、領地の伯爵。その両方がリーセン子爵の大掛かりな政争の線をないと見ている。この事実は決して軽くは無いと思う。
（物証がある訳じゃないから、過信は禁物だけどね）
（ふむ……）

僕達がそう言って、頷き合っていると、不意にハップルカ伯爵が「ダンジョン閉鎖士といえば……」と何かを思い出したように首を傾げた。
「？」
「確か……リーセンの領地でダンジョン閉鎖士が居なくなったのも、丁度リーセンと猟官をしていた頃の話だったなと思ってな」
その言葉に、僕とサルバは顔を見合わせる。この話は間違いなく先の債権村で聞いた話とぴたりと符合していたのだから。
「ご存知だったのですか？」
「ああ。あの頃は何としてでもリーセンを蹴落とすために、小さな醜聞でも逃すまいと互いに内偵を放ちあっていたからな」
そう言って、ハップルカ伯爵は事も無げに頭を掻く。
「私もあいつも、兎に角相手を蹴落とすためのネタ探しに躍起になっていたが、どうにも決定打に欠けていた。そんな折だった、あいつが領内のダンジョン閉鎖士を消したという噂が私の耳に入ったのは」
「ふむ……」
つまり、互いの粗探しの過程で知った事実だったと。
「まあ、それ自体は大したことではなかった。所詮、ダンジョン閉鎖士一人だ。資金集め

のためにダンジョンを閉鎖しようとするダンジョン閉鎖士が邪魔になったなどと騒ぎ立てたとしても、決定打にはなり得なかった」

「まあ、でしょうね」

基本、ダンジョン閉鎖士の命は重商主義の貴族からすればゴミみたいなものだし。

「ああ」

頷いた伯爵は机の上にあったカップを取る。

「だが、ダンジョン閉鎖士の殺害そのものには興味は惹かれなかったが、そのダンジョン閉鎖士があれの愛妾との間に生まれた娘だという噂の方には興味が惹かれてな」

「……」

そう言って顎髭を撫でるハップルカ伯爵の姿に僕とサルバはもう一度顔を見合わせる。

「それは、そのダンジョン閉鎖士とリーセン子爵様の風貌が似ていたという？」

「ああ、それだ」

確認を取ると、伯爵はポンと手を打って、実に楽し気に頷いた。

「愛妾から生まれた妾腹の娘。しかも、その妾が元使用人の一人で、その上平民生まれだったというところまでは掴めた。これはあいつを蹴落とす決定打に出来ると思っていたのだが、最後の最後で取り逃がしてしまってな」

「それは、物証がつかめなかったという？」
「いや」
　サルバの問いに、伯爵は首を横に振って否定する。
「確かに、物証がつかめなかったのもそうだったが、それ以前に人がしゃべらなくなった」
「成程」
　物証は無くとも、証人だけである程度まで真実に近付けたという事は、相当確度が高い情報ルートを持っていたと。だけど、それが急に使えなくなった。つまり情報源が情報を吐かなくなった。それはつまり、
「見せしめに、消されましたか」
「十中八九な」
　ハップルカ伯爵はそう言って、実に楽しそうに頷いたのだった。
「結局、互いに決定打を得られないまま、最終的に私の方が猟官に成功したのもあって今の今まで忘れていたが、うん。そうだな、間違いなく、あれが当時一番大きなあの男（リーセン子爵）の醜聞だった」
「……」
「その妾の話が手詰まりになった時点で、慌てて『せめて、ダンジョン閉鎖士の情報だけ

でも』と思ったが、こっちはこっちで私の方の調査の初動が遅れたこともあって、既にどうにもならなくなっていた」

「大分前の話だがな……」と付け足して、ハップルカ伯爵は設えの良い椅子の背もたれにのそりと身体を沈めたのだった。

「……」

（アルタ）

（ん？）

（これ、どう見る？）

（そうだね……）

関係がある様な無い様な……中々怪しい所だけど。

（実は、その殺されたダンジョン閉鎖士が実はまだ生きていて、あの女男冒険者に復讐を託したとか？）

（それだと、態々リーセン子爵の下で動いている理由が分からないかな）

絶対に無いとは言い切れないけど。ちょっと疑問が残るところだと思う。うーん……、

「そのダンジョン閉鎖士の失踪に関する資料を頂くことは出来ますか？」

「ふむ……」

頷いた伯爵様がパンパンと手を打つ。すると、音もなく書斎の入り口が開き、先程の執事さんとはまた別の年の若い男の人が入室してきた。
「お待たせいたしました」
そう言って一礼をした執事にハップルカ伯爵は「ガザン、リーセンの奴のダンジョン閉鎖士失踪に関する調査書をこいつらに渡せ」と手短に指示する。
「承知致しました」
一礼をして退室した執事さんを見送ると、「ふむ」と頷き伯爵様は僕達の方を向き直る。
「他に、聞きたいことは？」
「そうですね……」
水を向けられたこともあって、少し考える……あ、
「レミュール男爵夫人」
思い付きで口にした名前に、隣のサルバが小首を傾げた気配がする。
「お前達の領主だったか？」
「ええ」
一応。会った事も無いけど。いや、会った事も無いからかな。
「レミュール男爵夫人って美人なんですか？」

「アルタ？」

サルバが不思議そうに呟く中、目の前のハップルカ伯爵は心底愉快そうにニヤッと笑みを浮かべた。

「ああ、美人だ。癖のある金髪がよく似合う……私が知る限り一番の美女だとも」

そう言って、ニタニタと笑った伯爵様は、しかし、直ぐにその下品な笑顔を引っ込めた。

「ああ、言い忘れていたが、調書は資料と引き換えだ」

そして、そう言ってきた頃には、いつの間にか再び入室してきた執事さんが手に分厚い紙束を抱えていたのだった。

「お待たせ致しました」

そう言って一礼と共に差し出された紙束を受け取ると、ざっと中身を改める。

「……」

隣のサルバにも見せて、凡そブラフではない事を確かめると、サルバに持ってきてもらっておいた、虫の息の刺客から吐かせた情報の調書を差し出す。

「……」

それを受け取った執事さんが中身を改めたのを確かめると、僕は漸く邪魔だった荷物（先の刺客）の身柄を引き渡し終えたのだった。

一礼して執事さんが退室すると、少し離れたところから「ぎゃっ!?」という最後の最後に振り絞ったような悲鳴が一つだけ漏れ聞こえ、再び辺りはしんと静まり返った。
「それじゃあ、僕達はこれで」
「ああ。もう会わないことを願っているぞ」
「それはこちらもです伯爵様」
そう告げると、もう興味を失ったのか、黙々と読書に戻った伯爵様。一先ず退散しようかとサルバの袖を引っ張ると、少しだけ驚いたようにサルバが見開いた目と視線が重なった。

「良かったのか？」
屋敷の裏門から外に出たサルバの第一声はそれだった。
「？　何が？」
「あの調書。渡しちまっても良かったのか？」
「ああ、あれ？」
「ああ」
「それなら大丈夫だよ。どうせ、写しは債権屋さんの手元にあるし」

「おい」
それって大丈夫なのか？　って顔でサルバが突っ込んでくるけど。まあ、大丈夫だよ。
「調書を債権屋さんが持っているっていうのがミソで、彼らは貴族と仲が悪いから、基本的に単独では元老院にも持ち込めないし、何の役にも立たないんだ」
「そうなのか？」
「うん」
単体ではね。
「けど、僕達の身柄に関して疑義が発生した場合はギルドに持ち込むことは出来るから。そうなってくると、ギルドが調書の引き受けをすることになって効力を発揮するようになるわけ」
「なるほど……」
「その辺は伯爵様も心得ている筈だよ？」
後ろの方、今出てきたばかりの豪邸を振り返れば、丁度二階の書斎の窓から伯爵様とさっきの若い執事さんがこっちを見下ろしているのと目が合った。
「！」
若干、サルバが驚いたように身動ぎしたのを感じる。まあ、無理も無いか。執事さん

は兎も角、伯爵様の視線はさっきのとぼけた感じとはまるで正反対の、底冷えするかのような無機質で情を感じさせないものだからね。

「……」

きな臭い伯爵の視線に生理的な嫌悪感を覚えたのか、サルバはぶるりと身震いをすると心なしか速足になる。

「あ」

そうだ、忘れる前にこれを聞いておかないと。

「ねえ、サルバ」

「あん？」

振り返ったサルバの髪が湿った夜風の中でゆらりとしなやかに揺れた。

「僕は女の人の事とか良く分からない……というか、他人っていうのが良く分からない性質（たち）なんだけどさ」

「どうした、急に自虐始めやがって？」

やかましいわ。

「美人ってどういう人が多い？」

「んん？　どうって？」

「こう、性格とか、自分の風貌への考え方とか、周りの反応とかそういうの」

「……」

僕の質問に、自分の胸に四苦八苦しながら腕を組んだサルバは少し考え込む。無理に腕組みなんてしなきゃいいのに。

「俺も、そこまで詳しい訳じゃないぞ？」

「それでも良いから聞かせて。少なくとも、僕よりははるかにマシだろうし」

「ふむ……」

頷いたサルバは、思案するように顎を撫でながら徐に口を開いた。

「まず、大抵だけど、自分が〝美人〟って事はよく理解している奴が多いな」

「というと？」

「んー、なんつーかな」

サルバは少し首を傾げる。

「別に、自分の美貌を鼻に掛けるとかそういうんじゃねーけど、それなりに融通は利くだろ？　だから、自分の見た目ならどの程度の無理が通るかってのは、何年もその顔で生きてきたわけだから経験的によく知っている奴が多かったと思う」

「成程ね」

「中には信じられないアホも居て、男ってのが全部自分の思い通りになると思っている奴も居るし、逆に一切鼻に掛けない奴も居たけど……総じて、自分の顔の良さを理解し

ていないってのは皆無だったな」
「理解してない風を装っているのは何人か居たけど」とサルバは付け足した。
「ふむ……」
　そうなると……そうだね、
「さっきのハップルカ伯爵の話をサルバも覚えている？」
「最後にお前がした質問か？」
「うん、それ」
「ああ。当然」
「それと、債権村で聞いたリーセン子爵の話を繋げてみると……どうかな？」
「あ……」
　やっぱり、サルバもそう思う？
「今回の件……もしかして、権力争いとかそっちじゃなくて、滅茶苦茶下世話な事情だったりするのか？」
「もしかしたらだけどね」
　いや、割とさ。
「レミュール男爵夫人って所謂零細男爵家なんだけど、あまり財政とかそっち方面で困ったみたいな話って聞かないんだよね。というか、表に出てきた話自体が少ないって

いうか」
「ふむ……」
「そんな美貌だけど零細な領主に、肝を潰されてちんちんの事しか考えられなくなった、一応地方の二番手の子爵様が食指を伸ばすか伸ばさないかって言ったら」
「まあ……伸ばすよな」
サルバも同意見か。
「けど、そのリーセン子爵がレミュール男爵夫人にちんこ勃(た)ててるって流れ自体は変じゃないが、そこからどうやってハップルカ伯爵に繋がるんだ？」
「殆ど当てずっぽうだったんだけど、さっき僕が質問したでしょ？」
「ああ、あのレミュール男爵夫人が美人かどうとか……」
「そ。あの伯爵の反応を思い出すとさ、ハップルカ伯爵もレミュール男爵夫人に食指が動いていると思うんだけど、どうかな？」
「ん？　んん？　……」
考え込んだサルバは「いや、まさか」と呟きながら、少し考え込んだ。
「僕も断言できる訳じゃないんだけど、あの表情見たら……ねえ？」
一見、飄々とした狸の風貌が、あの一瞬だけ色欲に塗れてぎとぎとと脂ぎったのを確かに目にしていた。

「ある……かもな」
　記憶を掘り起こし、同じ意見になったのか、サルバが小さく頷く。
「で、さっきの質問か？」
「うん」
　美女は果たして自分の風貌をどう認識しているのか？
「レミュール男爵夫人が正確に自分の風貌を理解していたら、二番手のリーセン子爵じゃなくて一番手ハップルカ伯爵の方に付くっていうのは、そんなに変な事じゃないんじゃないかな？」
「……」
　ふーっと溜息を吐いたサルバが、やがて「それは……そうかもな」と漏らしたのだった。
「って事はあれか？　全部仕込みだったのか？」
「んー、それは無いと思うよ。もしそうだとしたら、余りにも行き当たりばったりだし」
　債権屋の刺客に関しては、間違いなく意思疎通は出来ていなかったと思う。もし、レミュール男爵夫人とハップルカ伯爵が完全に連携して動いていたら、そもそも刺客なんて送らずに、さっさと裏取りをした情報を僕達の方に投げていただろうからね。
「チャンスがあれば、リーセン子爵を追い落とす方向に誘導する……それくらいのつも

りで、それくらいの悪意で会話をしていたんじゃないかなってね」

元々、僕の勝手な見立てだけど、貴族様との交渉なんてあんなにすんなり行くことは無いからね。ごねられて、恫喝されて、泣き落とされて……まあ、会話するだけ無駄な場合が殆どだから。それがすんなりいったって事はそれなりに理由が無いと可笑しいし。

「そもそもの話をすれば、隣町のギルド長が態々他所に来たっていうのも珍しいといえば珍しい……端的に言って変だったからね」

或いは、レミュール男爵夫人が始めからリーセン子爵に歯向かうために行った行動だったのかもね。自分の美貌の価値と能力を理解していたのなら、猶更……最大の権力の源が二番手のリーセン子爵に汚されてハップルカ伯爵が見向きもしなくなったら、それこそレミュール男爵夫人にとっては痛手だし。

そういう意味じゃ、今回のダンジョンの件はハップルカ伯爵は無関係で、リーセン子爵とレミュール男爵夫人の思惑のせめぎ合いの末に起きた事だったのかも。

「なんてね」

「お？」

「流石に、今のは推測や妄想混じりだとは思うってこと」

全部が全部当たりって事はまず無いと思うから。

「だが、幾らかは当たってるんじゃないか？」
「かもね」
　今回の件の原因が所謂権力争いとかそっちじゃなくて、割と下世話にな事情に端を発しているっていう可能性は案外捨てきれないとは思うし、そっちの方が説得力はあるからね。問題は、
「何で、態々ギルドにまで引っ掛かる、ダンジョンをだしにしようと思ったのか……そもそも、誰がダンジョンをネタにしようと考えたのか」
「リーセン子爵じゃないのか、そこは？」
「リーセン子爵に何の瑕疵がなければ、そうだったかもしれないけど、子爵様は失点があるでしょ？」
　僕が背嚢を指差すと「あー」とサルバが頷く。
「過去の事を考えれば、変な飛び火をしかねないダンジョン関連のネタは出来れば使いたくないっていうのがリーセン子爵の本音のはずなんだよね」
　これ以上、上に行くことのない身とはいえ、むしろ、だからこそかな？　下に堕ちる可能性は常に残されているからね。
　一度証拠の抹消を行った可能性が高いとはいえ、傷は傷。或いはほじくり返した結果、思わぬ痛手となりかねない。それを態々ネタに使おうとした？　しかも、ギルドに

登録されていないダンジョン閉鎖士を態々調達して？
「……有り得ないな」
サルバの呟きに、僕も同意する。うん、大枠の方は多分貴族様の下半身が原因なんだろうけど、それだけじゃ終わらない何かがある気がする……。
「何かってのは？」
「それは今後とギルド長の調査に乞うご期待かな」
悲しいかな。
「ま、どちらにせよ、この領地で僕達が出来る調査は、この辺が限度だろうね」
「じゃあ、戻るのか？」
「いや、まだだよ」
むしろ、ここからが本業です。
「？　まだ何かするのか？」
「ダンジョンの閉鎖」
「……」
あ、そういえばって顔だね。
「サルバ、すっかり忘れてたでしょ？」
「い、いや、忘れてはいないぜ？　うん」

「忘れてたでしょ？」
「あ、あ～」
「……」
「すまん」
「ん。宜しい」
　トウトウ村の件のせいで、妙な業務ばっかりやっているけど、僕（ダンジョン閉鎖士）達の本業はあくまでこっ（ダンジョンの閉鎖）ちだからね。
「債権屋さんからもらった、記入済みの地図もあるし、一番近い村で宿を取ろっか」
「おう」
「……」
　頷いたサルバと並んで夜道を歩きながら、僕は何となく後ろを振り返る。既に見えなくなった筈のハップルカ伯爵の屋敷の中で、まだあのたぬき伯爵様が何かの手管を巡らせてきている……そんな錯覚が頭から離れなかった。と、
「ぬおっ!?」
「ぐふっ」
　そんな事を考えていたら、夜道で躓いたサルバに思いっきり脇腹に突っ込んでこられた。

◆

数日後、都合数件のハップルカ伯爵領のダンジョン閉鎖を完了させてロハグの町に戻っていた僕とサルバは、旅の汚れもそのままに、真直ぐにギルドに続く裏道を歩いていた。

「なんつーか……」

「うん？」

「こう、不快そうに顔を背けられると、何かダンジョンと関係ない町に戻ってきたんだなって気がするな」

「酷い実感だね」

けど、その通り。

「閉鎖間際のダンジョン村なんて、殆ど廃村か、人間が既に絶望しちゃっているか、或いはダンジョン閉鎖士を殺す事しか考えていない人間か……そんなパターンばっかりだからね」

そういう意味じゃ、普通に反応してくれる分、嫌われている町の方が気が楽といえば気が楽かもね。

「大丈夫？　気が滅入ってない？　何なら、普通のギルドナイトになる？」

「馬鹿言うな。俺は絶対に元の身体を取り戻すんだ。絶対にもう一度エロい店に行くためにな」

「随分前向きだね」

良い傾向と言えば良い傾向だけど。

「当たり前だ」

ふんと鼻を鳴らしたサルバはキッと空を睨み上げた。

「債権村がなんだ！　ちんこ入れないで何が娼館だっ!!」

「うーん、溜まってるねえ」

「溜まらいでか!!」

サルバがしなやかな黒髪を振り乱してキッとこっちを睨んでくる。うん、まあ事情は知っているけどさ。

「長旅の疲れで性欲も我慢の限界だったから、この際女の身体のままでも良いやって、恥を忍んで娼館に行ったのっつーのに……」

「……」

「な　ん　で　っ!!　お断りされるんだよ!?」
「そりゃそうでしょ」
「ああっ!?」
　おお、凄い殺気。熊くらいなら、視線で殺せるんじゃない？　前髪で無意味だけど」
「おい」
「おっと」
　つい漏れてたね。危ない危ない。それより、
「だって、債権村の娼館に残っている女の人達なんて、ついこの間まで普通に村人として生きていた人達ばかりだよ？　まともな娼館でも女性の相手を出来る娼婦は限られているのに、あんな、本来の娼婦を売り終わって、美人の村人も居なくなった娼館で、そんな高等技術身に着けている人が居る訳ないじゃん」
　期待していた分、落胆が大きかったのも分かるけど、予想は付いたでしょ？
「うぐぐぐぐ……」
「まあ、その性欲が男の証ってことで今は我慢しておきなよ」
「チクショウ……」
「そ（男としての性欲）れが無くなったら、いよいよピンチだろうしねえ」
「怖い事言うなよ!?」

悲鳴を上げたサルバが、自分が女になった後を想像してぶるりと身震いをした。はっはっは。
「ま、その反応が出てくるならまだ大丈夫でしょ」
「じゃあ何で煽った!?」
「気分」
それ以外あると思う?
「せいっ!」
「おっと」
サルバの膝蹴りをしゃがんで回避すると、僕の肩に手を突いたサルバは奇麗に宙返りをして着地した。
「……」
「……」
「……そろそろお金取れそうになって来てない?」
「……慣れってこええわ」
そんな事を言いながら、肩を竦め合うと、いつの間にかギルドの前に到着していたのだった。

「戻りました、ギルド長」
ギルド長室のドアをノックして中に入ると、丁度手紙を読んでいたらしいギルド長が「ああ」と呟いて顔を上げてきた。
「遅かったね」
「色々と道中ありましたので」
「そっちじゃなく、ロハグの町に入ってから、ギルドに着くのがね」
「サルバとふざけてたので」
「だろうね」
頷いたギルド長が「んで」と手を差し出してくる。
「何か分かった事はあったかい？」
「ええ、それなりに良い収穫がありました」
ここ数日で用意しておいた記録。債権屋さんからの情報と、ハップルカ伯爵から受け取った情報。そして、それに伴う考察。特にリーセン子爵に関する情報をまとめたものをギルド長に渡す。
「ふむ……」
中身をざっと確認したギルド長が顔を上げる。

「アル坊」
「はい」
「お前さんは、何処が臭いと思う？」
「動機ですね」
予め予想していた質問なのもあって、そこはすんなりと答えを出す。
「リーセン子爵がこんな謀略を仕掛けた理由は大本なので確認が必要ですし。それ以上にダンジョンを利用しようとした理由が分からないですから」
「だろうね」
僕の回答に同意するようにギルド長も頷く。
「ダンジョンに関する機密事項の漏洩は元老院議員であっても身を持ち崩す可能性がある禁忌だ。それを思惑があるとはいえ、脛に傷を持って尚転がそうというのはどうにも腑に落ちない。鍵となるのは……」
「リーセン子爵の領内であった、ダンジョン閉鎖士の行方不明……ですね」
「ああ」
頷いたギルド長がばさりと僕達の持ってきた資料を置く。
「こっちの方も、進展があってね」
「ええ」

「まず、事を起こした動機の方はリーセン子爵による漁色というのはほぼ同意見だった」
「ふむ」
「それが、レミュール男爵夫人というのも凡そ確定だろうね。家来の何人かがリーセン子爵の命令でレミュール男爵夫人に秘密裏に声を掛けた事があったそうだ」
「じゃあ、そっちは確定か」
「だが、あたしらの仕事、ダンジョンの運営と逸脱した利用の取り締まりという点ではこっち（ダンジョンを利用した理由）の方が本命だ」
「ですね」
むしろ、貴族様同士の権力争いとか、そっちは勝手にやっていてもらえば良いし。と、そこまで言ったところで、じっと会話を聞いていたサルバがふと何かを思いついたように徐に口を開いた。
「なあ」
「ん？　何？」
「その行方不明のダンジョン閉鎖士が、トウトウ村のあいつら（冒険者）って事は無いのか？」
「ん？」
サルバの疑問に、僕とギルド長は一瞬虚を突かれる。見れば、ギルド長がまじまじとサルバの顔を覗き込んでいる。

「いや、流石に「その可能性、始めから排除しちゃってたけど、むしろよく検討すべきだったかもね」んお？」

　わたわたと手を振ったサルバだったけど、考えてみたら、そっちの可能性はまだあったよね。

「件のダンジョン閉鎖士と、トウトウ村の冒険者なんだけど、明らかに年齢が一致していないから別人って認識だったんだけどさ」

「お、おう」

「サル（性別変わっちゃった元男）バに比べれば、年齢とか外見が変わるくらいは全然あり得るかもなって」

「はっはっは、この野郎」

　おっと、危ない危ない。サルバの弾丸が顔の脇を掠めて行った。

「だが、今のは良いヒントだったね」

　僕の言葉を引き継いだギルド長がそう呟く。

「改めて、件の冒険者とダンジョン閉鎖士の素性を洗うよ。徹底的にね。最悪ギルドの存在意義にも関わる話だ」

「或いは、その件含めて、この辺りの土地の貴族の再編もあるかもね……」

　と、

「た、大変ですっ!!!!!!」

そんな事を話しながら、細かいところを詰めようとしていると、急に廊下からどたどたと慌しい音が聞こえてきて、ギルドの職員が部屋の中に転がり込んできた。
「何だい、慌しいね」
立ち上がったギルド長が顔を顰めるが、どうやらギルドの職員はそれどころじゃないらしい。
「あ、あの」
「落ち着きな。ゆっくりで良いから」
そう言って、ギルド長が職員を宥めると「すみません」と息を整えたその職員は立ち上がりふうと溜息を吐いて険しい顔を向けてきた。
「先日、御指示を受けた、トウトウ村の冒険者の件です」
「何かあったのかい？」
丁度、話題に出していた話だけに、ギルド長の顔の皺が深くなる。
「件の冒険者に貼り付かせていた職員二名と、監視対象の冒険者五名……
昨晩未明、ダンジョン内での全滅が確認されました」

「……」

「……」

「……」

「「……は？」」

十二

ギルド長室に飛び込んできた職員の報告の直後、判で押した様に全く同じ間抜けな声を上げた僕達は一瞬顔を見合わせた。そして、呆然としたサルバの表情に気付いた僕は直ぐに両手で耳を塞いだ。

「はあああああああああああああああ!?!?」

案の定響いた絶叫を、もろに受けてしまったギルド長が煩そうに顔をしかめた……あ、はい止めるんですね。うーん、どうした物か……よし

「ななな!?」

「てい」

絶叫が終わった後も、あうあうと口をわなつかせるサルバを正気に戻すために、僕はサルバの目の前でパンと手を打つ。

ふぁさりと広がった前髪の奥で、大きく見開かれたサルバの目と目が合う。

「……落ち着いた?」

「お、おう」

頷いたサルバが普段の空気になったのを確かめて、僕も手を下ろす。サルバってあれ

だよね、前髪で隠れてはいるけれど、口許だけでも表情豊かだよね。
「分かりやすいってか？」
「うん」
　少なくとも、ギルド職員よりは。
「……」
　僕が全肯定すると、サルバは不機嫌そうに唇を尖らせた。もしかして、クールキャラ目指してた？
「別に、そういうんじゃ、ねぇけどよ……」
　ばつが悪そうに頭を掻いたサルバは、それを誤魔化すように「んで？」と首をかしげてくる。
「お前が落ち着き払ってるっつーことは、予想出来てたって事なのか？」
「いや、流石に予想は出来てなかったよ？」
　というか、もし予想出来てたら先にサルバに言ってるし。
「じゃあ、どういう事なんだよ」
「予想って程じゃないけど、まあ、無くはないかなって話だったから」
「……？」
「ほら、あの冒険者の人達ってダンジョン閉鎖士の可能性があるって話をしたでしょ？」

「ああ」
「それってつまり、普通の冒険者と違ってギルドナイトのやり口をよくよく心得ているって事な訳で」
「何処かでギルドの手が伸びているのを察知された可能性があるって事か」
「断定はできないけれどね」
　幾分か落ち着いて、解に辿り着いたサルバに僕は肯定半分に頷く。
「ただ、あまりにもタイミングと都合が良すぎるのは事実だから、いくら断定が出来ないとはいえ、僕達としては此れを疑わない理由も意味もないよね」
　変に疑いすぎても却って状況をややこしくする場合があるけれど、迷ったら取り合えず疑っておく方が、少なくともギルドナイトには良いからね。
「まあ……そうか」
　頷いたサルバに僕は肩を竦めて返した。
「じゃあ、今度はどうするんだ？　追いかけての情報収集か？」
「いや、何もしないけど？」
「は？」
「何言ってんだこいつ？」みたいな顔されたけど、逆に何でそんな反応するかな。……まあ、十中八九忘れてるだけなんだろうけど。

「え？　何もしねえの？」
「うん」
　当然。
「何でだ？」
「だって僕、ギルドナイトじゃなくてダンジョン閉鎖士だし」
「……」
「……」
「……そういやそうだったな」
「やっぱり忘れてた」
　案の定だね。
「ハップルカ領でも言ったけど、僕の本業はあくまでダンジョン閉鎖士だからね。情報収集も殆ど例外的にやっただけだし、今回の件もこれで一段落って言えば一段落だろうし」
　もし、債権屋に追加で聞くことが見つかったら、出掛ける事にはなるかもしれないけどね。

「……」
「納得いかない？」
「いや……そうじゃねえけど」
　少し首を傾げたサルバの仕草に、何となく「真面目だね」と揶揄うと「そんなんじゃねえよ」と不機嫌そうに口を尖らせた。
「じゃあ、もう本当に良いんだな？」
「良いというか、僕個人としては拘る理由が無いからね」
　僕の担当部分は完全に終わったし。これ以上頭を悩ませるのはギルド長だけで良いでしょ？
「おいこのクソガキ」
「ね？」
「言われてみりゃ確かにそうだな」
　青筋を浮かべているギルド長に「じゃあ、そういう事で」と断ってギルド長室を出る。後ろでギルド長の深い深い溜息が聞こえたけど……ま、別にいっか。
「それで流す奴を初めて見たけどな」
「そう？」
「いや……お前がそうするのは今に始まった事じゃないか」
（あっさりと流す）

「むしろ、三歳頃にはもうこんな感じだったんじゃない？」
「いやな三つ子の魂だな」
「時々言われるね」
「よくじゃなくて、時々なのが無駄に本当くさいな」
「でしょ？」
　そもそも、僕って人と話す機会自体が殆ど無いしね。
「んで？」
　隣で肩を竦めたサルバが、こてんと首を横に倒す。
「ん？」
「それじゃあ、もう通常業務に戻るってことで良いのか？」
「うん……多分ね」
　他にすることもないしね。
「多分なのか？」
　まあね。
「僕達下っ端の仕事なんて、状況とギルド長の指示次第でコロコロ変わるから」
　特権染みた部分はあるとはいえ、所詮は末端構成員だし。断定は難しいよね。でも、まあ、

「どちらにせよ、その時には指示が来るだろうから、それまでは通常業務（ダンジョンの閉鎖）に勤しみましょってね」
「……」
ま、気になるなら気になるで大丈夫だと思うけどね。
「？　つーと？」
「さっきの話だけど、サルバも釈然としていなかったように、まだ一波二波、事態は転がりそうだったでしょ？」
どう考えても、あれで一件落着なんて有り得ないしさ。
「そりゃ……確かにな」
「でしょ？　そうなったら、多分、またダンジョンの話になるからね」
むしろ、トウトウ村が最後の手掛かりになるだろうから……、
「ギルド長が焦れるにせよ、どっしりと構えるにせよ……何処かのタイミングであの村のダンジョンは閉じることになると思うしさ」
「……」
「それまでは、気長に待つくらいの気持ちで良いと思うよ？」
「……」
じっと前髪越しにこっちを見ていたサルバが「ふぅ……」と溜息を吐いた。

「じゃあ、今から次のダンジョンに行くのか？」
「そのつもり」
「そうか」
　頷いたサルバが、すたすたとギルドの外に足を向ける。その小さな背中とゆらゆら揺れる後ろ髪を見ながら「良いの？」と確かめると無言のまま肩を竦められた。「消化不良なのは事実だけどな」と付け足して、サルバは「それより」と首を傾げる。
「お前がもう一波来るって見てるって事の方が心配ではあるな」
「そう？」
「おう」
　何か、凄く力強く頷かれた。
「だって、お前の捻くれた見立てって、悪い方向にやたらと当たりそうだし」
「はっはっは」
　この野郎。
「それより、次は何処に行くんだ？」
「トウトウ村から少し北に離れたリーセン子爵領との領境」
　振り返ったサルバに、閉鎖予定ダンジョンのリストを渡す。
「ダンジョン開通前は果樹の栽培なんかしてたみたいだけど、ダンジョンが出来てから

はお土産用にちょっとしか作らなくなったみたいだね」
「あからさまにダメな臭いしかしねえ村だな」
「僕もそう思う」
割と本気で。
「よし、んじゃあ行くか」
「ん」
既に気持ちが切り替わったのか、そう言って先を歩くサルバの背中に頷きながら、僕ははてさてと思案する。
（サルバに言った通り、本番はまだまだ先なんだけど、その本番でサルバはどう立ち回るかな？）
多分、今回の一件の結末如何に関わらず、最後にはあの仕事があるだろうからね……。
「アルタ？」
「ああ、ごめん、今行くよ」
振り返ったサルバを追い掛ける頃には、そんな思案も僕の頭からは綺麗さっぱり消えてなくなっていた。

◆

で、そんなやり取りをしながら再開したダンジョンの閉鎖は、ここ数日の緊迫感が嘘のようにあっさりと終了した。それこそ、サルバが「随分拍子抜けだな」なんて呟くくらいに。でもまあ、普通はこんな感じだよ？

「そうなのか」

「うん」

むしろ、この後の方が面倒なくらいにね。

「此方が見舞金です。お納めください」

ほら、僕が差し出した領主様からの見舞金に、これまた何時も通り村の村長さんの顔がひきつってるし。こっち（ギルド）からすれば、妥当どころか、手厚すぎて涙が出るくらいなんだけどさ。

「お前はこの程度じゃ泣かないだろうけどな」

「それはまあ、その通り」

というか、泣ける要素とかあるの？　ってね。

「……」

が、今日の村長さんはそれなりに穏やかな性質（タチ）だったらしく、やがて「ふぅ……」と溜め息を吐くと、諦念と共に金貨をポケットに入れて、静かに瞑目したのだった。

「我らのダンジョンも、終わってみれば、この程度ですか……」

「……」

ひょろりと痩せた鶴のような村長さんは、潤んだ瞼の隙間から郷愁ともつかない色を乗せてポツリと呟いた。

「夢の終わりは、いつも儚いものですなあ……」

「夢があっただけ、マシかもしれないですけどね」

ダンジョンが開設されれば、概ね全ての土地が潤うけれど、それは絶対的な事象ではない。事実、ダンジョンが開いていながらも、交通の弁のせいでダンジョンからの収穫物が採算に乗らず、商人も寄り付かない様な土地が少数ながらも存在している。或いは、重税のせいでダンジョンが開いていても、上がりが全て持っていかれる事もある。そういう意味では「夢があっただけ、マシ」っていうのは、お世辞でも冗談でもなかったりする。

「……」

けど、村長さんはご不満だったのか、物凄く複雑そうな顔で此方を見返してきた。でもね……

「その、見舞金なんですけど、来月からは廃止が決定してたりするんですよ」
「なっ!?」
　僕が教えると、村長さんは本当に驚いた様子で、しょぼしょぼとさせていた目を大きく見開いた。まあ、そういう反応になるよね。
（実際、驚いたよな）
（そうだねえ……）
　ひそと耳打ちしてきたサルバに僕も頷いて返す。サルバの言葉通り、この話を聞いた直後は僕も結構びっくりしてた。いや、まあ、ダンジョン閉鎖のお金は、この土地の貴族からギルド経由で僕達ダンジョン閉鎖士にも支払われる訳だから、意外と大きな額になるっていうのは事実だし、見舞金の廃止はダンジョンの閉鎖に対する課税へのステップとも考えられるから、総額という意味じゃ思いの外まとまった金額になったりするんだけど、それにしたって今回の公布は随分と唐突な印象だった。
（だから喜べって言う気もないけど、比較的マシなのは事実だよね）
（だよな……）
　雀の涙程の見舞金を前にさめざめと涙していた村長さんだけど、今後はそういった話もなくむしろダンジョン村に閉鎖費用を全額負担させる方針らしい。
（今後は荒れそうか？）

（見舞金廃止でってこと？）
（おう）
（んー、少し判断に迷うところかな）
村の利益っていう観点から見れば見舞金廃止は単純に村にとっては不利益しかないんだけど、そもそもこの極少額の見舞金って出された瞬間に発狂する村人が少なくなかったからね。ほら、下手に夢見せられると、現実とのギャップで感情が何倍にも増幅されるっていうでしょ？
（あー……）
サルバが納得したように頷いた。ま、そうなるよね。
実際、僕が村人と揉めるのも、ダンジョンの閉鎖の通知とかそっちよりも、見舞金を出してその金額を確かめてもらった時の方が多い位だし。
（いや、それは単純にお前の出し方が悪いんじゃねえの？）
（失礼な）
ただ事実を告げているだけだし、そもそも相手の気持ちを宥めるのは僕の業務の範囲には含まれていないからね。
（ドライだなあ）
（そこまで暇じゃないだけだよ）

ああいう手合いって本当に永久的に引っ付いて来るからねえ。
そういう意味じゃ、債権屋さんが食い込んでいる村は楽で良いよね、実際。
（ああ、そういうことなら、お前が債権屋で気前が良かったのも良く分かるな）
（でしょ？）
本当に、彼ら（債権屋さん）が居ると、すっごい楽。
「まあでも、今回はその辺の心配は不要かな」
「ん？　……ああ」
僕の指摘に、一瞬首を傾げたサルバは目の前の村長さんの姿に納得したようにこくこくと頷く。
僕の話を聞いた直後、それまでの雰囲気は何処へやら、一転して目の前のお金でも仕方ないという空気と、自分達が今後のダンジョン村の様に閉鎖費用の全額負担をする必要が無くて良かったという安堵、そしてほんの臭わす程度ではあるものの、自分達より後にダンジョンの閉鎖を行う村を侮る視点が確かに見え隠れしていた。……、
「それじゃあ、僕達はこれで」
一声かけると、僕より先に立ち上がったサルバがスタスタと部屋を出ていく。その後を追い掛けていると後ろの方から「あ、ええ……」という間の抜けた力のない返事だけが付いてきたのだった。

ダンジョンの閉鎖を終えたダンジョン村から出て街道を歩いていると、隣のサルバがふと溜息を吐いた。
「サルバ？」
「んあ？」
「どうかしたの？」
「ん？」
その溜息と妙に鈍い反応に声を掛けると、むにむにと頭を揉んだサルバが「ん～……」と首を傾げた。
「いや、大したことじゃないんだけどな」
「じゃあ、丁度良いね。愚痴は大したことじゃない内に吐き出しとくに限るから」
「……」
「？　どうかした？」
「お前が上司っぽいというか常識っぽい事を言うなんて思わなかったから素直に驚いた」
「はっはっは」

この野郎。

僕は剣を抜いた
サルバは走って逃げだした

甘いね。
「どぅおおおおおおおおおおお!?!?!?」
「ざまぁ」
同時に腰から抜いて投げた鞘に足を取られてサルバはずっこけたのだった。
「よっと」
「ぐえ」
ついでにうつ伏せに倒れたサルバの背中に足を乗せると、カエルが潰されたような悲鳴が漏れてむにむにとした感触が足を伝わってきた。……ああ、胸のせいか。
「ほらほら」
「ぐえっぐえっ、ぐえぇ……」
はっはっは。……、
「おっぱい大きくなった?」

「……」

何となく、勘で聞いてみたらさっと目を逸らされた。……え、本当に？　……、

「まあ、別にどうでもいっか」

「俺にとっては男としての尊厳に関わる話なんだけどな！」

「僕がそうなった訳じゃないし」

「前言撤回。やっぱりお前は糞野郎だ」

「何を今更」

「それもそうだな」

「「……」」

僕が剣を振りかぶるのと同時に、サルバが立ち上がって銃を引き抜いた。

「で、実際どうなの？」

「それは胸の話か？」

「サルバが落ち込んでいる理由の方だよ？」

それ以外にある訳ないじゃん。

「……この体勢で言うなよ」

呆れ半分に口を緩めたサルバが銃を下ろして小さく肩を竦めた。別に体勢はどうでも良いんじゃないかな？

「いや、まあそうか？」
「少なくとも僕はどうでも良いかな」
「やっぱりお前ってどっか変だな」
「失礼な」
　別にどうでも良いけど。
「いや、本当に悩みって程じゃ無いんだけどな……」
　それでも話す気になったらしいサルバは銃を納めて小さく溜息を吐く。
「こう、お前にくっついてダンジョン閉鎖士の手伝い初めてから、それなりに幾つかの村を回っただろ？」
「そうだね」
　日常的にダンジョンの閉鎖をして回っている今の僕よりは全然少ないけど、ギルドに来たばっかりだった頃の僕と比べれば大分早いペースじゃないかな？
「だからかな。こう、ああいうやり取り繰り返していると、気が滅入る……って程じゃねえけど、何となく嫌な気分になるなって思ってな」
「ああ、そういうね」
　述懐するサルバの言葉に僕は納得する。
　僕自身は正直経験も無いし共感もあまりないけれど、まあ気が滅入る人はいるよね。

それがまして、サルバみたいに倫理観が出来上がった後にこういう仕事をする様になったのなら猶更。うーん……、

「こういうのって特効薬とか無いし、他人とかどうでも良い僕だと共感することは難しいんだけどさ、サルバの話を聞くくらいはするし……まあ、しいて言えることがあるとしたら、本当に限界だったらちゃんとギブアップしなよって事くらいかな」

「悪いな。俺の方が話し聞いてもらったくせに」

「別に気にしなくて良いよ。普通そういう物だと思うし」

「そう言う割に、お前は平気なんだな」

「僕の場合はサルバの気を滅入らせている光景が、子供の頃からの日常だったからね」

「いやな日常だな」

そこで漸くふっと表情を緩ませたサルバが二度三度と頷く。

「まあ、話聞いてくれたのは礼を言うわ。ありがとな」

「どういたしまして」

それを受け取り、前を向いたところで「お前って女衒とかやったら大成したんじゃねえの？」という褒めているのか褒めていないのか分からない評価をされた。んー、

「多分、無理だと思うよ」

「つーと？」

「ほら、僕の今の性格はダンジョン閉鎖士として育てられたから出来上がった部分が多分にあるからさ」
「ダンジョン閉鎖士にならなきゃ、女衒に適性がある人格になったかは分からないってか」
「そうそう」
　逆にダンジョン閉鎖士は女衒、というか身体を売らなきゃいけない立場の女の人からの受けは悪いからね。時系列の問題で、売春斡旋は向いていないと思うよ。
「じゃあ、今の性格だけ見たら？」
「公平に見て、適性高いよね」
　その辺、どうでも良いから。
「酷い奴だな」
「ま、そうかもね？」
　何方ともなく漏れた笑いで漸く空気が弛緩したのを感じながら歩いていると、
「「ん？」」
　不意にカタカタという音が微かに、だけど、確かに遮るものの無い街道を通して耳に届いてきた。隣のサルバにも聞こえたらしく、不思議そうに首を傾げている。
「なあ、あれ」

先に何か見つけたらしく、前髪を揺らしながらサルバが前を指差した。

「……」

その先を目を凝らして見ていると、薄暗くなった黄昏時の細道の奥でゆらゆらと揺れる小さな灯（あかり）があった。

「……」

最初は微かに、けれど、近付くにつれてはっきりと見えるようになったそれは、おんぼろの小さな馬車だった。

はっきりと姿を確認してしまえば拍子抜け。馬車同様にぼろぼろの衣服を纏った御者が御者席の上でのたのたと歩く馬にゆるゆると鞭をふるっている。

「……ん？」

その通り道を開けるように、横に退いた僕とサルバ。けれど、その馬車が通り過ぎ掛けたその瞬間、おんぼろの馬車の外観にそぐわない、上等な香の薫りが板目の隙間から漂ってきた。

（貴族のお忍びか……）

稀にある話だけど、こう直面すると少し珍しさを感じる光景に、僕は少しだけ好奇心をそそられた。と、言っても、精々ほんの僅に足を止める程度のそれだけど。

「……？」

隣のサルバは匂いには気付いていないらしく、僕が足を止めたのに、少しだけ不思議そうに首をかしげた。
「ああ、ごめん。行こっか」
待たせてしまったサルバに声を掛けて、またのんびりとした行軍に戻る。けど、
「そこの。もしや、過日のダンジョン閉鎖士か？」
不意にぎぃぃっと何かが軋むような音が響き、次いで、何処かで聞いたような声が飛んで来る。
「えっ!?」
「……」
貴族という予想がついていた僕と違い、完全に不意討ちだったサルバがビクンと肩を跳ねさせた。果たして、振り返った先に居たのは、古ぼけた外装に対して、妙に設えの良い内装をしたドアから顔を出すハップルカ伯爵の姿があった。
「数日ぶりです、伯爵様」
（……何で？）
仮に馬車から僕達の事を察知したとしても、態々声を掛けて来る理由にも心当たりがなかったのもあって、僕は内心疑問符を浮かべながら、この辺り最大の権力者に一礼を返したのだった。

「……なあ、アルタ」
「何？」
「どうしてこうなったんだ？」
うーん……
「何でだろ？」
「おい」
だって、これは流石に想定外だし。
「そりゃ、そうだが……」
でしょ？　むしろ、その質問は僕じゃなくて、目の前のこの人に聞くべきじゃない？
「む……」
あ、口ごもっちゃった。まあ、仕方ないかな。
「で、何でですか？」
「って、お前があっさり聞くのかい!?」
「？　だって、聞かなきゃ分からないでしょ？」
後は無視して馬車から飛び降りるくらいだけど。そっちにする？

「……前者で」
「ということなので、さっさと理由を言ってください」
「さらっと擦り付けるなよっ!?」
　はっはっは。
「相変わらずだな。ロハグのダンジョン閉鎖士」
　そんな僕達を見て、ぱちぱちと目を瞬いたこの辺り一帯の支配者、ハップルカ伯爵は何時かの屋敷で会った時と同じ様に、抑揚のない口調でそう言った。
「はあ」
　そうですか。
「で、二度と会いたくないと言っていた僕達に態々声を掛けた理由は何です？」
「……」
　何か、物凄く呆れた目で見られた気がする。なんで？
「お前達は……」
「……」
「お前達は、レミュールに手を突っ込んでいるのか？」
　うん？　そこ？
（てっきり、リーセン子爵の事を聞かれると思ったんだが、違ったな）

（そうだね……）

耳打ちしてくるサルバに頷き返しながら、取り敢えず正直に返す。

「僕達の手はもう離れたので、回答できません」

「おい」

だって、これ以外に答えようがないし。

正面から切り捨てたからか、サルバが思わず声を上げたけど、その先のハップルカ伯爵はじっと何かを考え込んでいる様だった。ふむ、

「もう降りても良いですか？」

「だから言い方ぁ！」

サルバからチョップをされた。少しだけ痛い。

「……本当に相変わらずみたいだな」

さよで。

「お前達なら何か知ってると思ったが、手を離れたということは、ギルドナイトの担当になったか……となると、長期案件になると見たか……」

「いえ、単に僕の担当区分じゃないから担当に渡しただけですけど？」

「ほんの少しで片がつくなら、態々引き継ぎをさせる手間を省くだろう」

そりゃ、まあ、その通り。

「手詰まっているのか？」
「……ん？」
あれ？　この物言い……。
「手詰まっていてほしいんですか？」
「……」
ふと引っ掛かった事もあり、そう尋ねると、今度は伯爵様の方が口を噤んでしまった。
んー……
「それで終わりなら僕達は降りますね？」
向かいたい方向と逆走している馬車に何時までも乗っていても意味ないし。
「ドア開けて、サルバ」
「あ、ああ「待て待て」
「良いのか？」という顔をした隣のサルバを「良いから」と促すと、伯爵様が少しだけ慌てた様に声を上げた。
「何です？　まだ何かあるんですか？」
「いや、不思議そうにしてるけど、不思議なことしているのは明らかにお前の方だぞ」
そうかな？
「だって、僕は別に話す事ないよ？」

伯爵様が話す事無いなら、それこそここに居るだけ無駄以上に、距離と時間的には不利益でしかないし。

「お前は……」

「？」

「お前はダンジョンの事件の解決を目指していたのではないのか？」

「ギルドが目指していただけで、僕個人としてはどうでも良いです」

そして、既に僕の担当範囲から外れているだけです。

「……」

「……」

「……」

何故だろ、目の前の伯爵様の顔がはっきりと硬直しているし、隣のサルバは隣のサルバで絶句したようにぽかんと口を開けている。何？　何か言いたいことがあるなら聞くけど？

やけに長い沈黙が続き、やっと我に返ったらしい伯爵様が「……まさか」と徐に口を開いた。うん？

「まさか、本当にそんな心積もりで私の屋敷に踏み込んでくる者が居るとはな……」

「はあ」

「俺もこれは流石に想像していなかったな」
　そう？
「曲がりなりにも伯爵の邸宅……幾らそれ程の腕があるとはいえ、そんな場所（伯爵の自宅）に踏み込むなど、その飄げた顔の裏に激発する火薬の様に厄介な正義感があると思っていたが」
「別にありませんが？」
　単に仕事だっただけ。
「の……ようだな」
　深々と溜息を吐かれた。サルバもサルバで凄く疲れた顔しているし。
「というか、サルバもそう思ってたんだ？」
「いや、流石にお前が正義感に燃え盛っていて、この伯爵様を何としても討ち取って見せる！　みたいなのは想像していなかったが、そこまで無味乾燥に平然と踏み込んだのは流石にちょっと予想外だった」
　そうかな？
「普通、伯爵様の邸宅に踏み込むならそれなりに躊躇するもんだろ？」
「普通っていうのは知らないけど、個人的には相手が伯爵様だとか貴族様だとかそういうのって躊躇する理由にはならないと思うんだけどな」
　その程度の理由で一々躊躇してたら仕事にならないし。

「……なあ、アルタ」
「んー？」
「お前、結構貴族様の資産とかそういう事に気を使っていたと思ってたんだが、違ったか？」
「違ってないよ」
むしろ、ギルドの中でもかなり気を使ってる方だと思うし。
「じゃあ」
「貴族様の資産に気を使うのと、貴族様に気を使うのは別の話だしね」
どっちも攻撃行為ではあるけど、相手の財布に訳もなく手を突っ込むのは無駄な争いを発生させるだけだからね。無意味この上ないし。だけど、貴族様に直接剣を向けるときっていうのは、もう争い自体が避けようが無くなってるって事だからね。そんな状況になった時点で会話は無駄だし、そりゃ気を使う必要もなくなるって。
「割り切るなあ……」
「単に区別しているだけなんだけどね」
「怖くねえの？」
「何が？」
「怖くねえんだなあ……」

「まあ、強いて言うなら怖い以前にどうでも良いからね」
「ルールとかがか？」
「んー、そっちも大して気にしないけど、強いて言うなら全部？」
「全部……」
「そ。全部」
僕の行動に疑問を持つ人が大抵これを聞くと変な顔をするんだけどさ。
「人間、全てに対して特段愛着が無ければ、前進に特別な決意を必要としなくなると思うよ？」
多分だけどね。
「……」
「……」
「……これで、あれほどの腕を持つというのだから、世の中分からないな」
「……ネジが外れている気がしてはいたが、まさかここまで飛んでたとはな」
うん、何時も通りの反応。
「で、僕と交渉してみます？」
「いや、結構だ。恐らく不毛な事にしかならないだろうからな」
「でしょうね」

むしろ賢明です。

「そもそも、変な色気を出さなければ、私としても利があるのでな」

（じゃあ、始めからそうしろよ）

（言っちゃダメだよサルバ。こういう所でねちっこいのは利益を上げなきゃいけない人間の場合長所でもあるんだから）

「聞こえているぞ」

あ、はい。

「何から話したものかな……」

ふんと鼻を鳴らしたハップルカ伯爵が腕組みをしてそんな事を呟く。

「まあ、結論から言うとあれだ。レミュールの奴が私と会いたがらん」

「レミュール男爵夫人がですか」

「ああ」

頷いたハップルカ伯爵がぎょろっと目を向けてくる。

「そんな事もあるだろうとは言わんのだな」

「まあ、ハップルカ伯爵の呼び掛けだったら、この辺りの貴族様は何を置いても応対するのが普通でしょうからね」

「私の屋敷に抜身の刀片手に押し込んできておいてよく言うな」

「それはそれ、これはこれです」
　答えると。ハップルカ伯爵はもう一度鼻を鳴らした。
「まあ、お前の事は置いておくが、アレ（レミュール男爵夫人）が私に応じないのはもう一つの意味であり得んのだ」
「と、言うと？」
「分からんか？」
　ハップルカ伯爵の言葉に顔を見合わせた僕とサルバはほぼ同時に「「もしかして」」と口にしていた。
「レミュール男爵夫人は伯爵様の」
「ああ。私の愛妾だ」
　頷いたハップルカ伯爵がぽつぽつと話し始める。
「あれと私が会ったのは私がまだリーセンの奴と猟官活動を始める前の事でな。王都に居た頃にあれに私が惚れこんだのだ」
「はあ」
　まあ、そういう事はあるのかな？　僕はレミュール男爵夫人とは面識ないけど、それでも凄い美人って話は嫌という程聞いているし。
「当時、あれは前のレミュールの側仕えをしているメイドでな。親戚筋とは言っていた

が殆ど木っ端に等しい存在だった。それを私が当主に引き上げてやったのだ」

「……」

うーん、この言い草。愛妾と言っておきながら愛が感じられないなあ。いや、傍流の傍流から引き揚げたって事は今のレミュール男爵夫人の地位は完全に目の前のハップルカ伯爵の力によるものなはずだから、そういう目で物を言うのは当然なのかもしれないけどさ。

愛夫か何かを見る

「確かに、そういう立場の人間が伯爵様に会おうとしないって言うのは妙と言えば妙ですね」

立場上、元々圧倒的に権力に差がある立場な上に、そこ迄近い存在という事はその分首根っこを掴まれる可能性が高いという事だ。いや、閨で情報がどの程度吐かれているか次第ではハップルカ伯爵の方が頭が上がらなくなる場合もあるけど、この様子だとその可能性は限りなく低いように見える。

となれば、レミュール男爵夫人のみならず、その一族全てにとってハップルカ伯爵は主人みたいなものな訳で。それを跳ね付けるという選択肢はまず存在しない筈なんだけど……

「何かを知ったか、或いは何も知らないか……」

「もしくは私に知られたくないことが出来たか……だな」

不愉快そうに顔を顰めたハップルカ伯爵がらしくもなくチッと小さく舌打ちをした。
「踏み込んで聞かなかったんですか？」
「あれの屋敷の人間は私の息が掛かっている者しか居らん。半分は私の顔色を窺うのに忙しく、もう半分は私の愛妾に触れすぎて密告される事を恐れている。大した情報は出てこん」
「成程」
それじゃあ、確かに生きた情報は望むべくもないね。と、いうことは、
「態々僕達に声を掛けたのは、僕達を踏み込ませるためでしたか」
「……」
じろっと睨まれた。ふーん、そっか……。
「帰るよ、サルバ」
「お、おう」
頷いたサルバが目で「良いのか？」と聞いて来るけれど、んー、
「まあ、どうにでもなるんじゃない？」
どうせ、踏み込むのは僕達じゃなくてギルドナイトだろうし。それにしたってギルド経由じゃ派手な動きは無いから伯爵様の思惑通りには絶対にならないしさ。
「やはり、貴族を屁とも思っていないなダンジョン閉鎖士（ダンジョンクローザー）」

「いいえ」

苦虫を噛み潰した様な表情になったハップルカ伯爵を振り返りながら、僕は本心からその言葉を否定する。

「僕は貴族様を貴族様だと思っています」

「つまり、どうでも良いって事じゃねえか」

「そうとも言うね」

呆れた様に肩を竦めたサルバを伴って、小さなドアに手を掛ける。

「すみません、馬車を止めてもらっていいですか」

ゆらゆらと揺れる蝋燭が灯された馬車の中から、御者台のある小窓に向けて声を掛ける。が、

「ん?」

止まらない?

「あー、すみません!」

首を傾げたサルバが声を張るけれど、やっぱり馬車は止まる気配がない。と、

「うおっ!?」

「なっ!?」

「……」

ガタンと強く音を立てて室内が大きく傾いた。どうやら、馬車の車輪が路肩の石に乗り上げたらしい。

室内に嫌な沈黙が広がる。というよりも明らかに妙だった。

「サルバ」

僕が室内と御者台を繋ぐ小窓を開ける様に指で指示を出すと、頷いたサルバが腰の銃の撃鉄を上げながら、睨みつける様に見ていた連絡窓を開く。

「！」

果たして御者台に居たのは一人の御者。

「お前は！」

但し……

〝片耳の無い〟

と頭に付く。

「！」

即座に発砲したサルバの銃弾が、耳無しの眉間を撃ち抜いた。無言で吹っ飛んだそれが視界から消えた直後、目の前のドアの薄壁から今度は銀色の穂先が蝋燭の光を鈍く弾きながら突き出てきた。

「ふっ」

咄嗟に小太刀の方でそれを逸らすと、その根元を手早く切り捨てる。直後、獲物を仕留め損ねて巣に逃げ帰る黒蛇を追い掛けて、僕は目の前の薄い木ドアを力任せに蹴り飛ばした。

「……」

足並みの乱れた馬車から飛び降りて着地すると、当然の様に人影が一つ突っ込んできた。

「っと」

鈍く光った得物と鉄の臭いに後ろに飛ぶと、丁度僕の頸があった部分を一丁の大斧が通り過ぎて行った。ぶんっと風鳴りと共に振りぬかれたそれが空を切ると、膂力に飲まれたのか、影の身体が大きく泳いだ。

「しっ」

その流れに合わせて踏み込み、即座に小太刀を影の頸に宛がう。片刃剣の方に持ち替えている余裕もない。僕は直ぐに剣を引き、男の両首の血管を切り裂いた。が、

「ん?」
　事切れたと思った瞬間、まるで堪えていないかの様に身体を上げた彼が返す様に横殴りに鉄斧を振るい直してきた。
「っと」
　それをしゃがんで回避しながら、今度は右の膝を斬りつける。上手く行けば筋がやられるはずだけど、其れより先にバランスを崩したい。
「う……」
「成功」
　ここにきて漸く怯んだ様子を見せたその男の足を払うと、もう持ち堪えられなくなったらしく、男はどうと音を立てて草原に倒れ込んだ。
(これ以上厄介が増えても困るしね)
　一瞬、人質にすることも考えたけど、それは無理があるしさっさと男の頸を斬り落とす事にする。
「良かったのか?」
　と、丁度馬車から降りて来たサルバが二丁の拳銃を手に鋭く辺りを睨みまわしている。
「大丈夫。これらは貴族様の資産じゃないし、直接的に僕達の命を狙ってきたからね」

全員殺して大丈夫。問題は、
「さっきの槍の持ち主が近くに居ると思うからサルバも注意して」
「あ、ああ……あ!?」
サルバが頷きかけた瞬間、見計ったかのように草原一帯に光が流れた。
「……」
直ぐに収束したそれは、しかし、直後僕達の横を通り過ぎ、そして、まだ人（ハップルカ伯爵）が乗っている筈の馬車に直撃したのだった。
当然の様に爆散するおんぼろの馬車。あれじゃあ助からないね。
「おいっ!?」
「それより構えて、サルバ。さっきの光の瞬間、ちらっとだけど人影が見えた」
「む……」
「人数は三人。数は合うよね」
想定していた彼らだとしたら、人数はぴったりと合う計算になる。
「……」
言わんとすることが理解できたのか、両拳銃を構えた拍子にちらりと覗いたサルバの目がきゅっと鋭くなったのが見えた。
「まさか、生き返ったとは言わないよな?」

「十中八九、偽装だったって事だろうね」
　というか、それ以外にないんだけどさ。
「どうする？　生かすのか？」
「無理のない範囲でかな」
　こっちがやられそうなら、さっさと命を狙って良いよ。判断は任せるからさ。
「了解」
　頷いたサルバに肯定を返して、二手に分かれる。駆けだしたサルバの足音が遠くなるのを感じながら、僕も片刃剣の方を腰から抜いた。
（位置は……）
　軽く相手の臭いを辿る。幸い、風も無いから妙に位置が流れる様子もない。
　鼻孔を擽って来るのは鉄の臭いと土の臭い、そして微かな香水の匂いに、嗅ぎ慣れたダンジョンの悪臭。
（少しずつ移動しているね）
　敵の位置取りを確かめながら僕も少しずつ歩き出す。直後、再び大地に灯った魔法の発生光が相手の位置を知らせてくれる。
「……」
　どうやら、派手に音を立てていたサルバの方を狙ったらしく、魔法使いらしい影の腕

から噴出する。幸い外れたようだし、一気に近付くべきかな。

「!?」

サルバの回避に合わせて僕が突進を開始すると、暗闇の奥の人影が困惑するように小さくぶれたのを感じる。うん、一呼吸でも二呼吸でも、動きが鈍ってくれるに越したことは無いよね。じゃ……跳ぼうか。

「ふっ」

あ、受け止められた。

「っ!?」

受け止めたのは、案の定。

「お久しぶりです。生きてたんですね」

僕が剣を押し込みながら儀礼的に笑顔を向けると、顔の主、トウトウ村のB級冒険者は苦しそうに顔を歪めたのだった。

十三

一合、剣を合わせた僕は直後に感じた殺気に、重なった剣を無理矢理押し流して身体を利き手の方へと投げ捨てた。少し湿った土臭い雑草の上を転がりながら立ち上がると、案の定そこには細身のレイピアを構えた先の槍の持ち主だったと思われる痩身の騎士が居た。

（ふーん、レイピアね……）

虚空に突き立てられた、鈍く光るそれを見ながら、僕はどうやらこの目の前の二人が間違いなく殺人を目的として、この場に現れたことを理解する。レイピアの様な鎧の隙間を縫う類の武器は基本的に対人戦でしか役に立たず、ダンジョンで対モンスターとして使用するのはある程度分厚い、やや短めのロングソードが基本だ。

そんな役回りの武器を振るう痩身騎士のピタリと腰の据わった風格のある構えは、彼が対人戦を決して不得手としていない事を示していた。いや、むしろ、

（殺しはお手の物って感じか……）

目を凝らせば、所々使い込まれた跡のあるそれ。細剣幾ら上位の等級とはいえ、対モンスターが専門な冒険者が持つには分不相応な代物だ。かと言って、中古と見るには明らか

に持ち手との一体感に歪が見当たらない。確実に前職か、それとも冒険者になってからかは不明だが、殺しの訓練と実践を相応に繰り返した人間の身体と得物だ。

「ふー……」

そこ迄確かめると、僕は一旦距離を取って大きく息を吐いた。目の前の人間は二人。一度、押し込むことに成功した男装騎士の方も既に体勢を立て直し終えて、長剣の切っ先をこちらに向けてきている。勢いに任せてけりをつけるのは無理だろう。

「……？」

けど、そんな事を考えながら観察していた相手の姿に、僕は小さな違和感を覚えた。

（ずれている？）

言葉にすればあまりにも漠然としたそれは、しかし、無視するには余りにもはっきりと僕の意識に存在を訴えかけて来ていた。

「……」

違和感の出所は長剣を携えた男装の方。先日のトウトウ村での決闘の時に相対したのと同じ攻めっ気の強い前傾気味に体勢は変わらないけれど、その構えが彼女の姿勢の良い体形に対して妙に似合っていなかった。

もし、此れがトウトウ村での一戦が無かったら、或いはそういう物と認識していたかもしれないけれど、トウトウ村での彼女はむしろ体形が構えにピタリと嵌っていて、鎧

ではっきりと見えないながらもその肉体が相当筋肉質な事が見て取れた。対する目の前の彼女はそういった横幅の安定感が感じられず、それ以前に肉体労働の経験すらない様にすら見えた。

（……よし）

違和感の見当がつけば、後は斬り込むだけかな。つけ入るのは向こう（男装の騎士）で。

「!?!?」

「……」

手早く短刀の方を投げて体を伏せながら地面を蹴ると、丁度男装の方に僕の片手剣と短刀が同時に追い付く。そして、案の定一歩呼吸が遅れた男装騎士さんは切れ長の目を丸くさせながら呆気に取られていた。その胴に摺り上げる様に剣を差し込むと、直ぐにもう一度距離を取る。

「ん?」

すると、体勢を崩した男装騎士越しに僕に追い縋ろうとしていたらしい痩身騎士の方が内臓を切り裂いた男装と縺れ合って、そのままどさりと草原に倒れたのだった。

「ん」

直ぐに追撃を仕掛けると、草の根を這う様にして銀色の光が走った。それを飛び越えながら二度剣を振るう。

一度目で銀閃の根元の手首を
二度目でその根源である痩身騎士の細首を

それぞれ一太刀ずつで切断をする。

「……」

跳び過ぎた後で強烈に噴き出した生臭い鮮血の臭いに振り返ると、噴き出した体液が尽き、びくびくと痙攣する鎧姿の躯に、その下から這い出して来る。

「終わったのか」

「大体ね。そっちも？」

同時に背中の方から聞こえてきたサルバの声に、男装騎士に目を向けたまま問うと、「おう」という返事が返ってきた。直後に隣に立ったサルバが愛銃の撃鉄を上げたままにしながら「んで？」と小さく首を傾げた。

「最後の一人もさっさとやるのか？」

「んー……」

それはちょっと考えどころなんだよね。

まず、死んだと言われた彼女達が何故生きているのか。まあ、十中八九替え玉だっ

たって事なんだろうけど、なら何故死んだふりをしたのか。そして、何故今になって姿を現したのか。ついでに襲撃の目的。聞かなきゃいけないことはそれこそ無数にあるからね。問題があるとしたら……

「サルバ」

「おう」

「取り合えず、情報を引き出したいから四肢を潰す方向で」

「分かった」

「但し」

「？」

「もし、サルバが被害を受けそうだと思ったらすぐに殺害の方向に切り替えて」

「良いのか？」

「うん」

　少し驚いた様子のサルバに、僕は首肯を返す。

「さっきから見ているんだけど、彼女は何か変なんだ」

「つーと？」

「本人じゃないか、或いは正気じゃないか……多分に直観的な所だから断定は出来ないんだけど、情報を抜く事自体が不可能な可能性があると思う」

「そうか」

頷いたサルバが「お前の見立てなら、気を付けておくべきだな」と呟いて、立ち上がった彼女（男装騎士さん）の左側へと旋回するように移動する。離れる直前に「撃ったら斬り込めよ」とだけ耳打ちしたサルバに手を振り返すと、サルバも射撃体勢に入る。そんな僕とサルバの位置取りに気付いているのかいないのか、男装騎士さんはふるふると震えながら僕と相対する位置に立ち上がった。

「……」

その佇まい、まるで剣を握っているかの様な不格好な構え。それを剣を持っていないにも関わらず取るのは一体どういう事だろうか。

（やっぱり、不自然。いや、異常だね）

彼女の姿に相対した直後に抱いた直観を確信に変えながら、一先ず視線でサルバに何時でも行けることを伝える。

「……」

暗闇の中でこくりと頷いたサルバが両銃を発砲する。撃鉄打ち鳴らされ、闇夜で発火した直後、中空を走った二つの弾丸がサルバの狙い違わず彼女の両足を撃ち抜いた。殆ど同時に飛び込みながら、僕は一旦彼女の腕を掴むと、その身体を力任せに草原に投げ捨てた。多少鎧の重みはあったものの、既に両足の踏ん張りがきかなくなっていた彼女

は、今度は完全な丸腰で地面に落ちたのだった。
「っと」
仰向けになったその胸を、即座に踏み込んで押し潰すものの、既に抵抗らしい抵抗も見られない。
「……」
念のため、喉元に切先を突き付けてみたものの、やっぱり何の反応も帰ってこなかった。
「口を割れば命は助けるけど、どうする？」
「……」
「……」
「……」
「返答は無し……か」
最後通告にすら押し黙ったままの騎士。その姿からは最早違和感どころか人らしい気配すら消え去っていた。
唯一、残った眼球だけがやけにこっちを観察するような色で片刃剣越しに僕を見上げてきている。
（これは無理だね）

これ以上の口頭での情報収集は不可能と判断して一旦首を刈り取る。切断された細首の断面から鮮血が溢れ出て青々とした草原に流れ注ぐが、結局最後の最後まで命乞いらしい命乞いは見られなかった。

「アルター」

「ん」

駆け寄ってきたサルバに手を振り返すと、頷いたサルバが拳銃をホルスターに仕舞い込んだ。

「終わったのか？」

「一先ずはね」

そう言うと、「一先ず？」とサルバは首を傾げる。

「うん、一先ず」

「つーと……」

「今から彼女達の身包みを剥いで、死体の検分をするから、他の死体と、後ついでに多分死んでる伯爵様の死体も一か所に集めるから手伝って」

「あー……おう」

「宜しくね」

流石に死体を弄るという行為に若干の抵抗感を覚えたらしいサルバが、前髪のせいで

見えないものの目を泳がせた雰囲気を見せる。けど、逡巡は少しの事で、最後には頷いてくれた。

「……」

その背中を見送りながら、僕は身体から少し離れたところに転がった、男装騎士さんの生首を拾い上げる。

持ち上げたそれは既に目から光を失っているが、それ以前に酷く穏やか……いや、虚無と言っても良い程、何の感情も浮かんでいなかった。

（やっぱり妙だね……）

斬首による一瞬の死を、此れまで何度となく生み出してきた経験がある身として断言するが、首を斬り落とされた人間の表情は死の直前で固定されるものだが、正面から完全に自分の死を見据えた上で出来た生首は九分九厘苦悶や絶望、或いは憎悪の表情を浮かべているものだ。或いは一部信仰などが絡んだ場合はやけに穏やかな顔の場合もある。何方にせよ、此処まで無機質な顔になるのはかなり特殊な事例だ。

「まあ、調べてみるしかないか」

一先ず思案を打ち切った僕は、最後の血が抜けた様子の死体の腕を掴んで力任せに引き摺りにかかる。

「……？」

腕を引っ張った瞬間、ゴボリと音を立てて流れ落ちる、押し出されたどす黒い鮮血。その珍しくも無い光景に、しかし、僕は一瞬目が引かれた。いや、目が引かれたというのは正確な表現じゃない。正しくは鼻が引かれただ。

微か、本当にほんの微かに、生臭い、いや、死体がそもそも生臭いが、其れと良く似ていながら全く別物な、言うならばダンジョンの様な、そんな臭いが。

「……」

本当に通り過ぎるような、気のせいとすら思う程のそれが、僕の鼻にやけに残った気がしたのだった。

集めた死体は全部で六つ。僕が首を斬り落としたのが三つ、サルバが眉間に穴を開けたのが二つ、そして、全身が丸焦げになった焼死体が一つ。焼死体の方は好都合な事に顔が半分焼けずに残っていたので、そのままハップルカ伯爵の物だと断定することが出来た。

次に、サルバが射殺した二つの死体はトウトウ村で斬り落とした片耳が一致したこともあり、直ぐに意識を外す。

（問題は……）

僕が首を斬り落とした三つの死体の内の一つ。最後に討った男装冒険者の躯だった。
「鎧を剥ぐから、これ適当な所に置いておいて」
「うおっ」
サルバに男装騎士さんの頸を投げながら僕は彼女の鎧を剥いでいく。一目で設えが良いと分かる、B級の冒険者にしてもかなり華美な装飾が施されたそれは、留め金に手を掛ければ意外な程呆気なく彼女の肢体からはがれて落ちたのだった。
「ふーん……」
その身体を開き衣服を剥ぎ取ってみれば、夜光の中で露になる、鮮血に汚れて尚、光を弾く白い肌。そのふっくらとした乳房から流線型の無駄のない肌に視線を走らせ終える頃には僕の口からは無意識のうちにそんな音が零れ出ていたのだった。
「な、アルタ？」
首なし死体の裸をまじまじと見ていたからか、後ろのサルバが少しだけ引き攣った声を上げた。……それ生首持ったまま覗き込んでるサルバも同類だよ？
「うげ」
あ、物凄く嫌そうな顔された。
「で、どうしたの？」
「ん、何か妙に興味ありげに見てると思ってな」

「ああ、そうだね」

サルバの言葉に肯定を返しながら、僕はサルバを軽く手招きして彼女（男装騎士）の躯を指差した。

「見て」

「ん……ん？」

「気付いたよね」

後ろで首を傾げたサルバに、僕は同意を促すでもなく、そう確認する。多分、振り返るまでもなくサルバも同じ疑問を持っただろう。

「鍛えられて……ない？」

「それ以前に冒険者の身体じゃないよね」

視線の先、首を失った死者の肉体は肌艶は良く、瑞々しい色合いな上に、多少の傷の痕も無く、まるで欠片の瑕疵すら付けられぬように、大切に大切に育てられた、そんな身体をしている。しかも、四肢のみならず体幹までが流線型。唯一胸元だけはふっくらとした柔肉が形を作っているが、サルバみたいに後天的に〝ダンジョン・コア〟で身体が変質したのでもない限り、B級でありながらここまで肉付きの悪い体躯というのはどう考えても有り得ないだろう。

「……」

念のため、グローブを外して確認してみるが、爪は奇麗に形を整えられている上に、掌には剣を握る人間特有のたこや豆の痕跡すら見受けられなかった。
「つまり……」
「九分九厘偽物。或いは替え玉だろうね」
思案しながら唇を尖らせるサルバに、僕は半ば以上確信をもって断定する。と、言うより、此処まで来ると同一人物と言う方が無理がある。
「トウトウ村での決闘の動きをこの身体で出来るかと言うと、まず無理だし、そもそもB級に数週間で登り詰めたなら兎も角、確りとギルドに記録が残る程度に長く活動した冒険者がこの体形っていうのはまず有り得ないからね。ついでに、さっきの彼女の構えを思い出すと、歪って言うのかな、やけに構えの形に対して体形が合っていなかったから」
「そうか……」
「うん」
徐に顎を撫でるサルバに首肯を返す。
「それと、もう一つ疑問があってさ」
「疑問？」
「うん。ちょっと、そっちのサルバが撃ち殺した方取って」
「こいつらか？」

「うん。片方だけで大丈夫だから」
「ん」
放る様に渡された射殺死体。御者に成り済ましてた方を受け取ると、頭に頭巾を剥ぎ取って首元迄を露にする。
「こいつ……」
「トウトウ村でサルバをナンパしてきた人だね」
嫌な思い出だった分、真っ先に思い出したサルバに肩を竦めながら、こっちの死体の方も首を斬り落として血抜きをする。
既にサルバによって撃ち抜かれた眉間からある程度体液は流れ出ていたが、それでも大半残っていた血液が勢いよく首の断面から流れ出ていく。そして、最後の最後、ごぼりと音を立てて搾り出された血液が出ると同時に、僕の鼻孔を再びあの臭いが擽った。
「アルタ?」
むわっと昇り立つ鉄錆と人肉の生臭いそれに顔を顰めながら、サルバが前髪越しに訝る様な視線を向けてきた。
「……もう一つ、疑問というか、妙な事があってさ」
それに応えず、僕は胸中にあったもう一つの疑問の方を思案しながら言葉を紡ぐ。
「さっき、そこの男装騎士さんの身体が不自然って話をしたけど、そもそも、何でそんな

不自然な人間がさも冒険者の様な姿で襲ってきたのか。しかも、本物の冒険者に混ざっていた上に、冒険者の方も彼女が居ることに疑問を持っていた様子は無かったし」
「確かに、妙だな」
　でしょ？
「ついでに、これは完全な僕個人の感想なんだけど、さっきの戦いの最中、彼女からは意志というものが全然感じられなかったんだよね」
「……」
「こう、剣の切っ先を向けられて、いざ首を斬り落とされそうになった人間っていうのはさ、大なり小なり感情を浮かべるものなんだよね。仮に無反応でも、努めて無反応にしようという雰囲気が滲み出るものだし」
「詳しいな」
「慣れてるからね」
　割と。
「それ以前に、さっきサルバが彼女を中心に回り込んだ時、彼女は剣を握っていないにも関わらず、まるで手にロングソードが握られているかの様な動作をしてたでしょ？」
「そういえば、そうだったな」
　男装騎士が仲間の死体に巻き込まれながら立ち上がった時の光景を思い出したのか、

サルバがこくこくと頷く。
「あれも、物凄く不自然だったよね」
「確かにそうだな。殆ど戦う事しか考えていなかったから疑問に思わなかったが、言われてみれば不自然な所しかないぜ」
「ね」
ほんと、まるでマリオネットか何かみたいだったよね。ここも、妙だと思う。
「仮定で話をするよ?」
「ああ」
「サルバも知っての通り、この世界にある魔法はおとぎ話みたいな〝願えば何でも出来る〟っていう万能の存在じゃなくて風、火、水、土の四種の発生、増幅或いは操作に限られているよね」
「ああ」
「さっきの人形染みた彼女達を作る魔法は原則存在しない訳だけど、極々低確率でおとぎ話で言う所の〝魔法〟が出来るようになる物が存在するよね」
「〝ダンジョン・コア〟か……」
「ん」
〝ダンジョン・コア〟がその危険性と無作為性から禁制とされながら利用価値を見出

す人間が常に一定以上居るのは、この奇跡の産物、或いは魔法では決して起こし得ない異常を発生させられる可能性があるという点に収束する。
　自分自身も、肉体を男性に戻すために〝ダンジョン・コア〟を求めている事もあり、サルバは直ぐにその言葉を口にした。
「勿論、的外れな可能性は多分にあるけどね。〝ダンジョン・コア〟って性質はそれこそ無限にあるから、中にはとんでもなく複雑な性質の〝ダンジョン・コア〟もあるらしいし」
　或いは複数の〝ダンジョン・コア〟の複合なんて可能性もあるしね。
　けど、基本的に〝ダンジョン・コア〟は数を揃えるのが大変だし、ごちゃごちゃ考えるよりは単純な所から潰す方が良いかな。となると、次は、
「レミュール男爵夫人に突っかける事になるかな」
　思案を口にすると、隣のサルバが「やっぱりか」と眉をひそめた。
「まあ、ギルドにちょっと確認を取り次第だけどね」
「直ぐに突っ込まないんだな」
「ちょっとだけ気に掛かる事があるからね」
「気に掛かる事？」
「うん」

割と核心なんだけどさ、
「僕、実は今までレミュール男爵夫人と会った事が無いんだけどさ」
「ああ」
「この鍛えられていない体の男装騎士さんなんだけど……もしかして、レミュール男爵夫人なんじゃないかなって」
「!?」
身動ぎしたサルバの目が、揺れた前髪の間で大きく見開かれた。
「ど、どういう事だよ!?」
自分が、まあ、止めを刺したのは僕だけど、貴族様に発砲してしまったかもしれないと知ったサルバが慌てた様子で僕の肩を揺すった。動揺してるね。
「しないでか！」
手に持った、男装騎士さんの生首と僕を見比べながらサルバが焦った様子で捲し立てる。
「この人がレミュール男爵夫人？　貴族様？　そんな事有り得るのかよ!?」
「当てずっぽうだから外れてる可能性もかなりあるよ」
「どんくらい？」
「半々」

「結構当たるな、おい!?」
　叫んだサルバが手に持った生首を取り落として「あああああああ!」と頭を掻き毟った。それはそれで不敬だと思うよ。まあ、殺っちゃった後じゃ誤差だけどさ。
「笑うな!」
「笑ってないよ?　せせら笑っただけで」
「なお悪いわ!」
　はっはっは。
「まあ、当てずっぽうの根拠だけ少し話しちゃうと、そっちの御者の方、体はトウトウ村の冒険者な訳だけど、そんな人間を愛人でもありこの辺りの土地を統括している伯爵様の送迎に紛れ込ませられるなんて、貴族様の屋敷の中でも相当偉い人に決まってるでしょ?」
「……」
　或いは、屋敷の主人か……。
「で、この男装騎士は身体が明らかに鍛え込まれていないと」
「うん」
　それ以外にもあるけどね。
「ハップルカ伯爵が前に言っていた事、覚えてる?」

「ん？」
「ほら、レミュール男爵夫人の事」
「ん……あ」
先日、伯爵の屋敷に踏み込んだ時に、伯爵様は
―ああ、美人だ。癖のある金髪がよく似合う……私が知る限り一番の美女だとも―
と、レミュール男爵夫人の事を評していた。
「癖のある金髪の美人だよね」
サルバが投げ出した首を拾い上げてみれば、幸か不幸か表情が欠片も無く切取られたためか、この首の表情は感情が浮く以上に美人に見えた。
「まあ、流石に穿ち過ぎな気もするんだけど、ただ、完全に否定も出来ないんだよね」
少なくとも、レミュール男爵夫人の家から漂ってくる胡散臭さはね。それに、
「もう一つあってさ」
「おう」
「この首と、後、もう一つ斬り落とした首なんだけど、最後の血が流れた瞬間になんだけど、血肉の臭いとは別に、もう一つ生臭い臭いがしたんだよね」
「生臭い？」
「うん」

本当に微かだったけどさ。
「血とか肉とかの臭さにとても良く似ているんだけど、血肉とはほんの少しだけ違う、脳髄に響く様な臭い。多分、サルバには嗅げない臭い」
「それって……」
「ん」
眉を顰めるサルバに、首肯する。
「〝ダンジョン・コア〟の臭い……だね」
最初の男爵夫人？　の首から出た時は半信半疑だった。けど、今嗅いだ御者の首から出た血の臭いで僕は確信に変わったそれを伝えた。
「まあ、ダンジョン閉鎖士も〝ダンジョン・コア〟の使用に慣れている訳じゃないんだけど、こうも〝ダンジョン・コア〟が絡んでくると彼女（男装騎士）がダンジョン閉鎖士だったかもしれないっていう推測が妙に説得力を帯びてくるよね」
「……」
「ま、これも全部推測だけどね」
伝えながら、僕は二つの首を拾い上げて、投げ出した時に付いた土を軽く払う。
「つうと？」
「僕も、レミュール男爵夫人の顔を知らないからさ。当然、性格も良く知らないし」

なので、何処まで行っても、僕の考えは言いがかりの域を出ないんだよね。

「……」

そう告げると、隣のサルバが難しい顔になる。けど、何となく僕の伝えた内容を、内心で肯定している事だけは伝わってきた。

「ま、そこ迄気にしないでも、大丈夫だよ。知らないなら知らないでやりようはあるからさ」

「うん？」

「ほら、僕が知らないなら、知ってそうな人に確かめてもらえば良いわけだから」

「あー……」

その為のギルド長だしね。と、言う訳で、

「その辺の検分でも使うし、証拠にもなるから、この首は全部持って帰るよ」

「やっぱりか」

まあね。

「少し臭うかもしれないけど、我慢してね」

残っていた二人の首も落として、血抜きをすると、適当に剥いだ衣服に包んで束にする。

「もう殆ど魚を捌くノリだな」

かもね。馬車の方も使い物にならないから、通行の邪魔だけど、これはもう動かしようもないので勘弁してもらいたい。あとはまあ、ギルドに届け出るしかないかな。
「じゃ、行こっか」
「ああ……」
ぼたぼたと血の滴る布に包まれた首を六房。鞘ぐるみの片刃剣にぶら下げて歩き出すと、何故かサルバに溜息を吐かれた。

◆

「大当たりだよクソ坊主ども」
ロハグに戻ってギルド長に生首を見せながら事情を説明すると、始めは何事かという顔をされたけど、最後に男装騎士さんの物を見せたら、盛大な溜息と共に吐き捨てられた。酷いなあ。
「いや、酷い評価を受けているのは、お前より俺の方なんだが？」
「両方だよバカタレ」

「はっはっは」
だろうね。
「しかし、トウトウ村の死体はやはり替え玉だったか」
「想定していたんですか？」
「ギルドの調査を舐めるんじゃないよ」
首を傾げたサルバに、ギルド長がふんっと鼻を鳴らす。
「あの五つの死体が上がる少し前に、低級の冒険者が五人、行方不明になっていてね。その上、上がった死体は首から上を食い荒らされていたんだからね」
「首なし死体を偽装したら、本当に首なしになるとはね」
「ケロッとして言うなあ」
はっはっは。
ま、良いや。それより、
「こっちの首の方はどうです？」
「お前さんの見立て通りだよ」
そうですか。
机の上に並べた六つの首。その内の一つ、レミュール男爵夫人のそれを確かめたギルド長は一瞬驚愕したように目を見開いたし、多分そうだろうとは思ったけど、やっぱり

か。
「間違いなく、あたしが知っているレミュール男爵夫人の顔だ。多少の差異も違和感も無くね」
「ふむ……」
「お前さん達は、この顔をトウトウ村の冒険者の顔だと認識していたんだね？」
「ええ」
　瓜二つ……と言っても差し支えない程度には似ていると思う。それこそ、双子と言われたら納得するくらいには。ただ、姿勢、そしてそれを支える体形の方に違和感が湧いたんだけどね。
「状況証拠を見る限り、もう一人のこの顔の持ち主は確実にレミュール男爵夫人と入れ替わっているだろうね」
　漸く見えてきた尻尾に、ギルド長が煙草に火を点けながら呟いた。
「恐らく、ハップルカ伯爵に討手を放ったのも、自分の主人であるハップルカ伯爵なら偽物であることが分かってしまう。そんな危惧だろうね」
「辻褄を合わせるなら、自分の冒険者仲間もまとめて替え玉にして、引き込んだ理由も分かります。秘密を知る人間は少なければ少ない程良いにも関わらず、態々人数を増やしたのは、既知の、しかもB級冒険者の身体という戦力を買ったから。そして、昨晩の襲

撃を見る限り、〝ダンジョン・コア〟を用いての人形化の宛が既にあったのであれば、実質ノーリスクと言っていい」

「ふむ……」

頷いたギルド長が、レミュール男爵夫人と思われる首の断面を薬指で撫で、付着した固まり掛けの血をチロリと舐める。一瞬顔を顰めたギルド長は「確かに、微かにだが〝ダンジョン・コア〟の味がするね」と呟いた。

統合すると、最早レミュール男爵夫人は限りなく黒と言って差し支えないだろう。

「問題は、どう始末をつけるかだね……」

「ですね」

冒険者による貴族の家の簒奪。はっきり言って、前代未聞の不祥事だ。それこそ、明るみになれば元老院とギルドによる対立の引き金に成りかねないだろう。かと言って、この地方の統括をしていたハップルカ伯爵が死亡した以上、隠し通すのは不可能だ。

「不幸中の幸いだが……偽レミュール男爵夫人にしても、自分がハップルカ伯爵を亡き者にしたという事実が公表されるのはそれなりにリスクのある話だ。少なくとも、迂闊に表沙汰にすることはないだろうね」

「逆に言えば、偽者が動き出すまでがリミットって事ですか」

「ああ」

頷いたギルド長が腕組みをしたままぎゅっと煙草を噛み締めた。
「なあ、アルタ」
「何？」
「もしかして、相当やばい状態だったりするのか？」
「もしかしなくても、相当やばいよ」
これまでの件は、捜査の範囲内だし、ハップルカ伯爵の邸宅に踏み込んだのも、元を正せば伯爵が僕達の暗殺を目論んだことに端を発する訳だけど、男爵家簒奪は完全に冒険者の方がやらかした訳だからね。
「ついでに言うと、今回の件はもう一つ不味い事があってさ」
「まだ悪い知らせがあるのかよ」
「まあね」
本当に面倒だけどさ。
「件の男装冒険者は元ダンジョン閉鎖士の疑惑があるっていうのはサルバも何となく察しているでしょ？」
「ああ」
「そのせいで、下手に話が転がると、僕達ダンジョン閉鎖士そのものが迫害の対象に成りかねないんだよね」

「マジか……」

サルバが唖然としたように呟くけど、残念ながらマジだよ。

元々、平民階級からは疫病神みたいに嫌われている僕（ダンジョン閉鎖士）達が、貴族の簒奪なんて目論んだって知れたら、領地を治めている貴族の人達は領民の人気取りも兼ねて、ダンジョン閉鎖士の締め付けを始めかねないから。その中には給金とかみたいな単純なものだけじゃなく、特権なんかも含まれる可能性がある。

「特権……」

「うん、特権」

僕の説明に、直ぐにピンと来たのか、サルバがさっと顔色を変えた。ダンジョン閉鎖士が持つ特権なんて、大きなものは一つしかない。即ち、

〝ダンジョン・コア〟を使う事が禁止される可能性があるって事だね」

「マジかっ?!!」

サルバが頭を抱えたけれど、残念ながらマジだよ。

ダンジョン閉鎖士の〝ダンジョン・コア〟使用権は他の人間に嫌われやすい僕達の保護を目的としている訳だけど、そもそも保護の必要性を元老院が認めなくなったら、直ぐに取り上げられるからね。

「そうなったら最後、サルバも〝ダンジョン・コア〟を使うのは夢のまた夢になるんだよ

ね」
「畜生、笑うな！」
　はっはっは。
「しかも、正規の料金で〝ダンジョン・コア〟を購入しようにも、ダンジョン閉鎖士の給金じゃ〝ダンジョン・コア〟は高嶺の花もいい所と」
「うぐぅ……」
　呻きながら、サルバががっくりと項垂れた。まあ、そういう反応にもなるよね。
「……うん、まあ、仕方ない」
「アルタ？」
　のろのろと顔を上げたサルバに肩を竦めて見せながら苦笑を返す。
「とまあ、そうなると流石にサルバが困るから、僕としても真面目に着地点を考えないといけない訳。普段なら『末端の構成員である僕には関係ないしどうでも良いや』で済ませるんだけどさ」
「あ……お、おう」
「？」
　なんか、サルバがぎこちなく頷いた。どうかした？
「……まさか、こんなに直ぐサル坊を雇って良かったと思う事になるとはねえ」

首を傾げる僕と、困った様に頭を掻くサルバを見比べながら、ギルド長がため息混じりにぼやいた。何かあったっけ？

「普段のアル坊なら、本当にさっさと帰りかねないからね」

その通りだけど、それが何か？

良く分からない溜息を吐いたギルド長は、鼻を鳴らしながら「兎に角」と話を始める。

「元老院が感付く、或いは偽レミュールが動き出す前に、あたしらは何とか落とし所を探らないといけない」

「……」

ギルド長の言葉に、サルバが目に見えて必死に考え込んだ。まあ、男としての尊厳を回復できるかの瀬戸際だもんね。

「アル坊」

「何です？」

「お前さんは何か良い手を思いつくかい？」

「んー、そうですね……」

急に振られた質問に少し考えるけど、正直一つしか思いつかないかな。

「って、思いつくのか!?」

「うん。と、言っても一つだけだけど」

的外れな可能性もあるけどね。
「一つでも十分だ。教えてくれ！」
「うわっと」
突然、縋り付いて来たサルバに、僕は咄嗟に身体を支える。小柄な割に元男らしく結構筋肉質というか、それ以上に胸についている錘が大きくてやわやわとしていて、うん、悪い気分じゃないね。
「中身男なのに目を瞑ればだけど」
「？」
「うん、まあ良いや」
不思議そうにするサルバと、紫煙を吐くギルド長を順に見て、僕は思い付いた案を口にしてみる。
「全部、リーセン子爵のせいにしちゃうって方法なんだけど、どうだろ？」
「リーセン子爵にかい？」
「ええ」
どうやら、予想していなかったらしく、少しギルド長が上ずった様な声を上げた。
「つーと……」
「ほら、債権屋で聞いた話があったでしょ？」

「あ、ああ……」

「元々、あの男装騎士はリーセン子爵の私生児で、リーセン子爵領のダンジョン閉鎖士だった可能性があって、しかも、リーセン子爵はレミュール男爵夫人にちょっかいを掛けようとしていたよね」

「そうだったな」

頷いたサルバが、急く様に見えない視線で先を促してくる。

「これ、見方によってはリーセン子爵が主導で、ハップルカ伯爵と繋がっているレミュール男爵夫人の家を強奪したようにも取れるでしょ？」

「あ……」

伝えた瞬間、サルバはポンと手を打った。

もし、単にレミュール男爵夫人家を冒険者が乗っ取ったのだとしたら、それはギルド管轄の人間による簒奪。更に元ダンジョン閉鎖士なんて可能性が表沙汰になったら、ギルドによる反乱ともとられかねない。けれど、そのバックにリーセン子爵が居たのなら、この話はギルド対貴族から、貴族対貴族の権力闘争に話がすり替わる。

得心が行ったのか、表情を緩めたサルバだったが、直ぐに何かに思い至ったのか険しい顔になった。

「けど、債権屋の話だと、リーセン子爵にはもうハップルカ伯爵に逆らう気概は無くなっ

たって事になってなかったか？」
「この場合、直接のターゲットはハップルカ伯爵じゃなくてレミュール男爵夫人だから、まだ誤魔化しは効くと思うよ。それに、こういった醜聞っていうのは真実かどうかよりも真実に見えるかどうかが肝なのは世の常だしね」
　陰謀論や醜い嫉妬、或いは下劣な手管の方が受けが良いから。
「……」
　無関係な人間を巻き込むことに気が咎めるのか、サルバが難しい顔になる。けど、リーセン子爵自身の行動を考えると、決して身奇麗な人間とは言えないよ？
「……」
「……」
　僕が思い付きを伝えた上で目配せをすると、サルバとギルド長が互いに顔を見合わせた。やがて、決心がついたのか、「どうやら、それしかなさそうだねえ……」とギルド長が呟いた。
「となると、後は証拠のでっち上げと偽レミュールの身柄確保だね」
「ですね」
「リーセン子爵との繋がりに関してはギルドナイトが元々捜査をしていからね。そっちにそのまま急がせよう。レミュールの身柄は……」

「……」
「……」
「アル坊あんたがやんな」
「え？」
「やっぱり」
　来ちゃったか。
「アルタがやるのか？」
「僕だけじゃなくてサルバもだよ」
　当然だけど。
「な、何でアルタが」
「確かに、これは本来ギルドナイトの管轄なんだけどね。いくらギルドに人間がそれなりに居るとはいえ、貴族の邸宅に踏み込んで殺しを、それも相当の手練れを相手に狭苦しい室内で出来るのがアル坊くらいしか居ないのさ」
「……」
　ギルド長の説明にサルバがバツと振り返って来る。僕はそれに肩を竦めるだけにする。僕しか居ないかは置いておいて、少人数の手練れによる強襲しか手が無いのは事実だ。事がばれると困る以上、大っぴらに人数を送り込むわけにもいかないし、少人数で

大量の家人を相手にする必要もある。
　正直、これまでに何回かギルド長から聞かされた話なんだけど、事実かどうか分からないし、態々出張る必要も感じなかったから、何時もは断っていたんだよね。実際、今までは特に問題なくやり過ごせていたみたいだし。けど、今回はサルバの事もあるしね。
「……すまん」
　何となく、事情を理解したのか、サルバが押し殺したような声で謝罪してくる。んー、「まあ、気にしなくて良いよ。一応サルバの身柄を引き受けた時点で、これくらいは織り込み済みだから」
　流石にここまでは想定していなかったけど、許容範囲と言えば許容範囲。
「だが」
「悪いと思ってるなら、きっちり役に立って。それが一番助かるから」
「……」
　一瞬、驚いたように硬直したサルバは、直ぐに決心を付けたような表情になって強く頷いた。
　そんな僕とサルバを見比べたギルド長は「決まったね」と呟いて立ち上がった。
「一眠りしたら直ぐに出発しな。ここからは時間との勝負だ」

「了解です」
「……」
ギルド長に礼をして退室すると、直ぐにギルド長室に鈴の音が響いて、ギルドナイトが数人足早に部屋に入って行った。
「んじゃ、行こっか」
「ああ」
頷いたサルバが、きいきいと軋む乾燥した床板を歩く足を不意に止めた。
「サルバ？」
「すまん」
振り返ると、俯いたままのサルバがか細い声で、そう漏らした。んん？
「何が？」
「いや、俺の事考えて、受けたくもない仕事受け持ってくれただろ」
「んー、そこまで大袈裟な話じゃないよ？」
殆ど気まぐれに近いし。
「だが」
「どうしても気になるなら貸し一つね」
「……」

何時までも納得し無さそうなサルバにそう伝えると、少し迷った様子のサルバは小さくこくりと頷いた。

「さ、それより直ぐに準備に取り掛かって。夕方にはギルドに集合して出発だから」

「ああ」

頷いたサルバに背中を向けながら、ふとさっきのギルド長の言葉を思い出していた。

―普段のアル坊なら、本当にさっさと帰りかねないからね―

（……確かに、何でこんな事同意したんだろ）

何故か耳に残った疑問符に首を傾げながら、僕は今日のお昼ご飯を何にしようか考えたのだった。

十四

空全体が橙色に染まり掛けた頃、僕がギルドに向かう通りに入ると、長く延びた一条の影が僕の体を舐め上げて来た。その筋を辿ってみると、先に着いていたらしいサルバがギルドの壁に背中を預けながら、ぼんやりと空を眺めていた。

「お待たせ」

「ん？　おう」

声を掛けると、視線を下ろしたサルバがひらりと手を振った。割りと長い時間そうしていたのか、少しだけ癖になった前髪の隙間から、少しだけ微笑んだ様な目が見えた。

「遅かったな」

「少し、準備に手間取ってね」

首をかしげるサルバに肩を竦めて返しながら、僕は軽く剣を叩いて見せる。

「なんだ、ガタが来てたのか？」

「そこまでじゃなけど、この前結構人を斬ったからね」

一日に斬った人数としては多いと言えば多いし、これからの事を考えれば、準備しておくに越したことはないからね。

「サルバは大丈夫なの？」
「ああ。俺の方は何時も通り少しぱなしただけだからな。メンテはちょちょっとやって終わりだ」
「そ」
じゃあ、問題ないか。っと、
「それじゃ、出発しようか」
「おう」
頷いたサルバを連れて、僕は元来た道を歩き出す。今から出発すれば、丁度深夜にレミュール男爵夫人邸に着く筈だ。
「はてさて、どうなるかな……」
そんな事を呟きながら、僕は少しだけ目に入った夕日の明かりに目を細めたのだった。

◆

予定通り、レミュール男爵夫人の邸宅に着くと、ロハグで傾きかけていた陽は既に落ち、近隣の民家も竈門の火を落とし終えていた。

「……」

時折、虫の鳴く音やそよそよと木々を撫でる風の音の中を、ぽちゃりと響く水音がアクセントになる中、僕とサルバはレミュール男爵夫人の邸宅から少し離れた森林部から、目の前の広がる光景に目を細めていた。

「でかいな……」

隣で銃の感触を確かめていたサルバが思わずといった風に呟く。

「だね」

その言葉に、僕も同意を込めて頷いた。

初めて訪れたレミュール男爵夫人の屋敷は暗がりの中ですら一目で豪邸と分かるそれだった。世の中に、所謂富豪や名士、或いは貴人なんてのは腐る程居るものの、この規模の邸宅を所有しているのは流石に数が限られている。勿論、地方部である事ゆえの地価の安さもあるだろうとはいえ、それを割引いてみても、レミュール男爵夫人の身代と比較して明らかに分不相応だ。端的に言って、普通の男爵家では有り得ない。つまり、

「ハップルカ伯爵が馬車の中で言っていた〝愛妾〟って言葉って本当だったみたいだ

ね」

　この邸宅は確実にハップルカ伯爵の肩入れによってレミュール伯爵が所持するに至ったと見て良いだろう。僕の言葉にサルバも「だな」と頷く。が、直ぐにコテンと首を横に倒した。ズレた前髪の間から覗く黄色い右目と視線が重なる。

「どうかした？」

「どうかしたって程でもねえんだけど」

「うん」

「ここまで堂々とクソでかい家構えていて、伯爵様の愛人だって事がバレないなんてあるのかと思ってな」

「ああ、それね」

　はいはい。

「まあ、貴族の自宅を訪れるのなんて、基本的には同じ貴族か貴族の相手を専門にしている商人くらいだからね。貴族の相手なんてしている商人はこういう時の対応は心得ているだろうし、貴族はそもそも数が少ないからね」

　多分、この辺は貴族の絶対数が多い帝都でも大きくは変わらないと思う。まあ、あっちは物価が高いせいで、そもそもこんなだだっ広い豪邸なんて立てようとしたら、それ

こそとんでもないお金になっちゃうんだろうけど。後は単純に土地が広すぎて、行き来するだけで時間がかかりすぎるっていうのもあるんだろうけどね。物理的な距離と情報的な距離は基本的に比例する訳だから。

「リーセン子爵はどうなんだよ？」

「多分なんだけど、意図的に誰かが握り潰していたんだろうね」

サルバの疑問に、僕は今のところ思い浮かんだ回答をする。

「結局、貴族様なんて、自分で遠出するにもそれなりに手順が必要になるからね。まして、一地方の二番手なら猶更ね」

「ふむ」

まあ、それだけかと言うと確信は持てないけど。

「誰がって言うのは分からないけどね。例えばレミュール男爵夫人との取次ぎを命令されたリーセン子爵の家来の可能性もあるし、或いは間に入ったハップルカ伯爵の手によるものかもしれないし」

「可能性は無限にある訳か」

「そーゆーこと」

ぼやくサルバに僕は頷いた。

（だけど……）

答えは出せない疑問だったけど、サルバは良い所に疑問を持ってくれたと思う。

今、この場には都合四人の指し手が居た。一人は既に死亡したハップルカ伯爵、一人は愛人のレミュール男爵夫人、一人はリーセン子爵で、一人はあの男装騎士だ。この中で、誰がどの程度の範囲にまで支配力を及ぼしていたのかというのは、過去に四人の関係がどのような状態であったかを判別する上ではとても役に立つだろう。……

「まあ、最終的には全部リーセン子爵におっ被せるだけなんだけどね」

「身も蓋も無いな」

はっはっは。それこそ今更だよね。

一頻りふざけ終えた僕とサルバは、互いに肩を竦めると改めてレミュール男爵夫人が文字通り自分の身体で稼いだ邸宅に目を向ける。

この屋敷に至るまでの民家と同様に屋敷内は既に火が落ちているものの、平民の家屋とは違い、所々にかがり火らしき灯が見える。そして、その揺らめきを見る限り、少なくとも数人の夜番が交代で見回りをしているらしかった。

「じゃ、行こっか」

そこまで確かめた僕は軽く伸びをして、元伯爵の別荘を指差す。

「おう」

頷いたサルバも前髪の奥から邸宅を睨みつけているのだろう。僕達の間に、俄かに真

剣な空気が広がった。

「案外簡単に済んだな」

レミュール男爵夫人の邸宅への侵入を完了させると、ふぅという溜息と共にサルバが辺りを見回しながら呟く。警護の数が思いの外多くて、屋敷に取り付くまでは少し時間が掛かったものの、中に入ってしまえば部屋の多さもあって、それなりに楽に移動できる筈だ。配備できる人間の数にも限度があるしね。まあ、問題は、

「何処に本人が居るのか分からない事なんだけどね」

「それな」

僕の言葉に、サルバも顔を顰める。貴族様の邸宅なら、間取りから目星がつくとはいえ、今のレミュール男爵夫人（偽者）がとなると、ちょっと断定できないのが面倒な所だ。

「ま、どうせ単純な所から調べるしかないんだけどね」

一先ず、二階の奥からかな。それじゃあ、

「サルバ、これ」

「んお？」

僕は腰に差していた片刃剣のうち、短刀の方をサルバに渡す。

「アルタ？」
　不思議そうに首をかしげるサルバに、「護身用」と伝える。
「刃物、持ってないでしょ？」
「……あ」
　僕の指摘に、サルバは「やべ」って顔になる。まあ、仕方ないよね。普段はこんなことないだろうし。
「銃じゃバレちまうもんな……」
　ばつが悪そうに「ありがとな」と言いながら、サルバは何時でも抜けるようにと、僕の短剣の鯉口を切った。
「悪いな」
「気にしなくても良いよ。僕も今の今まで忘れてたし」
　サルバに肩を竦めて返しながら、僕の方も片刃剣を何時でも抜けるように準備する。
「危なくなったら、何時でも斬って良いから、兎に角躊躇わないようにね」
　そして、いよいよの出発を前にサルバに最後の注意をする。
「良いのか？」
「うん」
　驚いたように唇を尖らせるサルバに、僕は首肯を返す。

「彼等の身元を保証する貴族様が、そもそも存在しないからね」
「おい」
だって事実だし。
帝国の人間は基本的に全員が帝国、即ち元老院の所有物という考えだ。同時に、帝国の所有物という扱いを失った時点で人間として扱われなくなる。なので、この屋敷の人間がもし襲い掛かってきた場合、あの男装騎士、つまり、貴族ではない別の者に従っていると見なされる。つまり、人間ではないという扱いになる訳で。
「まあ、実態は兎も角、何人やっちゃっても問題ないから、自分の身の安全を第一に動いて大丈夫だって事だけは覚えておいて」
じゃないと、無駄に怪我をした後じゃ遅いからね。場所も人数も考えたら、僕としてもサルバを見捨てざるを得なくなる可能性があるし。流石にそれは避けたいからね。
「……了解」
「？」
一瞬停止したサルバが、頷きながら何故か珍しいものを眺めるかの様に首を突き出してきた。どうかした？
「いや」
んん？

「お前が他人を見捨てるのを避けたがるなんて、明日は槍でも降るのかと」
「はっはっは、この野郎」
「ぐへ」
お腹に一撃をお見舞いしたら、サルバが大袈裟に身体を折った。
「一応、曲がりなりにも、そこそこ組んで過ごしたし、無意味に失うのは避けたいってのは人情じゃない？」
「お前が人情とか」
あ、鼻で笑われた。……まあ、その通りか。
「じゃあ、そろそろ行こうか」
「おう」
頷いたサルバが辺りに警戒心を巡らせたのを見て、僕はすんと廊下の匂いを嗅いだ。辺り一面に立ち込める、質の良い香のそれは、やや甘ったるく、明らかにそういう事を目的とした屋敷の中で微かにだが、腐った血液の様な……要するにダンジョンの臭いが感じられたのだった。

屋敷の中を歩きながら、僕とサルバは念のためもあって、一部屋ずつ中を確認しなが

ら上質な絨毯の敷かれた廊下を進んでいく。幸い、足回りの材質が羊毛な為か、普通に歩いていても殆ど音らしい音が漏れる気配はない。後は、窓ガラス越しにちろちろと流れてくる松明の灯にだけ注意をしておけば、比較的安全に歩を進めることが出来ている。

（……次の扉開けるよ）

（おう）

一室一室が大きいからか、比較的長い間隔で連なるドアの前で、隣のサルバに目で合図を送ると、僕の短刀を握ってこくりと頷いて来る。さっきから何度か繰り返されたやり取りだけど、運が良い事に普段拳銃だけを使っている割には、サルバの短刀の扱いはある程度様になっているように見えた。

「……」

音を立てない様に慎重に真鍮製の取っ手に手を掛ける。そして、ゆっくりとそれを捻ると、僅かに開いたドアの隙間から流れ出てくる空気に鼻を向ける。

（人は……居ないね）

人間特有の臭いが無い事を確かめて、もう一度サルバに合図を送ると、同時に僕達は室内に滑り込んでいた。

「ここは……」

「書斎だね……」

　室内一面に備え付けられた本棚と奥に置かれた大きなテーブルは傍から見ても、一目で何の部屋であるかを認識できる程度には、如何にもな拵えになっていた。ただ、

「随分と散らかってるね」

「だな」

　その両方の戸棚から取り出された書籍や記録の類が、部屋の主の玉座である書斎机の上のみならず、本棚の上や果ては廊下同様上等な絨毯の上にすら開かれたまま晒されているのだ。

「サルバ」

「ん？」

「少し、この部屋を調べてから動くよ」

「良いのか？」

「ちょっと、気になるところがあるからね」

　首を傾げるサルバに手を振って、僕は一先ず机の上に広げられた帳簿類と見られる紙を手に取る。

「気になるところっつーと？」

「今のこの部屋」

「？」
「散らかしたのは誰だと思う？」
「そりゃ……」
　隣から帳簿を覗き込んできたサルバがはてと動きを止める。そうなるよね。
「まず、男爵夫人は有り得ないよね。彼女はハップルカ伯爵の愛人でしかなかった。領地経営の知識なんて不要だし、こんな大掛かりな部屋は不要だ。彼女に必要なのは、少しでも深く長くハップルカ伯爵の気を惹き続ける事であって、こんな部屋よりも上質なバスタブや美容品の類、或いはセックスの技術の向上の方がずっとずっと価値がある」
　娼婦と同じで性行為が仕事みたいなものだからね。
「勿論、書類仕事が不要って事は無いんだろうけど、彼女の本業（性行為）を考えれば、あったとしても多少のサインくらいだ。そうなると、この部屋の設備は明らかに過剰だし、使ったとしてもこんなに散らかる事は有り得ないよね」
「使用人はどうなんだ？」
「確かに、領地経営を任される代官は居るかもしれない。ハップルカ伯爵から派遣された人間なんかも居ない訳じゃないだろうしね。けど、そっちも多分ないよね」
「つーと……」
「曲がりなりにも使用人だよ？　仮に主人が普段から顔を出さない部屋だとはいえ、こ

んなに散らかしっぱなしで居るって事は無い筈だ」
　業務中は兎も角、少なくとも夜になれば一度片付けるのが普通だと思う。
「んー……あ！　ハップルカ伯爵はどうだ？」
　少し考えたサルバがぱっと思い付いた様に人差し指を立てた。
「うん、僕も最初にそれを考えたんだ」
　レミュール男爵夫人には分不相応なこの書斎でも、ハップルカ伯爵が使うのであれば極めて適切な設備に見える。実際、この書類を見ていると、この部屋の本当の主人がハップルカ伯爵である証拠は直ぐに見つかった。
「つーと？」
「ほら、ここ」
　サルバに見易いように、手に持った書類を少し下げて指差すと、書き込まれた中身を見てサルバも少しだけ驚いたように前髪を揺らした。
「マジか」
「マジみたいだね」
　サルバの反応も理解できるよ。まさか、愛人の家で自分の領地の財務の管理までやってたなんてね。
「けど、僕達にとっては好都合な情報でもあるね。それだけ、ハップルカ伯爵とレミュー

ル男爵夫人の関係が深かったって事だから」

単なるお金と身体だけの関係だったら、此処まで無防備な事はしない筈だ。少なくとも、リーセン子爵という政敵を抱えている身で、此処まで迂闊な事をする可愛げがある伯爵には見えなかったし。

「じゃあ、やっぱあの伯爵で決定なんじゃ」

「と、思ったんだけどさ」

勢い付くサルバに、僕は待ったを掛ける。

「ハップルカ伯爵があの馬車で何て言っていたか覚えてる？」

「そりゃ……」

僕の確認に応える様に振り返って、口を開きかけたサルバが「あー……」と納得ともつかない声と共に呻いた。まあ、そうなるよね。

―レミュールの奴が私と会いたがらん―

ハップルカ伯爵が死んだあの日、飼い犬に手を噛まれた様な表情で不快気に吐き捨てられた言葉から察するに、正確な数字は分からないけれど、ある程度の期間この屋敷に踏み入れられなかった筈な訳で。その長期間をこんな散らかったままにしておく愛人が居るかというと、ちょっと断言はできないと思う。まして、あの狸染みた雰囲気の伯爵様だ。いくら自分が全てを握っている相手とはいえ、自分の領地経営の書類の処理を

この部屋ですることはあっても、態々それを散らかして帰る程不用心とも思えなかった。

「まあ、単なる杞憂で、ハップルカ伯爵が散らかしっぱなしなタイプって可能性も無きにしも非ずな訳だけど……」

そんな事を口にしながら、読み終わった分を机に戻して、次の書面に移る。……、

（内容的には不審な点は皆無か……）

流石に全ての書類に目を通すことは出来なかったものの、凡そ中身を見る限り、その記述内容はレミュール男爵夫人の領内の税金や人口、そしてダンジョンの推移に関する内容で、ごくごくありふれた、貴族としては最も一般的な内容のものばかりだった。これはつまり、そういう事かな？

「そろそろ、出ようか？」

「もう良いのか？」

「うん」

サルバに頷き返して、僕は机の上にあった資料の類を適当に放ると、軽く最後に辺りを確認してから書斎の出口に向かう。と、そこで隣のサルバがこっちを観察するように少しだけ立ち止まったのだった。

「……」

「？　どうかした？　サルバ」
「いや、その様子だと何か分かったみたいだなと思ってな」
「そう？」
　そんな顔してたかな？　……ま、いっか。
「まあ、そうと言えばそうだね」
　むしろ、正解だし。
「さっき上げた、この部屋を使っている人間の候補だけど、もう一人居るよね？」
「ん？　……それって偽者の方か？」
「そうそう」
　偽者のレミュール男爵夫人なら、この部屋に出入りするのも自由だろうだからね。
「けど、何のためにだ？　何も変な所は無かったんだろ？」
「そうだねえ」
　冒険者上がりの人間が目を通すにしては、金品の目録とかみたいな短絡的な書類は皆無で、税収とかそっち方面の資料ばかりだったからね。けど、
「逆に、それが答えなのかもしれないよ？」
「つーと？」
「要するに、偽者はそこに散らかっている物そのものを見たかったのかもって事」

あの書類は、短絡的に金銭を得ようと考えたら何の役にも立たないけれど、逆に長期的に自分の領土を管理するためには決して欠かせない類の代物だった。つまり、
「ハップルカ伯爵の支援を受けない、或いは受けることが出来ない未来を想定してたのかもね」
「それは……」
「うん」
僕の出した答えを察したのか、サルバが小さく絶句した。
「あの男装騎士は初めからハップルカ伯爵の殺害を考えていたのかも」
「……」
「断言はできないけどね」
あくまで僕の推測ながら、状況証拠だけ見ればそれなりに妥当性があるようにも思う。
（もし、そうだとしたら……）
「とっても都合が良いね」
「良いのかよ？」
「うん、だって、リーセン子爵におっ被せやすくなるじゃん？」
むしろ、もっと積極的にハップルカ伯爵を排除しようとしてほしい。その方が後々ギ

ルド長への報告も楽になるし。どんどんハップルカ伯爵を殺そうとして片っ端から襤褸を出してもらいたい。

「なあ、アルタ」

「ん？」

何？

「お前って、やっぱり人でなしだわ」

「はっはっは」

かもね。

余りにも真顔でサルバが言うせいか、つい噴き出してしまった僕に、サルバもサルバでおかしくなったのかくっくと喉を鳴らす。真夜中、それも貴族の屋敷で、暗殺しに来たのかふざけに来たのか、此れじゃ分からないね。

「別に両方で良いんじゃねえの？」

「それもそうだね」

そして、どちらともなしに、僕達は笑いながらハップルカ伯爵の書斎を出たのだった。

改めて屋敷の中を歩き始めると、次第に隣のサルバの表情が考え込むようなものに

なっていくのを感じた。んん？
「サルバ？」
「んお？」
「大丈夫？」
「っ……」
　僕が確認すると、一瞬虚を突かれたような顔になったサルバがぴくんっと肩を跳ねさせる。本当にどうしたの？
「……」
　少し迷った様子のサルバが「いやな」と考えながらといった風に頬を掻いて口を開く。
「俺も一応少し前までは普通の一般的な冒険者だったわけだ」
「まだちんちんが付いていた頃ね」
「心のちんこは失ってねえから……」
　ま、女湯覗く元気はまだあるしね。
「で？」
「当時だったら、貴族様に逆らうなんて考えても居なかったわけだ」
「ギルドの洗脳が上手くいっている証拠だね」
「それをギルド所属のお前が言うのかよ」

「ギルド職員だからこそじゃない？」
　普通に冒険者してたら、ギルドが冒険者を教育する役目も負っているなんて知らないだろうしさ。
「よし、話し戻すぞ」
「どうぞどうぞ」
「当時、貴族に剣や銃を向けるなんて思いもしなかった俺としては、平然と貴族に剣を向けたり殺害したり簒奪するってのはこう、常識外の話な訳だな」
「常識が広がって良かったね」
「どちっかっつーと、壊れてるっつの」
　はっはっは。
「んで、そんな常識壊しやがった人間二人の内の一人がよりにもよってお前な訳だ」
「感謝してくれても良いよ？」
「おう、何処をどうすればそうなるんだよクソ野郎」
　二回目のはっはっは。
「で？」
「これから戦う奴がどんな人間かは分からないけどな、お前と同じダンジョン閉鎖士で、お前と同じ様に貴族を殺すことに躊躇の無い奴だとしたら、相当厄介だと思ってな」

「成程ねえ」
だから、この後の戦いを考えて緊張していたと。うーん……、
「ま、最善を尽くして相手を殺せば後はなる様になると思うよ？」
もしくはなるようにしかならないとも言うけど。
「雑だな」
僕の答えに、サルバが苦笑気味に肩を揺らしたのだった。

そして、不意に鉄と腐臭の綯交ぜになったそれ（ダンジョンの臭い）が、濃密に漂ってきたのはその瞬間だった。

「！」

殆ど反射的に隣のサルバを突き飛ばすと、その後ろ髪がゆらゆらと揺れていた辺りを銀色の閃光が瞬き疾ったのだった。

「ちっ!!」

廊下を転がったサルバが僕の方に銃口を向けてくるのを見ながら、僕も愛用の片刃剣を引き抜く。そして、サルバが僕に向けて発砲するのと同時に、僕は夜光を反射する銀色の槍が突き出たドアに向かって、剣を突き立てた。

「「ぐ……」」

くぐもった呻き声が三つ。同時にどさりと崩れ落ちた音の方を振り返ると、奇麗に眉間を撃ち抜かれた死体が二つ転がっていた。

背後の二つが既にこと切れたのを確かめると、僕は直ぐに最後の一つが転がっているであろう一室のドアを蹴り飛ばす。

「……」

蝶番がはじけ飛んだ重い木製のドアを踏みしめると、念のため、下敷きにした人形に片刃剣を突き立てる。首を貫かれた割に、死体は声一つ洩らさなかった。

「お見事」

そして、止めを刺し終えた瞬間、部屋の中から無機質な声音でそんな言葉を投げかけられた。

一聞きで少し年嵩の女性の物と分かるその声に顔を上げると、案の定妙齢の、黒を基調とした衣服に白いヘッドドレスやエプロンがアクセントとなっている、分かりやすくメイド然とした格好の女性が居た。

「うえ⁉」

但し、右目だけが伽藍洞の……と修飾が付くが。

「……」

定型的な一礼から顔を上げたそのメイドさんの顔を見て、僅かに漏れたサルバの悲鳴を聞きながら、一先ず目の前の片目の彼女の言葉を待った。

「驚かないのだね？」

「まあ、何となく理由は把握できているので」

芝居がかった、隻眼を除けばどちらかと言うと女性的な姿をしているメイドさんらしからぬ口調に確信を深めながら、僕は軽く肩を竦めて見せた。

「さっきの襲撃やハップルカ伯爵の馬車を襲った人間を考えれば、貴女がどういう風に

それをしていたのかは何となく予想がつきますし……ね、男装騎士さん？」

もう、此処まで来たら知ってることを隠すのも無意味だし、半ば確認込みでメイドの人形に水を向けてみる。

「……」

果たして、彼女から返ってきたのは、ピクリとも動かない表情の中で唯一口元だけが力任せに釣り上げられたかのような歪な作り笑いだった。

「気持ち悪っ」

「控えめに言って不気味だね」

「済まないね、どうも無理のない範囲で操作を行うと、どうしても不要な部分の動きが鈍くなってしまうみたいなんだ」

そう言って、僕達の反応に対して気を悪くする風でもなく、或いは本人の自己申告を信じるのであれば操作の都合らしい。

（はてさて……）

「いや、それははてさてって感じじゃねえだろ」

「？　そう？」

何故かサルバに変な顔をされた。

「……幾ら感情を失った人形とはいえ、躊躇なく両腕を斬り落としてくるとはね」

「ほら、対話の始めは握手（丸腰アピール）じゃないですか。これも握手みたいなものですよ」
　普通普通。
「それを言うなら、君も武装解除すべきでは？」
「僕は別に対話する必要を感じていないので」
　だからお断り致します。
「で、武装解除も一段落したので、言い残したいことがあるのであればどうぞ」
「技量は兎も角、この性格か……いや、尖兵としては此れくらいの方が……」
　何か、物凄く物騒な事を考えられてる気がする。
「お前の思考回路程物騒じゃないだろうから気にするな」
「失礼な」
「間違ってたか？」
「ところがそうでもないんだよね」
　はっはっは。
「んんっ、話を戻していいかな？」
「適当に聞き流すのでお好きにどうぞ」
　それよりも何処に居るのかな。多分、此れまでの傾向を見る限り、この家から出ているとは思えないんだけど……

「では……君達二人を雇いたい」
あ、これは素直に有難いね。
「対面で話すのであれば思案しましょう」
「……」
返答を求められるよりも先に、こちらの要求を突き付けると、メイドは口を開いたまま、ピタリと停止した。さてさて、
（おい）
（気にしなくて大丈夫。どうせ建前だから）
結局、最後は斬るんだし、空手形は使えるだけ使っちゃおうってね。相手の要求は唐突ではあったけど、何となく意図するところは分かるし、狙いを予想すれば対面しない訳にもいかない筈だからね。後は、相手が首を縦に振るかだけど……
「良いだろう。彼女に着いてきてくれ」
ま、こうやって声を掛けるって時点で、僕達を口説き落とす自信があるって事だし、お手並み拝見といこうかな？

◆

両腕の無いメイドさんは、その部屋のドアの前に立つと、まるで糸を切られた操り人形の様にぐにゃりと力を失い、脚と胴を絡ませながら倒れた。ふむ……、
「生物としての生命活動を終えると、維持できなくなるのは朗報だね」
「それを顔色一つ変えずに朗報と断言できることに戦慄するわ」
そうかな？　……ま、いっか。
「それより、入るよ？」
準備は良い？
「おう」
頷いたサルバが、カチリと拳銃の撃鉄を起こす。それを合図にして、僕は目の前に置かれた大きな扉を押し開いたのだった。

「トウトウ村以来の再開だね。ようこそ、勇敢なるダンジョン閉鎖士諸君!!」

目に飛び込んで来たのは、大仰な仕草で抱擁するように僕達を迎える暗殺対象
両腕を翼のように開き、歓迎の声を上げている
身に纏った煌びやかな赤いドレスは、トウトウ村では気付かなかった彼女の意外な程豊満な肉体を強調しており
下ろした髪は冒険者として立っていた時とは正反対に、艶がありながら豪奢に形作られ騎士ではなく貴族の令嬢然としていた。
「うわぁ……」
何て言うか、とってもきらきらしていた……それも、途轍もなく。
「凄いな……」
「けばいね」
トウトウ村で見た時とは似ても似つかない姿に正直な感想を言ったら、サルバがもの凄く何か言いたげな様子で振り返ってきた。何？　言いたいことがあるなら聞くけど？
「……いや、まあな」
けど、特に異論はなかったらしく、直ぐに正面に向き直った。
「さ、掛けてくれたまえ」
「いえ、不要です。それより話を進めてください」

時間は有限だし、何かしら話したいことがあるんでしょ？
「おいおい、そんなに急かさないでくれ。レディを待つのは男性が備えるべき最低限の度量だ。そんなに事を急いでは女性に嫌われるぞ？　パートナーの君もそう思うだろう？」
「俺？」
「……」
「……」
一瞬虚を突かれたサルバと僕は顔を見合わせる。女性……いや、まあ、女性に見えると言えば見えるのは仕方ないか。正直、普段が普段だから意識してなかったけど、周りから見ればそうだよね。
「……俺はそういうのはねえよ。つか、男は女を待つのが当然って思考の方が理解出来ねえし」
「ふむ。女性の方が男性に従うべきという旧来の考え方も確かに無粋極まるものだからね。だが、君はとても可憐なレディだ。少なくとも、隣の彼に目一杯吹っ掛けて当然だろう。それで隣の彼が付いてこれなくなれば……まあ、そこ迄の男だったという事だろうね」
「……」

納得したように頷きながらにこやかに微笑む彼女から、小さく舌打ちをしたサルバは不機嫌そうにプイッと視線を外すと、話しかけるなというオーラを発した。まあ、さもありなん。

「お前とそっくりだな。こう、人の気も知らず自分の考えだけでしゃべるところとか」

あれ？　……ま、いっか。

「それで話が終わりですね。じゃあ「分かった分かった。本当にせっかちだね、君は」

剣を抜くと、目の前の彼　女（偽レミュール男爵夫人）は芝居がかった仕草で両手を上げて、妙に馴れ馴れしい口調で微笑んだ。

「あまり女性との会話にも慣れていないようだし、手短に済ます事としよう」

まあ、進むなら何でも良いけど。

「先日の馬車の件といい、今日のこの屋敷への来訪といい、君達はとても腕の立つダンジョン閉鎖士の様だ」

「はあ」

「なので、私としては君達の腕を見込んで勧誘をしたいんだ」

「何故です？　単純に戦闘に秀でた人間なら、別に僕達ギルド傘下の人間に手を出す必要もないでしょう？」

漸く出てきた、意味らしい意味を持った言葉に疑問を投げかける。このまま斬っても

良いんだけど、動機くらいは集めておいた方が良いかな？
「質問に質問で返してはいけないとギルドには教育されなかったのかな？」
「疑問も解消せずに是非を決めるなとは教育されましたね」
うん、話す気が無いならさっさと斬っちゃうべきかな。
「……ちっ」
あ、一瞬だけど露骨に舌打ちされた。これは、うーん……
（一言で飛びつくと思っていた？）
（分からねえ。……そうにも見えるが、何でそこまで自信満々だったのか分からんし）
隣のサルバを見ても、サルバもサルバで困った様に首を傾げた。
「何、ダンジョン閉鎖士というのが重要なのさ」
そうこうしているうちに、表情と思考の取り繕いを終えたのか、再びにこやかな笑みを向けてきた。ふむ、ダンジョン閉鎖士が重要ねえ……
「もう気付いているだろう？　彼らが何なのか……ね」
「……」
そう言って彼女が指示したのは先ほどから一室を囲ったままピクリとも動かない使用人達。メイドや執事といった風体の彼ら彼女らはその手に似合わない武器を携えてじっと僕達に目を向けながら佇んでいる。

「これらは全て〝ダンジョン・コア〟の力さ」

そう高らかに宣言した彼女は、その力を誇示するかのように両腕を掲げてにんまりと笑みを浮かべる。

（まあ、だろうね……）

正直、宣言自体には驚きは無かった。この奇妙な現象が火、水、土、風の四大元素からなる魔法の類では際限が出来ない以上、原因は〝ダンジョン・コア〟以外に有り得ない訳で。

「これはトウトウ村で手に入れた〝ダンジョン・コア〟による現象だが……すでに全員私の支配下にある」

そう言って、彼女が指をぱちりと鳴らすと、使用人が全員、僅かな乱れもなく一礼をする。まるで観劇のエンディングか何かの様にすら思える光景だった。だけど、トウトウ村の〝ダンジョン・コア〟か……

（予想していたこととはいえ、あの規模のダンジョンからとれるコアでここまでの事が出来るなんてね）

〝ダンジョン・コア〟による現象は無作為っていうのは知識としては知っていたけど、やっぱり実際に見せられるとその暴走具合に少なからず驚きを覚える。サルバの様な一人だけ性別が変わるものから、此処まで大きな被害を出す物まで。それも、状況を

見る限り法則性が全くない。
「これほどの力、これほどの事象。……それを起こすだけの力が〝ダンジョン・コア〟にはある」
「はあ」
（まあ、だからこそ、帝国と元老院は〝ダンジョン・コア〟を御禁制に指定して、使用者を罰する法律を制定している訳だろうからね「ならばっ!!」
パンッと元男装騎士が強く手を打つ。
「この〝ダンジョン・コア〟を採取できる君達ダンジョン閉鎖士を勧誘したいのさ」
「……」
うーん、この……。
（核心について話す気はとことん無いみたいだね）
（まあ、お前だって信用ならない相手にゲロはしないだろ?）
（そうだね）
多分、これ以上話すことは無いんじゃないかな。となると……
「返答は如何かな?」
「そうですね……」
首を傾げた彼女の前で少しだけ距離を詰める。どうしても、少し遠いからね。サルバ

は狙える？

（いつでも大丈夫だぜ）

よし、じゃあ、斬り込むよ。

視線で合図を送って小さく体勢を変えると……

「その話、受けます」

首を縦に振りながら、僕は下段に下ろした一刀を一息に跳ね上げさせたのだった。

十五

勧誘の言葉に首を縦に振りながら跳ね上げた剣先に、偽男爵夫人（元ダンジョン閉鎖士）の目が丸くなるのが見えた。そこに写った驚愕の感情を見ると、予想していなかったみたいだった。随分と甘い見立てにも思うんだけど、自分の言葉に自信があったのかな？

「くっ!?」

そんな、とりとめもない思考を浮かべながらも、一息で振り抜いた剣先は、しかし、彼女の白い頬を浅く斬るだけに留まってしまう。

「サルバ、撃って」

「おう」

「っ!!」

直ぐに隣のサルバに声を掛けて、追撃の乱射を向けるも、今度は大きく跳び退（ずさ）った偽騎士の跳躍に追い付かず、壁になるように割って入ってきた使用人人形に、弾丸は阻まれてしまう。

「ちっ!!」

「染まったねえ」

柘榴のように頭を弾けさせて吹っ飛ぶ使用人だったものを前に、長い前髪とポニーテールを揺らしながら舌打ちをしてみせるサルバに、そんな感想を持った。

「半分以上、お前のせいだっつの」

「そう？」

僕が首を傾げると、サルバが口許を歪めて肩をすくめてきた……ま、いっか。それより、敵の方だね。

僕達から距離を取った男装騎士（ダンジョン閉鎖士崩れ）もどきは、近くに居た人形から長剣を受け取りながら、キッと此方を睨み付けてきた。

「……これが君の答えか」

「俺〝達〟のだ」

「みたいですね」

人垣越しに銃口を向けるサルバ。返ってきたのは「ふん。補佐官風情が」という吐き捨てるような言葉だった。サルバの声は聞く気はない……自分の意に反する言葉を受けとる気がないだけかな？

そんな事を考えていると、偽騎士（元ダンジョン閉鎖士）が横薙ぎにぶんと長剣を一振りする。

「……」

即座に増える人の臭い。気配の元だったバルコニーに目をやった隣のサルバが唐突

に増えた人の数に「うおっ!?」と声を上げた。司令塔になるのはあくまで目の前の彼女一人とはいえ、流石にこの数は始末に悪いかもしれないね。本や掃除用具を落とされるだけでも、一呼吸の差が致命的になる近接戦では十二分過ぎるほどに威力を発揮する。となると……、

「サルバ」

「ん？　ぬぉっ!?」

首を傾げたサルバの腰に手を回して、小柄な割には肉付きもあって重い身体を軽く足宙に放ると、その足元に片刃剣の峰を向ける。

「跳んで」

「！」

意図が伝わったのか、両足を揃えたサルバの土踏まずに剣を宛がうと、「なっ!?」という騎士もどきの声を尻目に、僕は一気に剣を振り抜いた。

「っとお！」

同時に跳躍するサルバ。敵の意表を突けたのも幸いして、吹き抜けの二階の手摺に取り付いたサルバは、無反応の人形数体の眉間に素早く風穴を開けていく。じゃ、僕も動かないとね。

一度鞘に納めた片刃剣を抜き打ちで薙ぐと、二階のサルバが同じく右手の拳銃の引き

金を引く。首無しの死体を横に蹴倒すと、その躯をサルバが蹴落とした穴空きの死体がぐしゃりと押し潰した。次いで身体を返して振り向き様に、剣を振るうと同じくサルバが振り向き様に左手の拳銃を発砲する。

「ギルドの飼い犬があっ!!」

じわじわと剥がれ落ちる肉壁に、騎士もどきの絶叫が上がる。まだ、表情には余裕を浮かべているものの、鋭い視線の内には、ほんの僅かながら、焦燥の色が見て取れた。

（案外、余裕がないね）

手下が何人居ようが、逆に何人死のうが、やることなんて変わらないのにね。

「行け！　人形ども!!」

そんな、彼女の焦りを映すように、手に手に武器を携えた、使用人の成れの果てが無茶な突貫をしてくる。

（あの、冒険者達が彼女の切り札だったみたいだね）

単調な上に稚拙な突進をいなすようにして捌きながら、ちらりと二階を見ると、サルバも同じ感想を抱いたのか、僕とほぼ同時に余裕をもってメイドの一人を射殺している。

「！」

僕の視線に気付いたのか、二階のサルバが前髪を揺らしながら愉しげに口許を歪め

る。
「ギルドの奴隷がっ！　所詮、繋がれている飼い犬ごときに手を差し伸べてやろうと考えた私が甘かったのだ!!」
「はあ」
（勧誘って言ってなかったっけ？）
　実際は施しのつもりだったと。別に、頼んでもいないことを恩着せがましく言われてもなあ……。
「あいつだってそうだ！　矢張、私以外のダンジョン閉鎖士など、信用出来るわけがなかったんだ!!」
　支離滅裂だね……。っていうか、他人の影まで掛けられてるの？
「私を……私と共にリーセンによって命を狙われて、ダンジョンに生き埋めにされそうになったあの日！　共にリーセンに目にもの見せてやると誓ったにも関わらず、この土壇場になって、たかが男爵夫人一人手に掛けることに及び腰になるなど！　矢張、男は腰抜けの見かけ倒しだ！　自分の妻をリーセンに抱かれながら、尻尾を丸めた父と同じだ！　ハップルカ伯爵に負けて、その愛人に手を出すくらいしか出来なくなったリーセンも変わらん!!」
　それは全然別の話じゃない？

まあ、引き合いに出した二人は腰抜けと負け犬だけど、肝心要の論点は犯罪に荷担しなかっただけだし。〝ダンジョン・コア〟に関する犯罪に手を染めてた時点で今更だけどさ。

要するに、リーセン子爵の猟官の際に一緒に殺されそうになったダンジョン閉鎖士補佐が、関係ないレミュール男爵夫人の殺害や、ハップルカ伯爵領に及ぼす被害に反対して、離反したから人形にしたと……。その状態で、よくダンジョン閉鎖士を勧誘しようなんて思ったね。僕も貴女もろくでなしの人でなしなんだけど。ああ、同じ人でなし同士なら、自分が考えた理想の世界に陶酔すると思ったとか？

（ダンジョン閉鎖士同士の間に、交渉の余地なんて、あるわけ無いのにね）

結構、年がいってからダンジョン閉鎖士になったからなのかな？　或いは、自分がリーセン子爵の娘で貴族の血を引いているという自負があるからなのか。どちらにせよ、妙にダンジョン閉鎖士の割りに不純物が多い気がするね。だから、ほら。

「っ!?」

「片手で数えられるまで、手足（人形）を刈られてもごちゃごちゃ口だけ回してる」

結論、欲に目が眩みすぎ……かもね。

「っ～～～～～～!!!」

あ、青筋が浮かんでる。血管切れちゃわない？

「ダンジョン閉鎖士風情がぁ!!!!!!!!!!」
「っと」
追い詰められたと思ったのか、逆上気味に高貴な血筋らしい元ダンジョン閉鎖士が剣を向けてくる。その動きに合わせて、一斉に突進してくる表情のない人形達。万策尽きた……いや、
「アルタッ!!」
吹き抜けの二階から、サルバの声が降ってくる。同時に飛び降りてきた複数の影。
（そっちまで含めての一斉突撃ね）
どうやら、僕を兎に角封じ込める事にしたらしい。
面で突撃してくる地上の出口人形に、同じく面で蓋をしてくる空中の人形。相手は偽騎士が中核であり無事なら何とかなるのに対して、僕とサルバはどちらかだけでも欠けてしまえば戦力は半減だ。
「くっ!!」
同じ答えに行き着いたらしいサルバが手摺に足を掛けて降り注ぐ人形の背中や頭を撃ち抜こうとしてるけれど、一瞬の障害って意味じゃ人も人形も死体もあんまり代わらないしね。
（それよりも）

「サルバ！　下！」
「！　おうっ!!」
意図が伝わったらしく、直ぐにサルバが照準を受ける側の捨て駒から、突進を始めた攻め手側に切り替える。乱射された弾丸に、敵の突撃の威力が半減する。
「ふっ」
その、手薄になった部分に向けて、一息に斬り込みに掛かる。
「なっ!?」
叩き落とした一撃はギリギリのところで受け止められてしまうも、此方が勢いに乗っていたのと、包囲を力任せに突破してくると思っていなかったらしく、虚を突けたのもあって、半、いや、一呼吸分、僕の剣が先んじていた。
火花が散り、ガチッと嫌な音が響き終えると、敵に無理な体勢での鍔迫り合いを強いることに成功する。
「ぐうぅ……」
体重を掛けて、敵の動きを抑え込みながら、最後の一手を思案する。仕込みはしてるけれど、実際どうしよっか？
「……何故だ」
「ん？」

と、そんな事を考えていると、僕の剣の下でぷるぷると細腕を震わせながら歯を食い縛っていた偽騎士（ダンジョン閉鎖士崩れ）が苦悶の表情と共に呻いた。何故って、何が？

「何故其ほどの力があって、ギルドの、元老院の言いなりに成り下がっている！」

……特に理由はないけど、人に雇われるってそんなものじゃない？

「我々、ダンジョン閉鎖士が日の目を見る一歩だ！　見ただろう！　リーセンが爵位を手に入れるために命を奪われそうになった私はあの日、〝ダンジョン・コア〟の力で姿形を変えて、今日まで生き残る事が出来た！　この人形だってそうだ！　トウトウ村の〝ダンジョン・コア〟だ！　たかがC級のダンジョンから手に入れた〝ダンジョン・コア〟ですら、これ程の力を発揮する！　その〝ダンジョン・コア〟を支配できる我々は元老院の言いなりになる必要など欠片もありはしない!!!」

あ、やっぱり、〝ダンジョン・コア〟の不法採掘してたんだね。

「私の元に帝国のダンジョン閉鎖士が結集すれば、帝国だって動かせる！　庶子であっても、帝国貴族の血を引く私なら、それが出来る!!!」

いや、普通に無理じゃない？　彼女がリーセン子爵の庶子だって証明する術がないし、仮に証明できてもリーセン子爵に握り潰されるでしょ。まあ、リーセン子爵とコンタクトを取っていたあたり、その辺はどうにか出来る根回しは済んでたのかもしれないけど、よしんばそうだとして、ダンジョン閉鎖士風情とか自分で言ってなかった？　そ

れがなければ、多少は心に響いたかも……いや、ないか。
（うん、やっぱり、どうでもいっか）
　少し考えたけど、やっぱり、どうでも良いね。地位とかそっちも特に拘りないし……というか、物心ついた頃には、もう今の生活だったしなあ。そういうのは、自我が芽生えた後にダンジョン閉鎖士になった人にぶつけるべきだったね。まあ、僕に自我があるかというと今も微妙かもしれないけどさ。
「……」
「だから、わたっ!?」
「あ、やっと回ってきた?」
　傷が浅かったせいで、ちょっと時間が掛かったね。
「あ……な!?」
「……何やったんだ?」
　ピクピクと痙攣する彼女の姿に、口許をひきつらせながらサルバが上から聞いてくる。
「毒だけど?」
　見ての通りの。分類としては麻痺毒。
「いやまあ、そうかなとは思ったが」

「だろうね」
　むしろ、症状は分かりやすすぎるくらいだし。
「なあ、アルタ」
「んー？」
「お前って……本当に身も蓋もない奴だな」
「誉めても何も出ないよ？」
「誉めてねえよ」
「だろうね」
「おう」
　適当に肩を竦め合いながら、僕は改めて目の前の彼女に向き直る。此れから有ること無いこと押し付けてスケープゴートに……いや、自業自得な部分もあるから、生け贄ではないか。……ま、いっか。その彼女に投げられた疑問の答えに、サルバも少し興味を引かれたみたいだし、答えを口にしておこうかな？
「サルバ」
「ああ」
「僕が何故ギルドの言いなりになっているかって疑問への答えなんだけど、興味ある？」
「あー……何となく予想はつくが、多少は興味あるな」

そ、じゃあ、答えておこうか。
「と、言っても、一言で済むけどね」
痙攣したままの彼女に向き直り、僕は愛用の片刃剣を抜く。
僕がダンジョン閉鎖士になってから、今までこの面倒な稼業を続けていた理由は後にも先にもこれ一つしか無いからね。

「惰性」

「……あ？」
何を言われたのか分からない。そんな表情のドレスの貴婦人（ダンジョン閉鎖士崩れ）の頸を一太刀で斬り飛ばす。絶句したままの彼女の生首が宙を舞うも、サルバはそれには目もくれず、「やっぱりな」と苦笑を浮かべていたのだった。

彼女の表情が変わったのはその時だった。

「サルバッ」
　最初は錯覚かと思った。上にいるサルバも気付いていないし、そんな事が有り得るとも思っていなかった。けど、
　〝ダンジョン・コア〟に有り得ないなんて有り得ない
「あ？」
　僕が咄嗟に掛けた声に、首を傾げるサルバ。けれど、その頃には既に背後に人影が見紛うことなく佇んでいた。
（間に合わない）
　敵の動きも緩慢だけど、それ以上にサルバの反応が鈍い。
「お前だけでも!!」
　鬼の形相になった生首が吠え、一体だけ残ったメイドの人形が何かを振りかぶる。
「飛び降りて！」
「！」

殆ど突き動かされるようにサルバに向かって叫ぶと、たどたどしい仕草で身を乗り出したサルバが手摺に足を取られながら真っ逆さまに墜落してきた。

「っ」

殆ど無我夢中でサルバの着地点に走りながら、一瞬上を見上げて片刃剣を投擲すると、顔面から剣を生やしたメイドの人形の空振った腕から何かが零れ落ちた。

「くっ」

けれど、そんなものに気を取られる余裕もなく、僕は何とか両腕を伸ばした。同時に降り掛かる負荷に、何とか間に合った事を察する。

「!?」

けれど、胸を撫で下ろしたのも束の間、抱え込んだサルバの小さな身体から漂う硝煙の薫りとは違う生臭いそれが、鼻腔を掠めてきた。

(〝ダンジョン・コア〟)

気付いた時には……もう遅かった。

サルバの直ぐ後を追ってきた小さな石ころは悪臭が一段と強くなり、嗅ぐからに励起に入ってしまっていた。避けるには手を引くしかない。けど、それをしてしまえばサルバが勢いが残ったまま床に叩き付けられてしまう。つまり、

(仕方ないね)

選択肢は残っていなかった。
―ははっ―
何処かで、偽騎士の嘲笑が聞こえた気がした気がした。同時に、強烈に充満した糞弁と獣肉と鉄錆の混ざったような悪臭に、僕の鼻は完全に麻痺してしまったのだった。

◆

―ど、どういうことだ、ダリア!?―
古ぼけた酒場の隅で、見覚えのある小柄な少女が椅子を蹴飛ばして立ち上がった。腰に下げたホルスターと長い前髪を揺らして、サルバは目の前の女性に身を乗り出していた。
―どういうも何も、言った通りですけど?―
一方の女性、銀色の長い髪をした僧侶と思われる、十字の刻まれた衣服の女の人が冷めた視線でサルバの姿に鼻を鳴らした。
―そんな、急に……―

―急の何が悪いんですか？　むしろ、急に女性になったのはどっちですか？―

（ああ、これって）

二人の言葉に何となく目の前の光景が何なのかを察する。どうやら、サルバが前に話していた、恋人との別れ話の場らしい。

（どうしようかな？）

別に、見ても今更ではあるけれど、本人の口から聞くのと、勝手にその光景を見るのとでは大分違う。うーん……、

（まあ、流石に見なかった事にして……って）

顔を背けて耳を閉じようとした瞬間、身体が一切動かない事に気が付く。というか、そもそも四肢が無い？

（……仕方ないね）

じたばたしても仕方ないし、可能な限り情報収集に努める。出来ればさっさとこの状況を打破したいんだけど……。

―それは、あのアクセサリーからお前を護ろうと―

―別に頼んでないですし、あの〝ダンジョン・コア〟だって、女になるだけなら庇われる必要もありませんでした―

（あ、何処かで聞いたセリフ）

っていうか、サルバから聞いた言葉、一字一句違わなかったんだ。
（本当にトラウマだったんだね）
というか、完全に効果が不明で命の危険すらあるのに、結果が出た後からよくここまで言えるね。いや、結果主義で話をすれば、言っていることは正しい訳だけど。
―ダリアー―
ぎゅっと唇を噛むサルバとダリア？　の間に、妙に甘ったるい猫撫で声が投げ掛けられた。サルバが振り返ると、身体が引っ張られる様な感覚になり、強制的に僕の視界も酒場の入り口に向けられた。
果たして、そこに立っていたのは癖のある短髪と尖った帽子が特徴的なメイジと、やや軽薄そうな印象を受けるものの、端正な風貌と風采の良さを感じさせるファイターのカップルだった。
（あれが、サルバの元パーティメンバーか……）
資料で見たのと同じ姿だね。まあ、サルバが女になってるし、割りと最近の光景だよね。
―アラン♥―
（ん？）
と、やっぱり、ダリア（サルバの元カノ）が立ち上がるけど、その声が妙に甘ったるい。

―お、おい！―

そのまま入り口のファイターに向かって走り出す彼女に、サルバが咄嗟に手を伸ばすものの、それはすげなく振りほどかれてしまう。そして、

―もう、遅いですよ♥―

ぽすっとファイターの男性に抱き着いたサルバの元カノは、サルバに向けていた、冷淡を通り越して冷酷にすら見える表情が嘘のように、恥じらいと慕情で頬を紅潮させて上目遣いに彼を見上げた。

―な、なな、何をやって!?―

当然、恋人の乱行に悲鳴を上げるサルバ。けれど、その恋人は―見て分からないんですか?―と言わんばかりに冷たい視線をサルバには投げ捨てる。

―見て分からないんですか?―

あ、本当に言った。

―私と彼はこういう関係なんです―

―おっとっと、んむっ!?―

慌てるサルバを鼻で笑った彼女は、抱き着いたファイターの首に腕を回すと、受け止めたその男性の口に自分のそれを重ねて、サルバに見せ付けるように吸い付いたのだった。

―な、なあっ!?!?―

ぐちゅぐちゅと鳴る水音に絶句するサルバ。けれど、そんな恋人の事は知ったことではないとばかりにプリーストは別の男と舌を絡めている。

やがて、どちらともなしにその二人は唇を離すと間に掛かった唾液の橋を僧侶がぺろりと舐め取った。その蠱惑的な仕草と陶酔したような視線がやけに印象的だった。っていうか、一応聖職者だよね?

―分かったら、もう私の前に現れないでください―

そう吐き捨てた彼女に、サルバが追い縋る。まだ、追うのか……、

(本気で好きだったんだね……)

―ま、待ってくれ!―

―まだ何か?―

一方の彼女の方は何処までも面倒臭そうだった。

―俺の悪いところなら改める! この身体だって……―

―この身体だって?―

―この身体だって……今は無理でも直ぐに……―

―直ぐにって何時ですか?―

―……―

それでも、此処までかな。こうも冷水を投げ付けられてたら、流石に押し黙るしかなくなるよね。具体的な答えなんて出せたら、今のサルバは居ないし。

―見てみなさい―

―……？―

プリーストに促されて後ろを振り返ったサルバがはっきりと硬直した。そこにあったのはサルバ達……と、いうよりもサルバを見る目、目、目。しかも、明らかにその色は奇異なものを見るそれだった。

―今のあなたは単なる異常者です、自称男？　誰も信じませんよ―

（まあ、そうだよね）

僕はサルバは男性って感覚だけど、この辺は会話をしているからだし、何も知らない第三者からは女性にしか見えないよね。

もう近寄るな

そんな、強い拒絶の見える言葉に再びサルバが俯く。ぎゅっと噛んだ唇の端から、つっと紅い鮮血が零れ落ちていた。

（……）

―改めて言いますが、身体が女の男とか気持ち悪いので、絶対にこのパーティに近付かないでください。貴方と交際していたことも絶対に口外しないでください。本当に私の人生で最大の汚点です―

そう吐き捨てて、今度こそ消えたサルバの元恋人の背中。同時に全身から力が抜けて、視界がぐるんと暗転したのだった。

「おえええええええええええええ!!!!!!!!」

直後に響いたサルバの声と、びちゃびちゃという音、そして、漂ってきた酸っぱい臭いに、急速に意識が覚醒する。

「サルバ？」

振り向いた先には、胸を掻き毟って胃液を吐き出す小さな背中があった。

「っ」

近寄ってみれば、ひゅーひゅーとした荒い呼吸音。明らかに身体の制御が利いていない。……あ、

（もしかして、僕の過去でも見てる？）

先の光景から推測すると……まあ、そうなるよね。

「あんまり、健康に良いものじゃないよね」

僕の記憶も、今の嘔吐も。ていうか、普通にダメな反応だよね、これ。……もし、これが周囲の人間の記憶を共有させるという力だと仮定したら、

（中々厄介な〝ダンジョン・コア〟だね……）

個人的にはどうでも良いけど、サルバがこんなになっちゃってるし。

中々どうしてキツそうなサルバをこのままにしておいてもなあ……、

「うーん……」

どうしたものか

……

…

「仕方ない」

少し考えたけど、明確な特効薬も思い付かない。というか、思い付くなら〝ダンジョン・コア〟の扱いはもう少し軽いしね。

「サルバ」

未だにえずいているサルバに声を掛けて、無理矢理その上体を引き起こす。脂汗で纏まった前髪を退けて、その色の違う双眸を覗き込むも、宿る色はやっぱり虚ろだった。

「えい」

それだけ確かめると、直ぐにサルバのお腹に拳を突き刺して当て身を加える。上手く柔らかい腹筋に入り、一回で気絶させられた。一先ず、此れで悪い夢は一時的に遮断出来た筈。後は……、

「忘れないようにしないとね」

床に転がった、リーセン子爵の娘の頸を拾い上げる。あの一瞬、間違いなく刈り落とした筈のそれは、僕の見間違いではなく、表情を悪意に歪めていた。

「……」

確実に、命脈を断った筈のそれは、やっぱり、あの瞬間動いていた。其れほどまでに彼女の怨念が大きかったのか、はたまた〝ダンジョン・コア〟の副作用か、今となっては、どちらも推測しか立てようもないだろう。まあ、どちらにせよ、任務完了の証拠としてこの頸を持ち帰らないとね。……、

「念のため」

手に持った生首を宙に放り、左右で半分に切断する。割った頭蓋骨から、卵のように零れ落ちた脳味噌を踏んで擂り潰すと、事前に持ってきた麻袋に放り込み、横たえてい

たサルバの身体を持ち上げる。綺麗に負ぶれれば良いんだけど、こういうのは慣れてないと中々上手くいかないし。落としちゃってもまずいしね。

結局、その軽い身体を肩に担ぐという、安全策を取ることにする。

「……帰ろっか」

こうして、周辺貴族数名とギルドを巻き込んだ今回の騒動は、何事もなく終息したのだった。

◆

ロハグの町に着いてギルド長に顛末を簡潔に報告すると、「ご苦労さん」という言葉だけ受け取って、ギルドを後にする。そして、そのまま気絶したサルバを使っていた宿に送り届けると、何故か僕までサルバの部屋に押し込まれていた。

「いや、何故かじゃないか」

宿のカウンターでサルバの部屋を尋ねた時に、ここの女主人から向けられた目を思い出して独りごちる。そこには、気を失った女性を乱雑に扱い、あまつさえ放置して帰ろ

うとする事への非難がありありと浮かんでいた。
その視線で、抵抗しても無駄なことを悟りながら、僕は今のサルバが女性の姿をしていることを改めて再確認したのだった。
「まあ、別に良いけどさ」
ベッドに寝かせて浅く呼吸するサルバを眺めながら、軽くあくびをする。
宿屋の女主人から押し付けられた水入りの桶と布巾で顔を拭いてやると、不快感も無くなったのか今は穏やかな表情で、サルバはゆっくりとしたリズムの呼吸をしている。
小柄な割りに、起伏に富んだ身体そのままのベッドの膨らみをぼんやりと眺めながら、此からの事に少しだけ考えを巡らせる。
今回の件で、最も得をするのは間違いなくリーセン子爵だろう。何せ、最大の政敵と脛に抱えた傷の両方が一度に消え去ったのだから。確実に、この地方の貴族の筆頭に登り詰めるだろうし、場合によってはハップルカ伯爵よりも強固な地位を築くかもしれない。もっとも、今回の件の報告はギルドから元老院に上がるだろうから、際限なく無茶が利くとも思えないけれど。その辺は、多分元老院での派閥ごとのパワーバランスで決まるだろう。少なくとも、まだまだ、一波二波来る筈だ。
「ま、僕達には関係ないか」
枯れたダンジョンを閉鎖してギルドに報告する。終わったら次の枯れたダンジョン

を閉鎖してギルドに報告する。ダンジョン閉鎖士の日常はこの繰り返しだ。何も変わることはない。まあ、今回はサルバに無茶をさせちゃったけど、こういうことはまずないだろうしね。

「……」

結局、これ迄と何も代わらないなと思考を打ち切った瞬間、不意にドアの外に人の臭いを感じた。

「誰？」

「ギルド長からの指令です」

僕の質問に答えることなく、ドア越しの誰かは感情を感じさせない声音で一方的に告げてくる。

「……」

「トウトウ村の方は今晩中にとの事です」

「ふむ……」

そういえば、それもあったね。うん、そっちも終わらせないと、任務完了とはいかないか。……、

「了解です。今晩直ぐに向かいます」

そう返すと、ドアの奥から漂ってきた人の臭いが消えて無くなる。ギルド職員が居な

くなったのを確かめると、改めて、ベッドで眠るサルバに目を向ける。
　こうしてみると、この身体は何処までも華奢で、射撃の腕を知らない人が見れば、庇護欲を掻き立てられるのも分からないではない程に儚げだ。実際の中身は割りと普通に悪のりとか大好きな男冒険者なんだけどね。
　まあ、仮にそうでも、今日の夜はちょっときついだろう。サルバの気持ちを全て理解できるとは言わないけれど、偽騎士に向けられた”ダンジョン・コア”で僕の過去を見ていたと仮定した場合、あの反応をするサルバには心理的負荷が強い筈だ。まして、昨晩の今晩では負担も一段と掛かる可能性が高い。
「そういう意味じゃ、サルバが気絶しているのは好都合か……」
　ギルドの指示が今日の夜である以上、僕の出発までに目を覚まさなければ、サルバは夜には参加しなくて済む筈だ。
「ふぁ……」
　そこまで考えると、漸くやって来た眠気に軽く欠伸をする。椅子の背もたれに身体を預けながら、今晩に向けて仮眠を取る事にした。
「……」
　カーテンの木漏れ日に照らされたサルバから漂ってきた硝煙の薫りが、妙に心にしっくり来たのだった。

夜、ロハグの裏通りを歩きながら、星のない空を見上げる。厚く雲が立ち込めて、少しだけ重くなった空気の中に、ほんのりと土と雨の匂いがする。

（好都合だね……）

深夜に一雨来そうな空気に、内心で独りごちながら、僕は人と会わないようにロハグの町を出発する。幸い、サルバも目を覚ます様子はなかった。出来ればさっさと終わらせて、起きる前には戻ってきたいところだ。

そんな算段をしながら、僕は最後の仕上げのためにトウトウ村へと急いだのだった。

◆

トウトウ村に着くと、既に酒場の酔っ払い達も履けたのか、村を見渡しても竈の火はおろか、ランプの明かりも消えて、代わりににわかに雨が降りだしていた。

（好都合だね）

文字通り、漆黒に呑まれた小さな村でダンジョンの臭いに揺られながら、村の地図を確かめて、一番外れの一軒家の鍵を外した。

「……」

出しなにギルド職員から渡された家族構成では若い夫婦に、最近小さな娘が産まれたと書かれている。なら、最低でも三人、或いはもう少し多いくらいだろうか……

思案しながら一室一室を確かめていく。幸い、ダンジョン以外の悪臭の元は無い家だった事もあり直ぐに寝室以外の探索を完了できた。

（ここだね）

そして、ここが最後の一室。他の部屋と違って、明らかに人の臭いがある。

（数は三つ……）

真新しいドアの隙間から漏れ出てくる隙間風を嗅いであたりをつけると、音を立てない様に、慎重にドアを開ける。中に滑り込むと、そこでは大きなベッドの上に若い夫婦が、小さな柵の付いたベッドで一人の赤ん坊がすやすやと寝息を立てていた。

（先に赤ん坊の方だね）

手前にある小さなベッドに近付き、中を覗き込む。まだ、目も開かないその子は夜泣きした様子もなかった。

（まあ、此れからしないとも限らないし、急がないとね）

懐から取り出した、大振りの”針”を鞘から抜くと、その赤ん坊の眉間を狙い、一息に突き刺した。

「……」

根元まで挿し込み、ゆっくりと引き抜くと、僅かに身動ぎしたその子は、やがて顔を土気色にし、小さくしていた呼吸をゆっくりと止めたのだった。

「……」

小さな命が、確かに閉じたのを確かめると、大きなベッドに寝ている両親に向き直る。夜は長いとはいえ、限りもある。地図の中心にある村長の屋敷まで、あと、十軒以上がのこっていた。

一軒忍び込んで皆殺し
また一軒忍び込んで皆殺し……
男も
女も
子供も
大人も

老人も

そうして繰り返すうちに残りはとうとう村長の邸宅だけになる。

邸宅。正しく、そう呼ぶに相応しい大型の一軒家は、C級ダンジョン村の村長が持つには明らかに分不相応で、普通のダンジョン村であれば負債からの債権屋一直線だっただろう。まあ、

（そっちの方が、まだマシだったかもしれないけどね……）

先程までの家と同じ様に、鍵の一つをナイフと針で外し、中に入ると、其までとは違い、まだ覚醒している人の気配があった。

「……」

幸い、他の人の臭いから大分遠い様だ。なら、先に既に寝てしまっている方からでも大丈夫だろう。

数は五人。村長の息子夫婦と孫娘が一人、使用人が一人に、今日たまたまこの家を訪れた親類が一人。それらを全部片付けると、寝室から離れた村長の書斎にたどり着いた。

「……」

どうやら、まだ仕事をしているらしく、部屋の外からでもカリカリとペンを動かす音が聞こえてくる。既に支えるべき住民の居ないこの村では、夜を通して執務に励む村長

の声も生者の耳に届くことはない。

（それよりも、サルバが起きる前に終わらせないとね）

そんな算段をしながら、村長の執務室の扉を開けると、眼鏡を掛けた禿頭の小柄な老人のポカンとした表情とかち合った。

「あ……え？」

混乱した様子の村長の喉頸を掴み上げると、「くけっ!?」と小さく悲鳴を漏らした痩せ雄鶏はその目にはっきりと怯えの色を浮かべていた。まあ、自業自得だけどさ。

「トウトウ村住民四十二名及び滞在中の冒険者、商人、その他知的生物全てを国家反逆罪により、存在を抹消するよう命令が出ています」

「!?」

伝えた罪状に、手の内の老人は更に混乱を深める。けど、少し想像すれば、理解も出来ると思うんだけどね。

〝ダンジョン・コア〟の不法採掘だけなら此処まで罪は重くはならなかった。決して軽くも無いだろうし、村一つが吹き飛ぶ程度の民事訴訟は発生していただろう。けれど、それでも罪人扱いされるのは村長や村の重役数人が精々で、一家離散したとしても他の住民達は特に罪には問われなかった。

問題は移植だ。

唯でさえ利権と権益の塊であるダンジョンが移し変え、言い換えれば〝略奪〟すら可能だと公になってしまえば、帝国の経済は崩壊してしまう。そうなれば、後に待っているのは帝国そのものの滅亡と、後の長い戦乱に決まっている訳で。〝ダンジョン・コア〟の移植は少なくともギルドの特定の人間と元老院議員以外にはこの情報は流れてはいけない。いや、流すわけにはいかない話になっている。

目の前の老人や他の村人が何処まで何を知っているかは分からない。けれど、あのリーセン子爵の妾の娘と何かしらの取引をした形跡がある以上、少なくとも目の前の老人が無関係という事は有り得ない。で、あれば最低でも村人と在住している人間は全て連座の対象になり得るわけで。だからこそ、元老院はこの村の〝抹消〟を決めたのだった。まあ、

「や、やめ」

「トウトウ村ダンジョン、閉鎖致します」

全部、今更だけどさ。

「……」

眉間に針を突き立てて、トウトウ村の最後の一人の心肺停止を確かめる。開け放たれた窓から漂う雨の香りが一段と強くなった気がした。

◆

枯渇したダンジョンは残したままにしておくと、野性動物の侵入や、犯罪者の滞在、密輸品や禁止物質の保管など様々な犯罪や問題を引き起こす危険がある。そしてそれは、何も取り締まられる側だけが引き起こすとは限らない。

特に、今回の件の元となったリーセン子爵による私生児の殺害のように、都合の悪い事実の隠蔽では、むしろ、帝国そのものが積極的に枯渇したダンジョンを利用している事すらある。

「まあ、やってるのは僕（ダンジョン閉鎖士）達なんだけどさ」

先の村長以下、トウトウ村に居た人間全員の死体をダンジョンに放り込み、〝ダンジョン・コア〟を回収して閉鎖を完了させる。後はダンジョンの存在をギルドの記録から削除すれば、公的にはこの村の人間は一人残らず行方不明になる。その後の政治的な隠蔽はギルドに引き継がれるから、まあ、上手くやるだろう。

そんな事を考えながら、踵を返し掛けたところで、不意にここ数日で嗅ぎ慣れた硝煙の臭いが僕の鼻腔を擽った。

「……サルバ」

顔を上げて臭いの先を見れば、そこにあったのはロハグに置いてきた筈のサルバの姿だった。……、

「起きたんだね」

「妙な……胸騒ぎが、して……な」

荒く苦し気に肩で息をしながら、サルバは途絶え途絶えにそう言った。

「凄いぜーぜーいってるけど、大丈夫？」

「腹が滅茶苦茶痛いが、それ以外は大丈夫だ」

「つまり、全く問題ないって事だね」

安心安心。

「腹の真ん中にお前の拳の形した痣が出来てるんだが」

「腹筋鍛えないとだめだよ？　身体の軸を安定させるんだから」
「この野郎……」
　はっはっは。
「で？」
「あ？」
「妙な胸騒ぎがして、僕を追ってきたのは分かったけど、どうしてこの村にいるって気付いたの？」
「……恐らくだが、昨日くらった〝ダンジョン・コア〟のせいだ」
「ふうん？」
　〝ダンジョン・コア〟のせいねえ。
「多分、お前が最初の一人目を殺した瞬間……誰かの赤ん坊に針を刺したタイミングで、目が覚めたんだ」
　じゃあ、本当に最初の方から見てたんだね。
「最初は訳が分からなかったが、十人目くらいのタイミングで、周りの光景でこの村だって気付いたんだ」
　成る程ね。でも、それだけじゃ、僕がトウトウ村に居るかどうかの判断材料にはならないよね？

「まあ……な」
　？　何で言いにくそうなの？
「……」
「……サルバ？」
「……言っても怒らないか？」
「つまり、拷問をしろってこと？」
「短絡的に暴力で解決しようとすんな！　お前の悪い癖だぞ！」
「そう？」
「その、〝仕事で困らないし、むしろ、役に立つんだから別に問題ないね〟って思考もな！　ダンジョン閉鎖士としては兎も角、人としては駄目だろ！」
「あ、じゃあ、人間じゃなくて良いや」
「何でそっちを放棄した!?」
「特に理由はないけど」
　割りと本気で。強いて言うなら惰性？
「惰性で貴族の邸宅一つと村一つ皆殺しにする奴の惰性は怖すぎるっつの！」
「邸宅の半分はサルバが殺ったんだけどね」
「そうだったよチクショウ！」

頭を抱えて暫く唸っていたサルバがノロノロと立ち上がり、何かを諦めたように溜め息を吐きながら「俺に見せなくて良かったって思ってただろ?」と言ってきた。

「……」

「無言は肯定と受けとるぜ?」

「今日の晩御飯は奢るね?」

「何か言えば否定になる訳じゃないからな? 次いでに奢りは却下しねえからな?」

それは残念。

「茶化すなよ。俺にしては真剣な話を振ってるつもりなんだぜ?」

そう言って、サルバは小さく肩を竦めた。

「初めは訳が分からなかったが、直ぐにレミュール男爵夫人の家で見たお前の記憶を見たことを思い出して、見ているのがお前の視界で、流れ込んできたのがお前の感情だって気付いたんだよ」

「ふーん」

「……怒らないのか?」

「怒って欲しかったの?」

怒らないで欲しそうにしてたのに。

「いや。だが、拳の一つくらいは覚悟していたな」

「別に僕の記憶とか感情とか覗かれても何ともないし」
　というか、見られて困るほど記憶に起伏がないし。
「そうか……」
「うん」
「……」
「あと、代わりにサルバが恋人にフラれたシーンも見たから」
「それは知らなかったぞ!?」
　言ってなかったしね。
　再度頭を抱えて唸りだしたサルバが、たっぷりと苦悩した末に「互いに記憶を見たって事でチャラで良いな?」と言ってきた。まあ、僕はどっちでも良いけど。
「続けるぞ」
「どうぞ」
　溜め息と共に、サルバが再び口を開く。
「兎に角、映った光景と、お前の感情で、お前が俺に無理をさせないために、一人でトウトウ村で……殺しをやってたのに気付いたんだよ」
　だから、急いで追い掛けてきたと……んー、そうだね、
「その男気は買うし、来てくれたことは有り難く受け取らせてもらうけど、今後は僕が待

機を指示したら、きちんと身体を休めてね？」

　一応、サルバ（ダンジョン閉鎖士補佐）を監督するのも僕（ダンジョン閉鎖士）の役目だからさ。

「……俺は頼りないか？」

「まさか」

　それはないない。

「むしろ、銃の腕はかなり信頼出来ると思ってるし、レミュール男爵夫人の家での戦いで、殺人もちゃんと出来るって分かったから、その辺も高得点だし」

　むしろ、元々が冒険者の割りにはかなりダンジョン閉鎖士適性が高かったから、素直に助かったし。

「なら」

「けど、僕の記憶をもろに受けちゃったせいで、昨日はもう完全にやられちゃってたでしょ？」

「う……」

　それはもう、無理とかじゃなくて不可能の範疇だったからねえ。

「もし、それがなかったら、多分、連れてきてただろうけど、あの時点では最終試験もパスしてたし、これからも僕の仕事に付き合ってもらわなきゃいけない以上、過剰に無茶はさせないのとに決めたの」

「……」
　少なくとも、変にサルバをダンジョン閉鎖士の仕事から遠ざける異図はなかったしね。
「だから、これもどうぞっと」
「うおっ!?　……これは」
「この村の〝ダンジョン・コア〟」
「うおい!?」
　はっはっは。
「それ、使って良いよ」
　どんな効果があるかは未知数だけどね。
「……」
「サルバ？」
　受け取ったサルバは、何故か〝ダンジョン・コア〟に刺激を与えることなく、そのくすんだ表面をためつすがめつしている。っと、
「サルバ？」
　何故か、サルバはそのまま〝ダンジョン・コア〟を投げ返してきた。んー？
「どうしたの？」

使わないと、身体元に戻らないよ？　まあ、使っても戻るとは限らないんだけど。
「いや……今は止めとくよ」
「？」
ふぅと溜め息を吐いたサルバは困ったように、頬を掻いた。
「ほら、今回、殆どお前におんぶに抱っこだっただろ？」
「別にそんなこと無いけど？」
襲撃の時なんかは普通に助かったし。
「だとしても、そいつを受け取れる程じゃ無いからな」
「んー、少なくとも、僕個人としては使ってくれても問題ないけど」
「だとしても、俺が納得出来ねえからな」
そう？
「ああ」
頷いたサルバが「だからまあ……」と頭を掻きながら、にかっと笑みを浮かべた。
「俺がお前の役に立てたって思った時に、改めて使わせてくれないか？」
それは、何処か悪戯っぽく、からっとした表情で、〝ダンジョン・コア〟を使うまでもなくサルバの本来の性別（男）を思い起こさせる笑顔だった。まあ、
「良いよ」

答えは特に変わらないけどね。
「あっさりしてるな」
「長い方が良かった？」
なら、文章考えるから、歩きながらで良い？
「いや、その方がお前らしい」
「そ」
じゃあ、問題ないね。
「そうだグゥゥゥ……
「……」
「……走ってきたせいで、腹減ったな」
自分のお腹の音に、サルバが弱った様に頭を掻いた。そろそろ朝食の時間だしねえ。
「じゃあ、何処か入ろうか？」
「奢りか？」
あ、さっきの覚えてた。
「忘れいでか」
「まあ、別に良いけど」
別に僕がお金を出す訳じゃないし。

「ん？」
「今ならトウトウ村で適当に食料貰っても文句は言われないからね」
　生物なんかは、僕達が食べないと悪くなっちゃうし。
「酒場辺りになら、今日のために仕込みを済ませた食材もあるだろうから、適当に摘まんで行こ」
　お酒の類いとか、発酵食品みたいなのは横領になっちゃうから駄目だけど、魚介類なら大丈夫でしょ。
「サルバ？」
　来ないの？
「いや……」
　肩を竦めたサルバが、ニヤニヤと人の悪い笑みを浮かべながら、隣に並んでくる。どうしたの？
「お前、本当に何の柵も躊躇いもなく行動すると思ってな」
　そう？
「おう」
　……ま、いっか。
「希望はある？」

あれば、それにしようかと思うけど。
僕の確認に、「んー」とお腹と相談していたサルバがポンと手を打つ。決まった？
「ああ」
頷いたサルバが満面の笑みを浮かべる。
「肉だな。普段食えないくらいでかいのな！」
「……」
「？　どうかしたか？」
うーん、この、
（やっぱり、叩き起こして連れてきても問題なかったかな）
小首を傾げるサルバには答えず、僕はそんな事を思ったのだった。

ラビュリントス編

一

その日、閉鎖を指示されたダンジョンがロハグから少し離れていたこともあって、〝ダンジョン・コア〟を摘出して外に出た頃には既に日は傾いていた。それに伴い、届く光も疎らで、隣を歩くサルバの表情もはっきりとは窺えなくなっている。

（まあ、〝視覚〟自体は余り意味がないんだけど……）

「だな」

文字通り〝誰そ彼時〟に呟いた内心に、隣のサルバがニヤッと口許をつり上げて笑ったのが分かった。

先日のトウトウ村の一件で、偽レミュール男爵夫人からくらった〝ダンジョン・コア〟の力により、今の僕達は二心二体でありながら一心同体という、かなり歪な状態となっていた。基本的には僕とサルバは別の人間だけど互いの思考や感情は口にせずとも手に取るように分かってしまう上に、少し集中すれば互いの五感を共有することすら出来る様になってしまっていた。

正直、火を吹き出したり、人を洗脳したりといった、分かりやすい〝ダンジョン・コ

ア〟と違うせいで、この現象が何処まで有効なのかは判断に迷うところで、最悪、僕かサルバのどちらか一方が命を失えば、残ったもう一人も死に至る危険すらあった。
「野郎と一蓮托生とか、普通に憤死ものだよな」
結果、僕達は互いの生存のために、助け合わなければいけないという未来が確定してしまったのだった。ていうか、一蓮托生は男だろうが女だろうが、普通は面倒じゃない？
「ああ？　そこは全然違うだろ？　こう、モチベーションっつーか、気分的なものが」
「モチベーションのぶつけ先は無いけどね」
「チクショウめ!!」
キレたサルバが蹴った石ころがポチャンと近くの小川に落ちた。
（まあ……）
一応、僕は其れなりにダンジョン閉鎖士としては長いし、サルバもサルバでA級ダンジョンへのアタック経験すらある冒険者だったから、前回の三家を巻き込んだ騒動程でもなければ、普通にダンジョン閉鎖士をやる分には、早々危険なことも無いわけだけど。
サルバの方も、大分ダンジョン閉鎖士の仕事に慣れてきた様で、ここ数回は探索も採取もやり果てた、枯渇ダンジョンを淀むことなくすいすいと進んでいた。特に、モンスターとの戦闘は本職だけあって、たまに現れる残留モンスターは僕よりも手際よく処理

してくれるのもあり、素直に助かっていた。
「そうか？」
また、思考が伝わったらしく、少しだけ照れ臭そうにサルバが頬を掻く。
「まあね」
実際、事実なので、僕は特に誤魔化すことなく頷いた。まあ、誤魔化してもどうせバレるだけなんだけとさ。
「それな」
頷いたサルバが肩を竦める。
「お陰でおちおち娼館にも行けないぜ」
「そもそも、ダンジョン閉鎖士じゃ、門前払いもいいところだけどね」
「はっはっは」
そんな事を言っているうちに、今回の閉鎖を行ったダンジョンの所有権を持つ村の村長を含む村人の待つ役場が見えてきた。
「さて、今回はどうなるかな？」
穏便に済んでくれれば良いけれど、はてさて……。
「アルタ」
そんな事を考えていると、右（僕の剣とは反対側）隣に立つサルバが、にわかに獰猛な笑みを浮かべなが

ら、これ見よがしに拳銃の撃鉄をガチリと引き上げた。まあ、そうなるよね。
「少なくともお前はそう思ってんだろ?」
「うん」
「なら、そうなるだろうよ」
「……」
そう言ってくくと喉を鳴らすサルバに肩を竦めながら、僕も念のため片刃剣の鯉口を切って、村人が待つ一軒家の立て付けの悪い押戸を開いたのだった。

指定された一軒家に入ると、中に居た無数の人間が一斉に音を立てて此方を振り返ってきた。その数は十や二十では利かず、恐らくこの村のほぼ全ての人間が集まっていた。その視線は当然ながら友好的なものは一つもなく、良くて事態を理解できてない子供達の困惑の視線。大多数は大人の敵意に満ちた視線だった。
(つまり?)
(何時も通りって事だね)
今日もダンジョン閉鎖業は平常運転。
(りょーかい)

内心から意図を読み取ったサルバが頷いて、周囲に気付かれないように、何時でも抜ける体勢になる。じゃ、始めよっか。

「ダンジョンの閉鎖が完了したので、報告させていただきます。まず、此方は新たに発行される事になりました、ダンジョン閉鎖済みの証明書になります」

「……」

最初に、前の領主だったレミュール男爵夫人、まあ、殆どハップルカ伯爵が居なくなり、ダンジョン閉鎖士として一番に変わった証書を差し出す。

「先日、新しい領主様が来られてから、今後は枯渇ダンジョンの未閉鎖は犯罪として扱われるという公布がされました。この証明書は違法な未閉鎖ダンジョンを所持していないかの調査の際に必要となりますので、紛失など御座いませんよう、大切に保管を御願い致します。宜しければサインをお願いします」

「……」

僕の説明に、村長が村の上役と思われる数名の男性に証明書を見せる。中には其れなりにお金を掛けて描かれた、偽造防止のための緻密な模様の上に、達筆な文字で簡潔にダンジョンの閉鎖が完了した事を記す一文が載っていた。

まあ、中身はそれだけなので、直ぐに受領証にサインを受け取る。

（まあ、此処までは特に問題ないんだけど）

正念場になるのは次からなんだよね。
「次に此方、今回のダンジョンの閉鎖に伴う閉鎖税の明細書です」
「閉鎖……税？」
耳慣れない、というか、この土地では初めて導入されるみたいだし、初耳だよね。
虚を突かれた様子の村長さんはじめとした村の人達に書類を渡しながら、軽くあらましを説明する。
「ええ。此方も新領主様からの政策で、今後のダンジョンの閉鎖のうち、実費は此まで通り貴族様が立て替えますが、代わりに今後はダンジョンの閉鎖に出していた見舞金は廃止して、税を掛ける事になりましたので。あ、これ、通知です」
「「「「なっ!?!?!?」」」」
絶句する村人達。流石に税という言葉には敏感だね。二言目で理解できたみたいだし。
（だな）
前髪のせいで端から、というか、僕以外からは分からないけど、サルバが素早く室内に視線を巡らせて、敵（村人）の位置を確かめる。僕（片刃剣）の射程範囲と敵の脅威度から狙うべき相手を選別して、
（村長と……後ろの体格が良い奴等は俺だな）

と、頭の中に直接伝えてくる。
中々リスキーな〝ダンジョン・コア〟だったけど、こういう内緒話には便利だね。
（それな）
と、そうこうしているうちに、村の人達の意思が朧気ながらもじわじわと固まってきたらしく、誰ともなしに此方に視線を向けてきた。まあ、予想通り、その中には友好的な視線は一つもなかった。
「それは……少々無体な話では」
口火を切った村長だけど、先ずは言葉を選びながらも通達への不満を口にして来る。
「そうですか」
まあ、僕としてはどうでも良いけど。
不満を持つのも彼らの自由だし、不満を持たれるのも新領主様の自由な訳で。僕達はダンジョンを閉鎖するだけだから。
「まあ、その辺の話は徴税官とどうぞ。僕達は関係ないので」
僕達はギルドの人間であって、領地の貴族様の部下じゃないからね。ダンジョンの閉鎖に関わる話だから、一応伝えただけで、それ以外にする気も、権限も無いし。
「「「「……」」」」
事実をありのまま伝えると、再び村人達は顔を見合わせる。んー……

（まあ、どうでもいっか）
（付き合う義理もねえしな）
だね。それじゃあ、帰ろ「それでしたら」
（あ……）
伝えることも伝え終わったので、さっさと退散しようかとサルバと話していたところで、見計らったかのように村長から声を掛けられてしまう。
（どうすんだ）
（まあ、面倒だけど、声を掛けられた時点で聞くだけは聞くしかないんだよね。〝ダンジョン閉鎖士が話を聞かなかったから、分からなかった〟なんて、言い訳としては常套手段も良いところだし）
ダンジョン閉鎖士って、ある種の特権階級でありながら、被差別階級でもあるっていう面倒臭い身分だからね。差別されるだけじゃなくて敵も多いから、根も葉もない訴えでも無駄に長引き勝ちなんだよね。
（まあ、彼等が何処まで知っているかは分からないけれど）
（誰かが入れ知恵しないとは限らねえ……って訳か）
そーゆーこと。
「今回の件、領主様に私共の要望をお伝えして欲しいのですが」

（今回はこういうやり口か）
（どういう事だ？）
（よくある税金の踏み倒しの方法）
　不思議そうにするサルバに、簡単にあらましを伝える。
（ほら、情報の伝達不良って、基本的には伝達役の責任でしょ？）
（ああ……そういうことか）
（うん）
　ここで、訴えを僕達に押し付けても、指示系統の違うダンジョン閉鎖士では貴族様とコンタクトを取ることが難しい場合が多い。ギルドを通しても時間が掛かるから、その間に時間稼ぎをして税金を踏み倒し、領主様に問い詰められたら、その責任を情報伝達役におっかぶせる訳。
（まあ、使い古された手口だけど、その分嵌まれば強力だよね。ギルドと貴族の争いになるから、なし崩し的に数年間税を踏み倒せたりするし）
（悪知恵が働くもんだな）
（まあね）
彼等（村民）は確かに教養とか学は無いけれど、彼等は彼等で日々強かに生きようとしているわけだからね。特に、ダンジョン村なんかは、流れ込んでくる冒険者から色々な零れ話と

かも聞く機会がある分、追い詰められれば本当に手段を選びなくなるからね。まあ、
（それが行き過ぎると、トウトウ村みたいになっちゃったりするわけだけどね）
（老若男女の別なく行方不明か）
　先日、唐突に閉鎖した村の名前にサルバが苦笑を浮かべた。
（んで、今回はどうすんだ？）
（特に僕達から何かする気はないよ）
　何かする義理も義務も、そして今この瞬間は必要も無いからね。
（僕達からね……）
　まあ、当然ながらサルバには正確に意図も伝わり、ちらりと揺れた前髪の奥に、ほんの僅かながら闘気が見てとれた。ま、どうなるかは此れからだけど……
（どっちでも良いんだろ？）
（うん）
　別に興味ないしね。と、いうわけで続けようか。
「それは、僕達の管轄外なので、徴税官の方へどうぞ」
「む……」
　返事をすると村長が言葉に詰まった様子で口ごもった。んー、これ以外に手を考えていなかったのかな？

（それもあるだろうが、それだけで丸め込めるって、舐められてたんじゃねえか？）
（あ、それはあるかも）
僕達二人だけだもんね。対する徴税官は割りと護衛とかごてごてしていて物々しいことが多いし。……ま、いっか。
「じゃ、伝えることは終わりましたので僕達はこれで」
僕達は伝えることも無いしと立ち上がると、上役の一人が「ま、待ってください」と慌てて押し止めようとしてきた。いや、待たないけど。
「くく……」
相手を無視して屋敷を出ようとする僕をサルバが可笑しそうに笑ってくるけど、サルバならわざわざ付き合う？
（まさか。絶対に御免だ）
（でしょ？）
肩を竦めて、トテトテと付いてくるサルバ。っと、
「「……」」
ガンッと大きな音と共に、邸宅の入り口に居た体格の良い村人が屋内には似つかわしくない馬鍬で、木床を強かに打ち据えたのだった。
（ふうん……）

これは、うん。
（サルバ。戦闘準備して）
（待ち伏せか？）
（武器まで準備しているからね）
その可能性は低くないよね。僕は外の方に注意するから、サルバは室内をお願い。
（ああ。分かった）
頷いたサルバが音もなくハンマーを上げた拳銃に触れる。対軸はおろか、肩の筋肉すら微動だにしないその動作は周囲に臨戦態勢を悟らせない熟練の業が見て取れた。
（お前もだろ）
愛剣の鯉口を切って、その柄に手を掛けた左手を指してククと僕だけに聞こえるように喉を鳴らすサルバに肩を竦めて返しながら、僕は村長の方を振り返る。
「我等の村を哀れとは思って下さいませんか」
「いえ、特には」
此れは割りと本気で。というか、ダンジョン村だとかそうでないとか関係なしに興味ないし。まあ、こういう論調で何とか押し付けようって訳か。……随分と力業な辺り、やっぱりこれが本命の手みたいだね。
「「「「……」」」」

再び顔を見合せあう村人達。その間に邸宅を出てしまう。入り口の門番も、村長の指示がないからか、動くに動けないでいる様子だった。

僕が出て、サルバもヒョイッと外に出たところで、漸く我に返ったらしい村長が「あ、も、もう一つ尋ねたいことが！」と投げ掛けてくる。面倒臭いね。

（それでも仕事なんだろ？）

（本当にね）

苦笑するサルバに肩を竦め返しながら、屋敷の中で立ち上がった村長の言葉を待つ。

「あー……」

「行こ」

「おう」

「ですから！」

吠える村長に、「何でしょう？」とは聞き返さない。別に聞きたいわけでもないしね。

「この、証明書！」

ふと目についた。そんな様子で目を丸くした村長が何かを思い付いた様子でテーブルの上のそれを持ち上げる。んー？

「この証明書が紛失した場合はどうなりますか!?」

誰がと付けないところがいやらしいね。

「別に、再発行を申請するだけでしょうね。お金払って」
「ですが、紛失の理由によって、誰がという部分は変わりますよね？」
ああ、次はそういう手ね。そうだなあ、
「その辺は、僕達がお答えする話ではありませんので徴税官へどうぞ」
「っ！」
言外に告げてきた、「お前達が紛失した事にするぞ？」という脅しを無視して、代わりに受領証を見せながら、「もう関係ないので」と暗に伝えると、悔しげに村長は歯噛みをした。が、直ぐににやっと卑屈な、それでいて優越感混ざった笑みを浮かべだした。
んー？
「ですがそれ、私のものだとは決められないでしょう？」
（おい、また訳の分かんねえ事言い出したぞ、この爺さん）
（そうだねえ）
まあ、村からすれば、僕達を自由に動かせるかどうかの瀬戸際だからね。明らかに無謀でも、最高の奇手に見えちゃうんだろうね。自分達は受領してないって主張出来れば、ギルドの手違いを主張出来るって考えているみたいだけど……
「まあ、これ書いた時点で無駄だけどね」
極論、この辺の主張は水掛け論に落ちるけれど、水掛け論の正否は基本的に権力で決

まるからね。
「巨大な都市なら兎も角、この程度の村じゃどうしようもねえのか……本気で無駄だな」
「そーゆーこと」
と、いうわけで、
「帰ろっか」
「おー」
頷いたサルバを連れて、村長の屋敷に背中を向けたところで、不意に鉄の臭いが濃くなる。やっぱりこうなっちゃったか。
「「……」」
サルバの方に目をやると、今月に入ってから何度目かの光景に、サルバもサルバで呆れたような表情になりながら肩を揺らしている。果たして、村長の家からは、已に使わなくなって大分経ったと分かる錆びた農具を持った村人が後から後から這い出てきていた。その中心に立つ村長が、先程までの哀れを乞うような表情を一変させて、犬歯を剥き出しにして此方を睨み付けてくる。
「念のためもう一度伝えておきますが、領主様に私共の要望をお伝えいただきます件、宜しくお願い致しますね」
暴力を背景に、自分達に都合の良い無理を通す。

古来から伝わる、人間にとって最も馴染み深い交渉法は、中々どうして様式美としては完成している感があるよね。尤も、

「いや、頼む筋が違いますから。自分達で徴税官へどうぞ」

だからどうしたって話なんだけどさ。

「受領証を奪え!!」

「男は殺すな!!　叩きのめして、村の外に捨てておくんだ!!」

「女は補佐だ!!　この前の奴隷商に売っちまえ!!」

僕が答えた瞬間、激発した数人の村人が手にした農具を振りかざして襲い掛かってくる。その激情の火は容易く辺りに延焼し、忽ち他の村人達へも伝播していった。まあ、

「だからどうしたって話なんだけどさ」

僕が呟いたのとほぼ同時に、パパパンッと聞き慣れた軽い発砲音が響く。村人の群れの先頭を飛び出してきていた一人が、それまでとは反対側に大きく吹っ飛ぶ。

「うわっ!?　……え?」

その身体を受け止めた後ろの一人は悲鳴をあげるものの、直ぐに別の困惑の声を上げる。両腕をぐっしょりと濡らす鉄臭い鮮血と。

「な、なななあっ!?」

ぼとぼとと降ってきた、引きちぎられた一人分の耳鼻の肉片に。

その人肉の感触に、悲鳴をあげてその欠片を振り払った男の人に向かって踏み込み、僕も左腰の剣を抜く。鞘を滑った愛剣は、上手く半円を描き、

「ばがっ!?」

殴り付けた青年の歯と下顎を一撃で吹き飛ばすことに成功する。

威嚇もあって、意識して乱雑に飛び散らせたんだけど、歯とか下顎の骨を浴びても、悲鳴を上げる人間は一人も居なかったのだった。

(いや、単にびびりすぎて何も言えなくなっただけじゃねえか?)

(かな)

まあ、それもどっちでもいっか。

「だな。それより帰ろうぜ」

「ん」

そう言いながら、今しがた村人の耳と鼻を吹き飛ばした銃を腰に納めるサルバに頷いて、今度こそこの村を後にしたのだった。

「そういえば、晩飯は何にするか、もう決めたのか？」
「ん？　んー、今から帰ると、ギルドの食堂はもう閉まってるだろうしねえ……サルバは希望とかあるの？」
「ロハグの南門の近くに、新しい酒場が出来たんだが、そこは使えそうか？」
「んー、ロハグの街中なら、多分大丈夫だと思うけど、念のためギルドの命令書も持っていった方が良いかもね」
「うし、じゃあ、そこにしようぜ♪」
「ん」
パンッと手を打って歩き出すサルバの後を追いながら、僕も片刃剣に血振りをくれて、鞘に納める。念のため後ろを軽く確かめたものの、後を追いかけてくる村人も、やっぱり一人も居なかったのだった。

◆

「かんぱ～い!!」

「ん、乾杯」

勢い良く突き出されたサルバのジョッキに盃を掲げると、打ち付けられた硝子が、景気良くカチンッと鳴った。

「んぐっんぐっんぐっ……ぷはぁぁぁぁ！　もう一杯!!」

「楽しそうに飲むねぇ」

瞬く間に一杯目を飲み干して、発泡する麦酒のお代わりを頼むサルバを眺めながら、僕は少し甘めの米酒を口にする。米だけで作られているはずのそれは、甘味の中に果実に似た風味があるとの事だったが、一口目ではそれはよく分からなかった。

「……」

代わりに、このお店の店主さんから勧められた、お摘まみの、毛深い緑豆を鞘ごと押し潰して実を噛むと、ほんのりと効いた塩気に引き立てられた甘味と旨味が一気に口の中に広がった。……これは、旨いね。

「……」

初めて口にする毛深い緑豆の味に少し驚きながら、重たくなった後口を洗い流すように小さな盃の米酒を口にすると、その豆の旨味との対比からか、口一杯に果実にも似た清涼感が一気に広がったのだった。

「そんなに旨いのか？」

と、お摘まみの豆の旨味以上に、その毛深い緑豆と甘めの米酒の協和に驚いていると、それを感じたらしいサルバが興味深げに身を乗り出してきた。
「食べる？」
「貰う」
頷いたサルバがヒョイッと山になった豆を一房取り、同じ様に豆を押し出して口にすると、驚いたように目を見開いたのが、前髪の隙間から見えたのだった。
「旨いな、これ」
「そうだね。僕もたかが豆一つって思ったけど、正直驚いた。ちょっと嵌まりそうかも」
麦酒を更に飲み干したサルバに、僕も相槌を打つ。実際、塩のきつい魚や肉よりも、此方の方が好みだった。
「……」
「……」
二人揃って、毛深い緑豆に向かうと、黙々とその山に手を伸ばしてしまう。もっとも、その内心は傍目ほど静かな訳じゃなくて、
（すっげ、本当に旨いわ。勧められるだけあんな、これ）
（まあ、そう思うけど……って食べ過ぎじゃない？　一人で半分以上食べちゃって）
（ん？　ああ、悪い。俺の頼んだつまみ食うか？）

（いや、僕、魚卵駄目だから）
（そうか、じゃあ仕方ねえええええ!?）
（そう言いながら、手を伸ばすとか、戦争だよ?）
（だからって短剣抜くかこの野郎!?）
（はっはっは。食べ物の恨みは怖いんだよ?）
（身を持って知ったわ！　知りたくもなかったわ！）
　他人からは無言のまま、〝ダンジョン・コア〟によって強制的に植え付けられた共有の力で騒ぎながら僕達は思い思いにお酒とおつまみを進めたのだった。しかし……
「サルバ」
「ん?」
「本当に使いこなしてるよね、〝ダンジョン・コア〟こ　れ」
　此まで、〝ダンジョン・コア〟に必ずしも馴染みが深かった訳でもないのに、随分と器用だよね。
「ああ、それか」
　頷いたサルバがジョッキを傾けて口を潤す。
「ま、半分はお前が相手だからな」
「?　と、いうと?」

どういうこと?
「ほら、お前って、他人がどうこう思ってようが全然気にしないだろ?」
「まあね」
「しかも、普段からぼわーっとしてる」
「失礼な」
「違うのか?」
「合ってるけどさ」
仕事の最中くらいしか、考え事とかしないし。
「それが良かったんだわ」
呟いて、サルバが赤い頬を撫でる。
「お前の性格のお陰で普段も五月蝿くねえし、此方が投げた言葉に対しても大した感情が跳ね返って来ないから、普段はあんま今までと変わらずに過ごせるんだよ」
「成る程ねえ」
「むしろ、俺としてはお前の方が気になるんだが、大丈夫なのか?」
「んー……」
サルバの言葉に、〝ダンジョン・コア〟のせいでサルバと精神を共有するようになってからのことを思い出す。と、いっても、特に変化らしい変化もなければ、〝ダンジョ

ン・コア〟のせいと思われる不自由も思い付かず、むしろ、ダンジョン村での交渉の際に、会話や不自然なジェスチャーもなく会話できる利便性の方が先に来るので、やっぱり特に問題は無いように思えた。

「特には」

なので、考えた末に、結局そんな答えを返す。

「なら、問題ねえな」

その答えに満足したのかサルバはまたガツガツと毛深い緑豆に手を伸ばしていく。

……最早何も言うまい。

「けど、やっぱり染まったよね、サルバ」

「ん？」

「ほら、前は村の人間に銃を向けるのは躊躇いって程じゃないけど、少し逡巡していたでしょ？」

「あー、まあな」

頷いたサルバが、カンッとジョッキをテーブルに置く。

「お前と組んで、閉鎖したダンジョンも二十は超えただろ？」

「そうだね、大体それくらいだと思う」

「その度に、色んな村の反応見てきたが……まあ、普通にこっちを殺しに来るからな」

「だね」
「正直、一々躊躇ってらんねえし、それ以前に躊躇う気も失せたっつーのが正直なところだ」
成程。
「まあ、良い傾向かな」
「良い傾向か？」
「うん」
少なくとも、ダンジョン閉鎖士にとってはね。
「なら、問題ねえな」
もう一度そう言って、サルバは黄色い魚卵を噛んだ。酒場の喧騒の中で、コリッという音がやけに響いた気がした。と、そこでサルバがふと思い出したように「そういやあ」と首を傾げた。
「ん？　何？」
「今日の閉鎖の時、お前村の人間の顎砕いてたけど、あれ良かったのか？」
「ああ、それ？」
「おう」
頷いたサルバが魚卵の肴を僕の米酒を取って流し込む。

「お前が耳を削がないなんて」
「耳削ぎアルタ」
「……」
「……」
「……僕、別に耳を削ぐことに拘った事無いけど？」
「知ってる」
「だろうね」
「がふっ!?」
おでこを指で弾くと、サルバが大袈裟に仰け反った。
「あ」
そして、その拍子にぶるんっと揺れたおっぱいがサルバのジョッキを弾き飛ばして倒してしまった。
「……」
「……」
「……すみません、布巾と麦酒一杯頂けますか？」
「かしこまりましたー」
近くに居た店員さんにお願いして、代わりを持ってきてもらう。で、
「……」

当のサルバ（酔っ払い）は自分のおっぱいを怨敵か何かの様に握り潰していた。
「俺、今程自分の乳が憎いと思ったこと無いわ」
「そこは、せめて恋人に振られた時の次って言っておきなよ」
酔っ払いにとっては往々にしてお酒の方が恋人より重要だったりするけどさ。っていうか、あんまりそれやってると、ガラの良くない男を惹き寄せちゃうよ？
「ぎゃっ!?」
「ほら、こんな風に」
「ん？　ああ、そうだな」
気障な風を装った冒険者が鼻の下を伸ばしてサルバに手を伸ばしてきたので、その指をへし折って適当に転がす。それに気付いたサルバが慌てておっぱいから手を離すと、テーブルに落ちた胸がぷるんと揺れた。
（話を戻すけど、それはアレ、この前の件が原因）
（つーと、一番最初のか？）
（そうそう）
トウトウ村のダンジョンのモンスター密度に端を発する、貴族三家を巻き込んだ騒動は規模の大きさもあって、未だに方々に深い爪痕を残している。そして、その一つが今回の件に繋がっている。

（トウトウ村は従犯とはいえ、ダンジョンの規模の縮小に伴って犯罪を犯したでしょ？
しかも国家反逆罪）
（確かにな）
（知らなかったとはいえ、というか知らなかったじゃ済まされない話だから、今後のダンジョンの閉鎖に関しては概ね締め付けを強くする方向で元老院が纏まっちゃったんだよね）
そして、その一環として、此れまで資産としての価値があるからギルドが手を出せなかった人間に関して、ギルドの正式な業務の阻害になる限り、一定の資産を放棄するっていう法案が元老院で通過したんだよね。
（つまり？）
（ギルドの本業の邪魔になる場合、平民への実力行使は多少後遺症が残っても目を瞑るって事。命取ったり、労働力として使えなくなるとちょっと不味いかもしれないけど、少なくとも四肢と目が残っていれば大丈夫）
まあ、余り大きな声でする話でもないので、〝ダンジョン・コア〟を使用して頭に直接伝えながら、僕は店員さんから受け取った麦酒をサルバに渡した。
（それともう一つ）
（あん？）

（今回の件で、ギルドの方も締め付けが強くなるかもしれないってさ）
（俺達もか？）
（うん）
（……）
（……）
（……？　どうかしたか？）
（ああ、サルバがギルドって言われて、ナチュラルに『俺達』って言ったのを見て、染まったなあって）
（うっせ）
サルバが剥いた豆を投げて来たので口を開けると、奇麗に口の真ん中に豆が飛び込んで来た。うん、美味しい。
（まあ、考えてみれば当然で、今回の件は全部辻褄を合わせた上で、ギルドがリーセン子爵を抱き込んで、全部偽レミュール男爵夫人におっ被せたけど、彼女が元ギルド管轄っていうのは結局隠し切れなかったみたいだからね）
先日の、ギルド長の少々憔悴した様子を思い出しながら、僕はその時の事を思い出す。
―概ねこっちの思い通りにはなったが、元老院もそれなりに含むものを盛った筈さ。お前達も油断するんじゃないよ―

その口ぶりはやけに真剣で、多分その言葉に嘘が無い事を暗に示していた。
（マジか……）
（うん）
ギルドでの事を読み取ったのか、サルバも俄かに真剣な表情になる。
（アルタはどう見ているんだ？）
（んー……）
そうだね……。
（理屈云々はギルド長に任せるとして、僕個人の感触だけ言うなら……）
（言うなら？）
（まあ、嫌な予感はするっていうのが正直な所かな）
（！　……そうか）
（うん）
僕が頷くと、サルバは神妙な表情で新しく受け取ったジョッキの中身を一息で飲み干した。
冒険者という何の保証もない代わりに気楽な稼業に対して、ギルドの職員っていうのは常にこういったきな臭い話と隣り合わせだからね。こういった話に敏感なのを見ると、やっぱりサルバは根っこの部分は冒険者なんだろうね。

（廃業してから半年も経ってねえから、自分でも何とも言えねえけどな）

僕の思考に、ニヤッと笑ったサルバは漸く何時ものペースに戻ったのか「さ、湿気た話も此処までだ」とジョッキを持ち上げる。

「へーい！　麦酒一つ追加頼むぜ！」

「あ、僕も米酒を追加で」

「はい、ただいまー」

それに倣って、徳利を持ち上げながら、僕も次のお酒を注文する。にこやかな店員と店内、にぎやかな仕事仲間を前に、僕の中でまたも嫌な予感がむくりと鎌首を擡げた気がした。

◆

「おえええええええええええ!!!!」

「それがこんな直ぐに的中するなんてね……」

結局、さっきの酒場が火を落とすまで飲み続けたサルバは、路地裏で毒のブレスを撒

き散らすヒュドラへと変貌していた。
「ぎぼぢわりぃ……」
「無茶なペースで飲むから……」
別に、弱いわけじゃないんだろうけど、あんな滅茶苦茶な速度で次々お代わりしていたら、蟒蛇だってこうなるって。
その（多分）小さくなってしまった背中をさすりながら、サルバがお酒を全て吐き出すのを待つ。
（ここまで飲んじゃうと、覚めるのを待つよりも吐き出させた方が安全だよね）
裏通りではそこまででも、表通りから少し入ったところには今のサルバと同じ様な溺れ蟒蛇が大勢とぐろを巻いている筈だし、いっそこのまま付き合うしかないだろう。結局、都合結構な時間を付き合った結果、サルバがコテンと糸が切れたマリオネットの様に墜落したのは結構な時間が経ってからの事だった。
一先ず、これ（サルバの死体）を運ばないといけないんだけど、どうしようかな？
「……ま、これしかないか」
少し考えたものの、直ぐに出てきた答え通り、サルバの小さな体を米俵の様に肩に担ぐ。ちょっと勢いをつけすぎたせいか「ぐえっ」と悲鳴が聞こえた気がしたけど、まあ、（どうでも）いっか。姫抱きは男同士でやるとか酔いが抜けた後に死にたくなるだろう

し、かと言っておんぶしようにも、意識の無い状態だとサルバの場合はおっぱいが邪魔で落ちる可能性が高いしね。

「……ア」

「ん？」

消去法で思い付いた方法でサルバを宿屋に運ぶために立ち上がると、肩越しに小さな声が聞こえた。

「起きてるの？」

それなら自分で立ってほしいんだけど。

「……イ……アア」

「？」

ぶつぶつと漏れ出てくる声に、一旦足を止めて耳を傾ける。

「ダァリィアァァァ」

果たして聞こえてきたのは、サルバの前の恋人の名前とそれに続く小さな嗚咽だった。

「……」

先日の件以降、余り表に出てくることは無かったけど、やっぱりまだ引き摺ってたか。

〝ダンジョン・コア〟のせいで、無駄に詳しくなってしまったその辺の事情に溜息を

吐きながら、その声を頭から追い出す意味も兼ねて裏通りの小さな星空を見上げる。
（上着、洗わないとなあ……）
背中から聞こえるぐしゅ……ぐしゅ……という音と上着を掴まれる感触につらつらと考えながら、雲一つない空の下で、サルバの宿に急ぐことにする。……まあ、今日くらいは良「ずびびびび」……、
「てい」
「はおぅ!?」
聞こえてきた粘着質の何か……というか鼻水が噴き出る音と妙に生暖かい感触に、僕は思わず短刀を引き抜いて、その柄を肩の上のサルバ（バカ）のお尻の間に叩き付けた。肩の上のサルバ（バカ）は切なげな悲鳴を上げた。けど、
「鼻をかむのまでは許したつもりないからね」
むしろ、幻痛が残っているのに、股間を狙わなかっただけ感謝してほしい。
お尻を抑えてプルプルと震えるサルバ（バカ）が肩から落ちない様に一度抱えなおしてから、今度こそ僕は、背中に着いた鼻水をさっさと落としたいという切実な理由で宿屋へと急いだのだった。

ニ

翌日、宿で今日の仕事のリストを確認していると、ギルドから呼び出しがあった。例によって予定にない急なそれに、開いていた書類を片付けてサルバの部屋に行くと、

「あ〜た〜ま〜い〜て〜ぇ……」

ベッドの上で頭を押さえる、全裸が居た。

「おはよ。水飲む？」

「の〜む〜……」

苦し気に呻くサルバに、部屋の水差しから取ってきたそれを渡すと、喉を鳴らして一息に飲み干したサルバはげふーっと大きく酒臭いげっぷを吐き出した。

「あ〜〜〜〜〜〜……」

「すっきりした？」

荒っぽく口許を拭うサルバは「おう」と小さく頷く。うん、顔色も良くなったみたいだし、これなら大丈夫かな。

「ギルドから呼び出し。緊急じゃないけど、何かあったみたい。今日、行く予定だったダンジョンは明日に回して良いから、今からギルドに来るようにだってさ」

「ん」
　頷いたサルバが投げ返してきたカップを受け取って、僕も準備のために部屋を出る。背中の方から「いちちっ」と声が聞こえてくる。幸い、その頭痛はそこまで強くは共感されなかった。

　先に用意を整えて宿の一階で待っていると、二階から水筒で口を濡らし濡らし、サルバが降りてきた。完全に二日酔いだね。んー、
「どうする？　寝てるなら僕だけで行ってくるけど？」
「んおー……」
　ギルドの呼び出しも、そんなに大した話じゃなさそうだし。
「いや、俺も行く……」
　呟いたサルバは前髪ごと目頭を押さえながら、それでも付いてくると言う。んー、ま、いっか。
「じゃあ、行こっか」
「おぅ～」
　頷きながら、付いてくるサルバの足は未だによたよたしていた……大丈夫かな？

◆

サルバと組むようになる以前から、既に数限りなくやって来たギルドは今日も今日とて、明るい日差しの下にありながら、薄暗い裏口をぽっかりと開けて僕達を歓迎してきた。

「失礼します」

そんな、陰気臭い建物の主人の部屋をノックすると、やっぱりこっちも、相も変わらないギルド長が愛用の煙管からゆらゆらと紫煙を燻らせて居た。

「ああ、来たねアル坊、サル坊」

「一緒に呼ばれると、双子みたいですよね」

アルタ

サルバ

発音が妙に似ていて、字面だけなら兄弟か何かと勘違いされても可笑しくない。まあ、実際は親戚どころか血縁的には赤の他人も良いところなんだけどさ。

「けど、〝ダンジョン・コア〟のせいで、下手な血縁よりも遥かに一心同体だよな」
「望んでも居ないのにね」
互いに肩を竦め合いながら、ギルド長の言葉を待つと、「あんたら呼吸は本当にそっくりだよ」と言われた。何故かその言葉の中に多分に呆れの色を感じる。何でだろうね？
「な」
サルバも頷くと、やっぱり呆れたように溜め息を吐かれた。
「まあ良い。それよりアル坊」
「何ですか？」
「とうとう来たよ」
そう言って、ギルド長が差し出してきたのは一通の封筒だった。
「中を改めても？」
「……」
受け取って、中から出てきたそれを開くと、真っ先に見なれない文字列が目に飛び込んできた。
「国立人工ダンジョン・ラビュリントス？」
「んん？」
僕がそれを口にすると、隣のサルバも訝しげに首を捻った。

「これは一体？」
「読んで字のごとくさ……」
　呟いたギルド長が不機嫌そうにフンッと鼻を鳴らした。んー、つまり、人が作った自然発生じゃないダンジョンと……まんまだね。
「帝国……特に皇帝はね、昔からこの国の産業や経済の大きな部分をダンジョンという天然資源に頼っている状態を苦々しく思っていてね」
「狩猟だけでは人々の暮らしが安定しないですもんね？」
　僕は思っても無い事を言ってみた。
「単に、ギルドが利権抑えてんのを気に入らねえだけだろ」
　サルバは本心を口にした。
「サル坊正解」
　ギルド長は呆れた様に溜息を吐いた。
「まあ、アル坊のは建前の方だね」
「でしょうね」
　お題目には丁度良いし。
「実際は、確かに村単位では生活が脅かされるのも多いが、国で見た場合ぽこぽこダンジョンが産まれているお陰で、決して帝国そのものは困窮はしていないからねえ」

（それも、だろうな）

（うん）

ギルド長の言葉に、僕とサルバは目配せをしあう。サルバの目は見えないけど。

僕達ダンジョン閉鎖士の仕事が無くならないのは端的に言ってしまえば閉じた端からダンジョンが産まれているからに他ならない。数日で十を超えるダンジョンを閉鎖しても、帝国全体を見れば百分はおろか千分の一にもいかない数だ。

「けど、何で皇帝が？」

「ん？　……ああ」

それね。確かに、他の元老院議員が別の元老院議員の利権を狙うなら話は分かるけど、国のトップである皇帝が利権争いをするのは傍から見るとちょっと意味不明だよね。けど、少し事情が違うんだよね。

「つーと？」

「ギルドはあくまで〝元老院の〟傘下であって、〝皇帝の〟傘下じゃないんだよね」

「んん？」

僕の回答にサルバが不思議そうに首を傾げる。

「結構勘違いしている人が多いんだけど、今の帝国は確かに皇帝陛下が頂点の国だけど、王国とかと違って、必ずしも皇帝陛下が絶対的な権力者って訳じゃないんだよ。軍事大

権とかの重要な権力の類は皇帝陛下のものなのは間違いないんだけど、経済や民事なんかは結構元老院が権利を所有しているものが多いんだ」

元々、元老院議員、つまり今の貴族のルーツを辿れば、土着の豪族の類だったりするのがその理由なんだけどね。

「あー、つまりあれか、国全体の話であれば皇帝陛下が自由にする権利があるのに対して、豪族だった時に持っていた小さな経済関連の権利は元老院議員のものって事か」

「そーゆーこと」

税金なんかが分かりやすいけど、皇帝は平民からの徴税権を持っていないんだよね。そっちは各貴族が持っていて、皇帝陛下が持っているのは元老院議員からの徴税権。平民を貴族が支配して、貴族を皇帝が支配するっていうのと、国全体で当たる案件の統括を皇帝が担当するっていうのがこの国の基本的な構造になるから、こうなるんだけど。

「成程な……ん？　だけど、ギルドは」

あ、気付いた？

「帝国全土にあるよね」

「ああ」

「そこがややこしいところでさ、ギルドは確かに帝国全体に根付いている組織ではあるんだけど、元々の成り立ちは各貴族の祖先の土地にあった、冒険者の互助組織なんだよ

ね」

つまり、平民起因の組織な訳。

「さらに加えて言うと、今でこそ帝国全土に散らばったギルドは一つの組織として動いているけれど、元々横の繋がりは無いわけだから、国全土にある組織ではあるものの、国の組織とは言い切れないところがあるんだよ」

そういう意味での成り立ちとして比較的近いのは国軍だけど、あっちは元々が今の貴族の所有物だったことに加えて、外敵との戦いの際には全て統合して、皇帝がその指揮を執ってきた歴史があるからね。その二点がギルドとは違うから明確に皇帝陛下の指揮下にあるんだよね。

「はー……」

感心したようにサルバが溜息を吐いた。何とも壮大な話だよね。まあ、末端としてはこっちに火の粉さえ降りかかってこないなら何でも良いんだけどさ。

「だな」

サルバもこくりと頷いた。

（本当にね）

裏を返せば、ギルドを支配下に置いていない皇帝はギルドが齎す資源や経済力の恩恵を直接吸い上げることが出来ない訳で、この辺が少なからず元老院議員の力の大きな源

泉の一つになっている以上、皇帝陛下としては何とかしてギルドを自分の権力下に置くか、もしくは力を削ぎたいと思う訳だ。
（これまで、少なくない数の皇帝が元老院によって殺害されている以上、猶更）
（あー……そういえば、そうだったな）
　とはいえ……
「既存のダンジョンに成り代わると言わんばかりの書き方ですけど、もしかしてこの人工ダンジョン、ダンジョンでのみ採掘できるアイテムやモンスターの採取に成功したんですか？」
「の、可能性が高いだろうねぇ」
　思い付いた疑問を投げてみると、ギルド長が溜息と共に頷いた。……成程。
「けど、何でそれを態々俺達に？」
「案件の重さを考えたら、僕達じゃなくてギルド長が対応する話ですよね」
　不思議そうに首を傾げるサルバと僕も同じ疑問を持った。
「これさ……」
「ん？」
　何だろう、この小さな紙は……
「……マジか」

「マジだねえ……」

小さく装飾が成された上質な紙片には、これまた整った文字で僕とサルバの名前が、ご丁寧にダンジョン閉鎖士とダンジョン閉鎖士補佐という肩書と共に書き記されていた。

「落成式の招待状さね」

「ですよねえ……」

まんま、招待状の上の方に書いてあるし。

「けど、何で俺達が？」

「……」

僕達末端だしね。特別呼ばれる理由は……あ、

「もしかして」

「それさ」

ギルド長が頷く。

「この前のトウトウ村の件で死んだハップルカ伯爵なんだがね、あれ、完全に皇帝派の人間だったのさ」

そっかー……。

「つまり、皇帝の八つ当たりって訳か」

サルバが不機嫌そうに唇を尖らせる。本人（皇帝）的には報復のつもりかもしれないけどね。まあ、的外れだけど。でも、成程ね。

（だから〝とうとう〟って言ったのか）

あの件だと、元老院から何かしらのアクションは必ずあると思っていたからね。その割に時間が経ったけど、まあ、その辺もハップルカ伯爵が親皇帝派って事なら説明がつくか。

（トウトウ村だけにとうとうってか）

（親父ギャグだね）

（言ったのはギルド長だろ？）

（じゃあ婆ギャグか）

「あんたら、何か失礼な事考えてやしないかい？」

「いえ、特には」

「……」

言いがかりは止めてもらいたいですね。

「まあ、そういう背景なら、僕達も行かない訳にはいかないですよね」

「……まあ、そうだねえ」

皇帝陛下様の耳に僕達の名前が入っているかは分からないけれど、これ無視したら確

実に火種になるだろうしねえ。
「場所は……クレタ島？」
見慣れない名前だね。ギルド長は知ってます？
「いや、初耳だが……皇帝の直轄地の何処かだろうね」
それもそうか。
「結構遠いな」
隣から覗き込んできたサルバが、大雑把な地図を見ながら前髪の奥で顔を顰める。ま、仕方ないね。懲罰の意味があるのかは分からないけれど、確実に含むものはあるはずだから。
「期間を考えると、一週間後を目途に準備して出発だね」
「ダンジョンの閉鎖はどうするんだ？」
「道すがらでも大丈夫な所と、手早く済ませられるところだけ終わらせておいて、後は戻って来てからだね」
面倒だけどね。
「りょーかい」
内心が伝わったのか、苦笑交じりに肩を竦めたサルバが「んじゃ、さっさと出るか」と首を傾げる。そうだね。

招待状と地図を受け取って、ギルド長に断り、部屋を出る。……あ。
「おい、どうした」
「パーティーに着ていく礼服持ってないや……」
「……」
「……」
「……俺もだわ」
だよね。
（うーん……）
「ま、いっか」
「良いのかよ」
「うん」
無理矢理呼んだのは向こうだしね。追い出したいなら好きに追い出してもらえば良いし。路銀は一応ギルド持ちみたいだから僕達の懐は痛まないし。
「ざっくりしてんなあ」
「本気になる様な話でもないしね」
どう転んでも、当てこすり以上にはならなさそうだし。
「そんな事より、朝ごはんどうする？」

「一応皇帝陛下の肝入りの話をそんな事扱いか」
字面は神妙だけど、サルバも笑ってるじゃん。
「まあな」
ケッケッケと漏らしながら歩き出したサルバがふと思い出したように振り返る。
「そういやあ、人工ダンジョンのお披露目って事は中に入る事も出来るのか？」
「みたいだね」
「って事は、手に入れた獲物は持ち帰って良いのか？」
「招待状にはそう書いてあったけど？」
「ほーん……」
「……」
そう返すと、サルバが口元に、何と言うか〝獰猛な〟という形容が当て嵌まる、粗野な笑みを浮かべる。
その表情は久しぶりにダンジョン閉鎖士ではなく冒険者としての血が騒いでいる様に見えたのだった。

◆

で、そんなやり取りがあったのが一週間前の事。

「んー!?　はっ、はふっ、ほっ!」

「冷まさずに食べるから……」

僕とサルバは件の人工ダンジョンが開かれる予定の直轄地、クレタ島に向かう船の上で、船内食に舌鼓を打ちながら、漂う磯の香りと共にゆらゆらと揺られていた。

「はい、水」

「ん!　サンキュ!」

差し出した水筒を取ったサルバはぐびぐびっと音を立てて口を冷やすと、「ふぅ……」と安堵したように溜息を吐いた。

「死ぬかと思ったぜ」

「安い臨死体験だね」

結構な頻度で人間やモンスターの区別なく殺し合いをしている人間が熱い食べ物で死を感じるとか。

「むしろ、だからだろ?　巻いた地図で殴られたって死ぬときは死ぬぜ?」

「ゴキブリか何か?」

「さして差はねえだろ。俺（ダンジョン閉鎖士）達と虫けらの間にはよ」
「まあね」
にやっと笑ったサルバに肩を竦めて返事をする。この場合、殺し合いという行為が安いのか、その程度で死を感じる僕達の命がやすっぽいのか……多分、両方だね。
「船の上の船内販売で出された焼きイカの熱さでダンジョン閉鎖士二人死亡か」
「酔っ払いのジョークのネタにはなりそうだね」
今日も今日とて帝国の酒場ではダンジョン閉鎖士の悪口に花を咲かせて、その死や無様な姿を肴にする人間が多数居るだろうし。二日くらい話のネタになって、多分誰も思い出さなくなるね。
「だな」
「ん」
頷いたサルバが「はふ～」と大きく溜息を吐く。
「しかし、良い風だな」
呟いたサルバが振り返り、揺れた前髪の間から細められた黄色い瞳が零れた。
「ん」
心底くつろいだ様子のサルバに頷き、僕も軽く伸びをしたところで、

「「「「待てやごらあああああああああああ!!!!」」」」

爽やかな磯の風に相応しくない、汚い怒号が船の奥から響いてきたのだった。

「ぬおっ!?」

「おっと」

「んごっ!?」

くつろいでいたせいか、突然のそれにサルバが思わずといった風に肩を跳ねさせる。その拍子に落ちてきた焼きイカの串をキャッチしてサルバ(持ち主)の口に突っ込むと、声のした方を振り返ってみた。

「くっ!?」

果たしてそこに居たのはいかにもといった風体のガラの悪い男数人とそれが出すドタドタとした荒っぽい足音に追われる二つの人影だった。波風に煽られてはためく艶のある長髪が、追われる二人の内の片割れが美容に気を使える程度には余裕のある女性であることを物語っていた。

(……あれ?)

突然甲板で始まった妙な事態に、はてどうしたものかと首を傾げていると、今にも囲

まれそうだったその女性が助けを求める様に辺りを見渡した。その瞬間、脳裏に妙な既視感が過った。

（んん？）

その外見は確かに美人と言うか、器量よしという感じだったけど、印象に残る程という様にも思えなかった。にも拘らず、ちらりと見えただけの彼女の顔は妙に記憶を刺激してきて……

（まあ、どうでもいっか）

そして、やっぱりぱっと思い出せなかったのだった。

まあ、別に思い出さなきゃ命に係わるって訳でもないし、どうせ他人事だし、

「……？」

と、そこ迄考えていたところで、今度は隣の方から妙に強い情動が感じられた。

「サルバ？」

どうしたのかと思って振り返った瞬間、呆然とした様子のサルバが辛うじて目に映るか映らないかのタイミングで……僕の視界はサルバの身体を中心に噴き出した強い光に覆われ、そして、まるで別の世界に吸い込まれるかの様に、意識を打ち切られたのだった。

（……ん？）

意識が再び覚醒すると、視界に広がっていたのは長閑かな田園の風景だった。

（……）

んー、これはつまりあれかな。

（〝ダンジョン・コア〟……？）

ほんの一瞬前まで居た筈の船の上とは似ても似つかない光景に引き摺り込まれた事、その中心がサルバだったこと、現象自体が意味不明な事を考えると、その可能性はかなり高いと思う。と言うか、他に可能性は無いし。

（結局、あの〝ダンジョン・コア〟が何なのかも分からなかったしね）

トウトウ村の〝ダンジョン・コア〟を浴びて、意識を共有するようになってしまった僕達はギルドに事情を説明して過去に同様の症例が無かったかを確認してもらったけど、似たようなものは兎も角、完全に一致するコアは見つけられなかった。まあ、これは仕方のない話だけど。何せ、〝ダンジョン・コア〟の持つ力は基本的に一品一様だ。

ごくごく稀に同一の”ダンジョン・コア”が見つかったりもするらしいけれど、それは殆ど奇跡的な事と言っていい。つまり、僕達は身体に宿した”ダンジョン・コア”がどんな力を持つものなのか全て理解するのは不可能に近いという事だった。そして、これ（現状）が”ダンジョン・コア”によるものだとしたら、中々に厄介なことになる。単純に、状況が意味不明だし、現時点で果たして僕の思考と身体が一致しているかも不明。というか、僕が居るのが果たしてどこなのかというのもあるし、加えて元の場所に戻れるのかも分からないと来ている。

（割と詰んでるね）

転移、或いは移動ならまだ良いけれど、最悪これが意識だけのものの場合、身体だけが無防備な状態になっている危険すらある。或いはこうしている間にも、僕の身体だけが破壊される可能性も……。

（まあ、無いよりはマシか）

とはいえこうしていても仕方ないので、一先ず腰に見えた片刃剣を抜いて、唯一可能な武装を行う。

正しく未知で正しく厄介な”ダンジョン・コア”が相手では、これが役に立つのかも、意味があるのかも分からないんだけど……

「ん？」

そんな事を考えながら、さてどうしたものかと辺りを確かめていると、不意に風の鳴る木々の間から、小さな人の声が聞こえてきた気がした。
（人……本当に人かは不明だけど、自然現象では有り得ない、生物由来の音が聞こえてきたというのは確認が必要かな）
幸い、その音は止まる様子も無く続いていたこともあり、僕に気付いた様子も無かった。
「……」
そこ迄確かめると、一先ず音を殺して、雑草を極力踏まない様に注意しながら音の主を探してみることにした。
（あ、出た）
その声の主だったらしい存在は意外と直ぐに見つけることが出来た。
木々の間を縫って少しだけ陽光が強くなったところを覗き出ると、開けた小川の畔が目の前に広がり、そして、その川辺に二人の小さな子供の姿があったのだった。
―ねえ、そんな所で何してるの？―
髪と服装を見る限り、男の子が一人と女の子が一人。その内の女の子の方が不思議そうに男の子の方に尋ねた。鈴の鳴る様なその声はやけにはっきりと、そのくせ何故か遠くに聞こえた。

―え!?―

対する男の子の方は、それほどいきなりという訳でもなかったその声に、やけに驚いた様に肩を跳ねさせてわちゃわちゃと前髪を弄った後、辺りを見渡して他の人影を探している。まるで、自分に声を掛けられたのが信じられず、目の前の女の子が本当に声を掛けた誰かを探す様に。

―……水切り……だけど―

やがて、自分以外に誰も居ないと理解したその男の子は恐る恐るといった風に答える。

(サルバだ……って、ああ)

その声に直感的に、男の子が幼かった頃のサルバであることを察する。声音も口調も似ていない筈なのに何故か確信を抱きながら、同時に吹いた一陣の風とそれに煽られた女の子の長い銀色の髪に、漸くさっきの光景の既視感の理由を理解する。

(さっきの女の人、サルバの恋人に似てたね、そういえば)

風貌の幼さや、〝ダンジョン・コア〟を浴びた直後の様なきつさが無いからか、多少ずれはあるものの、確かに遠目に見える女の子にはサルバの恋人の面影があった。

(まあ、分かったからどうしたという話でもある訳だけど)

それはさておき、じゃあどうしようかと考えていると、女の子が更にちょこちょこと

サルバに近寄りふーんと相槌を打つ。
―それ、面白いの？―
―別に……―
首をかしげる女の子に、幼少期のサルバが極力といった風に視線を合わせないよう俯きながらぽそりと返事をする。
―……―
―……―
―……ねえ―
広がった無言を破ったのは、また少女（サルバの元恋人）だった。
―君さ、両目の色が違うって、本当？―
（……そういえば、そうだったね）
少女の言葉に、普段前髪で隠されているサルバの瞳が左右で別々の色をしていることを思い出す。何か、割りと今更な気もするけど。
―ど、どこでそれを……―
個人的には今更な話だけど、当のサルバはそれどころではない様子。というか、あからさまに動揺しながら辺りを警戒するようにキョロキョロと前髪の奥の異色の虹彩を巡らせる。その仕草に、念のため僕も息を殺して気配を絶つ。

（んー……）

これはあれかな、あの眼のせいで、いじめられてたとか？

子供のコミュニティか所属する地域かは分からないものの、他人と違う容姿や風貌で爪弾きにされるというのは古今東西ありふれにありふれすぎている話だ。

―お母様が、君の眼のことを話してたから―

そんな、微量の緊張感を割るように、少女（サルバの元恋人）があっけらかんとした口調で言い放った。

―!?―

その言葉に、更に狼狽を見せるサルバ。だけど、それ以上にどうすれば良いのか分からないといった風で、蛇に睨まれた蛙の様にビシッと硬直して、動けなくなってしまっている。

―ね、両目見せてよ―

そんな、サルバの緊張に気付いているのかいないのか、或いは子供らしい緊張感のなさで無邪気に無視しているのか、サルバの元恋人の女の子は、そう言ってサルバの返事を前に、その長い前髪に手を伸ばした。そして、

―ふーん……―

ぺろりと、サルバの前髪を捲ると、しげしげとそれを眺める。あまりにも躊躇のない動きに逃げるタイミングを逃してしまったサルバはただただ呆然とした様子で、その黄

色い瞳の右目と青い瞳の左目を一杯に見開いていた。
やがて、それなりの、サルバにとっては多分永遠とも思われる時間が過ぎた頃、

―なんだ、すごく綺麗じゃない―

サルバの両目を覗き込んでいた少女（元恋人）はそう言ってぶーと口を尖らせた。まるで、期待して損したと言わんばかりの少女の態度。

―え……―

けれど、その一言が自分の眼球に劣等感と蟠りを抱えていた少年の心にははっきりと突き刺さった様だった。

少女に捲られた前髪の奥で、目の前の光景が夢か現実かも分からない様子で唯々色の違う左右の目を丸くしているサルバ。

そのまま、二秒、三秒と時間が経ち、やがて、「あ……う……」と言葉にならない言葉がサルバの口から洩れ、

「っと」

不意にじんわりとした温もりを持った胸が、次第にかぁっと熱くなっていった。

（成程ね……これがサルバの原体験か）

自分の物では有り得ないその感覚に、凡その当たりを付けながら茂みの先を見ると、少女に前髪を捲られていた少年時代のサルバが両目から大粒の涙を零しているのが感じられた。

―え？　何で泣くのよ!?―

そのサルバの様子に、少女が訳も分からずわたわたと慌てるが、サルバの両目からは唯ひたすらに涙が溢れ続けたのだった。

―

―

―

「っと」

そして、再び唐突に途切れた視界。それが同様に光を宿すと、そこには先の長閑な風景は無く、代わりにあったのは、意識が途切れる直前を絵画として切取ったかのような、記憶に真新しい潮風の最中の光景だった。

（戻って来たか……）

その視界に、凡そ自分の置かれた状況を把握する。幸い、辺りを見る限りでは時間は

一切経過していないようだし、これなら〝ダンジョン・コア〟が不意に今の状態になったとしても致命的な事にはならないかな。

（とはいえ）

それが普遍的なのか、それとも今回一度きりの話なのかも分からないし、単に内心や五感を共有するだけとは考えない方が良いかな。

「まあ、その辺は追々考えるとして」

一先ずは、

「サルバ」

隣で未だに呆然としている、先の光景の原因と思われるサルバの肩を揺すって意識を呼び戻すと、「うおっ!?」と小さく悲鳴を漏らしたサルバがビクッとその小さな肩を跳ねさせた。

「大丈夫？」

取り合えず確認。サルバは「あ、ああ……」と頷いたけど……まだちょっと動揺しているね。

と、そんな事を考えていると、不意に船が大きく揺れて甲板に居た全員ががくんとよろけ、或いは蹲く。同時に流れた強風に、その女性の髪が大きくはためいた。

「……」

その光景は、偶然にも再び先の〝ダンジョン・コア〟の光景を思い起こさせるものだったけれど、二度目という事もあってか、サルバの方から妙な光景は辛うじて流れては来なかった。まあ、

（ここまで似ていると、多少の動揺は仕方ないだろうけどね）

切れ長の眼

すっと通った鼻筋

引き結ばれた薄い唇

そのどれもが見覚えがあって、合わせてみれば先の幻想の中の少女の成長した……サルバの元恋人と瓜二つとしか言いようがなかったのだった。

「ダリア……」

（さてさてどうしたものかな……）

自分一人だったら無視するところだけど、サルバはそうもいかないよね、もしかしなくても。〝ダンジョン・コア〟越しとはいえ、あんな光景を作り出すくらいだし……。

「た、助けてください!!」

!?」

そして、サルバがじっと視線を向けていたせいか、それに気付いた女性が藁にも縋ると言わんばかりの形相で助けを求めてきた。その、悲痛さすら感じられる彼女の声音

に、心臓を鷲掴みにされた様な様子でサルバは苦しそうに豊満な胸を抑えている。
「……」
仕方ない……か。
もし、サルバが後先考えずに全てを振り切って助けようとしていたら殴ってでも止めていただろうけど、仕事とか立場と天秤にかけて、自重しながらも葛藤して苦しむなら、見て見ぬふりは出来ないしね。
「サルバ」
「!?　あ……」
案の定、軽く肩を叩くと振り返ったサルバは気まずげに視線を逸らした。
「助けたいんでしょ?」
「……」
「黙ってても分かっちゃうよ?」
主に〝ダンジョン・コア〟のせいで。
「けどよ……」
「まあ、今後の事の心配なら大丈夫……とは言わないけれど、無視しても絶対に後悔するでしょ?」
「うっ」

〝ダンジョン・コア〟で共有しちゃってるから、僕達は互いに隠すこと自体が無駄だし。

「もし、サルバが此処で後先なんて知った事かって開き直ったら殴り倒してでも止めた後にギルドで調教のし直しでも考えたかもしれないけど」

「怖えぇな!?　つか、俺が心折られる苦痛とか絶対にお前にも流れ弾になるだろ!?」

「ああ、大丈夫。僕、昔からそういうのは全然平気な性質だから」

「だろうな！」

あ、肯定した。っていうか「お前そういうのが効く様な真面な神経してなさそうだし」は酷くない？　……まあ、どうでも良いけど。

「それより話を戻すと、一応仕事仲間がこうまで葛藤しているなら、多少融通を利かせるくらいはするから、助けても良いよ？」

「……良いのか？」

「うん」

別に。

「……ちなみに本心は？」

「後に尾を引くと面倒だから、もう割り切っちゃった方が後腐れなくて良いかなって」

「やっぱりか畜生！」

「はっはっは」
　〝ダンジョン・コア〟で僕が考えている事も凡そ伝わってるんだから、それこそ今更でしょ？
「お前の感情、全然波が立たないせいで、殆ど分からないんだよ」
「あ、そ」
　まあ、それもどうでも良いか。それより、こうして〝ダンジョン・コア〟を通して漂ってくる感触からすると、サルバも大分平静に戻りつつある様だった。
（そこは良かったかな）
　もし、これで、サルバが開き直ってたら、本当に殴り飛ばして人格が変わるまでギルドに投げ込む必要が出て来てたし。開き直ったら物別れ。交渉の余地が無い訳だし。
　それこそ、別の人間にでも生れ変わってくれないとね。
　けど、後に引く様ならまだ大丈夫。互いにやりようがある訳で。
（だから）
「辻褄合わせは必要だから、ギルド長に問い詰められたときの口裏合わせは宜しくね。それだけ守ってくれたら助けても良いから」
「！　ああ」
　力強く頷いたサルバの前髪が風に靡いて、ほんの一瞬だけ両目が露になる。その内に

宿る眼光には、もう迷いは無さそうだった。うん、
「あ、でもこれは無理だって思ったら見捨てるから、その時は諦めてね」
「最後の最後にそれか!?」
叫びながら飛び出したサルバから流れてくる感情は、妙にさっぱりとしていた。……
何でだろ？

「「「「!?」」」」

ダンッ!!! と船上に響き渡った快音に、周囲がびたりと硬直する。先の諍いを遠巻きにしていた人達は勿論、忙しく甲板を駆け回っていた水夫に至るまで、その視線が快音の元、両銃を抜いたサルバに釘付けにされていた。勿論、サルバに割っては入られた男達と逃げていた女性は言わずもがな。その両目は唐突の事で驚愕に見開かれていた。
その一瞬の隙に、サルバは片方の拳銃を敵の頭らしき男に、もう片方を雲一つ無い蒼天に向けて、躊躇なく左手の引き金を引いた。
「「「「っ!?」」」」

硝煙が僅かに銃口から漂い、遮る物も無く響き渡った轟音に怯んだ一同が恐る恐る目を開ける。サルバの愛銃から放たれた必殺の弾丸の痕跡が残る左手は……真空上に向けられた方の手だった。

「ひっ！　な、なんだてめぇ!!」

自分に向けられた方の銃ではなかった。そんな安堵に突き動かされたのか、男達の頭らしい男が辛うじて先に我に返りながら、上擦った声で悲鳴混じりにサルバを責め立てた。

（どう答える？）

（んー、ギルドの事だけ出さなければ、好きに名乗って良いよ？）

その間に、流れてきた思考に、そう返すと、サルバが小さく頷いたのが見えた。こういう時は単純に便利だよね。

（ああ、そうだ）

（？）

（そっちの二人を頼むわ）

（ん。了解）

サルバのお願いに僕の方も首肯を返しながら、その小さな背中の後ろに庇われてへたり込んでいた二人の女性？　に、軽く手招きをする。

「！」

それに気付いた女性の方が最後の力を振り絞る様に、抱えた子供を連れてよたよたと千鳥足で逃げ込んできたのだった。

「あ、ありがとうございます」

「それは、あっちのサルバに言ってくださいね」

僕だけだったら絶対に見捨ててたし。……ていうか、本当に似ているね。

「お前らなんかに……名乗る程俺の名前は安くねえんだよ」

そして、ほぼ同時に、甲板のど真ん中に立つサルバがへっと鼻で笑いながら吐き捨てた。

「だとぉ!?!?」

躊躇なく弾丸を吐き出した銃口に怯んでいた男の人達も、サルバの不遜な物言いと、女の人の身柄を抑えられたことに、漸く意気を取り戻したのか、再び恫喝するような口調で吠え上げた。

（んー……）

身のこなしを見る限り、サルバならあの人数でも問題なく相手できるだろうけれど、念のため遠目に相手の姿と、そして、こっちに居る女性の方を観察する。

まず最初に目を引いたサルバの恋人に似た彼女の方は、それなりに整えられたという

べきか、特に言うべき所のない身形をしていた。旅装は街中なら目立つだろうけれど、船内じゃあほぼ全員がそんな格好だしね。強いて言うなら、その旅装が真新しくて、あまり旅慣れた様子が無い事くらいかな。

次に、サルバと対峙している破落戸の方は……まあ、見ての通りと言うか、本当に特徴も何もないね。腰回りを布で覆っただけの格好も、人足ならある話だし……、

（ああ、でも）

ぱっと見、日焼け跡一つないところを見ると、この船の正規の人足じゃなくて、日雇いか、或いは季節雇いかな？　うーん、絵に描いたようなガラの悪さだね。後は……

（この、抱えられた子の事なんだけど）

甲板に手を突き、荒く肩で息をする旅装の女の人に抱えられた小柄な誰かを確かめるために中を覗き込んでみて……、

「……」

少しだけ珍しいものを見た。

「う……」

隣の彼女と同じ様に肩で息をしながら、緩々と顔を上げたのは……

「へぇ……」

ちょっと、見たことも無い程の、美貌の子供だった。

前髪が一直線に切り揃えられた透き通るような白い銀髪に、その銀糸との境目が分からない程に白い肌。形良く、それでいて自己主張のない鼻から唇はこれも色薄く桜色のそれがつつましやかに息づいている。頬はやや上気していて、その上で固く閉じられた瞼の上ですっと長いまつ毛とこれも整えられた眉が僅かに震えていた。

端的に言って美人、それこそ、相応に整った風貌であるサルバの恋人に似た彼女の姿が霞んでしまう程の。

「……」

そして、同時に理解する。

これ程の美貌、追いかける荒くれ者、なら続くそれは容易に想像できて、

「ああ、そういう事か」

予想通り、この美貌の子供から仄かに漂ってきた僅かな精臭に凡その事を理解しながら、念のため風上に居る男達の方に〝鼻〟を向ける。少し集中する必要があったけど、こっちからも想定通り同じ臭いが鼻を突いてきた。

(犯されそうになったみたいだね……)

まあ、驚く要素も無いけど。それより、

「サルバ」

「あんっ!?」

こっちの方が重要かな。

「命だけは取らないで。それ以外なら何しても大抵は誤魔化せるから」

戦闘の幅には大分余裕がある事が分かったからね。

そう告げると、サルバの口端がにいいっと獰猛に吊り上がったのが見えた。カードはいくらでもある。その事がサルバの最後の箍を外した様だった。

同時に、流れ込んでくる感情。

―良い所見せたい!!―

（うーん、この）

日常でどんな感情や思いを抱こうがどうでも良いけれど、どうもサルバが恋人の事を吹っ切るのにはまだだいぶ時間が掛かりそうだった。いや、むしろ、あの人（元恋人）と瓜二つな人が現れたからかな？　うーん……単純な美貌だけなら、隣の子の方が遥かに上だけど、あの光景とサルバの性格を考えたら、多分目移りとかもせずに一直線だよね……、

（ま、別にいっか）

吹っ切ろうが吹っ切らなかろうが、仕事に支障が無ければ構わないし。お酒くらいは義理で付き合っても良いかな。ゲロ掛けてきたら……産まれてきたことを後悔させるけど。

「!?」

「？　どうかした？」
　無防備だったところに、いきなり背中から大声出された子供みたいな反応して。
「何か怖ええ事考えてなかったか？」
「気のせいじゃない？」
　サルバが僕にゲロ掛けてこなかったら別に怖くもなんともないからね。
「……」
「……」
「なあ」
「うん？」
「〝ダンジョン・コア〟の事考えると、普段はお前が相手だと五月蠅くなくて良いと思うんだけどな」
「うん」
「時々、お前から何の揺らめきも流れてこないことに恐怖を感じるのな」
「そ」
　それこそ、どうだって良いけど。それより前々。破落戸の人達、もう襲い掛かって来てるよ。
「うおっと」

自分に向かって伸びてきた毛深い太腕を、慌ててしゃがみ回避するサルバ。
「がんばれー」
甲板を転げて距離を取ったサルバを適当に応援する。隣で見ていた女の人が「え？これ大丈夫なの？」とでも思ったのか、目を丸くして僕とサルバを見比べている。
「だー、もう、応援するならせめて気を入れろよアルタ。こっちの気まで抜けちまうっつの」
「んー、でも、僕が気を入れても特に言う事は変わらないよ？」
むしろ、今まで通りで。
「それでも多少はマシだ。一応〝ダンジョン・コア〟で多少なりとも感情も流れてくるからな」
「そう？」
まあ、そう言うならそうだね。んー……
「取り合えず頑張ると良いんじゃない？」
多分だけど。
「はっ！　お前らしいな、くそったれ！」
僕が精一杯の応援をすると、けっ！　と吐き捨てながら、それ以上に何故か楽しそうに笑ったサルバが破落戸達に踊りかかる。

そして、何故か初めて会った時と比べて大分素早くなった感のある挙動で襲い掛かったサルバの両拳銃によって、彼らの両耳が一瞬でこの世から吹き飛ばされたのだった。

三

結局、あの後は大した波乱もなく、サルバが日雇い人足を一人残らず蹴散らして幕となった。幸い、あっちがさきの美貌の子供に手を出そうとしていたのは間違いなく、事情を聴きに来た水夫の人達に包み隠さずそれを話せば、あっさりと無罪放免となったのだった。で、

「有難うございます！」

「あ……いや」

説明が終わって甲板に戻ってきてみれば、助けたばかりの旅装の女の人に御礼を言われて、サルバがしどろもどろになっているところに居合わせたのだった。うん、

「サルバ」

「うおっ!?　な、なんだ、アルタかよ」

「なんだって酷いなあ」

一応、少しでも距離を詰められたらなんて思って席を外したつもりだったのに。そうだね、取り敢えずは、

「まるで童貞みたいだよ?」

「取り敢えずで罵倒するしか選択肢がないのかてめぇはよぉ!!」
　はっはっは。
「まあ、どうでもいっか」
「よくねえんだけど!?」
「そんな事より自己紹介でもしたら？」
　その様子だとしてなかったりしない？
「……」
「……」
「……そうだな」
「半分冗談だったのに本当にしてなかったとは」
　……まあ、別に良いか。
「半分くらいはお前のせいなんだよ！」
「それもそうだね」
「そこは否定しろよ」
　むしろそうとしか言わないし。
「えっと……」
　と、一頻りふざけていると、目の前の某さんが戸惑いがちに手を伸ばしてきた。ほら、

サルバ、呼んでるよ。
「後で覚えてろよ」
「え？　何が？」
「はっはっは。この野郎」
　良い笑顔で頸を掻き斬る仕草をしたサルバが、元恋人に似た彼女の方を向き直り、改めてこほんと咳払いをする。
「俺はサルバ……ダンジョン閉鎖士補佐のサルバだ」
「ダンジョン閉鎖士補佐のサルバさん……」
「ああ……」
　頷いたサルバが名乗った身分に少しだけ驚いた様子で目を見開いた彼女は、しかし、それ以上は触れることなく微笑を浮かべて「素敵な御名前ですね」と言った。珍しい反応だね。
「……」
　一方のサルバの方は、唐突というほどでもないんだろうけれど、予想外に彼女に誉められた事が気恥ずかしかったのか、少しだけ困ったように頬を掻いた。
「それで、そちらの方は」
「アルタです。ダンジョン閉鎖士をしています」

　此方も此方で軽く自己紹介をする。僕の方はサルバの自己紹介で予想がついていたのか、特に反応はなく儀礼的な「宜しく御願い致しますね」という言葉と笑顔が返ってきた。んー、接客に慣れてる感じがするね。

「ダンジョン閉鎖士ということは、お二人もラビュリントスに？」

　と、そんな事を考えていると、微笑を引っ込めたお姉さんは少し興味が引かれた様子で、そう尋ねてきた。んー、それ（ラビュリントス）って一応一般には流れていない名前だと思うんだけど。

　と、そんなこっちの疑問符に気付いたのか、「あ、すみません」と軽く頭を下げた彼女は改めてといった風に名前を名乗った。

「申し遅れました。私、アリアドネって言います。チゼでギルド職員をしてまして」

「ああ、成る程」

そういうことなら納得。

「それじゃあ、そっちの子も？」

「あ、いえ」

　僕の確認には、アリアドネさんは首をゆるゆると横に振った。

「実は、船内で道に迷っている内に、さっきの人達がこの子を奥に連れて行こうとするのに出会しまして……」

（ギルド職員という）

「それで、咄嗟に助けて逃げたと？」
「はい……」
ばつが悪そうに頷いた職員さんに、サルバが「なんて向こう見ずな」と内心でぼやいた。流石に口には出さなかったけど、まあ、そうも思っちゃうよね。
ま、いいや。それよりも、そういう事情ならこの子に話を聞くことになるのかな？
「何で疑問形なんだ？」
「だって、どうでも良いし」
船員さんに事情は説明し終えたし。名前に関しては興味ないし。職員さんの方はサルバが気になっていたからついでに言っただけで「うっせ」
「はっはっは」
「あ、あの……」
「「ん？」」
更に一頻りふざけていると、それまで押し黙ったまま、と言うよりは状況が理解できていない様子だった彼女？　が「助けて……くださったんですよね？」と囁くように呟いた。りんと透き通った音で、まるで上質な薄いビードロのベルのような声音だった。
「……まあ、一応？」
軽く返事を返しながら、サルバとアリアドネさんを確かめる。中身が男のサルバは勿

論、女性のアリアドネさんまでもが、盲目の彼女の微笑に見惚れていた。
（まあ、そうなるよね）
そして、その笑顔に、僕自身そんな感想を抱いていた。
先の戸惑いに満ちた表情ですら、まず見ることの無いような美貌だったわけだし、本当に笑えばこうもなるよね……。
「ありがとうございます！」
「……」
僕の返事に、固く瞼を閉じたまま、それでもぱあっと満面の笑みを浮かべた彼女が一点の曇りもなく無邪気な感謝を口にする。あーあ、サルバとアリアドネさんはそれを見て完全に固まってるし。
「長い旅路、艱難辛苦の中で心優しき方々に出会えたことと、この出会いを与えてくださった神様に感謝致します」
咲く花だけでなく、陽光すら霞むほどのきらきらとした笑顔を浮かべた彼女はそう言って胸から下げたアミュレットを握ると、穏やかな口調で神への感謝を口にする。外見の美貌に違わず、聞く人間の心を穏やかにするような、不思議な魅力らしきものを感じた。っていうか、サルバ隣にアリアドネさん居るのに、此方に見惚れてて良いの？
（っ！　……いや、それは関係ねえだろ）

内心ではそう言いながらも、サルバはばつが悪そうに頭を掻いた。
そんな、僕達の方を、神への感謝を捧げ終えた彼女が振り返る。
「えっと、申し遅れました。僕は大聖教会巡礼派の少年聖歌隊に所属しております、パーシーと申します」
「どうもご丁寧に」
成る程。
目の前の子供、彼女ではなく彼だった少年（パーシー）の言葉に僕も納得する。
大聖教会とはこの帝国のみならず、王国やその周辺の属国に至るまでに根を張る、世界最大最強の宗教団体だ。末端宗派を含めれば、その分派は数百を越えるのではないかとも言われている。まあ、実態は知らないけれど。
（というか、数が多過ぎて、細かい宗派とか覚えていられないしね）
面倒だし。ただ、一つ分かるのは、この子が名乗った少年聖歌隊という名前だ。大聖教会の中には戒律とかの理由で男女を分けている宗派があった筈で、そういった寺院では聖歌の高音を歌うために集められた少年は本職の聖歌とは別に、身分の高い司祭の性行為の相手を務めるのが常だと聞いたことがある。
（まあ、それも納得の風貌か）
正直、聞くと見るとでは大分印象も違うかな。ややなよっとした中性的な風貌をして

いるものの、単純な美しさだけならサルバやアリアドネさんよりも上……かな？　多分。

「「……」」

隣を見ると、そのサルバとアリアドネさんも少年聖歌隊については知っていたらしくあんぐりと口を開けている。ま、そうもなるよね。サルバなんて、好みの女の人前にして、関係ない男の子に魅了された訳だしね。……ぷっ

（うっせぇ、ばーかっ！　うっせぇ、ばーかっ！）

（はっはっは）

（つーか、何でお前は平気なんだよ!?）

（別にどうでもいいから?）

よく分かんないけど。

（そんな事より、少しきな臭く……ってまあ、元からきな臭いけど、警戒は一段引き上げた方が良いかもしれないね）

（？　どういう事だ?）

そう伝えると、流石に正気に帰ったらしく、にわかに真剣な表情になったサルバが揺れた前髪の奥ですっと細める。

（ほら、聞いたことない？　大聖教会って、帝国に対して何度も大型ダンジョンの拠出を

要求したことがあったでしょ）
（そういえばあったな、それ）
（うん）
サルバの返事に若干の呆れの色が混じったのに、僕は軽く肩を竦めて返した。まあ、そうもなるよね。
教会が元老院に対してA級やB級といった、都市を形成するレベルの巨大なダンジョンの拠出を要求するのは今に始まった事じゃなかったりする。というか、最早毎月ある元老院議会での恒例行事とも言われていて、誰もが一度は聞いたことがあっても、誰も気にも止めてないというのが実情だ。
元を正せば、まだ帝国が帝国になる前、各地方都市でダンジョンが散見される様になった頃、大聖教会はダンジョンを不浄なもの、或いは人の不道徳による神の小さな罰として喧伝することで信徒の獲得や勢力の拡大を行っていたとか。実際、当時はダンジョンに対する知識もなく、町中や農地に出来たダンジョンのせいで、家や農地を放棄することになった人もいたらしい。今だったら考えられないけれど、私有地にダンジョンが出来た人間なんかは、村八分にされた例もあったとか。で、それらの動きを積極的に先導していたのが当時の教会だったらしい。
風向きが変わったのはその少し後、何処の誰かはおろか、その目的すら伝わっていな

いけど、ダンジョンの中から当時貴重だった少量の資源―金品か薬草類かもよく分かっていない―を持ち帰った人間が現れたことが原因だったらしい。

その資源がどの程度貴重だったのか、具体的には分からないけれど、兎に角それを見た人達が我先にとダンジョンに飛び込み始める程度には魅力的な物だったんだろう。こうなると、人間の力は凄まじいものがあって、一度火の点いた欲望は留まるところを知らず、世界全土にダンジョンラッシュの業火は伝播していったとか。

で、取り残されたのは教会だ。よりにもよって、直前にダンジョンそのものを悪として目の敵にしていたのもあって、教会はダンジョン利権に手を伸ばすことが憚られた。いや、正確には手を伸ばそうとはした。けれど、その手順が、ダンジョンを保有する個人からの贖罪として仕方なく受け取ってやるというスタンスを取ったため、侵食するのが非常に遅れたというのが実情だった。

まあ、だれだって、少し前までダンジョンが私有地に出来てしまっただけで異端として殺害を企ててくる宗教団体に接触するなんて怖いと思うし、よしんば接触する事になったとしても、その私財をわざわざその宗教団体に渡す理由なんてあるわけもない。

そうこうしているうちに、ギルドが出来て、領主がギルドを支配下に置いて、更に今の帝国の原型が出来上がる頃には、最早教会ではダンジョンに手が出せなくなってしまっていた訳だ。

流石にその頃には教会の方もダンジョンを悪として、贖罪の為に受け取ってやるという態度は取れなくなっていたものの、それでもダンジョンの利権には未だにしつこく目を光らせているというのが実情だった。

（しっかし、恥ずかしくねえのかな。坊主が金金って）

（恥ずかしくはないんじゃない？　元々、まともな羞恥心があったらそんな事はしないし、そもそも宗教っていうのは営利団体だから）

より多くのお金を集めて、より良い暮らしをするのが宗教のというよりも、所謂組織の基本的な統一意思だからね。

（信仰よりも実利ってか）

（まあ、それ以外に数百を越える組織に対する統一言語とか存在しないしね）

少なくとも、穏便な物に関しては。

（じゃ、穏便じゃない物は？）

（暴力）

此方も此方で、最も世界に古くからある統一言語だからね。

（えげつねえな）

（そんなものだよ）

多分ね。

（ま、それもどうでもいいとして話を戻すと、この子見てて疑問に思ったんだけどさ）
（おう）
（この子の主人にあたる僧侶の身分はどれだけ高いのかな？）
（……あー）
僕の疑問に、サルバが納得半分でくしゃりと前髪を握った。まあ、そうなるよね。
（ただでさえ、僕達が呼ばれているところに、ギルド職員、ってまあこっちはそこまでか。ダンジョン閉鎖士呼んで、ギルド職員呼ばない方が意味不明だし。でも、それに加えて、この美貌の少年聖歌隊を連れてこれる程の僧侶？　はっきり言って妙だよ）
権力者が常に性欲を滾らせているとは限らないけれど、性欲に質を求めることが出来るのは基本的には例外なく権力者だ。それが、ここまでの美人の少年となると、ちょっとやそっとじゃ効かない筈だ。勿論、たまたま自分が受け持った、或いは寺院にこの少年（パーシー）が紛れ込んでいた可能性は無きにしも非ずだけど、ここまで来ると単に一寺院程度がこの子を維持できるとはちょっと思えない。
「あ、あはは、そっか、パーシー君は少年聖歌隊なんだね」
僕とサルバがどうにもきな臭さを感じながら〝共有〟で会話をしていると、やっと混乱から解けたらしいアリアドネさんがばつが悪そうに頬を掻きながら彼女ではなく彼に謝罪をする。その横顔は相変わらず美人だったけれど、少年聖歌隊から何かしら良か

らぬことを連想したらしく、若干の紅潮が見て取れた。んー……
（良かったね、サルバ）
（何だよ、出し抜けに？）
（ほら、アリアドネさん、少年聖歌隊の名前聞いて顔紅くしているでしょ？）
（……おう）
（顔を顰めても居ないし、それなりにエッチな事に興味があるんじゃないかなって）
（てめぇの尻穴今から三つ四つ増やしてやるから四つん這いになりやがれ糞ったれ）
（はっはっは）
まあ、どうでも良いや。
「……」
それよりも、彼の上司（パーシー）にあたる僧侶が誰なのか、そっちの方が気になるかな。この船に乗ってるなら相手に気付かれずに確認したいところではあるんだけど……変に聞いてもね。
居ても船室か何処かかななんて考えながら、甲板を見回していると、不意に上のマストから「見えたぞ！」という潮風に潰れた枯れ声が降ってきた。
「ん？」
上空を見上げて、見張り役らしい船員の視線の向きを確かめて、そっちを振り返るけ

ど、僕の目にちょっと見えなかった。サルバ、見える？
「んー……あれじゃねえか？」
「どれどれ？」
船の舳先の方を向いたサルバが少しだけ遠くを睨み、直ぐに見つけたらしく何も見えない水平線の一点を指差す。その視線を〝共有〟で覗いてみれば、確かに小さな点がぽつりと見えた気がした。確かにあれっぽいね。
「まだ着くには時間も掛かるだろうが、荷物だけ持ってくるか？」
「そうだね」
首を傾げるサルバに僕が頷く。前髪の奥から見えた青い左目が普段よりも随分遠くを見てズレた調子を整えるためにか二度三度と瞬いた。同じ銃器使いとはいえ、狩人でもないのに、目が良いよね、サルバって。
「え、サルバさん、もしかして見えたんですか？」
とか考えていたら、同じ事を思ったらしいアリアドネさんがサルバの左目と同じ青い目を丸く見開いて、感心したようにパンッと手を打った。
「あ？　ああ、まあ……」
「凄いです！　やっぱりガンナーさんって目が良い方が多いんですね！」
その声音に、少なからず込められた尊敬の念に、戸惑い勝ちに頷くサルバ。そんなサ

ルバの飾らない（飾る余裕が無い）態度が益々感心を買ったのか、アリアドネさんは身を乗り出して、サルバの左目を覗き込む。

「それに、凄く奇麗な目じゃないですか！」

（まさか、彼女もそれを言うとはね）

一瞬、空気が硬直したのは、多分錯覚じゃないと思う。と言うか、サルバがはっきりと顔が引き攣ってるし。

（まあ、あの光景の事を考えると当然と言えば当然か）

ほんの少し前に見た遠い過去の話が、記憶が新鮮な事もあり脳裏に鮮明に蘇ってくる。まして、その元となったサルバ本人の胸中は言うまでもないだろう。

（偶然にしちゃ出来過ぎな気もするけどね……）

まあ、流石に無いだろうけれど、髪と瞳の色、後は僅かな雰囲気以外はほぼほぼサルバの元恋人と瓜二つの彼女の口から出てきた、サルバの原体験の異口同音。それが、齎すサルバへの影響は驚天動地に決まっている訳で。実際に歓喜とも悲哀ともつかない

混乱が現在進行形で〝共有〟を通して僕の脳裏にも押し寄せてきている。……うーん、

「サルバ」

一先ず、意識を引き戻すために、少し強めに肩を揺すると「うひゃっ!?」とサルバは悲鳴を上げた。

「あ、す、すみません!」

そのサルバの悲鳴で、距離が近すぎたことに気が付いたらしいアリアドネさんも慌てて身を起こして距離を取る。

「私ったらつい」

「あ、いや、分かってくれりゃ別に……」

ごによごによと呻くサルバとアリアドネさんが互いに赤面して俯いてしまう。まあ、別に問題は無いんだろうけどね。褒められたこと自体は嬉しかっただろうし。……でしょ?

(……うっせ)

その前髪で表情を隠したサルバは、〝共有〟を使って、何とかそれだけを口にした。

ま、それも良いや。それより、僕が荷物取って来るから、サルバはアリアドネさん達と話していたら?

(ちょ、おま、この状態で置いて行くのか!?)

（別に放置はしないって。〝共有〟で繋いでおいて貰ったら、急いで戻って来るからさ）

と言うか、流石にこの状態で手綱放したらサルバも却ってきついでしょ。

（うぐ……）

（でも、だからといって、今話さなかったらそれはそれで後から後悔するでしょ）

多分だけどさ。まあ、サルバがきついって言うなら、残ってるけどどうする？　どうせ荷物なんて口実だから、サルバが残ってて欲しいって言うなら残ってるけどさ。

「……」

むっちりと押し黙ったサルバから物凄い葛藤が流れ込んでくる。まあ、どうでも良いから気にもならないけど、やっぱりサルバとしては悩ましい所だよね。節操とかの話もあれば、目の前の彼女は見た目こそ似ているものの、サルバの元恋人とは全くの別人な訳だし。

（……頑張ってみるわ）

やがて、たっぷりと悩んだ末に、サルバの心からそんな言葉が流れてくる。うん、きついだろうけど、頑張って。

（おう）

そこ迄距離も無いし、僕も直ぐに戻って来るからさ。

「……」

頷いたサルバが、軽く深呼吸をするのを見ながら、アリアドネさんが「えっと……」と小首を傾げる。ああ、そっちのフォローは必要かな。

「すみません、余り言われ慣れていないからか、ちょっと驚いたみたいなんですよ」

サルバが呼吸を整える間、時間稼ぎ兼軽い地ならしがてらそう告げると、アリアドネさんが「ええ⁉」と声を上げる。ま、嘘は言っていないから良いでしょ。

「そんな、勿体ないですよ！　サルバさんの周りの男の人達は見る目がありません！」

……あれ？　それ、僕も含まれる？

「アルタさんはおっしゃらないんですか⁉」

「僕とサルバはそういう関係じゃないので」

というか、同性同士だし。

（つか、野郎に言われたら額に風穴開けて、でこで煙草吸える様にしてやるところだ）

だろうね。最近じゃ〝ダンジョン・コア〟のせいで考え自体が筒抜けだし、まあ無いよね。

（お互いにな）

そう言って、サルバが肩を竦める。どうやら、心の準備は整ったみたいだね。

「けどまあ、言われて嫌って訳でもないでしょうから、宜しかったらアリアドネさんが世の男性の分までサルバの良い所知ってあげてくださいね」

（アルタてめぇ!?）

はっはっは。

「分かりました、その分私が！」

再び動転するサルバの前で、アリアドネさんがふんすっと両手を握る。うん、じゃあ僕は荷物取って来ようかな。……ああ、あと一つ。

「ただ、サルバもこういうのは慣れてないので、お手柔らかにしていただけたらと思います」

「分かりました」

頷いたアリアドネさんが「でも」とサルバを振り返る。

「本心でしたからね!!」

「お、おう……」

そのきらきらとした目の光に、何とかそれだけサルバが頷いたのを見届けて、僕は船上を一先ず後にしたのだった。

そして、

「へぇ……」

船室から戻り、ぎこちないながらも距離が詰まった様子のサルバとアリアドネさん、あとついでにパーシー君を遠目に見ながら、いつの間にか大分近くなったクレタ島に、正確には船上から見える巨大な牛の形の建造物に少し目を取られる。一見、小さな港町に見える筈のなかで、その牡牛の形をした建造物だけが明らかに異様な存在感を放っていた。

「……」

同時に、潮風に満ちている筈の船上で明らかに異質な生臭さと鉄錆の綯交ぜになった臭い。

（成程ね……）

どうやら、夢中になって会話をしていたサルバ達も気付いたらしい。

（あれが、国立人工ダンジョン『ラビュリントス』か……）

その、雄々しくも奇妙な造形に、僕は何となく片刃剣の柄を撫でたのだった。

◆

次第に大きくなったクレタ島が一望できる様になった頃、船内に居たほぼ全ての乗客が甲板の上に出て、その中心に居座る巨大な牡牛の形の建造物の威容に唯々目を奪われていた。

「……」

ぱっと見た限り、冒険者やギルドナイト、ギルド職員が多く、次いで、見るからに身分が高そうな人達。多分法衣貴族か何かだろうけど、中に一人だけ一目で元老院議員と分かる衣服を身に纏ったお爺さんが居た。

(あれが、今回の主賓……かな)

何となく、そんな当たりをつけながら僕は欄干に軽く身を預けた。正直、さっきから鼻を突いて来る腐臭悪臭が大分酷くなってきている。

(実験施設だから仕方ないとはいえ……)

機密の維持の意味合いもあるんだろうけれど、島としては非常に小さめだったクレタ島は半日と掛からず島を一周できるであろうサイズな事もあり、恐らく島の何処に居ても〝ダンジョン・コア〟の臭いを嗅ぎ続ける事になるだろう。まあ、そういう意味では小さな島というのは不幸中の幸いだったかもしれない。潮風のお陰で通気性は良いだろうから、澱む感じは無いだろうし、海辺に行けばある程度この悪臭も誤魔化せるだろう。それよりも、

（悪臭……か）

この臭いの強弱なんかは余談で、本当に重要なのはこの悪臭が存在するという事実の方だろう。

（これが人工ダンジョンの臭いなんだろうけど、少なくともこの悪臭に関しては普通のダンジョンとは大差ないっていうのが正直な感想かな……）

そして、この近似性がダンジョンの作りにも波及しているのだとしたら、このラビュリントスは本当に人工的にダンジョンを作る事に成功したと言っても良いのかもしれないね。

「っと」

そんな事を言っていると、どうやら船が接岸準備に入ったらしく、大きな水しぶきと共に投げ入れられた碇によって船が急停止し、船体ががくんと大きく揺れたのだった。

（ま、それもこれも後の話かな。一先ずはラビュリントスがどういったものなのかを知らないと、話も出来ないし）

そして、そんな事を考えながら、僕は船首の辺りで手を振るサルバに手を振り返して。取り合えずは仕事仲間と合流する事にするのだった。

「ようこそ！　この世で初めて人の手によって生み出されたダンジョン・ラビュリントスと、我らが島クレタへ!!」

船から下りた僕達を含む乗客を迎えたのは、奇麗に舗装された石畳の上に整列していた、一目で知識人と分かる出で立ちの人々。老若男女の別はなく、ざっと見た限りでは相当に若い子供も居れば、棺桶に片足を突っ込んで居そうなお爺さんお婆さんの姿もあった。

（ふーん……）

（？　どうかしたのか？　アルタ）

ん、そうだね。

（何て言うか、本当に掻き集められるだけ掻き集めたって印象だなと思ってさ）

研究者に限らず、人を集めて何かをする時というのは普通は人を集めるにあたってその人間の身分や立場、それに人脈がそれなりに考慮されるわけだけど、その辺が考慮されているようにはとても見えない。本当に、掻き集められるだけ掻き集めたって印象だ。

（こうしてみると、皇帝は意外と力を持っていないのかな？）

この落成式の招待状の送り主の事を思い出して、そんな考えていると、視界の端にさっきの元老院議員と思われるお爺さんが入る。

（……ふーん）

鷲鼻の奥にある視線は鋭く、一見ゆったりとした振舞の最中でもこの島全体と目の前の学者を品定めしているのが伺える。本人の風貌のせいで、気付いていないが、単純に刺々しい雰囲気を振りまいている訳じゃなくて、かなり辺りを警戒している様にも見えた。

「私は偉大なる皇帝陛下よりこの島を預からせていただいております責任者、まあ、一応市長などと名乗っております、アステーと申します！」

そう言って、大仰に両手を開いた市長、アステーと名乗った白髪の、帝国の貴族にしては珍しく奇麗にひげを剃り落した老人が快活な笑みと共にそう言った。

「さ、それでは早速この島を案内させていただきます。どうぞ、我々についてきてください。中々どうして外の方には伝わりにくいですが、この島には帝国の英知が詰まっておりますからな！　唯物的な見方に慣れた方々では中々理解が及びませんが、人は理解の及ばぬ知啓を前にすると、唯々惑い迷うしかなくなる物なのです！」

そして、また哄笑すると、後ろを振り返ることなく市長？　はスタスタと歩き出したのだった。

（何か、厭味ったらしい爺だな）

（まあ、こういう所に押し込められている時点で鬱憤とか僻みとか妬みとか溜まってそ

うだしね）

法衣貴族でも本当に優秀な人は中央で秘書官とかになっている以上、此処に居る時点で最上位層とは見られなかったって事だし。加えて元老院議員を態々呼んでご高説垂れるあたり、相当自己顕示欲も強そうだしね。それが、こんな殆ど監獄染みた実験島に押し込められたらこうもなるんじゃない？　ま、どうでも良いけど。それより、宿泊施設の方が大事だよね。

（まあ、そうか）

実際、改めて眺めた町並みは建造物や道々の設えこそ良いものの、ちょっと極端なくらいに家屋が密集していて、正直窮屈な印象が否めない状態だった。多分、目の前にある巨大なラビュリントスの範囲を可能な限り確保するための処置だったんだろうけど、ちょっとギリギリもいい所だよね。

流石に、将来的に冒険者を誘致する必要もある以上、仮でもある程度の宿泊施設があると思いたいところだったんだけど……さっき遠目に見た時、それらしい施設が見えなかったんだよね。

「さて！」

（お？）

と、そんな事を言っていると、住宅地の真ん中に置かれた広場の中心で、先頭を歩い

ていた市長がくるりとこっちを振り返る。
「さて、今まで貴方達では体験のしようも無かった我らの英知に一瞬一秒でも早く触れて肖りたいという皆様の気持ちは痛い程私に伝わって来てはおりますが！　しかし、矢張り物事には順序というものがありましてね！　ええ、それがこの、皆様にお渡ししております招待状！　そう！　須らく偉大な業績というものは、常にその格に相応しい儀礼というものが存在致します。今回私達が作り上げた英知は当然ながら、それだけのものを必要とせずにはいられないものなのです！」
「これも、偉大な業績の罪というものですねえ」と市長が心底嘆いているかの様に頭を振る。……まあ、どうでもいっか。
（の、わりに面倒臭そうだな）
（実際、面倒くさいからね）
　話長そうだし、やたらと回りくどそうだし。
「ですが皆様、どうかご安心を！　私は貴方達の様な方でもなけなしの身繕いをしていただくだけの時間を用意しております！」
　別に要らないんだけどね。
「我々、クレタの学者一堂、英知の徒として、迷える貴方達を受け入れる用意がございます！」

「「……」」
「これから、皆様のお名前を順番に呼ばせていただきますので、呼ばれた方は手を挙げて此方へ来てください！　我々、優秀な英知の民が皇帝陛下の代理人として皆様を受け入れる次第です！」
　ほら、やっぱり。
（無駄に長えくせに、言いたいことは要するに間貸しだよな）
（うん）
　むしろ、そうとしか言わないよね。
（と言うか……）
　落成式すら開いた状態で、冒険者の誘致の用意が整っていないって、ちょっとおかしい……いや、そもそも秘密の実験施設として、態々本土から隔離させて交通の便の悪いこんな場所に置かれた施設な訳だから、元から大規模な人の誘致は考えていない可能性の方が高いか……あれ？
（それってつまり……）
（こいつらの英知は兎も角、こいつら自身は……）
（初めから使い捨てのつもり……）
　だよな？　と首を傾げるサルバに、僕も首肯を返す。断定はできないけど、その可能

性は相当高いよね、実際。この研究所だって放置する訳にもいかないし、落成式の開催を報告した時点で知識の類は帝国、というか皇帝陛下が吸い終えている筈だし。

この玉石混交状態を見る限り、流石に消したりなんだりってのは想像できないけど、彼ら全員をこの島から出すって事も同じく無いんじゃないかな。

（何か、此処まで来ると、いっそ憐れになってくるな）

（だね）

心底どうでも良いけど。

と、僕達がそんな事を話していると、呼び出しが始まったのか次々に招待されたギルド関係者達が所属と名前を呼ばれていく。

「お」

「ん？」

隣のサルバが声を漏らしたのを聞いて顔を上げると、さっきの船の少年聖歌隊、パーシー君が一人の厳格そうな修道士に手を引かれて、衆目の前に向かうのが見えた。

その美貌に気が付いたのか、彼に近くを歩かれたギルドナイトの何人か、そして、前で彼らを待っていた学者達が皆一様に揺れるパーシー君の銀髪と震える長いまつ毛に魅了された様に呆然と立ち尽くしていた。

（ふーん……）

そんな周囲の反応のお陰で、彼の手を引いた修道士、多分、身形から推測するに相当に身分が高い修道士の方をじっくりと観察することが出来た。

堅く閉ざされた口元に豊かに蓄えられた口ひげ、鋭い眼光、彫りの深い風貌に奇麗に剃り落された頭髪。先の市長とは真逆の所を剃り落した風貌が妙に対比になっていた。

「……」

とはいえ、目新しいところはせいぜいそのくらいで、足運びや所作には洗練されたものはなく、ごくごく普通の修道士といった印象だった。

（見込み違いだった？）

余り、有り得ない可能性だけど、それもありそうかと思ってしまう程度には、平々凡々な雰囲気だった。

「ロハグギルド所属！　ダンジョン閉鎖士、アルタ！　同じくダンジョン閉鎖士補佐、サルバ！」

と、そうこうしているうちに僕とサルバの番が来たのか、市長のやたらと通る声で名前を呼び上げられた。同時に、少しざわつく広場。周囲の視線がやや遠慮がちに僕達に向いて来るのを感じる。

（まあ、当然か）

折角のダンジョンの落成式に、よりにもよってダンジョン閉鎖士を呼ぶなんて、今一

理由が読めないよね、実際。

「……」

サルバも、そんな周囲の視線に肩を竦めながら、ぼりぼりと頭を掻いて前に進み出る。

ま、そうしないと、今日の宿が無い訳だしね。

「ふむ！　貴方達お二人が！　成程！」

僕とサルバが前に出ると、ジロジロとぶしつけな視線を向けてきた市長が二度三度と大きく頷いた。いや、何が成程なんだろうね。

やけに長い品定めにややうんざりしながら市長に視線を向けると、

「おや、もう待てないですか」

「せっかちですね」と肩を竦めた市長がやれやれと首を横に振る。そして、「キリエさん！」と研究員の集団に向かって声を掛ける。

「え、わ、私ですか？」

果たして、市長の言葉に呼ばれて出てきたのは僕とサルバよりやや年下の、外にはねた毛先が特徴的なショートカットの女性だった。

その女性は自分が呼ばれることは無いと思っていたらしく、驚いた様子で自身を指差していた。

「ああ。もうほぼ皆が埋まってしまっていてね」

それに応えた市長が困った様に肩を竦める。
「勿論、貴女の気持ちも分かります。自身より知能が著しく低い方達とは会話自体が成り立たない事も殆どですからね！　ですが残念ではありますが、これは上からの指示ですので！」
そう言って、その少女の学者の背中をこっちに押し出してくる市長。小柄とまではいかないものの、細身の女性が大の大人に背中を押されたせいか、ややよろけながら僕とサルバの前に彼女は進み出てきた。
「あ、えっと、キリエよ。クレタで研究員をやっていて……まあ、宜しく」
「どうも」
「宜しく」
戸惑いながらも、やや砕けた口調でそう言った彼女に、僕とサルバも軽く自己紹介をする。それに二度三度と頷くと、彼女は「じゃあ、ウチに案内するから着いてきて」と言って踵を返す。
（ふうん……）
その背中を追い掛けながら、僕は一瞬前の事を反芻する。
彼女が戸惑った瞬間と自己紹介をしてきた瞬間。アーモンドの様に形の良い両目に僅か、本当にほんの一瞬だけど……拭い難い憎悪の色が見て取れたのだった。

まあ、ダンジョン閉鎖士を憎む理由なんて、それこそダンジョンを閉鎖されて村が消えたり、一家が離散したり、特に理由も無かったりと、それこそ挙げればキリがない訳だけど。

（つまり、何時も通りって事じゃねえか）

（まあ、その通り）

むしろ、本当にその通りかな。

（とはいえ）

既に大分きな臭かったこの旅路が、更にきな臭いものを帯びた様な気がしたのだった。

四

「ここが私の家よ」

市長からの顔合わせの後、案内されたキリエさんの家を見て、隣のサルバが小さく「へぇ……」と声を漏らす。僕もその驚きには同感かな。

先を歩いていたキリエさんが指さした家は白い煉瓦で作られた、石畳同様の設えの良さながら、一回り程、ひしめき合う隣家と比較して横にも縦にも大きかったのだった。そして、凡そこのクレタ島の成立ちを考えれば、市場原理なんていうものがある筈も無い訳で。

（と、いうことは）

「キリエさん、凄く優秀なんですね」

老若男女、それこそ、彼女よりも年嵩の研究員も相当居たにも拘らず、それでもキリエさんにこの家が支給されているという事は、つまり、それだけ市長か皇帝陛下かは分からないけれど、この土地を采配する権利を持った誰かしらが、彼女の能力をそれだけ買っているという事だ。

「……多少、運が良かっただけよ」

一瞬動きを止めたキリエさんは形だけの謙遜をぽそっと吐き捨てると、ポケットから大きめの鍵を取り出して僕達を促す。その声音がほんの少しだけ硬くなるのを、僕もサルバも聞き逃せなかったのだった。

キリエさんが開いた自宅のドア。漆塗りの黒いそれの奥では、丁度ホールの真ん中で忙しく掃除をしているおばあさんが入り口のベルの音に顔を上げたところだった。

「お帰りなさいませ、奥様」

「ええ、ただいま。モーラさん」

そう言って、折り目正しく一礼をする使用人のお婆さんに、キリエさんは軽く頷いた。

(奥様か……)

年齢的には、多分僕やサルバと同じか少し若いくらいで、奥様というよりはお嬢様の方が似合う年格好に見えるけれど……成る程ね。

(彼女、掛け値なしに優秀みたいだね)

自宅からも察してはいたけれど、それに加えて年嵩の使用人のお婆さんが相応の敬意を躊躇いなく見せていて、その上僕(ダンジョン閉鎖士)達に隔意を持っている。となると、本当に自分の腕一本で、今の地位まで来たって事だろうね。

「此方の方々は、今朝お伺いしておりました？」
「ええ」
首肯し、「二人を客室まで案内してもらえるかしら？」と尋ねるキリエさんに、「承知致しました」と頷く使用人のお婆さん。
「それでは此方へどうぞ」
そして、澱みなく僕達を促すと、くるりとホール奥の階段に足を向ける。手入れの行き届いた銀色の髪ながら、前を歩く背筋はすっと通っていて、品の良さと矍鑠とした印象のお婆さんだった。

「此方でございます」
そう言って、使用人のお婆さんが開いてくれたのは、二人分のベッドが置かれた一室だった。
「ありがとうございます」
取り敢えずお礼を言って、軽く中を確かめる。殆ど隔離施設のようなこの島で、それでも室内はきちんと手入れが行き届いていて、本来嗜好品であるはずの花が一輪、綺麗に形を整えられて、花瓶の上で七分程に咲いていた。

「今晩のお食事は」
「滞在中の僕達の食事でしたら、適当に部屋の前に置いておいていただけますか？　滞在中に公開頂いた情報などを纏めたり、割とキリエさんと時間が合わない事も多いと思うので」
　そんな使用人さんの業務確認に、適当に思い付いた口から出まかせを告げると、「承知致しました」と頷いたお婆さんは来た時と同じく奇麗な姿勢で一礼をすると、矢張来たときと同じ様に颯爽とした足取りで下の階へと戻って行ったのだった。
「アルタ？」
　やがて、彼女の背中が階段の奥へと消えたのを見届けると、隣のサルバが不思議そうに首を傾げてきた。そのサルバに「一先ず入ろ」と促すと、サルバが「おう」と頷きながらも前髪の奥の視線で「どうしたんだよ？」と語り掛けているのを感じた。
「ま、追い追いね」
　それだけ告げると、少し首を傾げたものの、サルバは何も言わず、こくりと頷いたのだった。

　客室に入り荷ほどきを終えた僕とサルバは、旅装を脱いで軽装になると、部屋の中央

に置かれた二台のベッドの間に向かい合うようにして座り込む。
（んで？）
　両足を開いてボフッとベッドに腰を下ろしたサルバは、右膝で頬杖を突きながら、前髪の隙間から覗く青い視線と共に〝共有〟でさっきの続きを促してくる。
（何を警戒してんだ？）
（そうだね……）
　〝共有〟からは特に流れていないはずの僕の感情を読み取って、敢えて〝共有〟で話し掛けてくるサルバに軽く肩を竦めながら、僕は何処から話したものかと思案する。と、言っても今しがたの話の理由はたった一つなんだよね。要するに、
（毒殺対策）
（いきなり物騒だなおい）
　そう？　でも、状況を考えると、そんなに不自然でもないと思うよ？
（ってことは、お前はあの研究者のねーちゃんが俺達に毒を盛ってくる可能性があると見てるって事か）
（絶対とは言わないし、むしろ確率そのものは低いと思うけどね）
　けど、その低確率を引いたら悔やんでも悔やみきれないし。そうなる前に対策しておいた方が良いでしょ？

（そりゃそーだが）

頷きながら、サルバはまだ疑問が湧くのか、少し考えるように首を傾げる。そうだね……、

（さっきのお婆さんの使用人さんなんだけどさ）

（ん？　ああ）

（あの人を……付けられてるか雇えているのかは分からないけど、使っているって事は、エリカさんの立場は単純に優秀な研究者って位置付けよりも一段か二段は上なのかもしれないと思ってさ）

（つうと？）

（ほら、あのお婆さんが歩いていた時の姿勢）

（……あー）

僕の言葉に、腰高ながらも体軸にぶれを感じさせない使用人さんの歩みを思い出して、サルバはストンと腑に落ちた様子で頭を掻いた。

（単なる家政婦なら、あんな歩き方出来る訳がねーからな）

（後は、部屋を開けた時のお婆さんの手は特段ごつごつしていたり、荒れた様子も無くて、むしろ奇麗に手入れされていたよね）

ついでに思い出したことを付け加えると、サルバが内心で（成程な……）と呟いた。

（つまり、彼女が使用人として専門の教育を受けた、或いは長年実践してきた人って事で……）
（良くも悪くも本職って事か。それも、相当金の掛かる）
（そーゆー事）
そして、そんな人を使う権利を持っているという事は彼女（キリエさん）はそれだけの力を持っているという訳で。まして、それがこんな機密塗れな上に人口密度が高い孤島でだとしたら……ねえ？
（俺達一人二人消しても、さして問題にならねえ御身分って訳だな）
（そうそう）
確かめるようなサルバの隠れた視線に頷き返す。
（そんな相手と食事なんてしてたら、勧められた料理なんかは全部手を付けない訳にもいかないでしょ？）
っていうか、一々毒見なんてしてられないしさ。
（ま、確かにな）
僕の説明に納得したように、サルバは深く頷いた。……、
（んで、何割嘘なんだよ？）
（六割くらいかな？）

そして、当然の様に疑ってくるサルバに、憐れな僕はあっさりと本音をゲロしたのだった。初手から疑ってくるなんて、サルバも酷いね。
（何が酷いだっつの。お前がその程度で止まるタマかよ？）
（まあ、どうでも良いと思ってるけどさ）
興味ないし。
（毒殺の可能性があるってのは……本当なんだろうな）
（よく分かったね）
特に何処が本当なんてのは言っていないのに。
（誰がどういった立場とか考えずに、身も蓋も無く一番やばいのがそこだったからな。お前はそういう所は気を使う性質（タチ）だしな）
（まあ、そうだね）
というか、それ以外に気を使う必要は感じないし。
（あの女の素性は？）
（当てずっぽう。けど、根拠がないでもないくらい？）
確証は皆無だけどね。ダンジョン閉鎖士に殺意を向けてくる人間は本当に多種多様で老若男女関係なしだけど、身分と理由は結構絞れるからね。大抵は平民で既に生活が破綻していたくせに、ダンジョンの閉鎖のせいで全てを失ったなんてお門違いな恨みを

燃やしている人が殆どだから。
（僕達が閉じてきた村の大半がそうだったでしょ？）
（にべもねえな）
（けど、事実だしね）
トウトウ村の件がむしろ例外中の例外で。
（まあ……な）
頷いたサルバの前髪が揺れて、少しだけ顰められた左目（青）に反射した光がきらりと揺れた。
（で？（町の探索をバレずにしたいから）
（残りの六割は何なんだ？）と言い掛けたサルバに、さっさと答えを言ってしまう。
（……）
（……）
（……町の探索？）
（うん）
町の探索。
（何かあたりでも付けたのか？）
（んーん）

きな臭いものを見つけたのか？　と尋ねてくるサルバに、僕は首を横に振る。むしろ、この島以前に、招待状そのものがきな臭いからね。目途とかあたりを付けるのは不可能かな。全部が全部胡散臭いし。

（逆に言うと、外に出りゃあ胡散臭さの入れ食いって訳か）

（明日以降はまた変わると思うけどね）

そう言って首を傾げたサルバに、今度は僕も首肯を返す。

（明日以降は何か違うのか？）

（うん）

決定的って程ではないけどね。

（つーと？）

（ほら、明日は人工ダンジョンの落成式があるでしょ？）

（ああ）

（だから、今日は外に出してくれないし、出ようとしても「明日の楽しみに取っておいてください」とか「サプライズは公開されるまで待っているものですよ」とか適当な事を言って無理矢理思いとどまらせられる可能性が高いと思うんだよね）

実際は落成式まで表にしたくないっていうよりは最後の最後まで完了していない作業を続けているか、仮に準備が出来ていても点検を繰り返しているんだろうけどね。イ

ベントなんて大抵そんなものだし。
（で、お前はその相手が全てをオープンにするよりも前に修羅場をこっそり見ておきたいと）
（正確には修羅場の際に隠しそびれた、相手の見られたくない何かを見ておきたいってのが正確かな）
　修羅場そのものはどうでも良いし。
（どっちにしろ悪趣味じゃねえか）
（そうとも言うね）
　と、いうかその通り。
（勿論、今日や明日以降も明日以降で外には出るつもりだけどさ）
　どうせ、落成式が終われば名分も立たないから勝手に出ても文句言われる筋合いは無いし、必要なら別に剣を抜いても良いんだけど、それはそれとして明日以降は島外の人間を宿泊施設に隔離するだけの名分が無い事はこの島の研究員も分かっているだろうから、機密情報なんかを外に出している可能性があるのは今日が最後だと思うんだよね。と、いう訳で、
（サルバ、ちょっと行ってきて貰える？）
（この流れで俺に振るのかよ）

僕が行ってきても良いんだけど、サルバの方が小柄だし、日中に隠密行動取るなら僕より適任でしょ?
（ムカつく笑顔しやがって）
（サービスで笑ってあげたんだから気持ちよく出発しなよ）
（ぼで～）
（ぐふっ　……って、蹴るの?）
（届かねえんだよ。小柄だから）
（体が男の頃なら届いたの（ふんっ!）
言い切る前にベッドから跳躍してドロップキックを顔面目掛けて放ってくるサルバの身体を、空中でキャッチしてそのまま換気の為に開け放たれていた背中の方の窓から投げ捨てる。
（ぬおおおおおおおおおおおおお!?!?!?）
うん、見事な悲鳴。ま、片刃剣の腰紐を追いかけて投げ下ろしたら、直ぐに手応えがあったから全然大丈夫でしょ。
（このままお前も引き摺り下ろしてやろうか糞野郎）
はっはっは。
脳内に響く怨嗟の声に窓から顔を出して下を見下ろすと、片腕に僕の片刃剣の腰紐を

巻き付けたサルバがスタッと軽い足取りで着地した所だった。なんだ、やっぱり大丈夫じゃん。

（うっせ）

中指を突き立ててきたサルバに親指を下ろして返しながら、僕は右目と左耳を〝共有〟する。すぐに視界が変わり、そろそろ見慣れ始めた感のあるサルバの黒い前髪が、しなやかに目の前で揺れた。

（じゃ、気を付けてね）

取り合えず、安全第一、無理はしない範囲で、出来る限り宜しくどうぞ。

（おう）

頷いたサルバが音もなく二三歩歩き出したところで、ふとその歩みを止める。

（？　どうかした？）

（直前に、俺を二階の窓から投げ捨てた奴に言われると、すげー違和感あるよなと思ってな）

（はっはっは）

それもそうだね。

小路から立ち去るサルバを見送りながら、僕もサルバとの〝共有〟と屋敷内の二人に神経を尖らせる。はてさて、鬼が出るか蛇が出るか……。

（……どっちでもいっか）

◆

小路を出たサルバは隠密行動らしく、陰から陰、人の気配を縫って、大通りを避けながら器用に陽光の射す孤島の町並みを暗躍していく。

（身軽なものだね）

前（偽レミュール男爵夫人）の件で知ってはいたけど、本当に軽く飛ぶよねサルバって。僕は割りと体重があるから、ここまでひょいひょいってはいかないんだよね。

（ガンナーだからな。逃げるのはお手の物だぜ？）

視界を特に理由もなく一回転させながら、宙返りしたサルバがけけけっと笑った。ガンナーが距離を取るのは逃げとは言わないけどね。

（そうか？）

（多分？）

（そこは、きっちり肯定しよーぜ）

（自信がないから無理かなって）
（この野郎）
　はっはっは。
（んで、どっち行くよ？）
（んー、そうだね……）
　どうしよっか？　……、
（取り敢えず、ダンジョンの方）
　一番尻尾を出すとしたら、やっぱりそこでしょ。意外な拾い物があるかもしれないしね。
（オーライ）
　頷いたサルバが大通りを伺うために、密集した家屋の一つにピタリと背中を預けて、そろりそろりと外を盗み見る。幸い人の気配は無い。
（……）
　素早く辺りを確かめたサルバは一気に大通りを突っ切りに掛かった。
（サルバ、左）
（っと）
　共有していた片目に、一瞬ちらついた横道から伸びる革靴の爪先。僕の声に反応した

サルバが、素早く小路に体を滑り込ませると、案の定カツカツという硬質な音が通り過ぎていった。

（……行ったな）

そして、音が遠退いて聞こえなくなったのを確かめると再び立ち上がるサルバ。大通りを越えてしまえば、後はダンジョンは目と鼻の先だった。

（着いたな……）

（着いたねえ……）

あれから程なくして、無事にこの島の島民に見付かることなく辿り着いた件の雄牛の前で、サルバと僕は改めてその威容を見上げてた。

島の外の帆船からすらはっきりと形を視認できたその巨体はやはり勇壮で、そして、それ以上に異様な威圧感を醸し出している様に思えた。というか、普通に奇妙だよね。何で雄牛？

（作った奴らが牛肉好きとか？）

（牛追いの方の可能性もあるかもね）

（確かにな）

思ってもいない軽口を叩き合いながら、さてどうするかとサルバが辺りを軽く見回すのを確かめながら、僕も次を思案する。と、言っても、まずはこれから始めないといけないんだよね。……大丈夫かな？　んー……、ま、いっか。

（ねえ、サルバ）

（んあ？）

（今から嗅覚を共有するから諦めてね）

色々とさ。

（ん？　それはどうい、って!?）

（気付いたね）

もう遅いけど。

（だって、ダンジョンを前にして他にやる事なんてある訳ないしね）

それが天然だろうが人工だろうがさ。

僕が何を言っているのか理解して慌て始めるサルバに、見えない遠くで軽く肩を竦め返して〝共有〟を開始する。

（っ!?　うっおえええええええええええ!?!?!?）

直後、鈍器で鼻腔の奥を殴りつけられたかのような刺激と共に、濃縮された腐敗臭と鉄錆臭が綯い交ぜになった……要するにダンジョンの臭いが襲い掛かって来る。

（ま、そうなるよね）

僕個人としてはある程度慣れた臭いではあるものの、初めて〝共有〟する羽目になったサルバはその激臭に耐え切れず、道の奥に隠れてげろげろと胃の内容物を吐き出した。

（なっ、これ、なっ!?）

（何って、ダンジョンの臭いだけど？）

勿論。僕にとっては嗅ぎ慣れた臭いなんだけど、流石にきつかったかな？

（きつっ、なっ!?）

（あー、きついなんてもんじゃない……ね）

やっぱり、初めて嗅ぐ人はそうなるのかな？　正直、僕の場合はもう昔から嗅ぎ慣れているせいで、もうダンジョンはこういうものだって感じなんだけど。

（くっ……はぁ……畜生）

（あ、流石）

そんな事を考えていると、悪態を吐きながらサルバが近くに投げ出されていた古い木片を使って、家屋の土壁に吐瀉物を寄せて、臭いが風で流れない様に、それを推し被せた。

（はぁ……はぁ……んで？）

そして、呼吸を整えると、恨めしそうに僕を睨もうとしてくるのを感じる。復活早いね。
（この程度でがたがた言ってたら、お前と組んでなんてやってらんねえよ）
（そう？）
（但し、後でぶん殴ってやるから、戻ったら覚えてろよ）
はっはっは。
（ま、どうでも良いや）
（良くねーよ）
（それより次だけど、早速ダンジョンの中に入って）
時間は有限だしね。
（まあ、そう来るわな、糞野郎）
そこは予想していたのか、頷いたサルバがぱんぱんと軽く足回りの砂埃を払って立ち上がる。
（だけど、そっちで良いのか？　どうせ、この島に居るうちに入る事になるんじゃねえのか？）
（多分ね）
というか、そこは確定だと思う。

（けど、残念ながらそれ以外の施設は今の時点だと何処に何があるか分からない状態だからね）

その辺が分かってたら、真っ先に研究所に突っ込ませるんだけどさ。

（ま、それもそうだろうな）

頷いたサルバが腰に下げた愛銃に手を掛けながら（じゃあ、行くのか？）と小さく首を傾げるのに、僕も内心で首肯を返して大きく呼吸を整える。既に、人口ダンジョンから撒き散らされる悪臭で大分鼻が情報過多になっている感があるけど、まあ、何とか回復したかな。こういう時、ある程度ではあるものの刺激を一時的に緩和出来るのは素直に有難いね。嗅覚がマヒしたままだと、情報の精査に支障が多少なりとも出ちゃうし。

（……）

直前に念のため、二人で辺りに意識を配る。研究者も疎ら、訪問者も限られる孤島は、矢張り島の象徴の前であっても、人の数は限られていた。

（行くぜ）

（ん）

短く自分に気合を入れたサルバに頷くと、再び左目の景色が大きく跳躍する。そして、明日の為と思われる多い布を被された装飾品の類を壁にして、サルバがひょいひょいと雄牛のそれへと忍び寄る。

（（……））

そして、最後にもう一度だけ辺りを確認すると、僕とサルバは異様な悪臭と共に僕達を待ち構える、大牛の胸元にぽっかりと開いた伽藍洞の中へと身を滑り込ませたのだった。

で、

（吐きそうなんだが）

（我慢我慢）

ダンジョンに数歩踏み入れた瞬間、顔を歪めたサルバが既に中身を全て吐き出した筈の胃袋を抑えながら呻いた。

（うーん、でもまさか、ここまで臭い（気配）が強いとはね……）

僕も軽くサルバを宥めてはいるものの、正直この臭いに関しては少なからず驚きを覚えずにはいられなかった。

元々、ダンジョンなんて臭いものと相場が決まっているものだけど、正直ここまでの

悪臭は初めてと言って良い。というか、本当に臭いね。それこそ、普通のダンジョンが可愛く思えるくらいに。

（ダンジョンの気配が強いのかな？　それとも、単なる人工ダンジョンの性質？）

んー、分からないな。

（これは、ちょっと調べる必要があるかもね）

（もっと奥まで入るって事か？）

答えが出ない疑問符に頸を捻ると、実際にダンジョンを歩いているサルバが軽く銃の撃鉄を上げた。

（奥に限った話じゃないかな）

実際、ダンジョンの何処に何があるか分からない以上ね。普通のダンジョンなら〝ダンジョン・コア〟はダンジョンの最深部にあるものだけど、この人工ダンジョンにそれが当て嵌まるかは分からないしね。

（やっぱり、研究資料とかがあれば、一発なんだけどね）

（それがありゃ、そもそも、そんな事考える間もなく資料読み耽ってるだろうけどな）

それはまあ、その通り。読んで理解できるかって言われるとまた別問題ではあるんだけどさ。

（っと？）

そうこうしている間にも二度三度と現れるモンスター達。猿の様に全身が毛むくじゃらの蝙蝠や、爬虫類染みた外見の二足歩行の何か、はたまた顔も四肢もないドロドロのスライムと、バラエティーに富んだそれらを器用に回避していたサルバがふと、何かに気付いた様に声を潜めた。

（サルバ？）

僕が首を傾げるのに、サルバが（しっ）と唇に人差し指を当てる。同時に、鋭くなるサルバの目に合わせて急速にダンジョンを突き進む焦点。加速するように影を縫ったサルバの視覚が……小さな灯を捉えていた。

（当たりかな？）

（だろうな）

本来、唯のダンジョンにはある筈のないそれに、サルバがこくりと頷く。

こういう時はサルバの経験が素直に有難いね、実際。

（生きているダンジョンに入る時）

（近付ける？）

（ある程度ならな）

（じゃあ、行けるところまでお願い）

（よし）

僕の確認に是と答えたサルバが銃を抜いて音もなく薄暗いダンジョンの中を進んで

いく。耐えがたかった筈の悪臭に巻かれながら、俄かに研ぎ澄まされた意識によって、それはサルバの埒外へと追い出された様だった。

（さてさて、何が出てくるかな？）

（……）

僕がそんな事を考えている中、ひゅっひゅっと加速する様に通路を跳び、距離を詰めたサルバが限界点に辿り着いたのか、不意にピタリと疾走を止める。

一瞬ぶれる視界に揺られながら、それでも大分大きくなったダンジョン奥の灯。そして、

（やっぱり人だったね）

その松明か何かの火によって作られた影が壁面に大きく伸びて見上げる程の人の形を作り上げていた。

（だな）

常のダンジョンと違い、不規則からは程遠い人工ダンジョンの直角になった小路き身体を入れて松明を探るサルバがぎゅっと目を凝らす。同時に、大仰に動いた人の影に僅かに身を乗り出すと光の漏れ出る通路の奥で影ばかりだった人が本体の姿を現したのだった。

（マジかよ）

（へぇ……）

その正体を前に、思わず口元を抑えるサルバの左目を借りながら、僕もその興味深い光景に若干の驚きを覚えたのだった。

陽光よりも遥かに弱々しく、そして、頼りない灯の元で顔を突き合わせていたのは……先の舞台盛大に大演説を行っていたアステー市長と、豊かな口髭をたくわえた厳格そうな男性。先の演説の最中にパーシー君を連れていた、名も知らない修道士の二人だった。

（続けて）

（おう）

唐突に漂ってきた秘密の臭いに僕がお願いすると、内心で色めき立ったらしいサルバが強く目を凝らした。

（おいおい……）

果たして、続いて出てきた光景は更に予想外と言えば予想外なものだった。

それは、先の演説で景気良く島の成果を吹聴していた人物とは思えない程、卑屈で、そして媚び諂う様な笑みを浮かべた市長と、その市長の態度を唯々いかめしい表情で受け止める修道士という、あの広場とはまるで真逆な姿だった。

（さっきの姿が擬態……いや、違うか。そんな感じじゃなかったし。となると、単純にあ

の修道士さんの立場がかなり強いって事なのかな？　んー……）

　そんな事あるのかな？　いや、単純に一法衣貴族よりも名のある修道士の方が力を持っているなんて事はざらにあると思うけど、あの市長は自身の立場を誇示するために多分に皇帝陛下の事を持ち出していて、それこそがあの貴族様を見下すだけの理由の拠り所になっていた訳だけど、そんな人間が、いくら大聖教会とはいえ、たかが一修道士を皇帝陛下よりも立場を上に置くって事は普通は有り得ないよね。少なくとも、この帝国では。

（なんか、どんどんきな臭くなってきたな）

（だねえ……）

　ぼそりと内心で呟いたサルバの言葉に肯定を返しながら、軽く今の状況を思案する。と、言っても、今の段階じゃこれ以上は何も分からないっていうのが正直な所かな。

（ちなみに、相手の口元読めたりする？）

（流石にちょっと厳しいな。開いてるか閉じてるか程度じゃ、内心全部読むのは無理がある）

（ん。了解）

　となると、これ以上の情報は……ん？

（ねえ、サルバ）

（ん？　……おい）

他に得るものも無いし、引き上げようかと思案していたその先で、不意に壁面に映し出された人影が揺れ、奥の方から更に一つの影が加わったのだった。うん、（三つ目の影）それが誰かだけ確かめたら退散しようか。これ以上は気付かれかねないからね）

（よし）

頷いたサルバが再び自分の両目に活を入れる。そして、長い前髪を銃を持っていない方の手で持ち上げて、邪魔な障害物を完全に外に追いやった。

（……そっちか）

果たして、通路の枠外から出てきた三つ目の影の主は二人の大人の胸程までしかない小柄な体躯の少年、先の帆船の上で水夫に襲われそうになっていた盲目のパーシー君だった。

（拍子抜けだったな）

最後の最後に、更なる大物が出てくるかもしれないと思っていた様子のサルバが、気が抜けた様子で呟く。実際、あの二人（市長と大聖教会修道士）の密談に同程度に重要な人間が顔を出したらそれなりに大きな収穫だっただろうしね。

気合を入れた分だけ反動が大きかったのか、前髪を手放したサルバが軽く肩を竦める。実際、あの二人の会談に相席していたのが他の研究員や、或いはさっきの船で見た

法衣貴族様だった場合、三人の会話は一層重要性と異常性を増していたと思う。けど、実際に出てきたのはあの修道士の従者と言うべきか、稚児と言うべきか、実質小間使いの様な立場のパーシー君だった訳で。

（まあ、それでも、あの二人が会っていたっていう事の重要性は変わらないんだけどさ）

（だな）

サルバもそう思い直したらしく、軽く頷いてもう一度だけ目を凝らした。まあ、これ以上の情報が出てくるかって言うとあれなんだけ……

（ん？）

僕と、サルバは殆ど同時に声を漏らしていた。

一瞬、それは偶然だと思った

揺らめく松明の灯に靡く様に、パーシー君の橙色に染まった銀髪がしゅるりと流れたのだった

直後、こちらに向けられたパーシー君の顔（かんばせ）は船上で見た通りの曇りもない美貌で

それ故に、こんな場所（ダンジョン）には酷く不釣り合いにも見えた

それが、

（なっ!?）

サルバが辛うじて内心のみで絶句するのを聞きながら、正直僕の方も少なからず目前

の光景の異様さに適切な言葉を見付けられずにいた。
振り返ったパーシー君がしたのは、船上では頑なに閉じられていた両目の瞼を開く事だった。たったそれだけの何の気なしの所作に、始め僕もサルバも特にどうといった思考も抱かなかった。しかし、その目蓋が開かれた瞬間、その意識は一瞬にして掻き消えてしまう。
彼の瞼の先、眼孔の内にあったのは、僕達のような二色の眼球ではなく、灰色で見るからにゴツゴツした見た目の何か。
人体とは似ても似つかないそれは、ぱっと見、路肩に落ちている石ころか何かに見えた。
（……）
しかし、パーシー君のその後、特に何をするでもなく、直ぐに瞼を閉じて前の二人の方へと向き直ってしまう。
（偶然だった？　いや……）
それ以上何も起きない状況に、一瞬そんな事を考えるも、直ぐにその思考を打ち消す。確証が無い以上油断をするべきではないし、何よりあの両目が一体何を意味していたのか。理解もしないまま安全と断定するのは余りにも危険すぎる気もする。一先ずは、
（サルバ）

（お、おう）

退散するよ。

一先ず、予定したところまでは確認も取れたし、この島と大聖教会の奇妙な繋がりに関して知れただけでもかなり大きな収穫だろうしね。

（まあ、こんな土地のダンジョンに関する研究で、実験施設の責任者が大聖教会に作る借りなんて、ろくなものが思い付かないけどさ）

（だな）

同じ事を思ったらしいサルバがこっくりと頷く。

（それよりも、音の方を注意してね）

盲人は耳が良いっていうからね。パーシー君の事も今の時点で単なる美貌だけの少年聖歌隊と考えるのは流石に不味いだろうし。

（おう）

頷いたサルバは呼吸音まで気を払って、静かに体勢を翻す。スナイパーという訳でもない割りに、かなり手慣れた様子で気配を消すサルバ。そして、二歩三歩と静かに戦線の最外輪から離脱していく。その姿を〝共有〟で感じ取りながら、一段落を終えた密偵行為の、次のあたりを思案していく。

そして、本当に唐突に僕の身体が真っ二つに引き裂かれた

（？）

余りにも唐突なそれは、幻痛だった。最初の一瞬は全身に走った激痛でただ身体が物別れになったことしか理解できなかった。

（サルバ？）

その次に来た感覚は更に意味不明。胸の内が伽藍の洞になったかのような喪失感だった。それも、何故そんなものがやって来たのかすら分からない、薄ぼんやりとした、こんな場所（ダンジョン）なんかで抱くのはどう考えても場違いだった。ただ、その感覚が去来すると同時に、何となく隣に居ると感じていた筈のサルバの気配が何か黒い靄に飲み込まれたかの様に、不意にその輪郭を失って存在感が朧気になった気がした。

（サルバ？）

思わず、もう一度その名前を呼ぶけれどやっぱり返事は無い。あるのは延々と暗闇を湛えた薄暗いダンジョンの景色だけだった。

（……ダンジョン？）

僕の体はダンジョンの外にあるのに？　いや、それ以前に、サルバは居ない……いや、居ない気がするのに？

（これ以上は無意味だね）

そこまで考えたところで、僕は一先ず目の前に剣を振り抜いていた。現状を把握することは出来ても、多分これ以上の解は出てこない。それよりも、さっさと斬った方が物事は大抵早く済む。殆ど経験則に任せた、直感的な行動は……

（あ）

少なくとも今回は当たりを引いたみたいだった。
サルバが居た筈の暗い靄を切り裂いた瞬間、真っ先に僕の目に飛び込んで来たのは一瞬前にはぐれた筈のサルバの姿だった。但し、
「ぶもっ!?」
全身の衣服を失い、何処からか現れた、巨大な雄牛にのしかかられた姿でだったが。
（……）
その光景を見た瞬間、僕は素直に斬る事を選んだ選択が正しかったことを察する。飛び込みながら振るった一撃は特に止める当てもなく叩き下ろしたこともあってか、その頭蓋に乗った片角ごと、その巨牛の顔半分を削り取ることに成功していた。
「お〝お〝っ!?」
だけど、その巨体故だろうか？　その化け牛は一撃で絶命する事なく野太い咆哮を上げて大きく仰け反った。同時に振りかぶられる分厚い蹄の付いた前足。これで踏み抜かれれば、猛獣の類でも一たまりもないだろう。まして、サルバの小柄な体じゃ命がある訳もない。
（ん）
「ぶお〝っ!?」
だから、正直に僕は二つ目の幸運に感謝した。

体重が乗っていた事と、既に加速していたこともあって、何とかその両足が振り下ろされる前に、その身体を引っ掴んで、ぎりぎり射程圏外に退避する事に成功する。

（っと）

ついでに、逆手に持ち替えた片刃剣を後ろに差し向ける。狙いも何もない一撃は、けれど、切っ先に若干の手応えを感じた。

（あ、良い所に入ったね）

距離を取って振り返ると、半顔を削られた雄牛の、残った右目が抉れて血の涙を流しているのが映った。致命傷とは言わないまでも、割と次に支障が出るところに入れられたみたいだった。

「も〝!! う〝も〝っ?!?!?」

（取り合えず、直ぐには襲われないかな）

唯一残った右の角を闇雲に振るうのを確かめて、雄牛が完全にこっちを見失った事を察する。一先ず出来た若干の余裕に、取り合えず最優先事項（サバル）の身柄を確かめ……ようとしたところで、不意に鼻孔に漂ってきた異臭に僕は思わず手を止めていた。

それは枯渇したダンジョンで、〝ダンジョン・コア〟を除けば比較的嗅ぐ機会の多い臭い。人間モンスター問わずに撒き散らされている時、大抵の場合餌食となった者は悲惨な姿で発見される。ある意味、多くの人間にとって馴染み深く、そしてその始発点で

もある。有体に言ってしまえば……精液の臭いだった。

（……）

殆ど反射的にサルバの無毛の股間を弄る。……幸いな事に、サルバのそこはぴたりと閉じていて、無理矢理に抉じ開けられて犯された様子はなかった。

（……）

何となく、妙に安堵を覚えながら、兎に角はぐれない様に、無理矢理サルバを懐に押し込む。幸か不幸か体格差もあり、片手で支えながらなら何とかその小さな体躯を抱えたまま動き回れそうだった。

（っと）

左手で意識のないサルバを抱えて、右手で片刃剣を一振り。多少体重の扱いに難はあるけれど、問題なく斬れそうだった。

（んー……）

じゃあ、この精臭の元はと考えながら周囲を見回せば、犯人、正確には犯牛は直ぐに見付かった。というか、目の前の顔面削られ牛だった。

既に失った両眼に映らない敵を探して遮二無二に振り回される片角から、巨体を挟んで丁度反対側。太く力強い後ろ足の間から生えた、人の前腕程に勃起した性器が白い体液を撒き散らしながら当て所もなく、雄牛の錐もみに合わせて揺れていた。その度に飛

び散る粘液と異臭。この雄牛が今まさに繁殖行為をしようとしていたことを雄弁に物語っていた。

（？　この牛、人(サルバ)に欲情していた？）

その、異様な光景に、成り立つ奇妙な仮説に僕は内心で首を捻った。いや、様々な枯渇ダンジョンに足を運ぶ最中に通り過ぎた牧場などで、牧牛が飼い主によくよく懐いているのはたまに見るけれど、その繁殖欲求が種族も違えば見た目形も別物の人間に向けられるのを見るのは正直初めての事だった。

（いや……）

とはいえ、この状況、この光景がそもそも異質な事を考えれば、ちょっと今の段階では何が起きたのか判断する事も出来ないだろう。それよりは、出来ることを出来るだけさっさと終わらせる方がまだ建設的だ。

（っと）

それだけ考えると、既に四肢を止めて身を捩るしか出来なくなった的(雄牛)との距離を十分に測ると、一先ず事態を終わりに向ける。

比較的広い場所という事もあり、前方へと跳びながら振り下ろした何時もの一刀は、狙い通り雄牛の首根を捉え、そして、その頸をすとんと斬り落とすことに成功したのだった。

「……」

雄牛の胴と頭の間を走り抜け、胸元で目を瞑るサルバの小さな身体を揺すって抱き直すのと、どさりと一繋ぎの墜落音が響いたのは同時だった。

念のため、雄牛の絶命を確かめるために振り返ると、

「……」

そこでは予想外ながらも想定通りに、本来全血を撒き散らしている筈の物別れとなった雄牛の躯が、一滴の血も流さず横たわっていた。

（まあ、どう考えても普通の牛じゃないよね）

何故こんなところに、或いは、そもそもここは何処なのかと様々な疑問は尽きない中で、次に備えて片刃剣を軽く握り直す。正直今の体勢だと、不意打ちなら兎も角、正面から相対したら、雄牛はちょっと厳しい。むしろ、逆に不意打ちされる危険もある訳で。

（まあ、だからと言って、サルバを投げ捨てる訳にもいかないんだけどさ）

さっきの、唐突な靄の事を考えたら、今サルバと距離を取るのは危険だろう。それこそ、今度は間に合わないかもしれない。

（それに……）

さっきの激痛以降、妙に全身が寒々しいというか、軽々しいというか、やけに違和感があった。何と言うか、何時も通りの剣が何故かしっくりこない。正直、腕に抱えたサ

ルバ以上に、下手をすると危険な状態かもしれなかった。
「ふー……」
まあ、やる事は変わらないんだけどさ。
なんて、つらつらと考えていたら、

何故かサルバが光った。

「……えっと」
ぼんやりとでもなければ、煌々でもなく、かぁっ！　と音が立つ程に強烈な発光。それはもう、掛け値なしかつ、ごくごく単純にサルバが光っていた。
「？」
余りにも、下手をすれば先の雄牛以上に意味不明な光景に思わず首を捻ると、不意に何か強い力に身体が引っ張られる感覚が僕を襲った。
「っ」
当然、何か目に見えるもの、或いは臭いがするものであれば気付く訳だけど、僕の胸

倉を掴むそれは姿も影も見当たらず、唯々純粋な力だった。

つんのめる様に、その力に引かれ、前のめりになるも、しかし、それは一瞬で消え、代わりに先程迄あった筈の、全身に漂っていた歪（ひずみ）とも言うべき違和感が奇麗さっぱり無くなっていて、やけに温かな充足感が全身の血管を通して体中を循環しているような感覚が僕の四肢に訪れていた。けれど、矢継ぎ早に訪れた異常事態はこれで止まらない。

「っと」

謎の充実感に身を委ねる暇も余裕もなく、今度はごくごく自然に、それこそ陸上に生きとし生けるものほぼ全てに約束されている筈のそれ、即ち大地がまるでそんなもの初めから無かったかの様に掻き消えたのだった。

唐突に断崖から投げ落とされたのか、身体が丸ごと浮遊感に包まれる。当然、その後がどうなるかなんてのは火を見るよりも明らかで。

「……」

現状可能な最後の手段。右手に持った片刃剣（武装）を放棄。代わりに丸め込んだサルバを覆う様に両腕で抱え込んで、せめてもの抵抗を行う。果たして、僕達を最後に襲ったのは……

ぼふっという音と共に、ふんわりと日光の香りを漂わせる羽毛布団と、磨かれた窓ガラスから入り込む、温かな陽光だった。

「……」

一瞬、見慣れない天井に疑問符が浮かびかけるけど、見上げたそこはよくよく考えずともほんの少し前まで僕が居た筈のキリエさんの自宅の客室のそれだった。

（えーと……）

流石に、余りにも止め処ない光景の連続に若干思考が追い付かない。というか、今がどういう状況なのかそもそも理解が追い付かない。

「……」

「んあ？」

殆ど、条件反射で腰元の剣を確かめるのとほぼ同時に、お腹の上から降ってきた最近聞き慣れ過ぎている気がする声の方を見上げて、そこに居る仕事仲間（サルバ）の姿を確かめる。

但し、産まれたままの格好の、と注釈が付いたけれど。

（どういう事だろう？）

いよいよもって意味不明な事態に僕はもう一度思考を巡らす。

そもそも、先の光景や状況が単なる白昼夢だったのだとしたら、目の前の全裸のサルバの存在は絶対

に有り得ない。けれど、それ以前の問題として、僕達が見た光景や陥った状況は一体何だったのか。僕達が直面した事態の原因は？

「……ま、いっか」

多分、今答えは出ないそれに、一旦見切りをつけて、一先ず目の前のサルバの状況を確かめる。

先の光景の中とも変わらず、サルバは一糸纏わない姿でいるけれど、一先ず外傷らしい外傷は見当たらない。身長の割にアンバランスに大きな胸元が浅く上下していて、呼吸も確りしているのが確認できる。取り合えずはこれで良いということにするべきかな。

（問題は明日の落成式だけど……）

大丈夫かな？　いや、行かない訳にもいかないんだけどさ。うーん……と、

「どうかされましたか？」

「あ……」

そんな事を考えていると、不意に入口のドアが開いて、先の御高目な老婦人風の使用人さんが几帳面な声と共に顔を入れてきた。

「……」

「……」

ぴたりと重なる僕と使用人さんの視線。というか、重ならざるを得ないというべきか。

使用人さんの方は単にベッドが軋む音に、何かあったのかと様子を聞きに来ただけだろう。けれど、まあ、ねえ。

（サルバ全裸だし、っていうか明らかにやっている最中だし）

というか、何でこれ（サルバ）は僕の態々下腹部に乗っているんだろうね。

「失礼いたしました」

先の奇妙な光景以上に答えの出ない疑問符に自問自答すれば、結論に辿り着く前に使用人さんが表情一つ変えることなく一礼をして顔を引っ込める。これはもう、駄目だね。

「……」

結論が出たせいか、妙に冷えていく思考の中で、視線を僕の上で気持ち良さそうに舟を漕ぐサルバに向けると、丁度気分の良い夢を見ているのか、「うへへへへ」と嗤ったサルバが口の端からたらーっと涎を垂らした。その涎がズボンに落ちて丸い染みを作るのを確かめると、

「うん」

僕はサルバを投げ捨てたのだった。

「ぐへっ」

と呻き声が鳴り、墜落したサルバ（バカ）は前衛的な格好で動かなくなったのだった。

五

翌日のこと、昨日の奇妙な体験が嘘のように、何の変哲もない朝を迎えた僕達は、キリエさん宅の客室で使用人のお婆さんから今日の朝食を受け取っていた。

ちなみに、キリエさんはもう居ない。やっぱり、クレタ島の研究者の中でもかなり忙しい立場らしく、朝日が昇ると早々に起きていた様だった。たまたま、僕は用を足しに部屋から出ていて彼女に会ったけれど、

―お先に失礼するわね―

と、物凄く冷たい視線と共にそれだけ言われたのだった。

（ま、そうもなるよね）

他人の家、しかも初対面の相手のそれで、いきなり（実際はしてないけど）性行為を始めたりしたら。

（ま、別にどうでもいいけど）

それよりも、食事を済ませないと。

僕は、この島に来る前に用意した礼服に着替えると、同じく予めピカピカに研いておいた銀貨を料理にそれぞれ浸していく。

（ん。大丈夫かな）

スープから引き上げた銀貨の色が、特段くすみも妙に発色もせずに浸す前と同程度に輝いているのを確かめて、同じく持ってきた自前のフォークを手に取る。で、此処までは良いとして、

「サルバ？」

「あー……」

「あんまり時間が掛かるなら、先に食べちゃうけど？」

一応の義理立てとして、先程から部屋に備え付けられた鏡を前に延々顰め面になっている仕事仲間（サルバ）に声を掛ける。

「おー……」

けれど、やっぱり返ってくるのは気のない返事だけで。うーん、

「あんまり遅いと、朝ごはん食べる時間無くなっちゃうから、僕が貰うね」

「んー……ん？」

「いただきます」

やっぱり返ってきた生返事に早速サルバの朝食にフォークを突き立てると、漸く「って、おい!?」と焦ったような声が聞こえてきた。まあ、別にいいけど、

「良くねえよ!?　俺の朝飯だ「はい」ろ？」

「これで良いでしょ？」
　僕が僕の前にあったサラダの皿を渡すと「お、おう」とサルバが頷く。どうせ、料理は二人分あったし、フォークを一皿につけただけだからね。
「……」
「……」
　代わりにサルバの前にあったサラダを引き寄せて、ドレッシングでしなっとなった野菜を咀嚼すると、少しばつが悪そうに頭を掻いたサルバも僕が差し出したフォークを手に取ってサラダに手を付けたのだった。
（で、それは別に良いんだけど）
　僕はメインディッシュとして出された牛肉のソテーを咀嚼しながら、また鏡に目をやって唸り始めたサルバを見やる。
（出発の時間もあるんだけどね）
　まだ、多少時間があるとはいえ、そろそろ準備をした方が良いとは思うしね。っていうか、もう見慣れた感もあるけど、朝から全裸で寒くないの？
「んむ……」
　ぼりぼりと面倒くさそうにおっぱいを掻きながら、サルバはこくりとサラダを嚥下した。

（ま、いっか）

時間さえ間に合えば。

そんな事を考えながら僕とサルバの朝食の時間はあっさりと終わったのだった。

で、

「また逆戻りだね」

「んー……」

食事を終えて礼服に着替え終えると、またもサルバが鏡の前で唸り声を上げていた。っていうか、本当にどうしたのさ。

「あー、いや「これ以上時間取る気なら、〝ダンジョン・コア〟使って無理矢理頭の中ほじくり返すよ?」すまん」

パンツと両手を合わせたサルバが降参するように頭を下げた。始めからそうしてればいいのにね。

「で?」

「？」
「どうしたのさ、本当に」
　そんなに、ナルシストだったっけ？　サルバ。
「いや、別に自己陶酔の為に鏡見てる訳じゃ「じゃあ、性的な目で見てるの？」てめぇ、それ言ったら戦争だぞおい!!」
　はっはっは。
「でも、自己陶酔よりは健全じゃない？」
「俺の見た目エロいよな」なら、まだその身体（女性の身体）を異物として捉えた感想だけど、「俺って世界一可愛いよなあ」だと完全にその身体（女性の身体）を自分の物として受け入れた感じだし。
「いつか、ちんこ無いのを正常として受け入れる様になっちゃったりしてね」
「怖ええこと言うなよ!?」
　サルバが悲鳴混じりに股間を抑えた。胸を隠さないなら、まだ大丈夫だろうけどね。
　それはそれとして、
「本当にどうしたのさ？」
　割りと本気でさ。
「あー……なんつーかな」
「？」

前髪の奥で分からないけれど、僅かに視線を逸らした様子でサルバは軽く頬を掻いている。何と言うか、何時になく煮え切らないね。

「どうすりゃ……男らしく見えるかなってな」

「ああ、アリアドネさんにね」

はいはい、

「ちょ、ま、いや、あの人は関係「それ、通ると思う？」うぐ……」

〝共有〟で繋がっている時点で僕にはバレバレだし、そうじゃなくても普通に気付かれる反応していると思うよ？

「ぐう……」

「あ、ぐうの音は出るんだね」

精神的にタフなのは良い事だよね。

まあ、その辺の恋愛とは一切関係ないところは一旦置いておいて、僕は改めて鏡の前で思い悩むサルバの様子をまじまじと確認する。

（こーゆーの、気にする方がやっぱり女性受けは良いのかもね）

事実は兎も角、女性からすれば自分に対して投資をする気があるって事だし。そういう意味じゃ、悪くない傾向なんじゃない？　直接見せると、幻滅されそうではあるけど。

「うっせ」

「あ、〝共有〟で伝わっちゃってた」
「無くてもそれくらい分かるっつの」
「ああ、そう？」
サルバは「四六時中つるんでんだ、そんぐらい分かるっつの」と口を尖らせる。ま、別にいっか。
「つーか、お前はそういうの無いのかよ？」
俺だけこんな恥をかくのは許せん……そんなサルバの思考を注がれながら僕は「それこそまさかだよ」と特に隠すことも無いので素直に返した。
「基本的に僕を態々見たがる人とか居ないからね」
現実問題、見せる見せない以前の話だし。っていうか、サルバが来るまで殆どギルド長くらいしか会話すらする相手はいなかった気がするな。
「……なんかすまん」
「別に良いけどね」
というか、どうでも良いし。そっちよりも、今はサルバの方でしょ。
この状態で何時までも唸っていられるとそれこそ困るしなあ……よし、
「サルバ」
「あん？」

「斬るよ」
「ああ……ああ!?」
　一瞬、理解が追い付かないといった風に首を傾げたサルバの前で僕は壁に立てかけていた片刃剣を引き抜いて、切っ先を驚いている本人に突き付けた。
「ちょ、おま、な、何を、いや、待」
「え、待つわけないでしょ？」
　っていうか、僕が待つ人間だと思ってたの？
「思ってねえけどよ!?　お前に限って、他人の制止で止まるわけがねえのは嫌ってほど分かってるけどよ!?」
「でしょ」
　流石にそれくらいは分かるよね。
「じゃ、さっさと終わらせちゃおっか」
　これ以上は本当に時間の無駄だしね。
「ぬあっ?!!?」
　僕が斬り掛かると、サルバが身を捩って逃げようとする。けどまあ、その体勢も此処までの付き合いと〝共有〟で大体分かっているから大丈夫かな？
（多分だけど）

もし、失敗した場合も、被害を受けるのはどうせサルバだけだしと割り切って僕はさっさと終わらせてしまう事にする。

「それ、割り切ってるんじゃなくて切り捨ててるって言うんじゃねえのか!?」

そんな、断末魔と言うべきか、辞世の句と言うべきかな言葉に「そうとも言うかもね」と頷きながら、僕は想定通りの作業を完了させたのだった。

「うっ……」

僕が剣を振るった瞬間、咄嗟に身をすくませて両目をぎゅっと閉じていたサルバが恐る恐る両目を開く。そんなサルバを他所に、僕が完成品を確かめながら納刀すると、当のサルバは僅かに左の青い目を見開きながら、おっかなびっくりに僕の剣が走った辺りに手をやった。

「ほら」

まあ、事情も飲み込めずに混乱している方が時間の無駄だし、さっきからサルバが頻りに覗き込んでいた鏡を差し出す。

「んな!?」

そこに映し出された姿を認めると、サルバはあんぐりと口を開けて分かりやすく絶句した。

そして、そのまま自分の頭部をペタペタとまさぐりながら、サルバは「いやいやいや

いや!?」と、今度は堰を切った様に悲鳴をあげる。そんなに、気に入らなかった?
「そうじゃねえけどよ!?」
「ならよかった」
手直しする手間が無いし。……じゃあ、どうしたのさ。
「どうしたじゃねえよ!!」
「?」
「何で、俺の頭がこんなになってるんだって聞いてんだよ!!」
「何でって」
決まってるよね。
「僕が切り落としたからだけど?」
一目瞭然だよね。
騒然としたサルバがこんなと言って指差したそこでは、一瞬前までの後頭部で括られた長髪、詰まるところ普段のサルバの髪型が無くなり、代わりにうなじくらいまでで切り揃えた短髪と、選り分けられた前髪から露になった左目が驚愕と共に鎮座していた。うん、結構良い出来じゃない?
長髪は女性がするもので、短髪は男性がするものとは限らないけど、今の身体が美人な分、どうしても長髪と合わさると女性的に見えちゃうもんね。

「いや、そうだけどよ……」
　床に落ちた、見慣れた黒い糸束をごみ箱に捨てながら返した僕の回答にある程度納得したのか、それとも単純に観念したのか、まあ、どっちでも良いけど、サルバは俊巡に満ちた表情でおっかなびっくりに自分の髪を確認する。んー、
「まだ足りない？」
「何がだよ!?」
　主に切断量が。
「これ以上やられたら、坊主一直線だろうが!?」
「女らしさは消えるけど？」
「代わりに、変人って評価が追加されるわ!!」
「俺はお前と違って、そこまで人間関係投げ捨てられねえんだよ!!」と至極失礼な気もしなくもない言葉と共にサルバが大分すっきりした頭を抱える。まあ、別に良いけど。
「じゃあ良いじゃん」
　特に不満も無い様だし。
「すっげー不本意だ……」
　がっくりと肩を落としたサルバが、それでも幾分すっきりした様子で、黄色い右目を隠す前髪を撫で付けている。うん、

「じゃ、本番行こうか」
「おう……うん？」
僕の言葉にはたと動きを止めたサルバがギギギっと錆びたブリキの人形の様に振り返ってくる前で、僕は念のためにと思って用意しておいた、サルバ愛用の細長い布、要するに胸を押し潰すためのさらしを取り出す。で、
「な、なあ、アルタ」
「何？」
「それ……乳を潰すための奴だよな？」
「そうだよ」
ここ暫くというか、僕と組むようになってから、仕事の時は基本的に毎回巻いているから見慣れてるよね？
「まあ、無いと胸が邪魔だからな」
「身長の割に凄いおっぱい大きいもんね」
「ほっとけ」
はっはっは。
「じゃあ、もう一つ質問だ」
「どうぞ」

「……何で、さらしを半分に切ってるんだ？」
「……」
「……」
「……今、サルバが想像している通りだよ」
むしろ、それしか理由は無いよ？
「!!!」
!!!
僕の言葉を聞いたサルバはバッと音を立てて起き上がると、一目散にこの部屋唯一の入り口から逃げ出そうとする。けど、
「甘いね」
これが大の苦手なサルバがどういう反応するかなんて初めから予想がついているからね。
駆け出したサルバの小さな足に目掛けて、僕は半分にカットしたサルバの胸布を輪にして振るう。
「んぶっ!?」
狙い通り奇麗に、その左足を取った白布を引き上げれば、体重を取られたサルバがすってーんと音を立てて板間の上に顔面からすっ倒れた。
「ぐえっ!?」

そして、後ろ髪が無くなって遮る物の無い純白の背中を上から踏み潰す。胴体を挟んで足の平からでも弾力を感じられるあたり、本当に大きいよね。

「ま、そんな事はどうでもいっか」

それより、さっさと終わらせないとね。

「ま、待て待て待て!!」

と、此処で足の下でじたばたしていたサルバが悲鳴混じりに僕を見上げてくる。あんまり顔動かしすぎると、両目の色が見えちゃうよ?

「お前は知ってるんだから別に今更関係ねーだろうがよ!!」

「まあ、その通りだけど」

っていうか、どうでも良いし。で、どうしたのさ?

「どうしたじゃねえよ! お前、それで俺を縛る気か!?」

「何か、そこだけ聞くと、凄い怪しい事しているみたいだよね」

って言うか、危ない事かな? サルバの苦痛的には大差ないかもしれないけど。

「ま、その通り」

というか、それ以外にないでしょ。

「無理だ! 無理無理無理無理!! 明らかに長さが足りねえだろ!?!?」

「はっはっは」

絶望した表情で、必死にサルバが投げかけてくる説得の言葉を笑い飛ばしながら、僕はサルバの大きな勘違いを訂正する。

「サルバ」

「アル「この長さのさらしで胸を結びきれないなら、足りないのは布の長さじゃなくて……〝力〟の方だよね？」

僕がパンツと白布を鳴らして、漸く刑を執行しに入ると、それでもダンジョン閉鎖士補佐になって以降、こんな会話の繰り返しばっかりである程度耐性が付いていたのか、サルバが「てめ、他人事だと思いやがって……」と小さく絞りだした。

「……」

何か、妙に腹が立った気が……いや、気のせいか。別にどうでも良いし。

「……」

「……」

「……ア、アルタ？」

じっと観察していると、何故かサルバの表情がさらしを見せた時より血の気が引いて、青を通し越した白になっているような気がした。んー……、

（あ、そうだ）

そういえば、この手があったね。

「お、おい「サルバ」んお？」

うん、そうだね、そうしよう。

「〝共有〟」

「は？」

僕が軽い精神統一のために口遊んだその言葉、仮名でしかない〝ダンジョン・コア〟の名称に、サルバが青い目を白黒させる。そして、そんなサルバを他所に、急速に一体感充実感が広がる全身。まるで、そうであることが当然とすら思える充足感と同時に、僕の背中が誰かに踏み潰されている様な感覚が訪れた。

「ア、アルタ？」

僕が何をしたのか、この世で唯一人感覚で理解できるサルバが混乱した様子で僕を見上げてくる。

「ねえ、サルバ」

「……何だ？」

漸く僕の話を聞く気になったサルバを見下ろしながら、僕はひらひらと手に持ったさらしを改めて見せびらかす。で、

「試してみようか？」
「……」
僕の質問にサルバが唾を飲み込んだ音がやけに大きく室内に反響した。
「何を……だ？」
もう内心では殆ど回答に行きついている、というか〝共有〟の出力を此処まで上げちゃっているから、互いの思考なんて駄々洩れのはずなのに、サルバが何かに縋る様に、そんな質問をしてきた。はっはっは。

「サルバの受ける苦痛で、僕の手が緩むかどうか」

緩んだら、まあ、それはそれで良いんじゃない？　勝ち負けとかそういう話でもないんだろうけど、強いて言うなら僕の負けだよね。まあ、
「僕も全力で逝くから」
その程度で止める気も無いけどさ。
「や、やめっ」

恐怖に染まったサルバの最後の懇願が僕の耳に届き、

「ぎゃあああああああああああああああああ!?!?!?」

この日一番の断末魔が島全体へと響き渡ったのだった。

◆

「……今更な話良いかな？」

あの後、漸く身繕いを終えた僕とサルバは快晴の空の下を予定されていた落成式の会場へと急いでいた。と、言っても、

「……」

隣のサルバは心なしかふらついていて、明らかに本調子じゃなかった。っていうか、

本当に大丈夫？
「原因はお前だっつの」
　まあ、その通りなんだけどさ。
「でも、髪型一つであんなに右往左往してたら、服着る段階で更に懊悩してたでしょ？」
　或いは、本当に振り出しに戻りかねない勢いで。
「そりゃ……そうだけどよ」
「だからって本当に最後の最後まで全力で絞るか？」と、サルバは恨みがましい声を上げる。うーん、でもなあ、
「僕が安全圏から好き勝手言ってるみたいに思われたら多少はね？」
「う……」
　思い知らせるっていう意味でも、自爆特攻（死なば諸共）は良い選択肢だったと思うよ？
「……悪かったよ」
「何が？」
「お前は……基本変人だし、割と糞野郎だし、外道な事も平気でやる奴だけど」
「喧嘩売ってるの？」
　第二回戦始めたいなら買うよ？
「でも、ダチが苦しんでる時に他人事で居る奴でもないんだな」

「それ、褒めてる？」

九割方悪口じゃ……

そこまで考えたところで「褒めてるぜ？」と首を傾げたサルバの露になった左目と視線がぶつかる。

「……」

不意に重なったその青い目、何時もと変わらない、透き通るようなそれが、何故か今だけはやけに淀んで見えた。

「褒めてるぜ？」

もう一度、そう言ったサルバの視線はやっぱり形は普段通りで、けど、普段通りなのは形だけに見えて、何て言うか、

―俺のパーティーがあれだったからな―

「……」

言外、或いは〝共有〟を通して胸中の一端が流れ込んできたのか。サルバの青い視線がそう言っている様な気がした。……

「そう」

まあ、それはそれ。サルバがどう思っていようが、僕がどう思っていようがそれは互いの自由だしね。だから、僕は自分の感情のまま、サルバの言葉に対して直感的に思っ

た様に「どうかな?」と首を傾げた。
「僕、友達って居たことが無いからよく分からないんだけど」
「なら、初発見って事だな」
かっかと笑ったサルバが不思議と軽くなった足取りで軽快なステップを踏みながら一歩前に出てくるりと振り返ってきた。
「んで?　何が今更なんだ?」
にかっと口角を釣り上げる頃には先の視線の色は消えていて、唯々表情だけでなく胸中も合わせて楽しそうだった。
「よく考えてみたら、胸をそこまでする必要もなかったよねって」
「本当に今更だなコノヤロウ!?」
だから、何となく釣られて正直に思ったことを言ったら、一瞬でぶち切れたサルバの飛び蹴りが飛んできた。……まあ、体格差が違うから簡単に避けられるけど。
「っと」
それを受け止めて、地面に下ろすと先程とは違う意味で不穏な光を左目に宿しながら、殺気立った視線でサルバが「どういう事だ、おい」と見上げてきた。んー……、
「サルバって元は男でしょ?」
「おう、馬並の一物って評判だったぜ?」

「そこまでは聞いてない」
その情報、誰が得するのさ。ま、良いけど。
「で、今は身体は女だけど、中身は男のままでしょ？」
「当たり前だ」
そう言って、サルバは「心までちんこ捨てた覚えはねえ」と鼻を鳴らす。まあ、そこもそうだよね。だからなんだけどさ、
「髪短くして燕尾服着てたら、多少身体つきが凹凸出てても、普通に男に見えるよねって」
細かい仕草が完全に男だからなのかもしれないけどさ。
「……」
僕の回答に立ち止まるサルバの所作に、やっぱり今の発現通りの感想を抱く僕。実際、中性的な美人とか麗人なんてのは騎士の人なんかに多く居るけど、そういった人達も根本はあくまでも女性で、動作にはどことなく女性的な部分が漂う。
対して、今のサルバはそんな人達とは完全に別物で、外見だけなら多少女性らしく見えるものの、細かな動作に欠片も女性が持ち得る色気の様なものが微塵も存在していなかった。というか、何となく男って言われると納得しちゃう感じではある。
「……それ、先に言ってくれよ」

「完全に縛られ損じゃねえか」と項垂れるサルバ。はっはっは。
「笑うなっつの！」
すっかりやさぐれた表情になり、がーっと吠えたサルバはそれならこんなものは要らないじゃねえかと往来なのも気にせずシャツを開いて、自分を縛り上げる白布をほどきに掛かる。と、
「あ、サルバさんにアルタさんじゃないですか！　おはようございます！」
その瞬間、まるで見計らったかの様に、あっけらかんとした声が投げ掛けられた。
「「……」」
振り返った先に居たのは、案の定ニコニコとした笑顔を浮かべたギルド職員のアリアドネさんだった。但し、その出で立ちは昨日の簡素で動き易さを重視した旅装とは大きくかけ離れていた。
長旅から少しくすんでいた髪は洗い直されたのか、しなやかに黒艶を浮かべている。また、その揉み上げ部分を丁寧に三つ編みに編み込んで、整えられたそれは一片の乱れも無くなっていた。
身に纏っていた衣服も動き易さを重視した旅装とは正反対の、自身の黒髪と良く馴染む紺色の儀礼用のローブ。ゆったりとしたそれはアリアドネさんの一挙手一投足に混ざり合い、ドレスとはまた違った気品を感じさせるものだった。

「おはようございます」
何と言うか、昨日の気安い雰囲気から一変して、如何にもな美人へと成り上げたアリアドネさんの姿に若干の感心を覚えながら、僕も軽く頭を下げる。……ん？
（サルバ？）
と、何故か反応のない隣のサルバを見ると、
「……」
左の前髪の隙間から覗く青い目を唯々丸くしている姿があった。
このアリアドネさんに、傍からでも分かりやすい位に見惚れているサルバは言葉を発する余裕すらなくその姿に唯々圧倒されている様だった。
「……」
とはいえ、これ以上硬直させていても会話が広がらないので、一先ずぼけっとしているサルバの足を見えない様に軽く踏む。「って!?」と軽く悲鳴を上げながら、それでも我に返ったサルバは慌ててアリアドネさんに「ど、どうも」とだけ言って軽く頭を下げた。
「ふーん……」
そんなサルバをしげしげと眺めたアリアドネさんの視線に、一杯一杯になりながらサルバが「な、何か？」と辛うじて絞り出したのだった。
「ああ、ごめんなさい」

やや観察するような視線だったことにか、謝罪の言葉を述べたアリアドネさんが軽く唇に人差し指を当てて「いえね」と小首を傾げる。
「サルバさん、凄い奇麗というか、かっこいいなって思って」
「へあっ!?」
そして、投下された爆弾発言に、サルバが悲鳴と共にびしりと硬直した。っていうか、変な声。
「アルタさんは体格が良いからそういうのが似合うっていうのは分かってたんですけど、サルバさんも何て言うか、仕草？　とかそういうのが凄く合ってますよ」
紅潮と共に硬直するサルバを前に、つらつらと述べられるアリアドネさんの感想。ほんわりと微笑を浮かべる彼女の表情を見れば、凡そお世辞などではない事は直ぐに見て取れる訳で、
（サルバ？　……おーい）
当然、そんな無邪気な笑顔の直撃を受けたサルバは……あっさりと撃沈した様だった。
（……これ、駄目だね）
もう、暫くは復活に時間が掛かりそうなサルバに見切りを付けて、僕は一先ずアリアドネさんと軽い会話を続ける。

「アリアドネさんはローブなんですね」
何となく、女の人の礼服はドレスっていう先入観があったけど。
「ええ、持ち運びに便利なので」
「成る程」
軽くターンをするアリアドネさんに引かれて、緩やかに揺れるそれに、僕も納得の言葉を返す。確かに、ドレスだと持ち運び中に変に皺が出来る危険が付いて回るけど、そもそも生地が厚くて柔らかいローブなら、その辺の危険はほぼほぼ無いもんね。
「っと」
と、そこでくるりと回っていたアリアドネさんがはたとターンを止める。
「すみません、そろそろ行かないといけないんでした」
「ああ」
そういえば、落成式始まりそうだもんね。
「私は行きますけど、アルタさん達は」
「僕達は……」
隣を見ると、サルバはまだ固まっている。っていうか、長いね。
「少ししたら行きますので。お先にどうぞ」
「分かりました。それじゃあ会場で！」

「ええ。また」
　頷いてパタパタと走り出したアリアドネさんに手を振って見送ると、僕は一先ずサルバの緩みきったほっぺを左右から引っ張ることにした。
「あ？　あだだだだ!?」
「戻ってきた？」
　主に意識が。
「へ？　あ？」
　一瞬、何が何なのか分からないといった表情になったものの、流石に状況を理解できたのか、サルバは慌てて「お、おう」と頷いた。ま、いっか。それよりも、
「良かったじゃん、サルバ」
　先のアリアドネさんの言葉と、それを投げ掛けられた直後のサルバを思い起こしながら軽く肩を小突くと、サルバはその事を噛み締めるように「おう」と頷いた。
「なあ、アルタ」
「ん？」
　どうかした？
「俺、もう少しさらしで頑張るわ」
「そ」

良いんじゃない？

さっきのアリアドネさんの言葉を思い出しながら相槌を打つと、サルバはもう一度「おう」と頷いた。

「それで、なんだがアルタ」

「何？」

そろそろ、僕達も行かないと。……何か、妙に真剣だね。

アリアドネさんの後を追い掛けようとする僕を押し留めたサルバの表情に、僕も思わず足を止める。

「俺の苦痛の引き受け頼めねえか？」

「そこは自分で甘んじて受けなよ」

「……」

「……」

「……やっぱ、駄目か？」

「駄目っていうか、嫌」
　だって僕、関係ないし。
「……」
「……」
「……だよな」
　僕が助ける気が無いのを確めて、がっくりと項垂れたサルバは「くっそー、やっぱ耐えるしかねえか」と頭を抱える。ま、頑張れば？
「畜生、他人事だと思いやがって」
「実際、他人事だしね」
　心の底から。
　そんな僕の隣を、大股で急ぎながら、サルバが「やっぱ、前言撤回だ」と呻く。何が？
「お前、ダチ思いなんじゃなくて、単に天の邪鬼なだけだわ」
「ああ、そこね」
　はいはい。……、
「今更？」
「だよな、畜生っ!!!」

サルバの悲鳴が蒼天に吸い込まれるのとほぼ同時に、飾り付けられた、今日の会場が見えて来たのだった。

◆

落成式の会場に到着すると、そこには既に昨日の船客や島の人達の多くが集まり、三々五々開会前の雑談に花を咲かせていた。

「おお、ようこそ。お待ちしておりました!!」

その受け付けには本日のホストであり、同時に主役でもあるはずの件の市長が、てらてらとした顔の中心で白い歯をキラリと浮かべていた。

(僕達が最後かな?)

既に大分人の集まった会場で、この市長が態々そう言って声を掛けてきたって事はそういう事なんだろうけど……。

「……」

正直、昨日のダンジョンのことが嘘のような溌剌とした笑みを浮かべる目の前の人物

に僕もサルバも、少し評価を決めかねていた。まあ、
（別に仕事（ダンジョンの閉鎖）とは関係ないから、どうでも良いんだけどね）
（だな）
内心で頷いたサルバに僕も目配せして、さっさと隣の受付の人に名前を伝えて手続きを済ませてしまう。
「おやおやあ？」
けれど、どうやら向こう市長はそれで済ます気はなかったらしい。僕とサルバが差し出された名札を覗き込み、やけに芝居がかった様子で首をかしげた。
「ダンジョン閉鎖士……貴方達があのダンジョン閉鎖士だったのですか!!」
昨日の点呼の時点で大体知っていた筈なのに、甲高く〝あの〟を強調して大仰な身振りを取る老人。っていうか、あのってどのさ。
「……」
付き合う付き合わない以前に、話の取っ掛かりすら与える気の無いこの市長に付き合うのも時間の無駄だし、さっさと会場の端に向かうことにする。
「いやはや、貴族を貴族とも思わぬ所業！　やはり、所詮ギルドなど溝鼠の巣窟でしかないという事実の証左でしかありませんな！」
けれど、向こうはこれで終わる気は更々ないのか、態々僕達の前に躍り出て、やけに

ねちっこい口振りでギルドそのものへと悪態を吐いた。
「……」
一瞬、〝共有〟を通して流れ込んできたざわめきに隣を窺うと、前髪の隙間から覗く青い左目に、サルバがはっきりと不快感を浮かべていたのだった。
（……っていうか、この市長）
その事は気になったけれど、それ以上にこの市長が浮かべる敵意が気に掛かった。そもそも、この島で人工ダンジョンの開発に携わっていた目の前の老人と、僕達が接点を持っている訳もないし。
「ダンジョン閉鎖士風情が」
けれど、そんな僕の疑問は思いの外呆気なく解消される。
「私がハップルカ領に配置された暁には貴様ごとき直ぐにあの世へ送ってやるからなっ!!」
僕の反応が意外なほど癇に障ったらしい市長がギリッと歯を鳴らして吠えたのだった。……っていうか、
（え？　それ？）
どうやら、目の前の市長の敵意の由来は、この前のトウトウ村の件で、偽のレミュール男爵婦人に殺されたハップルカ伯爵にあるようだった。

（親戚？　……は、ないよね）

一瞬、そんな考えが浮かぶものの、あの伯爵様とは似ても似つかない容貌に、直ぐにその可能性を打ち消す。

（っていうか）

そもそも、この人工ダンジョンが皇帝陛下の肝煎りであることを考えると、目の前の市長も多分皇帝派。ということはハップルカ伯爵も皇帝派だったのかな？

（いや、別に皇帝派が後釜を狙うとは限らないか）

むしろ逆に、皇帝の権力を強化する何か、それこそ人工ダンジョンの実用化を梃子に元老院から領土をもぎ取って、自分が封建されるってパターンもあるよね。ま、

（別にどうでも良いけどさ）

興味も無いし。

どうせ、これ以上耳を傾けても言いたいことを好き勝手言うだけに決まっているしと、今度こそ目の前のお爺さんから離れて会場の適当な場所に落ち着こうとする。

「……」

目配せした先のサルバがこくりと頷き、前を遮る市長を無視して進み……

「私を舐めるなよ!?」

次いで、悲鳴にも似た声が響き、胸元が引きつる様な感覚に教われたのだった。

「あ〟？」

一瞬、その感覚の所在が分からず首をかしげた僕の前で、サルバの方がやけに剣呑な声を上げる。そして、その声を聞いて漸く目の前の市長がサルバの胸を鷲掴みにしたことを理解したのだった。

「……どういうつもりです？」

一応、念のため聞いておくけど。

「ふんっ！」

対して市長、自分を舐めるなと言いながら、やったことは野郎（サルバ）のおっぱいを掴む事という、やや支離滅裂な老人は大仰に鼻を鳴らして強引に体重の軽いサルバを抱き寄せようとし、

（あ、諦めた）

ピクリとも動かせないサルバに結局手を止めることになる。

「この島に居る限り、貴様らは誰一人例外なく私の支配下でしかない！」

けれど、意外に律儀なのか何なのか、その体勢のまま市長はまたも声を張り上げた。
……締まらないなあ。
「貴様が、こんな愛人を連れられるなど、それこそ奇跡の類いだろう？　奇跡を手放したくなくば、私への態度は良く良く考えることだな！」
そして、止めとばかりに放たれた恫喝の言葉は、
「……」
「あー……」
狙っているのかいないのか、ものの見事にサルバの神経を真っ向から逆撫でするものなのだった。
優越感と勝利に浸ったのか、にまにまとした笑顔を浮かべる市長の前でわなわなと肩を震わせるサルバ。
ブチッ！
直後、まるで本当にそんな音がこの場に響いたかのような錯覚に陥る。っていうか、普通に〝共有〟で血管が切れたような感覚が流れてきたんだけど？
「ぬ？」
どうやら、市長の方も不穏な空気を感じ取ったのか、訝しげに小首をかしげた。けど、一歩遅かったね。僕は口を閉じたまま、一先ず市長に首を掻き斬る仕草を向ける。

「誰が恋仲だてめぇ!!!!」

同時に、憤激と共に響いた絶叫。一島を揺るがしかねないその怒号に、辺りの人間が全員驚愕と共にサルバに視線を向けているのを感じる。

そして、

怨念と憎悪をこれでもかというくらいに込めたサルバの膝が、

市長の股間を綺麗に撃ち抜いたのだった。

「ほごぉっ!?」

直後に響く切なげな悲鳴。白眼を剥いた成人男性が股間を抑えてどうと仰向けに倒れ去る。あ、泡吹いてる。

「ざまあ見やがれ！」
　そんな、老人にぺっと唾を吐き捨てるサルバ。何て言うか、らしいなあ。
（胸を鷲掴みにされたことじゃなくて、僕（男）と恋人扱いされたことにキレる辺りが特に）
「……ん？」
　っていうか、これは僕も怒るべき？　……いや、そもそもどっちに怒っても不自然だし……
「ま、いっか」
　結局、それ以外の感想も出てこなかったので、予定通りさっさと会場の端に移動する事にする。
「あ、お……」
　一応、念のため、入念に市長の股間を踏み直すと、後ろを付いてくるサルバもぴょんっと跳んで、
「が……」
　今度こそ、市長の股間に止めを刺したのだった。

六

僕とサルバが会場に足を踏み入れると、さっきのやりとりを遠巻きにしていた人達が弾かれた様に飛び退いて僕達に道を作ってくれる。勿論、それは聖人を前にした信者のそれでもなければ僕とサルバへの親切心などでも有るわけがなくて、強いていうなら寝所に突然現れた大きな蟲とか、そういったものへの忌避感だった。要するに、

（何時も通りって事なんだけどね）

ロハグの町で向けられ慣れた視線、この島では忌避感よりも侮蔑や嘲笑が勝っていたから、あまり向けられる機会がなかったそれに、僕は若干の既視感を覚える。そういえば、忌避感と既視感って似てるよ……サルバ？

何時もの調子で適当なことを適当に思考していると、何故か強い違和感に襲われる。何て言うかこう、普段ならそこにピタリと収まっている剣の握りが妙にしっくりこない様な……

「……」

果たして、その違和感に従って隣のサルバを振り替えると、右の前髪に覆われて表情は伺えないものの、今回の旅の直前に拵えたばかりの下ろし立ての礼服の肩が微かに震

えているのが見えた。一瞬、「あれ？」と僕が首をかしげるのとほぼ同時に、にわかにサルバの内で膨れ上がってこっちに流れ込んできたのは強い後悔の念だった。
「やっべ……」
「ええ……？」
　次いでサルバの口から漏れた言葉に、僕も素直に「何言ってんの？」という感情を返す。あそこまで躊躇なく市長の睾丸蹴り潰したのに、今更後悔とか。いや、止め刺したの僕だけどさ。
「いや、流石にここまで騒ぎをでかくしたいとは思わなかったんだよ……」
　そう言って、サルバは弱りきった表情でちらちらと辺りを見回すけど、じゃあ何であそこまでやったのさ。
「……つい、カッとなって」
「うん、知ってる」
「おい」
　いや、あそこまで分かりやすいと、〝共有〟とか関係なしに誰でも分かるでしょ。
「うぐ……」
「っていうか、自分で望んでやったのに、何で後悔してるのさ」
　自業自得。それは因果の善悪に拘わらない。が、それでも、行動をすれば何かしらの

結果は跳ね返ってくる。今回のこれはむしろ相当予想しやすい方だろうにね。
「俺はお前みたいに神経イカれてねーんだよ！」
「でも、神経まともな割には僕よりも支離滅裂だよね」
　というか、言ってることとやってることが完全に矛盾してるし。
「……」
「あ、凹んだ」
　どうやら、サルバも自覚はあったらしく、その場でしゃがみこむとガックリと項垂れたのだった。
「アルタに正論言われちまった……もう人として終わりだ……」
「おい、それはどういうことだこの野郎」
　……っていうかさ、
「僕は短絡的で浅薄な人間だけど、サルバもサルバで相当短気で馬鹿だよね」
「そこは止め刺すなよ!?　せめて、一言くらい慰めろよ!!」
「しょうがないなぁ……」
　そういう事なら……、
「ざまぁ」
「煽ってんじゃねえええええええええええええ!!!!!!!!!」

はっはっは。

「でも、アリアドネさんは見てなかったみたいだよ?」

キレたサルバを横目に、何の気なしに観客を確かめるも、船で出逢った彼女の姿は何処にも見当たらないのだった。なら、ぎりぎりセーフじゃない?

「そ、そうか……」

その事実にあからさまにほっとした様子のサルバ。ま、

「こんだけ大きな騒ぎ起こしたら、アリアドネさんの耳に入るのは時間の問題だけどね」

「糠喜びさせんなよ!?」

「あ、オードブル取ってきたけど食べる?」

「今言うか!?　今言うことかそれ!?　いや、食うけどよ!!」

はっはっは。

絶叫と共に、会場端に来るまでに取っておいた皿を引ったくると、サルバは半ばやけ食い気味に盛られた食べ物を掻き込んでいく。その格好(服)でそれは目立つよ。

「うっせ、むぐ……全部お前のせいはむっ……だ」

「ひどいなあ」

まあ、別に良いけどさ。……ソース、付いてるよ?

「……」

むすっとしたサルバが乱暴に口元を拭ったのとほぼ同時に、不思議とさっきの違和感が綺麗になくなり、感情がしっくり来る所に落ち着いたのを感じながら、僕も適当に取ってきたオードブルをつつく。……あ、美味しいね、これ。

睾丸を蹴り潰された市長がわたわたとやって来た島民に担架へと乗せられて、退場するのがちらっと見えたけど、僕とサルバの食欲を途切れさせる程の価値はなかったのだった。

（……っていうかさ）

僕のことゴツい神経とか言うけど、食事一つで周りから降り注ぐ敵意とか忌避の視線を無視できるあたり、サルバは少なくとも僕をそういう扱いする権利はないんじゃないかなあ。まあ、どうでも良いけどさ。

「大変、長らくお待たせいたしました!!」

「あれ?」

と、そんな事をつらつらと考えながら、一皿目を完食し終えると、まるで見計らったかのようなタイミングで蒼天の下に甲高い声が響いたのだった。

「ただ今より、我らが作り上げた人造巨大迷宮、ラビュリントスの落成式を始めさせていただきます!!」

声を上げたのは、司会席に立った見るからに神経質そうな男性で、どことなく吐き出

す声も上擦ったものになっている。
（……なあ、アルタ）
（何？）
（俺達……ここに居ても良いのか？）
（摘まみ出されないのかってこと？）
（おう）
　んー、そうだね……。
（普通、睾丸蹴り潰してくる相手になんて声かけたくないだろうから、しないんじゃない？）
　逆に、僕達が出て行っても、特に制止はされないだろうけどね。
「いや、まあ、そうなんだけどよ」と呻いて微妙な表情になるサルバに軽く肩を竦めて一先ず司会の方に注目する。案の定、司会の口から出てきたのは間延びした要領を得ない時節の挨拶だったけれど、そのぎこちなさを見るに、やっぱり臨時みたいだね。
　そんな推測を裏付けるように、早々に退場した司会の後に登壇してきてのは、
「サルバ、あれ」
「んお？　……おお」
　外に跳ねた特徴的な髪型に、やや勝ち気ながらもはっきりと美人と分かる風貌。そ

う、僕とサルバのホームステイ先の家主、キリエ某さんだった。

「まじか」

ここでキリエさんが出てくるとまでは思わなかったのか、サルバはやや意外そうに目を瞬かせる。けど、直ぐに租借していた肉類を飲み下しながら「いや、そうでもねーか」と自分の感情を撤回する。うん、僕もそっち(撤回後)に同意かな。

昨日の宿泊先の割り振りの時の態度を考えたら、全然ある話だろうしね。

(もしかしたら、想定以上ってことはあるかもしれないけどね)

僕の思考に、〝共有〟を介して(だな)と頷くサルバ。果たして、彼女の口から出たのは、やや芝居がかった仕草の咳払いと、「改めて、自己紹介をさせていただきます。副市長のキリエです」という言葉だった。

(へぇ……)

凛とした立ち振る舞い、よくよく見れば顔の造形は案外あどけなさが残っても見えるそれが、僅かな所作の違いで一瞬にして大人の女性のそれへと変貌して果てていた。

(女性は化けるって言うけれど……)

意図しているかは分からないものの、端から見ても中々見事な変貌ぶりに、少なくとも彼女がこの島の副市長という立場を預かるだけの能力と貫禄を備えている事を理解する。まあ、だからどうという訳でもないけど。

そんな事をつらつらと考えていると、「まずは」とキリエさんのスピーチが切り出される。

「本日、このクレタ島へ御越しいただきました事に関しまして、市長のアステー共々心より御礼申し上げます」

一礼の仕草は淀みなく、行き届いた作法を垣間見せてくる。そのよそ行きの表情からは感情は見えてこないものの、先日の慇懃無礼な態度を隠そうともしなかった市長よりは周囲の受け取る感情も幾分かマシに見えた。

（いや、負に比べりゃ無でもマシになっちまうだろ？）

（ま、その通り）

サルバの突っ込みに軽く肩を竦めて返すと、けけっと笑ったサルバも大仰に肩を竦めて見せたのだった。

「さて、このクレタは先日のアステーの言葉通り、我らが皇帝陛下の発案により用意されました、天然資源であるダンジョンを人為的に作成する為の研究機関です。その目的は多岐にわたりますが、主に帝国全土で無秩序に生まれるダンジョンからのみ、散発的にしか手に入れられない収穫物を定常的に市場に流通させ、経済を大きく安定させることと、資源枯渇に伴う経済圏の消滅を根絶し、ダンジョンを基盤にした村落の閉村や散失を抑制し、流民や野盗の発生を予防することの二つを大きな柱としております」

サルバと共にふざけていると、薄く口紅の引かれた唇を開いたキリエさんが流暢な語り口で、この島の生まれた理由を語り始める。その内容や目的は少なからず聞く人達に納得を与えるもので、どう転んだとしても帝国に一定の寄与を約束するものだった。

（んー……）

（どうした？　何か違和感でもあったのか？）

（んーん）

僕の反芻に気付いたサルバが〝共有〟から尋ねてくるのに、軽く首を横に振る。そう、彼女の言葉に違和感は特にない。別に嘘は吐いていないと思う。ただ、

（絶対にそれだけじゃないよねってさ）

もし、今言った内容だけなら、こんな辺鄙な場所で研究を行う必要はないからね。安全性の問題で孤島でやる必要があったとしても、事業の宣伝はむしろ大々的に行うはず。目的と結果を考えれば、多くの平民が潤う訳だし。

勿論、既得権益を得ている村々やギルド、ギルドを支配下に置く元老院なんかは少なからず反発するだろうけど、それにも限度がある。ダンジョン利権は甘受している人間と甘受していない人間では圧倒的に後者が多い訳だしね。だからこそ、ダンジョンがお金になる訳だけど。

（つまり？）

（何かしら、この島のダンジョンには隠したいことがあるって事だろうね）
（成程な……）
頷いたサルバが壇上のキリエさんを見詰める青い左目を僅かに細めた。
（それに）
（あん？）
（僕はこういった話には詳しい訳じゃないけど、こっち（ダンジョン）の方は一応専門職だからね）
こんな、ダンジョンどころか〝ダンジョン・コア〟すら霞む程の悪臭を撒き散らす施設が、まともな訳がないと思うんだよね。
（然もありなんってか）
フォークに突き刺した小エビを頭毎カリッと噛み砕いたサルバがこくりと喉を鳴らして僅に片目を細める。デモンストレーションの為に用意された会場の中で、革新的かつ利権の臭いを強く撒き散らす煽情的な言葉に、にわかにざわめき立つ周囲の漣のような喧騒に包まれながらサルバが一人だけうっすらと剣呑な色を浮かべていた。
（ちなみに、お前はどう見てるんだ？）
隠したいことの予想？　んー、そうだね……
（このダンジョンの欠陥に関する話の可能性が五割、利権を含めた話の可能性が四割、それ以外一割くらいかな）

昨日の出来事（牛人）を思い出しながら僕が首を傾げると、渡したオードブルを食べ終えたサルバが「妥当だな」と頷いたのだった。

と、そうこうしているうちに壇上の話は着々と進んでいる様で、いつの間にかキリエさんの後ろには大きなパネルが用意されていた。描かれたのは地に伏す巨大な雄牛の輪郭。そして、その中に無数に張り巡らされた、幾重もの筋。

（成る程ね）

一目で分かるそれはこの人工ダンジョンの見取り図で、確かに、人工ダンジョンという言葉が真なら、間違いなく用意されているに違いない代物だった。

（確かに、それを握れるのは大きいか……）

僕がダンジョンのファーストアタックの事を考えながら内心で独りごちると、隣のサルバが同意するようにこくりと小さく頷く。けど、同時にその目じりがほんの僅か訝る様に歪んだのが何となく目に留まった。

……通常、新しく生まれたダンジョンにおいて、最も危険とされるのが他でもない最初の潜入だ。まあ、そのダンジョンに住むモンスターの種類、生態、環境、地形、アイテムやトラップその他諸々、安全なダンジョンアタックに必要となる情報が全て抜け落ちちゃっているわけだから、当然と言えば当然だ。その点、一から自作している人工ダンジョンならば、ダンジョンの貴重な情報を最初からそこそこ用意出来、ある程度安

全なファーストアタックを実現できるのは間違いなかった。
　実際、これは大きなアピールポイントだったのだろう。壇上のキリエさんは指示棒でカツッカツッと軽くダンジョンの見取り図を叩きながら、隣のグラフを指し示して「この様に、構造の明白なダンジョンであれば冒険者の方々のファーストアタックの死亡率を大きく低減、負傷率に至っては二割近い減少を見込めます」と澄まし顔ながら自信に満ちた微笑を浮かべていた。
（どう見るよ？）
（多分、本当の事だと思うよ？）
　そんな、キリエさんを見上げながら、僅に首を傾げるサルバに僕も軽く肩を竦めて返す。あくまで直感的な予測ではあるものの、多分、間違ってはいないんじゃないかな？
　通常、ダンジョンのファーストアタックは大きな危険を伴う。生態が判明してしまえばなんということはない序盤のモンスターですら、未知というだけで大きな驚異に成りかねないのだから当然と言えば当然で、それ故にファーストアタックを許可されるのは生半可な冒険者では有り得ず、大抵が各ギルドのエース級、或いは経験豊富なベテラン冒険者に限られていた。そういった優秀であったり熟練であったり、何かしら特筆すべき点のある冒険者のならば、確かにダンジョン全体の見取り図の一つもあれば、死傷する確率をかなり改善できるだろう。それはともすれば、ギルドにとっても貴重と言うべ

き、優良な冒険者を不用意な事故で失う可能性を低減させる事にも繋がっている。問題があるとすればむしろ……

「失礼」

「ん？」

つらつらと考えていると、聴衆の一角、昨日の船上から絢爛な存在感を放っていた貴族様達の中に居た体格の良い壮年の男性が口元に蓄えた茶色い髭を丁寧に二度三度と撫でつけながらすっと堂に入った仕草で挙手をしていたのだった。

「どうぞ？」

丁度、口上が途切れた間際だったこともあり、品の良い所作に壇上のキリエさんも自然と会話を促す言葉を発してしまった様だった。

キリエさんの声に応えるように奇麗に一礼をしたその男性は「ありがとうございます」と言って、微笑と共に自己紹介をする

「キール伯爵家つき冒険者のロレンツと申します。今御説明頂きましたダンジョンの地図に関しましてなのですが、二つ程質問があります」

「お伺いいたします」

キリエさんの返答に「では」と頷くロレンツと名乗った男性は軽く咳払いと共に語りだした。

「先程から、この人工ダンジョンの見取り図を提示いただいておりますが今後同様の人工ダンジョンを展開するにあたり、この情報はどの程度の冒険者に、どの程度の範囲で開示するご予定なのでしょうか？」
「どの程度という言葉の意図が分かりかねますが、当然本人工ダンジョンの扱いは常に皇帝陛下の御意思に沿う形となるかと」
「陛下の」
「ええ……陛下の」
訝りながら繰り返す騎士さんに、口元を三日月型にした表情のない愛想笑いを返すキリエさん。その視線は硬質的で、ただただ冷たさを感じた。けれど、口にした言葉と先の前提を合わせるのであれば、
（柵は無しって事か……）
多分、ギルドの様な高い貸し出し費用の徴収は一切行わないという意思表示……いや、どちらかと言えば当てこすりかな？　まあ、ギルドの方も単に無意味に暴利を貪っているっていうのとはちょっと違うんだけど。通常、ギルドの地図閲覧料は開拓者の懐にもある程度入るし、大切な権利の一つだからね。まあ、代わりに無料で閲覧できるから、低ランクの冒険者の人にとってはありがたくもなるのかな。
さらりと口にしているし、実際現場レベルの極めて実務的な話だけど、早速出てきた

既得権益の解体に、質問したおじさんがぴくりと眉尻を跳ねさせた。招待客自体がダンジョン関係者が多かったらしく、この話にピンと来た人達が俄かに騒めいたのだった。

「それではもう一つ」

そんな騒めきを制止するように、ロレンツさんが朗とした声を僅かに張った。

「そうなりますと、これまでファーストアタックを行っていた者への配慮が必要となると思われますが、その辺はどの様にお考えなのでしょうか？」

その言葉は多分に情緒的で、既存のダンジョン、敢えて言うなら旧弊に執着する人間の感傷が含まれた言葉だった。さてさて、キリエさんはどんな返事をするかな？

「はて？」

壮年の男性の問いかけに対してキリエさんは実に不思議そうにアーモンド形の両目を丸くする。

「先程も申し上げました通り、本件は国家の財政を安定させるための一大事業となります。物事の大小を正確に捉えられれば、幾ら優秀な冒険者とはいえ個人のプライドに配慮が必要になる様な小さな話ではありませんが？」

そして、形の良い唇から吐き出されたにべもない言葉に壮年さんは「なっ!?」と絶句する。……今更じゃない？

彼女の説明した国家事業は要するに夢を現実に落とし込む夢の事業という訳で。話

の出だしからして既に情緒的な部分とは根本的に相容れない内容になっていた。
（けれど、まあ、受け入れられる受け入れられないは別の話か）
キリエさんの静かな挑戦、或いは宣戦布告に、ジワリと辺りにただならない気配が満ち始める。同時にパーティーに参加している島の研究者の方からは、怒気を浮かべるギルド関係者に向けて静かな冷笑が向けられていた。
ふと、隣を見ると、やっぱり少し前まで冒険者だったこともあってか、サルバもあまり好意的とは言えない視線を壇上へと向けている。ただし、
「こうやって微妙に他人事だって思ってるのを見ると、冒険者（花形）からダンジョン閉鎖士（汚れ仕事）に染まりつつあるなって感じるよね」
「うっせ」
唇を尖らせたサルバがぺしっと小突いてきた。流石に会場じゃ発砲は出来ないよね。
と、そんな風にふざけていたからか、或いは悪目立ちしていたからか、硬質な声で「そちらも何かご質問が？」と向けられる。おっとっと。
サルバが隣で「やべっ」と首を竦めているけど、まあ別に良いんじゃない？　指されなければ聞く気も無かったけど、機会があれば聞く程度にはこっちも気になっていたしさ。
「ん―、じゃあ一つ質問なのですが」

お言葉に甘えまして。

僕が何の気なしに手を挙げると、周囲からは奇異の視線が向けられる。はてさて、それは先の事か、素性の事か、はたまた他の何かなのか。ま、別にどうでも良いけど。

「この人工ダンジョン、誰が作ったんですか？」

「……は？」

あ、なんか呆れられた。っていうか、周囲も周囲で「何を言ってるんだこいつは？」って顔をしてるし。唯一、意図を直接理解できるサルバだけが神妙な顔になっているけど。

「おっしゃる意味が分かりませんが」

眉を顰めるキリエさんが半ば睨みつけるように僕を見下ろしてくる。んー、

「言葉のまんまですけど？」

とはいえ、それ以上に何を言えば良いのかって話だしね。

「言葉のままという事でしたら、勿論陛下「いや、そっちじゃなくて物理的に建造した人」そんなのなんて聞いても仕方ないし。

「わた「設計者じゃなくてね？」

そっちもどうでも良いし。ていうか、ここで貴方達以外の名前が出る訳もないし。

（出たらそれはそれで傑作だけどな）

（確かにね）

言えてる言えてる。ある意味想定外。ま、それはそれとして

「で、誰？」

「……」

「……」

「……はぁ」

僕の底の浅い質問に、この島の副市長（キリエさん）が呆れた様に嘆息する。

「皇帝陛下の庇護下に居ります、腕の良い職人がとだけお答えしておきましょう」

それだけ言って、思慮の無い人間（僕）に使う時間はこれで沢山だといった様子で、一旦質問を打ち切って次の説明に移って行った。けど、

「……」

その目が、僕に向けられる侮蔑に満ちている筈のアーモンド形の茶色い両目が、ほんの一瞬強い憎悪を湛えたのがやけに印象的なのだった。

「まともに答えなかったな」

声を潜めてくるサルバに「だね」と頷き返しながら、先日の牛の頭の化け物の夢と、島全体に満ちる悪臭、そして、先の彼女の反応に、口噤んだ何かと入島してから起きた様々な事を反芻する。

「きな臭いね」
「お前と居ると大抵こうだよな」
「失礼な」
　けどその通りだね、うん。
　まあ、島の本性なりなんなりが分かれば、それはそれ。
「かちこみでも掛けんのか？」
「それこそまさかだよ」
　面倒臭いし。
「僕がやるのは単なる報告だけ。事実を並べてそれで終わり」
「憤りとかはねえの？」
「ああ、さっきの？」
「おう」
　事実上の宣戦布告に等しいキリエさんの言葉に、他のギルド関係者同様怒らないのかと水を向けてくる。けどね、
「特には」
　或いは全然。
「らしいっちゃらしいな」

「だろうね」
だって、どうでも良いし。
けらけらと笑うサルバに肩を竦めて、僕は再び熱弁を振るうキリエさんを一瞬見上げながら、空になった更にお代わりを求めるのだった。

◆

あの後、一通り人工ダンジョンの説明が終わると、いよいよ落成式の目玉、ダンジョンの低層の探索、所謂ダンジョンのお試しアタックの時間になった。先程のキリエさんの説明にピリピリしていたギルド職員さん達も、流石にギルド所属の人間の性なのか、何処かワクワクとした表情で、島に伏せる雄牛の胸元に開いた未知の世界への口腔に熱い視線を注いでいた。それは、隣の相方も例外じゃないらしく、
「サルバ」
「おー」
両手で回転式拳銃を握り締めながら、浮足立った様子で他の観客と同じ様にラビュリ

ントスの入り口を青い左目で睨みつけている。
　取り合えず、明らかに話を聞いていない人間の生返事にとすっと軽く手刀を落とすと、丁度良い所に入ってしまったのか「がびょっ!?」と変な声を出して目を白黒させたサルバはそのまま頭を抑えて跪いたのだった。
「あ、もう入って良いみたいだよ?」
「それを今言うかコノヤロウ!?」
「はっはっは」
　サルバの左フックをバックステップで回避すると、見計ったかのようにラビュリントスの研究員さんが「では、どうぞお楽しみください!」と声を上げ、入り口に引かれていた白と赤のリボンが落とされる。集団の先頭に居た如何にもという風体の人達がまず人工ダンジョンの中を覗き込み、そして、一度顔を見合わせると示し合わせた様に大迷宮の中へと飛び込んで行ったのだった。
　その後に続いていくのは武装したギルドナイトらしい人達に囲まれたタキシードやドレスのギルド職員さんや、如何にもな装飾品を身に纏った元老院議員らしいおじさん達。
「順番来たね」
　で、最後に僕達。僕が声を掛けると「おう」と頷いたサルバが撃鉄を起こし、人工ダ

ンジョンへの初めてのアタックが始まったのだった。
（まあ、直ぐに集団から別れるんだけど）
（っておい）
　ずっこけそうになったサルバが身を乗り出してくる。まあ、怒らないでよ。ちょっと確認したいことがあってさ。
（まあ、良いけどよ……）
（あれ、本当に怒らないんだ？）
（お前の言動に一々怒ってたらこっちの身が持たねー）
（酷いね）
　その通りだけど。
（そして、それ以上にお前は身も蓋もない奴だが、大抵の行動は確りと理屈があるだろ？）
（それはどうかな？　むしろ、特にそうでもない事の方が多いと思うけど）
（そうって事にしとけ。じゃねーと、俺の心が折れそうだ）
（泣いて頼むなら善処することを考慮しないでもないよ？）
（そこで捻るなよ。せめて分かりやすく意思表示しろよ）
（どうでも良い）

（だろうな畜生!!）

はっはっは。

と、ふざけながらも何だかんだで隣に並ぶサルバ（元冒険者）に生きているダンジョン（ラビュリントス）の踏破を任せながら、僕も片刃剣の鯉口を切って、同時に昨日の事を思い返す。

（何か、胡散臭いんだよね）

（このダンジョンがか？　それとも、あの研究者達がか？）

〝共有〟で察知したサルバに「両方」と答える。ほんと、どこもかしこもだよね。さっきの職人云々が既に嘘だし。

（そうなのか？）

（九割方）

彼女（キリエさん）もまともに答えなかったし。

（さっきの質問は『このダンジョンを建造するのに集めた人間は何処に居るのか』を確かめたかったんだ。だってさ、こんな巨大建造物、作るのに掛かる人手は百や二百じゃ利かないよ？　中に入ってみても、造りは相変わらず重厚で張りぼてなんかじゃないし）

（確かに、そうだわな……）

コクリと頷いたサルバが少し興味を惹かれたようで、愛銃の先でカリカリと石壁を軽く引っ掻いた。

（一枚岩をくりぬいた訳でもない以上、石の切り出しや整形から、運搬、そして、建造。物凄い手が掛かっている以上、指揮できる職人の種類も相当数に昇る訳で）
（だろうな）
　けどね。
（そんな人員動員してたら、普通は絶対に噂になるよね）
　少なくとも人の口に戸は立てられないよね。
（お前の耳に入ってなかっただけとかはねえのか？）
（僕だけなら全然あると思うよ？　だって他人との関わりとか殆ど無いし）
（じゃあ）
（けど、ギルド長も知らなかったっていうのは有り得ないよね）
（……確かにな）
　そう、引っ掛かりになるのはそこ。例え、この規模の人工建造物を造っていて、相応の人員を徴発していたとしても僕だけなら知らないで終わった可能性は十分に、いや、十二分にあると思う。けど、ギルド長というか、ギルドは別だ。先の説明でもあった通り、表向き得られる情報を見る限りは完全な競合相手、一口で言えば商売敵に成り得る存在だ。まして、キリエさん（代表者）はギルドへの敵意を隠そうともしなかった訳で。そんな施設の情報が地方とはいえギルド長の耳に入らない？　それこそ有り得ないよ。よっぽ

どガチガチな方法で隠蔽してなければね。
（ガチガチな方法っつーのは？）
（パッと思い付くのは二つかな。内まだ穏便な方法は入島した人間を島から出さないこと。此れでも一応口封じは出来るからね）
（で、お前はそんな穏便な方法は取ってないと思っているんだろ？）
（うん）
　当然。
（その方法だと、事業が大々的に公表されて人員が島から出た後に、人工ダンジョンの建造方法に関する情報を他所に売っちゃう可能性があるでしょ？　知りたい人なんて、それこそ元老院議員から有力な商人に、ガルターと挙げればきりがないし）
（確かにな……）
　帝国との関係が常に微妙な南の国の名前に、サルバが微妙な顔になる。
（そもそも、この島に来てから研究者っぽい人は沢山見たけど、職人とか労働者って感じの人は一人も見てないし）
　この規模の巨大建造物を造れる人数っていうのを考えたら、基本的には綱紀粛正は出来ないはずだから、僕達島外の人間が居る間に出歩かないように指示しても、基本的には漏れが出てくる。

（どっかに閉じ込めとくとかそういうのはねえのか？）
（物騒だね）
（相方が血生臭えからな）
（酷いなあ）
「「はっはっは」」
　と、それはそれとして、
（閉じ込めておくっていうのは僕も考えたんだけどさ、そういう扱い（監禁）してもきちんと機能する人間なんて奴隷くらいでしょ？）
（あー、腕の良い職人ってーのはそれじゃあ動かねえわな）
（そーゆーこと。しかも、ラビュリントスの細部を見る限り、結構手が行き届いてる感じでさ。僕はそこまで建築に明るい訳じゃないけど、そんな素人目に見ても何も知らない素人が自分の感覚で勝手に積み上げたって感じじゃないんだよね）
　不意に飛び出してきたモンスターを斬った先を剣先で指して見せると、サルバも納得した様子で頷いた。
（とはいえ、これも全部僕の邪推、或いは妄想なんて可能性もあるから、念のため聞いてみた訳だけど……）
（まともな答えは返って来なかったって訳か）

（そーゆーこと）

後ろ暗いところがなければ普通に後で会わせるなり何なりと答えはそれなりに選択肢もあったしね。そもそも、誤魔化す必要がないし。

（つーことは、全員殺されてるのか？）

（と、思うんだけどね……）

（？　それ以外にあるのか？　煮え切らねえ言い方だけど）

（いや、他の可能性を思い付いた訳じゃないんだけど、職人の殺処分をした場合、一つ問題があってさ）

（つーと？）

（ほら、想定される人間の人数考えてみるとさ）

（おう）

（あの研究者だけで殺処分出来るのかなってね）

（言われてみりゃ……）

僕の疑問にサルバが僅かに神妙な顔になる。そういう反応になるよね。

一定以上の人間の殺処分は基本的に、短時間で、有無を言わさず、そして、一人残らずというのが肝になってくる。じゃないと逃げた生き残りの掃討含めてぐだぐだになるからね。

で、村落一つとかなら兎も角、この巨大ダンジョンを造れる人数となるとかなり難易度は高いと思うんだよね。海に飛び込まれたら大失態なんて話じゃ済まないし。

（うーん、どうにも分かんねえな……）

近くにいた妖精型のモンスターを射殺しながら、サルバが「うあー」と頭を掻く。サルバの大口径拳銃に撃ち抜かれた妖精は粉々に砕けて、一瞬で光になった。

（ま、こんだけ色々言ったけど、基本的にはあんまり気にしなくて良いと思うよ？）

そういう、面倒な話を最終的に判断するのは僕達じゃなくて上の人達だからね。

（それで良いのか）

（いいんじゃない？）

別にどうでも。正直、他にも色々疑問符が出て来てきりがないし。全貌を把握するにはまだまだ情報不足だとも思うし。

今した話以外にも、そもそも皇帝陛下がどうやってこんな人数を元老院に悟られることなく徴発したのかとか、いくらでも不思議なところはあるしね。まあでも、一つだけ確実なこともあるかな。

（つうと？）

（多分、いや確実にかな。この人工ダンジョン計画が上手く行けば、相応に利権は動くと思うよ）

それは良しにつけ悪しにつけ、帝国内に地殻変動をもたらすんじゃないかな。
（あっさり言うな）
（だって他人事だし）
（おい、ダンジョン閉鎖士）
（むしろ、ダンジョン閉鎖士だからなんだけとね）
いや、本当に。
（そういう話よりも、僕からしたらこの悪臭の原因とか、人工ダンジョンも閉鎖がひつようになるのかとかの方が遥かに大事だからね）
むしろ、それ以外に気にする要素ある？
「まあ、そりゃそう「あ」
と、サルバが異色虹彩を隠す顔の右半分の前髪を揺らしながら首を傾げたのとほぼ同時に、視界の端、薄暗いダンジョンの奥にそれを見付ける。
「んお？」
僕の視線を追い掛けるように後ろを振り返るサルバを置いてそれを拾ってみると、追い掛けてきたサルバが「それって……」と硬い声を漏らす。
「見たままだね」
戸惑いを左目に浮かべたサルバに、拾い上げたそれ、力任せに引き裂かれた襤褸切れ

を差し出すと、それを改めたサルバは「やっぱりか……」と神妙な表情で呟いた。まあ、ここに来るまでの数日、ずっと着てたんだし気付くよね。

　先日の無許可のダンジョンアタックの際、雄牛頭の化け物に襲われて紛失したサルバの旅装。それがズタズタのまま、ダンジョンの端に打ち捨てられていたのだった。

「念のため程度だったけど、来てよかったね」

「だな」

　まるで白昼夢のように襲いかかってきたあの光景（化け物）を思い出しながら、一先ず先日の不許可侵入の証拠を隠滅する。

「ん、おしまい」

　既に着れなくなった旅装に松明の火をかけると、一瞬燃え上がったそれは、直ぐに火種（証拠）を失って消沈してしまう。後に残った残骸を軽く地面の土に混ぜれば、凡その対応は完了だ。……、

「？　アルタ？」

「何？」

「いや、何つーか……」

　小首を傾げたサルバが「何かあったのか？……ってな」と唇を尖らせた。ああ、そうだね、

「昨日の夜に軽くあらましは説明したけど、あの雄牛の件は一体なにが原因だったのかなってね」

「……」

「単純に考えれば、特異な能力を持ったモンスターのせいなんて話にも出来そうだけど、僕達の持つ〝共有〟が原因の可能性も捨てきれないし、或いは複合的な理由である可能性もかなり高いよね」

「んで、一番厄介なのは複合的な理由である場合か……」

「そうだねえ……」

サルバに首肯を返しながら、はてさてと少し考える。

「ま、今は良いや」

「……は？」

「サルバ？」

後ろから向けられた間抜けな声に振り返ると、青い左目を丸くしたサルバがぽかんと間抜けに口を半開きにしていた。え？　何、その新しい反応。

「いや、だって」

対するサルバの方は本気で混乱に陥っているらしく、呆然とした様子で、僕の顔をしげしげと見上げてくる。

「〝どうでも〟じゃなくて〝今は〟って言うとか、お前、本当にアルタか？　いや、それとも、何か悪いもんでも拾い食いしたのか？」
「どういう意味だこの野郎」
　喧嘩売ってるなら買うけど？
「だって、お前どうにも成らねえ事はどうでも良いで切り捨てるじゃんか」
「情報不足なら保留くらいするよ？」
　たまにしかしないのは事実だけど。
「保留の基準は？」
「特にないけど？」
「よし、何時ものアルタだな」
　大きく頷きながら、サルバはほっとした様子でさらしで潰した胸を撫で下ろした。何処で納得したのさ。……ま、別にどうでも良いけど。
「因みに、昨日は聞きそびれちゃったけど、僕が雄牛と戦ってた時、サルバは気絶したように見えたけど、何か記憶とか違和感とか、そういうのはあった？」
「ん……そうだな……」
　少し、自分の記憶を探るように、サルバが「んー……」と首を捻る。
「殆ど突発的に意識が途切れた記憶しかないんだけどな」

「うん」
「けど、意識が戻るときだったかな。お前に強く手を引かれたような気がした」
「ふーん……」
手を……ね。
多分、物理的な話じゃなくて、感覚的な話なんだろうけど……
（意識の比喩？　それとも、〝共有〟の実像？）
……ま、いっか。
やっぱり、まだまだこっちも謎だらけだね。
「……ま、気長に行くしかないか」
とはいえ、それ以上に手掛かりがあるわけでもなし、〝ダンジョン・コア〟による力なんて大概が究明されないままだし。少なくとも今のところ、僕達には利益を多目にもたらしてくれているのだから……それ以外にこれに何かを求める必要も無いのかもしれない。
「……だな」
僕の思考の前半分と後ろ半分の両方に納得したのか、サルバがこくりと頷いた。……うん、
改めてスムーズに意思の統一が出来た事を理解した僕達は、さてさてと互いに得物を

構え直してダンジョン探索に目を向ける。
「どちらにせよ、こいつ（人工ダンジョン）を深く知る必要があるのは間違いねえからな」
「だね」
今度はサルバに僕が頷き返す。
「ぶも「!!」」
同時に、背後に現れた雄牛のモンスターに僕とサルバの斬首と貫通が向けられたのだった。

七

身に宿る〝ダンジョン・コア〟、人工ダンジョン、クレタ島や元老院を含む政治力学と様々な引っ掛かりを覚えながらも、直近僕達としてはダンジョンのアタックという極々直接的な課題が目の前に置かれている事もあり、一先ずこれ等の話は脇に置いておいて、時折現れるモンスターを取り敢えず機械的に処理する作業を繰り返しながら、渡された地図に従ってダンジョンの深層へと足を向けていた。

「えっと、次は……」

「此方だな。左の方だと直線距離が多過ぎて、いざとなった時、逃げるのに向いてねえし」

隣から、身を乗り出すようにして地図を除き込んできたサルバが、現在地から二股に別れた通路を指でなぞって、そう呟く。

「ん」

サルバの言葉に頷いて、地図を仕舞うと、念のため剣の刃と銃弾の残弾数を確かめる。

こうやって、生きているダンジョンに潜ってみて分かったことだけど、やっぱりこっちではサルバの習慣や視点が素直に頼りになった。

「……伊達にB級冒険者やってねえからな」

僕の感想が”共有”を通して伝わったのか、一瞬足を止めたサルバが振り返り、少しだけ照れ臭そうに笑った。本当にね。

実際、その通りだよね。基本、殺しが対人で、対モンスターやダンジョンアタックに慣れてない僕にも的確に指示くれるし。

「……」

「どうしたの？」

何か、きょとんとしてるけど。

僕に向けて「んにゃ……」と猫みたいに漏らしたサルバは難しい顔になって、しきりに首を傾げている。

「身も蓋もない無機質人間のお前が、普通に誉めてくるとか、妙にむずむずするっつーか、何か座りが悪いっつーか……」

ふーん……

「身も蓋もない人間らしく、どうでも良いと思っているから躊躇なく誉められるのかもよ？」

屈託が無ければ躊躇もなくなるのは古今東西不変だしね。

「いや、そこは無機質人間を否定しようぜ？」

「何で？」
　数学みたいに決まった答えがあるなら兎も角、感情や感想の話は正解なんて無いでしょ？　なら、正否なんて話すだけ無駄だよ。
「そりゃそうかもしれねえけど「あと、他人の感情とかどうでも良いし」明らかにそっちが本音じゃねえか」
　何か、物凄く呆れられた気がしっと……、
「うお!?」
　不意に上から降ってきた小型のコウモリに似たモンスターを斬り殺すと、運悪く気付いていなかったのか、サルバが小さく悲鳴を上げた。……大丈夫？
「おう」
　頷いたサルバが僕に向けて発砲すると、後ろに迫っていた骸骨型のモンスターが頭蓋を砕かれて消滅した。
「大丈夫か？」
「うん」
　サルバに頷き返すのとほぼ同時に、お互い次のルートに進む前の点検を完了させる。
　先の雄牛の件や旅装の件が嘘のように、僕達の足取りはスムーズなのだった。

◆

証拠の隠滅終わり、後顧の憂いを無くした僕とサルバの両足四本は、配布された地図の一角に記された赤い輪郭線、則ち探索を許可されていたエリアの再外郭へと辿り着いていた。

「……」

「っておい」

「何？」

「いや、何って、そこ探索禁止エリアじゃねえのか？」

「そうだけど？」

一目瞭然の事実を敢えて反復するサルバに、肯定と疑問を同時に返すと「いや、まあ、お前が禁則事項とか気にする方が気持ち悪いけどよ」と割りと失礼な感想を返される。

でもまあ、事実だしどうでもいっか。

「強いて付け加えるなら、今回の場合は単純に仕事だからだけどね」

別に禁止されていると反抗したくなるみたいな意思や意見は持ってない。けど、仕事

になった場合に躊躇を覚えるような思い入れも特にない。要するに、ダメと言われたから見たい訳じゃなくて、単に今回の業務上は隠しているものの方が隠していないものより優先順位が高いにすぎないし。押し並べてみれば、禁止とかそういうのは僕にとって止まる理由にも止まらない理由にも多分ならないのだった。

「ま、昨日ダンジョンに不正侵入した俺も今更っちゃ今更か」

僕が地図上の禁足地に踏み込む後ろで、そうぼやいたサルバも改めて両拳銃をチャキリと構える。

（やっぱり、ただの研究者か……）

地図上でこそでかでかと、まるであの市長の自己顕示欲の如く記載されていた立ち入り禁止の文字も特別拘束力が有るわけでもないらしく、特別な力どころかトラップや防護柵等による足止めもなく、実に簡単に侵入を許してくれる。

そして、予想外にすいすいと進んでいたはずのダンジョン探索は本当に唐突に終わりを告げた。

「……あれ？」

「どした？」

最初に気付いたのは地図を持っていた僕の方で、不意に止まった僕の隣で半歩先に行ってしまったサルバが出し掛けた右足を止めて、軽く仰け反るように振り返ってき

た。
「いや……」
サルバの疑問に、一旦意味のない制止を噛ませて、僕は念のためもう一度地図を確かめる。けど、
「……」
一瞬、勘違いかとも思った違和感、それが思い違いでもなければ目の錯覚でもないことを確認すると「これ」とサルバにも違和感の在処を差し出した。
「んん？」
「ここだよね？」
眉をひそめるサルバに地図上での僕達の現在地を指差してみせる。入り組んだダンジョンではあるものの、人工物だけあって、規則正しい配置だから、場所の間違いとかは有り得ない。で、
「……分岐の数が違うな」
「だよね」
配布された地図を信じるのであれば、僕達の前には二つしか存在しないはずの分岐点、その左右の道の丁度真ん中に、道標には記載されていない第三の選択肢がぽっかりと穴を開けていたのだった。

「これは……どういうことだ?」

思わずといった風に首を捻るサルバに僕は「そうだね」と少し考えて思い付いた選択肢を挙げてみる。

「まず一番悪意なく、強いて無垢に捉えるなら単なる間違い。書き忘れた或いは書き損じたかは分からないけど、一先ずそれ以上の意図は存在しないよね」

ま、これなら本当に楽なんだけど、

「明らかに通路の更に奥が描かれてるよな」

そう、実に真っ当な疑問を抱かれると、直ぐに言葉に窮するんだよね、これ。書き損じとかなら何処かで無理矢理通路の記述を打ち切った痕跡があるはずなのに、それが一切見当たらないからね。

「端から弁護する気もねえくせに何言ってやがる」

「へっ」と笑ったサルバは顎をしゃくるようにして「んで?」と次を促してくる。そうだね、

「一つ目より多少悪意をもって、或いは適切に状況を考えた場合、地図の作成に手が回らなかった可能性。この言い訳の良いところは、島の研究者がわざわざ侵入禁止区域を設定した理由まで説明がつくところだね」

「地図の手が回らなかったってか。けど、マップなんざダンジョンの設計から開始して

りゃそれで完品が作れるはずだろ？　或いは設計図とか。なのに手が回らないとか、まずねえだろ」
「まあね」
　というか、その通り。この場合、ダンジョンの製造からのマッピングを怠った上に、設計図も紛失しないと成立しないからね。前の発表での「即座に地図を提供出来る」っていう言葉も嘘になるし、書き損じとは別の意味で大チョンボだ。つまり、ない。
「となるとまあ、結局三番目の答えになるわけだけど……」
「意図的に隠してた……か」
「だねえ……」
　三つ目の通路のごとく、禁足地の隠し通路のごとく。浅はかではあれど、浅墓ではあれど。何かを隠蔽をしていた可能性はかなり高いと思う。
「しかし、何を隠そうとしてんだろうな」
「そうだね……」
　首を捻るサルバに僕も少し思案する。
「或いは何じゃなくて、どんなことが適切かもしれないね」
「物理的な何かじゃなくて、現象的な何かってことか」
「うん」

そもそも、地図を提供する以上、この〝第三のルート〟の先に物を隠すのは不可能だしね。勿論、今だけの期間限定の隠し事の可能性もあれば、人工ダンジョン公開後も何かしら理由をつけてずっと立入禁止にする可能性も無きにしもあらずだろうけど。

「確かにな。……んで？」

「何？」

「それを踏まえて、我らがアルタ（ダンジョン閉鎖士）はどうすんだ？」

このまま引き返すのか、それとも突っ込むのか。そう問い掛けてくる男装姿のサルバ（元男）。んー……、

「取り敢えず、上に登ってみるけど、一応隠密行動だから、静かに音を出さないようにでいこっか」

「よし」

僕が短刀を投げ渡すと、頷いたサルバが愛銃をホルスターに落として右前髪を掻き上げる。露だった青の目と露になった黄の目が獰猛に歪んだのを確かめて、僕とサルバは地図にない〝第三のルート〟へと足を踏み入れたのだった。

◆

地図にない〝第三のルート〟に踏み込んだ瞬間襲い掛かってきたのは、強大なモンスターでもなければ、このルートを隠蔽したい人間でもなく、頭蓋を撃ち抜かんばかりに鼻孔に突き刺さった強烈な悪臭（ダンジョンの臭い）だった。

「!?」

「あ、ごめん」

あまりにも唐突だったせいで〝共有〟を切り遅れた結果、僕と違って慣れない悪臭をもろに受けてしまったサルバが目を剥いて鼻を押さえた。直ぐに〝共有〟を切るけれど、不快感はまだ残ってしまっているのか、今にも吐きそうな顔をしている。

「……はあっ」

けど、男としての意地で何とか吐き気を受け流しきったらしく、サルバは二度三度と息を吐くうちに何とか呼吸を平静に引き戻していった。大丈夫？

「いや、普通に大丈夫じゃねえけど……」

壁に手を突いたサルバが何故か異様なものを見る目で此方を振り返ってくる。

「お前、これ平気なのか？」

「別に平気じゃないけど」

むしろ、凄く臭いよ？　この島全体がそもそも悪臭に包まれてるけど、この通路の生臭さはその比じゃないってくらい。
「ま、それと吐く吐かないは別問題だけどね」
「いや、そこ切り離して考えられるのかよ……」
何故かサルバが異様なものを見る目で見てくるけど……まあいいや。
そんな事より、今はダンジョンと……あと、この臭いの事だね。
「？　何か普段と違う臭いでもしたのか？」
「いや、臭いの質は変わらないかな」
刺激はかなり強かったけど、糞便臭と鉄錆臭の混合はダンジョンの臭いとしてはむしろスタンダードだし。
「嫌なスタンダードだな」
「僕という色眼鏡を通した世界だからね」
「お前が世界を色眼鏡で見てるとは思えねえけどな」
「そう？」
「だって、お前その辺どうでも良いだろ？」
「まあね」
というか、その通り。

「んで？」
「ん？」
「臭いの質は変じゃねえっつーなら、何が引っ掛かったんだ？」
「さっきの臭いのタイミング」
「臭いのタイミング？」
「うん」
　首を傾げるサルバに、僕は軽く頷く。
「今の臭いだけど、丁度この通路に入った瞬間にしてきたでしょ？」
「ああ」
「この〝臭い〟ってそもそもが現実的に存在する臭いっていうよりは、ダンジョンの、ひいては〝ダンジョン・コア〟の気配を〝臭い〟として捉えてるものだから、必ずしも物理法則に従う訳じゃないんだけど、それでも普段は少し離れてても臭いがしちゃうものなんだよね」
　だから、キリエさんの家からでもラビュリントスの臭いが絶えない訳だし。
「けど、今の臭いは本当にこの通路に足を踏み入れた時、まるでドアが付いてたかのようにはっきりと切り替わったよね」
　本当に物理法則を無視するように。

「いくらダンジョンの〝臭い〟っていうのが比喩的なものであったとしても、ここまで綺麗に別れるって事はないって考えると……この通路は本当に今、僕達が来るほんの少し前に生まれた可能性があるのかもなってね」

「今……生まれた？」

「うん」

多分に暴論の色を帯びてはいるけどね。

絶句するサルバは、けれどダンジョンという『非常識が常識』な空間への突入を生業としていただけあって、「いや、そうだな」と頷いた。

「起きたことをそのまま受け入れるとしたら、確かにその可能性が……いや、待て」

「あ、気付いた？」

「気付いたっつーか、それってあれか？　この島の研究者が隠したかった事ってのがもしかして……」

「この事なのかもしれないね」

果たして、そんな僕達の暴論と邪推混じりの推測を裏付けるように、激臭の通路を通り過ぎた先には此れまでと何ら変わることのない迷路が広がっていた。

「決まりだね」

この通路そのものは隠す必要もない、いや隠す意味がない。そんな隠す意味のない通

路を敢えて隠さなきゃいけなかった理由。それは……
「この人工ダンジョンは通常のダンジョンと違って、ダンジョンの中身が刻一刻と変化する性質を持ってるね。まるで、ダンジョンそのものが生きているみたいに……さ」
「……研究者達も当然この事は分かってるよな」
「立入禁止にしてる以上はね」
　このくらいのダンジョンなら、幾ら安全のためとはいえ、一階層くらいなら全面開放しても問題ないだろうし。
「取り敢えず、戻ろっか」
「良いのか？」
「うん」
　収穫は十分だし、少し腰を据えて考えをまとめたいところでもあるしね。
「と、いうわけで帰ろっ「ひぃいいいいいいいいいいいいい!?!?!?!?」ん？」
　サルバに帰投を伝えようとしたその瞬間、暗く臭いダンジョンの血管を駆け抜けて、絹を引き裂くような悲鳴が迷宮内に響き渡ったのだった。っていうか、今の声っ「アリアドネ!?」
　聞き覚えのあるそれに、僕が記憶を確かに入り掛けたその一瞬で答えに行き着いたサルバが絶叫と共に駆け出していた。ああ、そうだそうだ。

サルバの言葉に、直ぐに声と名前を一致した僕も後を追いかける。……っていうか速いね。

必死になった人間の火事場の馬鹿力というものを染々と感じながら先を行くサルバから左目の〝視界〟を受け取る。

「あそこだっ!!」

僕が〝共有〟したのとほぼ同時に、サルバが両拳銃を突き出す。……遠くない？

果たして、サルバの視界のその先、右目（自分の目）では小さな点すら見えない暗闇の先を左目（サルバの目）から確かに見通す。

「うーん、必死になると人間は五感も鋭くなるのかな……いや、そんなわけないか」

ダンジョン閉鎖士や〝ダンジョン・コア〟関係なく異様な距離を容易く見渡すサルバを〝不思議生物〟認定しながら、一先ず走りながら射撃体勢に入ってスピードの落ちたサルバの隣を駆け抜けた。

同時に背後で響く発砲音。放たれた弾丸が僕の耳元を疾（はし）り、

「ブモンッ!?」

そして、拳大にまで大きくなった標的、予想通り先の声の主であるアリアドネさんに襲い掛かろうとしていた、牛頭人体の化け物の片目を噛み千切り、引き裂いたのだった。

「流石」

分厚い皮に腰に巻かれた襤褸布と長い体毛。分かりやすく銃弾の通りにくいモンスターの唯一と言って良い弱点を正確に撃ち抜くサルバの腕を再認識しながら、僕も自然のダンジョンと比較して十二分に広い人工ダンジョンの地の利を生かして片刃剣を大上段に振りかぶる。

「しっ」

そして、左目を押さえた雄牛頭が僕の気配に気付いたのと同時に、硬く均された地面を蹴り飛ばす。

（よし）

振り下ろした剣が上手く雄牛の首の骨の間を通り抜けたのを見届けて通り過ぎると、後にはぼとりと零れ落ちた生首が倒れ伏した身体に押し潰される姿だけが残ったのだった。

「アルター」

納刀するのとほぼ同時に、追い付いてきたサルバが声を上げる。僕の方は何ともないから、そっちを心配してあげなよ。

「そっち……ってああ！」

一瞬きょとんとしたサルバにダンジョンの端でへたりこんでいるアリアドネさんの方を指差すと、漸く本来の目的を思い出したのか、絶叫と共に慌てて彼女に駆け寄った。

（……っていうか、〝共有〟で状況分かってる上に、視認も出来てるのに何でこっちに先に声を掛けるのさ。さっきアリアドネさんが襲われてるの見てあれだけ泡くってたのに）

（うっせ、しゃーねーだろ！）

何とかアリアドネさんを落ち着けようと作り笑いを浮かべながら、器用にも〝共有〟で僕にだけ吠えているあたり、サルバも大分この〝ダンジョン・コア〟を使いこなしてるよね。

「すみません、ありがとうございます……サルバさん」

そんなサルバの内心を知るわけもなく、アリアドネさんは自分を助けたガンナー（サルバ）に、呼吸を整えながらペコリと頭を下げた。

「あ、いや、何もなかったなら別に良いけど……」

アリアドネさんの言葉に、サルバもしどろもどろになりながらわたわたと手を振る。

「そういやあ、アリアドネ……さんは一人なのか？」

そして、暫し左目を泳がせた末に、サルバはナンパか何かのような言葉を向けたのだった。

「あ、実は……」

サルバのふりに一瞬言葉に詰まったアリアドネさんは少し躊躇いながら「そのー……

探索に夢中になっている内に、他の方達とはぐれちゃいまして」と、気まずげに呟いたのだった。

「あー……「なら、僕達と同じですね」

そんなアリアドネさんの不用意な行動に、掛ける言葉に迷うサルバを遮りながら、一先ず先のことを隠すために彼女と同罪になっておく。これで、追加で誤魔化さなきゃいけないことも片付いたね。

（……）

その意図が”共有”で伝わったサルバが一瞬じとっとした目を向けてくるけど、これで相手の親近感も湧くんじゃない？

「サルバさん……達もですか」

ほら、あからさまに同罪の人間が居たって顔でホッとしてるし。

（何か釈然としねえ……）

（まあ、僕も本気で親近感抱いてくれるなんて思ってたわけじゃないからね）

つまり、その感情は正常。

（おい）

（それより、先にアリアドネさんを誘ったら？）

突っ込みを優先してくれるのは、それはそれで会話が弾むけど、サルバとしてはそっ

ちの方が大事でしょ？

（覚えてろ「えっと、サルバさん？」あ、はい、どうしました？」

恨めしげに捨て台詞を吐こうとしたものの、小首を傾げたアリアドネさんの声に、サルバは慌てて相好を崩すと再びアリアドネさんに愛想笑いを向ける。

「その、図々しいお願いなのですが、サルバさん達がダンジョンから出られるのにご一緒させていただいても宜しいでしょうか？」

「うぇっ!?」

そんなアリアドネさんから出された、サルバからしたら願ってもないお願いに、思わずといった風に奇妙な声を上げる。

「ダメ……でしょうか？」

「あ、いや……」

その声を否定的に受け取ったらしいアリアドネさんが悲し気に眉尻を落とすのを見て、サルバは半ば焦りながら、助けを求めるように僕にチラチラと視線を投げてくる。

（別に、好きにすれば良いと思うよ？　僕の方は粗方用事も終わったし）

アリアドネさんのお陰で、ざっくり全体から離れた理由を誤魔化す下準備も出来たしね。

（ああ、いや、お前はそうだよな……）

（そりゃね）

ホント。

僕の方が問題ないと確かめたサルバは「あー……」と少し言葉に迷いながらも「じゃあ、付いてきて下さい」と言って立ち上がる。その言葉にパアッと綻んだアリアドネさんの顔を見て、サルバは端からでもはっきりと分かるくらい顔を赤くしている。うーん……

「あっ!?」

内心、大丈夫かなと首を捻っていると、サルバの前でそろりそろりと立ち上がっていたアリアドネさんが小さく悲鳴を上げてサルバの方によろめいてしまう。

「うおっ!?」

その不意打ちに、寄り掛かられたサルバも悲鳴を上げるも、流石にそこは元冒険者だけあって、容易くアリアドネさんを抱き留める。

「「あ……」」

けれど、殺し切れなった勢いに、二人の距離は吐息が重なりそうな程に近くなる。

そして、重なった目と目が驚きに見開かれ、鼻先がくっつきそうな位の距離で抱き合った二人はぴしりと硬直する。

「ご、ごめんなさい!!」

「い、いや!!」

けど、直ぐに我に帰ったアリアドネさんの声に、サルバはばっと距離を取る。

「じゃ、じゃあ、行きます……か」

「は、はい。宜しくお願いします……」

そして、気恥ずかしさを誤魔化すように先を歩き出すサルバに、アリアドネさんもこくこくと頷いてテコテコと後を付いていく。

と、二三歩、歩いたところでアリアドネさんが「あ」と思い出したように立ち止まる。

「？　アリアドネさん？」

アリアドネさんの気配に気付いてサルバが振り返ると、後ろのアリアドネさんがえへへと笑顔を浮かべる。

「さっきのサルバさんの射撃、凄かったですよ。私が今まで見た冒険者さんやギルドナイトさんの中で一番！」

「……」

そう言って、嬉しそうにサルバの隣に並んだアリアドネさんの言葉にサルバはまたも固まりながら、それでもはっきりと内心を歓喜に包まれたのだった。

（良かったじゃん）

硬直しながらも浮かれるサルバに〝共有〟を通して声を掛けると、サルバは（いや、で

もよ……）と少しだけ気まずそうに首を傾げた。
（直接留め刺したのはアルタだろ？）
（それこそ別にどうでも良いよ）
僕の方は単に仕事でモンスター一体狩っただけで、主観的にはそれ以上の価値もないし。
（ま、それでも気が咎めるなら、ロハグに戻った後にでも何か奢ってよ。それでチャラ）
正直、それ以上何か言われても反応に困るし。
（……そうか）
（うん）
ちらりと振り返ったサルバに軽く肩を竦めると、サルバの口許が少し動いて「サンキュ」と呟いたのが見えたのだった。
（しかし……）
サルバの背中に軽く手を振りながら、先のモンスターが消え去った先を何となく振り返る。既に消滅が済みドロップも何もない、極々ありふれた平凡なモンスター。けれど、
（また、雄牛か……）
昨日の夢に、今の襲撃。モンスターに限らず現象として現れるそれが全て、この

人工ダンジョン（ラビュリントス）と一致しているという事実。

「……」

違和感は拭えない。けれど、何か確信が有るわけでもない。ただ続く不審感が脳裏に僅かに残り続けていた。

「……ま、いっか」

やっぱり核心に辿り着けない事実を確めながら、僕は報告書の所感欄に記入する一文を更に一行追加したのだった。

◆

翌日のこと、

「「……」」

入島から続いていた晴れ模様が嘘の様に、島全体に降り注ぐ土砂降りの音を聞き流しながら、僕とサルバは与えられた一室で報告書の作成と愛銃のメンテナンスに勤しんでいた。

ザアザアと響く豪雨の音と、カチャカチャという金属のぶつかる音を背景に、僕はふと報告書から顔を上げて、同じベッドの上で自分の武器の手入れをする相方（サルバ）の姿に目を向ける。

「むぅ……」

そんなサルバはといえば、昨日のアリアドネさんとの逢い引きは置いておいてダンジョンから戻ると、清々したとばかりにさらしを投げ捨ててベッドに潜り込んだせいか、起きた後も束縛を嫌う無政府主義者のごとく全裸で過ごしていた。

ちなみに、今は此方にお尻を向けたまま、先程から何やら難しい顔をしている。

「うおっ!?」

と、枕元の壁に寄り掛かりながら、何となくサルバの作業を眺めていると、部品が一つ飛び掛かってきたのか、連鎖するように飛び退いたサルバのお尻が僕の方に更に飛び込んできた。

「えい」

迎撃のために軽く右足を突き出すと、狙い違わずサルバのお尻に激突した右足は、けれど予想以上に綺麗に真芯を捉えてしまったのか、柔らかいサルバのお尻の肉を割り開いて、割れ目の最奥にずぼりと突き刺さってしまう。

「はうおっ!?」

「うわ、生暖かい」
　切な気な悲鳴を上げたサルバはつんのめるようにしてベッドから転げ落ちると、そのままコロコロと転がって入り口のドアにぶつかって止まったのだった。
「うぅ……何すんだよアルタァ……」
　仰向けのまま、天井にお尻を向けたような体勢で首を捻ったサルバが恨めしそうな声を上げる。
「迎撃」
　見ての通り。
「何故に」
「狭いから」
　勿論。
「っていうか、何で態々こっちのベッドで作業するのさ。特別小さい訳じゃないけど、二人で色々出来るほど広くもないのに」
「んなの……何となくだよ。別に良いだろ」
「ま、そうだね」
　狭くなったらまた迎撃するだけだし。
「迎撃はすんのかよ」

「勿論」

　基準は特に決めてないけどね。

「まあ、その方がお前らしっ!?」

　何時もの調子で突っ込みを入れながら立ち上がろうとしたところで、ドアに沿って伸びていたサルバの左足がノブに引っ掛かってしまう。

　カチャリとやけに大きく響いた音に、僕とサルバが殆ど同時に「「あ……」」と声を上げる。

　留め具を失い、当然のごとく開き妙にゆっくりと消え去るドアと、そのドアに道連れにされるサルバのすらりとした両足を見送りながら、直後に訪れる未来のために、僕は一先ず合掌するのだった。

「はうおっ!?」

　今日二度目の「はうおっ!?」と共に、墜落するサルバのお尻。今度のダメージは僕の迎撃の比ではなかったのか、「〜〜〜〜〜〜〜〜っ!!!」と声にならない悲鳴を上げながら両手でお尻を抑えてのたうち回る相方（サルバ）。あー……何て言うか、

「今日は尻難の日みたいだね」

「言うことはそれだけか!?」

　何とか激痛の波を遣り過ごしたサルバが黄色の右目と青い左目に涙を溜めながらフ

カーッ!!　と気が立った猫みたいに威嚇を向けてくる。
「けど、お尻抑えながらだから全然迫力ないよね」
「誰のせいだ誰のせ「何ですって?!?!」ん?」」
サルバが吠えようとした瞬間、!?島全体に響きそうな勢いでこの家の家主（キリエ）さんの絶叫が空気を引き裂いたのだった。
「……」
思わず動きを止めてサルバを見ると、サルバもサルバで狐に摘まれた様な顔で此方を見返してきている。
「……ふむ」
そうだね。
取り敢えず、サルバの愛銃の部品を踏まないようにしてベッドから降りると、硬直しているサルバの手を取って、そろりそろりと廊下を進んでいく。
「……」
吹き抜けに繋がる廊下の壁からそーっと顔を出すと、丁度開け放たれた玄関の前でハウスキーパーさんにかしずかれたキリエさんが来訪者らしい白衣の男性に掴み掛かっているところだった。さっきの声といい凄い剣幕だね。
（いや、明らかに発狂してんだろ）

（まあねえ……）

見上げながらぼやくサルバの旋毛を見下ろしながら、その言葉に同意する。

「いえ、ですから、今言った通りで「そんな事は分かっているわよ!!」

しどろもどろになりながら、もう一度何事か繰り返そうとする。けれど、それをピシャリと切り捨てて、キリエさんが目の前の男の人を睨み付ける。けれど、少しだけ冷静になったのか大きく息を吐いて、一拍を入れる。

「本当なの？　まだダンジョンから戻らない人が居るなんて」

「え、ええ」

そして、改めて告げた問いに、男の人はガクガクと首を縦に振って肯定を示す。ふーん、行方不明者か……。

「ステイ先の研究者もダンジョンの入り口で確認をしていた者も、どちらも戻ってきていないと……間違いありません」

「中の探索は？」

「既に浅いところは。ですが、深部は私達だけでは無理ですよ」

「地図があるじゃない！」

「あんな地図を頼りに深部に潜れる訳がないじゃないですか!?」

ヒステリックなキリエさんの言葉に悲鳴で返す研究者の男性。へぇ……、

（なあ、今……）
（うん）
　下のサルバに首肯を返しながら、この島の事実上の副責任者の会話に腑に落ちるものを感じる。
（深部っていうのが入り口から遠い所っていうことなら、あの立入禁止区域は、あの地図に無い通路は間違いなく深部にあたるよね）
（だわな）
　つまり、昨日のあれは勘違いでも何でもなく、本当にこの島が隠したかったものだったと。
（どうすんだ？）
（どうするって？）
（問い詰めたりすんのか？）
（んー……）
　そうだね。
（今は不要かな）
　人工ダンジョンの大きな売りだったマップが役に立たないっていうのはそれだけで収穫だし、この分ならまだ手を加えなくても勝手に埃が落ちてきそうだしね。

（そか）
（うん）
　頷いたサルバに頷き返すと、カリッと何かを噛むような耳障りな音が吹き抜けを昇ってくる。……爪でも噛んでるのかな？
「こんなこと、あんな気色悪いダンジョン閉鎖士達に嗅ぎ付けられたら！」
（言われてるぞ）
（言われてるねえ）
　っていうか、あの元老院議員さんとか、もっと知られたら不味そうな人沢山居るのにね。
（生理的嫌悪感込みなんじゃねえの？）
（酷いなあ）
　けどまあ、多分その通り。
（因みに感想とかねえの？）
（特には）
　ある意味平常運転だし。
「それで……」
（あ、続きだね）

（おう）

「行方不明者は誰なの？」

顔を強張らせながら確認するキリエさんに、一拍置いた研究員さんが「名前は……」と緊張した面持ちで口を開く。

「パーシーという少年聖歌隊の少年です」

聞こえてきたのは、何故か聞き覚えのある名前だった。

八

吹き抜けの下から聞こえてきた名前に、虚を突かれたサルバはその驚きを現すように切り揃えた黒髪を揺らして「は……？」と声を漏らした。

少し見下ろせば、前髪に隠れていない左目が大きく見開かれて、水気の多い唇も半開きになっている。……大丈夫？

（いや、まあ……）

一瞬前置きしたサルバは直ぐに普段の調子に戻ったのか（冷静になりゃ特にどうってことはねえんだけどよ……）と頭を掻く。

けれど、表情は僅かに険しくさせて（ひでえ偶然もあったもんだな）と呟いた。

（本当にね）

（おう）

（パーシー君とあんな場所で顔見知りになるなんて））

（ね）と結ぶ僕にサルバも（な）と頷く。

（本当に……）

あんな、何かありますと言わんばかりの人間と話す機会があるなんてね。

（……）
（……）
（……やっぱお前も教会関係者（パーシー）が失踪したって事に関して偶然とは思ってねえんだな）
（まあね）
むしろ、教会関係で偶然なんてものがあると思っているのはよっぽど世相に疎いか、よっぽど心が弱っているか、よっぽど気が触れているかのどれかでしょ。
（ひでえ言い方だな）
くくっと喉を鳴らしたサルバはけど心根としては同意だったらしく、微笑をそのままに（ま、その通りだけどな）と呟いた。
『大聖教会』というものがこの世に生まれ落ちてから、彼等が人々に提供する主力商品は一貫して『偶然に見せかけた必然』だった。
彼らが〝無幸の民〟と呼称する、事実上の〝無知の民〟は教会が振舞う様々な『偶然』に忽ち魅了され、熱狂していったと聞くけれど、その『偶然』は実際の所、細心の注意を払われて、極めて精密に張り巡らされた種々の手練手管、技術にトリック、或いは詐欺、或いは魔法の類によって生み出される『必然』である場合が殆どで、それを大聖教会は所謂〝奇跡〟と呼んでいた。流石に、今の時代に帝都や王都で教会の言う〝奇跡〟を信じる人は大分少なくなっているけれど、それでも未開の地や帝国王国の外れでは未

だに下手な説法よりも遥かに信徒拡大の手札になるとも聞いている。で、
（そんな事を日常的に行っている組織から、こんな時に偶然失踪者が出るなんて事があるのかって話だよね）
（それな。で、それこそ〝奇跡〟でも起きなきゃねえ訳で）
だよねえ。
（因みに、〝奇跡〟は絶対に起こらないから〝奇跡〟って言うらしいよ？）
（ほーん）
感心した様に内心で唸ったサルバが（それ、誰が言ったんだ？）と首を傾げる。
（前に偶然見かけた、教会の〝奇跡〟の前の口上）
（おい）
（見えちゃう見えちゃう）
思わず身を乗り出して、吹き抜けにあらゆる意味で姿を晒しそうになったサルバの頭を受け止めて、そのまま廊下に押し戻す。まあ、気持ちは分からないでもないけどさ。
（思わず突っ込みを入れたくなるくらい、安っぽい口上だよね）
（本当にな）
廊下に身を戻したサルバがこくこくと頷く。
（まるで僕の人間性みたいだよね）

〝共有〟

（本当にな）

そこは頷かなくても良いんじゃない？　言い出したの僕だけど。

（話を戻すけど、〝偶然〟失踪する事自体が〝奇跡〟みたいな集団の人間が〝偶然〟失踪するなんて有り得ないと仮定したら……）

（あいつの〝失踪〟も何かしらの〝必然〟が絡んでいるって訳か）

まあね。……いや、それより前についてもかな？

（んあ？）

（ほら、僕達が最初に船でパーシー君を見た時の事）

（ああ、あれか）

その時の事と、ついでにアリアドネさんの事を思い出したのか僅かにサルバの声が弾んでいる。まあ、別に良いけど。

（思わず〝偶然〟って言っちゃったけど、あれももしかしたら〝必然〟だったのかも）

（つうと？）

（そもそも、少年聖歌隊ならそれを言えば良いのに、単にガラの悪い破落戸に追い掛けられるままになっていたじゃん？）

（……そういやそうだな）

（で、アリアドネさんに助けられて、更に僕達に合流して）

（……）
（勿論、相手から信用されない可能性もあるけど、あの場所には修道士の人も居たわけで）
どう考えても、自分で対処できないとは思えないよね。
（思い浮かばなかったんじゃねえか？　ほら、少年聖歌隊なんて基本蝶よ花よだろ？）
（けど、少年聖歌隊って異端審問の時には異端者を犯したりもするよ？）
神のお導きにより修道士と性交するのがお仕事な彼らは通常穢れとされる行為でも、セックス関連の話に限っては色々と免除される立場だし。ま、その役をパーシー君が経験しているかは知らないけれどね。ただ、
（初日にサルバがダンジョンで見たことを考えれば、警戒してもしすぎって事は無いんじゃないかな）
（まあ、だな）
サルバが頷く都度に動く頭を、動きが大きくなりすぎない様に手で押さえながら、僕はもう一つ前の事を思い出す。
それは、同じく件のダンジョンで目にした光景、隠密行動を取るサルバに向けられた少年聖歌隊の両の眼球。土くれ、或いは岩石に似たそれは、美貌の彼を無力な少年慰安婦とするには余りにも不自然なパーツだった。

カリッ！

と、そんな事をつらつらと考えていると、先の音以上に大きな不快音が吹き抜けから鼓膜を揺らしてきた。

「兎に角、もう一度何とかして探して頂戴。私も直ぐに研究室に行くから」

「で、ですが」

「あのね、これはあの不気味なダンジョン閉鎖士に嗅ぎ付けられるとかそれだけの話じゃないの。ただでさえ最近揉めている教会との間にこれ以上火種を抱えるようなことになったら、この島のプロジェクトにブレーキがかかりかねないわ！　そうなったら、投資した時間やお金の分を全部私達に被せられない保証はないのよ!?」

「あなた、責任取れるの!?」というキリエさんのヒステリックな恫喝に、研究員の男の人は「は、はいぃぃ!!!」と悲鳴を上げる。……ふーん。

（今の言葉を聞いていると、猶更パーシー君の失踪はやっぱり〝必然〟に思えてくるね）

（だな）

過去の教会の話、今のキリエさんの話と反芻し直して、サルバも得心が行ったのか言葉少なに小さく頷いた。

と、そうこうしているうちに研究員さんがこの家を辞そうとしているのか、ドアに手を掛けたのが見えた。同時に、入り口から入って来る雨に湿った冷気で体が冷えたのかサルバがふるりと小さな体を震わせる。

（……）

取り合えず、くしゃみをして僕達の事に気付かれるのも良くないか。

羽織っていた上着を被せて裸のサルバを包むと、そのまま抱えて部屋に退散する事にする。

（……）

途中、抱えられたサルバが凄い目で睨んでくる。まあ、別に良いけど、それよりくしゃみを我慢する方に集中して。別に恨みつらみくらいは後でいくらでも聞くからさ。

「そう言いながら、聞いても聞き流すだけだろうが」

部屋に辿り着き、音を立てない様にドアを閉めたところで、はっくしょん！　ぶえええい!!　とくしゃみをしたサルバが恨めし気に口を尖らせた。まあ、その通り。

「コノヤロウ」

銃のパーツが散らばっていないサルバのベッドに、僕の上着を羽織っただけのサルバを投げ込むと、起き上がったサルバがむすりと唇を尖らせる。

「でも、相部屋になっておきながら全裸で過ごす野郎相手なら妥当な扱いじゃない？」

むしろ、慈悲深いでしょ。比べるなら大聖教会の言う神様と同じくらいに。
「それって、慈悲もくそもねえって事じゃねえくしゅっ!?」
「取り合えず、風邪ひかない様に服を着るかベッドに入り直してて」
僕は朝食貰ってくるからさ。丁度……
―後の事は宜しくお願いしますね―
―承知致しております―
キリエさんも家から出て、使用人さんの時間も空くことになるだろうからさ。
外から聞こえてきた小さな会話にそう告げると、「おー」と緩慢に頷いたサルバがもそもそとベッドに潜り直したのだった。

◆

結局、朝の小さな騒ぎで家を出た切り、夕方になってもキリエさんは帰宅することは無かった。その間、使用人さんも僕達に特に気を使う様子も無かったのもあって、報告書の作成や武器の類のメンテナンスも既に完了し、暇になった僕とサルバは適当に思い

付いた手遊びに興じていた。で、
「ふんぐぬぬぬぬぬぬぬぬっ！」
「……」
　相方のサルバはというと、目下僕の右手にしがみ付いて、全身の力を使い、それ（僕の右手）を引き倒そうとしていた。
「ぬおおおおおおおお「えい」ふぐおっ!?」
　取り合えず、随分時間も経ったし、いい加減面倒だから、もう腕相撲じゃなくて本物の相撲になっているサルバの両手をベッドの上に押し倒す。すると、その腕に引かれたサルバの身体はそのまま吹っ飛び、「ふぎゃっ!?」という見事な悲鳴と共に逆五芒星の形で僕の枕元に背中から衝突し、そのまま頭からボフリと僕の枕に墜落したのだった。
……今日二度目だね。
「……大丈夫？」
「チクショウ……」
「大丈夫みたいだね」
　うん。
　悔しそうに涙目に、というか殆ど泣いているけど、取り合えずざまぁと言っておくべきかな？

「首痛ぇ……」
「ああ、そっち？」
墜落した先が枕（柔らかい物）だったのが却って悪い方に行っちゃったね。でも、何で吹っ飛ぶまで手を離さないのさ？
「お前の力が強すぎて離す暇がなかったんだよ！」
「ったく、どういう腕力してんだよ……」と首を摩りながらぶつぶつと呟くサルバ。まあ、サルバとは体格も違うし、一応冒険者で見たら前衛だからね。
「前衛でもお前程アホみたいに腕力ある奴は見たことねぇわ」
「そう？」
結構A級とかB級の冒険者探せば居ると思うけどな。……ま、良いや。
「それより、次は何する？」
また賽子か何か使う？
「いや、止めとくわ」
頭（かぶり）を振ったサルバが又もむすっと頬を膨らませる。
「お前の表情が変わんねぇせいで、読みようがねえんだもん」
「丁半博打に読みも糞も無いけどね」
玄人じゃあるまいし、賽子の目の操作なんて出来ないから。っていうかそういう読み

合いが発生する賭けは僕達の場合賭けにならないじゃん。お互い胸の内が筒抜けなんだから。

「まっ、そうだけだよっと!?」

不格好な倒立から、反転して起き上がったサルバは、けれど、勢い余ったのかそのまま仰向けになるように僕の方に倒れ込んでくる。

「ん」

そして、避ける間も無く僕の足に落ちてきたサルバはぽすりと膝枕の形に収まったのだった。

「……固ぇ」

「そりゃね」

男の太腿に何を期待しているのかと。むしろ、固い意外の感想が出てきたら驚きだ。そもそもが男の、しかもダンジョン閉鎖士（基本歩きっぱなし）の太腿だし。まあ、

「本当に、膝に直撃するよりはマシだったんじゃない？」

「ま、そりゃそうだ」

そう言ったサルバは思いの外ツボだったのか、くっくっくと喉を鳴らした。くっくっく、くっくっくと……

「……」

「……どうしたの？」

そして、不意に途切れたそれに視線を落とすと……天井を見上げたまま、ぼんやりとあてもなくさ迷うサルバの黄と青の視線にぶつかる。

「……サルバ？」

何処か所在無さげなサルバの両目に声を掛けると「ん、ああ……」と頷いたサルバは二度三度と色の違う両目を瞬かせた。

「わりぃ」

「別に良いけど」

大丈夫？

「おー……」

「……」

いや、本当に。

っていうか、そんな顔して大丈夫って言われても全然説得力ないよ？　僕達の場合、”ダンジョン・コア”の”共有”でお互いの感情が筒抜けだけど、そんな糊塗するまでもなく一目瞭然だもん。まあ、聞くなって言うなら聞かないけどさ。

「む……」

「……」

「あー……うん」

彷徨う視線そのままに、暫く逡巡を見せたサルバはけれど、結局何かを観念したのか、降参を示す様に軽く両手を掲げて見せた。

「なあ、アルタ」

「何？」

「この人工ダンジョン、ラビュリントスからなんだが……望みの効果を持った〝ダンジョン・コア〟を作る事は出来たりすると思うか？」

そして紡がれた声音には縋る様な希望と、そして、同僚の諦念が入り混じって聞こえた。

「分からないね」

僕は取り合えず正直に答えた。

「人工ダンジョンの作り方次第では〝ダンジョン・コア〟の研究もしている可能性はあると思うけど、彼らと皇帝陛下の目的はあくまでダンジョンから手に入る資源であって、〝ダンジョン・コア〟は副産物がいい所だろうからね」

まあ、より突っ込んじゃえば、資源というよりは資源によって手に入る利権によって元老院に強く出られる様にするのが最大の目的だろうけど。

「……」

「後は天然資源であるダンジョンと違って、人工ダンジョンは自分達で一から作らないといけない施設だからね。可能な限り工数や投資を減らすためにも再利用、或いは永久利用は常に考えられているんじゃないかな？」

だから、〝ダンジョン・コア〟の研究をしていたとしても、〝ダンジョン・コア〟が手に入るかどうかはまた別問題になると思うよ。

「そうか……」

僕の回答に何となく本人としても予想がついては居たらしいサルバは、それでも若干の未練を感じさせるように小さな肩を僅かに落としたのだった。……、

「まあ、出来る可能性が無い訳じゃないとも思うけどね」

「……」

「……」

「……ぷっ」

一瞬、色の違う両目を見開いたサルバが不意に噴き出す様にして破顔した。……どうしたの？　いや、本当に。

「いや……」

そう言って、僕の足に頭を乗っけたまま、ふるふると器用に首を横に振ったサルバは、それでも堪え切れない様子で肩を震わせている。んー？

やがて、さざ波の様な笑いが通り過ぎたサルバが軽く片目から零れる涙を掬い取りながら、「……何と言うか、お前らしくねえなと思ってな」と肩を竦めた。そうかな？

……そうかもね。

気休めに態々時間を割くのは確かに僕にしちゃ珍しいかと自分自身納得しながら、何となく外では見ることのないサルバの両目を見下ろす。青と黄色という反対色同士の目は僅かに不思議そうな色を宿していた。

「……やっぱり焦る？」

その目を見ているうちに、ふとそんな疑問が湧いてきた。

「……おう」

少し、視線を伏せるようにしたサルバは、そう言って小さく頷いた。

「理由はアリアドネさん……だよね」

「おう」

今度は間を置くことなくサルバは繰り返す。

「やっぱり、好みなんだ？」

「……まあな」

そう言って、サルバは自分の視線を覆い隠す様に細い右腕を自分の前に翳す。

「すっげー好みだな……うん、俺ああいう純真そうで髪が長い人（女）に弱ぇみてぇだ」

「そ」

少し赤裸々な方向に飛んだ話に、けれどサルバは隠す様子もなく頷いたので、僕も逆に特に気にすることなく受け取った。

「……やっぱダリアと似てるからなあ」

けれど、そこで止まらなかったのか、サルバは自嘲するようにそう吐き捨てる。っていうか自分でそれ言うんだ。

「言おうが言うまいが、お前からは引き摺ってんのは丸分かりだろ？」

「まあね」

それこそ、痛い位に。

「慰めても良いぜ？」

「え？　僕に慰められたいとか正気？」

「……すまん」

「あ、良かった。まだ正常な思考能力は残ってたね」

本当に。

っていうか、僕に慰めを求めるとか、よっぽど心が弱っているか、よっぽど気が触れているかのどっちかだから気を付けた方が良いと思うよ？

「世相は関係ねえのか」

「僕が世相にカウントされる様になったら世も末じゃない？」
「それもそうだわ」
　というか、どうでも良いし。ま、どうしてもって言うなら、それこそアリアドネさんにしてもらうまで取っておきなよ。その方がサルバも良いでしょ？
「ま、だな」
　そう言って頷いたサルバは漸くけけけと笑って表情を緩めたのだった。
「じゃ、そろそろ起きて」
　太腿とサルバの頭の間に手を差し込んで持ち上げると、不安定なバランスにサルバが「うおっと」と小さく悲鳴を上げる。そして、わたわたとしながらもサルバが起き上がったのと殆ど同時に、
　―カツン―
　と、小さな音が客間の中に飛び込んで来たのだった。
「「ん？」」
　思わず顔を見合わせた僕とサルバ。〝共有〟を通すまでもなく、互いの目には多分に訝しむ色が浮かんでいる。一瞬気のせいかとも思ったけれど、そう考えたのを見透かしたかの様に、再び―カツン―という音が室内に響き渡った。
「気のせいじゃねえな」

「だね」

今度は明確に、何処からその音が飛び込んで来たかもはっきりと分かってしまった。

音の在処、部屋の左手に置かれた大窓を振り返りながら、僕は念のため片刃剣を、サルバは愛銃を握って、ささっと右目を前髪で隠した。

「……」

一先ず目配せをすると、サルバがこくりと頷く。そして、雨打つ窓を一息に開け放ち、辺りを確かめると……、

「は？」

直ぐに目についた、先の異音の犯人に、隣のサルバが思わずといった風にきょとんとした声を上げたのだった。確かに、これはちょっと意外だよね。切った鯉口を元に戻しながら、僕も改めて窓の下の人影を確かめる。長い外套に身を包んだ姿はミサか何かに参加する修道士の様でもあったそれは、けれど僅かにフードを持ち上げてにやりと笑みを浮かべた顔は僕達も記憶している全くの別人のそれだった。

（あれ……元老院議員だよな？）

〝共有〟を使って確認してくるサルバに頷いていると、その元老院議員さんが無言のまま自分を指差し、そして、僕達の窓を次に向けてきたのだった。窓から中に入れてくれ……って事かな？　んー……、

「仕方ないか」
　少し迷ったものの、相手は一応ながらも貴族様。しかも、伴も一人も連れてきていないあたり、何かしら事情があるのも間違いない訳で。一先ず腰の片刃剣の紐を解いて、窓の下に垂らすと、頷いた貴族様は実に慣れた様子でするすると、壁伝いに僕達の客間へと昇ってきたのだった。

◆

「……あー、すまんな、突然」
「いえ」
　僕の腰紐を伝って部屋に入ってきた元老院議員さんは入室と同時に全裸でベッドに胡坐をかいているサルバに一瞬目を丸くしたものの何かを察した様子でそう流した。
「……まあ、別にいっか。
「それで、ご用向きをお伺いしても？」
「せっかちだな」

伯爵様は一瞬前の光景を振り切るように無理矢理笑顔を作って鷲鼻を擦る。
「見たところお忍びでしたし、直接伯爵様が来られたという事はかなりのっぴきならない事情かと思いましたので」
普通はこういう時はそれこそ供回りの人間、伯爵様だとダンジョンの紹介の時に手を挙げていた騎士さんかな？　あの辺りが来るはずだからね。後、伯爵様本人の息が上がっているあたり、大分急いで来たみたいだし。そういう状況なら基本的には急いだ方が良いからね。
「いや、まあその通りなのだが……」
僕の答えに首肯を返してきた伯爵様はチラチラとサルバの方を伺いながらも軽く呼吸を整えると「実はロレンツの奴が戻って来んのだ」と出し抜けにそう言った。
（ロレンツって……今日の集会の時に、ここの家主とバチバチやってた騎士だよな？）
（うん）
だったはず。
「覚えておらんか？　今日、お前さん達が騒いだあの会場で副市長やらと言い争っていた」
「ええ、覚えております」
どうやら記憶は合ってるみたいだね。で、それはそれとしてなんだけど、

「戻られていないというと、何か事情があって護衛を離れていたという事ですか？」
　見るからに家付の騎士という出で立ちだったあのおじさんの事を考えると、何かしら伯爵様から指示を受けての事だとは思うんだけど……
「まあな」
　頷いた伯爵様は特に隠す様子もなく「あの巨大ダンジョン、ラビュリントスの探索よ」と呟く。
「ダンジョン閉鎖士は少々特殊な職とはいえ、ギルド関係者ならば儂がここに来ている理由も凡そあたりはついておるだろ？」
「ええ、まあ」
　受動的な理由はクレタ島に招待されたからだろうけど、能動的には敵情視察っていうのが一番の理由だろうからね。
（或いは人工ダンジョンの粗探しか？）
（多分ね）
　握った銃器を下ろしたまま、けど、引き金にはまだ指を掛けた状態のサルバの”共有”に僕も是を返す。
「あれには人工ダンジョンと、可能であれば研究所の書類の類の調査を命じていてな」
「はあ」

「昨日の昼間は儂らにはぴたりと職員共が張り付いていて表面しか見られなかった分、内を探るために天候の悪い今日、内調を決行させたのよ」

そう言って、にやりと笑う所作は粗野で、帝国の貴種にしては随分と行動も荒っぽい印象だった。

「で、それが戻ってこないと」

「それよ」

頷いた伯爵様はチッと一つ舌打ちをする。

「ロレンツの奴が並の事でしくじるとも思えんが、流石にこの時分まで戻らんのはおかしいと思ってな」

そう言って、頭を掻いたキール伯爵はぎょろりとした視線を向けてくる。

「人工ダンジョンでモンスターに不覚を取ったか、或いはここの研究職員に不意を討たれたか……どちらにせよ何か不測の事態となった事は間違いないと判断し、次の手をどうしたものかと思案しておったところで、昨日の集会で暴れたお主らの事を……お主らの腕を思い出したのよ」

「はあ」

腕も何も、単に市長の股間をサルバが蹴り飛ばしただけだったと思うんだけどな。

「あの身のこなしを考えれば、お主ら二人の腕がロレンツ以上である事は容易に見て取

れたでな。どうか儂の家臣であるロレンツの捜索と、人工ダンジョンの調査を依頼したい」

そう言って姿勢をすっと正すと、伯爵様は驚くほどあっさりと頭を下げてくる。

（……どうすんだ、これ？）

（まあ、受けるしかないかな）

この状況だとね。

（一応ギルドが元老院傘下の組織である以上、僕達も基本的にはこっち（反人工ダンジョン）側に加担する事にはなっちゃうし）

（それもそうか……じゃあ、俺も準備しねえと）

こくこくと頷いたサルバは自分のベッドにぴょんと跳んで、乱雑に脱ぎ捨てていた革製のズボンに足を入れて身繕いを始める。ん、宜しくね。

「一先ずお話は分かりました。状況が状況ですので、ロレンツ騎士の捜索は受けさせていただきます」

「おお、忝い」

莞爾と笑った伯爵様が白い歯を見せる。砕けた雰囲気も含めるとやっぱり貴族らしくないという印象だった。

サルバが着替える傍らで僕の方も腰に片刃剣を差して準備を整える。……ああ、後は

そうだ、
「そういえば伯爵様」
「うん、何だ？」
「伯爵様の方はこの島の事や人工ダンジョンの事はどの程度調べられておりますか？」
僕の質問に伯爵様は肩を竦めると「いや、殆ど何もだな」と首を横に振る。
「元々、今回の件は元老院でも殆ど不意打ちでな、皇帝陛下より告知が成されて、兎にも角にも情報を得なければならんという話になり、たまたまクレタ島に近い領地を持っていた儂に白羽の矢が立っただけだったのだ」
「……」
つまり、この島のダンジョンについて、首魁である皇帝陛下と常に面通りしている元老院議員も何も知らないと……、
（やばいのか？）
聞き耳を立てていたサルバが、壁に向かったまま〝共有〟で尋ねてくる。そうだねえ、
（やばいかどうかは分からないけど、隠蔽は僕達が思っていた以上に完璧にされていたのは間違いないんじゃないかな）
ダンジョンの研究施設である以上、進捗は適宜報告する必要があった筈だし、その辺

を考慮すればかなり偏執的に情報漏洩に気を使ったのは事実だと思うよ。
　そこまでしたという事は、そこまでしないといけない理由があったって事だと思うんだけど……一体何だろうね？
（お前でも思い浮かばねえのか？）
（僕だって所詮は末端構成員でしかないからね）
　皇帝陛下達の発案となれば絡んでくる政治的な意図も当然帝国全土にまたがるものになる。そうなって来ると、正直意図を見抜くのは一ダンジョン閉鎖士には不可能だ。
「逆に、お主らはどの程度掴んでおるのだ？」
「……僕達もあまり進みが良いという訳ではありませんが」
（おい、良いのか？）
（まあ、廻り回って何時か見ることになるだろうしね）
　僕が報告書を懐から出して差し出すと、一瞬驚いた様子のサルバが僅かに左の眼を見開いた。
「これは？」
「僕達がギルドに提出する予定だった報告書です。今回のダンジョンを巡った際に発生した出来事と実際に潜ってみての所感を記載しております」
　僕がそう答えると、「ほう」と頷いた伯爵様が一番上のページをぺらりと捲っていく。

「……ダンジョンが？」
「ええ」
やっぱり、目についたのは人工ダンジョンの構成の変動で、配布された地図を含む物的証拠もある事から、かなり伯爵様も興味を引かれている様だった。
「……いや、礼を言う非常に興味深い内容だった」
やがて、全てのページを読み切ったらしい伯爵様は二度三度と頷くと、書類を綴じ直してこちらへと差し出してきた。
「うしっ、何時でも行けるぜ」
同時に、着替えを終えたサルバが腰に差したホルスターから出るグリップを軽く叩く。
「取り合えず、指示をされたのはダンジョンが先で余裕があれば研究所で良かったですね？」
「ああその」
伯爵様に念押しの確認をして、それにキール伯爵様が頷こうとした瞬間、かちゃりという聞き慣れた音が室内に響く。
「「……」」
ぴたりと動きを止めた伯爵様含む僕達三人が音の方を振り返ると、部屋のドアノブが

明らかに人の手で捻られた様子で角度を変えている。咄嗟に伯爵様を隠そうとしたものの、そこから使用人さんが顔を出す方が一歩二歩早く、声を上げるよりも先にドアの奥からモーラさんと呼ばれていた使用人さんが顔の左半分を差し入れてくる。さて、どうしようか……ん？

「……」

一瞬、不味いことになったかと身構えたのに、何故か顔半分を入れてきた使用人さんはそのままぴたりと動きを止めてしまう。それは、予想外の光景を見た事による硬直とは違う、まるで人形か何かの様な無機質な停止に見えた。

その一瞬の硬直に虚を突かれて、片刃剣に手を掛けるだけで動きを止めてしまうと、隣のサルバもモーラさんを片目で鋭く睨みつけながらホルスターから銃を抜きつつも、引き金を引くまでは至らずに緊迫した空気の中で止まるに留めてしまっていた。

「あ〝、あ〝、あ〝……」

はてさてどうしたものかと思案している僕達の前で不意に使用人さんが声を上げる。それは先日主人を出迎えた時の様な品のある声ではなく、腹の底から響く様な野太いそれで、

「お〝、お〝ぉ、う〝も〝おおおおおお!!!」

まるでそう……この島の象徴、人工ダンジョンのラビュリントスを象る雄牛の様な嘶

きだった。

「ちっ!?」

白目を剥き、喉を掻き毟りだした使用人さんの只ならぬ様子に、咄嗟にサルバが右手の拳銃を発砲する。眼球と左耳。それぞれ一発ずつ撃ち込んだそれは、けれど、雄牛の雄叫びを遮るには至らない。

けれど、全くのノーダメージだった訳でもない。鉛玉の一撃を受けた雄牛の左目と喉からは鮮血が噴き出し、忽ち室内に生臭い鉄錆の……ダンジョンに良く似た臭いが充満する。

「お〟!!」

同時に、ぎょろりと血溜まりの中で眼球が蠢いたのか、出血噴き出す眼孔が波打ち、ガタンッと音を立てて使用人さんが踏み込んでくる……

「ああ、やっぱりか」

その瞬間、この使用人さんの不可解な行動の理由が全て氷解する。身を乗り出してきた彼女がまず最初に見せたのは鮮血を撒き散らした女性の顔とは対照的な、巨大な角と太く長い鼻梁、そして横に向いた焦点の合わない黄色い眼球。有体に言ってしまえば……彼女の右顔は人ではなく牛頭のモンスター、ミノタウロスへと成り果てていたのだった。

そこ迄を確かめると、一先ず僕は飛んで片刃剣を抜く。幸い相手の動きは緩慢で、その上今の変貌に対し、動きが追い付いていない様ですらあった。
「ふっ」
軽く一呼吸を吐きながら抜き打ちに斬首とすれば、どちゃりと粘質な血の池に落ちた首に引かれ、彼女の身体もまたその場で崩れ落ちたのだった。
「……」
血振りをくれて鞘に片刃剣を収めると、ベッドから飛び降りたサルバが「怪我は?」を声を鋭くして聞いて来る。
「大丈夫」
念のため、こっちの身体の方を探ってみるけど……うん、心臓も動いていないね。
「こ、これは一体……」
僕とサルバがお互い無事を確かめていると、部屋の奥で呆然と立ち尽くしていた伯爵様が呻くようにしてそう絞り出した。
「いや、それ以前に、何故モンスターがダンジョンの外などに……」
んー……、
「多分ですけど、モンスターじゃないと思います」
僕の言葉に、隣のサルバも（だよな）と〝共有〟の中で頷く。

「ど、どういう事だ？」

どもりながらもよたよたと寄ってきた伯爵様に「彼女ですが」と死体となった使用人さんを指差して所感を伝える。

「顔の左半分は家の使用人さんでした」

「ぬ、そ、そうなのか」

「ええ」

で、

「必ずしも断定は出来ませんが普段の様子を見る限り、彼女は普通に優秀な使用人という感じで、特に異常性を感じる事はありませんでした」

「……」

「更に言えば、ダンジョンのモンスターはダンジョンの外に出ることは出来ません。ラビュリントスの入り口が開きっぱなしであった事を考えると、それは人工ダンジョンでも変わらない事なのだと思います」

まあ、この辺は推測混じりではあるけどね……。

それは置いておいて、つまるところは、

「モンスターが外に出てきたと取るよりは、人間がモンスターに変貌したと捉える方が適切なのかなと思います」

今の現象を踏まえると、僕個人としてはそういう判断になるのだった。
「しかし何故……」
「んー……正直、そっちの方は何とも。唯、候補が幾つかあるとしたら、その内の一つは直ぐに思い浮かびます」
「ぬ？」
「僕達には馴染み深いんですけどね」
不思議そうな顔をしている貴族様の前で、隣のサルバは「馴染み深い」という言葉で直ぐに思い至ったのか「あっ」という顔になる。少し考え込んだ貴族様の方も同様で、僕（ダンジョン閉鎖士）達に馴染み深い、奇妙な事象を引き起こすものという二つのヒントで直ぐに答えに行きつく。
「〝ダンジョン・コア〟……か」
「ええ」
伯爵様の口から出た答えに、僕が首肯を返すと、隣のサルバも「やっぱりそれか」と頷いた。
「しかし、〝ダンジョン・コア〟等一体何処に？」
「さて、それは分かりませんが……」
物が物だけに、使用人さんが手を振れてしまう様な場所に放置されているとも思えな

いしね。まあ、
「何方にせよ、家探しをしていれば何かしらヒントは出てくるとは思いますよ」
「またかよ」
うん、また。
トウトウ村での事を思い出したのか、僕の返事にサルバが思わずといった様子で天を仰ぐ。……うん？
（ねえ、サルバ）
（あん？）
（〝共有〟のせいで殆ど丸分かりなんだけどさ）
（おう）
（ちょっと楽しんでるでしょ？）
（……）
（……）
（……バレたか）
（バレるよ）
だって筒抜けだし。
（ま、別に楽しむのは良いけど、変に前のめりにならないようにね）

（そん時はお前が止めてくれるだろ？）
（いや、止めるけどさ）
　一応前衛に調整役を求めるとか根本的に間違ってない？
（だって俺、今は冒険者じゃねえもん）
　そう言って、けっけっけと楽しそうに肩を震わせるサルバ。いや、まあ良いけどさ。
　〝共有〟での会話という事もあって、外側に居る伯爵様が突然笑い出したように見えるサルバに困惑の表情を浮かべる中、はてさてとこれからの事を思案する。
　先の彼女（使用人さん）の事もそうだけど、僕達が見た夢の事も、全てクレタの象徴であるラビュリントス（雄牛）で繋がっていると考えると、或いはそっちの方もヒントが見つかったりするのかな？　……ま、いっか。
「じゃ、取り合えず書斎から始めよっか」
「おう」
　頷いたサルバを隣に歩き出すと、部屋の中に居た伯爵様が慌てて追いかけてくる。
　念のため、片刃剣の鯉口を切りながら、僕は改めてこの島の事について思案を巡らせたのだった。

九

「しかし、見事な腕だな」

屋敷の探索のため客室を出た僕とサルバの後ろで、微動だにせず先の戦いを眺めていた伯爵様が思い出したように動き出し、足で使用人さんの躯をひっくり返すと、その傷口をしげしげと検めて、感心した様に顎を撫でた。

「これ(使用人)を襲った時も容易く頚を斬り落としておったが、その結果(切断面)もこれとは……並みの修練ではあるまい！」

そして、やや興奮気味に、鷲鼻から荒鼻息を噴き出す。

一般論で言えば、箱入りの貴族様が見るにしては聊か以上にスプラッタな光景にも、伯爵様は欠片も怯む様子もなく、むしろ嬉々として、しきりに頷いている。ああ、でも、（帝都では確か、強い冒険者を侍らせてダンジョンでの殺し合いを語らせるのが趣味の貴族様も少なくないっていうし、むしろこういう血生臭いのは望むところなのかな？）

……まあ、別にいっか。

「人並みには」

「なんの、これでも儂はそれなりに剣には精通しておってな、これが一朝一夕の修練で会(斬首)

得できる代物ではない事くらいは心得ておるとも！」

　一応礼儀として回答すると、伯爵様は「いやいや」と首を横に振り、欠片も屈託のない笑顔を浮かべる。

（首斬り死体見て満面の笑みとか、やっぱこのおっさんちょっとおかしいな）

（かもね）

　〝共有〟で耳打ちをしてくるサルバに、僕は気付かれないように首肯を返した。内心でそんな会話をされているとも知るはずのない伯爵様は上機嫌な様子で「やはり、この島で一番腕が立つのはお主らだったな！」と何度も頷く。

「はあ……随分と高く買っていただけた様で」

　ちょっと不自然なくらいに。

　廊下を歩き出した僕とサルバの後ろを付いて来ながら、伯爵様は「値を釣り上げたつもりはないぞ。むしろ、これは極めて正当な評価よ」と尚も饒舌に話を続けてくる。

「何を隠そう、儂は元々家を継ぐ権利もない三男坊でな。兄二人が立て続けに他界してしまう前は領地では多少は名の知られた剣士で通っておって」

（……なあ、アルタ、何か返事しねえのか？）

（面倒。サルバが相手してみる？）

（ぜってー嫌だ）

（ま、だろうね）

こういう人って、反応すると一気に話が長くなるのが常だし。ま、でも、さっきの壁伝いでの踏破といい、今の立ち振る舞いや身のこなしといい、多少なりとも言葉通り心得はあるみたいだから、今後の事を考えるとそこまでこの人の身の安全に気を配らなくても良いのは朗報かな。

（って事はやっぱり荒れるって読んでるんだな）

（まあ、それ以外有り得ないし）

島に到着してからの僕達の扱いに限らず、人工ダンジョンや先の使用人さんの変異と、異常事態が多すぎるし。

（ま、それもそうだな）

〝共有〟の言葉にサルバが小さな肩を竦めるとほぼ同時に、二階の廊下の突き当り、元々大きさの割に手の込んだ作りの屋内で一際目立つ重厚な扉の前に辿り着いた。

「一先ず、ここから始めようか」

「おう」

サルバが頷いて銃を抜いたのを確かめて、僕も片刃剣の柄に手を掛けながら、滑らかな真鍮のドアノブを捻る。

「流石に鍵は掛けて出てるか」

使用人さんが居るとはいえ、僕達に忍び込まれる危険はやっぱり考慮しているだろうし。

「どうすんだ？」

「取り合えず打ち破るつもり」

一旦、片刃剣を鞘に収め直し、邪魔にならない様に腰紐をずらして背中に向けると、軽く押して扉の感触を確かめる。うん、これならいけるね。

僕が扉を突き破るためにそこから少し距離を取ると、サルバが「俺も要るか？」と小首を傾げる。そうだね、頼めるかな？

「おう」

頷いたサルバもホルスターに愛銃を収めると、隣でタックルの体勢に入る。じゃ、いくよ。

「せーの」

「しっ!!」

僕が声を掛けて飛び出すのと同時に、分厚い絨毯を蹴るサルバ。ピタリと同時に重い木製ドアぶち当たると、真鍮の留め金が一瞬でひしゃげ、そして耐え切れなくなったのか一歩遅れて弾け飛び、やがて支えを失った分厚い門番はどうと音を立てて薄暗い一室へと飲み込まれて消えたのだった。よし。

「しかし」
「ん？」
「前も前でさしてこそこそする様子もなかったが、今回はあん時に輪をかけて堂々と行くな」
　障害の突破を確認したサルバが再び愛銃を構えながら、少し楽しそうにくくと喉を鳴らす。
「まあ、前回（トウトウ村）は曲がりなりにも貴族様の屋敷だったからね」
　多少なりとも釈明なり何なりをしなきゃいけない可能性があったから。けど、今回は皇帝陛下の紐付きとはいえ、位置付けは研究者だからね。さっきの牛のモンスターみたいな何かに襲われた時点で理はこっちにあるから。
「つまり、相手の権力が違うからってか？」
「んーん」
　そっちは別に。
「まあ、だよな。じゃあ、何でだ？」
「言い訳の手間が無いから」
　僕の回答に心底納得した様に頷いたサルバは、前髪の間から見えている左目を楽しそうに歪めて「うん、その回答はお前らしいわ」と皮肉気に嗤ったのだった。そう？　ま

あ、別にどっちでも良いけど。それよりも、

「酷い臭いだね……」

予想通りの書斎は主が不在で、当然ながら灯も点いていなかったけど、踏み込んだ瞬間、唐突に強い悪臭が鼻を突いて来る。

元々、この島自体が悪臭に包まれていたものの、先の人工ダンジョンの様に、立ち込める悪臭には多少の濃淡があり、そして、この部屋の中には間違いなく〝濃〟の気配が点在していた。

窓から入って来る仄暗い明かりを頼りに備え付けられていたランプに火を灯してみると、露になった書斎の一角には実験用と思われる無機質で見るからに頑丈な卓が備え付けられていた。

「おい、それ……」

そして、それを目にしたサルバが虚を突かれた様子で目を丸くする。飾り気の無い大きなテーブルの上に置かれていたのは一見何の変哲もない巨大な煉瓦。けど、この島の成立ちと彼女の身分を考えれば、一目でそれがクレタのダンジョンのサンプルである事が見て取れる。

「悪臭の元は、もしかしなくてもこれか？」

若干、警戒混じりに尋ねてくるサルバに僕は「多分」と返す。一応、他にもある可能

性はあるからね。

「ま、だな」

頷いたサルバがにわかに鋭くなった視線で先を促してくる。人工ダンジョンの存在と、そのサンプルがこの家にあるという事に加え、使用人さんがああなった以上、サルバをそうし（女性に）、そして、僕達二人をこうした存在、……即ち〝ダンジョン・コア〟がこの家の何処かにある可能性は極めて高かった。ま、一応注意して家探ししよっか。人工ダンジョンのサンプルだけじゃ決定的な情報とは言えないから、何かしらもっと突っ込んだ情報を探すのは必須だしね。

「りょーかい」

頷いたサルバは拳銃の収まったホルスターが邪魔にならない様に軽く位置を調整し直すと、鋭く視線を書斎に走らせたのだった。

「儂はどうする？」

と、その後ろで入口から覗き込んでくる伯爵様。ん―、

「じゃあ、蔵書の傾向なんかを確認してください。もしかしたら、表紙と違う内容の本や、明らかにダンジョンと関係ない本なんかもあるかもしれないので」

「心得た！」

そう言って、大きく頷いた伯爵様は実に意気揚々と本棚に向かっていく。明らかに好

奇心に突き動かされたて足取り軽く粗探しに取り掛かる様子は確かに自己申告通り貴族にしては大分粗野だった。ま、どうでもいいけど。

サルバと伯爵様が仕事に取り掛かったのを確かめて、僕も書斎のもう一つの主である書斎机に向かう。天板の上は神経質そうな彼女（キリエ）さんの性格を反映するように、インク壷はおろか羽ペンすら片付けられていて、傷一つない滑らかな素肌だけを月光に晒している。

椅子の方に回り込んでみると、左手側に三段の引き出しが一組。その臭いを嗅いでみると……一番下の段から、明らかに濃い悪臭がじわりと漂ってきていた。多分、そこにあるのはメインディッシュ。なら、一段目と二段目は何だろうね？

僕はサルバに〝共有〟で（あった。僕はこっち見てるから、呼ぶまでそっちの家探しは続けててもらえる？）と内心で声を掛ける。

（おう）

サルバが後ろ姿で小さく頷いたのを確かめて、僕は上から順番にキリエさんの仕事机の引き出しを検めていった。

一段目、筆記用具。問題なし。

二段目、日誌。一旦保留。

そして、三段目……

「あ、やっぱり」

三段目の引き出しを開いた瞬間、つんと鼻の奥を突いて来る糞尿と鉄錆の綯交ぜになった臭い。そして、嗅ぎ慣れたそれ（悪臭）と同時に姿を現す、指で摘まめる程度の何の変哲もない石ころ。けれど、綿のクッションの中でシャーレに固く納められたそれは、間違いなく僕（ダンジョン閉鎖士）達の獲物……〟ダンジョン・コア〟に他ならなかったのだった。

予想通り姿を現した〟ダンジョン・コア〟と、ついでに二段目にあった日誌を天板の上に移すと、念のため二重底等の可能性を潰すために、引き出しを引っこ抜いてひっくり返してみる。

「……」

ばらばらと散乱した筆記用具以外は叩いても何も出てこないことを確かめると、僕は改めて〟ダンジョン・コア〟を手に取った。

臭いは……うん、普通。何時も通りの糞便臭と鉄錆の綯交ぜになった生臭さ。サイズも小さい以上、本当にサンプル以上の意味は無さそうに見える。強いて言うなら、石肌がかなり乾燥している事もあって、何となく、この〟ダンジョン・コア〟が採取されてからそれなりに年月を重ねている様に見えた。

（それだけ長い間手元に置いているって事を考えると、キリエさんってアカデミーか何処かの出身だったのかな？）

先日の集会の際に整列していた研究員の中に若干名居た、幼年と言っても良い年恰好の子供達を思い出すものの、特にそれ以上の感想は思い浮かばなかった。

（で、こっちか）

〝ダンジョン・コア〟のサンプルの上段に納められていた日誌に手を付ける。何かの皮で装丁された拍子を捲ると、矢張り几帳面な細かい字で、独自に行った研究と……そして、若干の日記と思われる内容が具（つぶさ）に書き込まれていた。

（違う……違う……）

一ページ一ページ、撫でる様にして内容を読み込むものの、基本的には来島初期から続く土木工事やモンスターの入植等の様子が綴られているだけだった。

（ターニングポイントが書かれていると有難いんだけどね）

先の人工ダンジョン（ラビュリントス）の様子を思い返す限り、この土木工事や外からモンスターを連れてくるという行為は余り実を結んだとは考えにくい。どちらかと言えばダンジョンそのものが特殊な印象だった訳だし……、

「あ」

そんな事を考えてながらキリエさんの日誌を捲っていると、ページが全体の半分程を

過ぎ去った直後、不意に文章の中に〝ダンジョン・コア〟の文字が目に飛び込んで来たのだった。

「……」

現状の人工ダンジョンの様子から見て、恐らく鍵となる言葉に、僕は先のページより心持ち時間を掛けて内容を熟読に掛かる。果たして、その中には思いの外興味深い内容が記載されていたのだった。

一番目の月、十七番目の日

前年より続けていたモンスターの入植実験が失敗に終わる。モンスターからの収穫物ではなく定着性を重視し、スライムやゴブリンといった増殖力や繁殖力、生命力の高いモンスターを試していたが、モンスターは一向に人工ダンジョンには定着せず、次第に衰弱し、三日と経たずに死滅してしまった。

研究所ではスライム増殖のためのダンジョン内の環境の調整や、ゴブリンの定着のための人間女性を用いた繁殖を計画しているものの、個人的にはこの入植による人工ダンジョンの建造には手詰まりを感じている。

研究所では引き続きモンスターの繁殖に着眼した実験を継続していくが、私は私で別の手法が無いかを改めて考えてみる必要があるだろう。

一番目の月、二十九番目の日

今日の帰宅後、他の研究員の過去の資料を読み返している最中に、ふとあの村から持ち出した”ダンジョン・コア”の破片が目に入った。

既に、家族も村の人達も散り散りになってしまっている上に、私に限らず女性はほぼ全員が債権屋に売られて娼婦となった事を考えると、こんな物はさっさと捨ててしまうべきなのだろうが、最早私の手に残った唯一の家族との思い出となってしまったこともあり、どうにもこの”ダンジョン・コア”を捨てられないでいる。それに、私がこれを盗んだことは、当時の私が行えた唯一のダンジョン閉鎖士への復讐だった。そう考えれば、全くの悪い思い出だけの品という訳でもない。

ただ、村に来たダンジョン閉鎖士がこれをダンジョンから抜き取らなければ、私は今もあの村で普通に生活をしていられたのだろうか？　とは考えずにはいられなかった。

二番目の月、二番目の日

今日行われた人工ダンジョンの環境調整の際に、ふと「そもそもダンジョンとは何なのか？」という疑問が湧いた。始めはどうにも寿命が延びないゴブリンを見て、「ゴブリンに最適な環境とは一体何なのか？」という疑問だったが、そもそもモンスターにとっ

て最適な環境とはモンスターが唯一生存できるダンジョンそのものに他ならないのだが、私自身ダンジョンという環境を明確に定義付けられていない事に気が付いた。

二番目の月、三番目の日

昨日思い浮かんだ疑問に対して一つの解を思いつく。ヒントは少し前に書いたダンジョン閉鎖士と〝ダンジョン・コア〟に関する日記の中にあった。

元々、ダンジョン閉鎖士は〝ダンジョン・コア〟やダンジョンそのものを五感や直感によって感じ取れる存在だと言われているが、そこから考えると『ダンジョン閉鎖士はダンジョンと〝ダンジョン・コア〟という二種類の存在を感じ取る能力を持っている』のではなく、『ダンジョン閉鎖士はダンジョンと〝ダンジョン・コア〟という性状が変化した同一の存在を感じ取る能力を持っている』という事になるのではないだろうか？

と、いうのも、ダンジョン閉鎖士は生きているダンジョン、枯れかけのダンジョンの別なくダンジョンの気配を感じ、枯れかけのダンジョンから〝ダンジョン・コア〟を摘出すると、後はダンジョンの気配を感じないという。で、あるならば、〝ダンジョン・コア〟はダンジョンの残り滓として認識されてきたが、実はそんな生易しい存在ではなく、濃縮されたダンジョンそのものとも取れるのではないだろうか？

あくまで一つの仮説でしかないが、一度〝ダンジョン・コア〟でモンスターを取り囲

んでみるのも手かもしれない。

二番目の月、十番目の日

先日の予測を基に〝ダンジョン・コア〟を貼り付けた檻にゴブリンを閉じ込めて、通常の檻のゴブリンとの違いを比較したが、有意差は見られなかった。多少ゴブリンの反応に違いを見いだせたものの、寿命や繁殖能力といった決定的な要素に関しては違いは一切見られなかった。

しかし、私はどうしても先日の予想が大きく外れているとは思えなかった。

〝ダンジョン・コア〟とダンジョンの違い、それは一体何なのか？　この疑問の回答こそが人工ダンジョン建設への手掛かりになるのかもしれない……。

日誌はここで止まっていた。

「……」

残りのページが全て白紙な事を確かめると、本棚を漁っているサルバに声を掛ける。

「何か見付かったのか？」

振り返ったサルバに「うん」と答えて、キリエさんのものと思われる日誌をひらひらと振って見せると、サルバは手に持っていた見るからに高そうな本をポイっと投げ捨て

て、ひょいっとこっちに寄ってくる。
「中身は？」
「ダンジョンと〝ダンジョン・コア〟に関する記述だったね」
首を傾げるサルバにざっくりと要点となるところを見せると、それを読み終えたサルバは「むぅ……」と唇を尖らせる。
「これはあれか？〝ダンジョン・コア〟がここのダンジョン（ラビュリントス）の建造に関わっているって事なのか？」
「可能性は高いんじゃないかな？」
断言は出来ないけど。
「ここまでの内容を見る限り、本格的に研究に回す前段階の案件とかを忘れない様に書いている感じだから、追加の記述が無い事を考えると、キリエさんの考えを土台にした〝ダンジョン・コア〟を利用する何かしらの研究が本格的に研究所預かりになって今の成果に結びついた可能性は低くないだろうしね」
「そうか……」
頷いたサルバが顔を上げると、「んで？」と首を傾げる。
「って事は乗り込むのか？」
「うん」

何処にとは聞かないサルバに、僕は肯定を返す。実際、これ以上の情報はこの家の中にあるとは考え辛いしね。ま、念のためざっとは見ていく必要があるけ「ぬおおっ!?」

不意に室内に響いた悲鳴と、合わせて聞こえてきたドサドサドサッという何かが絨毯に降り注ぐ音。振り返ってみると、何故か両手に一冊ずつ本を握った伯爵様が恐らく降り注いだ張本人と思われる分厚い本に埋もれてばたばたと藻掻いていたのだった。

「……あれ、どうする?」

んー、そうだね……、

「ま、一応連れて行くしかないけど、最悪さっさと見捨てても良いんじゃないかな?」

別にどうでも良いし。

「さよか」

頷いたサルバが肩を竦める前で日誌を外套に仕舞い込むと、一先ず用の済んだ書斎から出る。じゃ、後はさっさと終わらせちゃおっか。

「僕は一階見てくるから、サルバは二階をお願い」

「おう」

頷いたサルバに二階の探索を任せると、僕も直ぐに一階へと向かう。

何故あのダンジョンは製造に成功したのか、何故使用人さんが突然変貌したのか、何故それらの全てが雄牛なのか、何故〝ダンジョン・コア〟が……と、疑問符は尽きない

ものの、少なくともその答えに近いところにこの島にいる研究員達が居る事は間違いなさそうだった。

◆

結局、あの後の家探しでは目ぼしい手掛かりは見つからず、当初の予定通り、僕とサルバと一応伯爵様は島の研究所に向かってみることにしたのだった。

「しかしアルタ」

「何？」

しとしとと身体の芯に染み込んでくる様な雨に降られながらの道中、ふと、隣のサルバが首を傾げた。

「研究所に着いた後はどうすんだ？」

「どうって普通に資料とか確認するだけだけど？」

当然。

「拒否された時はどうすんだ？　つか、ぜってー拒否してくるだろ？」

「別にどうにも？」
　僕は僕でやることをやるだけだし。好きにすれば良いんじゃない？　特に止める気はないし。
「それはどっちをだ？」
「どっちものつもりだけど？」
　勿論。
「……ま、だろうな」
「うん」
「つまり？」
「大体何時も通り」
　かな。
「質問ついでにもう一つ良いか？」
「別に良いけど？」
　まだ、研究所まで時間もあるし。
「じゃあ、一つ」
「うん」
「それ……何だ？」

「ああ、これ？」
サルバが訝る様に指差したのは、念のためと思って、キリエさんの家から出てくる時に準備してきた荷物だった。そういえば、見せてなかったっけ。
「これはほら、あれだよ」
「おう」
「使用人さんのくb「はいアウトオオオオオ!!!!」
風呂敷を解いて中身をちらっと見せた瞬間、サルバが絶叫と共に両手で大きなばってんを作った。
「この野郎、とうとう気が狂ったの……いや、そっちは元からか」
「おいこら」
僕を何だと思っているのさ。
「狂人」
「はっはっは」
この野郎。
僕が首元に剣を振り抜くと、サルバは一瞬で仰け反って、紙一重の差で一刀を回避する。やるじゃん。
「別に本気で討つ気もなかっただろうが」

むくりと起き上がったサルバはけっけっけと笑って肩を竦める。まあ、そうなんだけど、
「サルバの胸を考慮してなかったから、目測は合ってたけど完全に直撃コースだったんだよね」
「おいこら!?」
僕の言葉に乳房を両手で抑えたサルバがザザザッと後退りする。
「いや、ホント咄嗟だと忘れちゃう事ってあるよね？」
「そんなんで斬られてたまるかおい!?」
「因みに直撃しなかったのはサルバが仰向けになったおかげでおっぱいが少しだけ沈んだからね」
「つまり、正真正銘の紙一重じゃねえか!?」
うん。だからそう言ってるよ？
「まあ仕方ないじゃん。僕の中ではサルバは完全に男なんだし」
「それ（性別）は紛れもない事実だけど納得いかねえええええ!!!!!」
「はっはっは」
ま、そういう時もあるよ。それより研究所に急がないと……ん？
何時も通りにサルバとふざけていると、不意に視線を感じて後ろを振り返ってみた。

すると、キリエさんの家から僕達の後を付いて来ていた伯爵様が何故か興味深そうに僕とサルバを見比べていたのだった。
「どうかしました？」
そんな、変なものを見るような目をして。
「？　ああ、いやな……」
ぽりぽりと頭を掻いた伯爵様が首を傾げる僕とサルバを順番に見比べて、こっちもこっちで首を捻る。
「お主ら、随分仲が良いなと思ってな」
「はあ……」
これくらい普通じゃない？　荒事ありきの仕事で誰かと組むなんて、相性が悪かったらお話にならないし。
（じゃねえと、死ぬしな）
（それね）
一応、礼儀として「まあ、そうかもしれませんね」と答えるとピクリと右眉を蠢かした伯爵様が何故か探る様な表情になる。んー？
「お主ら、もしかせんでも恋仲同士なのか？」

「「殺しますよ？（すぞ？）」」

　どうやら、雄牛に襲われたり雄牛になったりするよりも先に、この伯爵様は僕達に介錯されることをお望みの様だった。うん、そんなに首と物別れしたいなら、こんな遠回しに自害を希望してこなくても良いのにね。頼まれればスパーンといってあげるくらいの親切心は僕にもありますよ？

「待て、何故そうなる？」

　僕が片刃剣の鯉口を切ると、伯爵様は心底意味が分からないといった様子で目を剥く。うん、まあ、一見意味不明だよね？

「端的に申し上げますと」

「うむ」

「サルバは男なんですよ」

　僕が事情を説明すると既に丸くなっていた目を更に丸くして、眼球が飛び出すんじゃないかってくらいに両目を見開き、たっぷりと時間を掛けて「……うん？」と混乱の声を上げた。まあ、サルバの外見を考えるとそうなるよね。

「その乳で男は無理があるだろう」

「まあそうなんですけどね」

「おいこら」

当然その通りなので肯定すると、隣のサルバが躊躇なく発砲してきた。首を捻って弾道を回避はしたけど……何か普段よりギリギリじゃない？

「気のせいだろ」

銃口から立ち昇る硝煙をふっと吹きながら、サルバはしれっとそう言った。……ま、いっか。

「〝ダンジョン・コア〟の事故で身体がこうなっちゃってはいますけど、中身は男性のままなので、まあ、一応「おい」完全に男性です」

なので、僕とサルバが恋仲というのはあり得ませんと結べば、伯爵様は妙な顔をしながらも一先ずは納得したのか「相分かった」と頷いたのだった。

「ん？」

不意に、僕の鼻孔を奇妙な不協和音が擽った。

足元に絶え間なく叩き付けられる雨粒と、湿った空気の中を立ち昇る潤された土の臭い。その間隙を縫う様にしてほんの僅か掠った違和感は違和感と呼ぶにしても微弱に過ぎる気がした。或いは、気のせいとも断じてしまう程に微かなそれに、けれど殆ど勘

としか言い様のない直感が、この違和感を見逃すなと強く訴えかけてきている気がした。

（アルタ？）

そんな、僕の小さくない違和感に気付いたサルバが硝煙の途切れた拳銃を握り直して（どうしたんだ？）と不思議そうに首を傾げてくる。湿気でまとまった前髪がゆらりと揺れて、水滴に束ねられた前髪の奥から黄色い右目たチラリと見えた気がした。んー……

（ちょっと違和感が……）

取り合えずサルバにだけでも伝えておこうと〝共有〟を使って事情を説明しようとしたのとほぼ同時に、鼻孔を一瞬掠めただけの筈の違和感がジワリと存在感を増した気がした。うん、これ、気のせいじゃないね。

（サルバ）

（あん？）

（何か来るよ）

元々島全体に充満していたダンジョンの悪臭に雨と濡れた土。そんな混ざり合い混沌を形成する臭いの中で、そうそう普通の臭いが存在感を維持できる筈もない訳で……、

（そうなると、十中八九何かまずいものっていうのが定番だよね）

むしろ、それ以外のパターンが思いつかないし。

（警戒しておいて）

（おう）

頷いたサルバが拳銃のハンマーを起こすと、その音に伯爵様が「何かあったのか？」と僅かに目を細めて尋ねてくる。んー、まあ、色々です。

首をかしげる伯爵様に適当に返しながら僕とサルバで互いに背を向けて辺りを探っていると、不意にサルバが「ん？」と声を出した。

（何か見つけた？）

（何かっつーか……何だ、あれ？）

サルバの声が僅かに固くなったのを感じて、僕は直ぐに”共有”を巡らせてサルバの左目の光景を受けとる。すると、サルバの鋭敏な視覚の元、雨靄で不確かな景色の奥にくっきりと小さな人影が写り込んでいた。

直ぐにそっちを向いて臭いを嗅いでみれば、鼻孔に触れたのは先と同じ臭いで、間違いなくあの黒点が違和感の正体に違いなかった。

（経験則からすると、多分雄牛なんだろうけど……）

その割には少し影が小さい気もするね。

僕とサルバがつらつらとそんな会話をしている中、次第に影は大きく、姿をはっきりとさせていく。
「ん？　あれは、ロレンツではないか」
そして、その表情まではっきりと窺えるようになった頃、最初にそう口にしたのは僕達の後ろにいたキール伯爵だった。
「ロレンツというと、さっきの？」
「ああ。あの人工ダンジョンに遣わした儂の家臣だが……」
僕の確認に伯爵様は首肯を返し、帰りの遅かった家来の姿にほっと胸を撫で下ろしたのも束の間、労いのために口を開きかけたところで、何故か直ぐに戸惑った様子で口ごもったのだった。んん？
「のう」
「何か？」
「お主に聞くのも変なのだが……あれは本当にロレンツなのか？」
「何か違和感が？」
僕には分からないんですけど。
僕の返答に「うむ」と頷いた伯爵様は僅かに警戒の色を滲ませて、小声で耳打ちをしてくる。

「ロレンツはかなり真面目な奴で、確かに普段も表情に乏しいところのある奴なのだが……あんな硬質なだんまりは見たことがない気がするのだ」

ふむ……

「単に、伯爵様が目にしたことが無いだけの可能性は？」

「儂とロレンツは儂が放蕩をしていた頃からの仲だ。まずありえん」

そう言って、伯爵様が頭を振って否定をする間にも、件の騎士さんは一切歩幅を変えることなくテクテクと此方に近付いてくる。その動きは確かに伯爵様の言葉通り何処か無機質で……言うなればブリキのおもちゃか何かの様にも映った。

「……」

警告を込めてサルバが銃口を向けるも、それに気付いてすらいないのか、一切動きを止める様子は見られない。

淀みない所作は普段であれば伯爵様に頼もしさを与えるはずのものでありながら、今はただただ不気味さだけを周囲に撒き散らしていた。

「……よく戻ったロレンツよ」

それでも、この騎士さんの主人として声を掛けようと、伯爵様が軽く咳払いをして口を開く。

「随分と遅くなったな」

「……」
「何か、不味いことでもあったのか？」
「……」
　幾度か伯爵様が声を掛けるも、ピクリとも反応を示さない騎士さんに、次第に伯爵様が掛ける言葉が長くなっていく。
「なあ「あ」
　そして、とうとう伯爵様が身を乗り出し掛けた所で不意に何時もの〝臭い〟が濃くなった。
　咄嗟に前に踏み出そうとした伯爵様の足を鞘がらみの切っ先で引っ掛けると、綺麗にスッ転んだ伯爵様が「ぐふっ!?」と無様な悲鳴を上げる。うん、痛そう。
（けど、まあ……）
それくらい（激痛）で済んだのは、はっきり言って行幸だった。
　伯爵様が引っくり返った一拍後、その顔面にあたる位置からブオンッという風鳴音が弾けた。果たして、その元に居たのは巨大な一頭の牛頭人体のモンスター。身に纏っていたはずの鎧はひしゃげ、膨張した筋肉に耐えきれず引き裂かれるようにして四散していた。
「な、なあっ!?」

「ブ、ブモオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!」

自分の首がほんの数瞬前にむしり取られそうになっていた事実を遅ればせながらに理解した伯爵様が慌てて立ち上がって、雄叫びを上げる牛人から大きく距離を取る。うん、誘導する手間が省けたね。

伯爵様が戦闘圏から離脱したのを確かめたのとほぼ同時に、パパンッという軽い破裂音が響き、鉛の牙に噛み付かれた雄牛の眼球が紅い鮮血を撒き散らした。

「ロレンツッ!?」

その光景に伯爵様が悲鳴を上げた様だった。けれど、正直こうなってしまった以上はどうする手立てもないし、そもそもがこんな開けた場所（ダンジョンの外）でこのサイズのモンスター（モンスターに）に暴れられては生け捕りにする余裕なんてあるはずもなかった。

「ふぅ……」

雄牛が片手で血液の滴る頭部を抑えて、もう片方の腕を遮二無二に振り回すのを確かめながら、僕も少し距離を置いて抜剣する。先の使用人さんの時には変貌に多少時間が掛かっていたこともあって、完全に牛になりきる前に首を落とせたけれど、パッと見る限り、こっちの雄牛は直ぐに斬首するのは無理があった。代わりにサルバの弾丸によって視覚を奪われている今、攻撃の届かない範囲からの一撃離脱なら、反撃らしい反撃は返ってこないだろう。

（となると、こうかな）

抜いた片刃剣を肩に担ぐ位置から柄を臍の前に持ってきて、切っ先を暴れる猛牛の喉に向ける。

突き以外の斬撃に時間を要する反面、敵と自分の間に抜き身の刀身を置いた構えは、その分間合いの操作に適していて、何よりも堅牢だった。

（じゃ、始めようか）

剣先を狙い定めた的へと突き出せば、剛毛の上からモンスターの皮膚を浅く切り裂いた片刃剣は、僕がモンスターの間合いから走り抜ける頃にはその右腕の指を残らず斬り落としていたのだった。

にわかに強くなった雨の中、雨水が鏡面の様に溜まった石畳の上を滑って振り返ると、五指を失った雄牛が狂ったように豪腕を振り回している。その光景は一瞬前よりも更に荒々しく、

（獣は手負いと空腹が一番怖いって言うけれど……）

と、僕に思い出させるには十分な姿だった。

「ま、それでも斬るだけなんだけどさ」

それこそ、どうでも良いしね。

単調に振り回される雄牛の腕の振り子が大きく振り抜かれる直前、再びモンスターと化した騎士さんに向かって跳ぶと、今度は下段、脛から脹脛に掛けてを浅く斬り裂く。多少深く踏み込めばもう少し傷をつけることも出来たけど、此処で無理をする必要はないかな。

「つし！」

僕が走り抜けた後を追う様に、発砲音が続いて来る。狙い違わずだろう、片膝を撃ち抜かれたモンスターは堪らずバランスを崩して石畳の上へと倒れ伏した。

「ぶも、ぶもおっ!?」

本能的に、自分が追い詰められている事を察したのか、雄牛は何とか周囲を威嚇しながら立ち上がろうとするけど、片腕の指を残らず落としてあるせいか中々立ち上がれないでいる。

「これでカタだな」

そう呟いたサルバが、両拳銃の回転弾倉の残弾をおまけとばかりに吐き出していく。左右で計九発。それを残らず巨体へと叩き込まれた雄牛の肉体がとうとう限界を迎えたらしく、びくりびくりと強い痙攣反応を見せた。

（ん、これなら十分かな）

相対するモンスターの動きが完全に鈍った事を確かめて、雄牛の首元へと飛び込む。下段から摺り上げる様に捻った剣先は上手く雄牛の首根を走り、漸くその頭を落とすことに成功したのだった。

「ふう……」

（やっぱり、普段人間相手ばっかりだから、どうしてもモンスターの相手は時間が掛かっちゃうな）

今後の事を考えると、対モンスターの戦闘訓練もしておいた方が良いかな？

そんな事を考えながら血振りをくれて納刀すると、後ろのサルバが弾倉に新しい弾丸を込めながら「お疲れ」と言ってにかっと笑ったのだった。

「怪我はねえか？　アルタ」

それでも、少し心配になったらしく、そう言って首を傾げるサルバに「平気」と返すと、〝共有〟で確かめて直ぐに納得したのか、サルバは満足そうに頷いたのだった。

「お、終わったのか？」

そんな僕達と雄牛のモンスターを見て近付いてきた伯爵様が恐る恐ると言った様子でそう尋ねてくる。

「恐らくは」

既に頭は落とし終えてるから、もう生き返りはしないだろうしね。

僕の回答に頷いた伯爵様は首の無い雄牛を見て「うっ……!?」と口元を抑える。刺激が強い様なら見ない方が良いですよ?

(慣れない人は一生慣れないって言うしね)

(それを実際に斬首したお前が言うか?)

(それもそうだけどさ)

そんな僕達の会話を他所に、首の無い家臣の死体の前で「済まぬ……済まぬロレンス」と呟いた伯爵様が何かに気が付いたのか、その腰元に手を伸ばす。

(ああ……)

その先にあったのは肉体が変貌した際にも弾け飛ばずに残っていたらしい、この騎士さんの愛剣だった。

伸縮性の高いベルトに差していたからなのか留め金も特に傷んだ様子は無く、変貌前そのままのそれを外すと、伯爵様はその細剣をぎゅっと握って自分のへとベルトを巻きつけたのだった。

(ふーん……)

その所作は確かに身体に馴染んでいて、武芸にそれなりに心得があるという言葉を再度補強するには十分な佇まいだった。

「では行くぞ」

「もう良いんですか？」
「うむ」
　立ち上がった伯爵様は鋭い視線を騎士さんの死体に向けて頷く。
「これ以上、此処に居っても、手掛かりは得られんだろうからな」
（まあそうですね）
　実際その通り。
（口には出さねえんだな）
（まあね）
　だって無意味に恨み買うでしょ？
（意外だな。その辺気にするのか）
（そうでもないよ？）
　恨みを買う時はそれに見合った利益が付いて来ないと無駄なだけってだけだから。
（ああ、それなら納得だわ）
（そ）
　それは重畳。
「じゃあ、取り合えず研究所で良いですか？」
「うむ、儂もそこ意外に心当たりは無いからな」

「分かりました」

伯爵様が承認したのを確かめると、改めて僕達は研究所へと足を向け、……不意にカタンッと響いた異音に待ったを掛けられたのだった。

「あん？」

音のした方向に居たサルバが真っ先に声を上げ、同時に腰に手を掛ける。すると、視線の先、家屋の隙間からばちゃばちゃという明らかに無生物では有り得ない音が響いて来る。そして、

「あ……ひ、人……」

警戒する僕達の前でそこから出てきたのは……ボロボロになった白衣に身を包んだ、この島の研究員だった。

「「……」」

その姿を見て、僕とサルバは思わず顔を見合わせる。既に異常事態には二度出くわしているものの、これ（島の研究員）のこんな姿（ボロボロの）を見たことで、先の二件の出来事が完全にイレギュラーであると判断せざるを得なかった。

（つか、それってどっちが良かったんだろうな？）

（故意かどうか？）

（おう）

（そうだね……）

ん――……、

（やる事は変わらないし、どっちでも良いんじゃない？）

多少人数が変わるくらいだし、誤差だよ誤差。

（まあ、お前ならそう言うか）

そうゆう事。

肩を竦めるサルバに警戒を任せて、僕はへたり込んだ研究員さんに近付いていく。念のため周囲の臭いを嗅いでみても、それらしい人の気配は感じられなかった。

「あ、ああ」

僕が歩み寄ると、何かに安堵した様子で割れた眼鏡をかけ直しながら手を伸ばしてきた。……ふむ。

「う、あ？」

「取り合えず、知ってること一つ残らず吐いてもらいますね」

切先を向けると、状況が理解できないのか研究員さんは言葉にならない音だけを発した。んー……、

「三つ数える間に返事が無い場合は耳を削ぎますね」

十

ざーざーと瀑布程にも強くなった雨脚の中、島の研究所に向かう僕達の前に突如として現れた研究員さん。その姿は雨具どころか私服ですらなく、ずぶ濡れの白衣にひび割れた眼鏡を無理矢理耳に引っ掛けた姿は見るからに着の身着のままで、一先ず尋問を仕掛けようと判断するには十分な出で立ちをしていた。

「あ、ああ？」

で、実際に僕が片刃剣の切っ先と共に制限時間を突き付けると、研究員さんは自分が何を言われたのか理解できていないらしく、カタカタと震えながら訳が分からないといった視線を此方に向けてきた。ま、別に良いけど。僕はそのまま数を数えるだけだしね。

「一」

「な、な!?」

「二」

「お、おい冗談だろ!?」

「三」

三のカウントと共に研究員さんの右耳に剣を振るうと、呆気に取られた様子の研究員さんの足元にポトリと小さな肉片が零れ落ちる。その音に視線を向けた研究員さんは一瞬何が起きたのか理解できない様子だったものの、流石に頭脳労働職だけあって直ぐに答えに行き着いたのか「ぎゃあっ!?」と悲鳴を上げて、生き血の滴る右顔側面を抑えた。

「じゃあ、次は左です。三つ数えるうちに返事をしてください」

「な、が……」

「一」

呻く研究員さんに改めて剣先を向けながら、再度カウントを始めると、「ひいっ!?」と悲鳴を上げた研究員さんは先程以上の激しさでガタガタと震え始めた。

「二」

既に冗談ではない事は伝わっていると思うんだけど……まあ、次は鼻で、その次には目があるから別にいっか。

「さ「わ、分かった！　言う！　言うよ!!　言うから助けてよおっ!!!」

〝三〟をカウントし掛けたその一瞬、僕が「ん」を口にするその直前、目の前の研究員の男性はぶんぶんと空いている左手を振って、何とかそう叫ぶのだった。最初からさっさとそう言ってほしかったけど、一先ず置いておいて。

「じゃあ尋ねますが、僕達は今日、人が牛頭のモンスターに変貌する事態を複数回目にしておりますが、これは貴方達クレタ島の研究員さん達が引き起こした事という認識で合っていますか?」
「ち、違うんじゃないかな……」
「……」
「へ、へへ」と媚を売る様な笑顔と共に、研究員さんは卑屈な視線で僕やサルバを舐める様に見上げてきた。んー、
「根拠があるならそれでも良いんだけどね」
それなら、原因も分かるだろうし。うん。
「じゃあ、次は根拠をどうぞ」
「え?」
「ですから、根拠を」
容疑者の「自分はやってない」を信じるなら証拠、最低でも根拠が必要だしね。
「また三つ数えるので、それまでに納得のいくものをどうぞ」
(因みに納得がいくものが出てこなかったらどうすんだ?)
(その時は左耳)
その後があれば鼻かな。まあ、僕としては別に最後まで納得が行かなかったとして

も、予定通り研究所に乗り込むだけだしね。

「一」

「ご、ごめん！　ち、違うんだ！　騙すつもりなんてなくって！　し、知らないんだ!!　ただ、今日研究所に行ったら、他の研究員が次々に雄牛頭になっちまって!!　それで、慌てて逃げてきただけなんだ!!　だから、研究員がやったんじゃないと思ったんだよ!!」

「……」

（これはどうすんだ？）

（んー……まあセーフ？）

多分だけど。被害者は被害者みたいだし。

取り合えず、一刀を耳に振り落とすと、研究員さんが「ひぃ!?」と悲鳴を上げる。そして、完全に肝が潰れたのを確かめると片刃剣の切っ先が薄皮に覆われた軟骨に達する前に腕を止める。

「知らないというのは？」

「あ、う、「因みに納得がいかない場合は今度こそ左耳です」っぼぼぼぼ、僕はダンジョンの構造の研究者じゃなくてモンスター入植の研究者だったんです!!　だから、今の”ダンジョン・コア”の事は何も知らなくて!!!　だ、だから本当に何が起きているかなんて分からないんです!!!」

「じゃあ、最初の『違う』は理屈も根拠もない当てずっぽうって事ですね?」
「ひ、ひいいいっ!?」
僕の確認に、研究員さんは悲鳴と共に、何とか後退りして逃げようとする。ふむ……、
(ま、いっか)
(許すのか?)
(それよりも大事なのは続きだから)
というか、許す許さない以前にどうでもいいし。
「じゃあ、貴方が今の人工ダンジョン、ラビュリントスについて知っていることを残らず吐いてください」
取り敢えず、後退りで開いた分の距離を一足で詰めると、研究員さんは「うひっ!?」と器用に石畳に座ったまま跳び跳ねた。
「いいい今のラビュリントスはモンスターじゃなくて、ダンジョンの材質と構造に拘ったって聞いてるけど! それくらいなんだ!! 僕達は今のラビュリントスについてはそれくらいしか本当に知らないんだ!!! 信じてくれよ!!!」
再びカウントを始めると、研究員さんは絶叫混じりにそう言った。んー?
「僕〝達〟ということは、何人か今のラビュリントスに関わっていない研究員さんが居るという事ですか?」

「そうだよ！　僕達〝入植〟専門の研究員は数年前からずーっと冷や飯食らいだ!!　あの女のせいで……っ!!!」

そう吠えた研究員さんの割れ眼鏡の奥には、今まで宿っていた恐怖の中に初めて他の感情……強い嫉妬が浮かんでいた。あの女……ね。

（それって）

（うん）

間違いなく、キリエさんの事。

そして、一度その事について言及すると、後が止まらなくなったのか、僕達の〝共有〟でよ会話に気付くはずもなく、研究員さんはベラベラと日頃の鬱憤を晴らすかの様に語り始めた。

「僕は元々、本土じゃそこそこ名前の売れた畜産学者だったんだ。帝都のアカデミーも出て、それで研究者としてもある程度実積を積んで、そろそろ大きなテーマをやりたいと思っていた時に皇帝陛下から御呼びが掛かったんだ」

「それが、この？」

「ああ、そうさ」

研究員さんはこくりと唾を飲んで頷いた。

「始めは嬉しかったよ。皇帝陛下が選んだ帝国の優秀な研究者に自分が数えられている

なんて。モンスターの繁殖っていうのも、今までにないテーマで僕自身研究者としての探求心も擽られたしね」

成る程。

「では、何故？」

窓際に追いやられたのか？　失敗したのか？　はたまた、彼女（キリエさん）から嫌われたのか？　聞きたいことは幾つか無いでもないけど、それよりどの事だと思うかの方が気になるところかな。

「知るか!!　そんなの僕が聞きたいよ!!　ある日突然所長に呼ばれて、『今日から入植の実験はしなくていい』って!!　代わりにあの女の指示に従えって!!」

そう言って、研究員さんはパシャンと自分の太ももに握り拳を打ち付ける。

「その後はもうずっとダンジョンから取り出したモンスターの経過観察さ！　来る日も来る日も、来る日も来る日も来る日も来る日も!!!」

「小間使いみたいな仕事ばっかりさせられて!!」と言って歯を剥いた研究員さんは一つ前よりも更に強く拳を打ち付けた。ふむ……、

（取り敢えず、裏は取れたね）

（あのラビュリントスが〝ダンジョン・コア〟で作られてるってか？）

（んー、そこまではまだ断言できないけど）

確定的な情報はこの人も持っていないみたいだしね。
（けど、ダンジョンの材質を何かしら特別なものにしているのは多分間違いないし、その材質の第一候補もほぼほぼ確定で……）
（〝ダンジョン・コア〟……か）
（うん）
多分だけどね。
まあ、まだ状況証拠からの推測に過ぎないし、今後の調査で、より上位の候補が出てくる可能性もなきにしもあらずだけど、それでも重要な位置付けって考えて良いんじゃないかな？
（だな）
サルバが頷いたところで、残りの枝葉の話も今のうちに聞いておいてしまうことにする。
「じゃあ続きです。このラビュリントスにおいて、〝雄牛〟というのは一体どういう意味を持つんですか？」
「ラビュリントスの見た目の事かい？　そんなの、知るわけないだろ。ダンジョンのデザインなんて門外漢だし、そもそもダンジョンの建造の時には僕はもう研究所の中核からは外されていたんだから」

ま、そうか。

「案外、あの女の趣味かもよ？　あの女、元は市長の愛人で、娼婦だった時にはかなりエグいプレイも受けてたって話だからね。案外、くわえ込んだ男の中に牛も含まれてたんじゃないかい？」

そう言って、研究員があからさまに下卑た笑顔と共に嘲るような視線を、何故か僕じゃなくて隣のサルバに向ける。いや、何故じゃなくて、同じ女性なら心理的に多少の意趣返しが出来ると思っただけか。……まあ、的外れも良いとこだけど。

研究員の言葉に、キリエさん（美人）が雄牛の性器を捩じ込まれている姿を想像しちゃったらしいサルバが微妙に興奮したのか、「おおう」と妙な声を漏らす。完全に他人事だし、そういう反応にもなるよね。

「推測とか、気付いたことも無いんですか？」

「そ、そう言われても……」

サルバが予想していた嫌悪や不快の表情を示さなかったからか、研究員は若干戸惑い勝ちに首をかしげる。ま、端から見てると中身（精神）が男っていうのは分からないしね。

「あ……」

と、少し首を捻っていた研究員が何かを思い出したようにポツリと漏らした。

「そういえば、いつ頃からだったかな、モンスターの経過観察で入植した覚えのない雄牛

の頭をしたモンスターの観察をさせられるようになったんだ。今日も僕はそいつの経過観察をするつもりで……」
「その観察が始まったのは何時からですか？」
「確か、ラビュリントスが完成して少ししてからだよ」
「……」
ふーん……
（何か思い付いたか？）
（んーん、何も）
現状、聞いている情報だけだと、状況が余りにもふわふわしてるし。そうだね……、
「じゃ、最後に一つ」
「何だよ」
「あのダンジョンを作ったのは結局誰だったんですか？」
「ふん、そんなの、決まってるだろ!!」
僕の最後の確認に、研究員は傲然と胸を張る。
「僕達だよ!!」
「成る程」
少なくとも、この研究員の中では本心からそうなっているのは間違いなさそうだっ

た。

◆

その後、右耳の止血を始めると、目の前の研究員は「この事は報告させてもらうからな!!」と終始五月蝿かったものの、僕達が研究所に向かおうとすると急におろおろと慌て出して、何故かサルバを自分の護衛に付けるように要求してきたのだった。
（まあ、どうでも良いけど）
特に従う義理も義務も無いこともあり、無視して研究所に足を向けようとすると、たっぷりと躊躇を繰り返した研究員は結局、研究所に着くまでの道中で何とか僕達を翻意にさせようとあの手この手で説得や恫喝、果ては色仕掛けらしきものを仕掛けてきたのだった。因みに色仕掛けの際にサルバに至近弾を一発お見舞いされてからはすっかり静かになった。で、
「着いたね」
「着いたな」

この島では人工ダンジョンのラビュリントスと同等、或いはそれ以上に重要と思われる拠点、島の住人である研究員達の職場を見上げながら、僕とサルバは呟いた。
「結構でけぇな」
「そうだね」
少し雨脚が弱くなり、はっきりとした研究所の全貌は、確かにサルバの言う通り、ラビュリントス程ではないものの、確かにこの孤島の施設としてはかなり大きかった。ま、島の研究員共用の施設って考えれば当然なんだろうけど。それよりも重要なのは……、
「どうだ？　臭うか？」
「うん、かなり」
僕が研究所の臭いを嗅いだのに気付いたサルバが隣でコテンと首を横に倒す。そんなに倒しちゃうと右目が見えちゃうよ？
「ん？　ああ……」
頷いたサルバが髪を直して片目を隠すのを横に、僕は一先ず片刃剣を何時でも抜けるように準備をする。
「な、なあ、本当に入るつもりなのか？」
で、さっきから及び腰の研究員が何故かそんな事を聞いてくる。

「入らないと何も分からないので」
「だ、だからってあんなモンスターの居るところに入るなんてナンセンスだ!!　それよりも、外で人間を探す方が先だろ!?」
「いえ、別に？」
　むしろ、何故？
「いや、何故って……」
　何故の上に、更に何故か絶句する研究員。その隣ではサルバが苦笑混じりに拳銃を抜いていて、更にその隣では伯爵様が何かに納得したように頻りに頷いていた。……ま、いっか。
「目的は現状の原因把握と対処だから」
　それ以外は一旦後回し。
「なら、尚更「いや、この状況になってる時点で研究員は何の解決策も持ってないでしょ」
　トラブルは解決よりも予防の方が遥かに簡単で、その予防に失敗している時点で優先度は低くなる。まあ、居たらラッキーくらい？
「お前は人を助けようって考えは無いのか!?」
「特には」
　というか、今はそっちはどうでも良いし。

「成る程な……」

今度こそ、言葉が見付からなくなったらしい研究員を横に研究所のドアに手を伸ばそうとすると、今度は何故か伯爵様が口を開いた。何か？

「いや、理想的なダンジョン閉鎖士というものがどういうものなのか理解できたような気がしてな」

「はあ……」

「純粋に強く、そして、およそ感受性らしい感受性を持たない……ダンジョンの閉鎖、いや、一つの経済圏の破壊という職務を考えれば間違いなく理想的だ」

そう言って、伯爵様は両目にロハグ（普段の拠点）でよく見かけるのと同じ光を宿して僅かに僕から距離を取った。……ま、どうでもいっか。

「行くよ、サルバ」

「おう」

既に準備万端のサルバに声を掛けると、頷いたサルバは獰猛な笑みを湛える。

「ま、待てよ！　じゃあせめてその女を置いていけよ!!　僕達の護衛に「は？　嫌に決まってんだろ。つか、俺はこいつ（アルタ）の相棒で、お前が此処で食われようがのたれ死のうが知ったこっちゃねえっつの」

けれど、禁句混じりの研究員の言葉に、戦意に水を差されたサルバはギロリと青い目

で相手を睨み付けると、肩に乗せられた白い手を不快げに払い除けたのだった。鉄拳制裁の塊で素手を殴り付けられた研究員は「ぎゃっ!?」と大袈裟な悲鳴を上げて腕を抱える。その姿を見て、サルバはけっと吐き捨てた。

何て言うかあれだね、サルバも着々と人でなしの道を歩いてるよね。

「そりゃ、相方が正真正銘の人でなし(ダンジョン閉鎖士)だからな」

「……」

「……」

「はっはっは」

酷いなあ。

「けど事実だろ?」

「まあ、否定する材料は無いね」

っていうかその通り。

「あー、少し良いか?」

そして、じゃあ今度こそと研究所のドアに手を掛けたところで、今度は伯爵様から制止を受けた。まだ何か?

「お主らの原因究明を邪魔したい訳ではないのだが、如何せんこちらの方が戦力不足でなお主らの力を借りたい」

「はあ」

と、言っても、僕達は探索を態々止める気はありませんので、必然的に踏み込むのに付いて来てもらうことになりますよ？

「無論。儂は元よりそのつもりよ。……こっちの青瓢箪は知らんがな」

そう言って、伯爵様がちらりと視線を向けると、「うっ!?」と呻いた片耳の研究員は、やがて追い詰められたように顔を青くして「ああ分かったよ！」と悲鳴にも似た絶叫を上げる。

「行けば良いんだろ！　行「んーん、別に」

っていうか、もうどうでもいいし。それより、探索を始めよっか。

「おう」

頷いたサルバと研究所のドアに手を掛けると、簡素なその扉はあっさりと開いて僕達を屋内へと誘（いざな）った。

「ふーん……」

中の設備はとても無味乾燥というか、兎に角機能が確りしていれば良いという作りなのもあって、箱そのもののサイズはキリエ（副市長）さんの家よりも大きいものの、あまり豪奢というイメージは湧かなった。

「で、どうする？　何だったら二手に分かれるか？」

隣で軽く周囲に視線を巡らせていたサルバが拳銃のハンマーを親指で撫でながら小首を傾げる。んー、そうだね……

「そ、それなら僕はこの女と「あ、それは無いから」

懲りない言葉に否定を返すと、貯まっていた鬱憤が爆発したのか「何だよお前、ダンジョン閉鎖士のくせにさっきから!」と研究員が吠えた。ま、それはどうでもいいとして、

「二人ずつ分かれるなら組み方は二つ。一つは戦力を偏らせて片方を囮、片方を探索にするパターン」

この場合、戦力が低い順に伯爵様と研究員が囮、僕とサルバが探索になる。

「で、もう一つが戦力を均等にするパターン」

こっちの場合は遠距離を行けるサルバと自己申告通りある程度剣を使える伯爵様が組んで、研究員が組むのは僕になるね。

「お、お前とだって!?」

僕が選択肢を順番に伝えると、二つ目の選択肢の説明が終わるか終わらないかってタイミングで研究員が鳥肌を浮かべてぶるりと身震いをした。

(生理的嫌悪感ってすげえな)

サルバが"共有"でそう言ってくるけど、ここまでストレートなのは珍しいと思うよ

？　ま、でも確かにその通り。

（最悪二人に黙って〝共有〟が出来るから、分割するなら基本的には二つ目の選択肢だったんだけど……）

「やめてくれ、想像しただけで怖気が走る！」

（この様子じゃ無理だな）

まあねえ。

別に道中で斬ればそれまでだけど、早すぎるとサルバの方が伯爵様に変な蟠りを持たれる危険があるし、かと言って遅すぎると妙なタイミングで足を引っ張られる可能性が出てくるし。

「なら、色々考えても、一先ず四人で動くって事で良いんじゃねえか？　今のこの島は半ばダンジョンみてえなもんだし、ダンジョンなら行動はチームが基本だ」

「まあ、そうだね」

今の状況がダンジョンに近いっていうのはサルバの言う通りだし、それなら（通常のダンジョン）サルバ（元B級冒険者）の方が判断は正確か。

と、サルバがそう言って僕が同意したのを見てか、後ろできょどきょどと視線を彷徨わせていた研究員が「そうだ！　それが良い!!」と何度も頷く。そして、更にダメ押しとばかりにちらりとサルバに妙に熱っぽい長し目を向けてくるのだった。……これは

良いの？
（正直、今すぐにでも射殺してえ気もするが、今は弾薬一発が勿体ねえし、あからさまに貴族様の前で殺しをする訳にいかねえだろ？）
　まあ、可能な範囲ではその通りなんだけど……、
（視線、何かねちっこくなってない？）
（だな……）
　頷いたサルバがぶるりと小さく身震いをする。気付かれない様に少し視線を向けてみたら、後ろの研究員が明らかに粘つく様な視線をサルバの大きな胸元にチラチラと向けていた。
（こんなちんちくりんの何処が良いんだか）
（視線からするにおっぱいじゃない？）
　後ろからでもシルエットが見えるくらいには大きいし。
（人間、死が近くなると一番安心できる環境を無意識に求めるらしいし）
（ママ～ってか？）
（そうなんじゃない？）
　知らないけど。
（後は、自棄になって犯罪が増えるっていうのも聞くし、何だったら種を残そうっていう

本能で強姦が流行るのもそういう事情なのかな？）

（お前は真面目に何アホな事考えてんだっつの）

もう一度ぶるりと震えたサルバがむすっと唇を尖らせて脛を蹴って来る。それを足を上げて避けると、後ろの研究員何某が「ああ、そこのダンジョン閉鎖士」と声を掛けてくる。まあ、どうでも良いけど。

「本土に戻ったら……覚えていろよ。僕を虚仮にしたらどうなるか、思い知らせてやる」

（この場を生きて出られるかも分からねえくせに、言う事だけはすげえな）

再び気障な視線を向けられたサルバが呆れた様に肩を竦める。っていうか、サルバ、この島に来てから身体を狙われてばかりだよね。

（本当にな）

〝共有〟に反応したサルバが心底嫌そうな顔で頷く。

（正直、俺からすりゃ雄牛なんかよりも、こっち（女の体）の方が遥かに呪いだ）

（ま、だろうね）

こういう面倒も多いし。

（あ、一応言っておくけど、いざとなったら躊躇しなくて良いよ）

言い訳や後始末はどうとでもなるし。

「……」

「？　どうかした？」
　そんなにじーっと見られても何も出ないよ？
「ん、ああ」
　僕が首を傾げると、ふいっと視線を外したサルバがばつが悪そうに頭を掻く。本当にどうしたの？
「いや、特にどうって事はねえんだけどな」
「うん」
「お前と組んでから、本当に〝二進も三進もいかねえ〟って思わなくなったと思ってな」
「そう？」
「おう」
　頷いたサルバが銃を握り直し、きゅっとその視線を鋭くする。
「前の……冒険者だった頃のパーティーも結構長く組んでたが、良くも悪くも優等生だったからな。冒険で慌てるようなことは一度も無かったが、今思い返すと実力以上の状況でどうにか出来るような感じも無かったんだわ」
「ふーん……」
　トテトテと珍しく自分のパーティーの事を語るサルバに一先ず相槌を打って先を待つ。〝共有〟からなのかは分からないけれど、おもいがけず口火を切った話を何となく

サルバが聞いて欲しがっている様な気がした。
「こういう、本当にヤバイ状況だと、多分お前みたいなイカレタ奴の方が頼りになるんだろうな」
「ひどいなあ」
誰がイカレタ奴か。
「お前」
「念押ししてほしかった訳じゃないよ？」
「でも、頼もしいのはマジだ」
チラリとこっちを見上げて微笑を浮かべながらも、不思議と真剣な色を帯びるサルバの左目。
「そ」
頷きながら、丁度廊下を出てきた白衣の雄牛頭を袈裟懸けに斬ると、二つに割れた躯を前にサルバは「流石♪」と白い歯を見せたのだった。

◆

で、
「もう少しシンプルな造りだと思ってた」
「ね？」と首を傾げる僕に、「な」とサルバが首肯する。
クレタの研究所に入って少し。既に、数体の雄牛頭のモンスターを処理した僕とサルバは時折出現するそれらよりも、無駄に入り組んだ研究所の構造の方にどちらかと言えば手間取っていた。まあ、必要な研究の増加や研究者の増員に合わせて、建物の方も増築を繰り返したからなんだろうけど、これ、地図が無い分ラビュリントスよりも迷いやすいかもね。あっちはあっちで地図を無視して構造が変動するから遭難率はどっこいどっこいだろうけど。あ、また一体。
「で、次はどっ……また？」
廊下の角から出てきた雄牛のモンスターの頭部を斬り落とし、その身体が動かなくなったことを確かめて後ろを振り返ると、研究員が今日何度目かの心神喪失状態に陥っていた。そうやって何度も停止して、吐瀉を繰り返されると道案内としても役に立たない上にモンスターに取り囲まれるリスクだけが高くなるんだけど、どうしたものかな？
「仕方ねえだろ!?」
あ、吠えた。

「お前らみたいなキチガイと文明人の僕は違うんだよ!!　さっきからポンポンポンポン白衣姿のそいつら(雄牛)の頸を飛ばしやがって!!　あれだって、元は人間だろう!!　躊躇とか無いのかよ!?」(ダンジョン閉鎖士)

「別に」

むしろ何で?

「……」

何故か絶句した研究員がえずきながらも助けを求める様にサルバに視線を向ける。けど、サルバもサルバで「……いや、俺も流石にこいつの感性を翻訳することは出来ねえからな?」と頭痛を堪える様に蟀谷を揉んでいる。んー、何となく呆れられている気がしないでもない。ま、別にいいけど。

(それより、いい加減決定的な資料の保管場所に行きたいんだけどな)

実験室には今日も他の研究員が居たせいか、そこそこ多くの雄牛頭が居たものの、あくまで実験施設だったから今一情報が集まってなかったし……

(さてさ「きゃあああああああああああ!!?」ん?)

何処に手を付けたものかと考え出した直後!!　その思考を断ち切るように鋭い女性の悲鳴が研究所内に響き渡った。っていうか、

「今の……家主だよな?」

「だね」

同じ事を思ったらしいサルバの目がにわかに剣呑な光を帯びる。その確認に首肯を返すと、僕もサルバと殆ど同時に走り出していた。音の大きさ考えると、そう遠くないと思う。

「おう」

頷いたサルバの後ろで「お、おい!?」という研究員の悲鳴と「何止まっておる。儂らも行くぞ青瓢箪」という伯爵様の声が聞こえた。

廊下の角を曲がると、今まさに並ぶ施設の一室に踏み込もうとする、これまでの雄牛頭よりも一回り以上身体の大きなそれの姿があった。

「ちっ！」

その姿に、隣のサルバが舌打ちをすると、爛々と輝く色違いの両目で廊下の先を睨み付け、両の拳銃を発砲する。絶え間なく廊下に響いた発砲音。その初弾は狙い違わず雄牛の脇腹に突き刺さり、そして、続く十に近い弾丸達もほぼ全てが初弾付近に噛みついていく。頑丈な体表を持つモンスターの急所外を食い破るための拳銃使いの妙技。全力での疾駆にありながら、容易くそれを成したサルバの技術に〝共有〟で賞賛を抱きながら、その渾身の連撃に耐えかねて絶叫と共に身悶えた牛頭との距離を一気に詰める。

その硬直は既に十分に長く、あと一足で距離を詰め切るには十分だった。

（跳ぶ）

後、成人男性三つほどの距離だろうか。そこで地面を蹴るのと、置き去りにしたサルバが「うおっ!?」と声を上げたのが聞こえた。

一人分

越えた瞬間、雄牛が若干の平静を取り戻したのか、僕の方を振り返って来る。

二人分

ガツッと音を立てて研究所の天井に突き刺さった片刃剣の切っ先を無理矢理に引き抜いて、一刀を振り下ろす。

三人分

身構えたモンスターの双角による迎撃を回避しながら、手首を返して手早くその片腕を斬り上げる。そして、その小脇を走り抜けて振り返ると、次弾を装填し終えたサルバと目が合った。

（いくぜ?）

（うん）

ニィッと牙を剥いたサルバが再び両拳銃を発砲すると、その狙いは今までの様な眼球ではなく、その下にある首筋、頸動脈を全ての弾丸で抉り取る。同時に背中側から巨大な雄牛の左胸の方を貫くと、片刃剣の感触を通して、刺し貫いた心の臓の脈動がすっと

止まったのを感じ取る。

「……」

そのまま、どうと音を立てて崩れ落ちた雄牛頭が完全に動かなくなったのを確かめると、追い付いてきたサルバとパシッと手を合わせた。で、

「生きてますか、キリエさん？」

部屋の上に市長室というドアプレートが掲げられたその一室を覗き込むと、案の定先の声の主だったキリエさんが上質な机の前で呆然とへたり込んでいた。

「あ、貴方達……」

一瞬呆気にとられた様子の彼女が僕とサルバの姿を確かめると、直ぐに我に返ったのかキッとこっちを睨み付けてくる。

（すげえ嫌われようだな）

（だね）

まあ、閉鎖されたダンジョン村の出身者なら僕（ダンジョン閉鎖士）達を憎んでいるのは珍しくないっちゃ珍しくも無いんだろうけど、憎しみで我に返れるくらい怨んでいるっていうのはちょっと記憶にないかな。ま、どうでも良いけど。それよりも、小さく身を震わせながらも未だにこっちを睨み付けてくるキリエさんの手に握られた紙の束の方が今は重要かな。

「それ、中身を検めさせていただけますか？」

一応、最低限の儀礼として手を出すと、やっぱりそんな気は無いのか「だ、誰が貴方達なんかに」と、抱えていた書類を抱き込む。まあ、だからどうしたって話なんだけどさ。

「あっ!?」

抱えていたそれを奪って一旦剣を突き付けると、書類を奪い返そうとしたキリエさんが切先の痛みに「うっ!?」と硬直する。サルバ、ちょっとそっち見てて。

「……おう」

頷いたサルバが行く手を阻む様にキリエさんの前に立つと、一層厳しくなった彼女の視線が目の前のサルバへと突き刺さる。ま、別に良いけど。

（おい）

〝共有〟で響いてきたサルバの声を聞き流しながら、僕は彼女が必死に抱え込んでいた書類の一枚目を落とす。

―人工ダンジョン・ラビュリントス建造計画―

その表紙に書き込まれていたのは案の定この島の核心。そして、或いは今の状況の一

つの手掛かりなるかもしれない情報だった。

「へぇ……」

その表紙を捲った直後、その内容に僕は素直に目新しさを覚えた。書き込まれた内容は端的に言ってしまえばダンジョンの再生方法、いや、〝ダンジョン・コア〟の再利用方法とも言うべき内容だった。

先ほど見た彼女の日記では〝ダンジョン・コア〟をそのままモンスターを入れる器としていたが、この記録ではその着眼点を更に一歩進め、よりダンジョンに近い状環境を作り出すため、〝ダンジョン・コア〟を励起させない様に研磨に近い方法で長時間かけて粉砕し、その粉末を一定の比率で練り込んだ煉瓦をモンスターの生育環境とするという内容だった。これは、〝ダンジョン・コア〟がダンジョンそのものであるという点からダンジョンとの違いを弾き出し、更に聴取を行ったダンジョン閉鎖士の感覚から逆算した内容になっている。

言うなれば、『〝ダンジョン・コア〟の巻き戻し』とでも言うべきだろうか？

「……」

少し、キリエさんの方を窺うと、その視線は僕ではなく、既に手元のレポートに向けられている。その視線とこの内容、それとあの日記や僕（ダンジョン閉鎖士）達への憎悪を考えると、彼女の力の原動力は自分が失った過去への執着なのかもしれないね。ま、どうでも良いけ

ど。

後のページは基本的には微妙な粉砕に掛かる時間の記録や、煉瓦に練り込む〝ダンジョン・コア〟の比率に関するレポート、そして細かなモンスターの健康状態の観察で、最後に人工ダンジョン建造にあたってのダンジョンの見取り図だった。

（ふーん……）

（どうしたよ、アルタ？）

（これ見て）

（んお？）

振り返ったサルバに、僕は気になったページを開いて見せる。

（ダンジョンの外観なんだけど、雄牛の形じゃないんだよね）

（え、マジか？）

（うん、ほら、ここ）

驚いたサルバにレポートの図面にあたる部分を指差して見せる。そこには確かに今のラビュリントスの様な雄牛のデザインは存在してらず、代わりに完全な直方体に近い、無機質なデザインの人工ダンジョンが描かれていた。

（あー、個性を出したくて、雄牛を使ったのか？）

（だとしたら、デザインを考えた人は相当な雄牛好きだね）

思ってもいない推測を立てるサルバに僕も思ってもいない回答をする。実際、雄牛にする意味は建築的には皆無だからね。

（で、他に続きはない……と）

こう見ると、レポートは明らかに〝人工ダンジョンを造れる〟という前提に置かれた内容になっていて、明らかに付随する失敗の記述が欠けている。

（要するに？）

（都合の良い事しか書かれていないね）

と、なると、それ以外の全貌は全部彼女（キリエさん）の頭の中……か。うん、

「お返しします」

閉じ直したレポートを差し出すと、毟り取る様にそれと取ったキリエさんがキッと再びこっちを睨み付けてくる。ま、良いけど。

「この前の質問含めて、少し質問があります」

それよりも、先に彼女には答えてもらわないといけないことがあるし。

「……答えたくないと言ったら？」

キリエさんはそう言って、挑みかかる様な視線で僕を睨み返してくる。んー……そうだね。

「取り合えず拷問にはかけます。貴女が持っている情報は多そうですし」

「……」
「とはいえ、幾ら情報量が多くても話してくれないなら何も知らないのと変わらないので、その時は純粋な障害として処理しようかなって」
　こっちとしても、掛けられる時間には限度があるしね。
「……」
「……」
　そんな問答をしたまま、キリエさんの答えを待つこと数秒。そろそろ剣を抜こうかなと考えていると、不意に目の前のキリエさんがふぅと大きな溜息を吐いた。そして、ぎゅっと歯を食いしばると、身が千切られそうな表情の末に「仕方ないわね」と呟く。
「一つ言っておくけれど、これは貴方達なんかに屈したわけじゃないわ。私は絶対にこの世からダンジョン閉鎖士（ダンジョンへいさし）を全て消しさってみせる。今は唯、仕方な「あ、そういうのはどうでも良いので、さっさと始めさせてください」
　本当にどうでも良いので。
「……」
　僕がそう言うと、何故か再び絶句したキリエさん。ついでに何故か僕とキリエさんの間に居るサルバが何故か「お前なあ」と呻いた。……ま、別にいっか。
　やがて、絶句から解放されたキリエさんが深い溜息と共に「……じゃあ、どうぞ」と

先を促してくる。うん、それじゃあ、

「この人工ダンジョン、誰が作ったんですか？」

僕は先日と全く同じ質問を繰り返したのだった。

十一

僕が先日と全く同じ質問を切り出すと、隣のサルバが（え、そっちなのか？）と〝共有〟と共に首を傾げてくる。うん、こっち。

「正直、聞きたいことはいくらでもあって、例えば『今起きている現象（人間の雄牛化）は一体何なんだ？』とか、『この現象（雄牛化）はどうすれば止められるんだ？』とか、或いは少し穿って『お前達（島の研究者）は何を考えているんだ？』とか挙げればきりがないんだけど、どれも凡その見当もつくし、見当にいかないまでも推測を立てられる程度にはヒントもあるけれど、これだけは判断材料を見付けようとした場合、最悪墓荒らしまでしないといけないからね」

流石にそんな重労働を今のこの島（クレタ島）でやるのは安全的にも体力的にも遠慮したいしね。

隣のサルバだけでなく、目の前のキリエさんや入り口の伯爵様と研究員にまで聞かせるつもりで口に出すと、その全員が一瞬ぽかんとする。もっとも、その目に映る光は他の三人と目の前のキリエさんとで大分差があるけれど。っていうか、研究員は一応キリエさんの仲間のはずなのに、何も知らないのね。

「墓荒らしって事は全員もう殺されてるって事でやっぱ良いのか？」

混乱の三人の中で真っ先に我に返ったサルバが、僕の言葉を少し吟味するように、人

差し指を顎に当てて「ん？」と首を捻る。ま、多分だけどね。
「この前の集会の時も話したけど、やっぱりあの規模のダンジョンを造るってなると相応に人手が必要っていうのは動かないからね。しかも、建造期間を考えると更に投入された人員は上振れるから」
「建造期間っつーのは？」
「キリエさんの日記からの逆算」
「ああ、それか」
　頷いたサルバが視線で続きを促してくる。んー、そうだね。
「詳細な人数は分からないけど、普通は追加の試験や後々ポロポロと出てくるトラブルなんかの事を考えた場合、想定される建造期間は減りに減って、反比例するように建造を行う人では膨れ上がっていくよね。そうなると、その短い時間に対応出来る人手を掻き集めたとすれば、本土にそんな人数が全員戻っていたら、この島の事なんで機密には出来ないと思うんだよね。人の口には戸は立てられないし」
「で、そんな噂は毛ほどもなかったと」
「うん」
　だから、少なくともこの島からはやっぱり人は出ていない。
「で、この島に来て以来、それらしき人影（肉体労働者）は見当たらないから」

「やっぱ、全員殺したと見るのが妥当か」
「そーゆーこと」
軽くサルバに肩を竦めて返しながら、揃って正面のキリエさんに目を向けると、へたり込んでいたはずの彼女が憎々し気にこっちを見上げてきている。その表情を見たサルバが「こりゃ決まりだな」と頭を掻いた。そうだね。
「つか、随分と分かりやすい反応だな。この前は鉄面皮っつーか、完全に無反応だったのに」
「案外、キリエさんも追い詰められてるのかもよ？　ほら、一応今は命の危機だし」
後は単純にこの前はダンジョンの不具合なんかも露見していなくて、割と心に余裕もあっただろうしね。対して今は完全に状況が詰んでるもん。
目の前の危機としてこの島で生き残れるかっていう問題があるけれど、それ以外にもこんな巨大施設を作れるほどの資源や時間、お金を皇帝陛下に投入させておきながら、物の見事に失敗しているし、懲罰は免れないでしょ。
「なる」
頷いたサルバが僅かに苦笑を漏らした。あれだけ出来る女感を出していたのにってところかな？　……ま、それは置いておいて、
「話を戻しますけど、キリエさんが皇帝陛下にそうしなければいけないのと同じように、

僕達も現状を切り抜けたら上に色々と報告する必要があるんですよね。だから、その辺の手間を省くためにもここで聞いておきたいなと」

でしょう？　と入口の伯爵様（元老院議員）に視線を向けると、身を乗り出していた伯爵様が「ま、そうだな」と頷いた。

そうなると決定的な情報を仕入れる必要があるけど、その為に一々集団の死体を探してもいられないしね。一か所にまとめられているなら兎も角、島の中に無作為に埋めたとか言われたり、或いは海に捨てたとか言われると正直探していられないし。

「っ！　この状況を好転させようって気はないわけ!?」

僕の答えに、苛立たし気に歯噛みしたキリエさんがヒステリックに声を張り上げた。

「ありませんよ？」

だって、僕達は生き残れれば島のトラブル自体はどうでも良いし。っていうか関係ないし。

「くっ!?　ダンジョン閉鎖士なんかに建設的な意見を求めた私が馬鹿だったわね！」

「……」

髪を振り乱して、そっぽを向くキリエさんを見詰めながら、僕はじっとその答えを待つ。けれど、再度開かれた唇から洩れた第一声は「だ、大体」と話を逸らすための常套句で、彼女は何処までも往生際が悪い様だった。

「この場からこの場から生きて帰れると思ってるの？　島には雄牛のモンスターがうようよしているのよ!?」
「そっちは全部斬れば済む話なので」
　顔合わせの時に集まった島の研究員と入島者の顔ぶれを思い返せば、まあ最大で六十体くらいかな？　今までの戦いを考えれば、少し時間はかかるだろうけど、僕とサルバなら一頭残らず根絶やしにするのは難しい事じゃないかな。
「ひ、人の命を何だと思ってるのよ!?」
（別に何とも）
（だろうな）
　〝共有〟で適当に相槌を打っていると、やおら立ち上がったキリエさんは悲鳴の様にそう叫んだ。冷たくも血色の良かった顔からは血の気が引き、代わりに唇からはひっひっと引き攣った様な乱れた息が漏れている。
「そうよ、ダンジョン閉鎖士はどいつもこいつも何時だってそう!!　パパもママも、皆あんた達に奪われて!!　私達が何をしたっていうのよ!?　単に普通に暮らしていただけなのに!!　ダンジョンを頼って生活していただけなのに!!!　私達の村がダンジョンを失ったらどうなるかなんてわかるでしょ!?　生きていけないのよ!?　死ぬしかないの!!　それを、それを急にやって来て、『このダンジョンは閉鎖致します』って!!　村の皆

が止めてって言っているのに、あんなにお願いしたのに!!!　それだけじゃない!!!　私から……私から閉鎖を止める条件にって、あんなっ!!!」

そこで絶句したキリエさんが不意に泣きそうな顔になりながら自分の身体を抱いてぶるりと身を震わせた。穢らわしい記憶を思い出し、その汚辱が唯々通り過ぎるのを待つしかない、そんな仕草だった。

その仕草を見てキリエさんが過去にダンジョンの閉鎖を止めるために何をしたのか（身体を差し出した事）を察したサルバが僅かに表情を歪めて（なあ、アルタ）とこっちを見上げてくる。

（何？）

（ダンジョン閉鎖士がそういう事すんのって結構ある話なのか？）

（大っぴらじゃないけど、珍しくも無い程度にはあるんじゃないかな？）

そもそも、ダンジョンの閉鎖の実施の有無を決める権限はダンジョン閉鎖士には無いからね。期間とか順番を多少前後させるくらいは出来るけど。

対価を要求するなんて行為が成立するのは、その辺が分からなくなるくらい村人の頭がおかしくなっちゃっている時くらいだろうからね、毎回起きる事ではないと思うけど、ゼロになる事も無いと思うよ。

（道理でダンジョン閉鎖士の評判が悪い訳だ）

（まあね）

ぼやいたサルバに、僕も肩を竦めて返す。
（っていうか、僕としてはサルバが知らなかったことの方が驚きかな）
この辺織り込み済みで、僕の声を掛けてきたんだと思ってたんだけど。それこそ、人の口に戸は立てられないから、この手の話は割と大っぴらになってるし。
（あー、俺は村から出た後はほら、直ぐにパーティーの事ばっかだったからな）
（そういう情報を聞く暇もなかったと）
（おう）
成程ね……、
「そして、世間の共通認識すら仕入れられない程に身を捧げたパーティーから追い出されたと」
「よし、てめえぶっ殺すわ」
青筋を浮かべたサルバが飛び蹴りを放ってきたので、それを受け止めて小さな体を持ち上げると、愛銃のグリップでサルバがガツガツと脳天を叩いて来る。うん、痛い痛い。
「俺の心の痛みだ。大人しく食らいやがれ」
「はいはい」
まあ、言い過ぎたしね。
暫くサルバのしたいようにさせていると、僕を殴り続けて満足したのか、ふと手を止

めたサルバが（んで？）と首を傾げてくる。
（因みにお前はどうなんだ？）
……ああ、そういう事をしたことがあるのか？
（無いよ）
面倒だし、興味もないし。
（だろうなとは思ってたけど、らしい答えで安心したぜ）
そう言って、苦笑するサルバを降ろすと、銃をホルスターに戻してサルバはニヤッと笑ったのだった。
一頻りふざけあったところで、ふと僕とサルバを呆気にとられた様子で見ていたキリエさんと視線がぶつかる。んー、そうだね。
「命だなと思ってますね」
「え？　な、なに「さっきの質問です」
キリエさんが何故か混乱している様子だったので、軽く補足を加える。最近サルバとの会話に慣れちゃってるから、言葉にするのが手間に感じるよね、どうしても。
（基本物臭だしな）
（まあね）
楽なら方が好みなのはその通り。会話とかも面倒だし。

そんな面倒な会話でも、サルバ以外の人間には使う必要がある訳で。僕は仕方なしに目の前の女性に向けて続けた。

「人の命を何だと思ってるのかと聞かれたので、命だなと」

「な、そ、それだけ!?」

「ええ」

それだけですけど？　というか、それ以外に感想の抱きようもないし。

「……」

僕がそう答えると、キリエさんは何故か絶句して固まった。……まあ、別に良いけど。

「ああ、それともう一つ」

もののついでという事もあり、僕の方からも話を振る。

「……何よ」

何故か警戒心を剥き出しにしてくるキリエさん。ま、どうでも良いけど、

「さっき、『状況を好転させる気が無いのか』と聞かれて、僕は『好転させる気はない』と答えましたよね」

「それがどうしたのよ……、要するに皆に協力する気がないって事でしょ？　あんた達らしい、勝手な言い種だ「でも、キリエさんも誰にとっての好転とか、一言も言いませんでしたよね」!?」

僕が素朴な疑問をぶつけると、キリエさんは回り始めた舌をピタリと止めた。前提が無いから答えを出せない……っていうのは建前だけど、正論ではあるからね。まあ、それを含めてどうでも良いんだけど。結局のところ、どんな建前が目の前に並べ立てられていようが、僕（ダンジョン閉鎖士）達はただ全てを終わらせるだけだからね。主観客観問わず、好転も悪化も全て考慮の埒外。目の前のキリエさんが「なっ!?」と絶句するけれど、それもあらゆる意味で今は蛇足かな。だって、全部どうでも良いし。やることはたった一つ。それは何時も変わらないからね。そう、

「ダンジョンの閉鎖。僕（ダンジョン閉鎖士）達がやること」はそれ以上でも以下でもないので」

僕が偽ることなく意図を伝えると、何か反駁しようとしていた様子のキリエさんが口

を開いたままピシリと硬直して、変わりに何故か両目に怯えたような色を浮かべている。んー？

「いや、様にじゃなくて実際に怯えてんだろ、それ」

隣のサルバが呆れたように小さな肩を竦めた。そうかな？　……ま、いいや。

「それより、さっきの質問の答えを聞かせてください」

僕も答えたんだしさ。

「!?」

僕が繰り返すと、キリエさんは一瞬苦い感情を浮かべるも、屈(かが)んで視線を合わせれば、やっぱり逃げるように視線を逸らしてしまう。

「ほらな。やっぱりビビられてるだろ？」

「そうかな？」

「そうだろ」

僕と同じように隣でしゃがんだサルバと顔を見合わせると、青い左目を瞬(しばたた)かせたサルバがコクコクと頷いてくる。ふむ……、

「ま、どうでも良いか」

「言うと思ったぜ」

殆ど同時にサルバと肩を竦めると、目の前の怯えていた筈の彼女(キリエさん)から「何でよ……」と

いう意図の分からない言葉を投げられる。何が〝何でよ〟なんだろ？
「何で……何で私があんな思いをしたのに、あんたはそんなに楽しそうにしているのよ!?!?」
「因果関係のない話を二律背反であるかの様に語っても答えは出ませんよ？」
結論、僕とサルバがこうしていることと、キリエさんが売春婦（ダンジョン閉鎖士）をやっていたことは無関係。
「お前なあ……」
「？　何か間違ったこと言った？」
「いや、理屈としては正しいな」
「じゃ、良いじゃん」
「人として間違ってるけどな」
「じゃ、良いじゃん」
別にどうでも。
僕がそう答えると、隣のサルバは苦笑混じりに「ま、お前はそうだわな」と言って肩を竦めた。ま、サルバからすれば分かり切った事か。
で、そんな事を言い合いながらサルバとふざけていると、不意に、或いは突然に、ひゅーひゅーという風鳴りにも似た音が室内に響き渡ったのだった。

「「ん？」」

その唐突な異音に、僕とサルバが源泉を振り返ると、果たしてそこに居たのは自分の胸を鷲掴みにして犬の様に喘ぐキリエさんが居た。

濃い桃色の舌先からだらだらと唾を落としながら、異様に速い間隔で鳴るそれは次第に湿り気を失い、明らかに過呼吸の様相を呈してくる。そして、遂にはかひゅっというぶつ切りの異音を超えて……不意にその音が「おおおおおお!!」という妙に聞き覚えのある音へと変わっていた。

「「……」」

焦点を失い、赤く充血したその両目に僕とサルバは直ぐにそれぞれの得物を向ける。

「お゛っ!?」

果たして、短い断末魔と共に転がり落ちたキリエさんの頭蓋の中心には奇麗に空いた弾痕が一つ。

「なっ!?」

背後で絶句する研究員の声を聞きながら、首を転がしてその形を検めたサルバが「間一髪だったな」と呟いた。ちょいちょいとサルバが銃口で突いたその先には、明らかに人では有り得ない突起が生えた彼女の側頭部があった。うん、

「一応確認しておいてください」

薄い栗色の髪の毛を持って入口のキール伯爵と研究員にその顔を見せると、キール伯爵は「間違いなく事切れておるぞ」と呟き、隣の研究員が肯定する様にがくがくと頭を縦に振る。いや、そっちじゃなくて角の方を確認してくださいよ。

僕が彼女の側頭部を見せると、二人は何故か必死な形相になって再度がくがくと首を縦に振る。ん、よし。

「よしじゃねーだろ」

呆れたように呟きながらも、サルバも既に興味がないのか、ばさりとジャケットを鳴らして、片手の愛銃をホルスターに戻し、ちらりと視線を向けてきた。

（んで、次はどうすんだ？）

（んー、そうだね……）

正直、状況的にはまた振り出しなんだよね。確証が持てない情報だけか増えていて……。まあ、可能性の一つを潰したと思えば無駄じゃな「きゃあああああああああああ!?」ん？

はてさてどうしたものかと首をかしげていると、絹を裂くような甲高い悲鳴が何処からともなく響き、僕の思案の間に割って入って来たのだった。っていうか、今の声って凄く聞き覚えがあるんだけど。

「!?」

「……」

どうやら、直ぐに僕と同じ考えに至ったらしく、サルバがさっと血相を変える。

そんなサルバを尻目に、先の声と雨の中の微かな臭いを頼りに大まかな方向を定めると、視覚を〝共有〟したらしいサルバが「あっ!?」と声を上げた。

(見付けたみたいだね)

サルバの声に、そう判断しながら、今度は僕の方がサルバの視覚を〝共有〟する。果たしてその先には例の雄牛の大群に囲まれた、ごくごく小さな人の群れ。そして、その中心には、

「ア、アリアドネ!?」

入島の船で出逢った、サルバの大切な幼馴染に良く似たギルド職員の姿があったのだった。

咄嗟の事に、そうなる前の癖だったのか、遠くのアリアドネさんの名前だけを呼び捨ててサルバが身を乗り出す……出す?

血相を変え、身を乗り出し、けれどそこで何かに引かれるようにサルバはぴしりと身体を硬直させたのだった。その様は明らかに不自然で、最高の獲物を前に狩人からリードを無理矢理引かれた猟犬の様だった。って、ああ。

「別に気にしなくて良いのに」

一瞬、「どうしたの?」と聞きそうになったのも束の間、直ぐに〝共有〟を介してサルバの感情が伝わってくる。サルバの停止は他でもない、僕のゴーサインが出ていない事への迷いだった。

今にも走り出したいサルバを尻目に、僕の方はどうでも良かったけれど既に走り出していたから、一先ず鞘絡みの片刃剣の切っ先で無防備な胸ぐらを絡め取って、硬直したサルバの軽い身体を釣り上げると、そのまま切先で投げ飛ばす様にして、走りながらサルバを僕の方へと引き寄せる。

「うおっ!?」

サルバの短い悲鳴が響き、ボスッという音と共に軽い衝撃が僕の背中に圧し掛かって来る。

「あ、痛くない」

その感触と同時に脳天で弾んだ柔らかいのに弾力がある感触で、さっきの銃器のグリップの打撃を思い出し、僕は素直に良かったと思った。まあ、別にどっちでも良いけど。

入り口を塞ぐように立っていた伯爵様と研究員を突き飛ばす様に廊下に出て、そのまま窓ガラスを蹴り割ながら雨空の下へと再び飛び降りる。カシャンという軽い音と共に飛び散った透明な玻璃は雨粒と混ざり合い、僕と同じ様に舗装された大地に落ちてそ

のまま更に細かく砕け散っていった。まあ、それもどうでも良いけど。
二階から飛び降りると、そのまま走り出した僕の上で「うわっ!?」と悲鳴を上げたサルバが慌てて体勢を立て直した。
「な、なあ、アルタ!?」
「何?」
どうかした?
「いや、どうかしたって……」
一瞬言葉に詰まったサルバが、一拍置いて「良いのかよ」と呟いた。んー……、
「別に?」
「珍しく考え込んだと思ったら、それか」
そう言って、サルバが僕の頭をぺちぺちと叩いて来る。痛くはないけど、濡れた前髪が張り付いてきて地味に鬱陶しいね。
「叩き付けるよ」
「何をだよ!?」
勿論、〝サルバ〟を〝石畳〟に。
「だああ、悪かったっつの」
背中の上でがりがりと頭を掻いたサルバが、僕の髪をぎゅっと絞って軽く水気を切る

と、邪魔にならない様に手櫛で髪を掻き上げたのが分かった。うん、分かれば宜しい。
「さよか」
「うん」
　特別に投げ捨てるだけで許してあげるよ。
「怖えよ!?」
　はっはっは。
「ま、それはそれとして」
「おう」
「僕に明確に敵対するなら斬るのに躊躇は無いけど、多少の寄り道位なら僕もどうこう言わないよ」
　というか、そういうのは僕もよくするしね。ダンジョンの閉鎖の順番とか。
「そういやそうだな」
「うん」
　むしろ、しない方が珍しいんじゃない？　どうでも良いけど。
「ま、それはそれとして、もうあの研究所で吸い上げられる情報はもう殆ど無いだろうからね」
　だからまあ、直近の手掛かりは皆無だし、これくらいなら普通に許容範囲かなって。

「そうか」
「うん」
「……」
「……」
「サンキュ」
「お礼を言うなら自力で走って」
「それを今言うか」
頭上でサルバが小さく苦笑したのを感じると同時に背中がふっと軽くなる。サルバが跳び下りたんだと納得していると隣でパシャッと大きく水が跳ねる音がして、案の定石畳に着地したサルバがタッタッタッと軽快にステップを踏んでいた。
「「……」」
ふと何とはなしに互いに一瞬視線を交わし合うと、僕とサルバは直ぐに同時に肩を竦める。そして、一段両足を繰るテンポを引き上げて、悲鳴の聞こえた先……ラビュリントス前の広場へと僕達は急いだのだった。……で、
(あ、ダメだね、これ)
そうやって急いだ時には、サルバの視覚の先の戦況は誰の目にも明らかなほどに崩壊していたのだった。

ほんの数瞬前まで、少人数ながら均衡が保たれていた筈の戦線は、押し寄せる牛魔の群れに鼠食されて、一息の間もなく破綻を迎えた。

その小さな群れの外側で、辛うじて戦えなさそうな人達を庇っていた数名の表情が絶望に染まり、僅かな断末魔と共に一人、また一人と雄牛のモンスターに押し潰され、飲み込まれていく。

「!?!?」

「!?!?……」

その光景を前に、僕の心臓（サルバ）がずくんと大きく響いたのを感じて隣を見れば、半分だけ露になったサルバの左の横顔がはっきりと色を失っているのが見えていた。うん、

「投げるよ」

「あぁ……あん!?」

サルバは完全に広場の様相に意識を取られていたみたいで生返事だけを返してきたけど、まあ生返事でも返事は返事。隣を走るサルバの襟裏を掴んで、僕も走りながら振り被る。サルバが驚愕に目を見開いたのを感じたけど一先ず置いておいて、未だに混乱したままのサルバの身体を思いっきり前方（広場）へと投擲したのだった。

「ぐぇっおあああああああああああああ!?!?」

一瞬、喉を押し潰されたサルバが蛙みたいな悲鳴を漏らし、そしてそのまま絶叫と共

に錐揉みしながら飛んで行った。
（よし、少なくともこれで単に走るよりは多少速くなるでしょ）
（だからっていきなりぶん投げるかおいっ!?）
（はっはっは）
〝共有〟で叫びながら飛んで行くサルバの行方を確かめながら、僕も片刃剣の鯉口を切って、雨曝しの広場に辿り着き次第、直ぐに剣を抜ける様に準備をしつつ足を進める。果たしてサルバが「くたばれ、この糞牛がああああああああああああ!!!」という絶叫と共に愛銃を乱射するのとほぼ同時に、僕はラビュリントス前の広場へと踏み込んだのだった。

◆

左目（サルバの目）で、眼球を撃ち抜かれた末に断末魔をあげる牛頭（ぎゅうとう）の群れを捉えながら、僕は両目から血涙を垂れ流して悶える雄牛の魔物を、手近な所から順番に一頭一頭斬首していく。

幸い、まともな反撃手段をサルバに奪われた獣（けだもの）の抵抗は微々たるもので、僕は普段以上に調子良く、雄牛の頭を落としていく。

そして、そんな僕の後始末（断首）に幾らかの信頼を寄せてくれているのか、サルバは一片の背後への残心もなく、一心不乱に押し寄せる双角の獣（けだもの）の群れを荒れ狂う鉛弾で食い荒らしていくのだった。

「ダリッ、アリアドネ……さん！」

（あ、言い間違えた）

（しょうがないだろ!?）

（状況的にはね。けど、女の人って事情がどうであれそういうのは許してくれなさそうだよね）

（畜生、アルタのくせに正論言いやがって！）

（はっはっは）

押し迫ったアリアドネさんへの驚異に焦燥を抱いたサルバが、つい元恋人の名前を口走りそうになるのをからかうと、〝共有〟の中で叫びながらもサルバはきっちりとその反芻動物の両目を余すことなく穿ち抜いていく。

「アルタッ！」

「ん」

次いで口に昇せた合図に僕も頷き返してサルバの隣に飛び込むと、野生の本能かはたまた偶然か血涙を撒き散らしながら、自身の両目を喰らったサルバの身体に風穴を開けようと双角を振り乱して包囲網を作りかけた化け物の頭を一太刀の中で斬り落とす。

……これで全部かな？

「……みてーだな」

僕が辺りの臭いを嗅ぐのと一緒に、くるりと辺りを見回して納得したサルバが頷いたのを確かめると、一先ず僕達は繋いでいた左目の〝共有〟を一旦切って、円陣を組んでいた人達の生き残りに両目を向ける。

「大丈夫、ですか……アリアドネ、さん」

呼吸を整えながら、僅かに胸の内に残る違和感を誤魔化しつつ、慈雨に冷たくなった石畳の上でへたり込むアリアドネさんに確かめると、アリアドネさんはまだ恐怖心が抜けきらない様子のまま、それでも「は、はい、何とか……」と、たどたどしくも頷いた。

……アリアドネさんにアプローチを掛けるチャンスなんじゃない？　どうでもいいけど。

（気付いてても言うんじゃねえよ！）

（言ってないよ。〝共有〟しただけで）

（俺とお前の間じゃ言ってるようなもんだろうが！）

（そうかもね）
　というか、その通り。
（だから、サルバがアプローチ掛けようとしてタイミングを見計らってるのも分かった訳だし）
（そこは見て見ぬふりしとけよ！　つか、普段あんだけ〝共有〟の中でも無反応で通してるくせに、何でこんな時だけ饒舌なんだよ糞野郎！）
（はっはっは……むしろこんな時だからじゃない？）
（知ってたよこの野郎!!）
　無言のまま左目に怒気をのせて睨んでくるサルバに肩を竦めて返すと、何故か唐突に百面相し始めた（様に見える）サルバを不思議そうに見上げてくるアリアドネさんの方を顎でしゃくる。
（覚えてろよ……）
　そう言って唇を尖らせたサルバがホルスターに戻した拳銃のグリップを拳で叩くのを見ながら、僕は激励半分にその小さな背中に軽く手を振ったのだった。
「あー……取り敢えず、立てますか？」
「あ、はい……」
　サルバが差し出した手を、小さく頷いたアリアドネさんがおずおずと握り、そして、サ

ルバに支えられながらゆっくりと立ち上がった。
「あっ!?」
「「あ……」」
けど、直前の雄牛頭の襲撃の緊張の糸が切れたせいか、立ち上がる途中で不意にバランスを崩したアリアドネさんは大きくよろけてサルバの方へと倒れ込んでしまう。
(うおっ!?)
その不意打ちに、アリアドネさんを支えていたサルバが〝共有〟の中で悲鳴を上げる。
男の頃なら兎も角、現状は女性のアリアドネさんよりも更に一回り小さい身体しか持たないサルバの身体は圧し掛かってきたアリアドネさんの体重に耐え切れず、逆に押し倒されそうになってしまう。
(っとおおおおおお!?!?)
〝共有〟の中で悲鳴をあげるサルバ。それでも、男のプライドに賭けて果敢にアリアドネさんの身体を受け止めたサルバは、しかし、咄嗟の出来事ということもあって、持ち堪えられたのも一瞬、堪え切れずにアリアドネさん諸共に倒れそうになってしまう。
(ん)
一先ず、アリアドネさんからは見えないように、サルバの小さな背中の中心に、僕は

鞘がらみの片刃剣の切っ先を宛がう。突然の衝撃に、〝共有〟だけで（ぐっ!?）と呻くサルバ。いくらアリアドネさんから見えないようにするためとはいえ、流石にやり過ぎたかな?

（いや、サンキュ、アルタ）

（どういたしまして）

大丈夫みたいだね。それならいいけど。サルバが僅かに身動ぎして体重を整えたのを確かめて、僕は片刃剣を腰に差し直した。

「す、すみません、腰が抜けちゃって……」

そんな僕達の内幕は無事にばれずに済んだらしく、サルバに寄り掛かった体勢で、申し訳なさそうにするアリアドネさんに、サルバは「あー、大したことないから気にしなくて良いぜ」と、少しだけ声を低くして口元を持ち上げた。

（外傷は……無さそうだね）

アリアドネさんの気を落ち着かせるのをサルバに任せながら、僕は遠巻きにアリアドネさんを観察する。サルバの小さな身体に寄り掛かりながら、しとどに濡れた前髪から雫を落としているものの、目立った外傷は無さそうだった。

僕が〝共有〟でそう告げると、サルバは安堵した様に（そうか）と内心頷いて、ほっと胸を撫で下ろしたのだった。

「それで、アリアドネさんは何でこんなところに？」

自分で立とうとしながらも、よろけそうになってしまう彼女を慌てて支えながら、サルバがアリアドネさんに首を傾げる。雄牛から逃げて逃げて広場に流れ着いた可能性も多分にあるけど……よりにもよってこの広場（ラビュリントス前）っていうのは、確かにちょっと恣意的なものを感じちゃうよね。

果たして、そんなサルバと僕の疑問符に、はっとなった様子のアリアドネさんが「そ、そうでした！」と慌て出す。その仕草には胡散臭いものは見当たらないけど、何かアクシデントはあったみたいだね。

「パーシーくんが、パーシーくんがここから帰って来ていないみたいなんです!!」

「ここからって……は、はぁっ!?」

「……」

つっかえながらアリアドネさんがそう言って指差した方向、広場を前に鎮座する人工ダンジョン（ラビュリントス）を前に、サルバが青い左目を剥く。んー……、

（死んだ？）

（おいこら）

アリアドネさんに愕然とした表情を向けながら、器用に〝共有〟で突っ込みを入れてくるサルバ。本当に、これ（〝共有〟）に馴染んだよね、サルバも。

（誰のせいだ誰の……って、んな事はどうでもいいんだ）
（じゃあ、どうでもいい話をしてないで、アリアドネさんの話を真剣に聞くべきじゃない？）
（……）
（……痛い痛い）
サルバが僕の頭をロックした。僕はサルバの腕をタップした。
（お前、俺らも薄々そう思ってるけど口にしてないことをそうあっさりとなあ）
（〝共有〟の中だからね）
流石に口には出さないって。変にトラブルになってもあれだし。
（〝共有〟が無かったらどうしてたんだ？）
（普通に言うけど？）
じゃないと伝わらないし。
（ギルティ）
（棄却）
（お前が裁く側なのか）
（特には？）
裁くのも裁かれるのもどうでもいいし。

（ま、それは置いておいて、パーシーくんの件に関しては、突っ込むならある程度覚悟して進んだ方が良いと思うよ）
（もう、死んじまってる事を受け入れる覚悟か？）
（んーん）
それはむしろ大前提。
（賭けた命が無駄足になる事を受け入れる覚悟の方）
まだ、パーシーくんの遺体を見ていないとはいえ、現実問題としては死んでる可能性の方が高いんだし。
（まあ……そりゃ……ん？）
（どうかした？）
変な顔して。
（いや……）
（？）
（突っ込んで良いのか？）
（別に良いんじゃない？）
僕一人だったら無視してるけど、アリアドネさんが完全に行く気みたいだし。サルバとしては無視できないでしょ？

（そりゃ、まあ……）

　気まずそうに言い淀んだサルバの手が緩んだので、脇の下から頭を引き抜いて、僕はきょとんとしているアリアドネさんの方を顎でしゃくる。

（なら、好きにすれば良いと思うよ？　ま、流石にパーシーくんの生首抱えながら「彼は生きている！」みたいなこと言い出してたら止めるけど、そこまでじゃないみたいだし）

（怖い想像すんなよ）

（想像じゃなくて経験則だよ？）

（余計怖ええよ!?）

　はっはっは。

（状況的にはもうアリアドネさんは止まれないだろうし、サルバも色々と理解した上で助けたいんだから僕もわざわざ止めないよ。けど、さっきも〝共有〟したように、無駄足になる覚悟はしておいてね？　アリアドネさんがパーシーくんを助けることしか考えられていない以上、現実に直面お荷物になった彼女を連れ戻すのがサルバの役目になる可能性が高いんだから）

（……）

　僕が懸念を伝えると、にわかに真剣な表情になったサルバがこくりと頷いた。うん、それだけ殺気を持てたら大丈夫かな。まあ、

（最悪の場合は僕が首に縄でも着けて引っ張ってくるから、サルバはアリアドネさんを一発で陥落させられるくらいカッコいい慰めの言葉考えておくと良いんじゃない？）
（んな言葉思い付いたら苦労はしね……ん？　アルタも来んのか？）
（うん。サルバも一人でアリアドネさん守りながら進むのは厳しいでしょ？）
だから、当然付き合うつもりだよ？
（そうか……サンキュ）
（お礼はいいよ。〝共有〟がある以上、サルバに何かあったら、僕もどうなるか分からないし）
（それでもだ）
そう、〝共有〟して、ふっと綻んだ視線を向けてくるサルバ。ん、まあ、いいけど。
僕はサルバに肩を竦めて返しながら、（それに）と思案する。
（パーシー君が生きている可能性も全くない訳じゃないんだよね……）
思い起こすのは入島初日、サルバにダンジョンに潜り込んでもらった時のこと。
言い争う市長と修道士と市長、不意に振り返ったパーシー君、そして露になった礫の眼球。どう考えても不穏な気配のするその光景を考えると、この状況との関連性は兎も角、相応に腹に逸物を抱えている可能性は極めて高いんだよね。或いは、この状況も全部パーシー君達の思惑通りなのかな？　流石に現時点じゃ穿ち過ぎかな？

つらつらと、考えているけど、どう転んでも面倒事に繋がる可能性が高いんだよね。
（そういう意味じゃ、死んでてくれた方が僕としては有り難いかな）
ぎこちなくアリアドネさんに寄り添うサルバの隣で、僕はそんな事を考えながらもう一度片刃剣を抜刀したのだった。